

骸骨魔王のちよこつとした蹂躪

コトリユウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“鈴木悟”はユグドラシルを去ったが、“モモンガ”は異変に巻き込まれてしまった。はたして骸骨魔王モモンガ様の運命や如何に?!

2020年2月2日、完結しました。

目次

第1話	「骸骨魔王」	1
第2話	「困惑魔王」	14
第3話	「拉致魔王」	23
第4話	「興奮魔王」	34
第5話	「出陣魔王」	46
第6話	「山羊魔王」	58
第7話	「觀察魔王」	71
第8話	「バフ魔王」	83
第9話	「牧場魔王」	96
第10話	「現断魔王」	110
第11話	「必罰魔王」	125
第12話	「散歩魔王」	139
第13話	「実験魔王」	150
第14話	「収集魔王」	161
第15話	「嫌爺魔王」	175
第16話	「観戦魔王」	185
第17話	「てかてか魔王」	197
第18話	「ろりこん魔王」	209
第19話	「強権魔王」	222
第20話	「侵略魔王」	233
第21話	「傍観魔王」	244
第22話	「牧羊魔王」	255
第23話	「遠足魔王」	267
第24話	「景觀魔王」	278

第25話	「おねがい魔王」	289
第26話	「敗戦魔王」	303
第27話	「サンタ魔王」	317
第28話	「黒焦げ魔王」	329
第29話	「埴輪魔王」	339
第30話	「蟲魔王」	350
第31話	「演劇魔王」	363
第32話	「決別魔王」	376
第33話	「仲介魔王」	388
第34話	「実況魔王」	400
第35話	「ワンパン魔王」	412
第36話	「旅行魔王」	424
第37話	「見物魔王」	436
第38話	「先読魔王」	448
第39話	「AI魔王」	459
第40話	「落城魔王」	470
第41話	「解散魔王」	482
第42話	「行っちゃう魔王」	494
第43話	「決戦魔王」	504
第44話	「始原魔王」	515
第45話	「ワールド魔王」	525
第46話	「喝采魔王」	537
第47話	「リジエネ魔王」	548
第48話	「試験魔王」	560
第49話	「彼方の魔王」	572

第50話	「リアル魔王」	584
第51話	「強欲魔王」	597
第52話	「悟と魔王」(最終話)	611

第1話 「骸骨魔王」

「おかしい」と呟き、幻想的な光景——ナザリック地下大墳墓第十階層『玉座の間』——を視界に収めながら、思考の中に疑問を浮かべる。全てが終わるはずだった。

そのように「鈴木悟」は言っていたし、確信していた。

珍しく姿を見せた他のギルドメンバーたち、「ヘロヘロ」もそのようになことを口にしていたはずだ。

ユグドラシルが終わる。

世界が終わる。

そして、ナザリックは消滅する。

「モモンガ」は、人格を共有していたもう一つの思考存在「鈴木悟」を感じ取ろうとするも——空振りに終わってしまう。

「そんなことがあるはずがない」「同じ人格を持つ並列思考の一翼なのだから消えるはずがない」「ログアウトならば私自身「モモンガ」も思考を停止させるはずだ」などと様々な考えが空洞たる骸骨の中を巡るものの、結局なにも分からないままであった。

（ふう、消滅か。確かに世界は停滞し、群雄割拠など遙か昔の出来事。人間種撲滅も世界征服も叶わぬまま。しかし私は魔王としてナザリックに君臨し続け、数多の勇者を、神を、殺しに殺した。仲間が居なくなっただけから……）

悲しげな視線は、跪いたままの執事やメイドの頭上を越えて、ガラシとした玉座の間を漂う。

（悟は私のことを「ロールプレイ」とか呼んでいたんだっただけか？

まあ世界消滅——そんな気配はまったく無いが、終末時期まで生き残った大魔王だ。生きてはいない骸骨だけ……。悟の言げんを借りるならば『楽しかった』と言えるのだろうか）

玉座に深く腰を掛けモモンガはため息を吐く。もちろん息は出ない。

左手首の時刻表示バンドへ視線を落とせば、そこには真夜中を過ぎて数分の経過が見て取れた。悟は四時起きだと言っていたが大丈夫

なのか？ と現実世界^{リアル}へ向かうはずだったもう一人の自分、並列思考の安否を気遣う。

しかしながら、その存在を今はまったく感じ取れない。現在は完全に一人の人格に一つの思考、「モモンガ」のみがこの場に存在している。

「まいったな」と呟いてしまうのも仕方がない状況であった。

「如何なされましたか？ モモンガ様」

「ん？ ああ、ちよつと……な」

話しかけてきたのは玉座の近くで跪いていた胸の大きな白い悪魔、守護者統括のアルベドだ。

モモンガは「言葉を交わしたのは久しぶりのような気もするが、前はいつだったか？」と常に近くにいたはずの側近に対し妙な違和感を持つものの、それより自身が巻き込まれている異変を「どう説明したらよいのだろうか？」と軽く思索していた。

「そう……だな。アルベドよ」

「はっ」

「この世界が……あく、何か違和感はなかったか？ そう、数分前だ」『世界が終る』と言いそうになるも、余計な不安を与えるべきではないと思い直し、感覚的な事象にのみを問うてみた。加えてアルベドたちNPCは「鈴木悟」や「現実世界^{リアル}」に関する知識を持たないので、中途半端な問いかけは混乱を招くことになりかねないだろう——とも配慮する。

「いえ、数分前どころか、モモンガ様が玉座の間にいらつしやつてから一片の違和感もありません。全て完璧でございます（私の愛しい旦那様！）」

「そつ、そう……か」

何だか最後の台詞の後にもの凄く眼力がアップしたようにも思うが、まあとりあえずアルベドに異常はないのだろう。

であるならば、次はナザリック全体の調査を行うべきか？

「ふむ、そうだな。では守護者統括アルベドへ命ずる」

「はっ、なんなりと（むしやぶりつきたいです、ももんがさま！）」

「……ナザリックの警備レベルを最大にした上で大墳墓内の調査を行え。なにやらよからぬ異変が起こっていると思われる。各守護者にも油断せぬよう伝えよ。ただし第八階層は私の手で行う故干渉するな」

「異変でございませうか……。はい、第八階層を除き、直ちにナザリックの調査を行います（モモンガ様かけ！）」

ゾクつと背すじに悪寒を感じたような気もしないではないが、アンデッドだから勘違いだろうと思いを閉ざし、モモンガは大墳墓の内部調査へ向かうアルベドと執事たちを見送った。

ただ、その場へ残った二人の美しいメイドには声をかけざるを得ない。

「ユリ、ルプスレギナ。お前たちも行って構わんぞ」

「何をおっしゃいますモモンガ様。御身を一人にするなど有り得ません」

「そうつす……ですモモンガ様。玉座の間の外には近衛の者も用意してございます」

妙に張り切って——黒髪を結び上げた眼鏡メイドが、三つ編み赤毛メイドの言葉遣いを殺気混じりの瞳で注意して——いるメイドの意欲を削ぐ訳にもいかなないので、モモンガはそのままマスターソースやコンソールなどの機能を確認しようとするが。

（まあ隠すようなことでもないか……。ん？ 隠す？ NPCに？ なぜそのようなことを、いや、これは「悟」の思考か？ 思考の名残か？ うむむ、いやちよつとまで、コンソールが出ないぞ）

マスターソースでナザリック全体の確認は可能であったが、コンソールの起動は叶わなかった。

コンソールの使用は主に「鈴木悟」が行っていたのでそれほど重要なわけではない。大抵は現実世界リアリティに関する作業ばかりであり、モモンガにとっては無用の長物だ。つい先ほども「居なくなる前の鈴木悟」が「アルベド」の設定を弄っていたようにも思うが、何をしていたのやら。設定などを見なくとも当人へ問いかければ済むだろうに……。

とはいえ、以前出来ていたことが出来なくなっているという点には不安だけが募ってしまう。

(やはり何かしらの異変が起きているのだろうか。ユグドラシル消滅の代わりに世界の理が一部変化したのだろうか?)

ピツピツとマスターソウスでNPCの状態を一通り確認すると、モモンガは一息ついて己の見慣れた骨の手を見る。

特に変わったところはない。ただの骨、死の支配者の骨の手だ。

しかし一点だけ違うところがあるとするならば、この骨を眺めていたのは「モモンガ」と「鈴木悟」の二人、二つの思考であったはずが今は「モモンガ」だけという点。

それが何を意味するのか、良いのか悪いのか、現時点ではなんとも言えない。

(悟が消え、コンソールは起動しない。しかしナザリックは健在であり、私自身の能力や所持アイテムに欠損はない。ならば何を恐れるといいのか。今まで通り、愚かな人間どもを駆逐していけばよいだけだ。たとえ……、仲間が一人も居ないとしても……)

玉座の間に飾られている仲間の旗を懐かしげに見つめることしばし、モモンガは傍らのギルド武器を握りしめ立ち上がった。

「大図書館へ向かうぞ」

「はっ」

即座に跪く二人のメイドを眺め、モモンガは「そういえば何かを命じるなんて久しぶりのような」と少しばかり過去を振り返り「いや、そもそも命じたこと自体あっただろうか？ 名前で呼びかけたことから初めてのようないや……」などと頭を悩ませる。

(そんなわけではないな。第十階層に常駐している戦闘メイドなんだし……。第八階層の末妹と混同しているのだろうか)

モモンガは大図書館——正式名『アッシュユールパニバル最古図書館』——へ向かう途中も「鈴木悟」が居ない初めての現象に戸惑い、多くの違和感と戦い続けるのであった。



「これはこれはモモンガ様。ようこそ最古図書館へ」

飾り気のない無骨で巨大な扉を三メートル近い動像ゴーレムに開けさせて進めば、無数の書物と美術館のような光景、そして六体の骸骨がモモンガを出迎えていた。

その内の五体はモモンガと同じ種族の死の支配者オーバーロードであり、中央の一体は司書長の任を授かる骸骨スケルトン・メイジの魔法使い。『テイトウス・アンナエウス・セクンドウス』——いずれも大図書館内を活動領域とするナザリックの僕しもべ、NPCたちである。

ちなみに途中まで付いてきていた二人のメイドと過剰な近衛たちは、大図書館の外で待機となっていた。

「テイトウス、アルベドから聞いているかもしれんが、何か異常はあったか？」

「はっ、守護者統括の指示により大図書館内の確認を行いました。今のところ問題となるべき異常は発見出来ておりません」

「……傭兵召喚はどうか？」

モモンガは大図書館に保管されている『傭兵』のデータが気になっていた。

『傭兵召喚』は金貨を消費して新たなNPCモンスターを召喚できるシステムなのだが、これが機能していないとなると侵入してくるプレイヤーたちに対抗するのは困難となる。

無論、千五百人のプレイヤーを撃退した実績を持つナザリックだ。仲間が居ないとは言っても一度や二度の侵攻なら問題は無い。しかし長期的な複数回の侵攻となると補充や入替が必要となろう。それに仲間が心血を注いで創りあげたNPCを何度も倒されるのは癪に障る。

ただ「それほど警戒する必要もないか」とも思う。

悟がユグドラシル崩壊を明言していた数刻前、確かに多くのプレイヤーが九つの世界で好き勝手に暴れていた。幾つかのギルドが世界級アイテムの使用で吹き飛ばされたとも聞く。

とはいえナザリックへ侵攻してきた者など、ここ数年では数えるほ

どしからない。それも皆、完全攻略を本気で考えていないエセ勇者ばかりだったのだ。

骸骨魔王モモンガとしては憮然とするしかない。

だがそれでもナザリックで自動POP湧するモンスターは三十レベルが上限だし、各所に配置されているNPCたちは「傭兵」より費用の掛かる一点ものばかりなのだ。

大墳墓を支配する魔王なれば、費用対効果の面から、事前に性能と外見が用意されている「傭兵NPC」を活用するのは至極当然のことであろう。

「モモンガ様、傭兵召喚は金貨を消費するため実際に行ってはおりませんが、手順に問題はありませんでした。傭兵のリストにも欠損はございません」

「そうか、なら召喚してみるか」

拠点防衛のNPCを増やすのは支出を増やす要因になりかねないが、異変の全容が判明するまでは仕方がない。

また外の狩場で金貨を稼いでくる必要があるだろうが、「モモンガ」はふと考えてしまう。

（魔王が拠点の維持費用を稼ぐために狩りへ出掛けるって……。何か変だな）

「鈴木悟」が居た頃は特に気にしていなかったが、今思えばおかしな話だ。

僕たちが拠点の外へ出られないのだから仕方がないとはいえ、魔王単身で勇者パーティーのいるかもしれない地表へ出るなんて……。異形種が多く住まうヘルヘイムであったとしても、目の前に魔王が出現したら相手方も戸惑うだろうに。

（悟がよく言っていた「糞運営」とか「糞製作」の所為なのだろうか？ まあ僕を拠点へ縛り付けているのはソイツらなんだし、関係あるとは思うが、うーむ）

「モモンガ様、召喚の準備が整いました。傭兵のリストはこちらに」「ああ、わかった」

モモンガはモンスター名が並ぶリストへ目を向け、レベルや能力、

外見などを吟味し、今後必要となるであろう傭兵モンスターを選び出す。

「分からないことだらけだから、危険な第八階層の調査任務も任せることになるだろうし——そうだな、隠密系忍者型モンスターの『ハンゾウ』にしよう」

「かしこまりました。それでは大図書館に備蓄してある金貨を必要分運んでまいります」

大図書館には——生産系NPCであるティトウスが巻物スクロールや短杖ワンドを製作する、及びモンスター召喚時の消費金貨をその都度宝物殿から輸送しないで済むよう、ある程度金貨が備蓄されていたりする。

ただ今回召喚する『ハンゾウ』はかなりの高レベルモンスターだ。備蓄の金貨で足りるかどうか、モモンガも備蓄量なんて覚えていないので、骨の指を顎先に当てて少しばかり考えてしまう。

「(足りないような気がするなあ。まっ、ならばちょうどいいか？ 宝物殿の調査もしたかったし、様子を見がてらアイツにも会ってこよう)……ティトウス。今回は大図書館の備蓄を使わず宝物殿から持つてくるでしょう。お前たちはこの場で少し待っているがよい」

「はっ、御待ちしております」

歩き出そうとしていた足を止め、即座に跪く六体の骸骨は、指輪の力で転移する至高の骸骨魔王様を見送ると、余韻を楽しむかのようにしばらく頭を下げ続けていた。

至高の御方と言葉を交わし、その命令を受け、跪けるという喜びに浸っていたかったのであろうか？

ここ最近足運んでいただけなかった大図書館であるだけに、管理を任されていた司書長としては感慨深かったのかもしれない。

「ああ、表の近衛の方々にもモモンガ様が宝物殿へ向かわれたことを伝えなくてはな。御方の気配が突然消えて戸惑っているやもしれん」この場へ戻ってくることを知らせなければ、とティトウスは配慮し、遙か後方に控えていた司書の一体、死者の大魔法使いエルリッチを正面口へ向かわせる。

ただ、知らせを受けた近衛は大いに悩むことだろう。

なにせ宝物殿へ向かうには、至高の御方々しか所持を許されない特別な指輪が必要なのだから。いついかなる時も至高の御方の盾となつて死ぬ——そんな気持ちの近衛らでも、付いていけぬ場所なのだからどうしようもない。

そう、今は待つしかないのだ。

最後の御一人となつてもナザリックに君臨して頂ける、至高の御方々の纏め役にして頂点、骸骨大魔王ことモモンガ様を。



記憶の片隅に隠れていた合言葉をなんとか思い出し、「タブラ」に愚痴を吐きながら猛毒に満ちた空間を通り抜けると、そこにはヌメヌメした複数の触手を揺らす軟体生物が待っていた。

「ん？　なんでタブラの格好をしているんだコイツ……」あく、元に戻ってイイぞ、パンドラ」

「はっ！　よおうこそおいで下さいましたっ！　モオオオモンガツさまっ!!」

軟体生物がグネグネと身体を変化させると、そこには軍服を着込んだ埴輪顔の人型生物が敬礼を行っていた。

今まで幾度も繰り返した所作であるからか？　少しの迷いもズレもなく、自信に満ちた様相で、魔王たる己の造物主を賛美するかのように踵を打ち鳴らす。

（うむ、やはりカッコイイな。軍服は強そうだし、敬礼は見事なまでの完成度だ。声もよく通って美しく響いている。さすがは私の創ったNPCだな。悟の奴は妙な感情を抱いていたようだが、いったい何が不満だったのやら）

モモンガは御満悦のようだ。

自らが創った宝物殿領域守護者「パンドラズ・アクター」の大仰で大胆で、舞台役者でもあるかのような動きに己の理想でも垣間見たのであろうか。

目の前で敬礼を続けるパンドラへ、モモンガは再度強く頷く。

「素晴らしいぞパンドラ。お前のような優秀でカッコイイ守護者を宝物殿専属にしておくのはもったいないな。よし、これからは私の専従にしよう。宝物殿で何かの任務がある場合に限り、この地へ戻るがよい」

「おお、おおおお！　なんとつ、なああんと素晴らしいき御勅命！　このっパンドラス・アクター！　己の全てえを懸けましてっ、モモンガ様へ付き従う所存であります!!」

「ではこれを渡しておこう。拠点内転移用指輪だ」

モモンガが差し出した指輪は、本来転移できないはずのナザリック内を自由に転移できるようにするギルド専用アイテムである。

だが、ナザリックの僕にとつてはその機能以上に重要な意味を内包しているアイテムであったりするのだ。

それは至高の四十一人、ナザリックや僕たちを創った神にも等しい御方々、いずれ世界を統べる最強の支配者にしか持つことを許されない指輪。つまりアルベドなら天に拳を突き上げて「よおおっしやああああああ!!」と叫び狂うぐらいに貴重にして重要な指輪であるということだ。

「ふほおおおお、拠点内転移用指輪、この指輪に秘められた効果は——」

驚きと喜びが一周回って冷静になってしまったパンドラは、思わず早口でアイテムの解説を始めてしまうのだが、そんな光景をモモンガはただ嬉しそうに眺め続けていた。まるでお土産に喜ぶ子供を見つめるかのよう。

「さてパンドラ、早速だが仕事だ。大図書館まで金貨を……そうだな、五億枚ほど運んでくれ。傭兵召喚に使用する」

「はっ、お任せ下さいー！」

パンドラの敬礼姿を眺めて満足そうに頷くモモンガは、召喚すべき傭兵の数について考えていた。

五億枚の金貨とは百レベルNPCの復活費用一回分でしかないが、レベル八十台の忍者型モンスター「ハンゾウ」ならばそれなりの数

を揃えることが可能だ。より低レベルの傭兵なら大量に召喚することもできる。

ただ、出会う相手がほぼ間違いなくカンストプレイヤーであるユグドラシルにおいては、低レベルモンスターなんて足止めにもならない。最低でも「ハンゾウ」クラスは必要となるだろう。

もちろんより多くの金貨を消費して最高クラスの傭兵を召喚して配置すれば、どんな異変の最中であっても対応できるのであるが、宝物殿の金貨は有限だ。これから先、異変の内容がどう転がるか不明な現状に於いて大盤振る舞いは宜しくない。

過去の千五百人防衛戦と同等の戦いが起こるのならば、金貨はいくらあっても足りないぐらいなのだ。傭兵召喚、トラップ起動、NPC復活、拠点修復などなど。加えて立ち向かえるプレイヤーはモモンガただ一人。慎重な行動が要求される。

「——ん？ アルベドか、どうした？」

『モモンガ様、^{メッセージ}〈伝言〉にて失礼いたします』

骨の手を頭蓋骨の横に当てて意識を向けると、魔法による繋がりを感じ取っていた。

魔法により通信手段、^{メッセージ}〈伝言〉である。

本来前衛タンクであるアルベドには使えない、というかガチビルドにするため覚えさせていない魔法ではあったのだが、「それでは統括として片手落ちでしょう」とタブラが貴重な装備枠の一つを外して^{メッセージ}〈伝言〉が使用可能な魔法の首飾りを装備させていたのだ。

設定に忠実なタブラの行動を悪いとは思えないし思いたくないが、装備枠の一つを潰してしまう行動に、他のガチ勢は不満げであったように思う。まあドリームビルダーのモモンガは特に気にならないし、アルベドはそもそもタブラのNPCなのだから好きにすればイイのだ。

そう、パンドラのように。

『ナザリック地下大墳墓内の調査を終えましたので御報告させていただきます。調査の結果、大墳墓内に異常はありませんでした。異変を感じ

取った者もおりません。ですが……」

「ナザリックに異常がないのは喜ばしいことだが、何かあったのか？」
『はい、第一階層の僕しもへからの報告によりますと、いつも聞こえていたツヴェーグたちの鳴き声が聞こえない、とのこと。加えて外の様子がいつもと違っていているように感じる、との声が複数上がってきております』

少しの間をおいて、モモンガは「内ではなく外だと？」と頭の中で呟き、同時に外の様子をナザリックの僕しもへたちが感じ取れる、ということに驚愕していた。

——ギルド拠点は外と隔離されていたはずだ——

悟が言うところの「糞運営」とやらが設置した「システム・アリアドネ」が拠点の状況を常時監視しており、NPCが外へ出ることはもちろん外へ干渉することも不可能なはずなのだ。

（だが外の音を、蛙どもの声を聞いていただと？　そして今は聞こえないと……）

間違いなく異変に関する事象なのであろうが、その脅威度については判断しかねる。異変は数刻前に発生したのだと思っていたのだが、それ以前から外の音を感じしていたという事実には理解が及ばない。
やはり情報が足りない、圧倒的に足りない。

「アルベド、自動湧きするアンデッドを数体外へ出して様子を探れ。ナザリックの第一階層入口付近には、シャルティアと最上級の側近を配置し侵入者に備えさせよ」

『はっ、直ちに行います』

外で何が起こっているのかは分からない。自動湧きする——殺されてもナザリックに何の損害も出さない——アンデッドが外へ出られるのかも不明だ。

もしかすると、一步外へ踏み出した瞬間殺されて何の情報も得られない、なんて事にもなりかねない。

（傭兵NPCなら連れていけるはずだったな。よし、「ハンゾウ」ならカンストプレイヤーにもある程度対抗できるだろうし丁度良い）

モモンガは外で起こっている未知の異変に『要警戒』の付箋を貼り

つけると、金貨の運搬にいそしんでいるパンドラを一瞥し、「コイツが外へ出られるなら『ぬーぼー』の能力で広範囲を探索できるはずだし」と己の創り出したNPCと、かつての仲間の能力に期待を寄せる。今は確かに一人だが、パンドラは『アインズ・ウール・ゴウン』のギルドメンバー全員的能力を八割がた行使できるのだ。

外に多くのプレイヤーが蠢いていたとしても一泡ぐらいは吹かせられるだろう。宝物殿の最奥に安置されている世界級アイテムさえも活用すれば、まだまだナザリツクは難攻不落であると宣伝できるはずだ。

外でどんな異変が起こっているのかは知らないが、骸骨魔王の名に恥じぬ戦いを見せてやる。

「では大図書館へ行くとするか」

大図書館との往復を繰り返すパンドラを眺めて「他の僕にも手伝わせるべきだったか?」と思いつつも、モモンガは「まっ、いつか」と気にすることなく大図書館へと転移した。

転移した先は宝物殿へと向かう前に腰を下ろしていた大図書館の一席だ。

事前に通知していない転移なのだから司書長としても慌てるだろうなあ——と少し配慮不足を感じながら書物が並んだ本棚の列を視界に入ると、何故かモモンガの前には司書長たちが跪いていた。

転移前からずっとその体勢だったのか? と「悟なら驚くだろうなあ」なんて居なくなった半身を懐かしみながら、モモンガは僕たちの忠誠心に満足の笑みを浮かべる。骸骨だけど。

「お帰りなさいませ、モモンガ様」

「ああ、ティトウス。パンドラとの顔合わせは済んだのか?」

「はい、モモンガ様直属の僕であられるパンドラズ・アクター殿とお会いできたことは光栄でございます。しかも生産系を極めた至高の御方に変身できるとは……。今後も色々とお話を伺いたく思います」

跪きながらも少しばかり興奮しているような骸骨司書長。

巻物や短杖製作に携わっているからこそ、パンドラの有用性が理解できるのであろう。

モモンガはそんな司書長の言葉を聴き「ん？ 確かにパンドラの協力があれば製作が捗るだろうに、どうして今まで会わせなかったんだ？」と首を傾げてしまう。

（これも異変の影響なのか？ 悟なら分かるかもしれないが……）

“鈴木悟”が居なくなつたことは、思っていたよりも大きな影響を及ぼしているのかもしれない。今後もさらに多くの検証が必要であろう。

モモンガは軽く気を引き締めると、用意された山積みの金貨を前にして傭兵召喚を始めるのであった。

第2話 「困惑魔王」

「草原、だど？」

『はい、モモンガ様。骸骨・動死体・恐怖公の眷属などをナザリックの外壁周辺へ放ちましたが、どの個体も外を草原と認識し、脅威となるべき存在と遭遇することはありませんでした』

八体目の「ハンゾウ」を召喚していたモモンガは、アルベドからの伝言に深く考え込んでしまう。

NPCが拠点の外へ出られる、という点に関しては確定のようだ。沼地が消え、草原になっているということも間違いないのである。目立つアンデッドの傍に目立たない恐怖公の眷属を配置するアルベドの采配からしても、第三者の幻術が関与しているとは考えにくい。

（天地改変？ 毒沼を草原にして突破を図るつもりか？ いやしかし、それでもツヴェークを消すことはできないはず。うむ、これは直接見たほうが早いな）

ナザリックの周囲に広がっていた沼地はかなりの難所であり、侵入者を発見したなら群れで襲いかかる巨大蛙の存在を含め、プレイヤーのアイテムやMPを消費させるのに僅かながらも貢献していた天然の防壁である。

その難所が今や草原で、巨大蛙も居なくなっているという。

これはナザリック防衛の観点からすると大きなマイナスであり、僕からの情報だけで判断するには重要過ぎる案件であろう。魔王自身^{しもへ}が直接現場を見て、今後の防衛方針を修正する必要がある。

「アルベド、第四階層と第八階層を除く各階層守護者を第一階層の入り口付近に集めておけ。シャルティアが展開している最上級の警戒態勢はそのまま維持しろ。私は三十分後にその場へ向かう」

『畏まりました、モモンガ様。即座に行動いたします』

伝言なら背すじが寒くなるような状態に陥らないなあ、つとアルベドとのやり取りに妙な感想を持ちつつ、モモンガは召喚した八体の「ハンゾウ」、そして最高傑作のNPCを眺める。

「いいかがなさいましたか、モオモンガさまっ！」

「いやなに、ナザリックの外がおかしなことになっているそうだ。異変の元凶かもしれない。今から第一階層へ向かい、私が直接見て判断するでしょう。パンドラはハンゾウたちを率いて付いてこい」

「はっ」

頭を下げるパンドラに頷き、モモンガはタイトウスへ軽く挨拶を放って大図書館の扉へ向かう。

このときモモンガ一人、もしくは付き従うのがパンドラのみであったのなら、指輪の力で第一階層まで転移すれば済む話であった。加えて「スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」を用いた転移^{ゲイト}門の発動まで考慮すれば、ハンゾウやメイド、近衛兵らも一度に移動が可能であっただろう。

だがモモンガは三十分後に向かうと伝えていた。

それはそう、ギルド武器の安全を考えてのことである。表層に近いところまで、または地上にまでギルド武器を持ち出してしまったなら、破壊される危険性が異常なほど高まってしまうのだ。

ギルド武器の破壊はギルドの崩壊を意味する。ナザリックがいかに難攻不落であろうとも、ギルド武器一つ破壊されてしまえば全てはお終いなのである。

だからモモンガは大図書館を出て——軍服殖輪男と忍者型モンスターの登場に驚くユリとルプスレギナ、そして過剰な近衛兵とも合流すると、歩いて第九階層へ上がり、セバスやプレアデス四名を見つけては「まあついでだ」と言つて併に加え、そのまま第八階層までのんびりと散歩しては「桜花領域」の守護者にスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを預けたのだ。

その後、第八階層を出たモモンガは「このままでは格好がつかんな」と空間へ手を沈ませ、「レプリカだがな」と先程まで手にしていたものとそっくりな杖をその場へ引つ張り出し、装備する。

興奮したのはパンドラだ。

第七・第六・第五階層へとモモンガが視察するかのようにつくり進んでいる間にも、パンドラの視線はレプリカに釘付であり、本物と

の差異について質問を飛ばしてくる。

「本物にはそれほど食いつかなかつたのに何故だろう？」とモモンガが首を捻るも、「そういえば本物の性能については飽きるほど語っていたような気もするなあ」と当時のギルドメンバーたちが何かに付け口にしていたことを思い出す。

恐らくパンドラは、ギルドメンバー同士の会話を聞いていたのだろう。悟も心血を注いで素材集めに邁進していたし、ギルド武器のことをよく話していた。

ただ、外見と一部の能力確認のために作ったレプリカについては未伝達だったようだ。マジックアイテムフエチにとつてはコレクター魂をくすぐる逸品だったのかもしれない。

「そろそろ入り口だぞパンドラ。コレクターから領域守護者へ意識を戻しておけ」

「はっ、申し訳ありません、モモンガ様」

洗礼された無駄のないパンドラのカッコイイ敬礼に満足しつつ、モモンガは各階層守護者の待つ第一階層入口付近へと歩を進めていた。

「モモンガ様。第四、第八階層を除く各階層守護者、御身の前に揃いましてございます（妙な奴が旦那様の隣に?! しかもあの指輪はっ?!）」

一瞬、パンドラへ見えない力の波動のようなモノが飛んだ気がするが、モモンガは「これが殺気というやつなのだろうか？」なんて魔王らしくない感想を持ちつつ、平伏するアルベドたち——階層守護者の前へ立つ。

「面を上げよ」

「「はっ」」

見れば——

赤い全身鎧の美少女吸血鬼^{ヴァンパイア}『シャルティア』

豪華な弓を背負い凶悪そうな鞭を腰に備える、少年っぽい少女闇妖精^{ダークエルフ}『アウラ』

黒い杖を両手で抱え持つ、アウラの弟にして少女っぽい少年闇妖精^{ダークエルフ}

『マーレ』

四本の腕全てに尋常ならざる武器を持つ蟲^{ヴァーミンロード}王『コキユートス』

スーツを着込んだ天才頭脳の最上位悪魔『アーチデヴィル』
『デミウルゴス』

そして世界の名を冠する短い杖を持つ、異常なまでに美しい妖艶な淫魔『アルベド』

——ナザリック最高戦力たちの勇壮なる姿が視界に映る。

「アルベド以外は久しぶりだろうか？ まあ、まずはコイツの紹介からだな。私が創造した僕、宝物殿領域守護者パンドラズ・アクターだ」
「ご紹介にあずかりましたあパンドラズ・アクターです！ どうぞつよろしくお願い致します！」

パンドラを見つめる守護者たちの反応は様々であった。

アルベドがパンドラの指輪を睨み付けているのはまあ放っておくとして、興味深そうな視線を向けてくるのはデミウルゴスだ。自分と張り合えるほどの知恵者であろうと察し、色々と——モモンガ様のお役に立てそうな件について——話し合ってみたいと思っていたのだろう。

コキュートスやアウラは新たな守護者の登場に歓迎の意を示しているようだ。

マーレはあまり関心が無さそう——に見えるが、パンドラの指輪を無表情で見つめているのは何故だろうか？

そしてシャルティアはマーレの表情とは真逆ともいえる興味津々な笑みを浮かべて、敬礼姿のパンドラへにじり寄っていた。

「モモンガ様直属の僕であるなら、しもべ“正妃”となるわらわの“息子”みたいなものでありんすね。よろしくでありんす」

「おおお、父上にこのような美しいお嬢様が——」

「ちよおおおとまでやゴラツ!! 誰が正妃だあ?! ブチ殺すぞヤツメウナギ!!」

「あああ?! 邪魔すんじゃねえよ大口ゴリラ!!」

難攻不落のナザリックがあつという間に崩壊しそうな……、そんな殺気の渦中にて睨み合う二人の守護者はシャルティアとアルベドだ。互いに正妃の座を争う二人であるだけに、パンドラの存在をどうにかして取り込みたかつたのだろう。

嫉妬に目が眩んでシャルティアに先を越されてしまったアルベド

としては失態であるのだろうが、それより肝心のモモンガに恐るべき形相を晒しているのは如何なものか？

「二人とも、見戯はそれぐらいにしておけ」

「は、はい！ 申し訳ありません！」

「女は怖いなあ」なんて魔王らしくない感想と共に場を整え、モモンガはナザリックの外へと視線を向ける。

「モモンガ様」スーツを着用した一人の悪魔が微笑みと共に進み出て「偵察隊を出すのでしたら私に指揮をお任せください」と口にする。

「うむ、そうだなあ。デミウルゴスなら間違いはなさそうだが、今はまだ慎重に行くでしょう」

モモンガは外に居るかもしれないカンストプレイヤーを警戒しつつ、「でもまあ、まずは軽く見物してみよう」と片手を上げる。

——中位アンデッド作成、死の騎士——

地の底か閻の淵からか？ 空間に突然生み出されたソレは、真っ黒な巨体と波打つ長剣、そして半身を隠さんばかりの大きな盾を持って魔王の前へ顕現していた。

「デスナイトなら瞬殺されまい。視覚をリンクしておけば相手の姿ぐらい確認できるだろう。それまでナザリックの外を見物するとしてよ
うか」

死の騎士は、どんな攻撃を受けても死の直前——ギリギリで踏み止まる特殊技術スキルを持っている。ならばカンストプレイヤーの攻撃を受けたとしても、時間を稼ぐことが出来るはずだ。ちよつと覗く程度ならば十分であろう。

ただ、相手がカンストプレイヤーならば死の騎士を見た瞬間、連撃による速攻撃破を選択するだろうから稼げる時間もたかが知れている。とはいえモモンガにはそれでも過剰だ。

魔王たるモモンガは、刹那の間でも多くの情報を読み取ることが可能なのである。

（だけどなあ、 “ぬーぼー” か “式式”、 “フラット” か “パナツプ”、もしくは “チグリス” でもいれば情報収集なんかで頭を悩ませることもないんだが……。あと “ぶにつと” もいたら全部任せられる

のになあ)

モモンガは視覚をリンクさせた死デス・ナイトの騎士を送り出しながら、この非常事態を全て一人で対処しなければならぬという現状へ軽く愚痴を吐いていた。無論、近くにいるアルベドたちが暴走しかねないので、心の中でこつそりと。

(ああ、一人ではないか。パンドラも守護者たちもいるし……、つてなんだこれは?)

死デス・ナイトの騎士の視覚を通し、モモンガは広大な草原を、宝石箱のような星空を、魅惑的な月を見つめていた。

しかし草原にしる星空にしる、特に珍しいものでもない。狩場では以前から幾度も見ていたし、感動するような光景ではないはずだ。

それなのに魔王の心中には「美しい」との想いが宿る。

(……ふふ、そうか。そうだな。これは「悟」の想いか。まだ私の中に残っていたのだな。もうすぐ消えてしまうのだろうか)

最後のひとかけらを味わうかのように、モモンガは夜の草原を静かに眺めていた。

そして黙祷が終わったとばかりに気持ち切り替えると、リンクしている死デス・ナイトの騎士を全力で走らせ、叫ばせる。

「オオオオオアアアアアアア!!」

凶悪な化け物の雄叫びは無人の草原を駆け抜け、遙か遠くまで響いたかのよう。

草むらに潜んでいた小動物らが命の危機を感じ、必死に逃げ出そうとする光景が彼方此方で見られた。

(反応無し、か。ヘイトを稼ぐ死デス・ナイトの騎士ス・キルの特殊技術でも誘い出せないとなると、本当に居ないのか?)

足下の草が魔法による創造物ではないと判断すると、次に重要なのはプレイヤーの所在だ。

毒沼が草原になっている理由についてはまったく思い当たらないが、なっているものは仕方がない。それより今はナザリックに侵攻してくるであろうプレイヤーへの警戒が大事だ。近くにいるなら見つけなければならぬ。

しかし――

「居ないなあ。これも異変の影響なのか？　なにがなんだかサツパリわからん」

「モモンガ様、問題ガアルナラ私ヲ先鋒ニオ使イクダサイ」

「うゝむ、コキュートスのやる気は嬉しいが、肝心の敵が居ないのだ。どこへ行ったのやら」

プシューッと冷気を吹き出す巨大な蟲の守護者は、完全武装でカンストプレイヤー相手にも引けをとらない凄みを見せてはいるが、どうにもその剣戟を振るう相手が見当たらない。

モモンガは注目を浴びるよう暴れさせていた死の騎士^{デス・ナイト}を霧散させると、周囲探索を次の段階へ移行させていた。

「〃ハンゾウ〃よ、ナザリックの周囲八方位へ偵察に赴け。まずは一キロ地点、次に五キロ、さらに十キロと距離を伸ばし情報を集めよ。各目標地点へ着き次第アルベドへ報告を行え。〃念話〃の特殊技術^{ス・キル}は使えるな？」

「はっ、問題ありません」

「よし、では行け。アルベドは情報を集約し、要点を纏めて私に報告しろ」

「かしこまりました、モモンガ様（妻にお任せを、あ・な・たつ）」

モモンガは相変わらずの奇妙な圧を背に受けながら、もの凄い速度で外へ向かうハンゾウたちを見送る。

ハンゾウたち隠密・偵察系のモンスターは、最初から伝言^{メッセージ}と同等の特殊技術^{ス・キル}を所持しているので情報収集には大変便利なのだ。加えて情報が途切れたハンゾウの位置を探れば、そこにプレイヤーがいるのだと確定する。

高レベルの隠密モンスターであるハンゾウから隠れるには、式式やパナツプ並みの変態隠密ビルドが必要なのだから戦闘を避けて隠れ潜むのは不可能に等しい。

だからこの一手でナザリック周辺の危険性はある程度判明するだろう。

後は待つだけだ。

(それにしても外の草原地帯は記憶にない光景だった。ヘルヘイムでないことは確かだろうなあ。だとすると今回の異変はナザリック自体が別の場所へ移動した、ということか? いや、そんなことが可能なのか? ん、世界級アイテムで敵拠点を強制的に移動させる、とかか? 悟に「糞運営」と言われるぐらいの奴らなら、やりかねないのか? うむ、わからん)

小首を傾げるといふ魔王らしからぬ仕草を見せるモモンガ——その背後では、集まってくる情報を高い知能で分析しているアルベド、守護者に発動時間の長いバフをかけまくるマーレ、特殊技術『空の目』を発動させるアウラ、所持武器と戦闘特殊技術の確認を始めるコキユートス、そして軍服埴輪と作戦協議を行っているデミウルゴスの姿があつた。

どうやら主であるモモンガの発言から、外に潜んでいる強大な敵との戦闘が間近に迫っている、と判断したようだ。ナザリックの最高戦力を集め、宝物殿の守護者まで引っ張り出してきたのだから生半可な相手ではあるまい。

守護者は皆、敵の情報を集めているアルベドの、そして号令をかけてくださるであろうモモンガ様の挙動を見つめていた。

「モモンガ様、御報告いたします (くふー!)」
「うむ」

「ナザリックの周囲、半径二十キロ圏内に敵影はありません。プレイヤーはもちろん、ナザリックに害をなせるようなモンスターも発見できませんでした。ただ人間の村を複数発見いたしました。脅威度はゼロ、レベル一桁のゴミでございます (くふふふふ)」

「レベル一桁の……、人間の村だと?」

NPCの村か? と思いつつも、モモンガはおかしな点に気付く。傭兵モンスターである「ハンゾウ」が、NPCのレベルを探查できている——なんて「悟」が聞いたなら「何かのバグかな?」と言い出すほどの奇妙な話であるはずだ。

そもそも村や街にいるNPCのレベル判定なんかプレイヤーです

ら成功しない。干渉が絶対にできない相手なのだ。それこそ世界級アイテムを必要とするだろう。そんな無茶な領域の現象であり、有り得ない状況であると言える。

「これはもしかすると、もしかするかもな」

モモンガは脅威となるべきプレイヤーの不在に安堵し惜しむものの、外で起こっているという異変の真実に、骸骨の身でありながらも冷や汗を流しそうなほど身震いしてしまう。

そんなことが起こり得るのか？ と素直に口にしてしまいそうだ。

だが今は更なる検証が必要だろう。

幸い、丁度よいゴミも発見出来たことだし……。

「アルベド、発見した人間を全て回収してナザリックの地表部分、霊廟前へ集めろ。私自ら頭を覗いて確認する。人間どもの回収には影の悪魔や八岐刀の暗殺蟲を送って速やかに行え」

「はっ、御命令のままに（くふー！ また私の名をつ！ これで何度目?!）」

アルベドの口元に涎が垂れているような気がして二度見してしまいうもモンガであったが、どうやら見間違いであったようだ。涎を垂らすような行動の原因に心当たりはないので、まあ有り得ないだろう。

だが、何故そんな見間違いを？ とモモンガは大量の人間が集められていく最中にも、幾度か首を傾げるのであった。

第3話 「拉致魔王」

モモンガが地表に出るにあたって、最初は影の悪魔とシャドウデーモン八肢刀の暗殺蟲、八体のハンゾウがナザリックの周囲と上空へ展開した。

次にコキュートス配下の近衛兵二十体が円状に広がり、その後、コキュートスとシャルティア、アウラにマーレ、デミウルゴスが地表へ出る。

モモンガはアルベドとパンドラを横に控えさせ、後方にセバスとブレアデス戦闘メイドを連れて、守護者たちが警戒する地表、霊廟前の階段を上がっていた。

（うむ、やはり魔王が警戒して動くとなればこの程度の手勢は必要だろう。単騎で狩場へ出かけるなんて、やはりおかしいよなあ。んく、悟が居ればこの疑問にも答えてくれただろうに……）

「悟」と共に狩場へ出かけていた当時は何の疑問も持たなかったのに——、なんて答えが出そうにない疑問を無いはずの脳へ抱えさせ、モモンガは降り立った。

五百人に迫る人間の老若男女でひしめき合っている霊廟前、ナザリックの地表部分へと。

「が、がいこつ?! アンデッドか?」

「なんだコイツら!! ここはどこだ?! どうしてこんな場所に?!」

「私たちの村は? 寝ていたはずなのに、いったい何が……」

「うわああああああ!! ばばっ、ばけものだっ!!」

「助けてください助けてください助けてくだ——」

「お父さんお母さん! ネムも離れないでっ!」

「おねええええちやああん!!」

「大丈夫だ、きつと助かる!」

「く、くそつたれ!! こんなことをしたら冒険者が黙ってないぞ!!」

「王国兵だつて来てくれるさ! きつと戦士長がっ」

「うくむ、このまま聞いていても面白そうだが、少し騒がしいな。……」

デミウルゴス」

「はっ。『静かにしたまえ』『動くな』」

パチンつと骨の指を鳴らした魔王の意図を瞬時に理解し、スーツを着た眼鏡悪魔は声の力を響かせる。

デミウルゴスの特殊技術、『支配の呪言』だ。

低レベルの存在を意のままに支配する効果を持っているので、対象となった村人たちは誰も彼もが口を閉ざし、その場で石にでもなったかのように身動き一つ出来ない。

一瞬にして静寂が場を満たし、恐怖の視線だけが居るはずのない救世主を求めて漂っていた。

「さて、NPCを攫ってくるのが可能な時点で確定だろうが、まあ確認は必要だろう」

モモンガは、身をよじることもしない——出来ないでいる小虫のような人間を一瞥すると、それなりの情報を持っていそうな村長らしき中年男性の前へ歩を進める。ただ、人間の価値があまりに低すぎるので、本当に村長なのかどうかは判別不能だ。

魔王にとって人間の性能差はミリ単位以下であるが故に、判りにくいのであろう。まあ、プレイヤーならばすぐに判るのだが。

〈コントロール・アムネジア
記憶操作〉

中年男性の頭を掴み、神の魔法を発動させる。

これは対象の記憶を書き換え、又は消し、更には壊すことが可能な魔法である。だが今回は覗くだけだ。

人間が辿った人生の記憶を嘘偽りなく読み解き、情報を集める。

拷問して吐かせるよりは、実に簡単に正しい情報が得られる手法であろう。無論、当の本人が嘘を真実だと思い込んでいた場合は、記憶を読んでも真偽が判らなかつたりもするのだが。

「ふうむ、覗くだけなら魔力の消費は僅かで済むのか。記憶改変となるとそうはいかないようだが。おっと……ほう、やはりユグドラシルではないか。別世界——、悟が住むリアルのようなものか？　しかし人間が存在し魔法が使えるのだから、それほどメチャクチャな世界でもなさそうだ。とはいえ、この程度の記憶では足りんな」

村人ごときの記憶では世界の全てを知ることなどできない。それでも、数を集めれば常識程度は得られるだろう。

複数の村から根こそぎ村人を集めてきたのだ。五百人にも及ぶ人間から情報を絞り出せば、世界の一端は見えてこよう。

「よし、では——ん？」

「ぐっ、ごああ！ あがががつあああああああ!!」

特に力を込めた訳でもなく触れていた時間もごく僅かなのだが、魔王に記憶を覗かれた中年男性は、何かに生気を吸い取られたかのように骨と皮になり、直後、塵となり霧散してしまった。

モモンガは男に触れていた骨の手をしげしげと見つめ、「何が起こった？」と恐怖で気が狂いそうになっている群衆の真正面で呟く。

「恐れながらモモンガ様。弱過ぎる人間では、モモンガ様の負ネガティブタッチの接触到耐えられないかと。もちろん、私にはいくら触って頂いても大丈夫ですわ。モモンガ様から与えられる痛みならいくらでも——」

コイツ本音を隠さなくなってきたなあ、つと心の中で愚痴るモモンガは、黒い翼をバツバツサバツサしている白い悪魔へ引き気味の視線を送りつつ、再度骨の手を見つめる。

（妙だな。負ネガティブタッチの接触を発動している自覚はあったのに、相手がダメージを受けないと思いついていた。接触対象がNPCに似た人間だからか？ ナザリックの中だからか？ うむ、これも異変の余波なのだろうか？ しかし危険な意識の差異だな。ナザリックにはレベル1の一般メイドだっているのだから、下手をしたら殺していたかもしれん。今後は特殊スキル技術の使用に注意を払わなくてはならん）

頭の中で「要注意、今後も検証必須」と異変に関する意識の変移に警戒し、モモンガは負ネガティブタッチの接触を——残念そうな表情のアルベドを無視し——解除した。

「さて、本格的な情報収集を始めるとしよう。つとその前に」魔王は豪華なローブを翻し、「アルベドとデミウルゴスは、ナザリック内部の警備体制見直しと墳墓周辺の警戒網構築に協力して当たれ」と言い放つ。

「はっ」

「他の守護者はアルベドの指示に従い行動しろ。ただし、ナザリックの外へ守護者が出ることは許さん。外の警戒網には『ハンゾウ』たちを使え」

「はっ」

「うむ、ではパンドラ。第五階層のニューロニストと協力して集めた人間どもから情報を抜き出し、要点を纏めて私に報告しろ。人間どもは皆殺しで構わん。どうせ餌か実験体になる運命だ」

「畏まりました！ 我が造物主、モモンガさまっ！」

一言多いけどカツコイいなあ、と敬礼するパンドラへ冷ややかながらも満足げな視線を送ると、モモンガはする必要のないため息を漏らす。

これは『悟』がいた頃からの癖なのだが、モモンガにとっては当面の危機が回避されたという心境を反映させた仕草であった。

ナザリックは健在、守護者たちに問題はなく、外にも差し迫った脅威はない。異変による多少の不具合はあるものの、一つずつ検証していけばよいただけの些事ばかりだ。

「これならばナザリックは戦える」モモンガはレプリカの杖を強く握り、見知らぬ草原地帯を眺めては「異なる世界だろうと魔王の成すべきことは変わらぬ」とまだ見ぬ強敵への殺意を溢れさせるのであった。

「モモンガ様！ 御待ちください!!」

「ん？」

良い気分浸っていたモモンガを現実に戻した声の主は、守護者の誰でもなかった。それは長い黒髪の女であり、黒いドレスをきた豊満な胸の女性であり、顔の皮が剥がされている鬼女であった。

名は『ニグレド』。

第五階層の氷結牢獄に配置されており、探知系特化型高レベルNPCとしてナザリックに貢献している子供好きの女性、且つアルベドの姉なのだが、通常は牢獄から出て来られないはずである。

モモンガも「えっ？ お前出られるの？ しかも自分の意志で？」

と驚きを隠せない。

「姉さん！ 何を勝手に出歩いているの?! しかもペスまで！」

「も、もうしわけありません……わん」

見れば確かに、ニグレドの斜め後ろに犬頭のグラマラスメイド、
ペストーニヤ・S・ワンコTMが跪いていた。

ただモモンガは「アルベドに怒られながらも、その語尾はどうなんだ？」と久しぶりに出会ったNPCに妙な感想を抱いてしまう。

「うん？ お前たちをこの場へ呼んだ覚えはないのだが、私に何か用なのか？」

急いで駆け付けたと思しきニグレドの様子に、モモンガは「無理難題を言い出すのかなあ」と頭蓋骨の側頭部を骨の人差し指でコンコンと突く。

そんな魔王を前にして、顔の皮があれば恐らく美しい女性なのであろうニグレドは、死を覚悟するかの勢いで言葉を吐き出していた。

「お願い申し上げます！ どうかつ、どうか幼子の命だけは御救いください！ 子供の記憶から得られる情報など、モモンガ様のお役に立つとは思えません！ 殺す必要はないかとっ！」

血を吐く想いのニグレドに続き、ペスも地に頭をつけて懇願の意思を示す。

—— 静寂 ——

誰一人として言葉を発することなく、身動きすらしない。その場を滑空するのは視線のみ。それも弩級の殺気が込められた守護者たちの視線だけだ。

勝手に持ち場を離れ、神をも超える偉大な支配者へ意見具申。

正体不明の異変に巻き込まれている異常事態だからこそ、最大の警戒を持ってナザリック全体が動いているというのに……。

ニグレドとペスの行動は間違いなく反逆行為だ。たとえ守護者統括の姉であることを考慮したとしても、無邪気な我儘で済むはずがない。

「姉さん、なんてことを……してくれたの？ モモンガ様は最後まで残ってくださいった至高の御方。その御方に逆らうなんてっ。私たち

に失望したモモンガ様が、この地から去ってしまわれたらどうするの!? ナザリックの僕たちは存在意義を失うのよ! 姉さん一人の問題ではないわ!!」

アルベドの、そして守護者たちの表情は、溢れんばかりの怒りと深い恐怖で満たされていた。

モモンガは、アルベドの怒号から『僕たちが何を最も恐れているのか』を悟る。

それはそう、『捨てられる』ことだ。

タブラが、ペロロンが、ウルベルトが、たちちが、茶釜が、やまいこが、パナツプが……。アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバー四十人が行ってきたことだ。

彼ら彼女らが何処へ行ったのか、悟が向かおうとしていた現実世界なのか、それとも別の世界なのか、はたまたこの地であったりするのか、モモンガには分からない。

ただ、魔王たるモモンガ自身はナザリックを去るつもりなど毛頭ないし、その理由もない。

ニグレドやペスのような僕が勝手に動き、我儘を言い出したのには驚くが、それは子供の可愛らしい振る舞いに過ぎないだろう。

モモンガとしては声を上げて怒るより、自己主張する子供の成長を喜ぶべきである。

「ふはは、ふははははははー!」

張り詰めていた空気の中に魔王の笑い声が響く。

身動きできない村人が戸惑いの表情を見せるのは当然だが、その瞬間は守護者たちも困惑するしかなかった。

モモンガの笑い声がどんな意味を持っているのか?

ナザリックの僕たちは、不動の姿勢で静かに主の真意を待つ。

「よしよし、そうだな。ちょうどいいか。ナザリック地下大墳墓に配置してから、長きに渡って仕えてくれているわけだしな。せっかくの我儘だ、活用させてもらうとしよう」

モモンガはどこかの宝物殿守護者であるかのように豪華なローブを派手に翻し、一斉に跪く僕たちを前に宣言する。

「まず、お前たちに伝えておこう。私がナザリックを去ることはない。これはアインズ・ウール・ゴウンの名に懸けて絶対だ」感激に身を震わせる守護者をそのままに、モモンガは言葉を続ける。

「ニグレドとペストーニヤの嘆願は、私にとつても良いタイミングである。前々からお前たちには何か褒美をやろうと考えていたのだ。それが今回集めた人間で叶うのならば僥倖と言えよう」

軽い足取りのモモンガは、うんうんと小さく頷きながら村人の中へ押し入ると、目についた小さな子供を釣り上げニグレドへ放り投げていた。

「ニグレドの好みはよく判らんが、コイツでどうだ？」

「あああ、御慈悲をありがとうございます！ モモンガ様！」

少し慌て気味に少女と思しき子供を優しく受け止めると、ニグレドはこれ以上ないくらいに頭を下げ、慈悲深き支配者へ感謝を捧げる。「モモンガ様、よろしいのですか？」
「私の姉」であるからといってそのような温情は不要かと。ちなみにモモンガ様に掴まれた人間の小娘が羨ましいです」

「なにを言っている？ ニグレドだけではないぞ。ペスも幼子が欲しいなら選ぶがよい。セバスにプレアデス、アルベドたちも欲しい人間がいるなら手に取るとよい」

自然な感じで放たれたモモンガの言葉は、少女を抱きしめていたニグレドにとつて受け入れがたい事実を含んでいた。

ナザリックの僕たちは基本的に人間をよく思っていない。それこそ貪り喰らいて死体を巢に利用するほどだ。そんな者たちに子供が渡されたなら、向かう先は死より残酷なものになろう。

「モ、モモンガ様?! それは！」口にしてはならないと解つていながらも、ニグレドは設定のために止まらない。

「なんだニグレド？ もしかして褒美は自分だけにして欲しいとか言うつもりか？ それとも全ての子供を独り占めにしたいたいでいいいや、流星にそれは可愛らしい我儘の域を超えるぞ」

ゆらりと黒いオーラが視界に入り、ニグレドは言葉を失う。

これ以上は最悪の事態を引き起こしかねない。御慈悲を頂いた――

「腕の中で怯えた瞳を向けてくる少女の命まで御破算にしてしまうだろう。」

だがそれでも、救える幼子は救いたい。

「申し訳ありませんモモンガ様。あ、あの、ペストーニヤをそちらへ行かせてもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わんぞ。よく吟味して選ぶがいい」

ニグレドの無言の視線を受けて、犬頭のメイド長「ペストーニヤ」は全てを理解したと言わんばかりに強く頷き動き出す。

ペストーニヤは人間を吟味しようと歩く最中、セバスへ意味あり気な視線を向け、次いで戦闘^{ブレアデス}メイドの「ユリ」と「シズ」を見つめて軽く頭を下げていた。

それが何を意味していたのか。

セバスは何も語らないまま赤子を褒美として受け取り、ユリも幼い男の子を腕に抱いた。シズは興味無きそうにしていたが、ユリから『お願い』と言わんばかりの強い視線を受けて、仕方なく女の子を片手に掴む。

そんな光景を眺めていたアルベドは、身内の起こした騒動に深くため息を吐きながらも、人間のような虫けらにすら御慈悲を与える旦那様の素晴らしさに、身をブルブルと振るわせるばかりであったそうなの。

ちなみに人間の褒美は辞退したらしい。

「ルプスレギナとナーベラルは辞退か。ソリュシャンとエントマは遠慮しなくともよいぞ。子供で物足りないならこの場の誰でも構わん」
モモンガの一言にピクリと反応し、メイドの一人が「恐れながら」と言葉を紡ぐ。

「モモンガ様、妊婦……でもよろしいのでしょうか？」

「おつ、ソリュシャンの好みは子持ちか？ ああ、構わんぞ。それでエントマはどうする？」

「はあい、わたしはダイエット中なのでえ、肉付きの良い若い男に致しますわあ」

「はは、ダイエット中なのか、うんうん、女の子だなあ」なんて魔王様

はほのぼの感を醸し出していたのだが「えっと、女の子？　でイイのか？　イイのか？」と少し首を傾げることになっていた。

守護者の中ではアルベド、パンドラを始め、アウラやマールでも人間に興味を示さず、コキユートスは『恐怖公』への御土産として大柄の男を、デミウルゴスが実験体として健康そうな成人女性を選ぶ程度であった、が――

「モモンガ様モモンガ様、御伺いしてもよろしいでありますか？」
「どうしたシャルティア、好みの人間でもいたか？」

「はいであります。モモンガ様の傍にいます、その若い娘を頂いてもよろしいでしょうか？」

シャルティアに言われてから足下を見れば、確かに栗色髪の少女が『支配の呪言』に縛られたまま固まっていた。

特に美しくも強そうにも見えないので「これがシャルティアの好みなのか？」と不審に思いながら持ち上げてみれば、モモンガには「おお？　そうか」と一つの閃きが宿る。

「素晴らしいなシャルティア。今この場にはニグレドとアルベド、アウラとマール、そしてプレアデスたちきょうだいしまい姉弟姉妹が揃っている。そんな中で姉妹を引き裂くべきではないと判断したのだな。この娘はニグレドに渡した子供の姉なのだから……。うんうん、仲間想いの良い配慮であるぞ」

なにやら感動するようなことを言っただけだが、モモンガの前に集められた村人たち五百名は引き裂かれまくっている状態だ。この先も物理的に引き裂かれることだろう。

加えて、シャルティアは姉妹を救おうだなんて露ほども思っていない。姉を上手く調教してニグレドの獲物と一緒にさせれば、姉妹で楽しめるのではないだろうかと思巧みしていただけなのだ。

既に頭の中は、獲物の尻へ「どんな尻尾を突っ込もうか？」と選定で忙しかったりもする。

「ぞ、そうであります！　姉妹は仲良くするべきであります！
流星はモモンガ様！　すべてお見通しで！」

「なんてことつ、シャルティアに先を越されるなんて?!」

「これは失態でしたねえ。この場に姉妹が多いことを考慮するべきでした」

ぐぬぬ、と無念さを口にする知恵者二人をそのままに、モモンガは手にした娘の頭を覗き、名を確認してからシャルティアへ放り投げ

る。「姉の名は『エンリ』だそうだ。妹は『ネム』。せっかくの姉妹なのだから早々に壊したりしないようにな。まあ、褒美だからどう扱おうとも構いはしないが……さて」

余興は終わりだ、と言わんばかりにローブをはためかせて、モモンガは人間どもを見すえる。

ニグレドやペストーニヤにはもう何も出来ないし言えない。ここまででも過分な配慮を頂いているのだ。セバスやユリの手を借りて、複数の子供を助けることが出来たのは奇跡といえよう。胸の温あたたかな存在は、現実の温ぬくもりだ。

無論、悲惨な運命を辿るであろう幼子の姿は目の前に残っているのだが、己の設定とモモンガ様への忠誠心を両立させた結果、この辺りが限界であろう。

いや、やはりモモンガ様の大きな慈悲を受けたというべきかもしれない。本来であれば、ニグレドもペスも首を刎ねられて反逆者の烙印を押されていたのだから……。

「私は執務室で情報収集の結果を持つとするが、その前にこれを渡し

ておこう。まずはシャルティア」

「はい、モモンガ様！」
何を渡されるのかあまりよく分かっていなかった吸血鬼は、両の手に置かれた指輪を見て、ちよっぴり発狂してしまう。

「こ、これは拠点内転移用指輪!! ということはわたしを正妃に!? 嬉しいでありますう!! 直ちにモモンガ様の寝室へ向かいんす! あああ?! 服はどうしんしょう? 脱いだ方がよろしいでありますか? それとも——」

スパコーン! つと派手な音をシャルティアの頭で鳴らし、キョトンとする吸血鬼の面前へ軍服埴輪男は右手の指輪を見せつける。

「はあっ?! なんでおんしまで指輪を? うええええ? まさかモモンガ様はそっちの趣味もありんしたか? 流石は至高の御方々のちようて——」

スパスパコーン!! つとさらなる往復突っ込みを放ち、パンドラはシャルティアを黙らせる。

そこでようやくモモンガは重過ぎる口を開いた。

「やれやれ、落ち着いたかシャルティア? 誤解の無いように言っておくがリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン指輪は各階層守護者とパンドラ、そしてセバスに与えるつもりだ。今回の異変に対応するためには迅速な行動が必要不可欠。であるのに、ナザリックの階層間移動で時間を浪費してしまうなど愚の骨頂だろう? まあ、敵の手に渡ると大問題だから、外への持ち出しは厳禁だな」

こくこくと壊れたオモチヤのように頷くシャルティアに一抹の不安を感じながらも、モモンガは予備のリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン指輪を各人へ渡し、「では、行動を開始せよ」との言葉を最後にその場を去った。

「よおおっしやあああああ!!」との守護者統括らしき女性の雄叫びを聞いたような、そんな有り得ない幻聴に「異変って怖いなく」と棒読みで呟きながら……。

第4話 「興奮魔王」

「カルネ、リ・エステイーズ、バハルス、スレイン……。どれもユグドラシルとは関係なさそうな名称だな」

第九階層の執務室にて、モモンガは情報収集の結果報告を受け取っていた。

手にした報告書には聞いたことのない名称が並び、本当にここが別の世界なのだと思います。

「はい、モモンガ様。村人の誰一人として、“ユグドラシル”に関する知識を持ってはいないようですわ」

「……統括殿、私の台詞をとらないで頂きたい。というより何故ここに？」

村人の頭を覗いて情報を集める作業は、“タブラ”に変身したパンドラが担当責任者として行っていたことだ。故に主への報告もパンドラが行うべきであろう……。埴輪顔の領域守護者が造物主の執務室へ到着したそのとき、何故かそこにはアルベドが待ち構えていたのだ。

「あら、ごめんなさい。モモンガ様に三十八時間も御会いできなかったものだから、つい気が逸ってしまっただわ。くふふ」

「まあいいでしょう。ではモモンガ様、この世界、異世界とも言うべきこの地についてですが――」

丸い穴のような目であるが故に睨んでいるのかどうか不明なのだが、パンドラは守護者統括を一瞥した後で、報告の続きを行う。

「国家形態、流通通貨、使用言語、生活水準などを村人の知識レベルで纏めてございます。今のところ特筆すべき情報はありませんが、気になる点と致しましては“森の賢王” “生まれながらの異能” “城塞都市エ・ランテル” “冒険者” “王国戦士長” などでしょうか？」

「そうだな、特に“生まれながらの異能”は気になる。カルネ村とやらに通っていた魔法詠唱者が所持しているとのことだが」

モモンガは骨の指で報告書の端をパシツと弾き、そこに書かれている「ンフィーレア」なる人間へ興味を寄せる。

カルネ村の夫婦が娘の恋人候補として認識していた若い男であり、ユグドラシルに存在しなかった異能をもつ魔法詠唱者にして薬師。しかも所持している「生まれながらの異能」は『どんな魔法具であろうとも使用可能』という破格の能力だ。

好奇心という意味でも脅威という意味でも、関心を持たない方がおかしいだろう。

「その者は『城塞都市エ・ランテル』に居るとのことですわ。一軍を送り込んで確保いたしましょうか？ モモンガ様（じゆるじゆる）」
「（なんだかしやぶられそうな……）まあ、待て。辺境の村人が持つ情報だけで動くのは危険だ。もう少しナザリック周辺の生き物から情報を集めるとしよう」

「その件ですが、我が造物主——モモンガさま。ナザリックは現状のままでもよろしいのですか？ 大草原の中に墳墓の地表部分がむき出しで、大変目立っておりますが」

アルベドを牽制するかのように会話へ割り込んだパンドラの発言。それは確かに防衛という面で問題となる案件であった。

しかし、骸骨大魔王モモンガは軽く笑って隠蔽を否定する。

「そのままでよい。確かに見知らぬ土地で目立つことは下策かもしれないが、私はユグドラシルの魔王だぞ。コソコソ隠れ潜むなど、私に相応しくない下劣な行為だ。この世界の勇者とやらが仕掛けてくるなら、ああいつでも来るがよい。派手に暴れてやるとしよう」

「おお」

「くふー！ モモンガ様、マジかけー！」

確かに格好良かった。

「本気は出さないから、かかってこい！」とばかりに両手を広げるモモンガの姿は、どこへ出しても恥ずかしくない大魔王そのもの。勇者が何人襲いかかろうとも、勝てるとは思えない。

「とはいえ、戦うにしても重要なのはやはり情報だ。だからこそ——ん？ どうしたアルベド」

黒い翼をピクピクさせて今にもモモンガを押し倒そうとしていたアルベドだったのだが、突然「仕事のできる秘書」であるかのように厳しい表情をみせて大人しくなる。

「はっ、申し訳ありませんモモンガ様。たった今、周辺偵察に出ている僕しもべより報告が入りまして」戦闘開始とでも言わんばかりの静かな口調でアルベドは紡ぐ。「武装した騎士や戦士の人間種集団を複数発見とのことです。如何いたしましょう？」

武装しているとなればナザリツクに害をもたらす可能性があり、ひいてはモモンガ様へ無礼を働く可能性もあるということだ。

アルベドとしては、相手の強弱に関わらず皆殺しにしたくなる相手である。

「ふふふ、ようやくまともな情報を持つていそうな奴が出てきたな。……アルベド、前回同様拉致しろ。全員だ。もし僕が手古摺しもべるような相手であるなら連絡を寄せ、私も出る」

「はっ！」

当然「御身が出ることなど」と言いたかったのだが、アルベドもパンドラも力を揮いたそうにしているモモンガを前に平伏するしかなかった。

そう、魔王はウズウズしていたのだ。

まともに勇者と戦えなかったユグドラシル時代。それがこの世界に来て叶うかもしれないのだから興奮しよう。アンデッドだけだ。

互いの存在を懸けた死闘。何百手先を読み合い、カウンターやフェイクを用意し、骨を切らせて肉を断つおかしな消耗戦。血反吐を吐きながら——血液が流れていない骨だけ——最後には勝利を掴む、あの昂揚感。

モモンガは最後まで勝てなかった一人の戦士を思い浮かべ、自嘲気味に笑う。

（魔王たる私が一度も勝てなかった、なんておかしな話だが、事実なのだからしょうがあるまい。とはいえ、まだ試していない新開発のアレをどこかの勇者へぶつけられるのならば、やらない手はないだろう。ふふ、ワールドチャンピオンの代わりとしては不足だろうかな）

異変が巻き起こした転移により、別世界の武装集団と戦うことになつたわけだが、モモンガに安全策を選ぶような気配は無かつた。

もしかすると、この世界にはモモンガを一撃で葬ることのできる強者が居るのかも——なんて考えていないのだろうか？ いや、もしそんな勇者が居るのなら「魔王として派手に散るのも悪くはない」と期待しているのかもしれない。

無論、*ぶ*につと萌え[〃]の教えに従い徹底的な情報収集の末に勝利を求めて戦うのだろうが、勝率を気にして撤退も視野に入れていた[〃]鈴木悟[〃]とは異なり、モモンガに『逃げ』はない。

魔王は退かない。

魔王は背を向けない。

そして何者も——魔王からは逃げられない。

だからこそそのラスボス、ユグドラシルの大魔王なのだ。

魔王は遙か高みから勇者を見下ろし、圧倒的な暴力で蹂躪する。最強であり、物語の最後を飾る災厄の王。

倒されたならば、世界は平和になってメデタシメデタシというわけだ。

「さて、楽しみだ……」

モモンガは、まだ見ぬ『自分を倒してくれるであろう勇者』へ想いを馳せる。

村人の記憶にあつた伝説の魔獣[〃]森の賢王[〃]や王国最強の[〃]王国戦士長[〃]など、この世界には力を持った未知の生き物がそれなりに多そうだ。

まるでそう、悟とユグドラシルの地へ初めて降り立った、あの時と同じような状況であろうか？ 気分が高揚する感覚も似ている。まあ、当時は魔王ではなく骸骨^{スケルトン・メイジ}の魔法使いであつたが。

（この世界ではどのような道を歩むのだろうか？ 玉座を占領するだけの忘れられた魔王か？ それとも世界を破滅に追い込む恐怖の大魔王か？ ふふふ、勇者よ早く出てこい。でないと好き勝手に暴れてしまうぞ）

もう[〃]鈴木悟[〃]も[〃]たつち・みー[〃]も居ないのだから——と軽く

眩き、モモンガは戦闘集団の捕縛へと向かう白い悪魔を見送る。

アルベドは「守護者統括にしてモモンガ様の正妃アルベド、行ってまいります」という耳慣れない挨拶を残し、左手薬指の指輪を撫でながら執務室から去って行った。

「うおおおいちよつとまでえい！」と呼び止めておけばよかった、なんて魔王が後悔したのは、それから少し後のことだったそうな。



村人を集めたときと同様に、モモンガの周りには各守護者とパンドラ、そしてセバス率いる戦闘メイトプレアデス、加えて近衛兵やハンゾウたちが控えていた。

モモンガの前には百名にも及ぶ武装した騎士や戦士、魔法詠唱者たちが静かに、且つ悲痛な表情でピクリともせず蹲っている。

とは言いながらも、まあ鎧を纏い弓と剣を所持していれば、それは確かに武装集団なのだろうが「そのレベルで武装していると言っているのか？」と、モモンガはナザリツクの地上、霊廟前で乱雑に纏められて人形のように動かない人間たちを見下ろし、やれやれと出ないため息を吐いてしまう。

「なんだこの雑魚どもは？ ユグドラシルではこんな低レベルの戦士なんて、見つけるのも難しいぞ。村人NPCじゃあるまいし」

「申し訳ありません、モモンガ様。今回捕縛いたしました者どもは、私の『支配の呪言』が効く程度のゴミでございまして、最高でもレベル30に届かない弱者でありました。ですが——」

絶対の支配者であるモモンガ様に御足労頂いたことは申し訳なく、としながらも、デミウルゴスは事前に行っていた聴き取りの成果を告げる。

「この者たちは、現地において中々の強者であると思われまます。スレイン法国の一般兵と特殊部隊、リ・エステイーズ王国の戦士長と隊員たち。モモンガ様、どうやらこの世界の平均戦闘レベルですが……ユグドラシルと比べて格段に落ちるのではないかと」

知恵者デミウルゴスの言葉ならほぼ間違いないのであろうが、モモンガとしては「うゝむ」と不満を漏らしたくなってしまふ。ユグドラシルで出来なかつた華々しい最終決戦を期待していたというのに、目の前で膝を付いている噂の戦士長とやらは装備からしてみすばらしい。

これでは魔法訓練の的にもなりはしないな、と愚痴を吐きたくなつた——そんな頃、モモンガの隣にはアルベドが忍び寄っていた。

「モモンガ様、落胆される必要はありませんわ。その戦士長とやら、面白そうなモノを所持しているようです」

姉からの情報を自分の手柄であるかのように振る舞う統括には、デミウルゴスとしても渋い表情にならざるを得ないが、「獲物には手を触れておりませんので、どうぞ」と鉄面皮で迫りくるアルベドに、モモンガは「う、うむ」と気を取り直して魔法探知デテクト・マジックを行使し、戦士長と呼ばれる人間の手から無視できない反応を得る。

それは指輪であり、大魔王が手にするにはあまりに地味なモノ。だが道具オール・アプリーサル・マジックアイテム上位鑑定で判明したその性能は、ナザリックにおいても希少と言える価値があつたのだ。

装備した者の能力を引き上げる、とはよくある能力上昇の魔法具マジック・アイテムではないが、その上昇率は神器級ゴッズに匹敵するレベル。しかも、製造工程が全く解らない未知の品である。

魔王の興味を引くには十分すぎるアイテムであつた。

「これは凄いな。指輪タイプでこれ程の能力上昇とは……。雑魚が持つには過ぎたアイテムであろう。それにどうやって作つたのかも興味がある」

モモンガは「データクリスタルを消費しないで神器級ゴッズが作れるのなら、ナザリックの戦力増強にも繋がる」なんて少しワクワクしながら、脂汗を流して必死の抵抗を試みている戦士長らしき男の頭を掴む。

〈コントロール・アムネジア
記憶操作〉

神の魔法で記憶を覗き、指輪の手掛かりを探る。ついでにどの程度の人物なのかを軽く読み取り「本当に村人が言っていた王国最強の戦士なのか？」と、そんな疑問の答えを記憶の海から拾い上げようと試

みる。

「ふくむ、指輪は老婆からの貰い物か。それと……ん？ 武技？ なんだこれは？ 特殊技術と似ているが、この世界特有のものか？ ふむむ、ならば魔法職の私にも使えないかなあ」

ユグドラシルの理がこの世界へ干渉している——位階魔法や職業による装備規制など——のは実証済みだが、この世界の理がユグドラシル発祥の自分たちへ干渉できるのかどうか。

試してみる価値はある。

「コキュートス」

「ハッ！」

「この人間を預ける。武技とやらの達人らしいから、ナザリツクの者たちに伝授可能か試してみよ。無論、コキュートス自身が体得できるのかどうかもな」

「畏マリマシタ。才任セクダサイ！」

ライトブルーの蟲王は、久しぶりの勅命に嬉しさを抑えきれないようだ。己の部下に手早く実験素材となる人間を確保させると、新しいオモチャでも弄るかのように四本の腕で王国戦士長「ガゼフ」を転がす。

「ははは、凍らせて殺すなよコキュートス。さて他には」

「モモンガ様、次は私が」今度は自分の番だと言わんばかりに守護者統括を押し退け、デミウルゴスは「こちらのスレイン法国特殊部隊の隊長をご覧ください」と一人の魔法詠唱者を引っ張り出してきた。

「スレイン法国か……」

「はい、人間至上主義の国家と情報を得ておりましたが、正にその通りであったようです。他の種族へ情報を渡すぐらいなら死を選ぶと、特殊部隊員全員に呪いにも似た情報隠匿の儀式魔法が付与されておりました」

デミウルゴスが言霊による支配を行って命じたのは「静かに」と「動くな」の二つだけであり、両方とも情報を求めるような命令ではなかった。それにも拘らずスレイン法国の特殊部隊員は皆、血を吐き出さんばかりに暴れ狂おうとしたのだ。実際は指一本動かせず、叫び声

を上げることも叶わなかったが。

スレイン法国が国家として、機密情報を漏らさないために行った手法の一つなのだろう。理解はできなくもないが、モモンガにとって人間の生き死になどどうでもよいことだ。どうせ情報を抜き取った後は、食ったり、巢にしたり、召喚実験に使ったりするのだし、気にするまでもない。

ただ、情報収集を邪魔されるのは癪に障る。

「呪いか……。解けるのか？」

「はい、問題なく。ルプスレギナでも大丈夫かと思うのですが、ここは大事をとってペストーニヤを呼ぼうかと考えております」

「うくん、ペスは今、ペットの世話で忙しいだろうからなあ」

「モモンガ様が僕の都合を気にする必要など」と口にするデミウルゴスを片手で抑え、モモンガは傍らで大人しくしている最高傑作に一番を与えるべく、名を呼ぶ。

「パンドラ、ッやまいこッに変身して力を揮え。出来るな」

「はっ！ お任せくださいモモンガさまっ！」

予測していたのか用意していたのか？ まったく間を置かずに対応したパンドラは、瞬時に半魔巨人ネファイリムへ変身すると、その巨大で醜悪な右手を掲げる。

一方、そんな彼の姿を見た戦闘メイドブレアデスの一人が、メイドにあるまじき息をのんで姿勢を崩しかけるといふ不始末をしでかすのだが、モモンガは見て見ぬふりをした。主が何も言わぬのだから、セバスや守護者たちも不動にて無言である。

「至高の御方が揮う力の前には、呪いなど塵芥に等しい！ 全て消え去りなさい！」

物事一つ一つに全力なのは喜ばしいと、造物主であるモモンガならば頬の一つでも緩ませるところなのだろうが、骨だから無理だと突っ込む前に困った事態が巻き起こってしまった。

パンドラが放った光の前に全ての呪いは掻き消える。そう『支配の呪言』さえも。

「やった！ 動けるぞ！」

「き、貴様ら！ 私が逃げるのを援護しろ!! 金ならやる！」

「戦士長！ 今助けます!!」

「止めろっ！ 無駄死にだ！ 私に構うな!!」

「スルシャーナ様！ 我らは信徒です！ どうか御慈悲を！」

「神?! 我らの神なのですか!!」

「何をやっている?! 我らの神は殺されたのだ！ こやつはアンデツドモンスターに過ぎん！ 早く天使で壁を作れ！ 最高位天使を召喚する!!」

四つん這いで逃げ出す者、泡を吐いて騒ぐ者、死を覚悟して剣を抜く者、そして生き延びようと水晶の塊を取り出す者。

それらは皆が皆、必死に己の意思を貫こうと足掻く——か弱き勇者たち。

魔王たるモモンガはなんとなく「元気だなあ、でもうるさいなあ」と縁側で日向ぼっこでもしている御爺さんの心境でほっこりとしていた。

「あ、人間は脆いから潰すなよ。アウラも魔獣たちに手加減するよう指示しておけ。マールも植物で拘束するのはいいが、何体かバラバラになっているぞ。もつと緩く緩く。それとシャルティア、血を出さないように工夫するのは素晴らしいのだが、首がブラブラしているぞ。確実に死んでいるだろそれ。あとパンドラ、他の守護者に仕事を分け与えようとするのは構わん。だが、いきなりだとビックリするだろ? 今度から何かやる前には教えてくれ」

「はっ、流石はモモンガ様！ 何もかもお見通しとはっ！」

ナザリックの絶対支配者の前で仕事らしい仕事ができるのは、デミウルゴスを含む数名でしかない。他の物たちには割り当てられた業務こそあるものの、『御方の前で』となると機会に恵まれてはいなかったのだ。

だからパンドラは人間どもを『呪言の支配』から解放し、逃走者の確保という仕事を強引に用意したのである。もちろん、今の内に別世界の人間——特に戦闘職——がどのような存在なのかを知っておいてほしい、との目論見もあるのだが……。報告書に書かれた文字や数

字だけでもある程度は得られようが、やはり実際に触れてみないと判らないことも多いのだ。

ちなみにこの行為は、アルベドからすると「余計なことを」であり、デミウルゴスからすると「悪くない配慮ですね」となるらしい。

「まあよい。それより面白いモノが転がり出てきたな。シャルティア、お前が背骨をへし折ってしまったその男、確かスレイン法国の特殊部隊を率いていた隊長だったか？ 掴んでいる水晶を持ってこい」
「はい、かしこまりんしたモモンガ様！」

御方から何かを命じられるというのは、下腹部によからぬ刺激を受けるほどの快感なのかもしれない。シャルティアは泡を吹いている男の手から水晶をもぎ取ると、寝所へ呼ばれたかのごとき勢いで魔王の前へと駆けこんでいた。

「ほう、“魔封じの水晶”か。まさか、この地で作られた魔法のアイテムが偶々ユグドラシルの物と似ていた——なんてくだらない冗談じゃなからうな」

魔王は笑う、好敵手の存在を感じて。

「プレイヤーが持ち込んだか。ふふふ、嬉しいものだな。異界の地には弱者ばかりではなく、本物の勇者も居るようだ。ならばナザリツクの力を存分に揮うことができよう。『システム・アリアドネ』によって拠点内に縛られていたユグドラシル時代とは違う、攻撃型ナザリツクの真価を見せて——」

興奮気味の魔王に引きずられて「おおおお」と感激の声を上げていた僕らしもべであったが、ふと言葉を切ったモモンガが手元の水晶を睨み付けたことで緊張に包まれてしまう。

「モモンガ様、シャルティアが何か粗相でも？」

「アルベド！ おんしは黙りんしゃい！ モモンガ様、何か問題があるりんしたならおっしゃってくんましな」

「いや、この水晶には探知魔法が掛かっていたようだな。使用したり所有者が代わったりすると合図が送られるらしい」

モモンガは「よく有ることだ」と気にもせず「では次に何が起ころう？」などと、守護者を前にして授業でも始めるかのように問題を出し

ていた。

「モモンガ様に持つて頂いたことを感謝するでありんす！」

「シャルティアさま、今はまだ所有者が代わったことぐらいしか判らないんじゃない？」

「そ、そうだね。どこかで警報が鳴ったぐらいだと思う……よ？」

「部隊ヲ整工、奪還ニ来ルノデハ？」

「コキュートスの言うように奪還の用意は整えるだろうけど、まずは情報収集だろうね」

「そうね、魔法による探知を行つて事態の把握に努めるはずだわ」

「となるとお、もうそろそろモモンガ様へ向けて探知魔法が発動されるのですね！ なんともしゃされざる行為ですっ！ ここは一つ、カウンターマジックを用意いたしましょう！」

ぐねぐねと変身しはじめたパンドラと、正解を言い当てたであろう守護者たちを片手で制し、モモンガは「何も問題は無い」とばかりに口を開く。

「お前たちの予想通り、アイテムの新たな所有者を特定するため、スレイン法国とやらは魔法によつてこの場を覗き見しようとするだろう。だが残念」

魔王は軽く笑つて、第十階層に安置されている自慢の一品を披露する。

「世界級アイテム」諸王の玉座！ この秘宝により、ナザリックの地表に居る我々への干渉は不可能。しかも込めてあるカウンターマジックは破格も破格！」

“ 諸王の玉座 ” はぶつ壊れアイテムの名に相応しく、設置された拠点への干渉を完璧に妨害する。しかも発動したカウンターマジックは回避不能。世界級アイテムでも所持していればターゲットイングされないだろうが、そんな確率はゼロに等しい。

ユグドラシルでも地下墳墓を入手した直後、多くの探知特化プレイヤーがちよつかいを掛けてきたのだが、それらを粉々にしたのがナザリックの誇る最強魔法詠唱者、ワールド・デイザスターの “ウルベルト” が切り札。

そう、普通は不可能なのだが” 諸王の玉座” にはどんな魔法でも継続カウンターマジックとして込めることが可能であると説明され、ウルベルトが悪乗りしたのだ。

その魔法の名は グランドカタストロフ へ大 災 厄。

幾人もの探知特化プレイヤーを木端微塵にし、違法改造だと多くの苦情を発生させた超位魔法をも凌駕するMP大喰らいの一撃。

そんな大花火を久しぶりに見ることができのだから、モモンガとしても興奮しない訳がない。たとえばアンデッドであろうとも。

第5話 「出陣魔王」

「『ウルベルト』の〈大災厄〉だぞ！ ははは、デミウルゴス、お前も見たいだろ？ うんうん、そうだろう。パンドラ！ ぬーぼーに变身して〈探知対策〉を含む各種対抗魔法を。次いで、感覚器官を増設した〈千里眼〉だ。〈水晶の画面〉は複数用意しろ。この場にいる者たちに天地が割れるさまを見せてやれ！」

「はっ、直ちに行いますー！」

モモンガの配慮にはデミウルゴスを始め、誰もが涙するだろう。至高の御方の秘儀をこの眼で見られるというのだ。

切っ掛けが人間どもの探知魔法だというのはいただけだが、それはこの際気にしないでおこう。

「さあ、早く探知魔法を飛ばしてくるがいい」

探知魔法が放たれれば、ぬーぼーに变身したパンドラが察知して逆探知し、その場を覗き見て特定、発見した敵地を画面へと映し出すことになる。と同時にカウンターマジックが発動され、現地は吹っ飛ばすわけだが……。

モモンガが今か今かと楽しそうにしている最中、パンドラは何故か緊張気味であった。

それは、カウンターマジックの発動より現地特定が遅れたならどうしようかと、肝心の大魔法炸裂の瞬間を見逃したらどうしようかと、そう考えていたからだ。

“ぬーぼー”の能力ならば八割でも大丈夫であろうが、絶対の主が期待すればするほどその責務は重くなる。

「――モモンガ様ー！」

「きたか?!」

ナザリック上空の空間が歪み、直後に見えない力が何かを弾く。パンドラは主に声を掛けると、宙に浮かぶ五つの〈水晶の画面〉へ発信源の映像を浮かび上がらせていた。

「うん？ 裸の女……と神官たちか？ スレイン法国の神殿内？」

ああ、〈次元の目〉を使ったのか。しかし、どいつもプレイヤーには見

えんな」

クリスタル・モニター

〈水晶の画面〉に映ったのは、神殿と思しき薄暗い建物内——感覚器官を魔法で増設しているので屋内でも見ることが可能——で儀式魔法でも行っているかのような怪しい集団であった。

全裸に近い無表情の少女を中心に、神官服の男たちが魔法陣を囲んであたふたしている。

声が聞こえたならば「失敗したのか?」「どうしてなにも見えんのだ?」「いや、第八位階魔法が妨害されるなど有り得ん!」との狼狽ぶりが窺えたのであろうが、魔王にとってゴミどもの様子などどうでもイイことだ。

重要なのは、カウンターマジックの威力を確認し、楽しむこと。

人間どもが血の詰まった臓物ごと粉々に消し飛ぶ、そんな有様を眺めることだ。

「そろそろだな。パンドラ、映像を上空からにしろ。近過ぎると魔法の干渉で弾かれるぞ」

「はっ、畏まりましたっ!」

瞬時に切り替わる空からの映像。

見下ろす先には六つの大きな神殿と、その中央に座するさらに巨大な王城にも似た神殿。周囲には多くの家屋が建ち並び、一見しただけで凄まじい数の人間が集まっているのだと判る。

これが国家というやつなのだろうか? 今の今まで、モモンガには縁のない領域ではあったが、今後人間種を滅ぼすにあたり、国というものについて色々と学ぶ必要もあるのかもしれない。

でもまあ、今回は無理であろう。

見れば、円状に配置されている六神殿の一つが、なにやらおかしい。火にくべた煉瓦のように、叩いて伸ばす前の真っ赤な鉄であるかのように、白だったはずの外壁が溶岩のような色合いになり、内側から押されでもしているのか、少し膨張を始めていたのだ。

「たあああ——まやああ——!!」

本人もその意味を知らない不可思議な喝采——を送る大魔王の見つめる先で、神殿とその周辺は破裂した。

青白さが混じる紅蓮の炎と地面を大きく抉る衝撃。と同時に渦を巻く闇の波動。天高く舞う粉塵は真っ黒なきのこ雲と共に万人の視界を遮る。

人は蒸発していく己の眼球を見ることもできず、黒炭と成り果てた肉体を自覚することも叶わず、魂すらすり潰されて虚空に散る。神殿は爆心地となったモノ以外に、二つほど巻き込まれたようだ。外壁はもちろん、中身も粉々に粉碎された上、超高温で念入りにシエイクされて撒き散らされる。

神殿で働いていた者たち——巫女姫・聖典を含む神官・兵士たち——は、一棟でも数千人は居たことであろう。三棟合わせれば一万人か。巻き込まれた住宅都市部の住民たちと爆風の被害を浴びた者たち、そして三分の一ほど抉られた中央大神殿の被害をも加えると、十万人もの人間が消失炭に……黒い塵に変えられたことになる。

空間のひずみが戻り、吐き気がするほどの濃密な魔力が霧散した後に残ったのは、直径数キロにも及ぶ火口にも似たクレーターと、抉られた不毛の地を覆う大量の——原材料を問いただしたくない黒い粉のような『何か』だけ。

悲鳴は聞こえない。

血の匂いがするのは、爆発の余波で吹き飛んだ周辺都市部のゴミのせいだろう。

一部を抉られながらも辛うじて残った中央大神殿からは、呆けたような高位神官と兵士たちがゾロゾロと溢れ出てくる。

皆が皆、お互いの顔を見合わせては首を振る。言葉を交わさなくとも、相手が何を言いたいのか、どんな答えを待っているのか、全て解つてしまうのだろう。

一変した光景を前にして、誰も彼もが膝を崩し落とす。

込み上げてくるモノが恐怖なのか絶望なのか。それとも狂気なのか。

笑い声が聴こえる。誰かが近くで笑っている。何がおかしくて笑っているのだろうか？ 今はそんなときじゃないだろうに——と辺りを見回そうとして気が付いた。

そう、笑っているのは自分だった。

泣きながら笑っていたのだ。

悪魔が造り上げる地獄を想像し、「そんな悲惨な目に法国民を遭わせるものか」と日々修行に邁進してみても、本当の地獄は瞬時に現れ、悲鳴も残さず、黒い塵だけを積み上げていった。

何もできず、何も解らず、視界いっぱい広がる巨大な黒い穴を見つめる。

もう笑うしかないだろう。

「ふははははは！ 凄まじいな！ 流石はナザリック最強の——つち、抑制されたか」

アンデッドの特性だから仕方がない、とはいえ久しぶりのグランドカタストロフ〈大災厄〉観賞なのだ。もっと喜びを味わいたかったところである。

「ユグドラシルではもっと感情豊かに居られたはずだが……」と魔王は一人、愚痴を吐いていた。

「どうだ？ デミウルゴス。別世界とはいえ、恐らくこの世で最強の一撃だぞ。素晴らしいだろう？」

「はい！ まことにつ、まことに素晴らしいき御業でございます！ 噂でしか聞いたことのない、ウルベルト様のグランドカタストロフ〈大災厄〉をこの眼で見られるとはっ。モモンガ様にはなんと感謝申し上げますよいのか……」

後で録画した映像をパンドラから受け取るであろうデミウルゴスは、この世で最も幸せであると言わんばかりに涙を流して平伏する。己の造物主が切り札として所持していた、最大にして最高の魔法。それを目撃できるのは夢にも思っていなかったからだ。

ナザリック最強の魔法詠唱者ウルベルト・アレイン・オードルは既に大墳墓を去り、姿を見せなくなって久しい。だからこそ、今回の観賞会は信じられない奇跡の積み重ねであると言える。いや、全てはモモンガ様の計らいか？ 神などの奇跡ではなく、神をも超える大魔王様の恩情なのであろう。

まさに至高の御方々の頂点、ナザリックの絶対支配者、骸骨大魔王モモンガ様である。

「さて、これだけの騒ぎだ。プレイヤーも顔を出して——」

「モモンガ様、ご覧ください！」

微かに緊張を帯びたパンドラの言葉に、モモンガは〈水晶の画面〉を注視する。

画面には黒い粉が降り積もるクレーターの外縁付近、無事な石畳と消し炭となった地山の境目が映し出されていたのだが……。その場にはもう一つ、身体の半分近くを失い、残りの箇所も焼き炙られたかのような細身の人間が蹲っていたのだ。

ただ、よく見ると身体の治癒が始まっており、水薬ポーションか回復魔法を行使した後であることが窺える。

「ほほう、運の良い人間だな。掠っただけとはいえ、〈大災厄〉から生還を果たすとは……。茶釜ぐらいしか出来ない貴重な経験であるう。冥途の土産としては十分だな」

掠っただけで半身を抉られた惨状を運が良いと言ってイイのかどうか、それは分からないが、最低限の治癒を終えたその老婆は、竜の意匠が施された女性用の異国風ドレス——両サイドのスリットから醜い太ももが露わになっている——を、「本当に身に付けているのか？ まだそこにあるのか？」と言わんばかりに撫で触ると、息も絶え絶えに石畳へ倒れ込んでいた。

「ん？ この老婆の服装……。どこかで」

「モ、モ、モモンガさまああ!! この者の装備、まさかの世界級アイテムでございます！」

パンドラからの警鐘に、守護者全員が緊張と警戒で身を包む。

先程の『魔封じの水晶』とは格の違う、ナザリック最高にして守護者の命より価値のある至高の品。ナザリックを護る『諸王の玉座』と同格であり、ユグドラシルの上位ギルドですら三つしか所持していないぶっ壊れチート。世界の名を冠するなんでも有りの、敵側に使われると最悪としか言いようのない糞運営の落とし子。それが世界級アイテムだ。

「ふふ、そうかそうか。世界級アイテム所持ギルドだったか。中々手強そうで気が引き締まるな——と言いたいところだが、それならなぜ探知者に持たせなかつたんだ？ しかも死にかけるという無様な展開。いやしかし、世界級アイテム所有者が、直撃ならまだしも掠った程度で死にかけるか？ そんな弱いプレイヤーに持たせるはずは……」

レアアイテム発見という軽い興奮から覚めたモモンガは、改めて〈水晶の画面〉を覗き見る。

ハッキリ言つて醜い老婆のチャイナドレス姿をしげしげと見つめたくはないのだが、確かに着ている装備品は世界級アイテムだ。

記憶を辿れば、確か「傾城傾国」という名の洗脳特化型であり、女性専用装備。防御力もドレスタイプにしてはそれなりにあつたと思う。

「ふくむ、まあよいか。面白くなつてきたことに変わりはない。世界級アイテム持ちのギルドと異世界で戦争だからな。こちらが十一个所持しているとはいえ、油断ならん相手だ」

「モモンガ様、老婆が救援部隊と合流いたしました。合流した五人の内、四人はレベル30前後であります。槍を持った男は70台です。なお、老婆は20前後かと」

「ぬーぼー」の能力をフル活用し、遙か遠くの地で未曾有の混乱に巻き込まれている哀れな者たちの探査を行うパンドラス・アクター。自身の能力を御方に行使して頂き、幸せの絶頂であるかのよう。

だが、他の守護者からすれば羨ましいことこの上ない。

統括も「真なる無」を握り締め、モモンガの隣を占拠する。

「モモンガ様、敵の戦力は脆弱であるかと。世界級アイテムを奪取するのであれば今が好機ではないでしょうか？ 私なら世界の加護を得ておりますので、世界級アイテムの効果は無効にできます。どうか「妻」のアルベドに御命じください」

「誰が妻でありんすかあ!!」と突っ込みが入ったのはまあ横に置いて、モモンガは思考する。

確かに敵は弱い。

世界級アイテムを扱うギルドにしてはプレイヤーのレベルが低すぎる。

「罨か？」とも思わないではないが、カウンターマジックをまともに喰らっていることからすると、本当に弱いのもかもしれない。

ただ、隠し玉は警戒すべきだろう。

ナザリックの「ルベド」や「あれら」のように、一発逆転の切り札はあってしかるべきだ。中央の巨大神殿に高レベルプレイヤーが待機している可能性もある。

「世界級アイテムは奪取する。これは確定事項だ。だがその前に、パンドラ。他に問題になりそうな不確定要素はないか探查しろ。特に中央の神殿は王宮のようなものだろうし、何かあるはずだ」

「はっ、お任せください！」

パンドラが変身している「ぬーぼー」は探知特化型カンストプレイヤーだ。たとえ能力の八割しか使用できなくとも、その眼から逃れることなど不可能に近い。それこそ神器級フル装備の「式式」か「フラット」、「パナツプ」か「チグリズ」でなくては無理だろう。

もつともパンドラが「ぬーぼー」の神器級を纏っていたなら、課金アイテムを使用するしかないのだが。

「これはこれは……、モモンガ様。中央神殿には探知不能の領域があるようです。加えてレベル20台後半から30台前半の人間種が七人。60台と90台が一人ずつ。装備品は最高で神器級の反応があります。どうやら当たりかと」

「ふふふ、無条件で探知不能になる領域と言えばたった一つ、宝物殿だな。ちょうど良い、中身は戦利品として全部貰っていくとしよう。神器級装備も根こそぎいただきだ。つと言いたいところだが、60台と90台が一人ずつだと？ うむむ、面白い戦いにはなりそうにないなあ」

「まあ、それよりまずは世界級アイテムの奪取だな」とモモンガは中央神殿から目を離し、破滅の大穴近くで治療を受けている老婆へと視線を移す。

「ではいくぞー！ ギルド攻略戦の始まりだ!!」

魔王の激に伴い、世界滅亡級の僕たちしもが本物の殺意を持って動き出す。

ただこの時のモモンガは、周囲の物々しい空気とは異なり少しばかりワクワクしていた。なにせ、拠点防衛用NPCを使つてのギルド侵攻など初めての経験なのだから。

今まではギルドメンバーが主であり、NPCにしてもあまり役に立たない傭兵を使うのみであった。それが今回は、ギルドメンバーが心血を注いで創りあげた傑作とも言えるNPCを使えるのだ。

“鈴木悟”がこの場に居れば「ああ、楽しみだ」と呟いたことだろう。肝心の相手に歯応えが無さそうなのは、この際仕方がない。

（ふふ、防衛戦でしか使えなかつたNPCによる侵攻。悟でなくとも見てみたいと騒ぐだろうなあ。本当に……楽しみだ）

アルベドを除く守護者各位に必要なアイテムを配布し終わると、魔王は片手を上げて闇の扉を開く。それがスレイン法国にとって地獄の扉になるだろう、と確信しながら。



爆発、というよりは天災であった。

天から星が落ちてきたのか？ それとも地の底から溶けた岩が噴き出してきたのか？

突然巻き起こった神のイタズラ、それはスレイン法国の首都を大きく削り都市機能を完全に麻痺させる、絶体絶命にして最悪の大災害であった。

「カイレ様！ 御無事で?!」

「無事な訳なからうが！ 常備していた水薬ポーションが無ければ危うかつたわ！ にしても遅い！ 漆黒聖典の足は小鬼ゴブリン並みか?!」

体重をかけている石畳を己の血で染めていた老婆は、垣間見た死への恐怖に激怒しているようだ。駆けつけた味方の内の一人、槍を持つ青年へ容赦のない罵声を飛ばしている。

「苦言は後ほど伺います！ まずは治療をつ！ それで何があつたの

です!？」

「分からね。風の神殿で第八位階の発動儀式を進めていると聞いて、拝見させてもらおうと足を向けたところだったのじゃが……。世界が終わったのかと思っただわい」

老婆の治療を仲間へ指示し、青年は現状把握に努めようとする。しかし予想していた通り、何が起こったのかは不明であった。

それもそうだろう。複数の神殿が崩壊消滅し、中央神殿にまで大きな被害が出るほどの大爆発だ。クレーターの奥底に積もっている、または塵となって舞い散った被害者は何万人に及ぶのか。住宅都市部の中心で起こらなかっただけマシなのだろうが、巻き込まれた高位神官や聖典たちのことを考えると、国としての被害は甚大であろう。

“占星千里”が不吉な予言を授かった、として中央神殿に呼び集められていた漆黒聖典——その者たちが皆無事であったのは、不幸中の幸いである。

「カイレ様、歩けるようになりましたら中央神殿へ参りましょう。現在、スレイン法国は異常事態宣言を発令しております。この事態が外敵の攻撃であった場合、神の秘宝“ケイ・セケ・コウク”は切り札として使用することになるかと」

「ふん、こんな国の首都を丸ごと壊滅させるような真似は“真の竜王”^{ドラゴンロード}にだって無理だろうさ。生物の次元を超え……」

「隊長!」

老婆が口を閉ざし、レイピアを引き抜いた隊員が恐怖混じりの警告を発する。それらの行動には、隊長としても納得せざるを得ない。

黒き死の灰が積み重なる非現実的な平原、粉塵と死者の怨念が舞うひらけた空間に、その闇は姿を現したのだ。

濃く深く、底が見えない宙に浮かぶ闇。人食い大鬼や妖巨人^{ガトロール}でさえも飲み込めそうな、その巨大な闇のカーテンは、中から恐るべきモノを吐き出す。

そう、恐るべきモノとしか言えないのだ。

それは死であり、魔王であり、神であり、スレイン法国の漆黒聖典なれば崇め奉るべき信仰の対象。だが、それ故に別モノだとも感じて

しまう。

あれは違う。

あれは救いではない。

あれは絶対的な「破滅」であると。

「ス、スルシャーナ様と同族？ 同格の存在?! ぷれいやー様？」

「おおお、なんと……。後ろの方々は従属神じやというのか？」

見れば、次々と恐怖の対象が現れる。

漆黒の全身鎧フルプレートに身を包んだ細身の戦士。小柄な闇妖精の兄妹。ライトブルーに輝く巨大な蟲の化け物。南方の装束を着込んだ、眼鏡と甲殻尻尾を備える男性。白い槍を持ち赤い鎧を着込んだ美しい少女。話にならない、と隊長はみすぼらしい槍を握りながら格の違いを思い知る。

最初に現れた絢爛豪華なローブを着込む——スルシャーナ様そつくりの——骸骨だけでも膝を地に付けて慈悲を請いたくなるのに、後方に控える六体、それに眼鏡の男が率いる悪魔のような化け物集団に取り囲まれてしまえば抵抗する気も起きない。

まあ抵抗と言っても、カイレ様の持つ秘宝以外では遊び相手にもならないだろうが。

「皆、さがれ！ カイレ様を中心に円陣を組め！」隊長は死ぬかもしれない、と独りごち「ぷれいやー様とお見受けいたします！ どうか対話の機会を設けて頂けないでしょうか?!」と必死の一步を踏み出していた。

「愚か、人間風情が対話などと。お前たちに許されるのは醜く潰れて死ぬことだけよ」

「そうでありんす。まあその短いスカートゴレムの女は、わらわがお持ち帰りしてもイイでありんすけど」

「あんな「動像使い」ゴレム 持って帰ってどうすんのよ。弱過ぎるでしょ？」

「お、お姉ちゃん。あの槍を持っている人なら役に立つかな？」

「訓練相手トシテハ不足ダナ。私ナラ一太刀デ終ワリダ」

「やれやれ、一撃で殺すくらいなら私の実験に利用させてもらいたい

ものだね」

隊長の頭上を飛び交う好き勝手な物言い。その中には、全くと言っていいほど人類救済の糸口は無かった。

既に首都機能が壊れるほどの攻撃を受け——この者たちの所業とは確定していないが、ほぼ間違いないだろう——スレイン法国は滅亡寸前だ。このままではスレイン法国に住まう全ての者が、明日の朝日を見ることなく地の底へと追いやられてしまう。もしくはアンデツドとして濁った瞳で朝日を拝むことになるのかもしれない。

決断するなら今だ。

主たる「ふれいやー」を洗脳してしまえば、従属神は抵抗の術を持たない。

目の前で堂々と支配者たる威厳を見せつけている骸骨の魔王。絶対的な力を持つが故に、隠れ潜むことを選択できないのだろう。だからこそチャンスなのだ。

漆黒聖典の隊長は、諦めかけている隊員たち——そして周囲の異形種どもを一瞥すると、背後の老婆へ『世界を救え』とばかりに命令を発する。

「使えー！」

「っ——発動！」

何を使うのか？ 誰へ使うのか？ そんなことを聞くまでもなく、老婆は「やむなし」と身に纏う衣装を発光させ、輝く一匹の竜を飛翔させた。

光で構成されているかの如き竜は、その膨大な光量と共に天を駆け、まさに光の速度で骸骨の魔王——ふれいやーへ襲いかかる。

回避不可。

絶対命中。

耐性無視。

ありとあらゆる障壁を打ち壊し、どんな生物であろうと無生物であろうとも洗脳し、支配する。無論、相手がふれいやーであろうが^{ドラゴンロード}竜王であろうが問題は無い。『無効化される場合もある』との口伝もあるが、スレイン法国の歴史の中でそんな事象は一度たりとてな

かった。

だから隊長も老婆も、骸骨魔王が光り輝く竜に飲まれたその瞬間、「たすかった」と呟いてしまったのだ。

「カイレ様！」

「ぬははは！ 支配の繋がりを感ずるぞ。成功じゃ！」

絶対的と言われていても、ふれいやーへの使用なんて初めてなのだから緊張もする。加えてそれが成功となると、歴史の壺ページに己の名を刻んだと同義だ。高笑いの一つも出よう。

第6話 「山羊魔王」

「さて、従属神の方々を」カイレが知る従属神は「ぷれいやー」に絶対服従。それ故にスレイン法国へ害を成さないよう命じるのは容易いはずであつたが、「おおう？」と老婆の口からは混乱を示すししか思えない声が漏れ出ていた。

「カイレ様、これは?!」隊長の目に映るは、ユラユラと揺れて姿が薄くなる従属神と周囲の悪魔たち。そして姿がボヤけたと思つた直後、波打つ剣を備え、大きな盾を構える黒くて巨体のアンデッドとなつていた「ぷれいやー」様。

隊長としては「『神聖呪歌』何が起こつた!？」と仲間の一人に問いかけたとしても仕方のないことであろう。

「わ、わかりませ……。あ、ああ、もしかして、すべて！　すべてが大掛かりな幻術だつたのでは?!」

妙齢の女性が頭を抱えながら周囲を見渡しても、取り囲んでいた悪魔の姿はない。押し潰されるかと思うような重圧も消えていた。残っているのは崩壊した大地と砂塵、そして一体の死を纏う騎士のようなアンデッドだけ。

「あ、あれはまさか?!」死デス・ナイトの騎士じゃと？　となると「ケイ・セケ・コウク」の効果は——ぬう、ぷれいやーの骸骨にかけたはずが、支配の繋がりはあやつから感じられるわ！　くっ、これは……身代わりか？　いったいなにがどうなつておるんじゃ?!」

『ふははは、それでは答え合せといこうか』

頭に響いたのか、その場に轟いたのか？　聞いたことのない声の何者かの宣告に、隊長は槍を構え、老婆は支配したばかりの死デス・ナイトの騎士を己の護りにつかせる。

『幻術——は正解だ。殺気すら感じる「たりすまん」の強力無比な魔法は、もはや芸術と言えるだろう。どうだ？　世界ワールドの加護でも五感情報までは遮断できまい。直接意識へ干渉するのではなく、対象物を視認させ気配を感じさせることで「そこにある」と誤認させる、ユグドラシルでも用いられる小技の一つだ。抵抗レジストの判定が発生しないから、

認識力と知恵で見破るしかないぞ』

先程の恐怖を再現するかのように「ふふふ、PVPは相手にどれだけ間違った情報を与えられるかが勝負どころなのだよ」と語りながら、骸骨魔王が闇の扉から現れる。

その光景はまるで既視感^{デジャヴ}。

後方に付き従う従属神も、取り囲んでくる悪魔たちも、一度体験した先程の絶望そのままであったのだ。

「身代わり——も正解だ。死の騎士^{デス・ナイト}に“傾城傾国”の支配を受けてもらった。まあ私が受けてもよかったのだが、その場合はただ単に無効化されるだけで面白味はない。やはり『切り札が効果を発揮し勝利を確信した』その瞬間こそが、魔王の登場シーンとして相応しいだろう。あとはそうだな、『連発できない世界級アイテム対策』なんてのもあったな」

何を言っているのか、と理解を拒みたくなる。『身代わり』に『無効化』、『面白味』に『登場シーン』。生物としての本能が、翻訳される言語を拒絶しそうだ。加えて『わーるどあいてむ』とは神の秘宝を指し示しているのだろうか、『連発できない』には老婆としても唇を噛みしめてしまう。

確かに、一度発動させるだけでも多くの生命力を必要とする神器だ。連発なんて出来るわけがない。支配だって一度に一体が限界だ。

つまり、今はもうスレイン^{ワールド}法国の切り札にして神が遺した超絶アイテム^{デス・ナイト}「ケイ・セケ・コウク」は使えない。目の前の死の騎士^{デス・ナイト}を支配し続けるだけだ。

「お、御待ちください、ふれいやー様！ 我らは——」

「さて、アウラは世界級^{ワールド}アイテムと老婆を確保。マールは雑魚どもを無力化して捕縛し、ナザリックに残ったパンドラへ引き渡せ。デミウルゴスは死の騎士^{デス・ナイト}を処理した後、僕^{しもべ}を率いて周囲へ展開。予想外の事態へ備えよ。コキュートスは槍の男を殺せ。全力にどの程度抗うのか試してみる。アルベドとシャルティアは待機だ」

「はっ！！」

老婆の懇願を遮った魔王は、配下へ指示を飛ばし、その最後にパチ

ンつと骨の指を鳴らした。

スレイン法国の者らは誰もが息を呑んだだろう。自分たちの命はここで終わる、と悟ったからだ。

隊長は槍を握りしめ、巨大な碧い蟲と相対す。迫りくる一步一步が己の寿命を削るかのようだ。瞳に映る四つの武器などは斬首刀にか見えない。

ありえないだろっ！ と叫びたくなる。

なぜモンスターが、六大神の秘法に勝るとも劣らない武装を備えているのか？ しかも一つや二つではない。ほぼ全てが神の領域だ。

(あの方でも……、 “絶死絶命” でもどうにもならない！)

今までは、自分の後ろに絶対的な強者が控えていたから絶望とは無縁だった。どう転がっても最後はなんとかなるだろうと。

それがもはや夢幻、希望など何処にも無い。

「デハ、ユクゾ」

「くっ」

開始の合図を貰えるという恩情に感謝の念を覚えることもできず、隊長は己の槍を見つめ『切り札』を使用すべきか思い悩む。

(駄目だ！ 今『入れ替え』で使用しても、蟲のモンスターを道連れにすることしかできない。必要なのは “ふれいやー” に脅しをかけて交渉の場に引き込むことだ。その為に！ “絶死絶命” “ミマモリ” 様、後は頼みましたよ！)

覚悟を決めて周囲の状況を把握してみれば、無事な者など一人も残っていないかった。

カイレ様は麻痺ガスでも吸わされたかのように、闇妖精ダークエルフの足下でひれ伏したままピクピクしており、その身に “ケイ・セケ・コウク” はない。

漆黒聖典の隊員たちも鳶のような植物に身をからめ捕られており、幾人かは両膝を叩き潰されていた。

ふと “時間乱流” の生まれながらの異能トと神の武具が組み合わせさせて生み出される奇跡の最終奥義、タイムストップ “時間停止” が発動した——と察するが、 “ふれいやー” と “従属神” は何事もなく停止している時間

の中を動き続け、子供の遊戯を鑑賞するかのごとくだ。

もつとも、己ごときでも時間対策の宝具を持つているのだから、神たるふれいやー様に通じなくとも驚くようなことではないのだろう。もはやこれまで。

「こちらの準備が整うまでお待ちいただき恐縮です。ではっ！」

「ヨキ覚悟ダ」

余計な考えに気を回している漆黒聖典隊長へ斬りかかり、そして斬り捨てるなどコキユートスには兇戯でしかないが、モモンガ様が望んだのは全力の斬撃に対し「どの程度抗えるのか？」というものであった。

故にコキユートスは相手の準備が整うまで待ったのだ。最高の一撃を準備して。

「不動明王撃——三毒ヲ斬り払工！ 倶利伽羅剣!!」

「不落要塞っ!!」

頭上から迫りくる「ソレ」は、斬撃などと呼べる代物ではなかった。あまりに大きく、鋭く、身を切り裂くほどの殺意に溢れた「死の塊」だったのだ。隊長が出来たことと言えば、みすばらしい槍——通称「入れ替えの槍」——を掲げ、無意味とも思える「武技」ぶぎを発動させることだけ。

斬り抜けた刃が地面を砕く前に寸止めされ、分割された肉塊がドチャリと水音混じりの落下音を響かせる。

「不合格だな」大魔王の退屈そうな呟きが、評価の全てであろう。

コキユートスの「倶利伽羅剣」は、受け止めたり受け流したりしてはいけない。発動された場合の正解は避けること。茶釜やアルベドなどのガチャタンクで、高リスクのカウンターを狙う場合は例外だが、基本としては遅い発動時間を踏まえて回避すべきなのだ。

まあ、隊長にしてみれば「どこが遅いのだ?!」と文句の一つも言いたくなるころだろうが……。槍ごと真つ二つにされてしまった今となつては、言葉を発することもできない。

「コキユートス、感想を聴こうか？」

「ハッ、モモンガ様。コノ者ハ弱者ナレド、カノ差ヲ理解シテイナガラ

一步モ引キマセンデシタ。見事ナ覚悟カト」

プシユーと冷気を吐き出しながら、コキユートスは久しぶりの敵対者を褒める。出来ることなら命を削り合うギリギリの攻防を行いたかったのだろうが、それでも真正面から立ち向かった槍の男に対し、武人として称賛せずにはいられないようだ。

もしかすると『氣に入った』のかもしれない。

「そうか、ならば死体は保管しておけ。先に渡した王国戦士長と共に、

「武技」の研究に役立つてもらおう」

「ハッ、モモンガ様ノ御心ノママニ」

コキユートスとの会話を終えて辺りを見回してみれば、全てが終わっていた。

漆黒聖典隊員たちは転移門の中へ押しやられ、目の前には民族衣装のような服を両手で大事に持っているアウラ、そして一仕事済ませた疲労感など微塵も感じさせないマールレが待機している。

両脇では、ギリギリまで身体を寄せてくる——ちよつと邪魔な——アルベトとシャルティアが笑顔でこちらを見ていた。

デミウルゴスは周囲への警戒網を構築しているようだ。数百体の悪魔とハンゾウたちを用いて、外から余計な邪魔が入らないようスレイン法国神都を外界と隔離させている。いや、もしかすると神都の住人を逃がさないようにしているのかもしれない。

（世界級アイテム確保……か。うむ、こんな簡単に奪取していいのだろうか？ 悟のヤツが聞いたら「偽物では？」と疑うだろうなあ）
死が降り積もる厄災の地で「傾城傾国」をアウラから受け取り、アイテムボックスの貴重品枠に収めるモモンガは、事前に魔法による探査を行いつつも「後でパンドラに最終確認させよう」と心の予定表にメモるのであった。

「さて……」ジャリつと奇跡的に無事な石畳の上を数歩進み、モモンガは多大な被害を受けている中央神殿へ視線を向ける。

そこには多くの人間の——恐怖に歪んだ瞳が並んでいた。

装備からするとスレイン法国の兵士、及び神官たちなのであろう。国の一大事に集結し、一致団結して国難に当ろうとしていたのだ。

それが今や、まともに立てぬほどの恐怖で足を揺らす、生まれたての仔山羊同然。誰一人として神殿から飛び出し、モモンガたちへ襲いかかろうともしない。

「向こうからは来ないつもりか？　だが、こちらから出向くというのも妙な話だ。魔王は出迎えるものだろうに……」

「モモンガ様が足を運ばれる必要などございませぬわ。この地へ御光臨して頂いたことだけでも、ゴミどもには過ぎた褒美かと」

「わらわに御命じ頂ければ、隠れ潜んだゴミなど即座に」

グイグイとアピールが激しい二人に挟まれ、モモンガはしばし思考する。

パンドラの探知によると、中央神殿にはレベル90台が一人いるらしく、詳細不明の宝物殿も存在することのこと。

つまりはギルドの中心部であり、強力な罠があることを意味している。

ナザリツクも『玉座の間』手前には、勇者パーティーを二つ同時に瞬殺できるほどのトラップとモンスターを用意しているのだ。

それを考えれば、無闇に突っ込むわけにもいかない。

「ならば、丁度いい」モモンガはスレイン法国の外縁に広がる住宅都市部を見て「プレイヤーを誘き出しつつ、突撃要員を用意するとしよう」と不敵な笑みを浮かべる。

モモンガが視線を向けた先は、スレイン法国の一般市民が住まう東部住宅都市。他にも西部、北部、南部とあるが、一箇所だけで百万人以上が生活している巨大都市である。

六大神が人間の保護を続けて六百年、猛獣・魔獣・野盗などの被害をまったく受けない安全な生活場は、人類史上まれにみる人口増加を助長したのであるだろうか？　いや、それだけ多くの人々が亜人たちから逃げてきた、ということなのかもしれない。

スレイン法国の南部には、人間を奴隷、もしくは餌と認識する亜人国家も多いのだから。

とはいえ、その辺りの事情など魔王には無関係だ。もちろん、たとえ関係があつたとしても大魔王様は気にしない。

「守護者たちよ、今より超位魔法を詠唱する。アイテムによる即時発動を行わず、超位の魔方陣を目立つように展開させるつもりだ。お前は発動阻止に出てくるであろうプレイヤーを警戒し、可能であれば迎撃せよ」

「はっ、お任せください！」
「では、この世界に来て初めての超位魔法だ。じっくり確認させてもらおうとしよう」

少し前までスレイン王国の神殿があった死滅の大地、そんな地獄の光景をバックに、モモンガは巨大な魔法陣を出現させる。周囲には守護者たちが配置され、その外にはアウラの魔獣らが警戒網を構築していた。

遠目から恐怖の視線を飛ばしていたスレイン王国の神官どもは、紋様を変え続ける美しい球形の魔方陣に目を奪われながら、「これから何が起こるのか？」と己の上司へ縋るような視線を向けるばかりだ。

まあ、縋られても上司だつてどうしようもないだろう。一瞬にして爆滅した複数の神殿に、真つ二つに切り裂かれ——その死体と他の隊員まるごと何処かへ持っていかれた漆黒聖典。神器を身に付けていたカイレ様も、いつの間にかいなくなっていた。

最上位の神官長らは、「宝物殿に安置されている神々の宝具を護る」とおっしゃってから音沙汰がない。そのまま逃げたわけでもないだろうが、宝物殿の前でバリケードでも築いているのだろうか？

いやそれよりも、何故攻撃されているのかが分からない。予兆なしに訪れた空間が歪むほどの大爆発。死体すら確認できない兵士や神官、被害のあった住宅地の住民の数を合わせると、死傷者は十数万に及ぶだろう。

そんな甚大な被害を受けなければならないほどの罪を、スレイン王国は犯したというのか？ 冗談ではない！ もし万が一、歴史に残るような大罪を犯していたとしても、数万もの人命を摘み取っていいわけがない。神であっても許されない所業であろう。

そう、たとえば相手がスレイン王国の伝説に残る六大神の石柱、不

死者の王”の同族であろうとも。

「ふん、超位魔法を目の前で発動させようとしているのに妨害なしか。レベル90台のプレイヤーはなにをしているんだ？ 即時発動の場合もあるのだから、即応しないと手遅れになるだろうに。やれやれ、ガチ勢ではない——と判断してもよさそうだな。ではやるか」

巨大な球形の魔方阵はあるべき姿を描き出し、モモンガは第十位階を超える神の魔法、超位魔法を撃ち放つ。

——〈イア・シユブニグラス 黒き豊穡への貢〉——

その日、スレイン法国東部都市には黒い風が吹いた。実際には大気が蠢くような現象は起こっていないのだが、それは寒くも暖かくもなく、ただ全身の力が抜けるような……魂を撫でられるような実態無き風であった。

多くの住居が立ち並ぶ、人口密度の極めて高い都心において、一人、また一人と、壊れた人形のように人間ゴミどもが地へ伏していく。

悲鳴はなく、逃げ惑う群衆もない。

それは静かな眠り。とても静かで穏やかな、ゆり籠に集められた百万近くもの住人が眠りにつく、非現実的で神秘的な、美しいともとれる光景であった。

「ははは、思っていた以上の影響範囲だ。これなら新記録も期待できるな」

「すばらしい威力でございますわ。召喚の贄としては前代未聞の数かと」

「ン？ 召喚トハ何ノコトダ？」

「あらあら、コキユートスは知りんせんでありんすか？ 勉強不足でありんすね」

「そんなこと言つて、アンタも知らないでしょ？」

「んがっ！ 知っているでありんす！ あ、あれがそうになって、そうなるでありんすー！」

「や、やっぱり知らないんですね、シャルティアさん」

機嫌の良い主の周りでは、超常の者たちが周囲の視線も気にせず骸

骨魔王に纏わりついている。まるでピクニックにでもきているかのようだ。

崩れ残った神殿の陰から覗き見ていたスレイン法国の神官などは、東部都市での異様な光景に「何が起こっているのか?」と理解が及ばない。

遠目から見て、住人たちが倒れているのは判る。しかし何故倒れているのか? 無事なのか? 他の住人はどうなのか? 等々、現地へ足を運ばなければ判らないことだらけだ。

まさか死んでいるわけではあるまい、と怖れの中にも希望を灯す。東部都市だけでも百五十万人の法国民が暮らしているのだ。それらが何かの力で害されることなど、あるわけがないだろう。たとえ相手が、骸骨の姿をした魔王であったとしても。

モモンガは「やはりプレイヤーの横やりは無いな」と改めて周囲を見回すと、守護者たちと共に東部都市の——上空部分に現れたドス黒い塊を眺める。

「さあ、生まれ出でるがよい。可愛らしい仔山羊どもよ!」

「——ツメエエエエエエエエエエエエ!!」

遙か遠くにありながらも耳を押さええなくなる叫び声。

ベチャリ、ゴチャリ、と巨大で生々しい「何か」が地面へと落ちる。それは黒く、腐った血よりもドス黒く、幾本もの触手を生やし、そして巨大であった。そう、あまりに巨大であった。五本もの巨木のような足——に押しつぶされた足下の住宅と比較しても、ドラゴン竜と赤ん坊であるかのような比率である。

「メエエエエエエエ! メエエエエエエ!!」

「おお、産声というやつかな? しかも五つ子だぞ! ……ふはっ、ふはははは! やった! 勝ったぞ! 悟の二匹を大きく更新だ!!

ん? ということはユグドラシルの新記録か? はは、これは愉快……ちっ、また抑制か」

「おめでとうございます、モモンガ様。ところで「悟」とは? (旦那様とどんな関係なの!?)」

「あ、いや、(しまったなあ、つい口が滑ってしまった) ……ああ、気

にするな。ユグドラシルでの協力者だ。この世界には居ない」

「さようでございませし——」

「モモンガ様！ おめでとうございますでありんす！」

「凄かったです、モモンガ様！ あんなに高レベルのモンスターを五体同時召喚なんて」

「か、かつこよかったです、モモンガ様。山羊さんたちもすごく強そう
で、た、頼りになりそうです」

「都市二住マウ人間ヲ皆殺シニシテノ大召喚。流石ハ至高ノ御方々ノ
頂点ニ君臨スル御方カト」

この場にデミウルゴスが居れば、さらなる称賛の嵐が続いたことであらうが、彼は周辺警戒に出ていて不在である。それが良いのか悪いのかは分からないが、当の骸骨魔王は百万の死体を踏み潰してそびえ立つ、触手だらけの巨大な黒山羊——五体を前にしてご満悦であった。

「うゝむ、ゴミのような一般人を贅にしたわりには上手くいったな。これはやはり、最低経験値は大人であろうと幼子であろうと同じというわけか？ ならば……」

モモンガはふと「アレを持ってくればよかったかなあ」なんて、宝物殿の最奥に安置されている籠カントレット手を思い浮かべてしまう。「アレならば大量の経験値を確保できたのでは？」と今更ながら考えつくものの、そもそも黒山羊召喚に使用するので確保はできなくなるはずだ。やるならば別の機会に、であろう。

「さて」モモンガが黒山羊に向かって軽く骨の指を鳴らす——と、深い闇色の仔山羊たちは東部都市の建物と大量の死体を踏み潰しながら、飼い主に呼ばれた犬の如く近寄ってくる。

ただその光景は、空を覆う黒い壁が迫りくる絶望と同義。

言葉が出なかった、出せないでいたスレイン法国の兵士や神官たちも、悲鳴で答えざるを得ない。

「ひっ、ひiiiiiiiiiiii!!」

「な、なんなのだ?! アレは！」

「魔神だっ！ 魔神が召喚されたんだ!!」

「住人たちはなぜ逃げない?! なぜ倒れ込んだままなのだ?!」
「どど、どうする?! どうするんだっ?」

巨大であるというのは、それだけで力を示す要因になる。

どんな愚か者であろうとも、巨体を動かす怪力が自分に迫ればどのような結果を生み出すのか、なんて知恵を絞るまでもないだろう。

ただ吹き飛ばす、ただ潰される、ただそれだけなのだ。

もちろん、全身の血を吹き出しながら絶望と共にこの世を去るのは確定なので、何も悩む必要は無い。

死は等しく与えられる、骸骨魔王様の御手によって。

「一体は外縁都市部を北回り、もう一体は南回りで潰せ。残った三
体は神殿を集中攻撃だ。特に中央の大神殿には注意しろよ。あそこ
には——」

続く言葉で強者の存在、もしくはトラップを示唆するつもりだったのであろう。だがモモンガは言葉を止め、頭の奥に意識を繋ぐ。

「なに? 外部からの侵入者だと?!」

『はい、モモンガ様。北方の警戒網で“ハンゾウ”が捕捉いたしました。相手は白銀の全身鎧フルプレートを着込んだ騎士と人間の老婆——』

守護者たちに緊張が走る中、モモンガは意識の奥に繋がるデミウル
ゴスからの「伝言」メッセージを聞いていたのだが、紡がれる言葉を最後まで受け取ることは叶わなかった。

「伝言」メッセージが途切れるとほぼ同時に轟いた、天地を揺るがすほどの大
爆音。顔を向けるまでもなく、膨大な圧力が感覚を揺るがす。爆心地
はスレイン法国の北に広がる大森林。だがその規模は、モモンガに驚
嘆の声を零させるほどであった。

「なっ?!」グラントカラストロフ「大災厄」に匹敵する爆発だとっ?」

上空の雲を押し退けるかのように吹き上がる噴煙。

巨大な木々を吹き飛ばす爆風。

それは正に、つい先程観賞したばかりの、偉大にして最強の
魔法詠唱者マジック・キャスターが御業であった。

「ワールド・デイザスターか!? やはりこの地に居るのだな! 面白い!
異世界に来て初めての、カンスト同士のPVPだっ! 魔王の

力を見せてやろう！」

「モモンガ様！ 御待ちをつ!!」

「ん？」横へ視線を向ければ、〈飛行〉^{フライ}を唱えたモモンガへ抱き付かればかりに身を寄せてくるアルベド、そしてシャルティアの姿が見える。

「デミウルゴスの身を案じるモモンガ様の気持ちは痛いほど理解できますが、御一人で行かれるのはお止めください！ あの威力です！

待ち構えているのは油断ならぬ強敵かと！」

「モモンガさま、わらわも一緒に緒させてくんなましつ!!」

アルベドとシャルティアの悲鳴にも似た嘆願に、モモンガはふと己の行動を振り返る。

——『なぜ一人で戦いに行こうとしていたのか？』——

深く考えなくともおかしいと解る。あまりに無謀な突進だ。今まで慎重に慎重を重ねた警戒を、僕と共に積み重ねていたのは何の為なのか？

モモンガは骨の手を額に当て、心当たりへ愚痴を吐く。

（「悟」の思考か?! くそつ、ユグドラシルでプレイヤーを襲っていたときの癖が出たか。ああ、そうだ、そうだな。あの頃は、守護者を伴ってPvPなんかできるわけもなかったからな。プレイヤーの痕跡を発見したら、こちらの情報を盗み見られる前に初見殺しで打ち倒す。事前の情報を得られない単独での不意遭遇戦なら、当たり前前行動だった……）

「ふう」モモンガは必要ないはずの呼吸を軽く行うと、金貨で復活可能だから気にもしていなかった——なんて素振りを微塵も見せず「デミウルゴスのことが心配で、少し気が逸ったようだ」と口にする。

「デミウルゴスも階層守護者の一人です。確かに巨大な爆発でしたが、耐えきれぬほどではないかと」

「アルベドノ申ス通りデス。デミウルゴスハ「炎獄ノ造物主」、生キテイルハズデス」

「モモンガ様！ ここからでも、爆心地周辺に集まっているデミウルゴス配下の悪魔を数体確認できます。でも中心地の空間が何かの力

で歪んじゃって、敵の姿がよく見えません」

「ま、魔法も少し変です。デミウルゴスさんに伝言メッセージが繋がらないです」

殺気立つ守護者らを前にして、モモンガは「ふむふむ」と感心していた。

悟がいた頃とはまるで違うPVP環境だ。優れた知能と能力を持つ僕しもべが何体もいる。この者たちと連携すれば、過去のアインズ・ウル・ゴウンにも負けない協力プレイが可能だろう。

(やれやれ、一人で狩りに出ていた期間が長すぎたんだ)

スレイン法国に「ギルド戦だ」と余裕を持って乗り込んだときには、僕しもべの力を有効活用すべく差配するつもりだったのに……。予期せぬ横やりに対してだと昔の癖が出てしまう、とは魔王失格だ。

「悟のヤツめ」モモンガは軽く八つ当たりを行うと、一人先陣を切ろうと鼻息を荒くしている吸血鬼ヴァンパイアへ声を掛ける。

「シャルティア、私の楽しみを独り占めするのは許さんぞ。敵を歓迎するなら私たち全員でだ。さあ、デミウルゴスの驚いた顔を見にい

ぞ！　〈全体飛行〉

第7話 「観察魔王」

“黒山羊”をその場の警戒に残し、モモンガは守護者全員を浮遊させると、砂塵が残る爆心地へと飛翔する。

前衛にアルベド、その斜め後ろにコキュートスとシャルティア、続いてモモンガが中央に、最後尾はアウラとマーレ。そして遠くナザリックからは、“ぬーぼー”の力を借りたパンドラが戦場全体を見渡す。

「パンドラ、お前の方からは何か見えるか？」

『はっ、爆発の余波で映像が不鮮明ながらも、デミウルゴス殿らしき姿を捉えました。負傷しておりますが、生きてはいるかと』

「それは良い報告だ。そのまま監視を続けて、何かあれば知らせろ」

『かあしこまりましたっ！ 我が絶対の主人、モオモンガ様！』

声を張っていないながらも五月蠅くならない絶妙な音量で伝言を終了させるパンドラに対し、「やはり私の最高傑作は優秀だな」と自画自賛しつつ、モモンガは抉れた大地へ視線を落とす。

（うゝむ、グラウンドカタストロフ〈大災厄〉ほどでもないか……）

森の中にひらいたクレーターは、確かに恐るべき威力の大魔法であることを示唆しているが、どちらかというところメテオフォールを同じ場所に複数回発現させた、と言った方が適切かもしれない。

「これならデミウルゴスでも耐えきれぬだろう」モモンガはそう確信するものの、これが敵の全力である保証はどこにもないので油断は禁物だ。

「モ、モモンガ様!!」

「おお、デミウルゴス。思っていたより元気そうだな、……左腕以外は」

ゆらり、とクレーターの縁に降り立ったモモンガは、いつ止むともしれぬ砂煙——の奥から姿を現した眼鏡悪魔に声を掛ける。

ただ、潰れた左腕と血に塗れたスーツには、少しばかり不機嫌になっってしまうのだが。

「申し訳ありません、失態を犯しました！ 魔将二体とモモンガ様に

お借りしたハンゾウ一体、私を護るために盾となり、死亡しております。この罪は——」

「その話は後にしろ。それより敵だ。私の敵はどこにいる？」

無残な森の残骸を見回しても、それらしい敵影は見えない。

アウラやマーレの警戒網にも収穫は無く、モモンガが特殊^ス技術^キを幾つか発動させてみても、砂煙の奥から反応が返ってくることはなかった。

「はっ、敵は……白銀の鎧を着込んだ騎士らしき存在は、自爆しました。隠れ潜んでいた老婆を『ハンゾウ』が発見し、私がモモンガ様へ^{メッセージ}〈伝言〉による御報告を行おうとした、そのときに……でございませう」

「自爆だと？ それに老婆？」

敵の不在に落胆するも、老婆の存在には警鐘が鳴る。この世界では何故か、年老いた人間の女が油断ならないアイテムを持っていたりするからだ。

弱過ぎる戦士長に、『データクリスタルを用いない強力な魔法の指輪』を与えたのは確か老婆だった。世界級^{ワールド}アイテムを所持し、行使してきたのはスレイン^ド法国の老婆だ。

無論、老婆だけなら気にもしないだろうが、高位のアイテムが関わっているとなれば無視もできない。

「モモンガ様、騎士と老婆は仲間のように見受けられました。加えて私見ではございませうが、騎士が自爆したのは『老婆の口を塞ぐため』であると思考いたします」

「口封じ目的で自爆だと？」

「はい、それなのですが……。騎士は命を絶つような気配を一切見せずに自爆したのです。あわよくば我らを巻き込むつもりだったのでしようが、主眼は奥の手による情報漏えい阻止——仲間の殺害かと」

一連の話を聞いてモモンガは、「殺して隠すほどの情報を仲間が持っているのなら、こんな戦場へ連れてきちや駄目だろ」とか「老婆一人を殺害するために、あれほどの爆発を起こすって」などと呆れた感じを見せていたのだが、『絶命の気配無き自爆』については嫌な記憶を思い起こしていた。

そう、それは「悟」との記憶だ。

「『自爆人形』か。ユグドラシルでは〈転移門〉との合わせ技で使われていた手法だな。アインズ・ウール・ゴウンでもやったことがある。とはいえ、あれほどの大爆発を起こせるものでもないし、人形の費用も馬鹿にならないから廃れたはずだが……」

人形遣いが自作の自爆人形を送り込んで、敵対勢力へダメージを与える。

モモンガ自身もぶつけられた記憶を持つが、どれほど強化しても先程の大爆発には及ばないはずだ。

やはりこの世界は奇妙であり、油断ならない。

目の前で跪く悪魔の無残に潰れた左腕を見つめながら、大魔王は「それはそれとして、大事な僕を傷付けられたままでは引き下がれんな」と、軽い笑みと共に〈転移門〉を開く。

「シャルティア、ナザリックからペストーニヤを連れてこい。アウラは生き残った悪魔とハンゾウを統率し、デミウルゴスから周辺警戒の任を引き継げ。マールは配下の竜を呼んで上空警戒だ。アルベドとコキュートスはそのまま私の護衛につけ」

「「はっ！」」

「モ、モモンガ様……」

一斉に動き出す守護者の中で、デミウルゴスだけは項垂れていた。

周辺警戒の任を解かれたからであろう。まあ、貴重そうな情報源の老婆を失い、敵から手痛い一撃を浴びて負傷してしまったのだ。しかも自爆した相手は人形である可能性が高いという。

結果として得られたものは何もなく、無様に生き恥を晒しているというわけだ。

主に呆れられて捨てられるのではないかと常々心配していたデミウルゴスとしては、今すぐ己の首を差し出したい心境であろう。

「ふふ、心配無用だぞ、デミウルゴス。老婆を粉々に吹き飛ばしたから情報漏えいは無い、と思っっているどこぞの人形遣いに一泡吹かせてやる」

「そ、それはいったい？」

知恵者デミウルゴスでも知り得ないことはある。それはユグドラシルでの蘇生事情——特にプレイヤーだけが用いるものに関してだ。

一般的な蘇生魔法は死亡したプレイヤーの“魂”へかける。魂は大抵、死体と同じ場所にあるので迷うことはない。魂の所在が不明確な場合でも、コンソールから選択が可能だ。課金アイテムによる蘇生まで含めれば、不可能など無いだろう。もし即時蘇生を行わない場合でも、ギルド拠点やホームなどでリスポーンすることもできる。

ならば今回は、老婆の死体が爆散焼失すると共に魂の所在が不明なので、コンソールにて名前を選択し蘇生させるべきパターンなのだろうが……。この異世界の地でコンソールは起動しない。部外者なのだからギルドのマスターソース名簿にも載ってこない。

人形遣いはその点を理解して爆発を起こしたのは不明だが、普通に考えれば蘇生不可能な状況だ。たとえユグドラシルのラスボス、大魔王モモンガであろうとも、打つ手無しのように思えてならない。

「モモンガさまあー！ ペスを連れてまいりんしたあー！」

「お、御身の前に、モモンガ様……わん」

洒落にならない速度で引つ張ってきたのであろう——犬頭のセクシーなメイドはスカートを押さえながら、少しばかり目を回した状態でモモンガの前に跪く。もちろん語尾も忘れずに。

「よし、即時蘇生のタイムリミットは三百秒だ。まだ間に合う。そして死体と魂を消した、と思っっている人形遣いの度肝を抜いてやるぞ。ペストーニャー！ この地一帯に、範囲を拡大した最上級の蘇生魔法を撃ち放て！」

最上級の蘇生魔法を範囲拡大で発動させることが出来るのは、ナザリックでもペストーニャかパンドラしか居ないであろう。普通に考えて、範囲の中にいる全ての死者を蘇生させるのだから、MP消費も莫大なものになるはずだ。

だが、もしそんなことが可能であれば、効果範囲の中に死体の塵一粒——魂のひとかけらしか残っていないとしても、蘇生可能となる。

そして死亡現場から死者の痕跡を完全に吹き飛ばすことなど、現実的に不可能だ。燃えカスにしろ、血痕にしろ、魂の残滓にしろ、何か

しら残る。

故にそう、人形遣いの自爆は無駄となるのだ。

〈魔法効果範囲拡大・真なる蘇生〉
ワイデンマジック トウル・リザレクション

自身のMPを半分以上費やして、ペスは燃費最悪の蘇生魔法を繰り出す。とはいえ、ペスとしても初めての経験だったのだ。

“館ころもっちもち”に高レベル神官として創られはしたものの、ナザリックでは第九階層で掃除に勤しむばかりであり、戦闘経験はない。それがユグドラシルでも珍しい広範囲多人数蘇生だ。気合が入り過ぎたとしても仕方がないだろう。

「——おおお？ なんだ？ これはっ」

「私ハ、死ンダハズデハ？」

「……？」

消し炭の欠片から再構築されたのは、デミウルゴスの壁となって散っていった二体の魔将と、隠密忍者のハンゾウが一体。

そして——

「な、なんじゃ？ なにがどうなっておる？ わ、わしは？」

目に見えぬほどの塵から人間が再生されていく様は、生命の神秘を垣間見ているようで興味深くもあるが、モモンガからすれば虫の解剖を見ているだけに過ぎない。

加えてむき出しの大地に横たわる全裸の老婆など、どう表現すればよいのやら。

「ま、まあ、装備品までは再構築されないからな。しかし上手くいったようだ（ん）、つい最近どこかで見たような老婆だが……、はて？」

混乱している全裸の老婆を一瞥した後、モモンガは小さな疑問を振り払って次の段階へ移行する。

「デミウルゴスは蘇生した魔将とハンゾウ、そして老婆を連れて、ペスと共にナザリックへ戻れ。ペスはデミウルゴスの治療を行った後、今回蘇生した者たちの経過観察を行うように」

異世界に來てからの蘇生は初めてであるが故に、問題が無いかどうかの経過観察は必要だ。モモンガはそう言い含めると、最高の頭脳を持つ眼鏡悪魔へ厳命する。

「デミウルゴスよ、人形遣いが自爆を選択してまで隠蔽しようとした老婆だ。その者が持つ情報は貴重だろう。余すことなく引き出すのだ」

「はっ、御勅命賜りました！ 二度と失態は犯しません！」

止めようがない敵の自爆——を失態と呼ぶかどうかはモモンガも首を捻るところだが、デミウルゴスの鬼気迫る迫力にはアルベドやコキュートスも口を挟めない。

それより今は、簀巻きにされて運ばれていく老婆の記憶が気になるところだ。

『仲間殺し』を選んでまで隠そうとした情報。人形遣いの思惑を打ち砕いてまで手に入れたのだから、大切に利用しなければならない。守護者の一人に手傷を負わせた件についても、それ相応の報いを受けてもらおう。

「アウラ、マール。周囲の警戒は任せるぞ」

「はいー！」

「は、はいー！」

デミウルゴスから引き継いだ数百の悪魔と自身の配下魔獣を展開させるアウラ、そして二体の竜ドラゴンと共に上空へ向かうマールを見送り、モモンガは「では黒山羊のところへ戻るとするか」とアルベドら三名に「マス・フライ全体飛行」をかける。

「モモンガ様、スレイン法国は黒山羊に対し攻撃を仕掛けなかったのでしょうか？ 我らがその場を離れたのですから、絶好の機会かと思うのですが」

アルベドの雑談に近い問い掛けに、モモンガはリンクしている黒山羊の様子を伝える。

「黒山羊たちはのんびりしたものだな。中央神殿にいるらしい高レベルプレイヤーなどとも戦闘になっていない。実につまらん、臆病な奴らだ」

「まことでありんす。山羊相手に引き籠りんすとは、愚かでありんしょう」

「槍ノ小僧ハ見込ミガアリマシタガ、他ノ者ハ期待デキソウニアリマ

センナ」

黒山羊はレベル90を超える頑強なモンスターだ。そんな化け物が五体もいるのだから、孤立している間に排除しておきたいと思うだろう。PVPで乱入されたら、厄介なことこの上ない手駒なのだから。

故に援軍と合流されるまで手を出さないなんて、ユグドラシルでは有り得ない。

（ふむ、一応誘い出す餌のつもりでブラブラと待機させていたんだが……。我らの姿も目視できているだろうから、ヤルなら絶好の機会だったはず。もしや看破されたのか？ それとも本当に憶病なだけか？ まあ、暴れさせたら嫌でも出てくることになるだろうがな）

闇深きクレーターの縁へふわりと舞い戻った大魔王は、アルベドとシャルティア、コキユートスを脇へ控えさせ、警護の任に就いている四体のハンゾウを視界の端で確認すると、「よし、やるか」と黒山羊へ指示を飛ばす。

「仔山羊たちよ！ 二体は外縁都市を踏み潰せ！ 残りの三体は中央に立ち並ぶ神殿を全て破壊しろ！ 邪魔者は皆殺しだ!!」

「メエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

鳴き声ならぬ黒山羊の大咆哮に満足げな表情を浮かべつつ、モモンガは騒がしくなってきた中央大神殿を注視する。

どうやら、自分たちが標的になっていたので自覚したのだろう。「今頃何をやっているのか？」とため息を吐きたくなる愚鈍さではあるが、そもそも天へそびえ立つ闇よりもドス黒い触手だらけの化け物なんて、どのように対処して良いのか判らなかつたのかもしれない。となると、居るはずのプレイヤーは何をしているのか？ そこが気になる。

「さあ、カンストプレイヤーが止めに入らねば、国が滅んでしまうぞ」物見遊山なモモンガが軽く呟いた——そんな台詞に呼応するかのよう^{メッセージ}に、〈伝言〉の繋がりが大魔王の意識をノックする。

『モモンガ様、中央神殿のレベル90台が動きました。迎撃へ出るようですよ』

「ふ、ようやくか。パンドラはそのまま相手の能力探査を行え」
『はっ』

PVPで最も重要なのは相手の情報である。だからこそ、情報収集に最高傑作のNPCを配置しているのだ。

黒山羊を突撃させて戦闘を観察。所持武器や使用特殊技術^{スキル}を把握し、ステータス構成まで読み解く。

平均型か特化型か？ それとも変態か？

その結果に合わせて、習得している七百以上の魔法の中から組み立てるのだ。勝利への方程式を。

「では、どんな奴か見せてもらおうとしよう」

モモンガの期待に応えるかのように、その者は大神殿の崩れた壁穴から飛び出してきた。

手に持つは十字槍にも似た戦^{ウォー}鎌^{サイス}、全身に纏うは魔力沸き立つ神々の武装。ティアラを載せた髪は半分が白く、もう半分は黒い。身長はやや低く、少女のように見えなくもない。

「あはははは!! もう限界でしょ?! 構わないでしょ?! このままじゃ国が無くなっちゃうのよ? 宝物殿を護っている場合じゃないでしょ!?!」

挨拶代わりと言わんばかりに黒山羊の触手を一本斬り刎ね、笑顔のまま大神殿のてっぺんへ身を置く。その様子からすると、白黒少女は巨大な黒い化け物三匹に囲まれながらも、自身の敗北をまったく想定していないようだ。

モモンガから見て、黒山羊と白黒少女との間に左程のレベル差は無いように感じられる。アウラやパンドラが使う特殊技術^{スキル}による査定ではないので不確かであろうが、積み重ねてきたPVPの経験からして、どちらかが圧倒的に強いとは思えない。

「ふむ、武装の差か? 全身神器級^{ゴツ}とは大したものだが、統一性に欠けるな。自分の専用装備ではないのか? 借り物か、略奪品をそのまま流用しているのか。まあ、どちらにせよ、黒山羊が手も足も出ないというほどでもないな」

モモンガはパチリと骨の指を鳴らし、リンクしている黒山羊へ集中

攻撃を命ずる。標的はもちろん白黒少女だ。三匹による一斉攻撃であれば、僅かなレベル差も武装の差もひっくり返すことが可能であろう。

「ツメエエエエエ!!」

「ははっ、私を楽しませてよ!!」

はつきり言って迷惑な戦いだ。

叩きつけられる数十本の触手は地面を抉り、神殿を砕き、人間を羽虫の如くバラバラにする。斬り飛ばされたドでかい触手は、本体から分離した後でも激しく暴れ、周囲の人や物を踏み潰しながら元の場所へ還っていく。

やめてくれ——と大神殿のレベル60台、最高神官長は懇願しただろう。

もうだめだ——と漆黒聖典の「一人師団」は呟いただろう。

魔神と思しき「巨大な触手の化け物」と「神人」との戦い。まさに神代の、人が立ち入れぬ戦いだ。

「六大神」が、「八欲王」が、「十三英雄」が巻き起こした大陸戦争とは、このような光景だったのだろうか？

中央神殿の羽虫たちは、頭上へ迫ってきた黒い触手を見つめながら、「人類は……、もうおしまいだ」と神に祈ることも忘れて呆然とするばかりであった。

「こんのお!! 斬っても生えてくるなんてズルくない?!」

「メエエエ! メエエエエエ!!」

樹齢千年の巨木並みに太い触手を斬り飛ばすこと三十五回。それでも黒山羊たちは無数の触手を構えて襲い掛かる。疲労を示唆するような仕草はない。痛みに悶えている様子もない。HPが減ったような、そんな気配なんかまるでない。

カンストプレイヤーでも音を上げるような耐久性——それこそが黒山羊の特性であり、最大の武器だと言えよう。

振り回す触手は簡単に避けられてしまいが、そもそも攻撃を当てるつもりなどないのだ。巨大な壁として立ちはだかり、攻撃を一身に引き受ける。触手による攻撃は相手に回避を強いるだけであり、当れば

儲けもの程度の意味合いしかない。

無論、当ればそれなりに痛いので無視する訳にもいかないが……。

黒山羊は楽しそうに鳴き喚きながら、白黒少女とじゃれあうのであった。

「さて、アルベド。どうみる？」

「はい、攻撃力偏重のアタッカーであると判断致します。ただ動きが単調で、攻撃パターンにも面白味がありません。身体能力と武器の力に頼っており、技量としては精々達人クラスかと」

どこかの「漆黒の英雄」が聞いたら「達人クラスでも駄目なのかよ！」と文句を言ってくるだろうが、アルベドら守護者——シャルティアは除く——にとっては『神の領域』に至ってこそ、初めて本気で戦える相手となるのだ。

格下ばかり相手にしてきて、『自分より強い相手に対し工夫して勝利を掴もう』だなんて考えたこともない——シャルティアみたいな——小娘には、当然ながら厳しい評価がくだる。

ちなみに、守護者たちには絶対に敵わない強者として「至高の四十一人」がいるので、己の実力を過大評価することはない。シャルティアみたいに『そうあれ』と創造されていない限りは……。

「ふむ、しかし何か妙な感じがするな。身に付けている武器やアクセサリーの数に対して、強化や耐性の反応が多過ぎる。バランスもメチャクチャだ。どう思う？ パンドラ」

『はっ、こちらでも探査してりましたが……。モモンガ様、面白いことが分かりました』

この場に居ない宝物殿守護者に会話が移ってしまったことで、守護者統括の表情が残念なことになってしまったが、それはそれ。

モモンガはパンドラからの報告に意識を向ける。

『少女の体内から神器級の反応があります。アクセサリーの類でしょうが、十個ほど体の中に取り込んでいるものと思われます』

「体の中に、神器級の、アクセサリーだと？」

魔法化されたアクセサリーは、戦士・魔法詠唱者を問わず戦いに身を置く全ての者が装備し、『身体能力強化』及び『属性防御』を図ろうと

する戦闘補助具だ。

しかし、戦いの最中に壊れることもあるだろう。手や腕を切り落とされたら効果を失う場合もあるだろうし、盗まれる可能性だってある。強力なアクセサリーは常に身に付けておきたい反面、誰の目にも映らないよう隠しておきたい気持ちもあるのだ。

だがそんなアクセサリーを体内に取り込むことが出来たなら、自分の身と融合させることが出来たなら、それはとても効果的で喜ばしいことに違いない。

「そんなことが可能なのか？ 少なくともユグドラシルでは聞いたこともないが」

「宜しいでしょうか？ モモンガ様」

会話に横から割り込んできたのはアルベドだ。

謙虚な姿勢と言葉使いではあるが、パンドラから旦那様を取り戻そうとしているのは間違いない。

「なんだ？ アルベド」

「はい。察しますところ、生まれながらの異能とやらが関係しているのではないのでしょうか？」

モモンガが零した少ない言葉から全てを読み解き、この世界の情報とすり合わせる。そしてアルベドが導き出した答え、それはこの世界特有の特殊な能力——「生まれながらの異能」だ。

「ああ、どこかの村に通っていた魔法詠唱者の少年が持っているという能力だな。ふむ、ゴミのようなものから破格なものまで多種多様とパンドラは言っていたが、これはちよつと予想していなかったぞ」

珍獣でも観察するようなモモンガの視線の先には、いまだ黒山羊と戯れている白黒少女の姿があった。

一進一退の攻防と言えば聞こえはいいが、実際は泥沼状態だ。

相手を打ち倒すほどのダメージは与えられず、それでも反撃を受けるとはないので、ただひたすら同じことの繰り返し。神の武具がもたらす効果により疲れを感じることはない——故に、いつかは勝利を掴むことが出来るのだろうか、それは一体いつなのか？

「やつと敗北を知れると思ったのに！」 白黒少女は縦横無尽に振り回

される巨大な触手を軽く避けながら、魔王にも理解できない妙な不満を漏らすのであった。

第8話 「バフ魔王」

魔王が見上げる遙か先には、ドス黒い触手に囲まれた白黒少女の姿が見える。

それは世界級エネミーに立ち向かう隠密堕天使のようであり、可愛い女の子太陽下心だらけに向かつて飛ぶ蠟羽ベロロンの鳥人ふぁーみたいであり、壊してもいいオモチャを与えられた悪戯つ子のように見えなくもなかった。

ちなみに、触手と戯れてはいるが……エロくはない。

「このまま続けても面白味はなさそうだな。ではシャルティア、叩き落としてこい。異世界における能力確認の意味もあるのだから、『全力』でな。――〈無限障壁〉〈混沌の外衣〉〈天界の気〉
〈上位全能力強化〉〈上位幸運〉〈上位抵抗力強化〉〈上位硬化〉
〈上位加速〉〈上位魔法盾〉〈竜の力〉〈超常直感〉〈魔力増幅〉
〈感知増幅〉〈自由〉〈抵抗突破力上昇〉〈不屈〉〈吸収〉〈看破〉」
「あばばばばばつらばろりんごぶひぎやどぬひんにゆぢわぐう!!」
真紅の瞳を限界まで見開き、平胸と細腰を何度かビクつかせて「はわわわ、は、はいいい!! モモンガ様! お任せくださいでありますう!!」

御勅命とは、己の存在を認めてもらったに等しい。名を呼んでもらえる、力を認めてもらえる、そして任務達成の期待を寄せて頂ける。加えて至高の御方からバフを受けると、寝所へ呼ばれその身に御方の力を注ぎ込まれると同義だ。鎧姿でなかったら、いろいろビツチャビチャであっただろう。というか、すでに手遅れかもしれない。シャルティアは真っ白なランスを振り回し、真っ赤な鎧姿で天へ発つ。「ぐががつ、うらやまじいいい」と嫉妬混りの――というか殺気混じりの血涙視線を向けてくる統括殿を横目でニヤつきながら。

「守護者最強の一撃を喰らうでありんすうう!!」
「なっ?!」

突っ込む前に大声を上げるのはどうかと思うし、最強の一撃ならガ
ルガンチュアやルベドも候補に入るだろうなあ、なんてのんびり見物

していたモモンガは、光の速度を超えるかのような速さで突っ込んでいったシャルティアへ「まあ、がんばれ」と声援を送っていた。まるで、運動会に出ている子供を応援するかのよう。

「ぐっ！ な、なによコイツ?!」

「虫けらに話すことなどありません。我が君に喜んでいただけよう、必死の抵抗をしんしゃいな!」

何かが来る、と察知はしていた。しかし気付いたときには〈不落要塞〉の発動すら遅かったのだと、千切れかけた左腕を見ながら白黒少女は下唇を噛む。

「神様の宝具を纏った私に傷を付けるなんて——〈流水加速〉!」

「無駄口叩いている暇がありませんの?」

武技を込めて全力で躲しても、右耳を持っていかれた。そう思った瞬間、腹に白い槍が刺さる。

「げほっ」と口から赤いモノを吐き出そうとするも、それを押し戻すかのように小さな拳が顔面を襲う。

「ぶがつ! そんな?! この私が手も足も——」

「どの手足でありんす?」

感じたことのない痛みが手足を襲い、次に纏っていた魔力の喪失を悟る。アクセサリーが身体から分離され、〈飛行〉^{フライ}の魔法が切れてしまったのだろう。

白黒少女は迫りくる地面を受け止めるべく手を差し出そうとするが、そんなものはどこにも残っていないかった。

「がああ!! わ、私がこんな一方的にやられるなんて! おかしい!

おかしいわっ!」

ゴズツと重い荷物が落ちたような、そんな音と共にモモンガの前へ転がってきたのは、ダルマのような白黒少女であった。

手もなく足もなく、故に戦鎌^{ウォーサイズ}を振り回すこともできず、地面を這いずりまわる蛆虫であるかのよう。

「往生際が悪いでありますねえ。だけど至高の御方の御前でありますよ。静かにしなまし」

「うごが——」

背中を踏みつけ、口の中へスポイトランスを突っ込み、無理やり黙らせる。

そんなシャルティアの行為が、先程までの戦闘より手馴れていたように感じたのは気のせいだろうか？

モモンガは「まっ、いつか」と、あまり深く考えずに目を逸らすのでありましたとき。

「ふむ、解っていないようだな。先程まで黒山羊の攻撃を易々と躲していたが、その時点で『何かおかしい』と察しなくてはならんぞ。おかげでシャルティアの攻撃に目がついていかなかったらどう？ 身体能力的には対応できたのかもしれないが、頭の中が黒山羊の攻撃速度に慣れていた為に上手く動けなかったのだ」

大魔王は地を這う血塗れの小虫を前にして、懐かしそうに空を見上げる。

「ユグドラシルではカンストプレイヤーも千差万別でな。能力値がいかに高かろうが、軽い引っかけで倒せることも多かったのだ。悟は『中の人の差』と言っていたが、まあよく分からん。油断ともちよつと違うようだが、要するに『自らの力を過信するのは良くない』ということだな」

白黒少女に語っているように見せて、実は守護者への苦言だったのかも知れない。

コキュートスやアルベドは、主の真意を読み取り、その場で深く頭を下げる。ただシャルティアだけは、己の勝利をニコニコ笑顔で主たるモモンガ様へアピールするのであった。

「さて、^{リジエネート}持続回復の効果で失血死はしないようだが……。名を聴こうか？」

「……名前なんて持ってないわ。皆は私を『絶死絶命』って呼——けぶっ!!」

「モモンガ様、この虫けらは口のきき方を知らないようでありんす！

このまま踏み潰してもよろしいでありんしょうか？」

「御身の前に^{かみず}傅くには相応しくないゴミのようですわ。潰してしまってもよろしいかと」

「己ノ力ニ振り回サレテイル未熟者デアルト判断致シマス。能力ハ我ラニ匹敵シマスガ、同格ニ対スル経験ガ圧倒的ニ不足シテイルヨウデス」

スレイン法国が抱え持つ最も強力な切り札であろうに、守護者たちの評価は散々であった。

ユグドラシルで例えるなら、『姫ロールプレイで多くの神器級を貢いでもらった、クエストだけでレベル100に到達した女性プレイヤー（ネカマかも？）』といった感じだろうか。

全身が神器級であるためにそれなりの強さを持つものの、周りの配慮でガチ勢とはPVPを行わない温室育ちの中級者。アインズ・ウール・ゴウンに発見されたら、「え？ えっ?!」と言いながら己の装備が溶かされていくのを眺めることしかできない憐れな獲物。

山羊頭の悪魔や、純銀の聖騎士と出遭わなかっただけマシなのだろうが、今回遭遇したのは骸骨大魔王だ。しかも、防衛にしか使用できないはずの珠玉NPCを複数引き連れている。

ガチ勢のプレイヤーでも逃げ出すだろう。アインズ・ウール・ゴウンの名を知っていればなおさらだ。

止むを得ず戦うにしても、練りに練った作戦と決死の覚悟が必要になる。

正面から、しかも単騎で突撃なんて、*ぶにつと萌え*が聞いたら説教タイムの始まりだろう。

「この世界における圧倒的な強者の……なれの果てか。デミウルゴスが出遭った人形遣いとは雲泥の差だな。まあ、能力的には同格なのかもしれないが」

「哀れだな」軽く呟いて、大魔王は地べたに這いつくばる小虫を、そして周囲の残骸を見渡す。

このスレイン法国はあまりにレベル差が大きい。格差が酷過ぎる。レベル90台の白黒少女の次に来るのが、レベル70台の槍使いや大神殿に籠っているレベル60台とは何の冗談なのか。他の者に至っては、レベル30前後でドングリの背比べ状態だ。

これでは慢心するな、と言う方が酷だろう。まともな戦闘訓練もで

きていないに違いない。レベル100が複数存在しているナザリックでも、『ガチバトル』の機会が少なくて意気消沈している奴もいるというのに……。コキュートスのことだけど。

「ああ、そうか。気兼ねなくガチバトルができる相手として、作り上げればよいのか。うんうん、ぶぎ武技とやらの習得訓練にもなるし、一石二鳥だな」

コキュートスに『縛りプレイ』をさせて、白黒少女と本気で殺し合いをさせれば、中々面白い戦いになるかもしれない。

ユグドラシルでは『魔法』『片手』『アイテム』『防具』『耐性』『特殊技術』など、様々な縛りをかけて戦闘訓練を行っていた。

遠い昔、悟“が『魔法縛り』で『なんでもあり』の『隠密墮天使』と戦ったときは頭がおかしいのかと思つたものだが、それで勝つてしまうのだから流石は我が半身と言つたところか。

そんな経験を守護者にも積んでもらいたいものだ。

「シヤルティア、その小虫は回収しておけ。面白そうな生まれながらの異能の研究もあるが、お前たちの訓練にも利用できるだろう。今はただ的にしかならんがな」

雑務はこれぐらいしておこう——とそんな態度で片手を振るモモンガは、繋げたままのメッセージへ伝言に意識を向ける。

「パンドラ、ナザリックへ人間を……いや、耳の形状からすると森妖精の血が入っているのかもしれないが、実験動物を一体送る。体内の装備品も含め、全て剥ぎとつて収監しておけ。一応高レベルだからな、注意を怠るな」

『はっ、呪い”や”誓約”を用いましてえ、完璧に管理させて頂きます！ ご安心くださいっ！』

直属の僕から送られる見事な回答に、モモンガは「やはり、ギルドメンバー全員の能力を活用できるのは便利過ぎるな」と満足げに頷いてしまう。

自分で創造したNPCなのだから、過分に褒めるのは自分でもどうかと思うが、大魔王は崩れ残った中央大神殿を前にして、終始ご機嫌であった。

「モモンガ様、援軍の気配はありません。人間どもは神殿に立て籠もる算段のようですわ」

「しかたありません。わらわの力を目の当たりにして、怯えることしかできないのでありませんししょう?」

「油断ハ禁物ダ。想定外ノコトガ起コル可能性モアル」

凜とした佇まいで前衛指揮官のように周囲を警戒するアルベドに対し、シャルティアは自身の活躍に御満悦のようだ。絶対の主に見て頂いたからなのだろうが、苦言を呈するコキユートスにも余裕の笑みで「ふふん」と答えている。

(シャルティアの様子は、レイドボスに止めを刺した「ペロロン」と似ているな。アルベドの厳しい空気感、作戦を微調整している「タブラ」のものだろう。コキユートスは「建御雷」っぽくないような気もするが、デミウルゴスの負傷を見て学習したことなのだろうか? んん、この世界も色々興味深い、NPCを観察してみるのも面白いかもしれんな)

新たな世界には驚かされる発見ばかりで新鮮なことこの上ないが、充分に知っていると思っていた配下の仕草にも興味が湧く。

大魔王は「変化し、成長するということか」と、可愛らしい子供を見る親にでもなった心境で、血生臭い大量殺戮状態のスレイン法国中心部にてほっこりしていた。

「さて、残るはレベル60程度の雑魚か。トラップにさえ注意しておけば問題無さそうだが……」

宝物殿を内包している国家の心臓部。そんな場所に設置してあるトラップだ。解除するにも避けるにしても、それなりの特殊技術^{スキル}を必要とするだろう。

骸骨大魔王は傍にいる守護者、そして警護に付くハンゾウを軽く視界に捉え、骨の指を顎先に添えて思考する。

(トラップ解除は無理だろうなあ。プレイヤーが設置しているのだから、偵察潜入寄りのハンゾウには荷が重い。ならばパンドラを呼んで「パナツプ」にでも変身させ……、いや、面倒だな)

変身であろうと「そんな奴には会いたくない」とでも思ったか、モ

モンガは直立不動で命令を待っている巨大な黒い壁——三体の黒山羊へ視線を向ける。

「トランプごと潰せばよい。さあ、暴れろ！ 仔山羊ども！」

腕を横に振り払い、バサツと豪華なマントをはためかせる大魔王の号令一過。黒山羊は神殿を支える石柱よりも太い触手を振り上げ、渾身の力を込めて振り下ろした。

ちなみにアルベドを始めとする守護者たちは、モモンガ様の格好良さに見惚れて黒山羊の動きなどまったく見ていない。

触手が中央大神殿を砕くところも、中の人間が潰れるところも、この世界において強者と言われる最高神官長や漆黒聖典隊員たちが、ペチャンコになっていく無残な様も、まったく見ていなかったのだ。

「メエエエエエエエエ!! メエエツ!!」

潰れ潰れて、原型が無くなるほど粉碎されて、羽虫の悲鳴が黒山羊の鳴き声に掻き消されることしばし。

その場には巨大な箱——ではなく、部屋らしき建造物が残されていた。

黒山羊の殴打に耐えるのだから凄まじい硬さなのであろうその部屋は、大きさを言うとなザリツクの「玉座の間」がすっぽり入るスケールだ。

外観は石材で覆われているかのように灰色ながらも、僅かに発光しており、重厚な両開きの正面扉と共に特殊な魔力の香りを醸し出している。

「モモンガ様、あれはもしかや?」

「ああ、宝物殿だな。探知不可、破壊不可の、ギルド拠点獲得時における特典施設だ。確か『課金で拡張可能』とかなんとか『悟』のヤツは言っていたが……。まあ、ナザリツクにあるものと大して変わりはない」

「無論、中身は天と地ほどの差はあるがな」なんて魔王は軽く笑い、一歩を踏み出す。

もはや魔王の前には瓦礫と血煙が残るのみであり、邪魔をする者など存在しない。スレイン法国の中央大神殿は完膚なきまでに破壊さ

れ、立て籠もっていた人間たちも、原型が残らないほど潰されてしまった。

もしかすると、瓦礫の中には漆黒聖典の遺した神々の宝具が埋まっているかもしれないが、魔王は気にもせず宝物殿の正面扉へ足を進める。

「ふむ、こちらの宝物殿もパスワードが必要か。アイテムで無理やり開けることもできなくはないが……、パンドラ」

『はっ、パスワードでございましたら、お送りいただいた実験動物の記憶から入手しております』

流石は宝物殿守護者——とモモンガは絶賛したくなるが、横に控えているアルベドの黒い翼がピクピクしているので、軽く褒める程度にしておく。

「よくやった、パンドラ。それで？」

〈メッセージ〉で頭の奥に送られてくるパスワードは、誰かの名前であるかのようだ。その数が六であることや、最後がスルシャーナであることを考慮すると、スレイン法国が崇め奉る六大神とやらの名前を、そのまま宝物殿の鍵に用いているのだろう。

少し不用心のようにも思えるが、手を加え過ぎて思い出すのに一苦労する、どこかの大墳墓よりはマシなのかもしれない。

「これで『ヒラケゴマ』だな」

鍵を開ける際の御約束として「悟」が使っていた言葉だが、その意味をモモンガは知らない。それでも縁起物なのだろう、と魔王らしくない思考と共に、ガキンツと音を立てて手前に開こうとする巨大な扉を、モモンガはワクワクしながら——同時に己の前に僅かな空間を残しつつ、静かに眺め——

「リアリティ・スラッシュ 現 断<!!」

「マジックパライ!!」

「ふっ、やれやれ」

開こうとする扉の僅かな隙間をすり抜けて、次元を切り裂く魔法の刃が魔王の面前へ迫る——かと思いきや、予測していたかのように滑り込んできたアルベドが、愛する夫を傷付けんとする攻撃魔法を弾

く。

正直、モモンガは宝物殿に安置されている魔法のアイテムに興味があつており、警戒心が薄れていたのは否定できない。それでも、ナザリックの宝物殿に直轄の僕を配置していたのはモモンガ自身なのだ。ならばこそ、敵が取り得るであろう次の手を予測できない訳がない。そう、敵だつて同じことをするはずだ。

探知が届かない宝物殿の中へ身を潜ませ、扉が開くと同時に渾身の一撃を放つ。

至極単純で、シャルティア以外の守護者なら誰でも理解していた手法だ。だからアルベドは、完璧なタイミングで魔法を弾くことが出来たのである。

「ふふ、こつとも予想通りだと清々しくもあるな。さて……」

「我らが絶対の主人、至高の御方々の頂点（にして我が夫！）、大魔王モモンガ様へ不敬を働いた愚か者！ 名を名乗りなさい!!」

大きく開いた巨大な扉の先、黄金の輝きが眩しい宝物殿の中央、アルベドの殺気が撃ち放たれたその場には、禍々しい闇色のローブに身を包んだ一体の骸骨が佇んでいた。

心なしか呆然としているように見えるのは、自身最強の魔法が弾かれたからか？ タイミング的には完璧であったが故に、「どうして仕留められなかったのか」と自問自答しているのかもしれない。

「……わが名は『ミマモリ』。スレイン法国に害を成すプレイヤーへ警告する。立ち去れ、そして二度と姿を現さぬと誓え。さもなければ、汝は消滅する。この神槍によつて！」

モモンガと同族らしき骸骨は、懐から一本の——神々の戦争に使われそうなほどの強大な力を秘めた、装飾の少ない簡素ながらも美しい槍を取り出し、ぎこちなく構える。

「『死の支配者の賢者』に『聖者殺しの槍』か……。大盤振る舞いだなあ。ああ、アルベドにシャルティア、コキユートスも殺気を抑えて脇へ控えている」

「そ、そんなつ、モモンガ様？」

「ぐぎぎ、モモンガ様の御指示とあれば仕方ありません」

「ハッ！ 仰セノママニ」

今すぐにも襲いかかりそうであった守護者三名を横へ追いやり、大魔王は「ふむ、なるほど」と呟く。

「装備できなくとも、世界級アイテムの特殊効果は発動可能なのか。それは新発見だ。ユグドラシルでは、装備できない奴が持つことなど有り得なかったからなあ。なんとなく出来るだろうとは思っていたが」

「聞こえなかったのか？ プレイヤー。この神槍は獲物を確実に捉える。そしていかなる復活も許さない。抵抗は無意味だぞ」

守護者の歯ぎしりが響く宝物殿内で、モモンガは改めて目の前の骸骨を眺める。

たいした勇者である。

どこかのプレイヤーが召喚した副官なのであろうが、大魔王と守護者三名を前にして一歩も引かない胆力。世界級アイテムを手にしたことによって——神器級を纏った白黒少女のように——増長しているだけなら気にも留めないが、どうやらそうではない。

先程の不意打ちもだが、全力を持って、死を覚悟して、魔王を退けんとしているのだ。

使用者さえも消滅させる 聖者殺しの槍の発動も、ハツタリではないだろう。

モモンガは『御命令を』と見つめてくる隠密状態のハンゾウらへ「さがれ」と命じ、死の支配者の賢者の前へ立つ。

「『ミマモリ』とやら、答えを聴かせてやろう。——私は退かぬ。お前が世界級の武器を構え、次元を切り裂く魔法を詠唱したとしても、私を退かせることはできぬ。それは神々の大軍勢が相手であっても同様である。この世の理だ」

あまりの言い分に、二の句が継げなくなつた骸骨——そんな自分に似ているようで似てない死の支配者へ向けて、骸骨魔王は言葉を続ける。

「世界級を一つでも持っているなら、二つ目を警戒する。当然のことだ。だからこの地へ乗り込んだ守護者には、残らず世界級を持たせて

いる。私は最初からだがな。……ふむ、私の言っている意味が解るか？ つまり、『全ては無駄』ということだ」

大魔王の発言に嘘はない。それはミマモリにも解っていた。

自身を召喚したプレイヤーである、スルシヤーナの持つ常識。ユグドラシルでは一般的な知識であり、召喚モンスターにも受け継がれる事実。

——世界級アイテムの効果は、世界級アイテムによって打ち消される——

ミマモリは大魔王を正面から見据え、その腹部に収まっている真紅の球体へ意識を向ける。

「予測していなかったわけではない。『傾城傾国』を奪われているのだ、効果を打ち消される可能性はあろう。だが、従属神の消滅と引き換えならば、法国を助ける道はあると判断していた！ 従属神にはその価値がある！ 人間の国などより余程！」

神槍で狙うべき本命は、プレイヤーではなく従属神^{NPC}。ミマモリは始めから損得勘定を相手に強いて、スレイン法国を救おうとしていたのだ。

ユグドラシルとは違い、この世界における最高レベルの従属神は、二度と手に入らない貴重な存在である。それこそ世界級アイテムと比較するほどの価値があろう。

そんな宝物が消滅するとあっては、人間の国など軽く見逃してくれるはずだ。従属神を消滅させてまで滅ぼすほど、法国に価値は無い。

「なぜだ？ 我が造物主の知識でも、世界級アイテムの複数所持はごく一部のギルドのみ。それなのに全ての従属神に分け与えるとは、いったい……」

「ふっ、お前の造物主は不勉強だな。我らアインズ・ウール・ゴウンを知らないのか？」

「ア、アインズ？」

知らないわけがない。プレイヤーの間でも、世界級アイテムと言えど十一個所持している『アインズ・ウール・ゴウン』の名が最初に浮かぶことだろう。

そう、ミマモリの造物主も当然知ってはいた。

ただ、普通のギルドと認識していなかっただけなのだ。

『アレは危険だ。頭のおかしな奴らの巣窟だ。近付いてはいけけない。前のように装備を溶かされるのは、まっぴら御免なんだよ！』などと、記憶の中にある表現はどれも酷いモノばかり。

つまり——最悪だ。

スレイン法国が知らずしてちよっかいを掛けた相手は、史上最悪の存在。六大神が健在であったとしても、手を出してはいけけない化け物どもだったのだ。

死の支配者の賢者は満たしていた緊張と殺意を解き放ち、大魔王を真っ直ぐに見つめる。

力とは正直だ。

魔王の持つ赤き宝石、そして従属神が持つ秘法は、どんな言葉よりも明確に真実を伝えてくる。

ワールドの力、世界級の波動。

ミマモリは膝を付き、大魔王へ頭を下げる。

「降伏いたします。我が造物主、スルシャーナが遺せし世界級アイテム『聖者殺しの槍』を、どうぞお受け取りください」

「うむ、引き際を弁えているのは評価すべき点だな。それにたった一人で我らに立ち向かった勇氣には称賛を送ろう。自暴自棄なら話は別だが、着地点を用意しての特技は素晴らしいとすら言える。確かに、守護者の消滅と引き換えにするほどこの国に魅力は無いからなあ」

「まあ今回は相手が悪かった」と苦笑しつつ、モモンガはハンゾウにとらせた『聖者殺しの槍』をアイテムボックスの貴重品枠へ収める。

「モモンガ様、この者の処分は如何いたしましたでしょうか？」

「白磁の御肌に傷がつくところでありました！ 殺すべきでありんす！」

「無抵抗ノ者デアロウトモ、モモンガ様ノ敵デアレバ首ヲ刎ネルベキカト」

殺したくて堪らなかった守護者三名は、モモンガ様からお褒めの言

葉を頂く敵に嫉妬しつつも、「魅力のない国とは引き換えにできない魅力ある守護者」なんて脳内で変換された御主人様の愛に満ちた御言葉に身を震わせながら、数歩前へ出る。

主へ伺いを立ててはいても、殺すつもり十分なのだろう。己の愛すべき絶対支配者に刃を向けたのだから当然である。これは守護者でなくとも、ナザリツクに所属する僕しもべであるなら皆、同じ考えに至るはずだ。

「……少し黙れ」

触れれば身を裂きかねない鋭い空気に、守護者たちは青い顔で跪く。

どんな言動が不興を招いたのかは解らないが、モモンガ様の機嫌がよろしくないのは確かであろう。吹き上がる黒いオーラを前にして、アルベドらは縮こまるしかない。

第9話 「牧場魔王」

「この者は私を倒そうとした勇者だ。魔王へ立ち向かい、限りなくゼロに近い勝機を必死に掴もうとした挑戦者には敬意を払え。言っておくが、世界級アイテムの種類によってはこちら側が敗北していた可能性もあるのだ。戦局を見誤るなよ」

「そ、それは……」

敗北の可能性と言われても、アルベドには理解できない。自身の持つ最上級の頭脳をもってしても、愛する旦那様が退けられる未来など算出できないのだから。

シャルティアやコキュートスに至っては、何かの冗談であると思えないようだ。

「ふっ、そうか、そうだな。パンドラでもナザリックにある十一個の特性しか知らないのだから、お前たちが知らないのも無理はない」大魔王は宝物殿の天井へ視線を向け、遠い過去の記憶を思い出す。

「世界級には存在するのだ。たった一つでナザリックの全戦力を打ち砕ける、頭のおかしなぶっ壊れアイテムがな」

想像することは無理だろう。統括としてナザリックの戦力を把握しているからこそ、あり得ないと断言したくなる。

しかし、モモンガ様が虚言を弄することの方があり得ないので、全ては真実なのだ。

「そんなアイテムが存在するのなら、世界のバランスは崩壊してしまう」と、アルベドは『今まさにバランスを崩しているナザリック』を棚に上げて危機感を募らせる。

ただ、本当の恐怖は別にあった。

——『もしかすると、モモンガ様を害されていたかもしれない——

おそろしい。

心臓が激しく鼓動し、全身から汗が噴き出る。

そんな可能性があったというだけで、絶望が全身を駆け巡る。

だけど、忘れてはいけないのは『モモンガ様自身が全てを知ってい

ながらも、宝物殿へ踏み込んだ』身も凍る事実だ。

「モモンガ様……、どうか、どうかそのようなことはお止めください」「ん？ ああ、確認もせず宝物殿へ入ったのは……。アルベドよ、泣くようなことではない。魔王が勇者と戦う場合、そこには必ず敗北の可能性を残すべきなのだ。絶対に負けない決闘など、何の価値もない」魔王は淡々と、それでいて絶対の自信を込めて言い放つ。

「心配することはない。危機的状况に追い込まれてなお勝利する。それこそが真の大魔王だ。全世界が崩壊の憂き目に遭うような——そんな瀬戸際まで全種族を追い込まねば、ラスボスとして立つ瀬がないだろう？ まあ、そのまますべてを滅ぼしてしまっても構いはしないが」

「勇者の頑張りに期待だな」滅ぼす側とは思えない言葉を最後に、モモンガは豪華なローブをはためかせ、死の支配者の賢者へ向き直る。

「さてミマモリ、だったかな？ 勇者たるお前には何か褒美をやろう。望みはあるか？」

降伏した勇者に褒美を与える魔王など聞いたこともないが、ミマモリは『最後の希望』とばかりに魂からの渴望を吐き出す。

「お願い申し上げます！ スレイン法国の存続を！ どうかっ！ どうか!!」

既に神都は半壊し、住民も多数が踏み潰されている現状ではあるが、まだ壊滅したわけではない。副首都に南部都市、対エルフ戦に用いている砦など、人的被害の無い場所は結構残されているのだ。これ以上の虐殺さえ止められれば、国として生き残ることは可能であろう。

大魔王モモンガ様が許せば、の話ではあるが。

「ふむ、そうだなあ。これ以上殺しても特にうまみは……。ん？ ああ、そうか。よし、ミマモリよ。スレイン法国が存続することを、大魔王モモンガの名において容認しよう」

「モ、モモンガ様？」

「おおお、過分な御慈悲を頂き、まことにありがとうございます」

愛する旦那様の御言葉に異を唱えるつもりなど、妻たるアルベドに

はさらさらないが、戸惑うくらいは仕方ないだろう。

平伏しながら感謝の言葉を述べているミマモリですら、奇跡を賜ったかのごとく驚愕しているはずだ。

スレイン法国はナザリツクを——モモンガ様を覗き見ようとした愚か者である。潰されて当然のゴミであり、慈悲を与える価値すらない。

そのはずであった。

「ちようど思いついた案があつてな、人間の国を使って実験だ。今日この日より、スレイン法国は『牧場』とする」

「えっ？」と声が聞こえるような仕草であつただろう。ミマモリが顎骨をパカンと上下に広げる有り様は、誰が見ても『啞然』としているようにしか見えない。

「人間を繁殖させて『生まれながらの異能』や『武技』、『現地』にしかない魔法』などを研究させてみよう。パンドラの報告では水薬にも変化があるようだしな。それに人間は、どんなに弱くとも『最低経値』だ。他に使い道が無くなつたら集めて殺し、『強欲』に吸わせよう」

世界級アイテム『強欲と無欲』は、カンストプレイヤーが獲得できない余剰経値を溜めこむことが出来る。そして必要な時に使用することも可能だ。

だからこそ、経値たる人間は増やす価値がある。

国家として人間牧場を運営してくれるのなら、有難いことこの上ない。

「牧場……でございませうか、人間の……牧場」

「どうした？ 国家も牧場も大した違いはないだろう？ 不満でもあるのか？」

本当に不思議そうな、素晴らしいアイデアだろうと言わんばかりの魔王に、ミマモリは二の句が告げない。

ただ、己自身も異形種、死の支配者なのだ。

冷静に冷酷に、人間が、スレイン法国が生き残るためにはどうすればいいのか、答えを出せてしまう自分が恨めしい。

「不満などいささかも。スルシャーナから『行く末を見守るように』と命じられましたスレイン法国。それを残して頂けるなら、どんな形でであろうと感謝申し上げる次第であります」

「はは、『見守る』から『ミマモリ』なのか？ ネーミングセンスは『悟』並みだな。まあそんなことより——、お前は先ほどから自分の主を『スルシャーナ』と呼び捨てにしているな。召喚された副官としては違和感があるぞ。どういうことだ？」

牧場の件から召喚主の件へ、話題がぶん回されて思考が追い付かないミマモリであつたが、魔王からすると人間牧場など雑談の一つではない。

何百年も見守ってきたミマモリの苦悩など、知る由もないのだ。

それより今は好奇心が勝る。

殺されたと言われ、現時点においても姿を見せないプレイヤーの『スルシャーナ』。召喚主が不在、又は死亡しているにも拘らず副官として健在の『ミマモリ』。だが忠誠心に微妙な乖離を感じる。

そう、まるで絶対の主人と思っていないかのような……。

「現在、我が主『スルシャーナ』は死亡消滅しており、私との繋がりも切れております。本来であれば主の死に絶望し、自暴自棄となるところかもしれませんが、今の私は『野良』なのです。『スルシャーナ』は『ミマモリ』を『ギルド拠点の防衛NPC』として配置した後、ギルドを解散させました」

「なん、だど？」

ギルドの解散、それは何も珍しい話ではないが、『異世界で』となるという意味合いが異なる。

そんなことが可能なのか？ と己に問えば、マスターソースとギルド武器があれば確かに不可能ではない。

ナザリックでも、ギルドメンバー三分の二以上から権限を受け取っているので実行可能だろう。しかしそうなると宝物殿は？ ギルド武器は？ 防衛NPCは？ と多くの疑問が溢れ出てくる。

「スレイン法国は解散したギルドの残骸だど？ 宝物殿はそのまま残り、NPCは忠誠が外れ野良となる？ ならばギルド武器は？ ギル

「武器はどこにある!？」

戦闘の時より気が昂っているのではないだろうか？ 心配そうに見つめてくる守護者らの前で、大魔王モモンガは少しばかり目を輝かせていた。

未知を既知としていたあの頃のように。

「はい、ギルド武器はこの宝物殿に散らばっております。ギルド解散のあの日、ギルド武器は解体され、元の素材アイテム及びデータクリスタルとなりました」

「ほう、それは」魔王は新しい発見でもしたかのように骨の指を顎先に当て「ギルド武器として特別に増量されていたデータ容量が、無効にされたからだろうな」と金貨で溢れている宝物殿内部を見渡す。

「面白い、お前の話は実に面白い」守護者の嫉妬が渦巻く宝物殿で、大魔王は平伏している骸骨を褒める。退屈だったユグドラシルと比べて、異世界は新発見の連続だ。仕様の变化も多種多様であり、まだまだ発掘出来そうに期待が持てる。

「ふふ、少しばかり長話に付き合ってもらおうぞ」

「はっ、かしこまりました。偉大なる御方」

宝物殿内にクリエイト・プレイヤー・アイテムへ上位道具創造で黒曜石の玉座を創りだし、深く腰を掛けた魔王——の傍で、アルベドらに睨まれたままのミマモリは自身の知識を惜しみなく差し出す。

それは六大神、八欲王、十三英雄、そしてスレイン法国の歴史。プレイヤーがこの世界においてどのように生き、死んでいったかの物語であった。

「六百年前だど？」魔王はこの時になってようやく自身の思い違いに気付く。スレイン法国に入り込んでいたプレイヤーは、魔王と同時期に転移してきたわけではない。国家と手を組み、アイテムの提供やNPCの配置を行っていたわけではないのだ。

転移の時間軸が違う。

協力者ではなく建国者。

加えてプレイヤーは一人も居ない。高レベルの存在は皆、子孫であ

ると。

無論、法国に閉じ籠っていたミマモリの知識を鵜呑みにするのは危険だろう。他にもプレイヤーは居るかもしれないし、八欲王が遺したという「浮遊した城」以外にもギルド拠点はあるかもしれない。

その点はユグドラシルとさほど変わらないはずだ。

PvPの警戒はいつも通り、ギルド戦の用意も怠らず、敵対者は徹底的に叩き潰す。

そう、いつものナザリックだ。

魔王は最後に、宝物殿に残されている金貨が現地で作られた偽金貨であることを知らされて「はあ？」と骨の顎をカクンと下げてしまい、「スレイン法国が年に一度、ユグドラシルの偽金貨を数千枚用意して奉納するのです。いつの日か訪れるであろう、神の再降臨を信じて……」なんてミマモリの言葉に少しばかり考え込んでしまった。

当然ながら、法国国民の信仰心に心を打たれていたからではない。

エクステンジ・ボックスに偽金貨を入れたらどうなるのか？ と小さな未知を楽しんでいただけである。

「まあいいか。全部持っていくとしよう。シャルティア、僕しもべを呼んで全てをナザリックへと搬送させよ。仕分けはパンドラが行う」

「というか勝手にパンドラの奴がやり出すだろう」なんてボヤキを加えつつ、魔王は——嬉々として身体を寄せてくるヴァンパイアの頭をポンポンと叩く。

「か、かしくまりんした、モモンガ様！ 一切合財運び出すであります！」

「ふぐぬぬぬう、羨ましいいい!!」

「適材適所トハイエ、御勅命ヲ頂ケルトハ」

「こちら、お前たちは私の護衛だ。これからミマモリに案内をさせて、少しばかり法国首都を見て回るぞ」

「はい、(旦那様!)」

「ハッ、カシコマリマシタ」

「ぬぬぬうう、モモンガ様に何かを命じて頂けるんは至福の喜びに違いありませんが、護衛の任も御褒美みたいなものであります。わたし

しはどうすれば……」

何かに葛藤しているかのような美少女吸血鬼をスルーし、大魔王は宝物殿の外へと足を運ぶ。

そこにはアウラが配置した魔獣と護衛のハンゾウたち、そして粉碎した人間の残骸と瓦礫の上に立ち並ぶ——黒山羊五体が主の帰りを待っていた。

「ふむ、プレイヤーの不在が明らかになった現時点においては、過剰な護衛だな。魔獣はアウラの元へ帰してもよいだろう。ハンゾウはそのままでもいいか。黒山羊は……うん？　そういえば帰還する気配など微塵も感じられないが、いつ還るんだ？」

巨大過ぎる黒山羊の存在感が圧倒的であることに、モモンガは少しばかり首を捻ってしまふ。

『異世界における召喚の仕様』に変化があったことは、パンドラからの報告で判明している。通常召喚と死体を用いた召喚だと、後者の方が召喚時間を長く保てるらしい。というか、今のところ限界が判っていないので、もしかすると無限だったりするのかもしれないが。

（だとすると、百万人の魂を吸い上げて召喚された黒山羊たちはどうなるのだろうか？　さすがにこのままずっと、なんてことはないと思うが、まあどこかで遊ばせておけばいずれ判明するか）

人間を踏み潰し過ぎて赤く染まった巨木のような複数の足を眺め、モモンガは「よく遊んだようだが、まだ足りないのであれば南にあるという亜人の国家で暴れてくるといい。この場は牧場にするから、これ以上は壊さないようにな」と、プルプル触手を動かす可愛い子山羊たちを送り出す。

はつきり言って迷惑な話であろう。

大魔王にとつては『プレイヤーを誘き出すための陽動』としての意味合いもあるのだろうが、遊び場にされた牛頭人ミンタウロスや豚鬼オーク、人食い大鬼オーガの国家は絶望に打ちのめされるはずだ。

唯一の救いは、「いずれ経験値として吸い取りに行くからほどほどになあ」と黒山羊にかけられた魔王様の御言葉ぐらいだろう。

ただ、この時のモモンガは予想していなかった。

近い将来、遊びに行った五体の黒山羊が、砂漠地帯のオアシス上空に浮いている城のような建造物へ襲い掛かり、最終戦争のような騒動を起こすとは……。周辺地理に疎かった魔王様には分からなかったのである。

まあ、気にしていなかったとも言えるだろうが。

「ふくむ、結構生き残っているものだな。東側は全滅だが、西側はほぼ無傷だ。南北は半分ぐらいか？」

「偉大な御方の恩情のお蔭です。これからは牧場として人間の繁栄——いえ、繁殖に邁進したいと思います」

牧場としての生存を受け入れたミマモリは、生き残っている法国民の惨状から目を逸らしつつ、魔王へ平伏する。

「ああ、後で我が僕をこの地へ派遣するから、その者と相談して牧場運営を進めてくれ。それまではミマモリ、お前に任せよう」

「はっ、仰せのままに」
軽く神都を見回してみても、魔王の視界に目新しいモノは映らない。

神殿は全て崩壊しており、宝物殿以外は無数の瓦礫と黒い塵が降り積もるクレーターだけが存在感を醸し出していた。

遠くに見える住宅都市では、多くの人間が逃げ惑っているようだ。でもまあ、特に面白味はない。

この神都以外にもスレイン法国の都市は複数存在し、そこには多くの人間が事情を知らず生活しているはずだが、魔王がそんな些事を気に掛ける必要もないだろう。

面倒ごとは僕に任せればよいのだ。

大魔王たるモモンガにとって、勇者の居ない国家など家畜が蠢く牧場程度でしかない。つまり、『スレイン法くに用はない』ということだ。

「さて、シャルティアの様子でも見てからナザリックへ帰るとするか」

「はい、モモンガ様。どこまでも御傍に（もちろん寝室までも）」

「ハッ、カシコマリマシタ」

相変わらず妙な圧がアルベドから発せられるなあつとお馴染みな感想を覚えつつ、宝物殿での運搬作業がどの程度進展した気になっていたモモンガは、豪華なローブをはためかせながら足を向けようとしていた——のだが、ふと立ち止まると、骨の指を頭の側部へ添えていた。

「どうした？ デミウルゴス」魔王の口から洩れた名は、ナザリックへ戻した守護者のもの。負傷したこと、貴重な情報を持っているであろう老婆の尋問を行う為に、魔王の傍から外されてしまった、不運とも言える可哀想な悪魔の名であった。

アルベドとコキュートスは不測の事態かと気を引き締め、大魔王様の御言葉に——いつもときほど変わらないが——全身全霊を傾ける。「ほう、人形遣いの所在が判ったか。それは重畳」

『はい、モモンガ様。人形遣いの正体を含め、御満足頂ける面白い情報をお渡しできるかと。この老婆は情報源として、他に類を見ないほど貴重な存在であったようです。人形遣い関連以外にも素晴らしい情報を数多く抱え持っており、現在精査中でございます』

〈伝言〉^{メッセージ}から感じられるデミウルゴスの口調は、どこか嬉しそうだ。モモンガ様に楽しんでいただけの情報を得たからなのか、それとも己の失態を挽回できそうな材料を手にしたからなのか。

まあデミウルゴスからすれば、『己の失態』とやらもモモンガ様へ不利益をもたらす行為であるから挽回したいのだろうが……。

「今のところは人形遣いの件だけでよかろう。他の案件は、時間をかけてじっくりと確認すればよい」魔王は〈伝言〉^{メッセージ}を繋げたまま歩き出し「私はそろそろナザリックへ戻る。報告はそちらで聴くとしよう」とアルベドらにも聞こえるよう宣言した後、デミウルゴスとの通話を終了させた。

モモンガはしばらく散歩のように歩き続け、スレイン法国の惨状と、畏まっているミマモリを観察する。

「我が身を滅ぼすには至らなかつたな」小さく呟き、癖となっているため息を漏らす。

スレイン法国の底は浅かった。

ギルドはすでに解体され、宝物殿程度しか残っておらず、最強の個体はレベル90台の「白黒少女」と「ミマモリ」だけ。レベル70台や60台も数名いたが、魔王にとつては雑魚同然。コキュートスのように価値を見いだせるわけもない。

ただ、世界級アイテムが二つもあつたのは驚きであり、「もつと上手く運用してくれたなら、面白い戦いが出来たかもしれんなあ」なんて相手方の戦略に注文をつけたくなる。

「情報の価値、か」ギルドメンバーが語っていた重要にして最大の要素だ。モモンガはその言葉を口にしつつ、いずれ現れるであろう——ナザリックの監視網を掻い潜って魔王の首を狙う勇者へ、「早く来い」とぼやくのであつた。



リ・エステイーズ王国の北部には、複数の亜人種族と少数の人間種からなる都市国家——評議国が存在する。

評議国を率いているのは、五匹とも七匹とも言われている竜ドラゴンロード王で構成された評議院。数が不明確なのは『名前だけを置いている竜王』や『死亡している竜王』が構成員とされているからであるが、対外的には多いほうが都合なので特に訂正などはされていない。

評議国の東北にその巨大な亀裂はあつた。

竜ドラゴンの巨体すら飲み込めるであろう暗い亀裂の中へ降りて——徒歩では不可能だが——行くと、中腹には人では造り出せないほどの大きな穴があり、その奥には古代神殿にも似た大規模な施設が現存している。

とはいえ、誰でも入れるようにはなっていない。

『ワイルド・マジック 始原の魔法』で隠蔽が成されており、『そこにある』と確信していない者には、入り口すら発見出来ないのだ。他にも意識を外へ向ける魔法や入り口が壁に見える幻術など、複数の技で侵入者を防いでいる。

そんな誰も寄りつかないような僻地の最奥で鎮座し続けているの

が、評議院の一員であり、世界の崩壊を憂う最強の生命体、ブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王こと「ツアインドルクスⅡヴァイシオン」、通称ツアーである。

まあ「世界を気に掛けている」なんて言っても、苦境に至っている奴隷を解放するわけでもなく、餌となつている人間を助けるわけでもない。無論、巫人狩りに口を挟んだりもしない。

あくまで対象は世界であり、そこに住まう命。公正で平等な、生きとし生ける者たちの天秤を傾けない、バランスを保つことこそが主眼なのだ。

だから、友人のリグリットを消し飛ばす瞬間も躊躇しなかった。彼女が持つ情報は個人という範疇を超えて、あまりにも危険過ぎるのだ。敵の手に渡るなんて愚行は、絶対に阻止せねばならない。

特にギルド武器の情報は、世界を傾きかけない重大案件だ。

五百年たった現在でも、天空に座するギルド拠点。『竜帝』率いるドラゴンロード竜王たちが命を懸けて打ち倒した、三十もの従属神。資金枯渇——リーダーからの言げん——で半分以上は復活していないが、いまだ十数体の従属神が強大な力と共に眠っている。

その昔、『星に願ったリーダー』がギルド武器の装備資格を得て拠点の中へ入ったものの、出来たことと言えば拠点内の通行と、使えそうな武装やアイテムを数点持ち帰った程度だ。

どうやらギルドマスターとしては認めてもらえなかったらしい。

故に、危険な従属神は危険なままで、今も天空の城に待機している。常時活動しているのは数体らしいが、ギルド武器が破壊されたりすれば、生き残っている十数体の従属神が世界を破壊しようとする目覚まし、暴れ狂うのだろう。無論、下方に築かれた街などは全滅必至だ。許すわけにはいかない。

見過ごすわけにはいかない。

そう、今までは——今日この時までには、ギルド武器の安全な保管こそが最重要で最優先……だったのだが。

「こんなことになるなんて……、ごめんよりグリット。隠蔽魔法までかけて一キロも後方に待機してもらっていたのに、八欲王にすら見つ

からない高いレベルの隠密であったはずなのに、どうして……」

スレイン法国で暴れていた悪魔たち、そして「イジヤニーヤ」を思い出させる忍者型モンスターは、まるでリグリットがそこにいると最初から分かっていたかのように——「後方から戦場を観察するにはその場所が最適」だと読み切ったかのように突っ込んできた。

リグリットの捕縛を妨害できればよかったのだが、相手はいずれも高位のモンスターばかり。本体でならともかく、鎧人形のままでは手も足も——いや、手ぐらいなら出たかもしれないが……。勝算は低からう。

だから自爆を選択したのだ。

幸いにして、最上級の悪魔を含む数体の高位モンスターを巻き込むことができ、相手の戦力を大きく削ることに成功した。死体が残らないほど粉微塵に吹き飛ばしたのだから、蘇生も不可能だろう。

ただ、確実に居るであろう「ぶれいやー」の存在を確かめるまでに至らなかったことは悔やまれる。

「世界を汚す邪悪な存在であることは間違いないね。後は何名来ているのか、拠点はあるのか、従属神は……」

ツアーはブツブツと呟きながら、人形の視界で捉えた指揮官らしき悪魔を脳裏に浮かべる。

「あの眼鏡をかけた悪魔は従属神かな？ 誰かの命令に従って動いていたみたいだけど……。殺しきれてはいないだろうなあ。でも、あの程度なら私でもなんとかなるかも？」

八欲王との戦いを思い起こし、ツアーは「あの時に比べたらマシだろう」と少ない希望を必死に灯そうとする。

五百年前、八名の「ぶれいやー」と拠点たる浮遊城、そして三十体の従属神が現れたあの日。世界は破滅に陥った。

この世の全てを支配していた「真の竜王」たちは、欲望のままに暴れる愚か者たちを殺しに殺し、復活してきても殺し、己の命すらも使い尽くす最悪の消耗戦の果てに、八欲王を消滅せしめる。従属神も半数以上が復活できなくなるまで叩き潰し、拠点の機能も最低限にまで追い詰めた。

とまあ、そう言うと言えはいいが、結局は八欲王の仲間割れが根本の原因だったりする。従属神を仲間へ差し向けた八欲王の心境は、どのようなモノであったのだろうか？ 今でも時折、血の涙を流しながら魂を引き裂く悲鳴と共に自決した——天使のような従属神の姿が浮かぶ。

「邪悪な存在で数が多い場合は仲間割れが期待できる。でも数が少なければ、私が仕留めるしかないね。問題なのは従属神と使役モンスターだけど、ぶれいやーに気取られないよう少しずつ狩っていくしかないかなあ」

情報を集める為の接触は、最悪の展開で終わってしまった。判ったのは、『この世界を汚さんとする邪悪なる存在』の出現のみ。つまり、得られたモノは殆ど無いということだ。

最強たる竜ドラゴンロード 王は、巨大なドーム型の古代神殿中央にて、大きなため息を漏らしてしまう。

——コツコツ——

「え……、えっ?!」

「足音」であると、「複数の足音」なのだ気付くのに少しばかりの時間を要してしまった。

『そんなバカなっ』頭の中で驚きの声を上げても、足音は唯一の出入口側から響いてくる。隠すつもりもないのか、四体の人型らしき存在は竜ドラゴンロード 王の探知に捉えられながらも歩みを止めない。

「いったいどうやって?」

この地は知っている者しか入り込めない。誰かに場所を教え貰った程度では無理なのだ。『そこにある』という疑念の無い完璧な認識こそが、形のない扉を開けるカギとなる。故に偶然は有り得ない。

つまり、侵入者はこの地の情報を完璧に得ており、白金プラチナム・ドラゴンロードの竜王の存在を把握しているのだろう。

ツアーは無意識に、奇妙な形状の剣——ギルド武器を握り締めていた。

「……ん？ おっと、ようやく会えたか。さてさて、確かツアーという

名で呼ばれておったかな？ 『真の竜王』よ」

姿を見せたのは、真つ赤なローブを着込んだ骸骨だ。

上から下まで目が痛いほどの赤で統一されており、計六色にも及ぶ巨大な宝石をボタンのようにつけ、その周囲に金糸で奇妙な文字の刺繍が施されている。まるで派手という言語をフアツションで表現したかのようなのであるが、濃密な魔力の波動は凄まじく、竜の感覚に頼るまでもなくその価値は測り知れない。

手にしている赤き水晶が先端に付いた杖も、炎を纏わんばかりの真つ赤な魔力で満ちており、尋常ならざる魔法^{マジック・アイテム}具であることは一目瞭然であった。

「な、なぜ？ 生きて……」

骸骨に放った言葉ではない。ツアーが見ていたのは骸骨に付き従っている、従者のごときモンスターたちだ。

先頭に立つ薄衣の忍者型モンスターは、『^{ワイルド・マジック}始原の魔法』で跡形もなく消し飛ばしたはずだ。骸骨の左側に控える、角と翼そして強大な怒りの炎を纏う最上級の大型悪魔も、逆側に居る青年のような悪魔と共に至近距離で木端微塵になったはずである。

見間違うとは思えない。

身に纏う気配からも、あの時爆発に巻き込んだ相手であるはずだ。

「ああ、この者たちが世話になったな。今回の訪問は、そのときの礼も兼ねておるわけだが……。とりあえず自己紹介といこうか。我が名は『アエリウス』、プレイヤーとしてこの地に降臨した、絶対にして至高の存在！ ——^{オーバーロード}死の支配者である」

第10話 「現断魔王」

「な、なにがどうなっているのか、どうやってこの場所へ入ってきたのか、色々と分からないことだらけだけど……。私の前に『ぷれいやー』が姿を見せるなんて、大失態もいいところだね」

瞳に強い殺気を漲らせて、ツアーは喉の奥を震わせる。

「竜の吐息」の準備だ。電気属性を宿している上に魔力も籠っている。通常の防御魔法では完全に防ぐことなどできない。しかもこの地は、ブレスから身を隠せない地形なのだ。ツアーの居る位置から出口までは巨大な筒状になっており、ブレスの威力は全体に行き渡る。大砲の筒の中で、砲弾と火薬の爆裂を受けるようなものだろう。間違いなく死に至る。

更にツアーは、ブレスの直後に始原の魔法を放たんとする二段構えで骸骨を見据えていた。八欲王ですら討ち取れる最強の布陣だ。洞窟のような地下深くの遺跡で、転移も妨害されているとなればどこへも逃げようがない。

「くかかかかか、たいそんな自信であるな。転移阻害により逃走を阻み、〈伝言〉も遮断しておるから助けも呼べん、か。よい、よいぞ竜王よ。対策を怠らんその姿勢には称賛を送るとしよう。だが一つ聞きたい。〈不死の奴隷〉という魔法を知っておるか？」

「……………」

耳慣れない言葉に「本当に魔法の一種なのか？」と疑問を持つが、その気持ちを表に出すことはない。無知を相手に知られることは情報戦において痛手であり、不利になることを意味する。だが、知らない事実を誤魔化そうにも材料が足りないので無言となるしかない。

「くくく、なるほど、なるほど。その存在すら知り得ていないのであれば、阻害できるわけもなし、か。まあ、手土産代わりに教えてやろう。〈不死の奴隷〉とは、己の感覚器官を召喚アンデッドなどとリンクさせる補助魔法だ。今も発動中だぞ。私の視覚と聴覚は御方とリンクし、この状況をお伝えしておる」

「え？ 御方？」おかしな物言いに、ツアーは小さな骸骨を見つめてしまふ。

「ふれいやーたる異世界からの漂流者は、この世界において覇者であり絶対強者だ。多様な従属神を従えていることはあっても、神にも等しいふれいやーが誰かに従うなんてことはあり得ない。」

ツアーは嫌な予感と共に「まさか、君たちは従属神なのか？ ふれいやーは……他に居る？」絶望にも似た感情を零していた。

「ふむ、従属神を守護者の方々と仮定するならば、我らは末端も末端よ。偉大な御方に「眼」としての役目を与えられることすら望外の幸福とする、一介の僕しもべにすぎん」

「いつもは本の埃を掃っておるぞ」なんて骸骨の言葉に、竜の喉がゴクリと鳴る。

『その実力で一介の僕なのか』『勝てそうだと思っていたのに』『この地形で迎え撃てるという幸運に感謝していたはずが……』

ぐるぐると高速で巡る思考の渦にのみ込まれまいと、ツアーは必死に活路を見いだそうとする。

まだ相手の戦力は確定していない。だからこそ勝手な思い込みは厳禁だ。ツアーが拠点にしている神殿遺跡は地上から百メートルほどの深きにあり、入り口は一箇所。攻め込んできたなら竜ドラゴンの吐息で一網打尽が可能であろう。

世界の頂点たる最強の生命体、白金プラチナム・ドラゴンの竜王のブレスを受け続けてツアーの元まで辿り着ける化け物なんて、八欲王でも数名しか――

――ズン!!

大きな揺れが一度。「な、なにが？」と口にする前に、さらなる大きな揺れが二度続く。次に五度。次は三度。

「え？ ええっ？」ツアーの戸惑いを無視し、地震とも思える揺れは幾度も続き、数えるのも億劫なくらいに巨大な遺跡を振動させていた。「この地に地震なんて！」起こるはずがない、というのはその通り。硬い岩盤があるからこそ神殿はここに造られたのだし、竜王も優れた拠点として選んだのだ。

――ゴゴゴッ!!

続く衝撃は地上からのものだろう。まるで天空に浮かぶ星々が地面へ衝突したかのような——有り得るはずのない轟音を耳にして、地下深くの遺跡に座するツアーは危機感を募らせる。

「なにを?! 地上で何をしているんだ?!」ツアーの必死な問いかけにも、小さな骸骨は肩をすくめてからかかっているかのようには答えを出さない。間違いなく関係しているだろうに、そして自分たちも無事では済まないだろうに、忍者と悪魔と骸骨は、激しく揺れ動く神殿遺跡でも平然と竜王を見つめていた。

——ギンツ!!

圧倒的な力が天井を押し下げ、複数の瓦礫が竜王の傍に落下してくる。

いつ落盤が起きてもおかしくない状況だ。

「私を生き埋めに?」侵入しての殺害が不可能だと判断し、住処ごと破壊する。その思い切った手法には驚嘆したくなるが、「悪手だろうね」と少しだけ悪い笑みを漏らしてしまう。

古代遺跡の天井が崩れたなら、膨大な岩石が己と侵入してきた四体のモンスターを襲うだろう。転移が出来ないのだからモンスターたちは逃げられない。天文学的な圧力を前にして、手も足も出さず死に至るだろう。死体も回収できまい。

だがツアーは違う。

阻害されているのは侵入者の転移だけであるが故に、簡単に逃げられるのだ。拠点を潰されるのは痛い、派手に崩壊してくれるおかげで逃走は楽だろう。逃げ先も誤魔化せるに違いない。

——ギンツ!!

あまり聴いたことのない、大きな固形物が瞬時に消し炭となるような——まるで蒸発するかのような、そんな奇怪とも思える轟音がツアーの耳に届く。

「え? えええええ!!」降り注ぐ岩石を避けたツアーが天井を見上げれば、有り得るはずのない——そう、絶対に視界に入るはずのない、竜の身では実に久しぶりとも言える、眩し過ぎる太陽光が竜眼へ飛び込んできたのだ。

「穴を……あけたああ？」

自分でも間抜けに過ぎると言わんばかりの眩きであろう。

しかし誰がその事を責められるだろうか。この場所は、地下百メートルもの深き地の底に存在している古代の遺跡なのだ。蟻が通り抜ける小さな穴ですら、まともに通せはしまい。

「巨大な……光の剣？」何度か瞬きをしてみると、日差しの中に溶け込むような大きな剣が見える。

どうやら穴を開けたのは、周囲の土砂や岩を溶かし蒸発させているのは、この巨人ですらもてあますような陽炎のごとき神の大剣なのであろう。

鉱物すら蒸発させるといふ常識外れの行いからして、人間種や亜人の産物とは思えない。ツアーが知る竜ドラゴンロード王の中にも、そんな奇跡を起こせる化け物はいない。

「こんな……、こんなバカげた真似が出来るのは……ぷれいやー？」

私に出て来いって、穴倉から顔を出せって言っているのかい？」

「くかかか、ノックをしてくださったのだぞ、お答えするのが礼儀ではないのか？ まあ、私なら平身低頭、即座にお出迎えするところだな」

一切の動揺を見せないところからして、乗り込んできた骸骨には全てが確定事項であったのだろう。敵地へ乗り込んでツアーの姿を確認し、未知の魔法で情報を伝達。次いで拠点まで穴を開け、引き籠っているトカゲ野郎を引っ張り出そうというのだ。

ツアーにしてみれば、罅ぬぐらは瓦礫で埋まり、天井には大穴。張り巡らせていた結界の機能も、時間と共に効果を失っていく。

このまま動かない、なんて選択肢はもはや無い。

「君たちは……、怒り狂った私に殺されるとは思わなかったのかい？」

今からでも十分実現可能なんだよ」

「なにを問うのかと思えば……。この世界における最強の存在と相対し、雌雄を決すのだぞ。我ら数名の命ぐらい使い捨てにするのは当然であろう。それに御方のお役に立てる現状を嘆く者がどこに居ようか。我らは今、感謝の念しか持つておらん」

嘘偽りなく、骸骨の歓喜はツアーに伝わる。ならばもう、八つ当たり気味の殺害は何の交渉材料にもなりはしないだろう。ちなみに骸骨に付き従う悪魔と忍者は、ツアーに顔を見られているから此方が何者なのか伝わり易い、という理由で従者の任を願い出たそう。もう一度殺されるかもしれないというのに。

竜王は軽いため息を吐き、どんな鞘でも納めることが出来ない奇妙な形状の剣——ギルド武器を丁寧に、優しく握む。

「私の命運もここまでは、かな？　はあ、ふれいやーが相手であっても、ある程度は戦えると思っていたのに……。今回の相手はちよつと無理そうだよ。派手に暴れるふれいやーには慢心が付き物——じゃなかったのかなあ」

自分の力に酔ったふれいやーなんて相手ではない。

雑魚相手にやりたい放題で、MP消費にも気を向けていないのだから簡単に殺せる。即時蘇生のアイテムを所持していることも承知済みなので、相手が混乱している間に迅速な追撃にて二度目の殺害を行うのだ。

それで「れべるだうん」。武装も剥ぎとれる。

後はどこかで復活したふれいやーを探し出して、徹底的に叩き潰すのみ。消滅するか、復活を拒否するかはご自由にどうぞ、である。

ふれいやーは、最後の最後まで混乱したまま消えていく。異世界への転移や自分自身の変異。懇切丁寧に教えてくれる「神」などいるわけもなく、恐るべき力を持った「ちーと」状態で、見知らぬ世界へと放り出され、そして暴れたり引き籠ったり……。ツアーにとっては有り難い状況だ。

何しろこちらは知っているのだから……。百年ごとの繰り返し、魔神のごときふれいやーの能力、そして理解を超えた戸惑いと望郷の念を。

(リーダー、君の知識をもっと得ておくべきだったよ。まあ、今更だけどね)

ブラチナム・ドラゴンロード

白金の竜王は過去を振り払い、巨大な翼を広げる。幾度かはばたいて風を捉え、魔法の力と共に飛翔しては、天井の大穴へ飛び入る。

既に光の剣は消え失せており、その場には数百年ぶりの——地下遺跡には初となる——太陽光が降り注ぐばかりだ。

天を向くツアーの瞳に敵の影は見えない。

大穴の先に見えるは青い空と、僅かばかりの白い雲。太陽の位置からして、ちようどお昼時だろうか？

ふふふ、と苦笑が漏れる。

死ぬには悪くない天気だね、と何処にもいない仲間へ声を掛ける。

さあ、世界を救おう。



頑強な地盤が悲鳴を上げている。

無理やりかき回されているからか？ 何百年も動かなかった大地が、身を引き裂かれるかのような耳障りな音を響かせつつ、グルグルと地上にて巨大な渦を作り出していた。

音からすると硬質岩が主体の地層なのであろう。高位のドルイドである闇妖精ダークエルフであっても、なかなか大変な作業であるようだ。

「あ、あの、モモンガ様、深層部の岩盤も砕きました。こ、これで大丈夫だと思います」

「見事だな、マール」

岩と僅かな植物だけで構成されている辺境の荒野。そんな人氣の無い大地の上空でふわふわと浮遊するのは、世界滅亡級の化け物たちだ。

「次は、デミウルゴス」

「はっ、お任せください。——〈魔法三重最強化・隕石落下〉！」

渦を巻く荒地の、まるで的当ての標的であるかのような地表へ向かって、町一つを消滅させかねない巨大な隕石が、それも複数降ってくる。

大気を震わせ、岩肌を摩擦で焦がす隕石群。

まるで怒りを表現するかのように真っ赤に染まった巨大な岩弾は、大魔王の前を素通りし、そのまま大地へとめり込んで、弾け飛んだ。

「流石に竜の巢は深いな。ではアルベド」

「はい、モモンガ様。——世界級アイテム、真なる無、発動！」

マールレが緩め、デミウルゴスが穴を開け、アルベドが打ち砕く。

守護者統括が放った青白い光の束は地上の大穴へと降り注ぎ、邪魔な岩盤をまるで砂糖菓子であるかのように粉碎していくのであった。

「ほう、久しぶりに見たが大した威力だ」大魔王は満足げに頷くと、仕上げとばかりに両手を掲げて詠唱を始める。

「発動まで待つのは面倒だからな、とつとつとやるぞ！ 天上の剣！」

貴重な課金アイテムを握り潰し、大魔王は超位の力をもって、大地に神の大剣を突き立てる。既に巨大な穴が何十メートルも掘られており、その下も緩んだ地層になっているので、ホールケーキにナイフを切り入れるがごとき軽快さだ。

ただ、あまりに綺麗な刺さり具合だったので、モモンガも「地下神殿に居る竜王まで巻き込んでいないだろうなあ」と少しばかり心配になっっていた。

「ん、多少崩れ落ちはしたが、ペチャンコにはなっていないようだな」リンクしている僕の視界から竜王の無事を確認し、魔王は必要のない一息を入れる。

「では最終決戦だ！ 白金の竜王！ 早く出てこい！」

魔王は漆黒のオーラを噴き上げ、空中から地上に開いた大穴を見つめる。

巨体の竜が十分に通れる大きさであろう。多少歪ではあるが、膨大な土砂を溶かし蒸発させたので、どこかが塞がっているようなことはない。

ボフツ！ バサアツ！ 日差しを浴びて輝く白金の塊が、巨大な翼で視界を遮る。

「——まったく、ふれいやーは皆、わがままだね」

「ふん、竜王に比べれば可愛いものだろう？」

阻むモノなど何もない空中にて、大魔王と竜王は相対す。とはいえ、その一方が揃えんとする戦力は最終戦争級だ。

ゆつくりとした速度で魔王の前へ浮遊してくるのは、神殺しの武器かと思える神器級及び伝説級ゴツズ レジエントをその手に持つ、碧い蟲の王。そして竜燐すら容易く貫くであろう白いランスを構えた、赤い鎧の吸血鬼ヴァンパイア。

二人の後ろには、太陽ですら射貫けそうな神弓を持つ闇妖精ダークエルフが一人。

魔王の左隣には、スーツを着込んだ——ツアーには見覚えのある眼鏡悪魔が微笑みと共に佇み、右隣には漆黒の全身鎧を纏う、女性らしき戦士が——何故かクネクネしながら——浮遊していた。

加えて、父親の背に隠れる人見知りの娘であるかのように魔王の背後に居たのは、黒い杖を抱え持った闇妖精ダークエルフだ。無論、ただの女の子——いや、ただの子供でないことは、無感情の瞳に寒気を感じるまでもなく、ツアーには解っていたのだが……。

「さあ、派手にやるとしよう！ 貴様のギルド武器がどの程度のモノか見せてくれ！」

「えっ？ あ、その、ちよつと待って！」

複数の蛇が絡み合った黄金レブリカの杖を掲げ「ギルド武器に見合った戦力を揃えたぞ！」とやる気満々だったモモンガに対し、ツアーは慌てて両手と尻尾を振る。

「む？ なんだ？ せつかくのイイ展開が台無しじゃないか」派手な魔法の応酬を期待していたのか、魔王の骸骨顔には少しばかりの不満が見える。

「水を差したのは悪いと思うけど……。そもそも私はギルド武器を使えないよ。これは保管しているだけさ」言葉と同時に奇妙な形状の剣を掲げ、ツアーは「なぜ私がギルド武器を使えると思ったんだい」と生きた心地がしない危険な状況の中で問いかける。

「は？ 使えない、だと？ んん？ どういうことだ、デミウルゴス？」

「はっ、確かに『竜王がギルド武器を使用している記憶』を老婆は持っていますでしたが、拠点侵入の件から装備できることは間違いありません。ギルド拠点から部外者がアイテムを持ち出すなど、ギルド武器を利用する以外に方法は無いかと」

復活させた老婆の脳には、確かに八欲王のギルド拠点『浮遊する城』への侵入記憶が残っていた。それは、ナザリツクへ部外者が侵入すると同義であり、無事に済むはずのない有り得ない状況。ツアーが所持しているギルド武器を、どうにかして使用可能にした——としか思えない。

「ちよ、老婆つて、まさかりグリツトを！ そんなバカな?! ——いや、だから私の住処へ入ってこられたのか。なんてっ、なんて常識外れなんだ」理解する必要は無いのだろう、現実はいつも奇妙なものなのだ。ツアーは十三英雄との思い出を脳裏に浮かべながら「はあ……だけどもあ、ふん、今更……かもね。ああそれより、ギルド武器を使って『ギルド拠点』へ入ったのは『星に願ったリーダー』だよ。私たちは付き添っただけさ」

ぷれいやーの奇想天外ぶりには慣れていたつもりだったのに、ツアーはまだまだだったと思ひ知る。僅かに残っていた戦闘意欲も掻き消えそうだ。

「星に願ったあ？ お、おお、ウイッシュ・アポン・ア・スターへ星に願いを使用したのか。あの魔法にそんな使い道があったとは……」

「誤解を招かないように付け加えておくけど、結局ギルドマスターとしては認めてもらえなかつたんだよ。おかげで『八欲王のギルド拠点』は、危険な『従属神』をたくさん抱えたままこの世界に在り続けている」

「だから暴れるな、大人しくしている、拠点の軍勢と戦いたくはないだろ？」なんて言葉の中に含ませてみても、ツアーの思惑など『どこ吹く風』だ。世界を幾度も滅ぼせる大魔王にとっては、ゲームイベント程度にすぎないのかもしれない。

「『空に浮かんでいる城』にも興味はあるが、まずは竜退治だ。とはいえ、ギルド武器込みで態勢を整えていたからな、このままでは過剰か……」

魔王は軽く手を振り、前衛としてツアーの前に立ち塞がっていた守護者数名を横へ追いやると、ふわふわと軽やかに空中を進み出る。

「では白金の竜王よ、ブラチナム・ドラゴンロード一対一のPVPだ！」

「へっ?」

背後に『魔王降臨』の四文字エフェクトが見えそうになるほど、自信満々に魔王は宣言するものの、竜王にその意図は伝わらない。

世界を滅ぼせる従属神を何体も引き連れておきながら一対一とは？ 付き従っている従属神も何故止めないのか? 『魔王様ご乱心』と叫んで押さえつけるべき案件だろうに!

もつとも、従属神改め守護者たちも——拳に力を込めながら歯軋りしている様子からして止めに入りたいのであろう。事前に魔王から敵命でもされているのか、『私の楽しみを奪うな』とでも言われているのか、悲しみに潤んだ瞳からは、絶対の主たる魔王への忠誠心がドバドバと溢れんばかりであった。

「本気なのかい? 私には——」

「ワールド・マジック始原の魔法」が切り札なのは承知している。それに己の魂を限界まで絞りつくせば、プレイヤーを複数人消滅させることも可能なのだろうか?」

「ふはははは、だからこそだ」魔王は楽しそうに三つの魔法陣を浮かび上がらせて、自慢のオモチャを披露する。

「こちらだけが相手の手の内を知っているのは不公平だからな。教えてやろう。この三つの魔法陣には、全て^{トリプレットマジック}魔法三重最強化^{リアリティ・スラッシュ}。現

断^リが込められている。そして私自身が同じ魔法を唱えると同時に魔法陣も開放し、合計十二の「次元をも切り裂く刃」でお前を襲う」

魔王は必要ないはずの一呼吸を間に入れ、ツアーへ言い放つ。

「勝負だ、ツアー。私の「現断」とお前の「始原」。正面からぶつけ合って勝敗を決めよう!」

「なんて……嬉しそうなんだ」ツアーが無表情の頭蓋骨から読み取った感情は、歓喜であった。

全力を出せる喜び。

負けるかもしれないというドキドキ感。

そして、己の切り札をお披露目できることへの感動。

竜王は巨大な翼を一度だけ大きくはばたかせ、高速思考で自分の勝

算を算出する。

「——くっ、これはっ！ 武装が凄まじ過ぎて上限が解らない!? しかも、強化魔法の反応が十五以上?」
「次元をも切り裂く刃」とは八欲王も使っていた魔法だと思っけど、魔法陣に込められている魔力は桁違いだ。それが三つ? しかも同じ魔法を更に唱えるだって?」

私を神とでも思っているのか?! それになんだよ! お腹の赤い球はっ! 私を世界ごと破壊するつもりかっ!!」

「どうした竜王よ。私としては、いい勝負になると思っているのだが……」

「はああ、残念だけど……、無理だね。限界まで生命力を使い尽くしても、その魔法陣三つ——いや、神々の奇跡により私が未知の力に目覚めて全てを相殺させたとしても、力を使い切って弱体化した私は飛ぶこともできず、地面に激突して死んでしまうよ。もしくは地上の貧弱な獣に襲われてお終いさ」

元々『始原の魔法』は全盛期の力を持ってはいない。ツアー自身も最強の使い手とは言い難い。八欲王時代なら『もしや』と思える——
「竜帝のような——竜王はいたかもしれないが、現代においては白金の竜王を最強とするしかないのだ。」
ブラチナム・ドラゴンロード

それに生命力を使い切る行為は、大幅なレベルダウンに等しい。大魔王の切り札を相殺するような大偉業を成すのであれば、最強の竜王も野良犬並みに転げ落ちることだろう。

だからもう、打っ手はない。

「……降参だ、降伏するよ」

たとえ降伏したとしても、待っているのは死であろう。本当なら最後の最後まで抵抗して、従属神の一人でも道連れにするのが正道なのかもしれない。

だけど、相手は話が通じそうな大魔王だ。

希望の糸は、まだ途切れていないのかもしれない。

「む? うむむ、そうか。それは非常に残念だが……、ああ、そうか!

人形の自爆で『始原の魔法』を行使していたな! だから疲弊していたのか! くそっ」

「え？ いや、使いはしたけど、結果は同じ——」

「申し訳ありませんモモンガ様！ 私が自爆を誘発してしまったせいで、御身の楽しみを邪魔してしまいました！ この罪は——」

「デミウルゴスの責任ではありませんわ、モモンガ様。敵戦力の正確な把握を行えなかった、わたくしにこそ問題があったかと。どうか私に罰を——」

「ちよつ、ズルいでありんすよ、アルベド！ 自分から罰をもらいに行こうとするなんてっ！ モモンガ様！ わらわにも何か罰を——」

「何かって、もう少し誤魔化そうよ。モモンガ様も困っちゃうじゃん」
「う、うん。お姉ちゃんの言う通りだと、お、思うけど……僕も」

「ナンノ話ヲシテイルノダ？」

小首を傾げるコキユートス同様、モモンガも「なにがなんだか」と呆れ顔だ。

最強の竜王たるツアーの——命を懸けた最終奥義を見ることは叶わなかったし、全力でのPVPも行えなかった。それは確かに残念だし、不機嫌になり得る事実だ。

だがしかし、相手の残された力を見誤ったのはモモンガ自身の失態であって、守護者の誰かが悪いのではない。そもそも竜王の能力探査を最小限に抑えさせたのは、魔王の判断なのだ。

相手が竜王一体なのは判明していた。

ギルド武器を持っていることも、世界の最強種であることも判っていた。

ならば、それ以上を探るのは野暮というものだろう。

プレイヤーが籠るギルド拠点への侵攻ならともかく、竜王との腕試しにまで「ぶにつと萌え」の教えを貫くのは興がさめる。

「むう、ようやく勇者を見つけたと思ったのだがなあ」

老婆の有用で過剰な情報から、ツアーの存在を知った。

異世界における最強の生命体。体系の異なる「ワールド・マジック始原の魔法」。おまけにギルド武器を所持しているとなったら、それ以上の情報は楽しみを減衰させるだけではない。

ナザリツク勢が全力をもって戦える相手は、プレイヤーを除くと竜

王だけだろう。だからこそ、それなりの期待と共に最強の布陣で正面からぶつかりに来たわけだし、最終的に一対一の決戦を行うことも織り込み済みだったのだが。

モモンガは精神抑制が働かない程度の残念さを抱えて、深いため息を吐いていた。

「仕方ない、降伏した勇者を殺すのはつまらんからな。ではツアーよ、仲間探しの旅へ出るがよい」

「はへ？」

思わずギルド武器を落としそうになるが、気を持ち直して受け取った言葉を反芻してみても、やっぱりおかしな返事が出そうになる。

「な、なにを言っているんだい？ 君はっ」

「なにつて……。魔王に敗れた勇者が、再戦のために仲間探しの旅へ出るのは定番中の定番だろう？ この世界にはまだ複数の竜王が生きている、と老婆の記憶にあったぞ。それに海上神殿の最下層で寝ているというプレイヤーも起こしてこい。大魔王討伐の勇者チームを編成し、我が居城“ナザリック地下大墳墓”へ攻めてくるのだ。ふふ、期待しているぞ、勇者ツアーよ」

「滅茶苦茶だよー」ツアーは魔王の嬉しそうな語りを耳にしながら唾然とした表情と共に愚痴を吐くものの、期待している自分に気付いてしまう。

天空を飛び続けているアイツをどうやって引っ張ってこようか、地の底に籠っている偏屈野郎をどう説得するのか、海上神殿への侵入方法は？ などなど。無意識の内に計画を立ててしまう。

生きることを諦めていたつもりだったのに、魔王の言葉で意欲が湧くとは、なんとという皮肉なのだろうか。笑いさえ込み上げてきそうだ。

「そちらに何の益も無さそうなのに、本当にいいのかい？」

「疑い深い竜だなあ。大魔王が己の言を違げんえることたがはないから安心しろ。配下の者にも『勇者出立』を傳達しておくから、追手なんかも放たれたりしないぞ」

面倒臭そうに骨の手をヒラヒラさせる魔王は、竜王を送り出そうと

する最後の瞬間「おっと、忘れるところだった」とツアーに顔を向け、片手を差し出しながら骨の顎を開く。「ギルド武器は置いていってもらうぞ。構わないな？」

当然と言えば当然であろう。

危険で強力な、この世に二つとして同じモノはないギルド武器。

『特定の人物しか使用できないから』と言って放置してよいものではない。そう、この異世界には『生まれながらの異能』なんて厄介な特殊能力が存在するのだから。

「お願いできる立場でないのは解っているつもりなだけど……」

「ああ、拠点の扱いなら任せておけ。ギルド武器を破壊して、お前たちの言う『従属神』とやらを放逐するつもりはない。この世界を壊してよいのは、私だけなのだからな！」

大穴の開いた荒野の上空にて、豪華なローブを派手にはためかせる大魔王は、「モモンガ様、まじかっけー！」とか「ゾクゾクするでありんすー！」なんて桃色の声援をバックに、ブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王からギルド武器——刀身が複数に枝分かれしていてどんな鞘にも収まりそうになり奇妙な剣——を受け取る。

「ナザリック周辺を蹂躪したら、八欲王のギルド拠点でも攻めてみるか。高レベルNPCがたくさん居るようだし、今から期待が持てるな」

モモンガの呟きに「やつぱり渡すべきじゃなかったかも？」と思いつい悩んでも、他に選択肢はなかったのだからどうしようもない。

ツアーは何故か勇者に認定されてしまったのだ。ならばもう、考えるべきは魔王討伐の一点のみ。不本意ながらも。

(なんで竜種の私が勇者なんだよお)

竜王の苦悩は、機嫌の良さそうな魔王には伝わらない。キヤーキヤーと声援を送っている守護者たちの眼にも映らない。

最強だった竜王は、敗走の勇者と成り果ててしまったのだ。勝算があるのかも判らない、いや絶対無理だろう、そんな魔王討伐へ駆り出される有り様。世界中の生き残っている竜王を集めても、その者たちは八欲王から逃げて大陸戦争に参加しなかった臆病者らなの

だ。『始原の魔法』もツアーほど使いこなせるとは思えない。ぷれいやーとの戦闘経験だつて、ツアーの足元にも及ばないだろう。

(あくあ、物語に登場する人間の勇者つて、こんな絶望感に打ちのめされながら戦っていたのかなあ。それでも物語ならハッピーエンドだろうけど、私の場合は……。リグリットも大丈夫かなあ。生きているのか死んでいるのか。まあ、消し飛ばした私が心配するのもおかしいか。どうせ私が勝てなかったら助け出すことも不可能になるんだし……。最後の希望は『ぷれいやー』が持つ『ユグドラシル』のアイテム、ぐらいだろうか?)

ツアーは手元を離れたギルド武器、そして大穴の奥底で瓦礫に埋まってしまった己の住処を悲しそうに眺め、ため息と共に数度はぼたく。

「じゃあ、大魔王モモンガ……。様、私は行くよ。仲間を探しに、ね」
「おお、元気でな勇者ツアーよ。私の度肝を抜くような最強チームを連れて来てくれ。あつと、私に肝は無いがな」

最後の一言が冗談なのかどうなのか、笑つていいのか駄目なのか、ツアーはしばらく固まったまま、己の運命を呪うことしかできなかつた。

ちなみに「悟のせいだ！ 悟のセンスが私にうつつたに違いない！」なんて魔王が呟いたかどうかは、真偽不明である。

第11話 「必罰魔王」

世界が破滅に傾いていることなど、矮小なる人間には解らない。

それでも地軸を揺るがす振動と天を黒く染める爆炎の雲を——遠目ながらも目撃してしまえば、この世の終焉を想像してしまうものだろう。

そう、バハルス帝国にも当然居たのだ。

ただしその者は漠然とした予感などではなく、国家存亡の危機感を募らせて行動に移ろうとしていたのだが。

「なぜ誰も報告をよこさんのだ?!」^{メッセージ}〈伝言〉での一報ぐらいすぐに出来るだろうがっ!」

帝国首都アーウィンタールの帝城にて、皇帝「ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス」は苛立ちを抑えずに吠えていた。

他所の影響を受けにくい皇帝執務室でも感じられた地響き。咄嗟に窓を覗いて視認した真つ黒な天上の雲。方角的には、スレイン王国の神都であるかのように思われた。そしてただ事ではないとも感じられた。

故に魔法詠唱者を組み込んだ複数の偵察部隊を送り込んだのだ。中にはスレイン王国への正当な使者として、正面から向かった者たちも含まれている。

「これは……何者かの妨害にあつて全滅した、と判断すべきでしょうな。我が弟子の実力からして考えにくいことではありましようが」

長い白髭を撫でながら、帝国最強の首席宮廷魔法詠唱者「フールーダ・パラダイン」はため息を吐く。そんな老人の口調からは、偵察隊の任務不達成を嘆いているのか、優秀な弟子の喪失を惜しんでいるのかは判らない。

「全滅だと?!」^{ヒポグリフ} 驚馬で空からも行かせているのにかっ!」

虎の仔たる皇室空護兵団まで引つ張り出したのだ。それで得られたモノが何も無いなんて悪夢でしかない。

「この地からでも見える巨大なきのこ雲だったのだぞ。スレイン王国で問題が起こったのは間違いない」皇帝は適度に沈み込むやわらかく

も豪華なイスに深く腰掛け、左手先をこめかみへ添えながら唸る。「森妖精^{エルフ}、もしくは南部の亜人国家から攻め込まれたのか？ それとも内乱か？ 法国は良くも悪くも人類の守護者なのだ。倒れてもらつてはこちらが困る」

皇帝の言葉を最後に、防音に優れた執務室が沈黙で満たされる。

誰も情報を持っていないのだから仕方がない。真実にしろ虚偽にしろ、議論する材料があるのなら前にも進めようが、何も無いのでは進む方向すら定まらない。

「……で、陛下。つい先程聞こえてきた、西方からの爆発らしき異音はどうしますか？」

沈黙に耐えかねた四騎士の一人、雷光「バジウツド・ペシユメル」が誰も触れようとしなかった禁忌を持ち出す。それは帝国の西に広がる大山脈の、さらに西側から響いてきたであろう大窓をビリビリと振るわせた波動の件だ。

「山脈の西側で噴火でも起こった——と想いたいのは山々だが、スレイン法国の変事と無関係ではないだろうなあ。しかしあちらには評議国がある。帝国からは距離もあるし、任せるしかあるまい。それより今は法国だ。何とか情報を集めないと……。一番近い都市は王国のエ・ランテルだったな？ 何か報告は来ていないのか？」

帝都まで響いた爆発振動なのだから、エ・ランテルでは地震のごとき体感であったはずだ。当然何事があったのかと騒ぐだろうし、王国首都への報告、原因究明等、夜を徹しての大騒動になっているのでは？ と期待したくなる。

「はっ、今のところ^{メッセージ}〈伝言〉による第一報だけです。裏付けはありませんが、スレイン法国関連の情報で目ぼしいものはありません。我らと同じく、天地を揺るがす大爆発に混乱しているだけです。他の話題ですと、表側では『エ・ランテル近郊に現れた遺跡』、裏側では『王国戦士長行方不明』ぐらいでしょうか」

「ん？ 遺跡、だど？ それに戦士長？」秘書官「ロウネ・ヴァミリネン」からの報告に、ジルクニフは耳慣れない単語と、気になる名称を捉える。「近郊に『現れた』だど？ 発見ではないのか？ それに、戦

士長とは「ストロノーフ」のことだな？　なにがあった？」

「は、はい。〈伝言〉^{メッセージ}の内容をそのまま信用する訳にはまいりませんが、何も無かったはずの草原のど真ん中に突如遺跡が現れた、とのこと。戦士長は同地域にて暴れていた武装集団排除へと赴き、行方知れずとなったそうです。ま、まあ、荒唐無稽と言いますか、なんとうるか……」

後日、報告書が届きますので確定させるのはその時に——とロウネは〈伝言〉^{メッセージ}の信憑性に苦言を呈しつつ、皇帝が何に興味を持ったのかと訝しがる。

「このタイミングで遺跡だと？　スレイン法国で変事が発生したであろう、この同じ時期に？　しかもあの最強戦士がその場にいた？」

理解を超えた“非常識な存在”の気まぐれなど、ジルクニフには読み取れない。手元にある少なすぎる情報から真実へ辿り着くことも不可能だ。

それでも、国家と国民を護るために動かなければならない。スレイン法国の騒動が、バハルス帝国を滅ぼさんとする前に。

「スレイン法国への強硬偵察は中止だ。これ以上人的損失を増やすわけにはいかん。ロウネ！　捨て駒の貴族を誘導して、請負人^{ワーカー}どもをスレイン法国とエ・ランテルの遺跡へ突っ込ませろ。死んでも構わん。生きて帰ってくる者がいたら、拘束して情報を吐かせろ」

「はっ！　美味そうな餌をぶら下げて、『我先に』と走らせて御覧に入れます」

「美味すぎて警戒されぬようにな。——よし、次はカツツエ平野に一万……いや、二万の軍を展開させる。名目はアンデッド掃討及び軍事演習だ。無論、実際はスレイン法国からの脅威を警戒した布陣だが、エ・ランテル側にも注意を払え」

「畏まりました、陛下。軍の指揮は——」

皇帝からの手早い指示を、ロウネは焦ることなく捌いていく。同時に必要な人員に費用、請負人^{ワーカー}どもを熱狂させるネタについてなど、多くの情報が頭の中を駆け巡る。

余程優秀な秘書官なのであろう、皇帝ジルクニフの意図を間違つて

捉えている気配など微塵も無い。

ジルクニフ自身、淀みのない的確な反応に満足げな笑みを浮かべてしまうが、これで事態が改善する保証は何処にもなく、未だにスレイン法国の情報は皆無だ。

地響きの原因がただの自然現象で、情報を集めに行った偵察隊は皆無事。連絡がつかなかったのは運が悪かっただけ。スレイン法国は健在で、エ・ランテルは新しく見つかった遺跡の発掘で大繁盛——なんて平和な世を願っても、今日まで歩んできた血まみれの覇道が全てを否定してくる。

そんな都合の良い未来なんて有る訳がない。

皇帝としての立場上、最悪をも想定して複数の対処法を用意しておくのは当然だ。しかしながら、時々地理上の優位性に胡坐をかいている王国が羨ましくなったりもする。——ほんの少しだけ。

「さて、スレイン法国が南の亜人国家に滅ぼされたとは思いたくもないが……。万が一の場合は、カツツエ平野を跨いだ防衛戦の始まりか。王国や聖王国、竜王国にも通達を——いや、竜王国はピーストマンで手一杯だろう。王国はこちらの話をまともに聞くとおもう。聖王国は兵を派遣するかどうか。くそつ、やはり情報だ！ 確たる証拠が無ければどの国だって二の足を踏むに違いない！」

確証が無ければ動かない、それは自分だって同じことだ。それなのに入手できた情報は何も無い——というか、偵察隊未帰還ぐらい。思わず金髪のサラサラヘアを掻き筆りたくなってしまおうが、今はそんなことをしている場合ではない。

時間は有限だ。

一刻も早く、スレイン法国で起こっている異変の真実を確かめなければならぬ。

「ふむ、請負人だけで足りるか？ 捨て駒にするにしても頭数に不安があるな。よし、使えるモノは全て使おうしよう。商人、神官、冒険者、盗賊どもや牢に入れてある罪人も法国へ流せ」

「冒険者に、罪人も……ですかい？」

バジウツドが唸るのも仕方がないことであろう。冒険者は国家に

所属しない集団であり、今後の関係に亀裂が生じる可能性がある。

罪人どもはもつと問題だ。多くの手間を掛けて捕まえた犯罪者を、無罪放免とばかりに外へ出すのは抵抗がある。対象となる者の中には、バジウツド自身が捕まえた腕の立つ武闘派も何名かいるのだから。

「お任せください、陛下。冒険者には、スレイン法国行きの商隊警護依頼をあてがっておきます。罪人どもはスレイン法国での別件犯罪検証という口実で移送し、途中で放逐しましょう。無論、スレイン法国以外へは行けないように対処します」

それで生きて帰ってきた者を捕縛し情報を吐かせます——そう語るロウネは、盗賊に関しても討伐隊を編成し、スレイン法国側への逃走を誘発させんと頭を回転させる。

バジウツドら四騎士が前面に出て、本気の討伐隊であることをアピールすれば、多少活動し辛いと言われていた法国側へも足を向けることだろう。数だけが多いのだから、スレイン法国で何が起きているのかを目撃してくれる可能性は高い。

「あとは先行偵察隊の回収に関するですが……」ロウネが言葉を選んで口にするのは、連絡が途絶えてしまった偵察部隊についてだ。

生きているにしろ死んでいるにしろ、情報漏えいを危惧するのであれば、肉体も武装も持ち帰らねばならない。

「ああ、当然そうしたいところだが、帰ってこない場所へ兵を送り込むわけにもいかん。だからと言って部外者に頼むなど論外だろうし。

……なあ、爺。やはり魔法で探索する訳にはいかんのか？」

皇帝の問いは、未だ行方不明となった弟子への未練を断ち切れないでいる一人の老人を振り向かせる。

「前にも言いました通り、自殺行為ですな。スレイン法国の探知阻害結果は、他の国と比較になりませぬ。無駄に魔法詠唱者マジック・キャスターを減らすだけですぞ」

そう口にしながらも「結局、優秀な弟子を無駄にしてしまった」と、フルルダは項垂れる。国境から少し入り込んで、法国の状況をメッセージ〈伝言〉で報告するだけの任務だったはずなのに、一言も連絡を寄こ

さず誰も帰ってこないなんて悪夢でしかない。

ちなみにフルーダは弟子の身を案じているのではなく、魔法の深淵を覗くための人的資産が削られたことを嘆いているのである。誤解なきように……。

「少しでも効果が有るのなら、何人が使い潰しても構わんだろうが……。やれやれ、そんなに嚴重ならばスレイン法国で何が起こったというのだ？ 情報らしい情報が何も無いから、余計な詮索ばかりが募って仕方がない。この際だ、バジウツド。虚偽でもいいから情報を持ち帰ってくれないか？」

「間違っている、嘘の情報でもイイんですかい？」

「こちらを惑わそうという欺瞞情報なら、その意図からでも多くの事柄が読み取れる。一番困るのは何も無いという状況だ。検討する材料が無いのでは、流石の私もお手上げだ」

降参だあく、というコミカルな表情と共に軽く両手を上げる皇帝の様子に、側近たちはわははと笑い、場を賑わせる。

これでよい——皇帝はそう密かに頷いて、配下の者を送り出す。

切迫した事態であることに違いはないが、焦ったところで事態は好転しない。必要なのは適度な緊張感と余裕。そして「自分たちの皇帝はまったく動じていないから大丈夫」という安心感だろう。

屋台骨がグラつくわけにはいかないのだ。

とはいえ、一時的に苛立ちを募らせていたのは間違いないのだが……。まあそれはそれとして、鮮血帝も血の通う一人の人間なのだ。軽く流してもらいたいものである。

「では期待して待つとしよう。餌にどんな獲物が食らいつくのかを、な」

余裕たっぷりの微笑みを湛えて、ジルクニフは緊急会議を終了させた。

自分自身と、帝国全土が向かおうとしている未来の、その圧倒的なドス黒さに気付かぬままに……。

ちなみに先行偵察隊の回収は保留となった。居場所も不明で、助ける手段も無いのだから当然であろう。

◆
信賞必罰は世の常だ。

たとえ神をも殺す魔王軍であったとしても例外ではない。

しかし、魔王の傍に侍ることが最高の栄誉であり御褒美だと思つて
いるナザリックの僕には、これ以上何かを与えると過剰になりかねない
ので注意が必要だ。

それより問題なのは罰である。

大魔王モモンガ様のためならば即座に己の首を刎ねかねない僕で
あるが故に、へたな罰は即刻死刑と採られかねない。

もしかすると、竜王との戦闘よりバランス感覚を要求されるので
はないだろうか。

「頭を上げて、モモンガ様の御威光に触れなさい」

「はっー」

守護者統括の声が響く玉座の間にて、多くの絶対強者たちが跪き、
同じ方向へ顔を向ける。

全ての者が見つめる先には、玉座に深く腰を沈める神をも超える大
魔王、モモンガ様の姿があった。

“悟”がこの場に居れば「御威光つてなんだよう」と弱気な発言が
零れたかもしれないが、絶対支配者たる骸骨魔王は、一切動じること
なく僕たちの敬愛に満ちた視線を受け止めると、威厳溢れる言葉でナ
ザリック最深部を支配する。

「各階層守護者にセバス、パンドラ、そしてスレイン法国制圧と竜王討
伐に参加した全ての僕たちよ。お前たちのお蔭で“強制イベント”
——いや、突発的な任務はつつがなく完了した。感謝するぞ」

大魔王からの謝辞に「感謝など勿体無い」というアルベドの喜びを
隠せない発言を始めとする多くの返礼が巻き起こるものの、モモンガ
のかざした右手がその場に沈黙をもたらす。

「本題に入るとしよう、デミウルゴス」

「はっ」

深く頭を下げる眼鏡悪魔の成すべき本題とは？ それは、罰を受け
ることである。

ブラチナム・ドラゴンロード
白金の竜王の放った自爆人形で重傷を負い、部下も数名爆裂死亡。加えて貴重な情報源の老婆まで死なせてしまい、モモンガ様の機転がなかったなら、老婆が貴重過ぎる情報を持っていることすら知らないままであっただろう。

デミウルゴス自身、老婆の記憶がどんな価値を持っていたのかを知った一人なのだ。それ故に己が許せない。たとえモモンガ様が温情を与えてくださったとしても。

「愚かなるこの身に罰をお与えください、モモンガ様」

「うゝむ、あの自爆は誰であろうと防げなかったと思うが……。まあ、仕方ない」モモンガは骨の人差し指を頬骨へ軽く添えると「デミウルゴス、罰としてスレイン法国の牧場運営、及び付随する研究の一切を任せる」

「——っ?!」

「モ、モモンガ様?!」

魔王の発言に驚きを示したのはデミウルゴスだけではない。各守護者も、統括のアルベドもだ。

「ん？ どうした、アルベド」期待通りの反応だと言わんばかりの魔王——に対し、アルベドは「モモンガ様の決定に異を唱える愚をお許し下さい」と口を開く。

「スレイン法国を人間牧場とし、繁殖させた人間どもに『武技』や『生まれながらの異能』などの研究を行わせ、使い道がなくなれば経値として吸収する。死体は餌や巢、可能であれば召喚素体としても余すことなく活用」

再確認とでもいうかのようなアルベドの情報列挙に、モモンガはウンウンと頷き肯定の意を示す。

「そのような国家規模の牧場運営任務は、とても『罰』などと呼べるものではありませんわ。むしろ御褒美ですう！」

「モモンガ様、アルベドの意見は尤もであるかと思えます。御慈悲には感謝申し上げますが……」

「ふふ、ふははははは」

突然の笑い声には、アルベドもデミウルゴスも戸惑うしかない。

他の守護者たちも同様だ。

「そうかそうか、御褒美か。それはちよつと悲しくなるな」悲しいと言いながらもちよつと嬉しそうな大魔王は、子供をからかうかのような口調で混乱している僕たちへ語りかける。

「牧場運営は大変な任務だ。多くの手間と時間がかかるから、現地で滞在を余儀なくされるだろう。ナザリツクへの帰還頻度も少なくなる。だとすると、私の傍にいる時間は殆ど無くなるだろうなあ。私と話すことも、私の姿を見る機会も失われるに違いない。だがそうか、御褒美なのか、私の傍から離れることが御褒美とはなく」

意地悪そうな語りかけに、アルベドもシャルティアも悲鳴をもつて答えるしかない。

「ば、ば、ばつです！ 恐ろしい罰ですわ！ 私では耐えられません！」

「そうでありんす！ ニューロニストの拷問を受ける方がマシなくらいの罰でありんすう！」

一呼吸を置いて、他の守護者も頷く。

「確力ニ、褒美トハトテモ言エナイカト」

「うんうん、モモンガ様と離れないといけないなんてねー」

「ぜ、ぜつたいダメ！ だと思ふ。僕は、その……、モモンガ様の傍にいたいなあ」

「まあさにつ！ こおれ程の罰を受けるデミウルゴス殿にはつ、同情を禁じ得ませんな！ ああ、拒否したくなるう気持ちも解ります！ よお解りますとも！ ですがデミウルゴス殿！ 罰は罰！ し、か、とつ、受け止めるべきでしょう！」

クルクル回るパンドラからのトドメと言わんばかりの一撃を受けて、デミウルゴスは頭を垂れるしかない。

スレイン法国での牧場運営が大きな任務であり、モモンガ様のお役に立てる活躍の場であることは疑いようのない事実である。それをモモンガ様は、無理やり罰に仕立て上げ、他の守護者が納得するよう

に誘導してくれたのだ。——デミウルゴスのために。

ナザリックから離れるのは、モモンガ様から離れるのは、確かに身を裂かれるような苦行であろうが、任務のためなら耐えられる。絶対支配者、骸骨大魔王モモンガ様のためならば耐えられるのだ。

「どうだ？ デミウルゴス。少し厳し過ぎる罰であつたかな？」

「はっ。確かに、モモンガ様の傍に侍ることが許されないのは、我ら守護者にとって存在意義を失うに等しい絶望的状况ではありませんが……。このデミウルゴス！ 牧場の運営をもって、モモンガ様の御慈悲に報いたいと思います！」

「慈悲とは何のことやら」魔王は骨の手をヒラヒラ舞わせ、眼鏡悪魔への懲罰提示は終わりだと皆へ示すと「では、次の件だ。後回しになっていたエ・ランテルへ、散歩に行くぞ」庶民的な話題を持ち出していた。

「例の『生まれながらの異能』を持った少年を確保するのですね。ですがモモンガ様が御命じになれば、一刻と待たずして御前に運んでまいります……」

少し不思議そうにアルベドが問いかけると、魔王は「ふふん」と鼻を鳴らす。

「散歩と言っただろう？ 私は人間の街を歩いて回りたいのだ。ユグドラシルでは人間の街に入ろうとすると、即戦闘が始まって散歩どころじゃなかったからなあ」

「モモンガ様を拒否するとは許せないのであります！ 即刻滅ぼすべきであります！」

「もく、ここはユグドラシルじゃないってば。落ち着きなよ、シャルティア」

「で、でもお姉ちゃん。この世界でも人間は敵、だよ？ 同じように、せ、戦闘になるんじゃないかな？」

「ナラバ私が、モモンガ様ノ御傍ニテ警護ヲツ」

「羨ましい限りだね。私は牧場へ行かないといけないから、同行は許されないだろう」

デミウルゴスが肩を落とすと同時に、むくりと頭をもたげ始めたの

は守護者たちの「欲」だ。

——警護任務——

コキュートスが何気なく呟いた一言に、コキュートス自身も興奮してしまふ。

モモンガ様が人間の街を散歩するのであれば、当然ながら御身を御守りする警護者が必要不可欠。脆弱な人間ごときが、魔王たるモモンガ様に指一本触れることが出来ないのは承知の上だとしても、傍に侍る守護者級の者が一人も居ないなど許されるはずもない。

ただ、スレイン法国での警護のような戦闘配備にはならないだろう。

もつとそう、守護者統括や真トウルヴァンバイア 祖が妄想しているような、ゆるい同行任務になるのではないだろうか？

「モモンガ様、私は「妻」として御一緒させて頂き——」

「だあくれが妻でありんすかつ！ 抜け駆けは許さないのでありんすよ！ ！ モモンガ様はわたしが御守りするでありんす！」

「イヤ、少シ待テ。二人ハスレイン法国デ警護ノ任ニ就イテイタノダロウ？ ナラバ、私ノ番ダナ」

「え、それを言ったらコキュートスもじゃん。あたしとマーレは周辺警戒だったんだよ」

「そ、そうですよ。お、お姉ちゃんの言う通りです」

「あ、私はナザリックで留守番だったのですけどお……」

現地へ乗り込めなかったパンドラの呟きにセバスが小さく頷く、——そんな頃、玉座に悠然と身を置いていた魔王が場を纏めようと動き出す。

「ふむ、そうだな。ハンゾウら隠密系の僕たちは周辺に展開させるとして、守護者からはアウラとマーレ、それにパンドラを連れて行くでしょうか」

「やったー！」

「う、嬉しいです、モモンガ様！」

「We 我nn がes 神me のine おs 望Got みtes とWil あle ら！」

「ぐう、うらやまじい、いい、いい」

「あああ、モモンガ様とわらわのデートプランがああ」

「仕方アリマセン。留守ハオ任セヲ」

二名がピヨンと跳ねて喜びを表すと、一名が美しい異国の言葉で忠誠を唱え、一名がモモンガ様の御姿を刺繍したハンカチを握りしめて泣き喚き、一名が頭を抱えてゴロゴロ転がり、一名が頭を下げて了解の意を示す。

そして最後に、眼鏡悪魔が同僚の惨状をヤレヤレと嘆きつつ、挨拶の言葉を捧げる。

「それではモモンガ様、私はスレイン法国改めスレイン牧場へと参ります。牧場の運営状況や研究結果については定期的に報告書を持参いたしますので、その時には拝謁を賜りますようお願い申し上げます」

「ああ、期待しているぞ、デミウルゴス。ただ、外敵に対する警戒は怠るな。隠密特化型の悪魔以外にも、レベル75以上の僕を最低五体は傍に配置しておけ。この世界にはプレイヤーだけではなく、竜王のような強者も居るのだからな」

「はっ、畏まりました。このデミウルゴス、モモンガ様の下僕として恥じぬ働きをお約束いたします」

竜王の名を持ち出されたならば、デミウルゴスとしても考え得る最高の警戒をもってしてコトに当ろうとするだろう。自爆に巻き込まれるような失態など、二度とあつてはならないのだから。

「よし、ではいくか」玉座から立ち上がり、大魔王モモンガは闇妖精二人と、軍服植輪へ視線を向け「用意はイイか？」と問いかける。

「ええつと、モモンガ様。あたしの魔獣はどうしましょう？ 連れて行きますか？」

「うむ、あまり仰々しいのも散歩の邪魔だしな。隠密系の魔獣のみにしてくれ。マールドラゴンは竜を置いてくるように。アレが街へ降り立つたら、目的の少年まで踏み潰しかねない」

「はい！ わかりましたー！」

「は、はい。かしこまりましたモモンガ様」

「パンドラは……、そうだな、既に街へ入り込んでいる影の悪魔とシャドウデーモン

エイトエッジ・アサン
八枝刀の暗殺蟲、そしてこの場に居る八体のハンゾウを統率しておけ」

「かあしこまりましたつ、我が絶対の主！ モオモオンガツさま！

——では、エ・ランテルのどの辺りへ転移いたしましたでしょうか？ 御希望の場所に〈転移門〉を展開いたしますが……」

エ・ランテルには多くの僕が密かに入り込んでおり、転移先のマーカーはどこであろうと配置可能だ。それこそ三重城壁の最深部、領主の執務室であろうと容易く転移できる。無論、どんなに魔法的な結果が張られていたとしても問題にはならない。

だが当の骸骨魔王は、なにやら楽しそうに街への直接転移を否定する。

「ふふ、せっかくの散歩なのだ。街の正門から、のんびり歩いて入るとしよう。転移は何かと便利ではあるが、風情というものに欠ける」

「それがいいと思います、モモンガ様！ のんびり歩きましょう！」
「ぼ、僕もそう思います。転移だと、モモンガ様の傍にいる時間が、す、少なくなっちゃいます」

「おおお、私としたことが……。効率化を図るあまり、大切なことを見落としていたようですね。ではつ、エ・ランテルまで歩いてまいりましょおう！」

楽しげな闇妖精の傍でシユバシユバと忙しい動きを見せる埴輪に對し「いや、流石にそれは遠すぎるだろ」と骸骨魔王の冷静な突っ込みが飛ぶ。と同時に「正門前の適当な場所ですよ」との指示が放たれ、魔王モモンガは「玉座の間」の大扉へ向けて歩き出す。

転移でどこへ行くにせよ、「玉座の間」からは発動できない。地上の何処かへ転移するならば、一度「玉座の間」から出てリング・オブ・アイズ・ウール・ゴウン掘点内転移用指輪で第一層の地表近くまで飛び、外へ出てから〈転移門〉を発動させるのが通例だ。

もちろん「玉座の間」以外であれば、一気にカルネ村などへ飛ぶことも可能だろうが、それだと最重要アイテムの指輪まで持ち出すことになり問題だ。

だからモモンガは、今にも血涙を流さんばかりとなっている留守番

守護者たちへ「さあ地表へ出るぞ。 リシグ・オブ・アインズ・ウール・ゴウ 拠点内転移用指輪を預かってもらわねばならないのだから遅れるなよ。ついでに……デミウルゴスの見送りに兼ねるとしようか」と語り、大扉に飾られた彫像——天使と悪魔の前を通る。

「もったいなき御言葉」

『ついで』扱いされながらも、わざわざ名前を出されて『見送り』と言われたなら誰もが胸を熱くするだろう。

深く頭を下げる眼鏡悪魔は、指輪の力を発動させる大魔王様に遅れまいと、即座にナザリツク地表部へと転移するのであった。留守番となった無念さを——わざとらしく歯軋りで伝えてこようとする同僚守護者の残念ぶりに「困ったものだ」と呆れながら……。

第12話 「散歩魔王」

エ・ランテルとはリ・エステイーゼ王国の最東に位置する城塞都市であり、バハルス帝国との戦争時に於いては最前線基地として使用される、王国の要とも言える王直轄の重要都市である。

人口は首都に次いで多く、スレイン王国とも近いので各国へ向かう中継地点になっており、経済状況は『王国の貴族が舌を伸ばしてきそう』なほどの勢いがあった。

王国の暗部である犯罪組織の影が薄いのも、都市運営にとって好材料と言えるだろう。無論、薄いだけであって皆無などではない。息の掛かっている商会や組織は少なからず存在しているし、安価な麻薬、黒粉も取引されているのだ。一部が帝国まで輸出されているのだから、都市長も頭を痛めていることだろう。

そんなエ・ランテルで最近の話題と言えば、やはり『スレイン王国の大爆発』、そして『巨大遺跡出現』であろう。

突然の大地震、そして南方の空を覆った黒い雲には誰もが息を呑んだに違いない。エ・ランテルでも家屋の破損、家財の倒壊など少なからず被害が発生しており、中でも近隣最大と言われる巨大墓地では目を覆うばかりの有様だという。

人的被害は今のところ軽傷数十名程度ではあるが、爆音のショックで心臓を停止させるものが居なかったのは幸いというか意外だろうか。三重の城壁が役に立ったのかもしれない。

ただ……、国家としての対応は皆無であった。

エ・ランテルから首都リ・エステイーゼへ早馬を走らせてはいるが、国王や周辺貴族たちが状況を認識するまでには少し時を必要とするだろう。結論を出せるのはもつと先の話だ。しかしながらエ・ランテルの都市長パナソレイは、何の結論も出せず何の指示も来ないだろうと予測していた。

早馬に持たせた報告書には、スレイン王国の件と出現した遺跡に加えもう一つ、『戦士長行方不明』の件が記載されている。状況報告のためにエ・ランテルへ寄った直後、すぐさま村々を襲っているという帝

国兵の討伐へ向かった王国戦士長と戦士隊の面々。今日この日まで、その一人たりとも帰ってきてはいない。

国王は事実を受け止めきれないだろう。五十名という少人数で討伐に向かわせた無能な王だ。戦士長不在を貴族派閥に糾弾されて、何一つまともな策を講じられまい。

スレイン法国の調査は後回しにされる。

遺跡の件は忘れられるだろう。

故にエ・ランテルは動けない。王家直轄の都市が、王の意向を無視することなど許されないのだ。

都市長パナソレイは、いつになく真剣な口調で愚痴をこぼす。

「スレイン法国の大爆発は、大気をも揺るがす尋常ならざるもの。早急に対処せねば、国家を揺るがす惨事につながりかねない。だがエ・ランテルの常駐兵を勝手に動かすわけにもいかん。ここは冒険者か請負人——いや、あ奴らは新たに発見された遺跡に夢中だ。ちよつとやそつとの金額では心を動かすまい。それに周辺の村々が無人となつている変事も未解決のままだ。やるとするならば、戦士長探索に託けて兵士を動かすか……ああああ、ただでさえ帝国との戦争が控えているというのに！」

一瞬『帝国へ身売りするか?』とよからぬ考えが浮かぶものの、すぐさま否定する。現国王「ランポツサⅢ世」には、エ・ランテルの都市長へ任命してもらった恩もあるのだ。色々言いたいことはあるが、今はそんな妄想に逃がっている場合では——

「都市長! パナソレイ都市長様! 大変です!!」

ノックを殴打と勘違いしている補佐官が、返事を待たず飛び込んできては大声を張り上げる。その狼狽ぶりには、パナソレイも啞然とするばかりだ。

「な、なにがあつたというのだ。おちついてはなしたまえ」

即座にいつもの口調に戻してはみたものの、悲報を持ってきたであろう補佐官の顔色は死人よりも青ざめたまま、言葉では語り尽くせない恐怖を示す。

「しし、死体だらけです! そこらじゅう死体だらけなんですよ!

ふひ、死体が……、死体があ！ 目を開けたまま、泡を吹いてっわ、わたしは走って、走ってここまで——ふひひひっひい!!」

パナソレイは何も言えなかった。

補佐官は四十代後半の理知的で優秀な男だ。付き合いは十年以上にも及び、戦争被害者や墓地の管理で遺体を見る機会も多く、多少の変事でも取り乱すなんてことはない——はずであった。

それが今や床に頭を打ちつけて、『一刻も早くこの世からオサラバしたい』と言わんばかりの醜態を晒しているのだ。

パナソレイは窓の外に覗く、一見平和としか思えない街の光景に視線を這わせるが、異常らしい異常は特に発見できない。

「いったいなにが……」奇声を上げる補佐官と、異変を感じて集まってくる使用人たちを前に、パナソレイは事態把握に努めるべき己の義務も忘れて、呆けることしかできないでいた。



エ・ランテルには、結構賑やかで繁盛している冒険者組合が存在している。

これは帝国や法国に最も近い王国の都市であるため商隊護衛の依頼が多かったり、カツツエ平野・トブの大森林での採取及び討伐依頼が一年を通して出されていたりするためであり、冒険者にとって飯のタネが尽きない有り難い状況だからであろう。

そして今、最も話題に上っているのが、『スレイン法国からのデカイ音』——ではなく、『新発見の大遺跡』である。

エ・ランテルから数日で行ける距離に突如として現れた、墳墓のような遺跡。巨大な防壁が霊廟と思われる建造物を囲んでおり、地下へ降りていくような構造だ。防壁の外から遠眼鏡で覗き込んだ者の話では、どれほど深い構造なのかは分からないが、建物周辺の草木は綺麗に剪定されており、何者かの管理下にあることは明白とのこと。

冒険者組合に所属するミスリル級冒険者としては、今すぐにでも潜りたい案件である。

どうせ中に居るのはまともな相手ではない。墳墓というならアンデッドの類であろう。自分たちなら楽勝だ——そう、イグヴァルジは興奮気味に鼻を鳴らす。

ただ、王国内に発見された遺跡は全て国の所有とされるので簡単には入り込めない。

組合と都市長から国へ報告が成され、新発見の遺跡であると承認を受け、その後『遺跡の第一発見者に探索の権利と発見物品の取得権利が与えられる』と発表され——今回は発見者が一般人なので冒険者組合が権利を買い取っている——初めて冒険者の出番となるのだ。

無論、国宝級の魔法具マジックアイテムなどが発掘された場合は国が口を出してくるだろうが、黙っていれば知られるわけもない。

国としては『おかしな邪教集団の拠点』ではないと確認できればよいわけであり、予算を掛けずに掃除してくれるのなら冒険者の行動に口出しはしないのだ。面倒臭いという理由もあるだろうが……。

しかしここで問題なのが、国の承認を得るまで何もできないということなのだ。

イグヴァルジ率いる「グラルグラ」のようなエ・ランテル最高峰の冒険者チームが組合内で腐っているのも『承認待ち』が理由である。それともう一つ、抜け駆けしようとする請負人ワーカーどもの情報をいち早く入手して、邪魔してやろうとの思惑もあった。

「ちっ、いつになったら許可がおりんだよ。このままじゃ、一番乗りした俺たちがワーカーどものケツを舐めることになるぞ」

何度目になるか分からない愚痴に「ワーカーでも遺跡探索となれば必ずエ・ランテルに寄るだろうし、動向は掴めるさ」「鉄級でも雇って見張りに行かせるか?」「かまわんだろ? 遺跡からお宝を持って出てきたところを頂こうぜ」なんて軽口が舞い飛ぶ。

どこまで本気なのか判らないが、偶然にも二階から降りてきていた組合長としては、胃痛に加え頭痛まで発症したのかと気を重くするばかりである。

「あ、イグヴァルジ君。組合としては、遺跡周辺の開拓村に関する調査を優先してもらいたいのだがね」

冒険者組合長は立場上も本音の部分でも、「爆音を響かせる他国」や「新発見の遺跡」より行方不明となっている村民たちの安否が気掛かりなのだ。

街に住まう親戚や薬師の少年からも、生存確認や現地同行の依頼が数多く出されている。都市長も重大案件と認識しており、規定割合を超える多くの補助金が報酬の上乗せ分として用いられていた。

言うまでもないことだが、村民不在の第一報は即座に国へと送られている。周辺国家最強と名高い、とある重要人物の情報と共に。

「おやおや、アインザック組合長。いらしたんですかい？」横柄な態度はワザとだ。イグヴァルジは、己の立場が『それを許されるほどのモノ』なのだと周囲に知らしめたいのである。ゆくゆくは誰もが頭を下げてお願いしてくる立場になるのだから、組合長なんぞにペコペコしていられないと言わんばかりに……。

「調査なんか、その銀級を行かせたらいいでしょう？　なあ、「漆黑の剣」だっけか？」

「は、はい。覚えて頂いて光栄です、イグヴァルジさん。で、その、村の調査は私も気になっていたので、仲間と相談していたところですよ」
「くだらん依頼には弱っちい奴らで十分だ、と嫌味を言ったつもりなのに、銀級のリーダーらしき若造からは緊張気味ながらも力の籠った答えが返ってきた。」

恐らく本気で、開拓村の行方不明者に関する調査を行うつもりなのだろう。「漆黑の剣」なんて実力に見合わないチーム名だから覚えていたが、やはり銀級は銀級。物事の裏に潜む危険に気付いていない。

国境に近い開拓村の村人が大勢消えるなんて、どう考えても犯罪組織か国家が絡んでいる案件だろう。冒険者の手に負える依頼内容ではない。

アインザック組合長もある程度の調査だけ行って、後は国に任せるつもりなのだろうが、王国に潜む犯罪組織と言えば「八本指」だ。ほんの少し絡んだだけでも命の危険がある。英雄を目指している自分にとっては面倒事ではない。

（俺はアダマンタイト級になる逸材なんだ。いずれはこの街の住人どもが、俺様を英雄と呼ぶことになる。だから寄り道なんてしている場合じゃねえんだよ。今回の遺跡で大儲けして、念願の魔法具『石化耐性』を手に入れてやるんだ。毒耐性は持っているから、これでギガントバジリスクを討伐できる！ そうすればアダマンタイトは目の前だ！）

勝てるかどうかは別問題として、イグヴァルジには輝かしい未来が視えているようだ。

まあ実際ミスリル級の実力はあるし、仲間にも恵まれているのだから荒唐無稽というほどでもない。

ただ、村人の行方調査に関してはバレアレ氏の孫が全財産を提示していたりもするので、もしかすると遺跡探索などより手早く儲けられたかもしれないが……。

「それより組合長、遺跡探索の許可はまだ下りねえんですかい？ 他に先を越されたらどうするんだ、って俺ら以外にも不満が溜まっているようですよ」

己の不満を隠そうともせず、確認した訳でもない周囲の意見を、まるで集計したかのように持ち上げる。

イグヴァルジは自分たちだけでも行かせろ、とばかりに決定権を持たないアインザック組合長を困らせていた。

「行かせてやりたいのは山々だがね」深いため息を一つ、加えて釘を一刺し「許可が下りるまでは国家の所有物だぞ。ないとは思いますが、愚かな真似は慎んでくれたまえよ。……それで？ 時間潰しに行方不明者搜索なんてどうかね？」

警告ついでに、先程の依頼をいやがらせ風に提示する。

そんな組合長のおちやめな一撃には、ミスリル級のフォレスト・ストーカーも「あ、はい、考えときます」と小さく答えるしかなかった。「ああ、そうそう、エ・ランテルからも戦士長搜索の名目で——というかそっちが本命なのだが、各村へ兵士を派遣することとなった。国王の側近である戦士長のためならば、都市防衛の兵士を独断で動かしたとしても都市長の首が飛ぶことはない、との判断だ。それより今は、

村人が生きているのかどうか優先される」

「それは、まあ、分かりますけどね」

「はい、私たちもお手伝いします!」

無然とするイグヴァルジとは対照的に、『漆黒の剣』のリーダー、ペテルからは快活な返事が飛ばされ、『クラルグラ』のメンバーへ『笑いを堪えさせる』という苦行を強いてしまう。

それだけ自分たちのリーダーが悪役に見えてしまったのだろう。

言動や外見も相まって、とてもエ・ランテルの最高峰に位置するミスリル級冒険者であるとは思えない。ペテルの方が余程、物語に登場する英雄であるかのようだ。

「ちっ」どうにも面白くない。冒険者は国と距離をとるべきであり、王の命令など聞く必要はないのだ。イグヴァルジはそう自分に言い聞かせ、「おい、『漆黒の剣』。冒険者は国の手駒じゃねえんだからな。そこんとこ忘れんなよ」と言い放つ。

「はい、イグヴァルジさん。御忠告ありがとうございます——」

忠告ではなく八つ当たりであったのだが、イグヴァルジの粗野な声掛けに、ペテルは感謝の言葉を——返すことは出来なかった。

いや、ペテルだけではない。イグヴァルジや組合長のアインザックも、周りにいる冒険者たちも皆が皆、一斉に白目をむいたのだ。

「ごがあああああ!!」

「ぎいいいいいい!! ぐげっ!!」

「ひい! ひひい!!」

「ぎやあああああ! ぎよおおお!!」

「がはっ、な、なんだあああ?!!」

頭を抱え、テーブルに叩き付ける者。床でのた打ち回る者。体液を垂れ流しながら喘ぐ者。痙攣したかと思えば、自らの腹を短剣で刺す者。

冒険者組合は一瞬にして悲鳴と雄叫びで満たされる。

何が起こったのかなんて誰にも解らない。

必死に抵抗^{レジスト}を行うイグヴァルジは、『殺して欲しいと懇願したくない。圧倒的な恐怖』を前に、幼子のごとく蹲ることしかできなかった。

〈ライオンズ・ハート
〈獅子ぶとき心〉!〉

精神系治療魔法の発動を認識し、イグヴァルジはハッと仲間の神官を見つめる。

「お、おまえ、よく、まほうをつかえ——」

「おかげで聖印は粉々だがな! 金貨三十枚が一瞬でゴミだぜ! スレイン法国製なんてめつたに手に入らないってのに……。ほらっ、掴まれ」

回復役である神官の精神が支配されるというのは、チームの崩壊を意味する。だからこそ、クラルグラも神官へ精神耐性の魔法具マジック・アイテムを与えていたのだ。

その判断は正解であったと言うべきだろう。

冒険者組合の建物内で無事な者など、ほとんどいないのだから。

「アインザック組合長! 無事ですか?! 話せますか?」

「ぐっ、イグヴァルジ……君、今の一体? 何が……起こったのかね?」

片膝を付きながらも意識を失っていないのは、流石は元上級冒険者というべきか。イグヴァルジも、この時だけは素直に尊敬の念を覚えてしまう。

「昔、エルダーリッチに〈恐慌〉スケアイを受けたことがありますが、それに似ているかと。しかし威力は桁違いですよ。効果範囲もわけが分からないほんです」

「これが、〈恐慌〉スケアイだと?」

「イグヴァルジ! こっちは済んだぞ! 他のチームも治療するか?!」

「緊急事態だ! やってくれ!」

戸惑う組合長を余所に、クラルグラの神官は「おう!」と返答し、別チームの治療へ向かう。本来であれば、報酬を受け取らない魔法の使用は御法度だ。目の前に冒険者組合長が居るのだから、言い訳も出来まい。

それでも今は一刻を争う。

口から泡を吹いて痙攣している「漆黒の剣」の魔法詠唱者マジック・キャスターなんて、

放っておけば小柄な死体一直線だろう。

さつきと仲間の森祭司^{ドルイド}を治癒して、同チームの回復へと向かわせなければならぬ。

「組合長、構いませんね?」

「無論だ、このような事態でくだらぬ横槍は入れまいよ。神殿にも誰かを走らせて協力を……」

深呼吸を幾度か繰り返し、精神の安定を取り戻した組合長であったが、視線の先にあつた光景には言葉を失ってしまう。

受付嬢たちだ。

荒くれ者の冒険者を上手くあしらひ、時にはサポートしてきた逞しい組合員。その者たちは今、ピクリとも動かず、受付窓口のテーブルに伏している。

呼吸の気配が無いことから、既に死亡しているのだろう。

顔を覗けば、受け止めきれない恐怖の中で狂い死にしたことが窺えるのだろうか、確かめる気にはとてもならない。

「イグヴァアルジ君、外は……、外はどうなつて……、まさか?!」

「そういえば、静か……ですね」

阿鼻叫喚の組合内に落ち着きが戻ってくると、後回しにしていた様々な疑問が浮かんでくる。

原因はなんなのか?

被害状況は?

エ・ランテルの街中は大丈夫なのか? と。

「組合長、俺が……見てきましたよ? 他の奴らは、立つのもやつとでしょうし」

こんな異常事態の最中にあつても、イグヴァアルジは権力者に恩を売ろうと動いてしまう。もはや癖の領域なのだろうが、アインザックからしてみれば有難い行動だ。

率先して先頭に立とうと冒険者組合の正面扉へ向かうさまは、まさにミスリル級冒険者に相応しい勇氣ある行いであるのだから。

だが、イグヴァアルジは見てしまった。

そして眩いてしまった——いや、眩こうとしてしまった。

『なんでこんなところに、エルダーリッチが』と。

実際、言葉にできたのは『なんでこんなところ』までであった。それ以上は頭を撃ち抜かれ、自分が死んだことも自覚できずに、ぐしゃりと倒れ込むのみ。

イグヴァルジの頭を貫いたモノは小石、魔法付与エンチャントされたただの小石である。

撃ち出した者は、マントを羽織った黄色い服の人物であるようだ。儀仗兵が着込む礼装軍服のような格式ある衣装を身に纏い、丸っこい頭部には軍帽。というか、丸っこい頭は本当に人間の頭なのか判らない。目と口の位置に黒い穴が開いており、まるで簡素な人形であるかのような。

その者は、自身の前を歩く至高なる存在に聞かれぬよう独りごちる。

「下等アンデッドの名を出そうとしましたよねえ。多分そうだと思うので殺しましたが……。まあ違っていても構いませんよね。不敬と思われる言動は事前に排除しません」と

当然ながら、頭に穴の開いているイグヴァルジに聞こえるわけもなく。屍と化したミスリル級冒険者の前を、謎の一行はゆつくりと通り過ぎていく。

ただ奇妙なことに、どこからも悲鳴は聞こえてこない。

冒険者組合の入り口で、冒険者が血を流しながら倒れ込んでいるのであれば、通行人が驚きの声を上げて街の衛兵を呼びに走るはずだ。

それなのに何故？

ゆつくりと、呼吸荒く、膝に力が入らないフラフラとした歩みで、何とかイグヴァルジの元まで辿り着いたインザックは、確認するまでもないと頭部の穴を睨みつつ、エ・ランテル最上位冒険者の死亡を確定させる。と同時に、視線を上げて街並みを見つめた。

「な、なんだ……なんだ、これは？」

表現する語彙が見当たらない。

物語にも、己の経験にも、こんな光景は無いはずだ。

人が、多くの人が、老若男女関係なく、馬車を引いていたであろう

馬ごと、地へ伏している。誰も彼もがピクリともせず、泣き喚いてもいない。——実際には生き残っている者も、死にかけている者もいたのであるが、この時のインザックは気付けなかった。あまりに少な過ぎたので発見できなかった、と言い換えてもよい。

幾人かの顔を覗き見てみれば、そこにあつたのは恐怖。この世のものとは思えぬ何かと遭遇し、あまりの恐怖に生きることを放棄したような、死ぬことで恐怖から逃れたのだと思えるような、そんな苦痛と絶望に打ちのめされた醜き形相。

「なにが、なにがあつた？ なに……が」

思い当たることと言えば、冒険者組合内で起こった異常事態だ。

インザック自身、心臓を掴まれるような突然の恐怖に、死を連想したことは否めない。長きに渡る冒険者としての鍛錬が無かつたなら、自分でもどうなつていたことか。現役の冒険者たちでさえ、精神を癒す魔法の術に助けられる有様だ。

それでも銅級や鉄級、銀級に犠牲者は多く、ライオンズハートの効果を十全に受けても意識が戻らない——なんて者まで居る。

「死を……呼んだのか？ 誰かが死を」

バタバタと駆け寄ってくる冒険者の気配を背中で感じながら、インザックはその場へへたりこんでいた。

遙か遠い昔に耳にした、街一つを壊滅させたという邪教集団の名を思い出そうとしながら……。

第13話 「実験魔王」

エ・ランテルは魔王の目から見ても、中々に立派な城塞都市であった。

「ユグドラシルでも、こんな感じの都市を攻め落とそうと議論したことがあったなあ」とモモンガは、心配そうな視線を向けてくる闇妖精ダークエルフ姉弟を撫でつつ、気を引き締め直して周囲を確認する。

「モオオモンガッ様、護衛の配置は完了してえおります。現時点において問題はあぁございませぬ」

無駄のない綺麗な敬礼とその報告内容に、魔王は『格好良すぎて困る』とばかりに頷くと、エ・ランテルへ視線を戻す。

「では〈不可知化〉を解除して散歩に赴くでしょう。途中で邪魔な虫がいれば、各自の判断で排除してよい。ただパンドラ、"レア"に関しては別途回収しておけ。後で選別するでしょう」

「はっ！」

散歩に赴くとは思えない気合の入った守護者たちの返事を最後に、エ・ランテルの正面門付近は静寂に包まれた。

それもそうだろう。

検問所の衛士たちも、街へ入るための検査を受けようと並んでいた商人および旅人たちも、何も無い場所に突然豪華なローブを着込んだ骸骨が現れたとして、それでどうしろというのだ。

骸骨がボロボロのローブでも着込んでくれば、瞬時にモンスターだと判断して逃げ出せたのだろう。だが目に映るは、王族でも手が届くのかと思えるほどの神々しい衣装だ。ぼんやり光っていることからして、一般人にも感じ取れるほどの魔力で満ちているのだろう。

それになにより、可愛らしい闇妖精ダークエルフの子供が場を和ませてしまう。

二人の子供は信じられないくらいに美しく、服装もこの世のモノとは思えない美麗な作りに見えた。いや、エ・ランテルの検問を顔パスできない程度の下級市民に何が判るといえるのか。恐らく、街に住まう

誰であろうと価値の判別などできまい。触れることは当然、見ることもすらおこがましいと平伏するだろう。

圧倒的な上位者を前にした愚民どもの行動は、いつの世でも似たようなものだ。突発的な事態に啞然としていなければ、または相手が骸骨でなければ、すぐさま頭しんがくを垂れていたに違いない。

神のごとき骸骨に、天使のような闇妖精ダークエルフ、そしてよく解らない黄色い服の人物を前にして、誰も彼もが静かに息を呑んでいた。

「なんだ？ もつと騒さわぎ立てるかと思っただのだが、奇妙な反応だな。気配を消す指輪の効果か？ ……まあ、どうでもいいが」

モモンガはアウラとマールを左右に並べ、パンドラを背後に添えて歩き出す。ただこの時の魔王様は、散歩に加え一つの実験をしようと人間たちを眺めていた。

それは特殊技術ススキルに関するもの。

効果範囲や強度、特殊効果の内容に変化はないか。さらには特殊技術ススキル自体をこの世界の理で変化させることはできないか、などである。

(ナザリックでも一通り研究してはいるが、自分のスキルは自分で確認するのが一番だろう。魔法に関してはこの地にきて真っ先に調べたし、いくつかの重要なスキルだけは使用してみたが、まだまだ不明な点は多いしなあ)

キヨロキヨロと赤く輝く眼のようなモノで、呆然としている人間どもを一瞥すると「実験動物としては十分な数だな」と軽く呟いて、大魔王は特殊技術ススキルを発動させる。

——絶望のオーラ レベルI——

「ひぐっ！」と、何かしらの言葉を発することが出来ただけでも称賛に値しよう。絶望のオーラを浴びて、浴び続けて正気を保っていることなど不可能に等しいのだから。

瞬き程度の微かな時間であろうとも、圧倒的な恐怖を前に呼吸を止めかねないほどの衝撃だ。それが現時点においても、憐れな一般市民を覆い続けている。

喉をかき切りたくなる絶望だろう。

死を賜って楽になりたいと願うだろう。

魔王が放つ恐怖のなかで、心臓を動かし続けるのは非礼だと悟るだろう。

だから皆、死を選んだ。

いや——奇跡的に数名の生存者はいるようだが、長くは持つまい。意識も保てないだろう。生き永らえてもまともな生活を送れるかどうか……。それこそ死んだ方がマシだと思うのかもしれない。

若い男が前のめりに崩れる。

衛士が泡を吹いて、検問所の側壁に頭を打ち付ける。

中年の痩せた商人は、座り込んで息をしないまま眠った。

悲鳴はどこからも聞こえない。

それはまるで神の宣告を受けた罪人たちが、己の愚かさを自覚して命を捧げたかのように、静かで美しい——感謝の言葉が聞こえてきそうなほどの『なめらかな死』であった。

無論、その表情は『有り得ないほどの恐怖』を体感したかのように歪み狂っていたのだが。

「ふうむ、効果は『恐怖』だけのはずだが、『即死』効果も発生しているのか？ ユグドラシルと何が違う？」

半径三十メートルもの範囲に垂れ流される黒きオーラをそのままに、魔王は首を傾げる。

「みんな死んじやいましたね。あつ、でも、心臓が動いているのは何人かいるみたいですよ」

「ど、どうして死んじやったのでしょうか？ 抵抗らしい抵抗も、あの、していないみたいですけど」

正門近辺で大量の人間が倒れ込んでいるのは異様な光景だ。しかしそれ以上に、可愛らしい闇妖精ダークエルフの子供が課外学習にでも来ているかのように平然としているのは、理解を超える異常さであろう。

もつとも、何かの解説を始めようとしているパンドラを含め、誰一人として大量の死体に囲まれている現状をおかしいとは思っていない。

人は魔王の前に転がる石ころである。

死して当然の雑草にすぎない。

不思議がる必要がどこにあるのか。

「モオモオンガ様の御力が強過ぎるのですっ！　『恐怖』のみを与えらるう。『絶望のオーラ』であつても、あまりに長時間！　あまりに桁違い！　であれば命すらも放棄させてしまうものなのです！　恐怖から解放されるために死を選ぼう！　まさに、死の支配者、モモンガ様の御業！」

パンドラは開拓村の村民から情報を集めた経験があるので、一般人の弱さを正確に捉えているのだろう。アウラやマーレは王国や王国の兵士を潰したことがあるだけなので、戦闘技能を持たない人間の脆弱さを把握しきれていないのだ。

モモンガ様も似たようなものであろう。簡単に死んでしまう生物だと知っていたつもりでも、『恐怖』が『即死』になるほどとは想定していなかったはずだ。

未だに絶望のオーラを放っている点からしても、範囲内にいる人間の『死にも至る恐怖』を理解していないのは間違いない。「たまたま弱い人間だった」程度にしか考えていないのだ。絶望のオーラとは、魔王様にとつて特に効果を期待していない『そよ風』なのだから……。とはいえ、数ある実験の一つには違いない。

意味が有ろうと無かろうと、これも成果であり、結果だ。一つずつ学んでいけばいいだろう。幸い、実験動物は掃いて捨てるほど残っている。

「ふむ……、ユグドラシルでは強度の上昇など不可能だったはずだが、この地では仕様が異なるのか？　ならば、強度を倍にできるか試してみよう。効果範囲の拡大も検証が必要だな。まずは半径百メートルで……。む？　魔力ではなく気力——いや、精神力を消費すればいいか……か？」

闇妖精ダークエルフの双子に両手を引かれながら正門をくぐった大魔王は、悟と共に行っていった懐かしき特殊技術ススキル検証の日々を思い出す。

獲得した新たな魔法や特殊技術ススキルがどのような特性を持っているのか？　情報が公開されていないからこそ、自分たちで発見する楽しみ

がそこにはあった。

異世界での仕様変質は、全てを知り尽くしていた魔王にとって『二度手間』ではない。歓喜すべき未知なのだ。

「あまり放ち続けると、オーラの効果なのか、人間の脆弱さが原因なのか判らなくなるからなあ。数秒で切るか……っ」と

なんの抵抗もなくエ・ランテルの街中へ足を進めた魔王が、「ぎよっ」と表情を強張らせる人間どもを気にもしないで黒きオーラを全方位へ拡大させる——と全てが終わってしまった。

「バギツ！」と一番大きな音を出していたのは、荷物を積み込む途中で落下してしまった商隊の者であろう。

「きひゅっ」と奇妙な呼吸音を最後に仰向けで倒れ込んだ白目の女性は、買い物へ向かう途中か？

「きいいいいい！」と己の両頬を掻き毟った兵士は、狂乱状態で魔王様に突っ込んできたので、「ハンゾウ」を始めとする僕たちしもべに排除され、後でアウラの魔獣に食べられたらしい。

「ん？ 何かあったか、パンドラ？」 散歩優先気味の特殊技術スキル確認を行っていたモモンガは、背後での微かな殺気に気付く。

「いえ、問題ありません、モモンガ様。建物から顔を出した人間が不適切な言葉を口にしようとしたので、始末したところですよ」

チャラつと小石を握り直し、胸に手を当てて軽く頭を下げる軍服埴輪男に、魔王は「やはりカツコイイ」と御機嫌に頷く。

「そうか……。それでパンドラ、何か面白そうなレアは見つかったか？ 近くにあるなら教えてくれよ。殺してしまうと復活とかが面倒だし」

そもそも相当なレアでなければ復活させる気も起きないだろうけどな——なんて呟き、魔王は両手を引っ張る闇妖精たちダークエルフにも声を掛ける。

「アウラにマールも、面白そうな人間とか連れて行きたい人間がいたら言うといい。お前たちが興味を持つというだけで、それはレアと言えるからな」

「はい、モモンガ様。今のところは、みくんな弱過ぎて同じ人間にしか

見えませんが、変わったヤツが居たらお知らせしますね」

「か、かしこまりました、モモンガ様。ボ、ボクもがんばります」

お父さんの手を引っ張りながら街中を散歩しているような双子は、なんだか嬉しそうだ。赤みを帯びた頬もそうだが、声にも普段以上に気合が入っており、モモンガ様と散歩している以外に御褒美でも貰っているかのように感じる。

まあ、これが例の吸血鬼ヴァンパイアなら、パンドラでなくともすぐに判つたのだろう。絶望のオーラを受ける度になまめかしい声を上げて、モモンガ様にしなだれかかろうとするに違いないのだから。

「モモンガ様、レアの確保はお任せください。たとえ死にかけていようとも即座に治療いたしますので、何も気にする必要はございません。御自由に実験を行ってください」

「ふむ、そうか。ならばこの辺りの千人ほどを使って、召喚実験でもするか」

魔王は召喚の特殊技術スェキトルにも疑問を持っていた。

レベル40程度の中位アンデッドまでなら、人間の死体で無限とも思える召喚時間を確保できる。しかし上位ともなると既定のままだ。例外は黒山羊たち。あの場合は百万人もの魂を使用したので、一体辺り二十万人の魂がすり潰され、召喚の糧になっていた。

ならば話は早い。

「魂」だ。

人間の魂をたくさん用意すれば、上位のアンデッドだって長期間の召喚が可能であるに違いない。無論、下位や中位よりも召喚時間は少なくなるだろうが、肝心なのは費用対効果だ。

魂の数と召喚時間との割合。

魂百で何日か？ 魂千で何年か？

これこそ実験すべき案件であろう。

「ではアウラ、マール。この付近の人間を千人ほど殺してほしい。直後に人間の魂を使って上位アンデッドの召喚を行うから、なるべく同時に、な」

「はい！ お任せください、モモンガ様！」

「は、はい！ えっと、が、がんばって殺しますね、モモンガ様！」
覗いている守護者がいれば、嫉妬の歯軋りをこの地まで響かせるであらう御勅命。

ダークエルフ 闇妖精の双子は喜びを全身で表しながら、元気よく殺戮の一步を踏み出す。

「まずは対象を^{ターゲティング}確認して、麻痺させますね」

アウラが可愛らしくふうーと息を吹き出すと、微かに赤みがあった霧のような何かが辺りを包む。それはまるで意志を持っているかのように風向きに逆らい、周囲の建物を次から次へと支配下へ置いていく。

「そんじゃあ、マールレ」

「う、うん。蔦で巻き込んでから一斉に潰すね。〈グロウ・プラント植物成長〉」

漆黒の杖で軽く地面をつついて魔法を唱えると、短いスカートの闇妖精の前には、多量の植物が——硬い石畳を貫いて姿を現していた。植物は細くて長く、大木に巻きつく蔦のようであり、その全長は何百メートルになるのか想像もつかない。

「うんしょつと」マールレが可愛らしく杖を振ることで、蔦植物は意思を持ったように動き出し、アウラが麻痺させた千もの人間へ巻きつく。

「で、ではモモンガ様、あ、あの、殺しますね」

「ああ、やってくれ」

軽く手を振る魔王の合図に合わせて「はいっ」と元気よく声を返す双子は、自分の身に何が起こっているのか理解できないでいる住人たちを前にして、その有り余る力を揮った。

——グジュツ——

熟れた果実を握りつぶしたような、潤いのある軽い音が響く。

続いて漂うのは、生き物を解体した時のような生臭さと血の匂い。エ・ランテルのような城塞都市の表通りでは、そうそう味わうことのない危険な殺戮の匂いだ。

ダークエルフ 闇妖精の姉は、『弟が人間を殺しそこなっていたら後始末をしてあげよう』と待ち構えていたのだが、やはりというか、一人残らずひき肉になっており出番はなかった。

自分が誘導したから当然と言えば当然なのだが、活躍の場が減らされたように感じてしまい、ちよつとだけ弟を睨んでしまう。

もちろん、モモンガ様の御命令をミスなくこなしたのだから、褒めてあげたいとも思うのだが。

——上位アンデッド作成、デス・エンペラー死の皇帝——

用意された人間の死体、それと同数の魂千人分を貪り喰らいて、魔王の声に一体のアンデッドが呼応する。

表情筋が削げ落ちた、血色皆無の死者の顔。所々から骨が見える。

頭上には五色の宝石に彩られた王冠が黄金色に輝き、身に纏うローブには金糸による複雑な刺繍が成されており、まるで複数の魔法陣を模しているかのようだ。

肩と胸には紫色の部分甲冑がふよふよと浮かんでおり、自立盾を連想させる。

右手に持っているのは神官が使いそうな聖杖かと思いきや、刀身が半分以上を占めており、ひっくり返せば剣としても使えそうだ。

「ふむ、千人分の魂を用いても上位種をこの世界に固定するのは無理か。せいぜい数ヶ月、半年は無理のようだな。うゝむ、人間を千人潰してこの結果ならば、『強欲』に吸わせた方がマシなのだろうか……。むむむ」

「偉大なる御方、御指示を頂きたく……」

もの凄く見つめられていたために、出ない冷や汗でもかいたような幻惑に囚われていた^{デス・エンペラー}死の皇帝は、勇気を出して召喚主へ問いかける。——何をしたらよろしいのでしょうか？ と。

「ああ、特に何も考えていなかったが、まあ、そうだな……。この近くにカツツエ平野なるアンデッドの無限召喚領域があるらしい。そこを掃除でもしてもらおうか。私に従わないアンデッドなど目障りなだけだしな」

「はっ、御勅命賜りました」

勅命さえ頂ければ召喚アンデッドの行動は迅速だ。召喚主から受け継いだ知識を頼りに、エ・ランテルの東南東にある霧深き平野を目指そうと——。

「少し待て……。パンドラ、死の皇帝デス・エンペラーに下位・中位の召喚アンデッド与えられるだけくれてやれ。皇帝は召喚エンペラーより従える方が得意だろうか。私に変身すれば三十数体は召喚可能——ん？　そういえばパンドラ、変身を解いた後の召喚アンデッドはどうなるのだ？　普通に行動可能なのか？」

「はっ、お答えいたします。モモンガ様への形態変化で行った召喚は、変身解除後に接続切断となるようです。召喚アンデッドは案山子かかしのごとく。帰還はいたしません。待機状態の人形と成り果てます」
「ほう、そうなのか」新たな発見に少し嬉しくなるモモンガであったが、パンドラの話が本当であるなら御供のアンデッドは用意できない。パンドラに変身を継続させて召喚アンデッドを動かすことは可能だろうが、あまりに非効率過ぎて選択肢の外だ。

とはいえ、手段が無いわけではない。
「くくく、予想していない突発的な事象に頭を悩ませるのは、たとえ小さな事柄であっても面白いものだ」全てを見通せる魔王にとって、『予想外』とは余興に過ぎない。それに問題が発生した場合の対応能力にかけては、骸骨魔王様の右に出る者などいないのだ。七百を超える魔法を熟知し、モンスターや罫の知識、癖のあるプレイヤーとの豊富な戦闘経験。加えて「ダブル」や「ぷにと」から嫌というほど『価値ある情報』を詰め込まれている。

案山子を動かす程度、些事であろう。

「ふむ、皇帝エンペラーの職業持ちは、「支配」や「従属」、「洗脳」などの特殊技術スキルを得ているはずだが……。召喚アンデッドの支配権を上書き、もしくは新たに構築する。どうだ？　死の皇帝デス・エンペラー。頭が空っぽの人形を尖兵と成せるか？」

「はっ、偉大なる御方。素体が待機状態であるのなら、私の管理下に置くことは可能と判断いたします。むしろ意思のある個体よりやり易いかと」

死の皇帝デス・エンペラーからの答えは、大魔王の予想通り。しかしモモンガは更なる実験に着手する。

「ああ、ついでに死の皇帝デス・エンペラーも何体か召喚してみるといい。死の支配者オーバーロード

より不得意だろうが、パンドラの召喚アンデッドと性能比較を行ってみよ。無論、パンドラの支配がある場合とない場合の両方で確認し、支配権をパンドラから奪えるかどうかもな」

「はっ、畏まりました、偉大なる御方」

「おお、なあんとも素晴らしき御勅命！ かあしこまりましたつ、モオモオンガ様！ 先程、冒険者組合なる場所がありましたので良質の死体を確保できるかと。では死の皇帝殿、参りましょう」

「しばし御傍を離れることをお許しください」との言葉を最後に、パンドラは上位アンデッドを連れて、来た道に戻っていった。

と同時に、闇妖精の双子からは満面の笑みが零れる。

「モモンガ様、次はどちらへ行かれますか？」アウラにしてみれば、自分たち姉弟が御主人様を独占しているような状況だ。だから御機嫌で、魔王様と手を繋いだりしているのだろう。ちなみに弟は姉に絶対服従なので、二人いても『独り占め』である。

「そうだな、目的地へは最後に到着することとして、遠回りに実験しながら散歩するでしょう。『絶望のオーラ』のレベルを段階的に上げて反応を確認し、最終的には……レベルVの『即死』に耐えられる人間でも探してみるか」

散歩がしたいのか、殺戮が目的なのか？

『生まれながらの異能』を持った少年を確保しに来たはずなのに、大魔王の周りには物言わぬ死体ばかりがオブジェのように転がっていた。

「モモンガ様のオーラに包まれるなんて、人間なんかには過ぎた御褒美ですよね。実験にも使ってもらえるのだから、人間たちは感謝しない！」

「そ、そうです！ モモンガ様に、感謝を、捧げるべきです！」

いやいや死んでいるから無理だろ——と突っ込むのも無粋なくらいに、闇妖精の双子は本気で純粹だ。

たとえ死体と成り果てる運命だったとしても、魂が掻き消えるその瞬間までモモンガ様に感謝の念を捧げる、と曇りなき眼が言っている。

「ふふ、そうだな。雑魚モンスターに殺されるよりも余程名誉な死に方だろう。有り難く思ってもらわねばならん」

冗談交じりの言葉と共に、漆黒のオーラが吹き上がる。

今度はレベルⅡ、効果は『恐慌』。オーラに晒された人間たちは一切の戦闘行為が取れず、その場から逃げ出そうとするはずだが……。テクテクと世界を破滅させんとする大魔王らしくない——素朴な歩みのモモンガの周りでは、多くの人間たちがこの世から逃げ去っていた。

重苦しく、全身が震え、呼吸もままならない。尋常ではない汗が噴き出したかと思えば、背筋に感じた寒気は己の意識を逃避させたくなるほどである。

恐ろしくて、恐ろしくて、家族も何もかも放つてこの場から逃げ出したい——のは山々だが、身体が思うように動かない。黒きオーラはこの世の終わりまで、この世の全てを純粹な絶望で満たさんとしているかのようだ。

だから逃げた。

己の肉体から、世界から。

それ以外に方法は無い。

いや、もしかすると魂になっても逃げられないのかもしれないが、他に道は無かったのだ。そう、死ぬことでしか救われない。

我らはか弱き人間ヨミなのだから……。

第14話 「収集魔王」

エ・ランテルには様々な人間が行き交っている。

善人も悪人も、聖職者も犯罪者も、生き抜く者も死にゆく者も……。誰もが己の信念に従い、又は他の誰かに依存し、残酷なこの世界を歩み続けていた。

今、エ・ランテルの巨大墓地を一人の女が走っている。

顔を隠すはずのフードに役割を与えることなく、脇目も振らず全力疾走だ。

普通の人間には理解できぬほどの速さであろう。人としての領域を超えているのでは、と思わずにはいられない。そんな驚愕すべき身体能力であった。

まあ、昼間とはいえ、震災被害のあった墓地には目撃者などいないのだが……。

「ああああ、まずいまずい！ このっ、早く動けよ、ボロ仕掛けがっ！」
霊廟に飛び込んだ女は、奥にある台座の裾をガシガシッと蹴りつけ、仕掛け扉のスイッチを起動させる。

余程焦っているのか、女はゆっくりと動き出す台座が——隠し階段の上から完全に移動するのを待つことなく、軽装の身体を隙間に押し込んで地下へと下りていった。

「カジっちゃんカジっちゃん！ ヤバいつて！ 最高にヤバい!!」

「……騒がしい女だ。監視の目が無くなったからこの街を出ていく、と上機嫌だったクセに。あと、その呼び方は止めろ」

声を張り上げながら乱雑に掘られた石階段を駆け下りる女に対し、黒ローブの——肉付き骸骨のようであり妙に皺の少ない初老の男は、大袈裟な溜息で答える。

恐らく知り合いなのであろう、色々と迷惑を被ったと思しき過去の光景が、短い会話の中からも垣間見えていた。

「出られないの！ 街から出られないんだって！ この街、変なモンスターに囲まれちゃってんのよ！ 私でも突破できない！」

「は？ 何を言っておる、クレマンティーヌ」

少し癖のある短い金髪の若い女——“クレマンティヌ”の実力を、黒ローブの男——“カジット”は十分に知っている。

だからこそ、呆れたような返事をしたのだ。

人類の守護者を気取るスレイン法国特殊部隊“漆黑聖典”の元メンバーであり、国一つ、街一つを容易に滅ぼせる死霊術士集団“ズーラーノーン”の十二幹部現メンバーであるクレマンティヌに、突破できない場所などあるわけがない。

たとえ近隣諸国最強と名高い王国戦士長が待ち構えていたとしても、鼻歌交じりに突っ込むことだろう。

例外なのは漆黑聖典、もしくはズーラーノーン十二幹部が複数人で現れた場合だけだが、先程クレマンティヌはモンスターと言っていた。

ならばカジットとしては、くだらない妄言と断じるしかない。

「またおふざけか？ 遊び相手の風花聖典に逃げられたからといって、儂の邪魔をするのは止めてくれ。儀式の準備も佳境に入っておるんじゃ」

「ああああああー!! どんだけ頭固いのよ! このままだと私たちも終わりだって言ってるのにー!!」

頭を掻き毟る女の形相には鬼気迫るものがある。

それでもカジットは素知らぬ顔だが、付き従っていた弟子たちの中からは、「外の様子を探ってきた方がよいのでは?」との提言が出始めている。

「ふん、まあ様子ぐらいは構わんが……。それでモンスターがどうのと言っておったな。どんなヤツだ?」

「ああもう! こんだけ言ってるのに危機感無さ過ぎでしょ! ……はあ、んで? モンスターがどんなヤツだったかって? ああ〜つと、ほとんどが隠れていてまともに見てないんだけどさ。まずは影みたいなヤツ? あとテツカイ虫? んで他にもヤバいのがいたと思う。見えなかったけど」

「ふん、見えないだと?」カジットの呟きは嘲ったものであろう。

今まで強者として好き勝手に振る舞っていた性格破綻者のくせに、

まるで普通の女であるかのような台詞を口にする——そんなクレマンティーヌの言動には鼻を鳴らしたくなる。

「くだらん話だ、と言いたいところだがクレマンティーヌよ。儂のところへ来た理由はなんだ？ まさか『危険を伝えにきた』なんて妄言をたれ流すためではあるまいな」

「ひどいなあ、カジっちゃんも無事じゃ済まないと思っただから、協力してあげようと思っただけなのに」

いつもの調子が戻ってきたのか？ クレマンティーヌはペロツと舌を出しつつ、不気味な殺気と共に本題へと入る。

「まあ早い話、例の儀式を始めちゃってほしいのよ。アンデッドの軍勢なんかは期待してないけど、スケリトル・ドラゴン骨の竜とか百体程度の動死体ゾンビぐらいは用意できるでしょ？ それで街を混乱させて、隙を見て逃げる。どう？ 生き残るために協力しない？」

「貴様が協力などつつ」軽々しく儀式発動を口にするような愚か者には吐き気がする。『死の螺旋』を再現するために、どれだけの年月を費やしたか解っているのか？

エ・ランテルの巨大墓地、深部に建つ霊廟の地下空間。ひっそりと息を潜めながらの拠点構築。街の衛士や冒険者の目に留まらぬよう気を配り、いくつかのトラブルも運と機転で何とか乗り越えてきた。

だがそれでもまだ足りない。

死の気配はまだまだ不足しているのだ。

「『えいじゃ勲者の額冠がつかん』に用いる子供を攫いに行かなかった貴様が、今更なにを言うか！ 風花の気配が無くなった途端、手の平を返しおって。貴様の都合など知ったことではない。とつと出ていくがよいわ！」

「このジジイ……、囲まれているから無理だって言っただろうがっ！」

躊躇なく、人の頭にステイレットを突き刺そうとするクレマンティーヌは異常なのだろう。ただ、その行為を予測しているカジツトもまともではない。

地面からせり出した骨の壁で必殺の突きを防いだ死霊術士、そして一歩引いた軽装戦士は、互いの殺害を静かな殺意で宣言すると、軽い

笑みを浮かべてにらみ合う。

「別にカジつちゃんはいらないんだよねえ。その、”死の宝珠”だけ？ それさえあればなんとかなるんでしょ？ だったら皆殺しいいよねえ。——あつ、カジつちゃんの弟子は一人だけ生かしといてあげる。宝珠を使つてもらわないといけなしねえ」

「愚か者が。儂一人だけならともかく、我が弟子たちにも囲まれておきながら勝負になると思っているのか？」

軽く右手を挙げたカジツトに従い、十名の黒ローブたちがクレマンティーナを遠巻きに囲む。

全員が全員、魔法詠唱者なのであろう。実力的にはほとんどが第一位階から第二位階。第三位階には二名ほどがつま先をかけている。

クレマンティーナにしてみれば雑魚もいところだろう。スツと行つてドス、を十回やれば全滅だ。

とはいえ、その間にカジツトから強力な魔法が飛んでくるに違いない。スケリトル・ドラゴン骨の竜をけしかけてくる可能性もある。ならば先にカジツトを仕留めるべきなのかもしれないが……。

「ちつ、雑魚のくせに」カジツトに手古摺れば、周囲から十名分の魔法が襲い掛かってくる。取るに足らぬ相手とはいえ、マジック・アロー魔法の矢などの追尾系を全て避けるのは困難だ。致命傷になることはまずないが、時間が経てば経つほど受ける傷は多く、そして深くなることだろう。

カジツトも当然理解しているからこそ、守りを固めて時間を稼ぐはずだ。

「聖典の武装があれば楽勝だったのになあ。ん〜でも、このクレマンティーナ様が負けるなんて——ありえねえんだよ！」

「馬鹿がつ！ 予備のモーニングスターで骨の竜を相手にするつもりか?! まともな判断も出来なくなったようだな——狂人め！」

英雄の領域に踏み込んだものが発する覇気を前にして、カジツトは冷静に、しかし真正面から迎えうつ。

クレマンティーナが刺突武器ではなく、腰の後ろに備えていたモーニングスターへ手を伸ばしたのは見えていた。刺突耐性のあるアンデッドに対し有効な武器への変更を行ったのであろうが、それは予備

武器だ。

傲慢の骨スケリトル・ドラゴンの竜に対し、あまりに貧弱であろう。自身の援護が加われば、弱点の打撃など恐れるに足りぬ。

——「じゃれ合いはそこまで」

「は?」

「え?」

どちらかが確実に死ぬであろう惨劇の一步は、唐突な何者かの発言によって遮られた。

クレマンティーヌが、カジットが、そして十名の弟子たちが顔を向けた先は、地下洞窟の荒々しい壁面。そこで壁に背を預けていた軽装の人間——いや、人型に見える存在の薄い陽炎が一体。

「な、なんで?　なんで気付けなかったの?　この私がつ!」

「クレマンティーヌ!　貴様つけられていたな!?　儂を王国へ売ったか?!」

「騒がしいぞ、『レア』と『ゴミ』どもよ」パンパンと手を打ち鳴らす軽装の——布の服しか身に付けていない、恐らく男と思われる人物は「某は主の命に従い『レア』の回収を行っている者である」と驚愕している人間どもを見渡す。

「れ、れあ?　ってその姿、もしかしてイジヤニーヤ?　なんでこんなところに」

「どういうことだ?　帝国が関係しているというのか?」

第三者の介入にカジットを含め、クレマンティーヌも思考が定まらない。

戦うべきか逃げるべきか。戦うならばどちらが先か、それとも一度に両方か、勝率はどの程度なのか。逃げるならばそのタイミングは、背中から襲われる可能性は、そもそも逃げられるのか。

クレマンティーヌはステイレットを引き抜き、姿勢低く、武技の発動を重ねる。

(戦闘態勢でなく、武器も無し!　まずテメエからだ!　イジヤニーヤ!!)

いち早く動いたのは英雄級の戦士、クレマンティーヌだ。

周囲を囲んでいた黒ローブの横を衝撃波ショックウェーブであるかのよう走り抜け、一息で細身の男まで迫る。

「死ね!!」

自身でも見事な突きだったと思わずにはいられない。手にする感触は男の頭骨を貫く、甘美なモノであることは疑いようもなかった――のだが。

「二つ目の『レア』。エ・ランテルで最も強い個体」

人差し指と親指の腹でステイレットの刀身を軽く摘み、くるりとクレマンティーンを一回転させて、そつと地面へ下ろす。

まるで紳士的な行動のように見えなくもないが、実態は主への荷物なのだから丁寧な扱っただけに過ぎない。カジットとの戦いに割り込んだのも、荷物の破損を危ぶんだだけであろう。

軽装の男――ハンゾウは、圧倒的な力の差を前にして動けないでいる女の懐から「畏の類は無し」と口にしつつアイテムを取り出すと、己の任務を確認する。

「二つ目の『レア』。ユグドラシルでは製造できないアイテム。そして――」

ハンゾウはカジットの持つ宝珠を指差し、「三つ目、この場における最後の『レア』。ユグドラシルには存在しなかった、インテリジェンスアイテム」と、切りとった人間の手首ごと石ころのような宝珠を地面へ並べる。

「なあ?! なぜ『死の宝珠』がそちらにいいぎやああああ!!」

気が付けば、右手首の先が宝珠ごとなかった。

意識してから痛みが走り、自覚してから血流が噴き出す。

「は? はあ? なに今の……、私でも見えなかった」

かつての仲間が血に塗れて叫んでいるというのに、クレマンティーン又は床に置かれたまま動けなかった。

自分の隣には『叡者の額冠』、その奥には『死の宝珠』が並べられている。

「どうやら『レア』と呼ぶモノを陳列しているのだろう。その一つが自分であることに安堵しているのか、怖れてイイのか解らない。」

今すぐ殺されはしないと推察するも、アイテムと同列に扱われている現状には不安だけが募る。

「さて」ハンゾウは軽く鋼糸を振り、十一名の解体で付着した鮮血を振り払うと「後は八肢刀エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲に回収してもらおうとして……」なにげなく「レア」の一つ、この地の強者を眺める。

「これが最強？　パンドラ様の探査に疑いの余地など無いのだが、なんと脆弱な。このような雑魚をモモンガ様の御前に並べてもよいのだろうか？　いや、「武技」とやらの使い手であるならば、個の強さは関係ないのかもしれないが」

一人で悩み一人で納得してしまうハンゾウであったが、クレマンティーン又からすると己の生き死にが懸かった査定だ。価値無しの雑魚だと認定されてしまえば、目の前に転がっているズーラーノーンの後を追ってしまおうだろう。

「は、はい！　私、あの、武技、つかえます！　すごく得意です！　何なりと御命令を！」

「ほう、それは吉報。武技の研究に役立ちそうだ。ところで……」ハンゾウは怯える人間の傍へ身を屈め、「武技とやらを見物させてもらいたい。どのようなモノなのかを理解しておけば、御方のお役に立てる機会があるやもしれん」と囁く。

「はいっ！　お見せします！　いくらでも！」

生存側へ天秤が傾いたことを確信し、クレマンティーン又は誰にも見せたことのない——既にこの世にはいない実兄が驚くこと間違いなしの——花咲く笑顔で武技の使用を快諾する。

その後、ズーラーノーンの隠れ家であった霊廟の地下空間では、運搬役の八肢刀エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲が到着するまでの短い間、数えきれないほどの武技を連続使用する若くて美しい女性の姿があったそう。

「……むう、全然わからん」

「ふえっ!!？」



パタリパタリと倒れ込むのは人間だ。

エ・ランテルで生活していた貴族、商人、兵士、そして有象無象の平民たち。古いも若きも、金持ちも貧乏も、強くも弱くも関係なく、静かに膝を崩し、二度と目覚めぬ眠りへと落ちていく。

場を満たすのは「絶望のオーラ」だ。

レベルはV。しかも大魔王が試験的に、限界までの強化に挑戦した超絶バージョンである。

万が一のことを考えて、影シャドウデーモンの悪魔と八エイトエッジ肢刀の暗殺蟲、アウラの魔獣などは効果範囲の外へと待避させており、範囲の中に居るのは最低でも「ハンゾウ」クラス。当然、人間などは一切の行動を許されず死へと至る。

「期待が過ぎたか。特殊技術スペシャルを無効化する「生まれながらの異能」ト持ちでも居ないかと思っていたのだが……」

「モモンガ様のオーラを無効化できる人間なんて、いるわけじゃないですよ！」

「でもお姉ちゃん、あの、人間のプレイヤーには凄く強い人も……」「なあくにいい、マクレーク、モモンガ様の御力を疑うっていうの？」

「そ、そんなことっ」

毎度おなじみの可愛らしいじゃれ合いに、大魔王の頬も緩む。——頬無いけど。

人間の街をのんびり散歩して、ゆったり殺戮して、優雅に特殊技術スペシャルの確認なんかを行ってみたが、中々有意義な時間を過ごせたのではないだろうか。

互いの死を覚悟した——勇者との決戦も心躍る一時ではある。魔王としての存在意義が刺激される貴重な一瞬だ。

だがしかし、たまには守護者と共に人間の街を滅ぼすのも一興かもしれない。

組織の中でコミュニケーションは重要だと、「ぶにつと萌え」も言っていたような——いや、あれは「ベルリバー」だったか？

モモンガはふと足を止めて、頭に響く着信音に意識を向けながら絶望のオーラを解除する。

「モモンガ様？ なにかありましたか？」

「ああ、アルベドから〈伝言〉が入った。……それで、何があった？」

『はっ、散策中に申し訳ありません。先程、ナザリック地下大墳墓への侵入を目的とする、四十数名の人間種集団を確認いたしました』

「ふっ、ようやく来たか」守護者統括からの報告に、大魔王は喜色をもって答える。

魔王の居城であるナザリックへの侵入は、勇者が成すべき絶対条件だ。様々な罫を潜り抜け、迷路を踏破し、襲いくるモンスターを撃破する。そして最奥の玉座で待ち構える魔王との決戦に赴くのだ。

物語ならば最高に盛り上がる魅せどころと言えるだろう。

待ち構える側の魔王としても、本来の立ち位置で戦えるので顔がニヤけて仕方がない。——骨だけだ。

「魔王討伐にきた勇者に対し、肝心の魔王が留守では格好がつかん。ではこの地での用事はアウラとマーレに任せて、私は帰還するとしてしよう」

『畏まりました。ナザリック地表にてお待ち申し上げます』

モモンガは、嬉しさを抑えきれないでいるアルベドとの〈伝言〉を終わらせると、双子の闇妖精へ言葉をかける。

「聞こえていたと思うが、私はナザリックへ帰還する。アウラはこのまま生まれながらの異能、持ちの少年確保へ向かうように。マーレはエ・ランテルの住人を皆殺しにして“強欲”に経験値を吸わせておけ」

「はい！ モモンガ様！」

「は、はい！ モモンガ様」

寂しさを誤魔化すかのような返事を察し、モモンガは双子の頭をポンポンと撫で叩くと、あさつての方向へ顔を向けて最高傑作の名を呼ぶ。

「ところでパンドラ、合流してからずっと姿を隠しているのは何故なんだ？ 私に〈透明化〉は意味無いぞ」

「はっ、失礼いたしました、モオモンガ様。仲睦まじき光景でありましたのでっ、水を差すのはどうかと思いいい脇に控えておりま

したっ」

実際は合流しようとした直前、アウラから『空気読んでよね』とばかりに睨まれたので、紳士として少し離れ気味に後方を歩いていたのだ。姿を隠したのはなんとなくである。

「よく解らんが、まあよい。パンドラはアウラとマーレのサポートを行い、全てを終わらせてから皆と共にナザリックへ帰還せよ。——では、な」

「はっ！ 行ってらっしゃいませ」

深々と頭を下げるパンドラの美しい姿に見惚れつつ、大魔王モモンガはナザリックへと転移した。後に残されたるは闇妖精ダークエルフの双子に軍服植輪。そして姿を隠した無数のモンスターたち。

ちなみに、街の住民は数に入っていない。ただのゴミなのだから当然であろう。

「あくあ、モモンガ様との散歩が終わっちゃったなあ。人間もこんなタイピングでナザリックに侵入しなくてもイイのにさあ」アウラは御褒美とも言えるエ・ランテル訪問に喜びを示しながらも、一方で邪魔をしてきた人間によからぬ敵意を募らせてしまう。「マーレ！ あたしは今から例の人間を確保してくるけど、帰ってくるまで掃除を始めちゃ駄目だからね！」

「わ、わかったよう。えっと、ここで待つてるから……。いつてらっしゃい、お姉ちゃん」

「アウラ殿、念の為ハンゾウを四体ほどお付けいたします。周囲の警戒にい——お使いくださいっ」

シユバつとポーズを変えるパンドラからの提案に、アウラは「え」と僅かに否定的な意思を示していたのだが、途中で思い直したのか「うん、よろしくね！」と元気に答えて、いくつかの特殊技術スキルを発動させる。

恐らく、デミウルゴスの件を思い出したのだろう。

自らの魔獣に絶対の自信を持っていても、あの頭脳明晰な守護者が一撃を喰らったのだ。どんなに警戒してもし過ぎるということはないのだろう。それにパンドラはモモンガ様からサポートの勅命を受

けているのだ。ならば支援を断るのは不敬にあたる。

(目標の居場所は完璧に把握しているし、近くに居るのは変な老婆と鳥の巣みたいな頭の女が一人。邪魔されるわけもないだろうけど、魔獣に食べさせちゃえばイイよね。どうせ皆殺しにするんだし……)

ニヤリと子供らしくない笑みと共にアウラは掻き消えた。

尋常ではない速度で駆け出したのだ。

周囲への影響を皆無にする恐ろしい技術での疾走なので、まるで転移でもしたかのように見える。

もちろんマーレなどの強者には『お、お姉ちゃん、張り切り過ぎだよお』ぐらいの一般的な現象にすぎないのだが。

「え、えっと、パンドラさん？ モモンガ様がおっしゃっていた『レア』の回収は大丈夫なんですか？ あ、あの、この後、ちよつと大きな魔法で人間の街を破壊しようと思っっているの……」

「おお、なんと素晴らしき御配慮！ まことに有難うございます！ それで『レア』の回収ですが、御心配無く！ すでに粗方回収済みでございます。今は微妙な価値のモノを選別しているところですので、ええ大丈夫ですよ。リミットまでの時間潰し程度の意味合いしかございません。残らず破壊して頂いて構いませんよ！ はいっ！」

天へ突き出した右手と腰に添えた左手が何を意味しているのかは解らないが、パンドラの任務が完了していることだけは理解できた。ならば何の遠慮もいらないのだろう。

この地はモモンガ様を拒絶していた人間の街——いや、ユグドラシルの人間とは別モノなのだろうが、異世界の人間が住まう街。

故に皆殺し。一切合財を殺し尽くす。

別モノであろうと関係ない。似ているだけで同罪だ。

モモンガ様には、敵意・害意を塵ほども向けてはならない。もしそんな愚か者が居るのであれば、この世から根絶すべきなのだ。確実に。

「マーレ殿？ 私のおポージングに何かっ、問題でもありましたか？」
「え、えっと……」特に気にしていなかったのでなんとさえいのか、マーレは右手の角度を調節しているパンドラへ「あ、あの、大丈

夫です、はい」とりあえず誤魔化してみた。

「それは重畳。アウラ殿には不評だったもので——」

「あたしがなんだって？」

くるりと卵形の頭部を背後に向けてみると、先程駆けていったばかりのアウラが呼吸を乱すことなく悠然と立っていた。

普通に考えれば、途中で戻ってきたかのように思えるが……。

「いえいえ、アウラ殿に評価してもらえる所作の研究を——つとそれより、人間の回収は御済みで？」

「うん、楽勝！ モノはクアドラシルに運んでもらってる」ニカッと笑顔を見せてVサインのアウラは『今度はアンタの番だからね。しくじらないでよ』とばかりに弟へ視線を向ける。

「えつと、じゃあパンドラさん、街中から僕たちを待避させてください。お、お姉ちゃんも、ね」

「はい、即座に」

「おっけ〜」

予定の行動であったが故に、パンドラたちはなんの迷いもなく配下の僕をエ・ランテルの外へと移動させると、マールへ完了の意思を伝える。

「そ、それじゃ始めますね。〈マス・フライ全体飛行〉」

マールを中心に、アウラとパンドラ、そして姿を消している八体のハンゾウ共々——濃密な魔力に包まれ、地面から足が離れる。

「ときにマール殿」街の上空へ向かう最中、パンドラの問いが闇妖精の耳を揺らす。「私のバフを受けてみませんか？ 先日モモンガ様は、シヤルティア殿で実用性を確認しておりましたが、守護者間でも試してみるべきかと思うのです」

「は、はあ……」特に必要性は感じなかった。人間の街を壊滅させるのに、強化魔法など過剰であると思えない。だが、バフを受けた場合の威力上昇——異世界における変化——がどの程度かを理解しておくのは、今後の戦闘でも役に立ちそうだ。もちろん、モモンガ様の御役に、である。

「わ、わかりました、パンドラさん。えつと、よろしくおねがいます」

「かああしこまりましたっ、マーレ殿。渾身の強化魔法でええ、その身をワールドエネミー並みに押し上げて御覧に入れましょう！」
「いや、それは流石に無理でしょ。てか、さつきからクルクル回り過ぎ」

空中でも容赦なく回転する同僚守護者の意図と、バフの効果を知り尽くしているのに大言壮語な有様には、『突っ込むまい』と思っていたアウラも無意識に突っ込んでしまう。

これが計算された言動であるなら——たぶんそうであろうが——流石はモモンガ様に創り出された直轄の僕しもべ、レベル100にしてデミウルゴスに匹敵する知恵者、宝物殿領域守護者「パンドラズ・アクター」である。

アウラの目の前で、パンドラはモモンガを始めとする至高の御方々——計五名に次々と変身すると、マーレへ過剰とも思える強化魔法をかけていた。

それは確かにパンドラにしか出来ない、多様過ぎるバフであろう。七百を超える魔法習得のために、ギルドメンバーの力を借りて人間を殺しまくったモモンガよりも色とりどりである。

変身の特殊技術スキルがちよつと便利すぎる気もしないではないが、秘匿すべきプレイヤーの全能力を取り込ませてくれたギルドメンバーのお蔭と言うべきか。アバターの支配権を一時的に貸し与えてくれるような、特別な信頼を得た者だけに許される特権かもしれない。

まあ、八割のコピー能力を発現させるためだけに、己の存在が消されるかもしれない『他人への貸与』を行うかどうかは、ちよつと疑問が残るところだが……。

「で、では、いきますね。〈魔法効果範囲拡大最強化・大溶岩流〉！」
天から舞い落ちる溶けた炎の岩流は、エ・ランテルの住人にとってあまりに美しい非現実的な光景であった。

魔王の散歩道から遠く離れた位置に住居を構えていた住人などは、絶望のオーラに巻き込まれていた憐れな隣人に気付くことなく、空を仰ぎ見て歓声を上げる。

『ああ、なんて綺麗なんだ。まるで炎の神様がこの地へ降り立つかの

よう——』

間違つてはいないのかもしれない。

人の生き死にを決定付けるのが神であるのなら、マーレの撃ち出した溶岩流はまさしく神だ。逃げ出すことなく魅了されている住人の有様からしても、この世のモノとは思えぬ存在が降臨してくるのは確かだろう。

神は地上に降り立ち、その飛沫を雨のように舞い飛ばす。

『ジユツ』と何かが燃えて焦げて灰になった。

悲鳴を上げる隙など無い。

逃げる時間なんか言うまでもない。

天からは更なる神が降りてくる。街を灰にすべく降りてくる。

これは罰なのだろうか？

いや、これはただの掃除だ。余計なモノを焼却処分し、残りの魂を箒で掃き集めて回収する。そんな雑務でしかない。

「え、えつと、こんな感じかな？ お姉ちゃん」

「いいんじゃない？ 経験値もけっこう貯まった感じだし」

にこやかに言葉を交わす可愛らしい闇妖精ダークエルフの遙か下方では、川のように流れる溶岩だけが苦痛と苦悩を代弁していた。

三重の城壁は根元だけが微かに残り、人家は跡形もない。

無論、人間が住んでいた痕跡などどこを探しても見つからないだろう。

それでも燃え尽くした人間が己の生きた証を残したいと思つているのなら、彼方此方から立ち昇る煙を断末魔の悲鳴であるとするべきか？

パンドラはそう物思いに耽りながら『哀愁漂うポージング』の研究結果を秘匿メモに書き込みつつ、帰還用の〈転移門ゲート〉を展開するのであった。

第15話 「嫌爺魔王」

帝国の請負人^{ワーカ}に舞い込んだ急ぎの依頼。

それはエ・ランテル近郊に現れた遺跡の探索だ。そう、『突然現れた』遺跡の探索なのだ。

怪しいことこの上ない。

情報が虚偽であると断ずるべきだろう。

だが、遺跡の存在自体は本当のようだ。王国の冒険者組合も動き出しており、遺跡周辺をウロウロする冒険者、及び組合員の姿が目撃されている。

このままであれば、遺跡の探索権を所持しているエ・ランテルの組合が冒険者を送り込んでくるだろう。他国の請負人^{ワーカ}などに出る幕はない。

王国が正常であれば——だが。

帝国の『とある貴族』は、王国の秘匿情報『戦士長行方不明』を手に入れ、そこに目をつけた。

『王国の上層部は大混乱だ。特に国王は病床に伏すほど……。であるならば、遺跡の件などに構っていられるわけがない。遺跡探索の許可は宙に浮く。チャンスは今しかない』

戦士長の件は驚きだが、確かにそれなら王国も混乱するだろう。スレイン法国で起きた大噴火騒動も含めると、遺跡盗掘の請負人^{ワーカ}などに手勢を割いている余裕はないはずだ。

「——いけるかもしれない」

組合の規則に縛られている冒険者と違い、請負人^{ワーカ}は自由だ。国の許可など糞喰らえ。責任は自分でとらなければならないが、それは当たり前前の話だ。

それより新発見の遺跡に一番乗りをして、手付かずのお宝を獲得できる可能性を重要視したい。

エ・ランテルの近郊にありながらも今まで大きな被害が発生していないのであれば、中にいるかもしれない先住者の危険度は比較的低いと判断できるだろう。

貴族が提示してきた条件自体も悪くない。

マジックアイテム
魔法具を発見した場合は無条件提出——というのは痛い、それ

以外の宝物に関しては折半、加えて移動手段や宿泊食事、消耗品の提供など、魅力的なバックアップが盛り沢山だ。

これならエ・ランテルに寄り道する必要もないので、冒険者との余計な摩擦は避けられる。

「——それ集ったワーカーチームの実力からすれば、事故は限りなくゼロに近いかも？」

遺跡への突入を請け負ったのは全部で四チーム。

いずれも帝国では名の知れた実力派である。ただ、腕前ほど人格的にも優れているかというところ……、当然そんなわけではない。

他国の所有物にちよっかいを掛けにくいのを良しとする連中なのだ。森妖精を戦奴隷として連れ歩き、人前で暴力を振るったりする者もいる。

「——殺した方がいいと思う」

「私も賛成！ 遺跡の中でやつちやおうよ。サクつと」

「イミーナさん、声が大きいですよ」

「お前らなあ、他に言うことあるだろ？ 前を見ろよ前をつ」

リーダー「ヘッケラン」のぼやきに、請負人チーム「フォーサイト

」のメンバーたちは、大型馬車の外へ視線を送る。

「——これが、遺跡？」

「うそでしょ?! どんだけデカイのよー！」

「帝城の城壁より立派に見えますねえ。破損も無さそうです」

「つまり、大儲けできそうだったことだよな？」

歴史を感じるわりには傷一つなく、巨人をも遮りそうな大きさと厚みを持つわりには美しささえ感じる。そんな城壁の近くを馬車で進みながら、請負人たちは歓声を上げざるを得ない。

中に遺されている宝物の価値は、建造物の規模に比例するからだ。

もちろん、防衛力や罠の強しさも同様であろうが、ミスリル級冒険者に匹敵する請負人にとっては過剰に警戒する必要もない。

行く手を阻む敵がたとえ「死者の大魔法使い」や「骨の竜」で

あろうとも、容易く粉碎してみせよう。

「――どの文献にも記載がない遺跡。つまり王国や帝国よりも古い。中を覗き見た者の話では霊廟があったとのこと。よってこの遺跡は『古代墳墓』、モンスターがいるとすればアンデッドの可能性が高い。というか間違いなくアンデッド」

情報の周知と再確認。フォーサイトの魔法詠唱者「マジック・キャスター」アルシエは、この地へ来る前に開示していた知識を淡々と呟く。

「踏み込む先が『墳墓』だと判つていれば対策が楽だよな。ほんと貴族様様だぜ。エ・ランテルの冒険者組合から情報をとつてくるなんて、スパイでも送り込んでんのか？ ってな」

「フェメール伯爵、だっけ？ 結構危ない橋を渡るもんよねえ。王国が混乱している隙について盗掘なんて、冒険者組合も怒り狂うわよ」
「他人事ではないですよ。王国の冒険者は今のところ遺跡へ入れませんが、遺跡から出てきた盗掘者を討伐することは禁止されています。それに王国のワーカーも……。皆さん、十分に注意を」

神官「ロバーデイク」の自戒ともとれる警告を最後に、大型馬車数は野営予定地へと走り込み、事態は慌ただしく動き出した。

帝国の雇われ冒険者が野営地設営と動く一方、四組の請負人チームは墳墓の正面口を遠目から観察できる位置へ移動し、中へ入る前の簡単な偵察を行う。

『綺麗すぎる。雑草が生い茂っていて当然であろうに……』

誰の呟きかは不明だが、アルシエは心の中で頷いてしまう。

確かに、手入れされていると確信できる丁寧な仕事だ。一切の妥協が無いために『動像の手によるものか』とも思ったが、繊細且つある種の誇りが感じ取れることからして、魂を持った何者かの存在を――
『偵察など無駄だと思うのですが……。さっさと行きましょう。先陣は私が引き受けますよ？』

――死ねばいいのに、そう思いたくなかったのはアルシエだけではないのだろう。

刀を備え、三人の森妖精奴隷を引き連れる自称最強剣士の提言を前にして、請負人たちはやれやれと頭を振ってしまふ。

『王国の邪魔が入る前にコトを済ませるのは確定事項しやかのう。事前の準備はしっかりしておこうぞ。野营地へ戻って腹を満たし、暫しの休息。遺跡侵入はそれからしや』

最年長の御爺さんが言うように『急ぎであること』は最初から判っている。だが『急ぎ方』にも色々あるということだ。

本来であれば他の請負人^{ワーカー}チームが準備不足で先走ろうとも、苦言を呈すことなどない。商売敵でもあるのだから、全滅してくれるのは大変結構なことである。でもまあ、今回は同じ遺跡への侵入だ。抜け駆けしてお宝をかすめ取ろう、というのは許されない。

『では汝ら、いったん戻ろうぞ』

山小人^{ドワーフ}のような全身鎧の請負人^{ワーカー}は仲間を促しつつ、兜から突き出た角を野营地の方角へ向ける。

「だнат。野营地での飯は奢りなんだから、食つとかねえと損だぜ」

我らがリーダー、ヘツケランの軽いノリに『そりやそーだ』と何人かの顔見知り^が笑いながら答え、歩き出す。

後に残るは、オドオドしている森妖精^{エルフ}奴隷と慥然とした自称天才様だけ。

本来であれば、弱者たる他の請負人^{ワーカー}チームに同調するつもりなどないのであろうが、全体の指揮に従うと言ってしまった手前、勝手な行動は己の価値を下げるだけである。

自称天才剣士の「エルヤー」は「雑魚に足を引つ張られるのは気に入りませんが、まあ仕方ありません」などとほざき、奴隷の森妖精^{エルフ}を軽く殴りつけると「ノロマがつ、さつさと動きなさい」不満げな表情を隠すことなく野营地へと足を向けるのであった。

「——最低」

「やっちゃおうよ。私はいつでもいけるよ」

「まったく、イミーナさんに同意したくなる酷さですね」

周囲へのアピールとして振るわれた暴力であったため、当然フォーサイトのメンバーも殺意で応えてしまう。言うまでもなくエルヤーに対する殺意なのだが、リーダーのヘツケランとしては止める側に動

かぎるを得ない。

「気持ちには解るけど、ヤルのは無しだ。この地へきたのは遺跡のお宝を持ち出すため、殺人じゃない。つーか、止めるのはロバーの役目だろ？ なに一緒になって騒いでんだよ」

「はは、これは申し訳ない」謝罪を口にするロバーデイクでも、半分程度は本気だったのかもしれない。イミーナに関しては九割がマジだろう。アルシエは十割が嫌悪感で、殺すつもりはなかったようだ。ただ女性に暴力を振るう自分勝手な男の姿に、自分の親を重ねてしまっただけである。

「さあ、これから忙しくなるんだからな。食うもん食って、身体休めて、エ・ランテルの同業者が出張ってくる前に、貰えるもんは貰うぞ！」

「――了解」

「はーい、わかったわよ」

「もちろんです。しっかりと稼がせてもらおうとしましょう」

リーダーの掛け声に、フォーサイトのメンバーは異論なく従う。

特段、不満などは無いようだ。

イミーナ自身も理解しているのだろう。ここで同業者のエルヤーを殺害するということが、どんな意味を持つのかを。

請負人^{フリーカー}同士の殺し合いなど珍しくはないし、嫌われ者の「天武」を排除したとして誰からも文句は出ない、と言いたいところではあるが、現在は同じ依頼を請け負った仲間なのだ。

依頼そつちのけで仲間殺しをしている請負人^{フリーカー}など、その界限では忌避される。

次の依頼も期待できないだろう。

まあ、引退するつもりなら構わないかもしれない。無論、他のチームに迷惑がかかるので、それなりの覚悟と逃げ道を用意して刃を振り下ろすべきだ。

「――それにしても」アルシエはふと振り返り、沈黙している墳墓を見つめる。「こんな場所に、いつから存在していたの？ どうして今まで見つからなかったの？ 魔法による隠ぺい？ いえ、こんなに巨大

なモノは……」

小柄な魔法詠唱者から零れ落ちる多くの疑問に、答えをくれる者はどこにも居なかった。

ただ、その眩きを聴いている異形の者たちは、数えるのも億劫なくらい、その場に佇んでいたのだが……。



『お主らは先に潜るといい。地表の探索は儂らか引き受けよう。後ろからやってくるかもしれない、王国のワーカーともに対する警戒も必要しやろうからな』

最古参の請負人チームが地上に残ると言い出して皆困惑気味であつたが、背後の警戒を請け負うから奥で得た収入の一部をよこせ、との取引には納得だ。

大きく儲けることを諦めて、危険な奥地への侵入をすることなくそれなりの金貨を獲得する——その決断には賞賛を送りたくなるものの、請負人としては失格だろう。

チームメンバーの不満な様子からも判る通り、巨大な墳墓から得られる宝の規模は想像を超えるはずだ。

ここで行かないでどうする？

退いてどうする？

一攫千金こそが請負人の本質だろう！　なんて文句が聞こえてきそうだ。

『かかか、四方にある霊廟にもお宝はあるしやろうし、もしかすると儂らの方が大儲けするかもしれないぞ？』

そこまで言われたら拒否する理由はない。エルヤーだけが背面警護の支払いに不満げであつたが、特にそれ以上の議論が発生することもなく探索は始まった。『天武』　『ヘビーマツシヤー』　『フォーサイト』が中央の大きな霊廟へ突入し、老公『パルパトラ』率いるベテランチームが地表周辺を見て回る。

請負人チームはいずれもミスリル級に匹敵する強者どもだ。墳墓

の攻略は数日で終わるだろう。王国の冒険者が足を運んだ時には、からっぽの墳墓が残されているはずだ。

「本当によかったんですかい？ 老公」降りていった同業者の気配がなくなつてしばし、残っていた請負人の一人「戦士」が、納得していない感じに口を開く。

「ああ、お主らは不満かもしれんか、この墳墓はマスイ。これだけの規模からして、奥に竜トラコングラス級のモンスターが待ち構えていても不思議ではない。まずはカナリアを先に進ませて、様子を見るべきしやな」

「まあ、老公の判断なら間違っていないとは思いますが……」

それでも命を懸ける価値はあったのでは？ と「魔法詠唱者」は、発見されたかもしれない未知の魔法マジック・アイテム具を想像してしまう。

墳墓の魔法マジック・アイテム具は依頼主へ提出する契約ではあるが、発見者であるなら格安で購入できるので、手元に置ける可能性は高かったのだ。

だからこそ、もったいないとの思いが消えない。

「お主ら、落胆するのは早過ぎるぞ。地上の霊廟にも面白いモノがあるかもしれんしやろ？」

「ははは。そんなじゃま、とつとと——」

「お話のところ、失礼いたします」

「盗賊」がやる気を見せだしたその時、丁寧にハキハキとした女性の声が請負人全員の耳を誘い、視線を一点に集中させてしまう。

老公「パルパトラ」が見つめる先は、中央霊廟から城壁入口へ向かって五十メートルほどの開けた場所。先程請負人四チームが歩いてきた平地であり、身を隠す場所の無い開放的な空間である。

「な、なんしやと？」

驚愕の理由は二つ。誰にも気取られることなくその位置に立っていたこと。そして、立ち並ぶ六名の女性が皆メイド服のようなモノを纏っていて、全員が天上の美を具現化したかのように美しかったことだ。

「皆様にお知らせすることがありまして参りました」コツコツと六人の足音にしては小さすぎる規則的な音を響かせて、中央の黒髪を結

い上げた眼鏡のメイドが語りかける。「では御清聴願います」弓矢や魔法での攻撃が十分に届き、接近戦も挑めそうなほどの中距離にまで足を進めたメイドたちは、攻撃を受けるかもしれないとは露ほども思っていないかのように整列し、背筋を伸ばし、美しい唇を大きく広げる。

『魔王の城に挑まぬのであれば勇者にあらず。勇者でなければこの場に居る資格はない。資格なき者には死を、慈悲深き死を与える。……ちなみに、ジジイは勇者としてイマイチだ。ふふ、魔王にだって好みがあるんだぞ。悪く思うな』

「以上、御主人様からの御言葉です」眼鏡のメイドは、御主人様とやらの軽い笑いまで忠実に再現し、深々と頭を下げる。と同時に、他のメイドからも一糸乱れぬ丁寧な礼が行われていた。

その美しい光景は、請負人^{フリーカー}たちに礼を尽くしたというより、御主人様への敬意だったのかもしれない。御勅命を見事にこなす完璧なメイドの姿をご覧あれ——とまあ、そんな感じなのだろう。

「魔王？ 勇者？ 慈悲深き……死、しゃと？」

こっそりと戦闘準備を整え、仲間たちに目線で配置を指示する。パルパトラは時間を稼ぎつつ、戦うか、逃げるか、の決断を下そうとしていた。

「疑問に答えて差し上げたいところではありませんが」眼鏡をくいつと整え、リーダーらしき黒髪のメイドは「あなた方には死んで頂きます。ええ、そうですね。自己紹介もまだなのに、とは思いますが『名乗るほどの相手ではない』とのことですのでご容赦を」と口にする、並び立つ五名のメイドへ指示を飛ばす。

「ボ……、失礼しました。——私の可愛い妹たち！ 皆殺しになさいつー！」

「おっけーつすよ、うひゃひゃー！」

「ユリ姉様？ 可愛いって？」

「ああ、決め台詞ってヤツじゃないかしら？ 練習していたもの」

「……………最後の台詞は自分で考える。モモンガ様の御指示」

「うーん、確かに私たちは可愛いけどお、ユリ姉様あ、妹を自慢し過

ぎい」

「あ、あなたたちいい!!」長女の格好良過ぎる号令一過、五名の戦闘メイドが請負人へと襲い掛かり、瞬殺。そしてユリがドヤ顔で軽く礼をして、華麗な任務完了となるはずだったのだが……。

中々上手くないかないものである。

結局、襲いかかったのはルプスレギナだけであり、一人でパルパトラを含む五名をドでかい十字型の聖杖で殴り倒している。他の妹たちは、ユリの決め台詞にあれやこれやと注文を付ける有様だ。

ユリの籠ガントレット手が猛威を振るうのも仕方がない。

「うう、いたい。どうしてゲンコツされたのかしら?」

「思っていたより恥ずかしかったのでしょ。まあ私もちよつと痛いわ。姉さんの打撃は私にも有効なのだから、もつと優しくしてほしいわね。……それよりルプーがみんな殺してしまったわよ。一人は私が溶かす予定だったのに」

「残りはわたしが食べるう。新鮮なおにくうー」

「……………死体は好きにして良いとの御言葉。でも食い過ぎ」

「はいはい、無駄口はそこまで」両手をパンパンと打ち鳴らすユリは、はしたない奇声を上げて請負人チームを肉塊へと変えているルプスレギナにため息を吐くと、残った妹たちへ「外の野営地も潰しにいくわよ。実戦経験の少ない私たちのことを考えて、モモンガ様が与えてくださったお役目なのだから集中しなさい!」と檄を飛ばしていた。

「はい、ユリ姉様! モモンガ様の御勅命、全力で遂行します!!」

〈飛行〉!」

「ちよつとナーベラル? 一人で行かないで!」

「ソーちゃんがんばつす。ナーちゃんのフォローは任せつつすよ」

「……………ルプーもいく。サボタージュは駄目」

「おにく美味しいい。——あれえ? ユリ姉さまあ、何かあ言ったのお?」

「……………はあ」とりあえずルプスレギナの首を背後から引つ掴まえ、モグモグしているエントマを小脇に抱えてユリは走り出す。向かう先は侵入者たちの野営地——なのだが、先に飛んでいったはずのナーベラ

ルは、何故か正反対の方向へ。地上からソリユシャンが「そつちじやないわよ！」と呼びかけてはいるものの、ポンコツ魔法詠唱者マジック・キャスターが聴き取った気配はない。

「よく考えたら、創造されてから初めて経験する外敵との戦闘なのよね。張り切り過ぎて空回りするのも仕方がないのかしら」

「そ、そっつす。だか——ら、も、ちよ、力を緩めつ、ぐぐ、くび、首が締まっ」

「もどすう、もどしちやううう。ユリ姉さまあ、お腹が潰れちや——」

「……………嬉しくてはしゃいでいるともとれる。でも、ユリ姉だつて人のことは言えないかも?」

シズの分析によれば、無駄に力が入っているユリも同類らしい。

こんな調子では任務達成に支障をきたすかも? と少しばかり不安になるが、それもこれもモモンガ様にとっては予想の範疇なのだろう。

「……………でも、甘えてばかりはよくない。しっかりお仕事、する」

「そうね、頑張りましょう」

赤毛と小柄なメイドを地面へ落とし、『やっぱり私の救いはシズくらいね』と長女にあるまじき台詞を漏らすと、ユリは妹たちと共に視線の先にある野営地へと足を向けるのであった。

第16話 「観戦魔王」

死者の大魔法使いに追いかけられ、踏み入った部屋で淡い光に包まれて、気が付けば巨人が悠々と歩けそうな薄暗い通路にて格子戸を眺めていた。

格子戸の先にあるのは、どう見ても闘技場である。巨大で勇壮で、帝国の闘技場よりも多くの死を積み上げたであろう歴史ある戦場。

生きて帰れるとは、とても思えない。

「やっちまったんかなあ」

後悔を含めて、グリーンガムは普段の口調で苦悩を吐く。

途中までは順調だった。見たこともない美術品のような金貨に、大ぶりの宝石。しっかりと鑑定したならば、所持しているモノよりも有用かもしれない魔法具の数々。

『一生遊んで暮らせるかもしれない』と、そんな考えが浮かんだ直後、待っていたのは転移罫だった。

いや、罫にかかったことが問題なのではない。罫が転移だったことに問題があるのだ。

集団転移なんて神話の世界の戯言——であるはずなのに、いともたやすく目の前に現れ、活用され、その威力をまざまざと見せつけてきた。

手も足も出ない。

今や闘技場へ駆り出される見世物だ。

恐らく、そんな我らを観覧席から見下ろすのは、転移を使える化け物のような存在なのだろう。格子戸を掴む手が震えて仕方がない。

「どうするよ？ 抜け出せそうな穴なんかどこにもないぜ」

「水薬はまだある。武器も問題ない」

「……うそだ。転移なんか……できるわけがない。俺たち全員を……、絶対無理なはずなんだっ」

「落ち着けよ。俺たちはまだ生きている、そうだろう？」

「ヘビーマッシュヤー」のメンバーは歴戦の強者たちだ。苦境を乗り越えたことも一度や二度ではない。だからこそ帝国でも名の通っ

た請負人チームなのだ。

絶望するには早過ぎる。

「ふははははー!」グリーンガムは己の鎧をガツンと叩き、笑い声に気迫をのせる。「面白い! 我らを闘技場の見世物とするなら、ああ、思い知らせてやろうではないか! ヘビーマッシャーの実力をなっ!」

カラ元気なのは解っている。口調も営業用で、リーダーとしての面目を保とうとしているのは承知の上だ。

だからこそ、メンバーたちも己を鼓舞して立ち上がるしかない。

それしか生き残る道は無いのだから。

「いくぞお!!」

「おう!!」

覚悟の雄叫びと同時に、格子戸が引き上がっていく。

まるで監視していたの如きタイミングだが、転移を使える者がいるのであれば不思議なことではないのだろう。

それでも、観覧席にいる大量の動像ゴレムが足を踏み鳴らし始めたのには肝が縮む。闘技場を覆わんばかりの大音量もそうだが、国を丸ごと踏み潰しかねない動像ゴレムの多さ——加えて天井を彩る星々の輝きには「ここはどこだ?」と、先程の覚悟も忘れて啞然とするばかりだ。

『さあさあ、入ってまいりました。最初の挑戦者たちです。彼らは魔王様の試練に打ち勝ち、〃勇者〃の称号を得られるのでしようか』

観覧席最前列の更に前にある小さな出っ張りに軽々と身を置いているのは、可愛らしくも美しい——快活ダイクエルフそうな闇妖精の少年であった。

手にした小さな棒に当たった声が闘技場全体に響き渡っていることからすると、魔法マジック・アイテム具を用いているのであろう。無論、喋っている内容は敵方のもの。グリーンガムらが予想した通り、侵入者を見世物とするつもりらしいが……。

「魔王? それに勇者……だど?」

遺跡の奥に引き籠っている何者かが、魔王を始めとする強者の名を利用するのは珍しいことではない。人間や竜王の間でも、己の実力を

知らしめるために『派手な二つ名』を用いる傾向にある。

とはいえ、さすがに「魔王」はやりすぎだ。

自己顕示欲が強いにもほどがある。

『侵入者を試すのは〜』気分よく言葉を紡ぐ闇妖精は、反対側の格子戸を指差し『トブの大森林で「森の賢王」を名乗っていた、立派な毛皮を持つ四足獣！「ハムスケ」という名を魔王様から与えられた羨ましいヤツ！ほら〜！出てこいハムスケ〜！』

呼びかけに応じ、「ヘビーマッシャー」の前に現れたるは伝説の獣。

巨大な丸っこい身体に太い四足、そして長い尻尾。全身を覆う毛皮は白銀の輝きを放っており、容易く刃が通るとは思えない。

グリーンガムは下っ腹に気合を込めて、威厳ある瞳でこちらを見つめてくる魔獣に対し、一步を踏み出す。

「ここが正念場だ！あれほどの大魔獣を、何者かが制御できているとは思えん！つまりこの場合は、墳墓から遠く離れた魔獣の隔離施設に違いない！ならば我らが成すべきは一つ！魔獣を倒し、この闘技場から脱出するぞ!!」

「おお!!」

転移の御業には驚かされる。

墳墓の中から別天地へ飛ばされるなんて、長い請負人生活でも初めての経験だ。だが絶望するような状況ではない。

目の前の大魔獣は、確かに恐るべき強敵であろう。チームで戦っても苦戦は免れない。それでも勝ちさえすれば、後は非戦闘員と思しき闇妖精の子供とノロマな動像だけだ。逃げ切れる可能性は高い。

「魔王を名乗る墳墓の主もどこからか見ているのだろうか、『残念だったな』と言ってやるぞ！遠く離れた墳墓の奥で、地団駄でも踏んでいるがいい！ニセ魔王がつー!」

「——おい、そのカブトムシ。いま、なんて言った?!」
一閃。

見えない何かヘビーマッシャーを襲い、胴の部分で人体を上下に斬り分ける。武器も鎧も関係なく、綺麗な切断面を晒しながら上半身

が崩れ、下半身が潰れる。

『べちよ』と汚らしい音と共に血溜りが姿を現し、闘技場の一角を真っ赤な血で染めていた。

「あつ、しまった！ 殺しちゃった……。あの、申し訳ありません、モモンガ様」

「ふふ、謝罪の必要はないぞ」鞭片手に縮こまる闇妖精ダークエルフ「アウラ」を前に、不可知化を解き——統括アルベドと各階層守護者及びパンドラ、セバスと共に姿を見せたモモンガは、骨の手をヒラヒラさせて「不用意な発言で命を落とすなど、勇者に相応しくない行為だ。あやつらは自業自得であり、勇者失格なのだから気にするな」

「はい！ ありがとうございます！」

「まあ、レア魔獣との戦いは見てみたかったが……」モモンガは視線をおとし、森林偵察時のアウラによつて捕縛された一体限定のレア個体——ハムスケを見つめる。

「ひいひいひい、それがし 某がもつとはやく襲いかかるべきでござった！ まことに申し訳ないでござる！ だ、だから、殺さないでほしいでござるよお〜！」

当初は毛皮を剥ぐために捕らえられた魔獣である。

それが一体しか存在していないレアであると判明し、大魔王モモンガのコレクションに加えられることとなった。

「ハムスケ」という、悟のセンスでは決して出てこないであろう素晴らしい名前と共に。

「ワーカーは他にも居るから安心しろ、と言いたところだが、あと二チームか……」

魔法の鏡に映る侵入者は、森妖精エルフの奴隷を連れた剣士のチームと、男女混合で子供のような魔法詠唱者マジック・キャスターまでいる連携の良いチーム。

モモンガの目には、どちらが勇者チームとして相應しいのかは判らない。奴隷を連れてくるからといって否定するのは早計だし、少女を仲間としているからといって実力を軽んじるのは良くない。

それに実力や経験なら、後からいくらでも詰め込めるだろう。

必要なのは勇者としての資質なのだ。大魔王の居城に攻め込んだ

以上、その資質を示してもらわなければならない。

「では次だが、このままハムスケをぶつけるか、別の駒をぶつけるか……」

「モモンガ様！ わた、わらわのペットを使つてくんなまし！ 調教はバツチリでありんす！」

「御待チクダサイ、モモンガ様。私ガ才預カリシテイル、例ノ戦士長トヤラガ適任カト。武技ノ応酬ヲゴ覧クダサイ」

今回勇者選定の駒として用意されたのは、アウラのハムスケ、シャルティアのペット、そしてコキュートスに預けられていた武技使たちであった。無論、スレイン法国の神人らは相手の資質を見る前に殺しかねないので却下だが、他の人員はそれなりにイイ勝負をしそうなので期待が持てる。

周辺国家最強と言われている男と同様、ハムスケと共に捕らえられた刀使いも、今回の請負人^{ワーカ}程度であれば役に立ちそうだ。

「そう、だな。次はコキュートスの駒にしよう。シャルティアのペットは最後だ。——よし。アルベドよ、次の勇者候補を誘導しろ」

「はっ、かしこまりました、モモンガ様（私も……旦那様との駒を育てたい）」

複数の思考を同時進行できるアルベドが何を考えているのかは不明ながらも、その指示は的確かつ迅速だ。

左程待つことなく何者かの気配が闘技場に現れ、引き上がる格子戸の向こうから四人組が姿を見せる。

「（では見物させてもらおうとしよう。皆、余計な注意を引かぬようアイテムを使つて姿を消せ）」

「（はっ）」

勇者候補には、試練に全神経を向けてもらう必要がある。委縮して実力を発揮できない、というのは困るのだ。

故に吸血鬼や蟲^{ヴァンパイア} 王^{サアミンロード}には、気配すら消してもらわねばならない。大魔王は言うに及ばず。

その場に居てよいのは、幼さから警戒心を持たせないであろう闇妖精^{ダイクエルフ}ぐらいか？ まあ、観覧席の動像^{ゴーレム}に関しては飾りだと思って諦

めてもらうしかない。

脆弱な勇者に配慮するにしても、限度があるのだ。

「なんですかここは？」まるで見世物のように誘導されている、という不快感を隠すこともなく、エルヤーは閉鎖された広場に足を踏み入れ、傍にいた野伏の森妖精を殴りつける。

「ひっ、あ、あの、闘技場ではないかと」

「そんなこと見れば判ります。聞いているのはどこの闘技場か、ですよ。役立たずめ！」もう一度殴りつけ、今度は後ろにいた森司祭の森妖精を睨む。「あの転移罫はなんですか？ どこからどこへ移動したのか解析できないのですか？ 墳墓はどこなのですか？ ここは外ですよ！」

「も、もうしわけありません。私では、手に負えません」

「このっ、何のための魔法だ！ クズが！」理解できない状況へのいら立ちを奴隷にぶつけ、エルヤーは少しだけ冷静さを取り戻す。外の新鮮な空気を深く吸い込み、ゆつくりと吐き、周囲を見回しては、闘技場の観覧席を埋める動像の大軍に目を見開き——そして信じられないほどの美しさを持つ闇妖精の登場に、ポカンと口を開けてしまう。

『はいはい！ では次の挑戦者です。奴隷を連れているという勇者っぽくない剣士ですが、はたして勝利を掴むことは出来るのでしょうか？』元気の良い闇妖精はエルヤーの反応など毛ほども気にせず、別の入り口を指さしては『勇者選定の任を担うのは、この辺りで最強らしいおじさん戦士だー！』と、ちよつぴり可哀想な紹介で『戦士長ガゼフ』を迎え入れる。

「最強……だと？」

訳の分からないことばかりだが、エルヤーには一言だけ理解できていた。

それに前から歩いてくる人間の外見が、伝え聞いていた『ある人物』とそっくりだったことに、身が震えるほど歓喜してしまったのだ。

「ガアアアアゼフウ!! 王国戦士長ガゼフ！ くはははは、信じられませんか、貴方とこんなところで会い見えるとはっ！ 私はなんと

運がいい！ くだらんトラップで外に放り出されたかと思ったたら、最強の称号が目の前だ！」

「……どなたか存じ得ぬが、先に謝罪しておこう。私は貴方を殺さねばならない。指示に従わねば王国民に被害が及ぶのだ。申し訳ない」
請負人^{フリーカー}と王国民。優先すべきはどちらかというところ、答えるまでもないだろう。人命に貴賤はない、などと綺麗ごとを語っている場合ではないのだ。

だがそんな都合などエルヤーには関係ない。

最強の称号が目の前にあるという事実。それだけで刀を振るう理由になる。

「その首、いただきますー！」

「こいつー！」

瞬時に間合いを詰めるエルヤーに、人外の動きで相手の死角に移動するガゼフ。

勢い余って突っ込むのかと思ったエルヤーが瞬時に姿勢を戻すと、斬りかかったガゼフが咄嗟に飛び退き、自身に飛んできた放出系の武技を長剣で弾く。

「尊程ではありませんねー！」

「そちらは見事な腕だと思っぞ」

「ほぎけつー！」上から目線で褒めてきたガゼフに再度〈空斬〉を飛ばし、間合いを離すと、エルヤーは習得していた中でも最強の武技を発動させる。

「〈能力向上〉、〈能力超向上〉！」

「ほう」

超級の剣士であることの証明となる〈能力超向上〉は、一瞬にして一段上の能力を持ち得る破格の武技だ。

肉体が人間の領域を超えて強化され、竜^{ドラゴン}であろうとも打ち碎けるに違いない。

少なくともエルヤーはそう確信していた。

「ははっ、尊の五宝物を装備していないのは残念ですよ。私が譲り受けるつもりだったのに」

「いや、そちらからは安物の長剣と革鎧にしか見えないと思うが……。ああ、うん、教える必要はないか」

勝利宣言のエルヤーへ何か言いたそうなガゼフであったが、何を言っても無駄だと悟ったのであろう。両手で長剣を握りしめ、静かに武技を使う。

「〈能力向上〉、〈能力超向上〉」

「いな、なにっ？」人が異形の猛獣となったような、そんな身体の奥が縮こまる錯覚を受けて、エルヤーは二歩下がる。

奇妙な声が出たのは、戦士長が自分と同じ武技を使用したからではない。ガゼフなら使えて当たり前であり、驚くようなことではない。ならば何故か？

答えは変化だ。

己が使用した武技の能力向上率と、ガゼフの場合と。あまりに違う、あまりに強大だ。同じ武技とはとても思えない。

「ふざけるな！　なにか魔法による強化を行ったな！　卑怯者め！」

「ふざけてなどいない、地力の差だ。私は戦争時や宿敵相手ライバルにしか、この武技を使用しないこととしている。あまりにも差が開き過ぎるからな。だが今回は絶対に負けられないのだ。すまない」

「なめやがってえ！　奴隷ども！　強化だ、強化魔法をよこせ！　ありったけだ!!」

「……………」エルヤーの声に応じた森妖精エルフは一人もいなかった。奴隷として反抗心の欠片すら砕かれている彼女らが、主人の命令を無視するなど有り得ない。それなのにエルヤーが振り向いた先には、あさつての方向を向いて平伏している——主人のことなど気にもしていない奴隷の姿があった。

「こ、このっ！　殺されたいのか！」

「……………構いません、殺してください。あの御方の前で惨めな姿を晒している私たちを、どうか……………殺してください」

奴隷三人の意見を代表しているのか、神官の森妖精エルフは観覧席の縁に立っている闇妖精ダークエルフへ頭を下げたまま、主人を過去のものと断じる。

その声には、ほんの少しだけ喜びが含まれていた。

「な、なんだと?! なん——」

「ワーカーよ、それぐらいにしておけ。戦う相手を間違えるな!」
「ぐっ!」恐ろしく速いガゼフの一撃を受け止めたものの、衝撃で身体が浮いてしまう。咄嗟に〈即応反射〉〈流水加速〉〈回避〉を連続起動させるが、空中では思ったように動けず、一瞬の遅れがエルヤーの脳裏に死を連想させる。

「終わりだ!」

「がああああ!!」腕と肩を間に差し込み、骨と肉をもって剣の軌道をずらす。ぶちぶちと嫌な音が己の身体から聴こえてくるが、脳天を突き刺す痛みで何もかもが上書きされる。

「まだだあ! 天才の私が負けるものかあ!!」

叫ぶ、声が出る、ならばまだ戦える。

エルヤーはグチャグチャになっているであろう左半身へ視線を動かすことなく、ガゼフを睨む。

「たいしたものだ——と言いたるところだが、自分の頭がどうなっているか分からないのか? いや、それでよく話せるものだと思っとな」

「っ? らりろにっへふるるろれひは?」声に出してから気付く。何かおかしい。エルヤーは意味不明な言葉を発している己に戸惑い、次いで右目が見えなくなっていることに今更ながら困惑していた。

「はへ? ほへ?」

「悪いが人間の肉体程度で、この剣の軌道は変えられんよ。奇跡的に出来たとしても、ごく僅かだろう」ガゼフは名も知らぬ請負人の前で、申し訳なさそうに表情を曇らせる。戦意は無く、長剣もだらりと下げたままだ。

「……」ゴスつと地面に重量物が叩きつけられ、血生臭い何かが撒き散らされる。それは人間であったのだろう。左半身が潰され、頭部も三分の一程度が斬り飛ばされている。

ガゼフはしばし目を閉じて黙祷すると、出てきた通路へ足を向けた。

戦士長の戦いは終わっていない。これから先も、同じような殺し合

いが続くのだろう。だがそれでも退く訳にはいかない。王国民を護るため、立場が変わっても剣を振るい、一步を踏み出すのだ。

先は見えない。未来は無い。あるのは魔王との約束だけ。

——『勇者となり我を倒せ、出来なければ世界は滅亡する』——

一方的で実現不可能な言い草だ。

かすり傷一つ付けられない相手に、なにを成せというのか？

ちらりと地に伏した請負人の剣士を眺め、ため息を一つ。

あれが未来の自分なのだろう——ガゼフはそう呟くと、ヴァーミンロード 蟲 王が待っている控室へと向かうのであった。



『さあ、最後の挑戦者はコイツらだあ！』可愛らしい掛け声に導かれ、四人の請負人が最大の警戒心を持って闘技場へ進み出る。『勇者の試練を突破できたものは未だにゼロオ〜！ そろそろ根性見せてくれないと、魔王様の時間を無駄にすることになるんだからねえ！ あたしも怒っちゃうぞ〜！』

「はっ？ 勇者の試練だって？」

観覧席の最前面でがおーつと両手を上げている闇妖精には緊張が緩むものの、その発言にはヘツケランも思考を乱してしまう。

度肝を抜く転移罫から闘技場への通路。

格子戸が開く先に見えたのは、幻影かと思えるくらい膨大な動像群と、美しい夜空。そして誰もが見惚れてしまうであろう、オツドアゴレムの幼い闇妖精であったのだ。

加えて勇者だの魔王だのと言われてしまえば、『フォーサイト』のリーダーとしてどのように行動すればよいのか判断がつかない。

「ダークエルフの闘技場なのか？ あの墳墓とどんな関係が……つておい、イミナー！ しっかりしろ！」

「ああ、あああ、そんな、うそでしょ?！」

「ちっ、精神攻撃か？ ロバー！」

「はい、まかせてくだ——」神官のロバーデイクが半森妖精の背中へ手

を添え、精神系の治癒魔法を唱えようとするも、発動は途中で止められてしまった。対象者であるイミーナが「だ、大丈夫、なんでもないの。ごめんなさい」と身体を捻って離れたからだ。視線を闇妖精の子供に向けたままで。

「——イミーナ、無事でよかった。……あのダークエルフ、魔力の反応は無い。高い位置からの攻撃魔法は警戒しなくていいと思う。でも、他に遠距離攻撃の手段を持っている可能性はある」

最後尾にいた小柄な魔術師アルシエは、イミーナの動揺が『遠距離魔法による先制攻撃を想定したから』であろうと判断していた。近年、闇妖精と出会う機会はないが、書物によれば森妖精同様、弓と魔法による遠距離戦に長けていた種族であったという。

相手が幼い子供であったとしても、闘技場に引き出された身としては当然の反応であったのかもしれない。

『準備はいいかなあ？』 試練の相手は、変態吸血鬼がいろいろ弄っていた人間のペットだ！ こんな雑魚程度で苦戦していたら、いつになっても勇者になれないぞ！ 頑張つてね！ ——誰が変態でありんすか?!』

最後に余計な文句が追加されたように思うが、ヘッケランに気を回す余裕はなかった。正面の格子戸がせり上がり、中から『試練の相手』とやらが出てきたからだ。

人間——そのように闇妖精は言っていたはずである。

それなのに、歩いてきた若い女には長くて細い尻尾があった。耳も四つあった。全身は毛皮ではなく、小麦色の綺麗な肌を下着同然の真っ赤な部分鎧で局部を覆っているだけであり、人間なのか獣人なのか判別がつかない。

「私は——『この世で最も美しい吸血鬼』であり『神をも超える美の結晶、至高の存在にして絶対支配者、世界を統べる大魔王様の正妃』でもある『シャルティアお姉さま』の忠実にして卑しいペット、エンリです。どうぞよろしくお願いします」

「え？ あ、ああ」

用意していた前口上を正確に述べることが出来てほっとしたかの

ような半裸の少女に、ヘッケランは武器を構えながらも困惑してしま
う。

どうにも普通の村娘と対峙しているかのような空気感だ。頭部には何も被っていないので、人の良さそうな少女の瞳がこちらを見つめ、双剣をよりいっそう重くさせる。

だが油断はできない。新鮮な血流を浴びているかのような下着風部分鎧に、血に塗れたかのごとき片手剣が命の危機を伝えてくるのだ。

では敵と認定してよいのか？

いや、武装して立ちほだかっているのだから敵には違いないのだろう。問題なのはそれが自分の意思なのかどうか。強制されて戦いに身を投じているのかどうかなのである。

第17話 「てかてか魔王」

「なあ、お嬢ちゃん。無理やり戦わされてんのか？ もしそうなら協力できると思うぜ。俺たちは帝国でも名のあるワーカーだ。素人娘に勝ち目なんてない。無謀な決闘なんかより、この場から逃げるために手を組もう)」

頭上高くにいる闇妖精ダークエルフに気付かれぬよう、ヘツケランはゆらりと双剣を構えつつ、囁く。この闘技場には幼い子供と動像ゴーレムぐらいしかいないのだ。武装している目の前の若い女さえ説得すれば、外へ逃げ出すのは容易い。

「あはっ」愉快と感じる一声。「あははははははは!!」続いて響き渡る狂ったような少女の笑い声。「無理やり？ 私がシャルティアお姉さまに無理やり？ なにを馬鹿なこと言っているの!? お姉さまに命令されるなんて最高じゃない！ 無理やりなんてもつと滾たぎるじゃない!! お姉さまが私を押しえ付けて、初めてを奪ってくださるのなら……。ああああ、駄目！ 駄目よエンリ！ 今は醜いゴミ虫どもを排除しないとっ。でもそうね、貴方たちをいたぶり殺したら、お姉さまから御褒美が……。くひ、くひひひ」

うつわく、と残念がるような声が闇妖精から聞こえた気もするが、フォーサイトにしてもドン引きである。

イミーナがアルシエの耳を塞ぐとともに「見ちゃダメ」と視界を遮るほどだ。

「これは、魅了メイト」されているってことでもいいのか？ ロバー」

「魔法がかけられているようには思えませんが、精神に異常をきたしているのは間違いないですね」

「瞳に強い意志を感じるわ。操られているわけではなさそう」

「——警戒！ くるー！」

最後尾に追いやられていたアルシエが敵の挙動に気付き、全体へ警鐘を鳴らす。と言いなながらもフォーサイトの連携は非常に高く、すでにヘツケランがエンリの前面へ身を投じ、ロバーデイクとイミーナは

左右へと展開していた。

ラインフォース・アーマー

〈鎧 強化〉

ホーリー・バインド

〈聖なる束縛〉

光り輝く呪縛により体勢を崩した少女が、前のめりに倒れそうになる——そこへ防御魔法の支援を受けたヘッケランが双剣を打ち下ろす。

「双剣斬撃！」

「このお！」

必死に片手剣をかざすが、エンリの力では武技の威力を抑えきれず、頭部と肩口に裂傷が刻まれる。と同時に、わき腹へ突き刺すかのような痛みが走り、その場から飛び退くことを強いられてしまう。身を縛る魔法の束縛を強引に引き千切つてでも。

「よし、イミーナ。タイミングバッチリだ！」

「油断しないで！ 心臓を狙ったのに外されたわ！」

ヘッケランの攻撃に合わせたイミーナの射撃。右側面へ移動してから無防備な脇腹を狙ったのに、当たったのは一本だけだ。それも致命傷ではない。完全に不意を突いたはずなのに、どうにかして——同時に迫ってきていた矢の片方を手刀で弾いたのだ。

素人娘ではできない芸当であろう。魔法の束縛に抵抗した精神力、そして無理やり引き剥がした怪力も少女のモノではない。

「わたしに傷をつけましたね。シャルティアお姉さまのペットであるわたしの身体に！」

裸同然なのだから傷ぐらいつくだろう——とはフォーサイトの誰もが思ったのだが、殺気に満ちた少女の瞳に見つめられ、無意識に息を呑む。

「はっ、強がりもそこまでしておけよな。もう解つただろ？ お前さんじゃ俺たちに勝てない。多少訓練はしているみたいだし、身体能力も見た目通りじゃなさそうだが、帝国最強のワーカーチーム、フォーサイトには敵わないぜ」

最強——なんて当然ハツタリである。

初撃での殺害が崩されてしまった以上、己の力を強大に見せて、決

闘から交渉へと移行させたいのだ。

あまり時間をかけ過ぎると、墳墓から何者かが転移してくるかもしれない。又は遠目から見守っているだけの闇妖精ダークエルフが下りてくるかもしれないし、「なんとかお姉さま」とやらが乱入してくるのかもしれない。

ヘツケランは仲間の命を救うため、必死に頭を働かせていた。

『おおっとく、今度の挑戦者は中々やるぞく。変態吸血鬼のペットを軽々退けて——ってほら、やっぱりダメじゃん。あんな裸同然の鎧じゃ、矢も防げないよ。うう、うるさいでありんす！ あれはペロロンチーノ様お気に入りのビキニアーマーでありんすよ。尻尾を通す穴まで開いている特注品でいんす！ だからく、戦闘用じゃないって言ってるの。ペロロンチーノ様の観賞用なんじゃないの？ あんたが着たりしてさ。……わたしが着るのは無理でありんす。胸が……、胸がああ。あ、その、ごめんね』

なんだか緊張感のない会話が聞こえてくる。

というか、いつの間にか二人に増えているようにも思えるが、ちらりと視線を上げたヘツケランの瞳には、可愛らしい闇妖精ダークエルフだけが映るばかりであった。

「(どうなってるんだ？ 他に誰かいるのか？ くそ、嫌な予感がする。さっさとこの闘技場から外へ出ねえと)よし！ 次で仕留める。アルシエ、牽制頼む！」

「——了解、マジック・アロー魔法の矢」

リーダーの決断により、小柄な魔術師ウィザードが魔力を練り上げ、一本の矢を創りあげては撃ち出す。目標は脇腹の矢を引き抜こうともがいている半裸の少女、その顔面だ。

恐らく避けるのは困難であろう。剣か腕か、何かをぶつけなければそのまま顔を潰されてしまうに違いない。だがマジック・アロー魔法の矢を防御した瞬間こそが最終幕だ。

正面からヘツケランが襲いかかり、左右からはイミーナとロバーデイク。

もはや逃げ道はない。

詰みである。

「これで終わりだ！ 〈双剣斬撃〉！」

「なめるなあああああ!!」

闘技場に響いたのは、勝利を確信したヘツケランと、決死の覚悟で対抗しようとするエンリの雄叫び。加えて岩を殴打し、斬り叩いたかのような衝撃音だ。

肉と骨を叩き斬るはずだったヘツケランは、意外な手ごたえと面前に現れた土くれの正体に気付き、慌ててチームの後退を口にする。

「みんな下がれ！ あれに近付くな！」

「ちよつと、どうなってんの?!」

「イミーナさん危ないですよ！ もつと後ろに！」

「——動像、観覧席にいたヤツ！」

見れば、少女を護るかのように現れたのは人食い大鬼のごとき巨体の動像であった。アルシエの魔法を弾き、ヘツケランの武技を受け止めた、剛体を誇る使役魔法人形である。

「あははは、勝負はこれからですよ」動像の後ろから顔を覗かせる少女は、血塗れのまま、刺さった矢の鏃を体内に残したままで笑顔を向けてくる。「シャルティアお姉さま！ わたしの戦いをご覧ください！

人間に可憐な悲鳴を上げさせて、闘技場を新鮮な血で染め上げてみせましょう！」

薬物中毒にでもなったかのように視点が定まらない少女の奇声に合わせて、さらに二体の動像が現れる。フォーサイトから見て右に一体、左に一体だ。今度は観覧席から飛び降りてきた動像の挙動がはつきりと見て取れたが、なぜ動き出したのかまでは予想の範疇を超えない。

「くそつ、ゴーレムを使役できるってか？ しかも三体同時に?!」

「駄目！ 矢が通らない！ 硬すぎるわ!!」

「私が前に出ます！ 土人形に斬撃は不利です！」

「——三体を相手にするのは無謀。狙うは、〈魔法の矢〉！」

アルシエの頭上に輝く三本の矢。それは瞬時に獲物を求めて飛び放たれるが、目標は動像ではない。その陰に隠れている使役者だ。

「がつ?!」側頭部と二の腕、腹部に各一発ずつ。見事なまでのクリーンヒットに、エンリは血反吐と共に膝を落とす。

「よくやったアルシエ! あとはまかせろ!」動きの止まった動像ゴーレムの脇をすり抜け、ヘッケランは蹲っている少女の背後へと迫る。「確実に仕留める! 〈流水加速〉!」

そのまま剣を振り下ろしたとしても、少女の頭を斬り分けることは可能であつただろう。だが他にも能力を隠し持っているかもしれない。動像ゴーレムを三体使役できるだけでも驚愕の能力と言えるのだから、油断は禁物だ。

まあ、当の使役術に関しては、まだまだ未熟であつたようだが。

「しゃっ!! ——あ?」少女の頭部に剣先が沈み込もうとする最中において、ヘッケランの気合は途切れた。

指である。

中指と親指だ。

細くて白い、爪先まできれいに整えられた令嬢の美しい指だ。

それが全力を込めた振るつたヘッケランの双剣を纏めて摘まんでいる。

「おめでとうでありんす。そなたらはわらわのペットを撃退し、試練を突破したと認められんした。勇者の称号を受け取りなんし」

軽く摘まんでいるのにビクともしない。

そんな常識外れの怪力でヘッケランの〈斬撃〉を止めたのは、あまりに美しい赤い瞳のお姫様であつた。丁寧なケアがなされているであろう艶やかな銀髪に、ボリユームのある胸とスカート。纏っている衣装は生地からフリルまで職人の御業による一級品だ。

無骨な闘技場においては、王族専用の貴賓席でしかお目にかかれな
い貴婦人であろう。

「え? な、なんだあ?」

「このバカ! そいつはヴァンパイアよ! 早く離れなさい!」

「目を見てはいけません!」
〈下位精神防御〉

「——援護する! 〈雷撃〉!」

あまりの美少女ぶりに一瞬呆けてしまったのは、凄腕請負人ワーカとして

失態には違いないが、イミーナ自身「気持ち解るわ」と非難する気になれない。おまけに自慢の剣戟を摘ままれ、仲間からの〈雷撃〉ライトニングを平然と受け止めるなんてされてしまえば、周囲の状況を即座に把握なんて無理だろう。

赤い瞳に笑みから零れる牙。人外と思しき怪力。そして人間を虫けら同然と見下している態度が、本性を教えてくれる。

ヘッケランはビクともしない双剣から手を離すと、数度のバックステップで吸血鬼から距離をとっていた。

「なあ〜んでありんす？ 突然攻撃してくるなんて酷いでありんすしよ？ ん〜、もしかして調子に乗っているんでありんすか？ なら一人ぐらい潰して身の程を——」

「やめなつて。自発的にナザリックへ挑戦してきた貴重な人間なんだよ。弱っちいけど一応試験には合格したんだし、魔王様への御目通りは叶えてあげなきゃ。……ですよ、モモンガ様」

いつのまに——とフオーサイトの全員が目を見開いた。観覧席にいたはずの闇妖精が、吸血鬼の隣で仲良く談笑している。動いた気配は無かったはずだ。何かの魔力が発動したようにも思えない。

だが……、本当に驚愕すべきなのはここからだ。

「ふふふ、アウラ、シャルティア。ご苦労だった」

寒気がする。闘技場全体が何かに支配されたかのように重苦しく感じる。

アルシエは「見てはいけない」と警鐘を鳴らす自分の勘に気付くことなく、頭を上げて闘技場の貴賓席を見つめよう。

そして——

「うおげええええええええええ!!」

涙や鼻水と共に吐しゃ物が撒き散らされ、股間からもビチャビチャと漏れ出でて、異臭が辺りを満たすと同時に、アルシエはどべちやつと崩れ落ちた。

「な、なんだ?! どうなってる?!」

「アルシエ、しっかりして! ロバー!」

「任せてください! 〈獅子のごとき心〉」

フォーサイトの混乱ぶりとは裏腹に、貴賓席では白けた空気が漂う。

待ちに待った大魔王と勇者の御対面であるが故に、モモンガはデミウルゴスやヴィクティム、ガルガンチュアを除く各守護者に加え、セバスにブレアデス戦闘メイド、大図書館の死の支配者たちや、レベル90近い最上級のNPCなどを貴賓席周辺に侍らせていたのだ。

対面する直前まで完璧に気配を消し、魔王の居城へ侵入してきた勇者の度肝を抜く。そんな予定でモモンガは登場しようとしていたのだが……。

「むう、人間には刺激が強かったか？ ナザリックに侵入してくるぐらいだから問題ないと思ったのだがなあ」

「モモンガ様の美しさに発狂してしまうのは仕方のないことかと。私にはあの人間の気持ちがよく解ります。ええ、本当に！」

「まあさにつ！ 統括殿のおっしやる通りかと！ 矮小な存在でありながらモオモンガ様の御威光に触れてあれほどの驚嘆とは、中々見込みのあある人間ではないですか？ 我が主の素晴らしいさを、そおの一端とはいえ感じ取れるのおですから！」

「は、はい！ その通りだと思います！ あの、その、モモンガ様は素晴らしい御方ですから！」

「トハイエ、モモンガ様ノ視界ニオ入レスルニハ、イササカ不浄デハ？」

勇者ダトシテモ流石ニアレハ酷イ」

プシユーと冷気を吐き出すコキュートスの言は、いちいち尤もである。

大魔王の前で糞尿垂れ流しとは無礼にもほどがあるう。

一番幼い子供の粗相だとしても、普通なら首を刎ねられて御仕舞いになるところだ。たとえ、モモンガ様のあまりに美しい御姿に耐えられなかったとしても。

「ぐえええええおげええ！ かはっ、きひい！」

「ロバー！ どうなってるの?! 効いてないわよ！」

「いえ、魔法は発動しています！ ですがアルシエさんの受けた衝撃が、治癒効果を上回っているのですよ！」

「そうか！ イミーナ、アルシエの目を塞げ！ 貴賓席を見させるな！」

リーダーの指示に従い、イミーナは懐から取り出した手拭布で暴れ狂うアルシエの目を覆い隠す。ロバーデイクは再度、精神系治癒魔法を繰り出して呼吸の安定化を図り、ヘッケランは仲間を護るような立ち位置で、貴賓席の化け物集団を睨み付けていた。全身の震えを必死に抑えようと、無駄な努力をしつつ……。

「む？ ああ、なるほど。ここにもタレント持ちがいたのか。相手の力量を看破する瞳——いや、シャルティアやアウラを見て平然としていたのなら、別の看破能力か？ うくむ」

珍しい小動物でも発見したかのような骸骨の言葉に、ヘッケランは戸惑いと寒気を覚える。

完全に上位者としての物言いであり、理性的。加えて人間を分析しているような意図が短い発言の中からも感じとれて、化け物というよりは“天上の神”が箱庭で蠢いている人間を見下ろしているかのように見える。

ただ、絶体絶命ではなさそうだ。

貴賓席とその周辺から姿を現した異形の者たちは、たった一体でフォーサイトどころか帝国すらも滅ぼせそうだが、話している内容からして交渉が可能だと察する。

ならば一步を踏み出すのはリーダーの役割だ。なにがなんでも仲間を生きて帰さねばならない。

アルシエには幼い妹もいるのだから。

「この墳墓の主とお見受けいたしますが、まずは謝罪をさせていただきます」ヘッケランは予備武器の短刀をおろし、化け物集団の視線が集まる最中へ一步を踏み出す。「この墳墓にあなたに無断で入り込んだことは謝罪いたします」

「ああ、気にしなくともよいぞ。魔王の許可を取って居城に攻め込む勇者なんぞ聞いたこともない。勇者は勝手に入ってくるものだ。そして魔王の首を刎ねる」

玉座に座る化け物の親玉らしき骸骨の言葉は、理解しがたいものが

ある。

魔王、居城、勇者。

先程も闇妖精ダイクエルフが口にしていたが、魔王とは真実であったのか。

ヘツケランは、「モモンガ様、あのような下賤な者どもに直接御声をかける必要など」と口にする角の生えた美しい女性——を片手で制しながら立ち上がる魔王のごとき骸骨に気圧されて、思わず膝をついてしまう。

「さて、勇者と認定したからにはそれなりの実力を所持してもらわんと。第六階層で鍛えている武技使いと一緒に、人間の限界を超えてもらおうしよう。とはいえ、現状が弱すぎるから数年はかかるか?」「お、おそれながら」勝手に話が進んでいる状況——墳墓に何年も閉じ込められることは死を意味する——を止めようと、ヘツケランは素手で竜ドラゴンに殴りかかる覚悟をもって賭けへ出る。「我々は」とある人物から依頼を受けて、この墳墓を調査していたのです。私利私欲のためではありません」

「ん? 皇帝が操る帝国貴族の依頼を受けたことは知っているが……。その口ぶりだと、ナザリックの先行偵察にきたかのような意味合いだな。となると、他のプレイヤーか? それともギルメンか? いや、仲間であるのなら他の誰かに依頼する必要が……」

ぷれいやー、ぎるめん、なかま。

疑問符をつけたくなる言葉の中で、ヘツケランは理解できる——利用できる単語を捉え、薄氷の上を歩くかのような賭けを続ける。

「貴方様の仲間かどうかは判りません。ですが人間とは思えぬ姿であり、この墳墓を知っていたのですから関係者の可能性は高いかと」

「ほう、面白そうな話だ。で、どのような姿をしていた? 種族は?」

「は、はい。……種族は、その、見たことのない外見で、え、てかてかしていました」

「てかてか?」

モモンガはふと考える。

アインズ・ウール・ゴウンのメンバーは皆異形種で、独特な外見をしている者ばかりだ。

『ふさふさ』とか『もこもこ』ならペロロンかウルベルトだろう。

『ぷるぷる』なら茶釜かへロへロか？

『ぬるぬる』とか『ぶよんぶよん』もスライム系には合っているかもしれないが、もしかするとタブラになるかもしれない。

では、『てかてか』とは？

「うくん、あまのまひとつ」か？ 蟹の部分が『てかてか』しているように見えなくてもいいか？」

全てを見通す魔王様でも、なかなか難しい連想ゲームであるようだ。

そんな首を捻る主を前に、貴賓席を囲む世界滅亡級の化け物たちは何も発言できず佇むことしかできない。至高の四十一人に関わることであるのなら、余計な口を挟むことなど僕にできるはずもないからだ。

ただ、角を備えた白い悪魔は別の理由で発言しないのかもしれない。突如湧いてきた至高の御方々の情報にも、他の守護者より余裕をもって微笑んでいるだけである。

「さて、少ない情報から辿っていくのも面白い余興ではあるが——」モモンガにしてみれば、目の前で小鹿のように震えている勇者の記憶を覗けば済む話だ。嘘か真かも判らない人間の戯言に頭を捻る必要など無い。「後ろでぐったりしている小娘にも治療が必要だろうしな。そろそろ答え合せといこうか」

「モモンガ様、発言をお許しください」

せつかくの勇者チームが崩壊してはもつたいたいないとばかりに、大魔王は勇者の記憶を覗こうと動き出すが、それを止めたのは後方に控えていた戦闘メイドのリーダー、セバスであった。

「どうした？ セバス」

「はい、モモンガ様。先程の『てかてか』についてなのですが、もしかすると『たっち・みー』様のことではないかと愚考いたします」

「『たっち』だと？」

言われてから想像してみても、モモンガにはまったくイメージが湧かない。

純銀の聖騎士と言われる「たち」に『てかてか』とは、創造されたセバス自身が怒り出すような表現ではないだろうか？

それをセバス当人が提示してくるとは……。

「ああ、そうか。ワールドチャンピオンの鎧はナザリックに保管してあるから、今の「たち」は蟲人の外観なのか。うむうむ、そうであれば甲殻が『てかてか』しているというのも頷けるな。恐怖公と似たようなモノだろうし」

深く頷き、魔王は「素晴らしい」と絶賛する。

造物主の特徴を把握しているセバスもそうだが、「たち」に送り込まれた勇者たちにも称賛を送りたくなる。

「ふはははー！ たっちかー！ あのワールドチャンピオンがお前たちを送り込んできたのか！ これは最高に面白くなってきたぞ！ たっちがナザリックに攻め込んでくるなんて、ユグドラシルでも実現しなかった夢の対戦だ！」

精神抑制が発動しない程度の愉悦をもって、大魔王は笑う。

人間の勇者を選別しようと待ち構えていたら、意外な大物が釣れたのだ。あの「たち・みー」であるならば、大魔王モモンガも全力で戦え、負けたとしても華々しい最期を遂げることができだろう。

無論、魔王として負けを前提とした戦いなどあり得るはずもないが。

「よし、セバスよ。宝物殿からたちの武装を持ってこい。この勇者たちに案内をさせて、全ての武装をたちに渡してくるのだ。セバスはそのまま向こう側へついて、ナザリック攻略に全力を尽くせ」

「モ、モモンガ様？」愕然とするしかない。己の造物主に関する情報を得ようと首を突っ込んだら、いつの間にかやらナザリックへ反旗を翻す話になっている。おまけにたち・みー様まで敵側だ。

セバスとしては、武装をとってこいと言われても、足と心が重くて動くに動けない。

「モモンガ様、お待ちください」石化したかのように硬直してしまったセバスに代わり、声を上げたのはアルベドだ。「たち・みー様がナザリックへ攻め込むなんて、想像するのも非礼かと思うのですが……。

「どうしてそのような？」

「どうして、だと？ そんなことはセバスに聴けばすぐ解るぞ。世界を滅ぼす魔王が現れたのなら、嬉々として討伐に赴くのが『たち』だ。それがヤツの正義、生きる意味だ。相手がナザリックだろうと関係ない。たつちは困っている者を助け、正義を貫く。私は死と絶望を振り撒き、全てを滅ぼす。どうだ？ この異世界でワールドチャンピオンとの決戦だぞ」

嬉しさを抑えきれないでいる魔王に対し、守護者統括は優しく微笑んで「モモンガ様の御心のままに」と優雅な礼を行う。

混乱したのはセバスだ。

主人を諫めるような発言をするかと思いきや、まるで賛同するかのような態度。このままでは本当にたつち・みー様とモモンガ様が争うような事態に発展しかねない。

セバスは腹に力を込めて、魔王の前へ跪く。

第18話 「ろりこん魔王」

「恐れながらモモンガ様。現時点において、本当にたち・みー様が偵察隊を送り込んできたかどうかは確定しておりません。よろしければ、私に確認を御命じ頂けないでしょうか？」

「うん？ ああ、確かにそうだな。浮かれて確認を怠るとは、ぶにっ」とに怒られるな。ではセバス、軽く聴き出してこい」
「はっ！」

この後、気合の入りまくったセバスが殺気を抑えぬまま闘技場へ降り立ったため、〃フォーサイト〃の四人は半死半生になってしまうのだが、〈傀儡掌〉の使用に問題はなかった。

神官と思しき大男が白目をむいて倒れ込み、半森妖精らしき女が――発狂しかけていた少女に意識無く覆いかぶさっているその横で、リーダーであろう双剣使いはセバスの問いに抗うことなく言葉を零す。

『全て嘘でした』と。

「……………」

無言で応える大魔王の傍らで、守護者らは緊張と殺気を纏う。

〃嘘〃である。

我らが至高の御方に嘘。

つまらぬ地上のゴミが、神をも超える絶対支配者に戯言を吐いたのだ。となれば与えるべき罰は一つしかない。ただ、罪人たるゴミどもは勇者として認定された直後なのだ。短絡的な行動に走るわけにはいかない。

セバスは意識を失っているであろうワーカー四人の傍で――造物主に関する情報を得られなかったという喪失感を抑え込みつつ、手刀を構え、首を刎ねるつもりで主人の言葉を待つ。

「なんだそれは？ ツアーにも教えてやろうと思っていたのに」軽い言葉が大魔王から発せられる。口調に怒りは見えず、態度からも不快な思いを受けたような気配はない。ギルメンの情報が皆無であるこ

とにも、特段気落ちしてはいないようだ。「やれやれ、なんともつまらん余興だ。ワールドチャンピオンとの決戦はおあずけかあ……」

「愛しの旦那さ——モモンガ様に嘘を吐くとは、あの人間どもは潰してしまふべきではありませんか？」

「ちよつと統括殿から聞き捨てならない発言があつたように思いますが、あの人間どもを殺すことには賛成でありんす。先程はちよつと恐ろしかったでありんすよ」

「うん、あたしもたっち・みー様と戦うなんて想像もしたくないしね」「ぼ、僕も至高の御方と戦うなんて……あの、えつと」

「シカシ、ソレヲ至高ノ御方々ガ望ンダトシタナラ、我々ハドウスルベキナノダ？ 全力デノ殺シ合イヲ所望サレルノデアレバ、私ハ……」

ほんの少し空気が緩んだような気がしたものの、コキユートスの発言に守護者の気分は沈んでしまう。

確かに「至高の御方」が望むのであれば、共にナザリックへ攻め込むのも、それを撃退するのも『御意志のままに』と受け入れるべきなのだろうが……。

想像はあまりしたくない。

セバスにしてみれば、モモンガ様と敵対するかもしれない立ち位置なのだ。己の造物主に従うは至上の喜びと言えど、いざその時が来たら『恐れながら申し上げます』と「たっち・みー」へ進言を行わずにはいられまい。

ナザリックへの侵攻を考え直してもらうために。

「ふむ、皆はあまり乗り気ではないようだな。しかし、まあ、そうかあ。ギルメンの誰かが乗り込んで来たら、それはそれは楽しい拠点防衛戦の始まりだと思うのだがなあ」モモンガは少し落胆するものの、部下が嫌がつているのなら強制するわけにもいかない。

魔王にそんな趣味は無いのだから。嫌がる部下を無理やり椅子にして座るような——変態的な趣味は。

「モモンガ様」乱れている空気を一新するかのよう、アルベドが前へ出る。「生き残った侵入者どもは、どのように処理いたしましょうか？ 地上とナザリック内部において、生存しているのは闘技場のワー

カー四名、及び先程無抵抗のまま捕らえられたエルフ三名となっております」

「闘技場の四人はナザリックへ侵入してきた勇者だ。コキュートスの元でしっかりと研鑽を積んでもらうとしよう。とりあえずはカンストが目標だな」
「カンスト」とは人間の限界を突破して超越者に至り、生物としての最終形態、個としての頂点へ到達することを意味している。

その道は過酷であり、拷問にも等しい地獄そのもの。素養のない者の実力を無理やり引き上げることが、どのような苦痛を伴うのか？
強さを手に入れた果てに何を失うのか？
最終的に「それ」は人間なのか？
なんて色々疑問も募ろうが、魔王様にとってはどれも一つの実験に過ぎない。

勇者にどれほどの惨い死地を歩ませるのか、なんて気にもしていないだろう。

「だがエルフは必要ないな。自分の意思でナザリックへ来たわけではないのなら、ただの迷い込んだ虫にすぎん。適当に処分しておけ」

「はい、モモンガさ——」

「——ま、待って！ 待って……ください」

愛に溢れる美しい笑顔で、愛しの旦那様に平伏していたアルベド——の返答を邪魔するかのようになり、闘技場から女の声が届く。

発声者は、目隠しされたまま仰向けで倒れ込んでいる請負人の魔法詠唱者だ。つい先ほどまで生死の境を彷徨っていたものの、セバスの応急手当てにより意識を取り戻した、「アルシエ」という名の少女である。

「このゴミがあああっ!!」アルベドにとって『モモンガ様との会話を邪魔すること』は、死刑にも等しい大罪である。いや、すぐに殺すのではなく、じっくりと時間をかけて『殺してください』と懇願するまで拷問すべき案件かもしれない。「至高の御方との会話に口を挟むなんて、細切れにしても許されない！ モモンガ様、この者を勇者に認定することでしたが、賤が必要かと具申いたします。恐怖公の元へ運びましょう」

殺気を放つ守護者統括の怒声に「うげっ」と闇妖精ダークエルフと吸血鬼ヴァンパイアが身を寄せ合うも、大魔王は静かに骨の指を顎へ添え、勇者がなにを言わんとしているのかを気にかける。

「そうだな、躰は必要だろうが……。とりあえず言い分を聞いてみるか」モモンガは軽く手を振り、今にも襲いかからんとしていたアルベドを下がらせると「セバス、その娘の発言を許す。己が死の縁にいることを自覚させてから喋らせろ。ハッキリと、な」

「はっ」

セバスは気を送りながら子供のような魔法詠唱者マジック・キャスターの背中を支え、大魔王様へ顔を向けさせる。目隠しはそのままだ。至高の御方に拝謁するには不敬な様相かもしれないが、先程の様子からすると、モモンガ様の御姿を直視すると気がふれる可能性がある故仕方がない。

「お嬢さん、モモンガ様から発言の許可が下りました。何か語るべきことがあるのなら、全身全霊をもって言葉に하십시오。くだらない内容なら、この場で首を刎ねます」

「ひいっ！」

異臭を放つ汚い身体がビクンと跳ね、パシャパシャと汚水溜りを叩く。

アルシエが身に宿すは恐怖だ。

突然現れた化け物の集団に最大級の警戒をもって対峙した直後、その中央と周辺に許容限界を突破する神の如き魔力の持ち主がいたことを「生まれながらの異能」で察知し、狂い死にする寸前で倒れた。眼を隠してくれたイミーナには感謝すべきなのだろう——けれど今は、自分の眼を潰したくしょうがない。もう二度と眼を開けたくないと思うほどに。

(クーデリカ、ウレイリカ……)

最後の希望を心で唱え、勇気を奮う。

死ぬわけにはいかない、墳墓に閉じ込められることも許容できない。

自分が帰らなければ両親は経済的に破綻する。そして必ずや幼い妹たちを蔑にするだろう。借金のカタに差し出す可能性だつてある。

妹たちは幼すぎて抵抗できないはずだ。姉である自分が護らねばっ！

「——わ、わたしには妹がいます！ 幼い妹が、二人！ まだ自分の力だけでは生きていけない、か弱い妹が、私の帰りを待っているのです！ お、お願いです！ 帰してください！ わたしで出来ることなら、何でもやりますからっ！」

必死に、涙ながらに、家族の身を案じて、魂からの懇願。

この場にニグレドやペスが居れば、よからぬ騒ぎを起こしかねないほどの愛に溢れた叫びであった。

アルシエの背を支えていたセバスや、魔王の後ろに控えていたユリなども、少なからず力になってあげたいと思ったのではないだろうか？ 無論、個人の感情などでナザリックの意思決定は成されない。原因が人間の事情であればなおさらだ。

重要なのは大魔王モモンガ様の御意志のみ。

ただそれだけである。

「妹、家族……か」小さく呟いて、大魔王は思案する。「魔王を討伐しようとする勇者の代表的な動機が『世界を救う』なのは珍しくもないが、それと同じくらい物語に登場するのが『愛する人を救う』だ」

「——え？」

アルシエには解らない。魔王が何を言わんとしているのかが解らない。

「つまり、お前は二人の幼い妹のためなら、魔王すら倒してみせるのだろうか？ くくく、素晴らしい、素晴らしいぞ勇者！ お決まりのパターンではあるが、悪くない動機付けだ！」

（——やめて！ その先を言わないで！）

声にならない叫びは魔王の歯牙にもかからず、最悪の運命から逃れることも叶わない。

「では宣言しよう。お前の妹たちは私が預かる。救い出したければ、大魔王たる私を倒してみせるがよい。出来なければ愛する家族の命は失われる、永遠にな。……ああ、妹を見捨てて逃げても構わんで。それも勇者に許された行為の一つだ、否定はしない。くだらんとは思

うがな」

「——ああ、ああああああああ、うあああああははははは!!」

パリンと何かが砕け散ったような、ギリギリ保っていた均衡が崩れたような。

アルシエは理性を手放し、発狂した。

叫んでいるのか、泣いているのか、笑っているのか。傍にいたセバスが困惑するほどの狂乱ぶりだ。

余程の絶望をその身に宿したのであろう。

実現不可能な試練、己の魂を何度すり潰しても希望の光すら見えてこない。確実なる家族の死。救いは無い。微塵も無い。救いがあるかも、なんて思える要素もゼロ。

それが魔王討伐。

無数の化け物に囲まれた、大魔王を倒すという——神殺しの方がマシかと思える破滅。

アルシエはセバスに意識を落とされるまで、奇妙な雄叫びで笑い続けていた。

「やれやれ、精神的な鍛錬も必要だな。……では、アルベド」

「はい、モモンガ様モモンガ様」

「なぜ二度言ったかは聞かんが——、僕しもぐを送ってあの者の妹を確保せよ。連れてきた後はニグレドに預けておけ。幼子らしいから少しは喜んでくれるだろう」

「あああ、私の姉にそのような御慈悲をお与えになるなんて……。妹でありながら姉に嫉妬してしまいますわ」

ニグレドも大変だな——と妙な感想を持ちつつ、モモンガはクネクネしているいつもの守護者統括へ必要な指示を与えると「私は玉座の間へ向かう。少し試したいことが出来たのでな」と、跪しもぐく僕たちの前から姿を消すのであった。

「試したいこと、とは何かしら？ 私ならどんなことでもオツケーなのに……」

「はん、未経験のクセに大口をたたくものでありんすなあ」

「あんたも人のこと言えないじゃん。ていうか、なんでそっち系の話題になるのよ！ モモンガ様が玉座の間で試すと言ったら、もつと凄いいことに決まってるでしょ！」

「え、えつと、凄いいことって、あの、どんなことなんだろう？」

「至高ノ御方ノ才考エハ、遙力高ミニニアツテ拝見サセテ頂クコトスラオコガマシイト言エルダロウ。ソレヨリ……、モモンガ様ノ御勅命ヲ遂行スベキデハ？」

本来であれば、姦しい女性陣を諫める役目はデミウルゴスのはずなのだが、当の知恵者はスレイン牧場へ出ずっぱりなので、コキユートスが代わりを務めるしかない。

最初に成すべきは、モモンガ様の御勅命。

勇者と認定した者の肉親を捕らえてくることだ。

「くふ、私が愛する旦那様の御希望を後回しにするとでも？ ねえ、パンドラ」

「はっ、『旦那様』のおお件は初耳ですが、捕縛に関しては既に完了してえおります。対象屋敷内に居たものはあ全てナザリックへ搬送。不必要な人間は、餌や巢になってもらうう予定ですっ」

バサツとマントを翻し、埴輪顔の領域守護者は任務達成を通知する。

そう、終わっているのだ。

ナザリックに侵入しようとした時点で、請負人^{ワーカー}たちの素性は調査され、家族関係までも把握済み。

そもそもアルベドが許すはずもない。

勇者として認定されようが、家族や関係者は別枠だ。モモンガ様が望むので勇者を殺したりはしないものの、その分周りの者には罪を背負ってもらおう。

愛しき旦那様の居城へ足を踏み入れたゴミ屑どもには慈悲など不要。

無論、依頼主である貴族やその裏にいる帝国皇帝にもそれ相応の苦痛を味わってもらふことになるだろうが……。国家を叩き潰す娯楽は大魔王様のモノだ。部下が勝手に———とか妻が勝手に判断し

てはならない。

「それでコキュートス、そのゴミどもに勇者としての素質はあるの？ 私からすると、弱過ぎてモモンガ様の視界に入れることすら不快なのだけだ」

「ムウ、確力ニ厳シイカモシレン。スレイン法国デ拾ツタ者ドモヨリ、圧倒的ナ弱者デアルコトハ確カダ。シカシ、愛スルモノヲ思ウ氣持チハ〃レベル〃ヲ凌駕スルカモシレン」

「ヴァーミンロード
蟲 王にしてはロマンチックな物言いだが、その発言の原因を知っているアウラは『あまり期待しないでね』と肩をすくめる。」

「それって^{リザードマン}蜥蜴人のこと？ まあ、白いヤツを助けようと突っ込んできた^{リザードマン}蜥蜴人は、魔法武器で武技なんか使ってきてき、レベル以上の強さを見せたって報告したけどお。結局、あたしのあまり強くない子
一
体だけで壊滅状態だよ。良かったのは、生き残った〃レア〃をモモンガ様へ献上できたことだけ、かな？」

勇者ツアーと別れてからモモンガ様と散歩に行くまでの短い間、ナザリックの者たちは、ギルド武器の分析やスレイン法国宝物庫からぶんどったお宝の仕分けで、少しばかり慌ただしい時間を過ごすこととなっていた。

アウラはその期間を使って、近くにある〃トブの大森林〃とやらを本格的に調査していたわけだが……。

期待していたほどの成果は無かった。

力を揮ったのは巨大なイビルツリーが襲ってきた時ぐらいで、他はあまりに弱々しい雑魚ばかり。

個体数が少なかったり、一体しかない希少種だったりした場合は捕縛したが、小鬼^{ゴブリン}や人食い大鬼^{オーガ}、蜥蜴人^{リザードマン}のように珍しくもない種族は、
〃レア〃以外皆殺しにした。

もちろん、敵対してきた輩は即魔獣の餌である。

ちなみに、妖巨人^{トロール}やナーガはあまり美味しくない——とは僕^{しもべ}魔獣の談だ。

「強さで言ったら……え〜っと、ザイトロなんたらって魔樹の方が相当強かったよ。話を通じないから、ナザリックの僕^{しもべ}とか勇者なんかに

は相応しくないだろうけどさ」

「強さなんて気にする必要ないでありんしょう？ 至高の御方々には弱者を一瞬で強くする秘伝の技があると聞きおよびんす。その名も『ばわーれべりんぐ』！」

「え、えつと、あの、ばわーれべ？ そ、それってどんな技なんでしょう？」

「知らないでありんす」

「はあ？」珍しく有用な情報を口にしたなあ、と感心しきりのアウラも目が点になる。「あんたさあ、それじゃあ全然ダメじゃん。期待して損した」

「う、うるさいでありんす！ 至高の御方々しか使えない秘伝でありんしょうから、わたしが知らなくてもしかたありません！」

「ええ〜？」

「んぎい〜」

両の掌を上へ向けて呆れるような仕草のアウラに対し、シャルティアは詰め寄って睨み付ける。

そんないつも通りの二人に、周囲の守護者はため息しか出ない。

「――守護者の皆様方」力強く響く声はセバスのものだ。「私は今から、モモンガ様の元へ馳せ参じるつもりです。供の者が一人も居ないというのは問題でしょうから」

「ソウダナ。玉座ノ間デアアロウトモ、モモンガ様御一人トイウノハ――」

「いえ、モモンガ様の元へは私がいくわ」

コキュートスの言葉を遮り、前へ出てきたのはアルベドだ。

当然シャルティアが嘔みついて一騒動でも起こすのか――と思いきや、その場を支配したのはナザリック地下大墳墓を任されている守護者統括の厳格なる命令であった。

「守護者統括として命じます。セバスとプレアデスはこの場の後始末を。勇者どもの治療及び教育を行いなさい。コキュートスは武技習得と並行して、勇者どもの強化計画を遂行。シャルティアは上層階でナザリックの防衛任務へ。アウラは外へ出て周辺警戒。マーレはア

ウラのサポートを。私は玉座の間へ赴き、モモンガ様が行う実験のお手伝いを行います。皆、異論は？」

統括としての役目を前面に出されては、流石のシャルティアも頷かざるを得ない。

他の守護者も同様であろう。

命令内容にしても特におかしなところがあるわけでもないのに、モモンガ様のところへ足を向けようとしていたセバスも立ち止まるしかない。

それにそう、守護者統括の正式な待機場所は「玉座の間」であるのだから。

「では、行動を開始しなさい」

立場に相応しい威厳ある一声を最後に、アルベドは指輪の力で転移した。

行先は当然、玉座の間の正面扉前であろう。

それは解っているのだが、シャルティアには何だかもやもやとした感情が渦巻いて仕方がなかった。

「……なんでありんしょう？ 正しいはずなのに、命令に納得できない自分がいるでありんす」

「うん、アルベドは守護者統括だもんね。あたしたちに命令するのは役目上間違っていない、はずだけど」

「お、お姉ちゃん？ あの、僕たちはモモンガ様と散歩できたんだし、その、ね」

「ウウ〜ム、デミウルゴスガイテクレタラ助言ヲ貰エタカモシレンガ……ン？」アルベドにも負けない知恵者である友人の不在を嘆くコキュートスであったが、「ソウイエバ」と辺りを見回し、もう一人の知恵者がどこへ行ったのかと訝しがる。

「どうかされたのですか？ コキュートス様」

「私ニ敬称ハ不要ダ、セバス。——イヤナニ、宝物殿領域守護者ノ姿ガ見エナイト思ツタノダガ」複眼で闘技場を見回しても、貴賓席はおろか、観覧席の端にもあの目立つ軍服埴輪男の姿は無かった。「我ラニ気付カレルコトナク、何処カへ移動シタトイウノカ？」

確かに宝物殿領域守護者パンドラズ・アクターは居なくなっていた。タイミングからすると、アウラとシャルティアがじゃれ合っていたときに拠点内転移用指輪リング・オブ・アインズ・ウィール・ゴワンを使用したように思えるが。

守護者数名もコキュートスの眩きに、キヨロキヨロと視線を動かす。

「ああああ！ アイツ、アルベドから命令される前にモモンガ様のところへ行つたんだ！ ずっるーい！」

「あ、そっかー。だ、だからアルベドさんは急いで後を追いかけたんだね。えっと、凄いやね〜」

「うぎぎ、褒めるところではありません。わたしたちは抜け駆けされたでありんすよ。酷いでありんす」

本当なら後を追いかけて、玉座の間になだれ込みたいところである。

しかし、守護者統括から命令を出されてしまった守護者として、任務放棄ともとれる行動を起こすことはモモンガ様への謀反に等しい。

アルベドも解つていて発令したのであろう。

任務内容が間違っていないだけに、余計腹立たしい。

「守護者の皆様方」苛立ちを募らせる守護者を前に、セバスは語る。「まずは命令を遂行いたしませんか？ 区切りのよいところまで終わらせて、玉座の間まで報告に参りましょう。それならば、堂々とモモンガ様にお会いすることが出来るかと」

成すべきことを成し、その報告に参上したとなれば、流石のアルベドも邪魔できないのではないだろうか？ いや、平気な顔で「代わりに報告してあげるわ」と言いそうな気もするが。

各守護者はセバスの言げんに、不安を飲み込みながら軽く頷く。

「うん、そうだね。また変な奴らが来てないか見て回らないと。マーレ、いくよ」

「あ、待ってよお、お姉ちゃん」

「仕方ないでありんす。ゴミどもが入り込みました上層はしっかり掃除する必要がありますし……。ペットの再教育も緊急課題でありんすよ」

双子の闇妖精ダークエルフが走っていくのを見送りつつ、吸血鬼ヴァンパイアは『今になってようやく気付いた』といった感じで、闘技場の片隅で倒れ込んでいた血塗れの少女を一瞥する。

「もう少し戦えるかと思っていんしたけど、期待外れでありんした。やっぱりこの程度の雑魚だと、力量が判りにくいでありんすねえ」

後方でセバスと戦闘メイトブレアデスたちが勇者一行を引き摺って行き、コキュートスが武技使い集団と話し込んでいる最中、シャルティアは転がっているペットを軽く蹴りつける。

「ぐっほー！」

「ほら、起きなんし」

矢を受け、複数の裂傷、加えて魔法による打撲と火傷。でもペットたるエンリが受けた最も大きなダメージは、シャルティアの軽い蹴りだったのではないだろうか？

身体を丸めて痛みを堪えるエンリは、虫けらを眺めているかのような御主人様へ必死に言葉を発する。

「あ、ありがとうございます、シャルティアお姉さま！」

「ふふ、おんしは敗北したのだからお仕置きでありんす。覚悟しななし」

「はい、お仕置きしてください！ シャルティアお姉さま！」

痛む体を無理やり起こし、恍惚の表情を浮かべながら御主人様についていく人間ペットのエンリ・エモット。

シャルティア御自慢の特殊な教育——というか快樂拷問中に、村娘らしからぬ能力の発現を見せ、コキュートス管理の武技使いたちが行っている戦闘訓練へと放り込まれた。

それで少しは強くなったかと思いきや、動像ゴレムを使役しても請負人ワーカチームに完敗。

やはり本職の人形遣いのようにはいかないものである。指揮ができたとしても、自立意思を持たない人形相手では勝手が違うということなのであろうか？

事前の訓練ではそれなりに動かせていたのに、やはり付け焼刃程度では、実践において使い物にならないようだ。

「次はフサフサの尻尾にしんしょうかえ」

「シャルティアお姉さまの御心のままに！」

御尻に突っ込まれた尻尾型アクセサリー。戦闘中にそんなものをつけていたからこそ、まともな動けなかつたのであろうに……。

吸血鬼ヴァンパイアがそのことに気付くのは、遠い先の話である。

第19話 「強権魔王」

ナザリツク第十階層、玉座の間。

その正面大扉には、天使と悪魔の像が彫り込まれている。無論、ただの像であり襲い掛かってくることはない。

ただ現在、扉の前では本物の白い悪魔が殺気を纏って、軍服埴輪野郎を睨み付けていた。

「なにか言うことはないの？ パンドラ」

優しいな衣を言葉にまとわせて『抜け駆けしてモモンガ様の元へ行くんじゃないわよ！ うらやまぶち殺すぞ！』と笑顔で語るアルベドに対し、パンドラは気楽に対応する。

「はて？ 私はモモンガ様から直接、〃専属〃であると言われておりますので、統括殿の許可を必要としませんか……。なにか問題でも？」

「せんでくうー！」

守護者に腹を殴られてもビクともしないアルベドが、一撃を喰らってグラついたような幻惑に囚われる。それ程に衝撃的な発言であった。

専属、モモンガ様の専属。

妻としては許せない、許してはいけない役職だ。

「な、な、なんて羨ましいいいい！ この私を差し置いてええ!!」

「〃僕〃としての専属ですよ。統括殿は〃伴侶〃なのですから別枠でしよう?」

伴侶。

なんとも甘美な響きである。

大口ゴリラに変身しそうなアルベドの思考を、一瞬にして鎮静化させ得る魔法の言葉だ。

「ええ?」

「ですから、私はモモンガ様に創造された直轄の僕なのですよ。専属になるのは自然な流れでしょう? それより重要なのはモモンガ様

の伴侶。正妃となるべき立場のアルベド様。貴女なのではありませんか？」

敵だと思っていた相手が「伴侶」だの「正妃」だのを口に出すので、アルベドとしては顔がにやけて仕方がない。もうすっかり、パンドラの抜け駆けや専属の話などは頭の中から消し飛んでいる。

「そ、そうね。そうよね。モモンガ様の伴侶は私、妻となるべきはこの私。あなたはそう認識している、ってことでイイのね。パンドラズ・アクター？」

「もおちろんでございます、統括殿。今後は陰ながら協力させて頂こうかと思つてえおります」

「くふふふ、モモンガ様直属のあなたが味方なら心強いわ」拳をグツと握りしめて、アルベドは勝利を確信する。これでシャルティアとの差は決定的になったと言えるだろう。他の僕しもへの中にもアルベドに匹敵するような者はいないので、不確定要素は皆無である。

容姿、能力、立場、そして旦那様への圧倒的な愛情。加えてモモンガ様を愛するように、モモンガ様自身に求められているという事実。つまりこれは事実婚。

実質的に、結婚していると同じ状況であるということだ。

「では統括殿、モモンガ様の元へと参りましょう」

「ええ、愛する旦那様の元へ」

もうすっかり新婚気分で大扉の前に立つと、悪魔と天使の巨像が歓迎しているかのように玉座の間への道を開く。

視界に映るは幻想的で神秘的な、巨大かつ静かな大広間。

四十一の旗が掲げられ、最奥には水晶の玉座。

しかしながら、アルベドにとって重要なのはそのどれでもない。

重要なのは、大事なものは、命よりも大切であるのは、玉座に座りマスターソースを操作している骸骨の大魔王、モモンガ様だけだ。

「ああ、統括殿。我を忘れてモモンガ様を押し倒すような非礼は御勘弁願いますよ。一応押さえ込む準備は整えておりますけど、なるべくなら自重して頂きたい」

「んぐつ！ わ、私がモモンガ様を押し倒すだなんて……、押し倒すな

んて……、押し倒す……。くふー！」脳内ではすでに押し倒している
のであろう守護者統括は、この場が玉座の間であることを思い出した
のか？ 埴輪顔の領域守護者に冷ややかな視線を送られていると気
付いたのか？ しばしクネクネした後、真剣な表情で自身の潔白を表
明する。「馬鹿なこと言わないでちょうだい。愛するモモンガ様に対
し、そのような不敬なことをするわけがないじゃない」

曇りなき美しい笑顔を前にして、パンドラはため息しか出ない。

「失礼いたしました。では参りましょう」

「ええ」

静かな足取りでアルベドの前に、数歩後ろにパンドラが続き、大魔
王モモンガ様の前で二人は跪く。

「モモンガ様、各階層守護者にナザリックの警備と周辺偵察、そして捕
らえた勇者の対応を指示し、行動へと移らせました。私はパンドラ
ズ・アクターと共にモモンガ様のお手伝いをするべく、玉座の間へと
参った次第であります」

「そうか……」マスターソースから目を離さないモモンガは、何かを考
えているかのように骨の指をこめかみにつけ、しばしの沈黙ののち、
ちらりと二人の守護者を見る。「ちようど良かった。お前たちに聴き
たいことがあったのだ」

ぶるりと感激に身を震わせ、アルベドは答える。

「はい。男の子は一人、女の子は二人ぐらいがよろしいのではないで
しょうか？」

「ん？」

「もちろんモモンガ様が望むのであれば、十人でも二十人でも産みた
いと思います」

『いや、ちよつと多いんじゃないか？』とか、『そもそもアンデッドな
んだが……』などの返答が頭に浮かぶものの、元よりそんな話をしよ
うとしたのではない。

モモンガは呼吸もしていないのに軽く咳をすると、手早く思考のズ
レを整える。

「その話はまた後で聴くとして、今回は“たつち”の件だ」

「ッたつち・みー」……様、でございますか？」

世継ぎのことより至高の御方を優先しているように感じられて、アルベドには嫉妬の念が浮かんでしまう。とはいえ、至高の御方々はナザリックの支配者だ。モモンガ様と同じく、絶対の忠誠をもって仕えるべき御主人様である。不本意ながらも。

「たつちがナザリックに攻め込んでくることを、皆があればほど嫌がるとはな。セバスもたつち側に付いてよいと言ったのに、喜ぶようなそぶりは微塵も無かった」

困ったような大魔王の口調から察するに、どうやら仲間との合流を望んでいるわけではないようだ。この世界に出現するかもしれないギルメンたちと、ナザリックの総力を挙げて戦争できないことが残念でならない、と言っているかのよう。

アルベドは少しばかり身を震わせる。

「ナザリックにとって至高の御方々は絶対の主人でございます。敵対するようなことを望む者など一人もおりません」

「いえ、統括殿。私は例外ですよ」

斜め後ろからの横やりにイラツとするも、アルベドは『私もだけどね!』と無言で振り向きつつ、埴輪野郎を睨み付ける。

「モオモオンガツ様! 私ならば至高の御方々が敵であっても、なんら問題ありません! たつち・みー様であろうとウルベルト・アレイン・オードル様であろうとも、首を刎ねて御覧に入れましょう!」

「ほう、物騒なことを言うわりには……呼び捨てではない、か」なにやら僕の挙動を観察しているかのような大魔王は、マスターソースへ視線を戻すと、他の守護者には聞かせられない一つの試みを口にする。

「やはりギルドメンバーが今の立場のまましていると、ナザリックとしては戦いにならない。であれば、やるしかあるまい——ギルメンを、アインズ・ウール・ゴウン」から強制脱退させる」

ギルドからの脱退。

それは至高の御方々をギルドから追放する、ということだ。

NPCからしてみれば、己の造物主がナザリックに二度と戻ってこない——戻ってこられなくなることを意味しており、気が気ではある

まい。

当然、タブラに創造されたアルベドなどは、血の涙を流して「どうか、御考え直しを！」と懇願してくるはず……だが。

「脱退、でございますか？」涼しげに小首を傾げ、アルベドはいつもの態度を崩さない。まるで己の造物主など気にもしていないかのよう

に。「ああ、スレイン法国でギルド解体の話聞いた時から考えていたのだが、今がちょうど良い機会だろう」モモンガはマスターソースに並ぶギルドメンバーの名前を骨の指で転がし、「さて、誰から脱退させるかな？」とアルベドをちらりと見る。

「おそれながら、タブラ・スマラグディナ様がよろしいかと。創造された直轄の僕しもがどのような反応を示すのか——を探る上でも、私の造物主で試してみるべきかと愚考いたします」

「うむ、タブラかあ。確かにNPCの反応は気になるが、ニグレドとルベドに暴走されても困るしなあ。いや、ルベドは最初からタブラの命令なんて聞かない設定だったか。ならば問題はニグレドだけか？

いやそれより、アルベドはどうなんだ？」

「なんの問題もありませんわ」守護者統括は花満開の笑顔で大魔王を見つめると「私はすでにモモンガ様の妻です！ 身も心もモモンガ様御一人のモノ！ ですから父親が殺されようとも造物主が追放されようとも、わたくしには一切影響ありません。御安心ください！」

「そ、そうか」

安心しろと言われても、別の不安が頭をもたげてくるようなアルベドの猛烈アピールに、モモンガはため息を吐きながら己の僕しもを眺める。

「お前は どう思う？ パンドラ」

「はっ、統括殿は御自身の言葉通り問題はないかと。ですが、ニグレド殿には何かしらの変化があってもおかしくありません。脱退確定後、統括殿には姉君の心境を確認して頂くべきでしょう」

「ふむ……」誰を脱退させたとしても、一番まともで——そうは見えないかもしれないが——どんな状況にも対応できるのがパンドラだ。

モモンガとしては、ギルメンを脱退させても大した変化は起こらないと予想しているものの、万が一の対策は用意しておくべきであろう。「よし、まずはタブラを脱退させる。アルベドは己に起こった変化について報告を。その後、ニグレドの元へ向かい、なにか問題が発生していないかを探れ」

「はっ、かしこまりました、モモンガ様」

アルベドの返事に頷いたモモンガは、軽く骨の手を動かし、マスターソースを操作する。

ギルドメンバーの名簿を軽く転がし、目当ての名を見つけては左手に持った「スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」を強く握りしめ、ギルドマスターの強権を発動させた。

ギルドマスター、ギルド武器、そしてギルドメンバーからの決定権譲渡。

すべての条件が揃い、マスターソースは指定された名簿の個人名を点滅させる。これで再度の決定を成せば、名簿欄には二度と埋めることの叶わない空白が現れよう。鈴木悟であれば、絶対に行わない操作だ。

しかしモモンガは、なんの痛痒も示さず、タブラ・スマラグディナを消し去った。

無論、消した後の後悔もない。

「ではアルベド、気分はどうだ？」

「御安心ください、モモンガ様。アルベドは今も昔も、モモンガ様の妻であり、愛する旦那様の奴隷であります」

なにか余計な役職が追加されたようにも思うが、まあ問題ないのであろう。マスターソースから確認できるナザリック全体への影響も皆無のようだ。

これならば他の三十九人も、同様に脱退させることが可能であるに違いない。

「であれば、次はニグレドだな。頼んだぞ」

「はっ、畏まりました」

返事は立派ながらも、アルベドが玉座の間を出て
リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン
拠点内転移用指輪を発動させるまで、名残惜しそうに振り向いた
回数は五回だ。

やれやれ、と魔王のため息も漏れる。

「モモンガ様、一つ、よろしいでしょうか？」いつになく真剣な、らし
くないパンドラの言葉が魔王の耳を誘う。

「なんだ？ パンドラ」

「はい。モモンガ様は……、至高の御方々と戦うことを望んでいらつ
しやるのでしょうか？ 帰ってこられても、仲良くナザリックで過ご
すことはないと？」

他の守護者では、決して言葉にできぬ問いであつただろう。他の至
高の御方を殺せると公言した者にしか許されぬ、禁断の問い掛けだ。
「そうだな」魔王はじつくりと時間をかけ、ユグドラシル時代を振り返
る。「支配者は一人で十分だ。それにナザリックを捨てた者が昔の地
位に返り咲こうとは片腹痛い。私の命令に従うのであれば使つてや
らんでもないが、望むのは敵対だな。その方が楽しめるとい
うものだ」

アインズ・ウール・ゴウンのメンバーは曲者ぞろい。

戦えるのであれば、真の竜ドラゴンロード王よりも楽しい死闘が味わえるであろ
う。魔王側が敗北する可能性も非常に高くなる。

まあ四十人の内、血沸き肉躍る激闘を大魔王にも感じさせてくれる
ような強者は、三分の一にも満たないのだが……。

「ああだが、生産職や偵察専門などのメンバーはどちらにおいても不
要だな。戦つても面白味はないし、パンドラがいる以上生産系スキル
にも困ることはあるまい」

「ありがたき幸せ。……それではモモンガ様、のちほど統括殿よりお
話があるかと思しますので、よろしくお願い致します」

「ん？ なんの話だ？」

「それは、後のお楽しみということぞ」

「やれやれ」

また妙なことを——と思いつつも、大魔王様に見通せぬことなどこ

の世には無い。話の流れからも、アルベドが語るであろう内容を推察できないわけがないのだ。

とはいえ、後の楽しみを看破するほど無粋でもない。

モモンガは完成された美しいパンドラのお辞儀を眺めながら、「期待して待つとしよう」と機嫌よく微笑むのであった。



煌めく鍔、振り乱される黒髪。

室内に響く赤子の叫びは、聴いているだけで呪いに犯されそうだ。

「ごどもごどもごどもお、わたしのごどもおおお！ どこへやったあああああ!! よこせえええ!!」

「はい、姉さん。子供はごどもよ」

顔の筋肉むき出しの鬼女を前にして、白い悪魔は平然と玩具の赤子を差し出す。その退屈そうな仕草からは、毎回同じ手順を踏まなければ実の姉とも会えない——という理不尽さへの不満が見えてくる。

スキップできないムービーシーンなんか、いまだきあり得ねえだろ！ とペロロンチーノの雄叫びが聞こえてきそうだ。

「ああ、私の赤ちゃん……。あら、私の可愛い方の妹。久しぶりね」

「ええ、久しぶり姉さん。と言いたいところだけど、面倒な手続きさえなければもつと気軽に足を運べるのよ。何とかならないの？」

『そうあれ』と創造されたからにはどうしようもない、とアルベドも解ってはいるが、それは造物主が至高の御方であった場合だ。

タブラが追放されている今とは状況が異なる。

「そうねえ」可愛らしく皮なし顔をこくりと傾げて「可愛い妹の我儘なら聴いてあげたいところなのだけど……。私たちのお父様、タブラ・スマラグディナ様がお決めになったことだから御免なさいね」とニグレドは優しい口調で妹を諭す。

「おとう、さま？」変化のない姉の思考に、アルベドの眉がピクリと跳ねる。「姉さん、少し聴きたいことがあるのだけど」予想では、自分と同様にタブラを虫けら程度と認識——とまでは言わないものの、ある

程度の敬意は削がれるだろうと判断していた。それなのにお父様とは。

「もしモモンガ様から、タブラ・スマラグディナ様を殺せと命令されたら、姉さんはどうするの？」

とても仮定の話とは思えない暗くて鈍重な笑みをもって、アルベドは姉を見つめる。

「私の可愛い妹、どうかしたの？ 答えるまでもなく、答えが一つしかない質問よ」頭の良い妹がどうしてそんな質問をしてくるのか、と不思議そうなニグレドは、静かに答えを待つ守護者統括の態度に仕方なく答えを口にする。「当然、お父様を殺すに決まっているでしょ。モモンガ様の御命令は絶対なのだから。造物主の命なんかとは、比べることすらおこがましいわ」

「ふふっ」

期待していた答えを前に、アルベドは思わず笑みを漏らす。これで計画を進められる、これで殲滅できる、これでやつらは皆殺しだ！と言わんばかりに強く拳を握り、目の前の姉がオロオロと狼狽えてしまうほどに目を見開く。

「ど、どうしたの？ アルベド。私、何か変なこと言ったかしら？」

「くふふ、まあそのね。モモンガ様に幼子を殺さないよう嘆願した姉さんが、モモンガ様は絶対なんて言うものだから……」

ニグレドの失態は未だ記憶に新しい。配置場所からの勝手な移動、殺されるはずだった幼子の助命嘆願。アルベドも肝を冷やした危うい一件だ。

「うう、それは……、私の生まれてきた意味でもあるのだから、否定はできないのよ。造物主の立場とは別問題——なのよねえ」

「ふくん、そういうものなのね」造物主が追放されれば、『そうあれ』と刻んだ宿命も否定されるのかと思いきや、実際は無関係のようだ。アルベドは少しガツカリしつつも「それで？ 姉さんが保護した人間の子供はどこにいるの？ 追加も送ったはずだけど」

「ああ、受け取ったわよ。でもまさか、可愛らしい幼子を二人も預けて下さるなんて……。だから私の可愛い妹、モモンガ様には『私が感謝

の言葉を捧げていた』と伝えてもらえるかしら？」頷き返す妹の仕草を確認し、ニグレドは言葉を続ける。「クーデリカちゃんとウレイリカちゃんはともイイ子で、今はネムちゃんと一緒にニユーロニストの授業を受けているの。モモンガ様の偉大さを知る、大事な授業をね」

「流石姉さん」とアルベドは微笑みつつ、モモンガ様の偉大さに打ち震える。

恐らくモモンガ様は、僕に褒美として渡した幼子たちが、骸骨大魔王様の美しさ、素晴らしさ、強大さに感銘を受け、いずれ人間世界への宣教師となる——という未来を予見していたのだ。

近い将来、多くの人間どもがモモンガ様のために命を投げ出し、または実験体として身を捧げることだろう。魔王様が追いかけ追い詰め、手を下す必要など無いのだ。僕を送り込むことすら不要。

人間はモモンガ様への信仰でまとめ上げられ、必要な時に必要な数だけ殺される資源となる。その数は、デミウルゴスが運営している牧場の比ではないだろう。

「くふふ、私もその授業に交じりたい気分だけど、またの機会にするわね。それじゃあ、姉さん。またね」

「ええ、私の可愛い方の妹。また顔を見せにきてね」

上機嫌の妹が一瞬『どちらの妹も可愛い、でしょ？』と訴えるかのような視線を飛ばす——と共に片手を振りながら転移してしまうと、ニグレドの周囲は再び赤子の泣き声で満たされる。

心が洗われるような、うつとりする室内BGMであろう。定められた待機場所が、この場であることの意味を実感してしまう。

「はあ、それにしても」ニグレドは起動させていたナザリック周辺の魔法監視システムを軽くチェックすると、〈水晶の画面〉を複数展開させながら妹の行動を思い返す。「あの子ったら、結局なんのために私のところへ来たのかしら？ 変な質問ばかりして。造物主であるお父様は確かに私たちを創ってくださいった大恩ある御方だけど、モモンガ様の御命令なら喜んで殺すのに……。まあ、私では振り返ちでしょうけどねえ。悔しいけど仕方ないわ。お父様は——、元至高の御方であ

「
るのだから」

第20話 「侵略魔王」

コツコツと規則的な足音を響かせて、一人の悪魔が久しぶりのナザリック地下大墳墓を満喫する。

深く呼吸し、磨かれた通路の壁面や飾られている調度品を眺める。掃除に勤しんでいる一般メイドへ軽く挨拶を行い、ここ最近の変化について雑談を交わす。

無論、重要な情報については共有システムが構築されているので、取りこぼしなどあるはずがない。だが、真に聞きたいのは情報共有されていないモモンガ様の近況だ。

どこで過ごされたのか、どこへ赴かれたのか、誰と言葉を交わしたのか、どんな話をされたのか。

近くに侍ることを許されず、遠い法国で牧場を運営していた——短いながらも長く感じる悲哀の期間。活躍できる場であるとしても、やはり主の近況は気になるものだ。

「ありがとう、仕事の邪魔をしてすまなかったね」

幾人かの一般メイドと言葉を交わした後、デミウルゴスは時間を確認し、報告書を片手に第九階層のある場所へと向かった。

目指すは主の執務室。

唯一無二の至高なる絶対支配者、骸骨大魔王モモンガ様の足元へひれ伏すために。

「デミウルゴスです。スレイン牧場での研究結果をお持ちいたしました」

身を振るわせかねないほどの幸福感を抑えつつ、デミウルゴスは部屋付きの一般メイドが開け放つ扉を潜ると、真っ先に御主人様の姿を探す。

「おお、久しぶり……でもないか？ 元気そうだな、デミウルゴス」

「はっ、モモンガ様もお元気そうだなによりです」

大魔王は奥の執務椅子ではなく、部屋中央のソファアームに座っていた。目の前のテーブルには魔法の鏡が浮いており、どこかの遠隔地を

覗いているのだと解る。

「遠隔視の鏡ですか？ どこか気になる場所でも御座いましたか？ 私に御命じ頂ければ即座に調査してまいります……」

「いやいや、見ていたのは第六階層に住まわせている『レア』たちだ。タレント持ちを中心に集めてはみたものの、たいしたことのない奴も多くてな」

鏡に映る『レア』の情報は、デミウルゴスも所持している。

どんな魔法具でも使用可能な少年、魔法の習得期間が半分になる少女、エ・ランテルで最強の女剣士、トブの大森林にいた木の妖精^{ドレイアード}など。

確かにモモンガ様が気に掛けるほどの存在ではない。『生まれながらの異能』が未知の能力であること以外は、すべて簡単に対処できる内容ばかりだ。

デミウルゴスからすると、重要視すべきなのは『生まれながらの異能』持ちの少年一人だけだろう。だがそれも、モモンガ様の手を煩わせる必要などないのだ。デミウルゴスが運営しているスレイン牧場へ任せて頂ければ何の問題もない。牧場では様々な研究を行っているのだから。

「モモンガ様、何かお手伝いできることはありませんか？」デミウルゴスは『ここぞ』とばかりに気持ち一步前へ出る。いつもなら即座に白い悪魔が邪魔をしてくるパターンであろう。だが、今日は何故か――珍しく不在のようだ。だからこそチャンスである。

「ふむ、そうだな。では若い女を百人くらいナザリックへ送ってくれ。健康なヤツをな」

「なるほど、繁殖を――いえ、品種改良をなさるおつもりなのですな」

瞬時に答えまで辿り着き、悪魔的な笑みと共に、魔王様へ献上する人間の選別を思考する。

「特異なタレントを持つ少年は、神人の白黒女やシャルティアのペット、集めたレアの女どもと繁殖行為をさせるつもりだが、より多くのサンプルが必要になるだろうからな。『タレントは生まれに関係ない』が一般論だとしても、完全にそうだと決めつけるのは早計だ。よ

り有能な種に改良できれば、別の答えが見つかる可能性もある。やる価値はあろう」

「流石はモモンガ様。仮にまったく無能の子供が生まれてきたとしても、一からナザリックの僕として教育し、武技や魔法の習得、成長限界についての研究材料にすることが可能です。なんと素晴らしい」

感極まる、といった感じでデミウルゴスは声を震わせる。

モモンガ様の御考えに触れることのなんと心地良いことか。傍に侍り、御計画の一端を見せて頂けることの幸福。やはり牧場への出向任務は恐るべき罰なのだ——と思わずにはいられない一時である。

「まあ、先の話だ。それよりデミウルゴスの研究結果を聴こうか。まだそれほど日数が経過していないのだから、大きな進展はないと思うが……」

「はっ、確かに目に見える結果はまだなのですが、それに至るまでの枠組みは完成したかと」

デミウルゴスは真剣な表情で、手にした報告書を差し出し、一つ一つを丁寧に解説する。

巻物工場——マジック・キャストの魔法詠唱者を集め、材料調達から製作までを一括管理させ、第一位から第三位階までの継続的な巻物生産を可能とした。

水薬研究所——ポーション職人を集め、改良から開発、赤い水薬への到達研究など、現地における最大規模の実験棟構築。

武技試練場——しもべ習得構造の解明、新技の研究開発、僕への習得実験も行うが、コキユートスとは真逆の広く浅く。また武技の歴史についても調査継続。

素材探究所——オーバード現地の使える素材を探して確保する。枯渇に注意し、牧場周辺から調達。現在は人間種の肉体を分解研究中。なお、異種族間交配による品質向上計画も始動。

軍勢召喚——大図書館の死の支配者や「ミマモリ」、配下の悪魔たちを使って、牧場の死体から下位・中位のアンデッドと悪魔を召喚。そろそろ一万に到達する頃合い。

「ふふふ、見事だな、デミウルゴス」魔王は何の含みもなく、純粹に目

の前の悪魔を褒め称える。「勇者との決戦には多くの物資が必要だ。加えて、私に相応しい勇者を育てるためにも、スクロールやポーシヨンの供給は不可欠。よくやってくれた」

「おおお……、もったいなき御言葉。このデミウルゴス、モモンガ様の忠実なる下僕として、牧場を価値あるモノへと推し進めてまいります。どうぞご期待ください！」

大魔王様のお役に立つこと。それこそがナザリックに所属する僕しもべの生きる意味なのだ。

だからこそデミウルゴスは歓喜に震える。

と同時に、自分と同じ想いであるはずの統括が、モモンガ様の傍にいないことを不審に感じてしまう。

「モモンガ様……」軽く周囲を見回してデミウルゴスは口を開く。「御身の執務室とはいえ、守護者級の者が一人も傍に控えていなかったのですか？ アルベドの姿も見えませんが」

「ああ、ちょうど入れ替わりになったただけだ。アルベドはパンドラと共に、新チームの編成へと赴いている」

「新チーム、でございますか？」耳慣れない言葉を捕らえて、デミウルゴスは眼鏡をくいと整える。

「先程決定したばかりだからな。まだ各守護者へ通知は届いていないのだろう。まあ、そうだな。特別な任務をこなす特務チーム、とでも言えばいいのかな？ アルベドの言葉を借りれば、ドリームチーム」となる」

御方の説明に、少しだけ嫉妬の心が疼く。特別なチーム、モモンガ様のために動く特務チーム、ドリームチーム。

なんとも甘美な響きであることか。

その一員として働きたいと、思わずにはいられない。

「すばらしいお考えです。ナザリックの僕しもべにとっては、最高の荣誉となる役目でありましょう」

「まあ、最強のチームを作るのなら全守護者で構成するべきなのだろうが……。今のところはアルベドとパンドラ、ルベドに高レベルモンスター十五体、とそんな感じだな」

構成メンバーに「ルベド」が入っているだけで、その本気度が伺える。

ナザリック最強の個がアルベドやパンドラと共に動くのだ。たとえ起動時間に制限があつたとしても、相手になるモノなどいるはずがない。

「それに守護者には、他にやつてもらいたいことがあるからな」モモンガは感激しきりの悪魔へ視線を送り「標的の選定について意見を聞こうか？ デミウルゴス」と別件についての話を切り出していた。

「はっ、私はアルベドと同様に、リ・エステイーゼ王国がよろしいかと具申いたします」

デミウルゴスが魔王から頼まれていたのは『次なる標的の選定』であつた。

リ・エステイーゼ王国か？

バハルス帝国か？

ローブル聖王国か？

竜王国か？

それとも他の国か？

襲いかかるべき国家について、滅ぼすべき国家について、情報を集めつつ精査していたのである。

「ふうむ、王国かあ。『侵略戦争』をしかける相手としては、あまり面白そうにも思えんが」

侵略戦争。

モモンガが大魔王として成すべき代表的な虐殺だ。

魔王軍を率いて人間や亜人の国へ侵攻し、長き時をかけて殺しに殺し、屍を積み上げて、最後には王城を炎上させてハッピーエンド。

場合によっては、王子や姫が抜け道から涙ながらに逃走するオプションもある。どこかへ落ちのびて魔王への復讐を決心する、というおいしいオマケ付きだ。

魔王なら絶対外せないエピソードであろう。

スレイン法国のように一日で滅ぼすのも悪くはないが、数ヶ月、または一年近くかけてじっくり蹂躪するのも、人の恐怖を煽る素晴らし

い手法なのである。

「モモンガ様。アルベドやパンドラと共に調べましたところ、王国には恐るべき知恵者が居るようなのです。その者であれば、コキュートス率いる魔王軍を楽しませてくれるのではないかと、と思考するところがあります」

「ほう、知恵者か」魔王は背もたれに体重をかけ、今回の侵略戦争に赴く総大将——コキュートスと、手勢である軍勢について思いを馳せる。「第一陣はナザリックの自動湧きアンデッドと牧場で召喚した下位の僕たち、第二陣は中位のアンデッドと悪魔、最後がコキュートス率いる高位の側近たち……か」主体となるのは、スレイン牧場で毎日地味に召喚していたアンデッドと悪魔だ。コキュートスの本陣は、ナザリック第五階層の防衛とモモンガ様の近衛を除く全ての配下を引き連れることとなっている。

「ならば、コキュートスには余計な情報を与えぬ方が面白そうだ。出来る限り己の力のみで進んでもらうとしよう」

「はっ、おおせのままに」

かくして侵略戦争は始まった。

鼻息の荒い蟲ヴァーミロード 王は自慢の武器を備え、吸血鬼の〈転移門〉から溢れ出す己の軍勢に酔いしれる。

「感謝スルゾ、友ヨ」「いや、牧場の死体を有効活用しただけさ、友よ。まあ、すべてはモモンガ様の御指示なのだがね」「……わらわも頑張っているすよ?」

着々と準備は整えられ、魔王軍は溶岩で覆われた滅亡都市の残骸近辺に立ち並ぶ。

総数は約一万程度。

第一陣が最も多く、本陣が最も少ない。

だがそれでも、王国に未来など無いだろう。コキュートスが率いる本陣の化け物たちは、最低でも『世界を滅ぼせる魔樹』に匹敵する。加えて魔王様直々の御命令なのだ。気合も十分過ぎるほどに高まって

いよう。

「では健闘を祈っているよ」「アア、モモンガ様ノ名ヲ汚サヌヨウ、人間ドモハ完膚ナキマデニ叩キ潰ス。任せテオケ」「……少しぐらいは手伝ってあげてもイイでありんすよ?」

綺麗に整列した魔王軍を前に、ヴァーミンロード 蟲 王は大魔王様の言葉を思い出す。

ゆっくりと確実に侵略せよ。

人間どもが恐怖を理解し絶望に至るまで、充分な時間をかけよ。

全てを終えるまで、誰の助けも借りずに己で判断せよ。

勝利せよ。

ヴァーミンロード 蟲 王は歓喜に震え、遙か遠くにある王国の王城を幻視する。

「ソロソロ先触レガ到着スル頃力」「……御勅命、ずるいでありんす」
戦争が——始まる。



王国戦士長が行方不明であることを聞いた時は、驚くふりをしながらも『ようやく死んだか』と思ったものだ。

私のクライムが戦士長の活躍を嬉しそうに語れば語るほど、殺したくて堪らなかった。だから、スレイン法国には感謝しかない。これで帝国も攻め易くなったはずだし、数年後には帝国の執務室で、政策のアドバイザーなんかを囁いていられるだろう。もちろんクライムと一緒に。

あの皇帝は私を殺したいのだろうけど、国益を考えれば絶対に生かすはずだ。クライムだけで私の頭脳を有効活用できるのだから、皇帝にとっては得しかない。

そこに私情が入る隙は無いのだ。

「でも、どうして行方不明なのかしら?」

戦士長の死を知らしめるためには、死体が必要だ。行方知れずにしてどうするというのが?

復活を危惧しているにしても、頭部だけを残して身体をバラバラに

すれば、ラキユースの魔法も効果を発揮しないだろう。

スレイン法国の特殊部隊が、そのことを知らないはずがない。

「法国で発生した謎の大爆発が関わっているのかしら？」

スレイン法国で発生したらしき大爆発、大地震、真つ黒なきのこ雲。どれが正しい情報なのかは置いておくとしても、問題が発生したのは間違いないだろう。それも極めて甚大な被害を及ぼす『想定外の何か』が起こったのだ。

「王国に潜入していた手の者も一斉に帰還してみたみたいですし、内乱？

戦争？ エルフの国が切り札でも使ったのかしら？」多くの情報パズルを、複雑に幾通りも組み合わせでは分解する。テーブルに置かれたぬるい紅茶を口に含み、愛しい忠犬の不在を嘆く。「……ふう、駄目ね。情報が足りないわ。なにか他に——え〜つと、遺跡？」

頭の中にある情報を整理し、兄から見せてもらったエ・ランテル都市長「パナソレイ」の緊急通知を思い出す。

「突然現れた遺跡、今までその場所は草原だった、見落としては考えにくい、アダマンタイト級冒険者を含む多くの者たちが近郊を通っているのだから……。ならば『突然現れた』は正しい？ でも遺跡だけ？

いえ、持ち主も共に現れた、としたら……。」

この世界に突然現れるモノで有名どころと言えば、物語でも取り上げられている「八欲王」が真つ先に思い浮かぶ。

なにせあの天空城ですら、気が付けばそこに存在したというのだから……。

建築途中の光景など、どの歴史書にも記載がなく、建築物資を運んだ記録もない。あれほどの巨大な建造物にも関わらず、数多の奴隷が動員され、昼夜を問わず働かされたという一文も発見できなかった。

つまり八欲王は、どこからも物資を手配せず、人も雇わず、誰にも造っているところを見られずに、一つの城を天空へと配置したのだ。

五百年の前のことだから、物語の中で創りあげられた妄想というのだろうか？

いや、八欲王自身にしても、世界を滅ぼすほどの力を持った——それだけで全く無名の化け物たちがある日突然、八人同時に暴れ出す、

なんて不自然にもほどがある。

これはやはり、

『突然現れた』と言ってもよいでしょう。だとすると、今回の遺跡は五百年前のような世界戦争の前触れ？」情報を一つ一つ組み上げてはその先を予想するも、根拠となるべき話があいまい過ぎて、未来を読み解くことなど出来るわけもない。

「はあ、法国が管理している歴史資料を見せてもらえたら、話は早いのですけど……」

王国の歴史は法国に及ばない。

魔神と呼ばれる世界を破滅に追い込んでいた化け物——が討伐された後に建国されたのだから、精々二百年ほどであろう。

貯蔵されている書物を全て読み込んでも、真実にはたどり着けない。

「なにかが起ころうとしている？ 人知の及ばない、なにか……恐るべきことが？」

リ・エステイーズ王国の第三王女、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフは、組み上げていた未来に余計な異物が入り込んだことを感じていた。

無論、横やりの存在などは事前に想定済みではあったが、姿の見えない新たな異物は多少の修正で避けられるようなモノではない。情報のパズルが指し示すは、国家の未来すら打ち崩すであろう『何か』。それは生き物なのか、現象なのか？

人が立ち向かえるのか、希望はあるのか？

紅茶で喉を潤した可憐な王女様は、頭の中で使えそうな手駒を数えつつ、『数えるまでもなかったわね』とため息交じりの失笑を零す。

それでもラナーは考える——自分とクライムが生き残るための方策を。そのためなら家族や王国民の命などいくらでも使い潰そう。悪魔の生贄に捧げてよい。

あんなゴミには、その程度の使い道しかないのだから——

「——ラナー様！」ノックをしないでよいといったのは自分なのだが、全力疾走しながら扉を引き開けるとは想定していなかった。クライ

ムも少しばかり強引になってきたようで嬉しい限りである。「王城の正面門に異形の化け物が現れました！　すぐに避難を！」

「化け物、ですか？」紅茶が入ったカップを片手に、こくんと首を傾げ、愛しい男の焦った表情を楽しむ。

眉間に皺をよせ、厳しい空気と共に部屋へ入ってきた鎧を着込む若者の名は、クライム。

王女様がこの世界で唯一愛する男であり、首輪をはめて一日中その瞳を眺めていたいと思う可愛らしい犬であった。

「はい、漆黒の一角獣に跨った黒騎士のような姿ですが、アンデッドかもしれません。街中を平然と進み、制止しようとした衛士隊を壊滅させ、真つ直ぐ王城まで来たとの報告が入っております。非常に危険な相手です。ラナー様は、国王陛下と共に避難してください！」

「大丈夫ですよ、クライム。城には近衛の方々もいてくださいますし、私には貴方がいるのですから」

天真爛漫なお姫様のように無垢な笑顔でいくべきかと思ったが、衛士隊に犠牲が出ていることを考慮し、少し緊張気味の震える仔犬が無理をして笑顔を作っている感じで言葉を返し、怯えを含ませてクライムの手を握る。

「それで、黒い騎士様は何をしているのです？　何か話しましたか？」

「いえ、今のところは何も話さず、兵に囲まれたまま王城の前で——」

『——告げる!!　我は偉大なる御方、大魔王様に仕えしもの!!
死の騎兵である!』
デス・キャバリエ

響き渡る、人にあらざるモノの声。

王宮の奥にある第三王女の私室にさえ届く、まるで魔法がかかっているかのような化け物の宣告に、少年と姫は静かに身を固める。

『聴くがよい!　リ・エステイーゼ王国を支配する矮小なる者どもよ!　大魔王様は、汝らに宣戦を布告する!!』

誇らしげに、高らかに、意気揚々と化け物は語り、手にしていた紋章入りの旗を掲げる。

なお、紋章に見覚えはない。後で形状を聞いたラナー王女も首を振ったそうなの。

『今日より数えて八日後！ 魔王軍は、滅びの街エ・ランテルより進軍を開始する！ 人間どもよ、必死の抵抗をせよ！ 大魔王様に喜んでいただけるほどの、必死の抵抗を!!』

その言葉を最後に、死の騎兵は馬をかえし、元来た道へ悠々と帰り行く。

当然ながら、周囲を囲んでいた王城の守備兵が道を開けるわけもない。手にした槍を隙間なく並べ、一気に突き刺そうと力強く踏み込む。

『なるべく的は残しておくように——との仰せ故、戦いは好まぬ。けれど、我が帰還を邪魔するのであれば仕方なし』

気合の入った兵士の掛け声が響き、不自然な静寂、一拍遅れて悲鳴が轟いた。

クライムに寄り添ったままのラナーは、悲鳴の中に苦痛による叫びが無かったことを察し、反撃を受けた兵士たちが声を上げることでもできずに殺されたのだと理解する。悲鳴を上げたのは、仲間のバラバラ死体を直視した周囲の兵士たちであろう。平和に慣れきった王城警備の兵士には、さぞ刺激的であったに違いない。

第21話 「傍観魔王」

「……行ったようですね」

「ラナー様、いったい……なにがっ、起こったので、しょうか？」

身を震わせるクライムにこれ幸いと抱き付きながら、ラナーは思考する。

デス・キャバリエ
死の騎兵とやらの強大さは把握した。王国が対応できない高い戦闘力を持つ化け物であること。人間と同等かそれ以上の知能を持つ会話可能な相手であること。そしてたった一騎で国家に乗り込んでくる常識外れの存在が、「魔王軍」とやらの単なる先触れではないということ。

（終わりね。王国はお終いだわ。でも——、私とクライムだけは生き残ってみせる）

相手の全戦力を知らなくとも、勝敗は見えてくる。

恐らくあの死の騎兵デス・キャバリエとやら一騎でも城を落とせたに違いない。戦士長が存命だったとしても、撃退できたかは怪しいところだ。

ならば——とラナー王女は決断を下す。

（王国を盾とし、囨とし、使い潰し、私たちの逃げ道を確保する。脱出の際は、ラキユースに護衛を頼みましょうか。……つと、邪魔者がききましたね）

ドカドカと大きな足音を響かせて、複数人が迫ってきている。こんな非常時に第三王女の私室を訪れるなんて、普通では考えられない行動ではあるが、それ故に相手が誰かはすぐに判る。

ラナーは名残惜しそうにクライムから離れると、ノックもなしに扉を開ける無礼者を笑顔で迎え入れていた。

「妹よ！ 聞いたか?! 聞こえたか?! とんでもない事態になったぞ！」

「落ち着いて下さい、お兄様。周りの方々も困惑していますわよ」

姿を見せたのは、何をおいても国王の元へ馳せ参じるべきであろうちよいと太めの第二王子、ザナック・ヴァルレオン・イガナ・ライル・

ヴアイセルフであった。後方には有り余るほどの護衛を引き連れており、共に駆けつけた六大貴族の蝙蝠——本人は蛇のような様相であるが——レエブン侯の護衛も合わせると、第三王女の私室にはとても入らない大所帯である。

「そ、そんなことを言っている場合ではない！ 王城の前は血の海だぞ！ 兄上は手勢を集めて、黒い騎士の後を追いかけてしまった！ 急がなくては手遅れになる!!」

手に負えない事態——言葉と表情が深刻さを物語っている。

「お兄様、レエブン侯。三人だけで話し合いをしましょう」第二王子は無能ではないものの、ラナーにとつては多少聞き分けのイイ駒ではない。レエブン侯も似たようなものだ。であるならば、精々役に立つてもらおうとしよう。

「クライムは外へ出ていてください」

「はい、ラナー様」

もちろんクライムが一緒でも構わない、というかその方が嬉しいのだが、今はまだ本性を晒すのは早過ぎる。それに第二王子ですら護衛を外に押しやっているのだから、妹が護衛を置くことなどできるはずもない。

「妹よ、はつきり聴くぞ。どうすればいい。どうすれば王国は救われる。魔王軍とやらには勝てないのだろうか？ ああ、宣戦布告にきた黒い騎士がああ強きなんだ。俺でもそれぐらいは判るぞ」

「王子、いきなり何をおっしゃるのです？ ラナー殿下にお聞きするような内容では……」黙って付いてきていたレエブン侯も、王子の形振り構わぬ言動には驚きを隠せないようだ。本人としては、国王の元へ向かう前に第三王女を連れていこうと、ちよつとした寄り道程度に思っていたようだが。

「お兄様、レエブン侯。王国は滅びますよ、間違いなく」なんの感傷もなく、不気味なまでの平淡な口調でラナーは言葉を紡ぐ。

「ですから王国民には時間を稼いでもらいましょう。魔法詠唱者^{マジック・キャスター}を動員して戦争が始まることを国民に伝えるのです。もちろん時間が無いので近隣の防衛拠点に集ってもらうことぐらいしか出来ませんが、

まあ肉の盾ぐらいにはなるでしょう。ただ、相手が「魔王軍」であることは伏せます。逃亡されても困りますしね」

「時間を……稼ぐだと？ 何のため——誰のための時間だ？」妹と会話しているとは思えないほどの冷や汗をかきながら、第二王子は渴いた喉の奥から声を絞り出す。

「もちろん「私たち」が逃げるための時間ですよ」

ラナーは「黄金」の名に相応しく——とはとても言えないようなドス黒い表情で、ニタリと笑った。

「ちよつ、ちよつとお待ちください殿下。それではつ、そのようなことをしてはつ、王国民に多大な被害が出る恐れがあります。王城の兵士ですら手も足も出なかった相手が、軍となって押し寄せてくるのですよ。民兵ごときではつ」

「ですから、民兵ごときにできることは時間稼ぎぐらいでしょう？ 一人殺されるのに数十秒だとしたら、百万人で一ヶ月ぐらいなんとなるのでは？ まあ、魔王軍が十万もいたら一日で壊滅でしょうけど」

「お、お前は……」王子として最初に考えたのは『どうしたら勝てるか？』だ。しかし即座に『どうしたら国を残せるか？』と頭を悩ませた。魔王軍とやらの勝てる見込みがない以上、和平や休戦協定への道筋を模索しようとしたのだ。

「お兄様、悲観している場合ではありませんよ。国民への戦争告知と同時に、「アーグランド評議国」へ親書を送りましょう。内容はもちろん魔王軍に関することですが、『助けてほしい』とは嘆願しません。まるで他人事のようなラナーの発言に、王子やレエブン侯は「はあ？」と顔を歪ませる。

「救援を要請しても来るはずがないでしょう？ まともな国交もないのですよ？ それより『次はお前たちだぞ』と危機感を煽り、王国が魔王軍の相手をしている間に背後を突いてもらう方が確実です。評議国も他国が盾となっている状況を好機と捉えるでしょう」

ラナー王女の提案はまさしく王国を餌としたものだ。

国中に散らばる人間という餌、それに食らいつく魔王軍。恐らく、

魔王軍は他方に散らばり戦線は拡大する。強力な化け物が一ヶ所に集るような事態は避けられるだろう。

ならば、評議国の竜ドラゴンロード王たちも重い腰を上げるに違いない。

（評議国の戦力に問題はないはず。王国に来ていた商人たちの動向に変化はなかったし、先日の噴火のような大爆音も、誰も住んでいない荒野が発生源とのことでした……。評議員である竜王さえ扇動できれば、逃げ出す隙ぐらい作り出せるでしょう。まあ、魔王軍を壊滅させてくれるなら、それに越したことはありませんけど）

この世界において竜ドラゴンロード王とは、人知の及ばぬ恐るべき戦力である。有効に活用できるのであれば、魔王と違って戦えるに違いない。

しかしラナー王女は、魔王軍の戦力を八欲王並みと推定していた。少し過剰かもしれないが、過小評価して後悔するよりはマシであろう。故に、竜ドラゴンロード王の横やりがあつたとしても魔王軍は止まらないと考えられる。良くて膠着状態、悪くて返り討ち。予想としては思わぬ攻撃を受けたことで進軍速度が鈍り、分散していた軍勢の統率が乱れる——といったところか。

「さあ、お兄様。時間がありません、早く戦争の通達を！ 評議国への親書内容は私が考えますので、レエブン侯には竜王様へ謁見可能な人物の選出をお願いします」

「お、おう」

「これは、私自身が赴くべきでしような」

「病床のお父様には何も知らせず、バルプロお兄様や貴族派閥の方々には全権委任で戦争を任せましょう。おだてて煽り、全ての手柄を譲ると確約するのです。もちろん次期国王の座も」

流石に王位の話を出されると、第二王子も顔が引きつる。

第一王子と長きに渡り争ってきた地位なのだ。それを容易く渡せと言われると「い、いや、それは……」と歯切れも悪くなるう。

「お兄様、この国は亡びるのですよ。そんな国の王位に何の価値があるのでしょうか。まあ、万が一国が残ったとして、その玉座に座りたいとお兄様がおっしゃるのであれば、私が協力しますよ」

まるで此事であるかのように、魔王軍と戦うことに比べたらお遊戯

であるかのように、ラナー王女は黄金の名に恥じぬ美しい笑顔を振りまく。

「さあ、王国民数百万人を餌にして、私たちは生き残りましょう。ここからが正念場ですよ！」

第三王女の激に、第二王子とレエブン侯はゴクリと喉を鳴らして、己の成すべきことに向けて動き出した。

ちなみにラナー王女の『私たち』とは、自分自身とクライムのことであり、他の者は一切関係ない。当然家族も蚊帳の外だ。

第二王子は感付いているのだろう——餌の中には自分も含まれているのだと。だが、現状ではどうにもならない。魔王軍との戦争に穴を開けられるのはラナーしかいないのだ。今はその穴に自分も入り込もうと画策するしかないだろう。他に道はない。

一方、レエブン侯も理解していた。ラナー王女の澱んだ瞳に自分は映っていないのだと。だから評議国への使者を請け負ったのだ。密かに家族を呼び寄せ、評議国からは戻らないつもりで。

領民は怒り狂うだろう。貴族の地位は剥奪されるだろう。今まで積み上げてきた実績も全て水の泡だ。

国の存亡をかけた戦争が始まろうとしているのに、防衛するべき領地を捨てて、家族とともに国外逃亡。他国へ親書を届けにきた使者が返答も受け取らずに亡命するのだから、それはそれは評議員たる竜^{ドラゴンロード}王たちも呆れかえることだろう。

だけど、そう、それでいい。

ラナーは手駒となるべき愚者を送り出すと同時に愛すべき男を迎え入れ、不安で仕方がないとばかりに抱き付く。

（ふふ、必死に生き抜こうとするレエブン侯の姿こそが、魔王軍の脅威を伝える一要素となるでしょう。あとは王国の戦力と配置を正確に教えて、有利な襲撃箇所^{ドラゴンロード}に気付いてもらわないと……）

こちらから提案する襲撃計画では、竜^{ドラゴンロード}王たちを引っぱり出せたりはしない。重要なのは、自発的に動いてもらうことだ。

竜^{ドラゴンロード}王たちは戦況を見すえ、最も効果的で被害の少ない襲撃計画を練るはず。無論、『被害が少ない』とは評議国にとってであり王国のこ

とではない。王国兵は評議国にとって盾であり囮でもあるのだから、全滅まで放置はされないだろうが——魔王軍相手に潰し合いをしてもらう関係上、膨大な死傷者を要求される。

大地が血で染まり、死体の山が並ぶはずだ。

あの死の騎兵という黒い騎士に匹敵する兵で軍を構成しているのなら、最前線は阿鼻叫喚の地獄絵図となるう。王都へ到達するのに大した日数はおそらくかからないかもしれない。

(情報が欲しい、魔王軍の情報が……) ラナー王女は愛しい犬の胸で、『背中を手を回してくれてもいいのに』と妄想しながら、敵の全容を予想する。

(軍の規模はそれほど大きくないのかもしれないわね。大軍であるのなら、今まで誰にも目撃されていないのはおかしい。それで今は、エ・ランテルに駐留? 『滅びの街』とか言っていたのは、住民を皆殺しにして占領したから? まあ、あんな街なんかどうでもいいけど……) 逃げてきた人がいれば、話を聞いてみたいわね。さて)

名残惜しそうな悲しい笑みを浮かべつつ、ラナーはクライムから離れ、執務用の机へ向かう。

評議国の竜 王たちを『その気』にさせるための親書作成だ。

普通のやり方では難しいだろう。評議国は王国が滅びるのを対岸から眺め、自国の護りを固めるはずだ。それが悪手だとも知らずに……。

(王国を呑みこむ魔王軍を前にしては、流石の評議国も撃退できないでしょう。竜王だけなら逃げられるかもしれませんが、国としては終わりですね。唯一の道は、最大戦力での不意打ち。そう、敵の総大将——魔王の首をとること)

幸い竜 王は空を飛べるのだから、不意打ちにはもってこいだ。

王国が蹂躪され、魔王の機嫌が良くなっているであろう頃合いに、背後からの強襲。竜 王が複数突撃すれば、魔王とやらがどんな力を持っていても手傷を負うに違いない。たとえ物語に出てくる『八欲王』の如き化け物であっても。

「うひゃうひゃうひゃう」

ラナー王女は手駒を誘導して行われる盤上の戦争に、無意識ながら笑っていた。

困難であり、国難ではある。だが勝てない戦争ではない。

王国は滅亡するし、国民や貴族、王族も軒並み屍を晒すだろう。誘い出した竜ドラゴンロード王も、魔王の実力によっては半壊するかもしれない。

魔王が負傷退場した後でも、瓦解した魔王軍の残党が暴れるだろうし、この大陸は死者で溢れかえるはずだ。

「ふふふ、早くラキュースに帰ってきてもらわないと……」

逃げ道を用意し、護衛を確保し、ラナー王女は脱出の計画を練る。もちろんその脱出計画の中には、父親や兄たちの名はない。頭の中だけで創りあげられる計画——その中に記載される名は、自分を除くと一人だけ。

「いひひ、誰にも邪魔はさせない。誰にも」

いつもと違う気配を纏って、ときおり不気味な笑い声を上げながら、評議国への親書を作成する第三王女様。

そんなお姫様の背後では、鎧を纏った若い男が青い顔で佇んでいた。

『国家存亡』の危機を前にして、心を壊してしまったのではないかと、黄金の王女を心配しながら……。



その日、〈飛行〉フライを唱えられる魔法詠唱者マジック・キャスターは総動員され、リ・エスティーゼ王国領内へと放たれた。

各地方都市に戦争が始まる旨——ザナック王子の開戦宣言を伝えるために。

とはいえ、送られた都市は王国内の六割程度だ。他は貴族派閥の反発もあって、ザナック王子の決定に応じなかった。

『王が病床の身であることに乗じて勝手なことを』

『バルブロ王子が戻られてからにするべきでしょう』

『我らの同意なく開戦を宣言するなど』

とまあ、王城の前が血の海になっていることも気にしないで、王派閥を揺さぶるネタが見つかったと騒ぐばかり。肝心のバルブロ王子が死デス・キャバリエの騎兵の後を追いかけたまま帰ってきていない、という現状にも心配の言葉すらない。

恐らく「魔王軍」の話も、エ・ランテルの内乱程度と考えているのだろう。あそこは王の直轄領地なのだから、自分たちが兵を出す必要はないと。王の兵だけで鎮圧するべきだと。

そんな中、悲報は舞い込んだ。

『バルブロ王子の死亡を確認！ 率いていた部隊も全滅！』

『アダマンタイト級冒険者チーム「朱の雫」、王都正門付近にて全員死亡！』

双方ともに、死デス・キャバリエの騎兵へ挑んだ結果なのであろう。王都へ入り込んだ化け物相手に勇ましく戦いを挑み、華々しく散った、というわけだ。

だけどもあ、当デス・キャバリエの死の騎兵は標的を減らしたくないと洩らしていたので、挑まなければ命を落とすこともなかったのだが……。

はつきり言つて無駄死にである。

貴族派閥のボウロロープ候などは、安置所へ運ばれる娘婿のバラバラ死体を前に、血管が破裂しそうなぐらい怒り狂っていた。

「役立たずのお兄様は、死んでからの方が使いモノになりますのね。貴族派閥を戦争に駆り立ててくれるのですから……」

恐らくラキュースの魔法でも復活は難しいと思われる——損壊著しい兄の死体を一瞥し、ラナー王女は出立直前のレエブン候へ微笑む。

「ラナー殿下、そのような物言いはなるべく止めて頂きたい。黄金の名を冠する殿下の正体がソレでは、王国も絶望し、時間を稼ぐことすらできませんよ」

「あら、それは困ります。国民の皆様には、たつぷりと時間をかけて死んでもらわないといけませんものね」

このクズがつ——と言いきうようになる己の感情を押し留め、レエブン候は恭しく頭を下げる。

「では、ラナー殿下。評議国へと行ってまいります。必ずや竜王様の

御助力を得てまいりますので、御期待ください」

「ええ、解っていますよ。早くご家族を呼んで、奥地へ逃げてくださいね。そんな形振り構わぬ大貴族の姿を見たら、ことなかれ主義の竜王様も事態の深刻さを理解するでしょうから」

黄金に輝く天女のような微笑みをもって、ラナー王女はレエブン候を送り出した。

評議国の竜ドラゴンロード王を引きずり出せるかどうか——その確率はかなり微妙だ。

王国でも重要な地位にいるレエブン候が、ザナツク王子の名が入ったラナー王女の親書を持って行ったとしても、竜ドラゴンロード王たちは歯牙にもかけないかもしれない。自身が強者であるからこそ、切迫した事態には鈍感なのだ。目の前に竜狩りドラゴンスレイヤーが現れても、欠伸を抑えきれないだろう。

だからこそ、魔王軍には“力”を期待する。竜ドラゴンが冷や汗を垂らし、命の危険を感じるような“力”を。

一番困るのは、王国がそこそこ戦えてしまう場合だ。

まあ無いとは思いますが、それだと王国は魔王軍と共倒れになって滅亡するだけであり、晒される屍の中には自分も含まれよう。

最悪の展開だ。

「戦争が始まって王国民がどれほど無残に殺されるか……。その惨状を評議員に届け、どれほどの危機感を持ってもらえるか……。王国が肉の盾となっっている状況に活路を見いだしてくるよう、誘導しないといけませんね」

ラナー王女は、人類の切り札たる“朱の雫”が復活可能な状態なのかと議論している神官たちを尻目に、自室へと戻っていった。

大量の死体運搬を手伝っているクライムが早く帰ってこないかなあくと、『大勢の兵士が殺されたことへの悲痛な想い』を堪えているかのような儂き表情のまま。

八日後。

戦争準備の期間としては短過ぎる日数が経過したその日、一万を超える魔王軍は動き出した。

更地となったエ・ランテルを出発し、ゆつくりとり・エステイーゼ王国領土を侵食していく。

先頭は骸骨や動死体、骨のハゲワシ、獣の動死体、死霊などの下位アン・デッドと、地獄の猟犬や朱眼の悪魔、極小悪魔の群集体、魂食の悪魔、鱗の悪魔などの下位悪魔を混成させた、見た目にも醜悪な部隊だ。

まさに魔王軍の先陣に相応しい様相であろう。どこからどう見ても、帝国軍が侵攻してきたとは思うまい。

「進軍速度ヲ落トスヨウ全軍へ通達セヨ。我ラノ目的ハ恐怖ヲ与エルコトナノダ。急イテ相手ヲ滅ボシテモ、得ルモノハ何モ無イ」

「ハッ！ 各部隊長のエルダーリツチへ指示いたします」

下位から上位までの僕が勢ぞろいしての侵略戦争なんて初の経験なので、コキュートスも、その配下たちも気が高ぶって仕方がない。

そもそも、ナザリツクに籠って待ち構えるだけの戦いしか知らないのだ。

常に受け身であり、ここ数年は侵入者と相見えることもなく、先日の法国襲撃や請負人チーム撃退が夢心地にも思えてしまう。

「ダガシカシ……」コキュートスは浮かれ気味の心境を整え、侵略戦争の意味を考える。

(モモンガ様ハ私ニ経験ヲ積マセヨウト、軍ヲ任セテクダサツタニ違イナイ。ナラバソノ御期待ニ沿エルヨウシツカリ学バネバナラン。ソレニ国家ガ侵略サレルトナレバ、表ニ出テイナイ実力者モ動き出スコトダロウ。油断ハ禁物ダ)

スレイン法国でも不意の一撃があった。

友であるデミウルゴスが、油断していないにもかかわらず片腕を潰されたのだ。

ならば王国でも同様の一撃を警戒する必要があるだろう。

今回は法国へ攻め込んだ時のような電撃戦ではない。時間をかけ、広く展開し、一人も逃さず蹂躪せねばならないのだ。

敵からしてみれば、つけ入る隙はいくらでもある状況だろう。

「コキユートス様、小さな村をいくツか発見しタとの報告ガ入りまシタが……」

「ン？ 問題デモ発生シタノカ？」 直立した巨大なクワガタかと思える——黒い光沢を湛える部下の言葉に、コキユートスは気を引き締める。

「イエ、大したことでハないのデすが、村ハほぼ空^{から}でアリ、生きている人間とイエば老人バかりであるとのコトでス」

「ナルホド、老イタ者ヲ置キ去リニシテ、村ヲ捨テタカ」

戦争が始まると聞いて、しかもエ・ランテルがすでに落とされていと知れば、周囲の開拓村は決断を迫られたことだろう。軍隊に襲撃された村々がどのような目に遭うのか、なんて子供でも理解できる。

時間も無かつたはずだ。王都から遠く離れた小さな村に、開戦の報せが来たのは期日の一日前か二日前か……。事前の準備など不可能と言えよう。

だから、動ける者だけで近隣都市へ避難したのだ。持てるだけの物資を、貧弱な荷車に積み上げて。

「皆殺シニセヨ。村ノ隅々マデ搜索シ、隠レ潜ンデイル者ドモヲ殺セ。ダガ、逃ゲル者ヲ追ウ必要ハナイ。ソヤツラニハ、逃ゲ延ビタ先デ広メテモラワネバナラン。我ラ「魔王軍」ガ、貴様ラヲ滅ボシニ来タノダ——トナ」

「ハッ……」

魔王軍はゆっくりと、それでいて確実に侵攻した。

遠くに逃走中の一団がいようと聞せず、アンデッドと悪魔の軍勢を見て泣き叫ぶ幼子にも矢を射ろうとはしなかった。

ただ追い立てて、逃走先の近隣都市へ逃げ込むさまを見届ける。

都市の中は大混乱であろう。

開戦とは聞いていたが、化け物が相手とは知らなかった。帝国が攻め込んできたのではないのか？ あの軍勢は何なんだ?! 俺たちは

——人類はどうなってしまふんだ?!

そんな悲鳴にも似た叫びが聴こえてきそうだ。

第22話 「牧羊魔王」

死者の数が驚くほどに少ない——、随時届けられる前線の情報を分析していたザナツク王子が、疑念と共に感じた感想だ。

あの化け物騎士を先触れとして送り込んできた軍隊である。実際、斥候からの情報では、低位のアンデッドや悪魔らしき異形が群れを成して迫ってきているとのこと。

農村民に毛の生えた程度の民兵では、障害物程度にしかならないはずであろう。

それなのに、

「思っていたより弱い、とかではないのだろうか」

「お兄様、こんな時に冗談はやめてください。死者が少ないのは、魔王軍が王国民を追い立てているからですよ。放牧している羊を集める、牧羊犬であるかのように……」

王城の軍議室で書類の整理や分析を手伝っていたラナーは、「ふう」と一息ついて手元の地図を見る。

「今はこの辺りでしょうか？」駒をいくらか動かし、斥候が集めた情報を元に魔王軍の現在位置を地図に示す。

「エ・ペスペルか……。今頃は避難民が集まって酷い状況なのだろうなあ。そこにアンデッドが迫ってきているともなれば、まともに戦えるかどうか」

ピシヤリ、と額を叩くザナツク王子の心境と同じく、王国は混乱状態だ。

国王が病床に伏しているため求心力は低下し、王派閥の貴族どもは自軍増強に明け暮れ軍議の場にも出てこない。領地へ戻った者もある。言い分としては、化け物の脅威から王国を護るための緊急処置であるとのこと。本音は『魔王軍とやらの脅威度が不明なので様子見させてもらう』であろうが……。

担ぐはずの神輿——であるバルブロ王子の死亡に慌てふためいた貴族派閥は、『敵を討てば手柄になる』とでも考えたのか？ 一目散に

己の領地へ戻ると、手勢を集めて独立した軍を形成。独自に魔王軍へと挑むつもりようだ。

唯一、ボウロロープ候だけが怒りに任せて王国軍を率いてくれたが、エ・ペスペルの救援には間に合わないだろう。

まあ間に合ったとしても犠牲が増えるだけ、とはザナツク王子も口にしなかった。

「妹よ、頼みの評議国からはなんの返事もないぞ。レエブン候は竜王の説得に失敗したのか？」

本来であれば幾人も貴族が立ち並び、熱い議論を交わすであろう軍議室に、ザナツク王子の弱々しい呟きだけが響く。

その言葉を聞き取れるのは、各地の情報運び込み、内容の重要度を整理している文官数名と、腹違いの妹——ラナー王女だけだ。

「お兄様、レエブン候が失敗したのなら諦めもつきましよう。それより今は、好き勝手に動いている大貴族の方々をなんとかしませんと」「無理だ」

ザナツク王子の即答に、ラナー王女は悲しさを湛え、困った表情で軽く微笑む。

もちろん全ては演技なのだろう。ラナーは悲しくもないし、困ってもない。それは王子にも解かっていた。

コイツの興味は、「蒼の薔薇」を呼びに行っているクライムにしかないのだろうと。

「王が正式に後継者指名をしたとしても、対立して内乱になりかねない構造だったんだ。加えて兄上は死ぬし、南からは魔王軍。こんな状況で、貴族どもが俺の言うことを聴くものか。真っ先に逃げ出したレエブン候が答えだろうよ」

「レエブン候は評議国への使者ですわよ。言葉が過ぎます」

「けっ」王子らしくない悪態を試してみても、気分は晴れない。暗雲立ち込める王国の未来は、とても直視出来るものではないのだ。

貴族どもは自己保身に邁進し、統制機関としての機能を失いつつある。国民には死の騎兵デス・キャバリエの宣戦布告が広まっており、懐に余裕がある者ほど国外への退避を検討していた。

しかしそれでも、ボウロロープ候が王国兵数万と共に進軍するさまは、国民にとって心の安定剤となったに違いない。これで救われる、これで大丈夫、王国は安泰だ。たとえ相手が噂の魔王軍であったとしても——と。

（まだ国民は落ち着いている。戦争に慣れていからだろうが、王都まで攻め込まれたことがないのも一因か。それに魔王軍などと言われて誰が信じる？ 俺だって守備兵の死体の山や、『朱の雫』の残骸を直接見ていなければ半信半疑だった。貴族どもが帝国の謀略だと言口にする気持ちも解る。その方が現実的だし、まだ救いがあるよなあ）

「お兄様、手を動かしてください」ぶつぶつと呟くザナック王子の不審なさまを気にもしないで、ラナー王女は必要な書類を作成し、王子の前へ積み上げていく。

これは人と物資の搬送命令書だ。

必要な人員と物資を必要な場所へ。どのように配置したら魔王軍を引き付けられるか？ どこへ物資を集めたら最後まで無残に殺されてくれるのか？ 評議国の竜王たちが動き出すまでの時間を稼ぐには、どう国民の命を使い潰せばいいのか？ そんな分配指示書であった。

故に、いつもの担当文官には任せられず、ラナー王女が無理やり仕事を奪ったわけである。横やりが大好きな貴族は自分たちのことで精一杯なので、邪魔が入ることはない。

「なあ、妹よ。ペスペア候はどうなっていると思う？ 魔王軍なんて信じてなかった彼が、今は異形の化け物どもと対峙しているわけだが……」けだるそうに署名しては印を押し、控えていた文官に持たせては走らせる。そんなザナック王子が決裁した物資輸送の命令書には、たったの一通もエ・ペスペルへの配送指示はなかった。

「もちろん——」軽く頭を上げ、ラナー王女は心の底から信じているとの微笑みで「勝利してくださいますわ」と嘘を吐く。当然ながら、ザナック王子以外には涙を誘うほどに大好評だ。王子のため息も漏れる。

「ああ、もうだめか……。俺の代でどうして——」

「失礼いたしますラナー様！　『蒼の薔薇』の皆様をお連れしました！」

「ラナー！　叔父様が殺されたって本当なの?!　遺体は？　遺体はどこ?!」

王子の愚痴を遮ったのは、ラナー王女付きの兵士『クライム』のしわがれた声と、遙か遠くまで響き渡るかのような美しく力強い、若い女性の緊迫した叫びであった。

「ラキユース、貴女は無事だったのですね。何かあったのでは、と心配しました」

「そんなことより、ラナー！」

「ええ、『朱の雫』の方々は、地下の安置所です。一緒に行きましょう」

気怠そうに『あっちいけ』と手を振る第二王子へ軽く頭を下げ立てち上がり、クライムへ視線だけで『会いたくてたまりませんでしたよ』と伝えると、ラナー王女はラキユースに寄り添いながら会議室の外へと身を進めた。

部屋の外では完全武装の『蒼の薔薇』四人がリーダーを待っており、『聴きたいことが山ほどある』との表情で不穏な空気を纏っていた。

「おいおい、マジなのかよ。あの人がやられたってか?」

「信じられない。どんな化け物を相手にしたら『朱の雫』が全滅する?」

「同意。引き際も弁えているベテラン。ありえない」

「今はそんなことを考えても仕方がないぞ。急いでラキユースの〈死者復活〉で蘇生させないと」

一同は、仮面の子供『イビルアイ』の言葉に頷くと、静かに城の地下へと向かう。

そこには顔を青くした幾人もの兵士が警備をしており、突然現れたラナー王女と『蒼の薔薇』一行に戸惑い気味であった。

「ラナー、遺体の安置室にしては警備が嚴重だけど……。叔父様たち

魔法具マジック・アイテムがそのままになっているからかしら?」

落ち着きを取り戻したラキユースの問いに、ラナーは深い悲しみをこらえている体ていで言葉を零す。

「そうね、それもあるけど、本当の目的は情報よ。『朱の雫』に加えてバルブロお兄様まで殺されたなんて、国民には知られるわけにはいかないわ。まあでも、噂は止められないけどね」

「第一王子もかよー! いったいどうなってるんだよ!」

知られてはいけないと言っているのに、『蒼の薔薇』の巨漢戦士『ガガーラン』の大声には、流石のラナーも困ったように微笑むしかない。

「この脳筋! 静かにしろ! お前のデカイ声でそこら中に広まるだろうがっ」

「イビルアイも無茶を言う。筋肉だけのガガーランに静かになんてっ」

「ははは、ないすじょーく、イビルアイ」

筋肉戦士に突つかかる仮面の子供を左右から抱き締めるのは、同一人物の色違いかと思えるほどそっくりの双子忍者姉妹『ティナ』と『ティア』だ。

その抑揚のない口調で騒いでいることからすると、湿っぽい場の空気を盛り上げようとしているのか? それともリーダーたるラキユースの気持ちを軽くさせようとしていたのか? 今のところは判断しかねる。

「バルブロ王子までとなると、蘇生はまず王子から行う必要があるわね。ラナー、触媒の用意は?」

「大丈夫ですよ。お兄様が十分な量の黄金を運んでくださいましたわ。……でもねラキユース、よく見てほしいの。遺体の状況を」

死の匂いが立ち込める安置室へ平然と足を踏み入れるラナー王女は、第一王子にかけられた腐敗を防ぐ布状の魔法具マジック・アイテムを掴み、一気にめくり上げる。

「うっ、これ……は」

「ええ、頭部が半分で、右腕と右足、胴が三分の二程度かしら? それ

に微かだけど、呪いのようなモノが纏わりついていると、神官様が検分のときに話しておられました」

死体に慣れているラキユースでも口を押さえなくなるほどの損壊した遺体は、ラナー王女が仄めかさなくとも真実を語ってくれる。

蘇生魔法は効果を発揮しないだろうと。

「ちよ、ちよっと待って！ それなら叔父様は——」

「残念だけど、『朱の雫』の皆様は同じような、見るに堪えない状態です。でもまだ蘇生魔法が効かないと決まったわけではないわ。そうでしょ？ ラキユース」

「そ、そうね。やれるだけのことはやっておかないと」

「しかし未だに信じられねえぜ。どうやったら、最高位の魔法具マジック・アイテムで全身を固めている戦士をバラバラにできるんだ？ 魔法だつて軽減させる国宝越えの鎧だぞ」

「うくん、魔法ではなく剣だと思おう」

「たぶんそう、しかも一撃？」

顔見知りの無残な遺体に気分は落ち込むものの、アダマンタイト級冒険者としては未知の敵に関する情報入手せねばならない。

被害遺体がリーダーの叔父であっても、遠慮している場合ではないのだ。

「聞いた話では」仮面を付けた小柄な魔法詠唱者マジック・キャスターは、ここへ来るまでに集めていた噂話を口にする。「黒い馬に乗った黒い騎士で、アンデッドの可能性もあるらしいな。たった一騎で王城前まで乗り込んで、宣言を布告していったと……。それがなんと、魔王軍だつて？」

冗談だと言いたいのか？ 呆れているのか？ 諦め気味なのか？

仮面の奥でどんな表情を見せているのか判らないイビルアイに、周囲は困ったようにため息を漏らす。

「イビルアイ様、はつきり申し上げます」普段からおつとりとしている——とは思えぬ覇気をもって、ラナー王女は場を支配する。

「『蒼の薔薇』の皆様は王国から脱出してください。人類の切り札であるあなた方を、ここで失う訳にはいきません。評議国、または聖王国へ落ちのびて、他の弱き人々を救ってください」

アダマンタイト級は最後の希望だ。

すでに「朱の雫」が殺されてしまった現状においては、焼けた石に水をかけるようなものと言われるかもしれないが、イビルアイを擁する「蒼の薔薇」は魔神をも退けた十三英雄に匹敵する最強チームなのである。

王国の滅亡に巻き込むのは、人類の損失と言えよう。

「ふざけないで！」ラキユースは吠える。親友の潤んだ瞳を見つめて。「あなたを見捨てて逃げろって言うの？ 王国の人々が魔王軍とやらに蹂躪されているのを横目で見ながら？ 冗談じゃないわ！ 私はこの国の貴族でもあるのよ！ 国民を守る義務があるわ！」

冒険者として飛び回っているから忘れそうになるが、ラキユースは貴族である。とはいえ、何年も前に家を飛び出しているのだから、今さら貴族の義務を前面に掲げるのもどうなのかと言わざるを得ない。「ちよつと待てよりーダー。アズスさんが殺されて戸惑うのは解るが、魔王軍とやらに勝てないって前提は違うだろ？ 王国には十万を超える兵がいるんだぞ。そう簡単に——」

「ほとんど民兵」「有象無象」

「ちやかすなよ、ティア、ティナ」

数は暴力である。ガガーランの言葉にも一理あろう。周辺諸国でも数十万もの軍勢を用意できる国家は希少なのだ。

ただ、双子忍者姉妹の言も^{げん}真実である。

農村民を武装させただけの民兵が役に立つのかどうか？ その答えは王女様が教えてくれる。

「いえ、王国は負けます。それも敗戦ではなく、滅亡です。王国民は一人も残さず、殺されることでしょう。私も例外ではありません」

「……王女にはそう断言するだけの根拠がある、ということか？」

静かに問い掛けるイビルアイを真つ直ぐに見つめ、ラナー王女は語る。

「はい。先触れの黒い騎士、確認されたエ・ランテルの壊滅、そしてア宁德ッドや悪魔で構成された魔王軍のゆつくりとした動き。その全てが王国民を根絶やしにするという意思に満ち溢れています。ちな

みに、エ・ランテルは街そのものが崩壊しており、住民に生き残りは
いかなかったそうです」

エ・ランテルへは〈飛行〉フライを行使できる魔法詠唱者が飛んでいき、上
空から恐るべき光景を目撃してきた。

微かに残る城壁の残骸に、固まった泥のような「何か」に覆われた
かつての城塞都市。

人間は一人もおらず、代わりに骸骨スケルトンや動死体ゾンビ、異形の悪魔が整列し
ていた。

魔法詠唱者マジック・キャスターは、翼を持つ悪魔数体に見つかり、死を覚悟したそう
だ。ところが大した怪我もなく、重要な情報をザナック王子やラナー王女
の元まで運ぶことに見事成功し、貴重である当時の恐怖をありのまま
に語ったそう。

そう、つまり見逃されたのである。

部屋の奥で蹲り、ガタガタと死の恐怖に震え、涙ながらに命乞いを
しながら、絶望にまみれてゆっくりと死ね——とのメッセージと共
に。

「エ・ランテルが壊滅ですって!? 生き残りもない? 一人も?!」

幾人かの知り合いを思いだし、ラキユースは微かにふらつく。傍に
ティアが寄って身体を支えるものの、握った左腕からは弱々しい震え
ばかりが伝わってくる。

「あれほどの都市を壊滅させる魔王軍か。これはもう、人の領域では
ないな。ラキユース、ガガーラン、ティア、ティナ。お前たちは王女
を連れて北へ避難しろ。もしものときは評議国へ逃げ込め」

「な、なにを言っているのイビルアイ?!」

「人間の手には負えないと言っているんだ。私はこれから、リグ
リット経由で十三英雄の仲間たちを集める。どれだけ集まるかは分
からんが、まあツアーが居ればなんとかなるだろ」

アダマンタイト級冒険者のイビルアイは、『チームはここで解散だ』
と言わんばかりに仲間から数歩離れると、仮面を外し十三英雄「国墮
とし」ヴァンパイアとしての姿を見せた。

幼い少女の口元から零れる吸血鬼の牙。

利発そうな大きい瞳が、人外の証とばかりに赤く輝く。

「今まで世話になったな。後は頼んだぞ」

「おいこら、勝手に話を進めんじやねえよ！俺も行くぞ！相手が化けもんなら冒険者の出番だろうがつー！」

早足でイビルアイの進路を遮り、声を上げて詰め寄るガガーラン。

「そうそう、私たちは人類の希望。ここで戦わないでどうする？」

「うんうん、小さい子を見捨てて逃げられるわけがない。ねえ、おチビ」

小柄な身体を両側から挟み込み、忍者姉妹はぶらりと下げられた仮面があるべき場所へと戻す。

「イビルアイ、抜け駆けなんて許さないわよ。『蒼の薔薇』はチームとして、王国のために魔王軍と戦う。これはリーダー命令よ！」

身内の死——という衝撃を呑み込み、ラクユースは顔を上げる。その毅然とした美しい瞳には、『仲間を護りたい』という引けない理由を持っているイビルアイも反論しにくい。

似ているのだ。

遠い昔、命を懸けて魔神と戦い、そして散っていった英雄たちの瞳に。

「くそつ、だけど、なあラクユース。王国が魔王軍と戦ったとして、その後の復興に王女の知恵は必須だぞ。死なせるわけにはいかない。国民の希望でもあるんだ。でも、私たち以外の誰が王女を避難させられる？ クライムでは無理だ」

イビルアイの苦悩に、遺体安置室の入口で邪魔にならないよう警護していたクライムは俯くしかない。

確かにその通りなのであろう。

死闘の果てに魔王軍を撃破したとしても、国を立て直せないのであれば滅亡と同じことだ。そして国家と国民を癒すことが可能な人物は、ラナー王女を置いて他にはいない。

だからこそ、一番安全な場所へ避難してもらわねばならないのだが……。

金級冒険者程度の実力しかないクライムには荷が重すぎる。

魔王軍とやらの追手も加味するのであれば、姫様専属従者ごときがいくら奮闘しようとも安心できるものではない。

「あ、あの……」厳しい空気の中に、可愛らしいお姫様の遠慮がちな声が響く。

「私のことを気に掛けて頂けるのは感謝いたしますが、まずはイビルアイ様のおっしゃった、リグリット様、ですか？ 元アダマンタイト級冒険者の方だったと思いますが、その御方に連絡を取った方がよろしいのではありませんか？ あ、あと、ツアー様という方にも」

最高位冒険者の討論に囲まれて緊張してしまったのか？ ラナー王女は微かに震える控えめな口調で自身の避難を一時棚上げし、先程イビルアイが口にした方針の背中を押す。

十三英雄の仲間というのだから、それなりの強者であるのだろう。イビルアイを基準に考えれば、期待できそうな話だ。

だからラナー王女は自分と犬のために、新たな手駒を期待する。

「ああ、確かにそうだな。どう転んでもアイツらの手は必要だ。急いで連絡——分かった、大丈夫だつて！ お前たちを置いて行ったりはしない。約束する。だから掴むな！ ティア、ティナ」

「分かればよろしい」

「もう、手が焼けて困る」

我儘な妹の世話に苦勞しているかのように、忍者姉妹はやれやれと両手を上げる。

そんな双子の束縛から逃れたイビルアイは、仮面に隠れて見えないが——ちよつと嬉しそうに口角を上げつつ、^{メッセージ}〈伝言〉を使うために外へと向かった。

地下などの密閉された空間では、^{メッセージ}〈伝言〉の魔法効果が阻害されるからだ。元アダマンタイト級冒険者で十三英雄の一人でもあるリグリットは、定住しているわけではないので、王都からどれ程離れた場所にいるか不明である。故に^{メッセージ}〈伝言〉が届くかどうかも分からない。だからこそ、効果を低減させる要素は少しでも排除しておきたいのだ。

「頼むぞリグリット、近くにいてくれよ！ 最悪の場合は、私とツアー

を含めた三人で敵の総大将を討ち取る必要があるんだからな！ 魔神を討伐したあの時のように！」

王国が危機的状况なのは明白だ。

「朱の雫」が全滅し、戦力的な低下は誰の目にも明らかだろう。各地の冒険者が参戦したとしても、どこまで抵抗できるか。

魔王軍は宣戦を布告してきた黒い騎士に加え、アンデッドや悪魔で溢れかえっているという。ラナー王女が集めた情報では、総数一万程度とのことらしいが……。足並みのそろっていない王国には、それでも過剰かもしれない。

今頃はエ・ペスペルで籠城戦が始まっている頃だろう。

あの都市には準備期間が短かったとはいえ、万に近い軍勢が集まっていたはずだ。ならば、王都から出陣したボウロロープ候が到着するまで持ちこたえられる可能性はある。

「まだまだ、まだ希望はある！」仮面の子供は早足で階段を駆け上がり、そのまま中庭まで飛び出では、^{メッセージ}〈伝言〉を発動させる。

「リグリット！ おい、ババア！ 返事をしろ！ 王国が大変なんだ！ お前も戦争の噂ぐらい聞いているだろ!? 人類の危機だぞ!!」

――。

美しい花々が咲き誇る王城の中庭で、子供か老人なのか判りにくい――手が加えられているような声を張り上げる小柄な魔法詠唱者^{マジック・キャスター}。

その者の問い掛けには、そよぐ風と揺れる花々、そして静寂だけが応じるばかり。

繋がりは感じる。

砂漠に落ちた砂粒を拾うような感覚ではあるが、切れているわけではない。

「お、おい、どうしたんだリグリット？」

遠すぎて伝わらない――のであれば、まだ声に力を乗せられただろう。

でも違う、なにか違う。

よからぬ不安が、イビルアイの小柄な身体を満たしていく。

「くそっ！……、ツアー！ 助けてくれ！ どこにいるんだ?! 聞こえてないのか?!」

問いながらも返事がないことは解っていた。

ツアーと直接連絡を取ることはできない。そもそも外界から隔絶された、地の底にあるという拠点に引き籠っている竜王様だ。巨大な竜体を拜んだことはあるが、〈伝言^{メッセージ}〉の魔法で連絡を取った実績はない

ただ当の白金^{プラチナム・ドラゴンロード}の竜王は、使役鎧の運用で外の情報には聴いらしい。でもそれなら目の前に現れてくれてもいいだろうに、と言いたくなる。魔王軍とやらが人類国家に襲い掛かっているのだから。

「リグリット、ツアー、……どうして、どうして答えてくれないんだっ」

仮面の子供の泣きそうな悲鳴が響く。

だがやはり、誰からも応答はなかった。

第23話 「遠足魔王」

「ほう、これが噂の十三英雄か？ 老婆の記憶では二百五十年ほど前から存在しているヴァンパイアで、アンデッドの気配を魔法マジック・アイテム具で誤魔化しながら、人として冒険者をしているとのことだが……」

執務室のソファアーに腰を落とす魔王のごとき骸骨の前には、魔法の鏡が浮かんでいた。

鏡の中では、仮面の子供が喉を引き裂かんばかりに助けを求めており——その悲痛な叫びを耳にしてみようと、魔王の後方に控えていたセバスなども、『手を差し伸べたい』という想いに引つ張られそうになつていたのではないだろうか？

でもまあ、魔王の隣に侍つていた真トウルーヴァンパイア 祖からすると、別の意味で手を伸ばしたくなつていたのかもしれないが。

「わらわとは別タイプのヴァンパイアでありんすねえ。モモンガ様、捕らえてくるのでありんしたら即座に」

「いや、王国の戦力を横取りしたらコキユートスに悪かろう。たいした敵ではないとはいえ、これ以上弱くなつてもらつては困る」

魔王は王国の各地を覗き見ながら、コキユートスが楽しめるかどうかの分析を行つていた。

アルベドやデミウルゴスが推薦していた知恵者のもとより、王族や大貴族たち、軍を束ねる将軍や近衛兵、そして冒険者の実力などを。

「それにしても評議国の竜王を引つ張り出そうとは、思い切つた行動に出たものだ。自国民を囿や盾とし、魔王軍を分散させて、背後を竜王に強襲させる。うんうん、これならコキユートスも楽しめただろう……が」

方向性は悪くない、とモモンガは判断していた。

魔王軍の強さを常識外と予想し、それを打ち砕くには竜王を置いて他にはない、と決断した頭脳には喝采したくなる。この調子であれば、竜王を扇動して引つ張り出すことにも十分勝算があつたのではないだろうか？

だがしかし——。

そう、『だが』なのだ。

知恵者たる王女は知らない。

現在評議国が、最強たる真の王——ブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王こと「ツアインドルクスⅡヴァイシオン」を欠いているということに。

「ツアーが居れば面白くなっただろうが、それはそれで容易く扇動されたりはしまい。別のやり方で魔王軍との戦争に手を貸す程度か？

まあ、居ないモノはしようがない」

「ツアーとはあのドラゴンでありんすか？ なにか御身の邪魔となるようでありんしたら御命令を。わたしが滅ぼしんす」

あまり話の内容を理解していないシャルティアは、ふと耳にしたことのある名を捕らえて過去の決戦を思い出す。

結果として、相手の降伏で終わってしまった不完全燃焼の戦いだ。

次の機会があるならば、文字通り一番槍として突っ込みたい。幸いにして、大口ゴリラは不在なのだ。おねだりするなら今がチャンスであろう。

「ははは、ツアーと戦うのはまだ先の話だろうが、油断は禁物だぞ。あやつは超位魔法に勝るとも劣らない、ワイルド・マジック「始原の魔法」の使い手だ。それに戦闘経験も豊富。老婆の記憶では、「魔神」と呼ばれるNPCと何年にも渡って戦っていたらしいぞ。プレイヤーと共闘もしていたそうだし、この世界における最強の存在であろうな」

「モモンガ様にそこまで言わすんとは……。羨ましいドラゴンでありんすなあ。殺す日が楽しみでありんす」

「嫉妬」という名の殺す理由をシャルティアが保持したことは、ツアーにとって不幸かもしれないが、それはそれ。

仲間探しに勤しんでいる勇者のことは、王国に無関係だ。

今は、ツアー不在で混乱している評議国が動きそうにないという事実、ラナー王女の思惑通りに竜王たちが戦争へ赴かない、という悲しい現実が問題であろう。

「手を貸してやるか……」魔王は骨の指をパチリと鳴らし、コキユートスへのプレゼントを用意しようと動き出す。

「セバス、第六階層で戦闘訓練をしているパンドラを呼びだせ。ああ、アルベドは呼ばなくてよい。そのままドリームチームの訓練を続けさせよ」

「はっ、かしこまりました、モモンガ様」

自分で〈メッセージ伝言〉を使えば早いのだろうが、平時においては配下の呼び出しなどを魔王自身が行うものではない。魔王が直接声をかけるのは、戦闘時か緊急時ぐらいであろう。

遠い昔、〃悟〃のヤツがそんなことを言っていたような気がする。

「モ、モモンガ様、あの宝物殿守護者に、な、何を御命じになるのでありんすか？ 御傍には守護者最強、シャルティア・ブラッドフォールンが控えておりんすが」

大魔王にピタリとくつつくヴァンパイア吸血鬼の言いたいことは、なんとなく解る。

目の前に守護者が居るのに別の守護者を呼び出すなんて、シャルティアには仕事を任せられないと言っているようなものなのだ。

アルベド不在の時間にモモンガ様を独占していた優越感が、跡形もなく吹き飛んでしまう。

「パンドラには評議国の竜王を戦争に駆り立てるよう謀らせるつもりだ。王女の迷惑通りにな。それとシャルティアは私の護衛なのだから、どこかへ行ってもらっては私が困る」

「ああ、モモンガさまあ」

小さな身体をすりすりとして擦りつけ、シャルティアはこの後に待っている御褒美を幻視する。恐らく、執務室の奥にある寝室へと連れ込まれるのであろう。そこで幾日もの間、まぐわうのだ。

「ふひ、ふひひひひ」

この時を待っていた。

ずう／＼と待っていたのだ。

アルベドに一步先を越されているのではないかと焦りながら、それでもチャンスはあると自分に言い聞かせ、ひたすら牙を研いでいたのである。

「ああ、わたしは今日、初めてを捧げるのでありんすね」

「——というわけだ、パンドラ。頼んだぞ」

「はっ、お任せください、モオモオンガツ様！」

吸血鬼ヴァンパイアがトリップしていた横では、いつの間にかパンドラがモモンガ様と対面しており、いつの間にもやら打ち合わせが終わっていた。

当然セバスも戻ってきており、涎を垂らしている吸血鬼ヴァンパイアへ厳しい視線を送ったりしていたのだが……。当の夢見がちなアンデッド少女は、自分が作り出した甘美な世界に入り浸るばかりであったそうな。

「さて、評議国はパンドラに任せるとして——。シャルティア」

「は、はひい、モモンガさまあ」

「私たちは『遠足』にいくぞ」

「……え？」一瞬そんなプレイがあったかしら？　と思うものの、造物主から授けられた知識を押し広げても、そんなマニアックすぎるプレイ内容を見つけることはできなかった。

「モ、モモンガ様？　あの、『えんそく』とは、どのようなプレイでありんでしょうか？」

「ぶれい？　え〜つとそうだな、散歩の延長版みたいなものか？　悟の知識では、徒歩で遠くまで赴き、景色などを楽しむ娯楽らしいのだが……。まあ、リアルでは実現不可能であったそうさ。だから悟に代わって、私がこの世界で体験してやろうかと思ってな」

前回、闇妖精ダークエルフの双子と足を運んだ街散歩は、思っていた以上に有意義であった。

のんびり人間の街中を歩きながら気ままに殺戮したり、適当に虐殺して召喚実験を行ったり——それはいつもの蹂躪とは少し異なる、剣を持たぬ人間のあつけない死に様を見物できる稀有な機会。

「世界を滅ぼすにしても、楽しまなくてはな」

魔王としての立場を離れ、配下の者たちと気安く言葉を交わし、見知らぬ土地を散策する。

言葉で表すならば、大魔王のプライベートとでも言うのだろうか？

中々御目にかかれぬ、極めて珍しいレイイベントであろう。

「『悟』とはリアルでの協力者と聞きおよびんすが、モモンガ様と親しき仲であったように感じられんす。少し羨ましく思いんすえ」

「うん？ 親しい仲であつたかどうかは疑問の残るところだな。まあ、もう二度と会うことはないのだから、シャルティアが気にするような存在ではない」

モモンガは軽く己の半身を投げ捨てると、「では遠足の準備を行うとしよう」とシャルティアの頭を撫でながら動き出す。

向かう先は第六階層だ。

そこには周囲索敵の任務を一段落させたアウラやマーレに加え、チームの連携を確認しているアルベドもいるので、シャルティアとセバス、それに戦闘メイトブレイアデスを引き連れていけば、関係者が全員揃う。

「モモンガさまー！ あたしが守護する第六階層へ、ようそこー！」

「お、お姉ちゃん、待ってよ〜」

「このおお、モモンガ様を最初に御迎えするのは統括の私でしょ?!」
なに抜け駆けしてんのよアウラア！」

モモンガが階層に入った瞬間、ナザリックの僕しもべらは即座に察知できる。しかし、そこからは各自の能力次第だ。

素早さに優れるアウラは、他二人の守護者を置き去りにしていち早く魔王の前へ跪く。

最も近くにいたマーレは、読書を中断し、短いスカートを押さえながらパタパタと走る。

御世辞にも俊敏とは言えないアルベドは、残念な形相でマーレを追い抜きながら、アウラに掴みかからんばかりの勢いで魔王の前へと滑り込んでいた。

「騒がしいでありんすなあ。モモンガ様、こんな野蛮な大口ゴリラは捨て置いて、わたしとだけで遠足に赴くべきかと思ひんすが？」

「あつ？ ドリームチームの初任務はヤツメウナギ討伐にしてやろうかしら——つて遠足？ なんのこと？」

いつもの睨み合いかと思いきや、聞き慣れない単語を耳にしたアルベドは、キョトンとした表情でいやらしい笑みを浮かべている吸血鬼ヴァンパイアを見つめる。

「教えてあげてもかまいませんが……」どうしようかなあ〜と上から

目線で意地悪をしかけるシャルティアに、アルベドの堪忍袋は破裂寸前だ。

大魔王としても、ため息交じりに口を挟むしかない。

「落ち着くのだアルベド。ふむ、そうだな、アウラやマーレと行った散歩みたいなものだ。違いは少し遠出になるくらいだろう」

「遠出の散歩、でございませうか？　でしたら」

「ああ、今回は前の留守番組、アルベドにシャルティア、セバスと……、ブレアデスからも何人か連れて行くでしょう」

モモンガからの御指名に、統括はもちろん、セバスや戦闘メイド^{ブレアデス}からも喜色の気配が伝わってくる。ただ闇妖精^{ダークエルフ}の双子は「お留守番かあ」と残念そうであり、戦闘メイド^{ブレアデス}からは『誰が同行できるのか？』と喜びながらも周囲を伺うような視線が漏れ出していた。

「モモンガ様」自身の感情をかみ殺し、静かに声を上げたのはセバスだ。その無感情な口調からは、配下の戦闘メイド^{ブレアデス}たちが浮ついているのを諷めたかった、という想いが透けて見える。

「ブレアデスからはルプスレギナ、ソリュシヤン、エントマが宜しいかと愚考するところであります」上司の宣告に、メイドたちはピキリと張り詰めた空気を纏う。

「そうだな、後の者はまたの機会にしよう。では、アルベド」
「はっ」

跪く守護者統括を前に、バサリと豪華なマントを翻し、大魔王は宣言する。

「ガルガンチュアを起こせ！　ヴィクタイムも連れてこい！　バハルス帝国の帝都まで、みんなでのんびり遠足としゃれこむぞ！」

遠足が——始まる。



世界の傾きを感じていた。

人類の悲鳴が聞こえたような気がしていた。

大窓から見える晴れやかな青空には不穏な影などまったく見えな

いの、人知の及ばぬ「何か」が潜んでいるような疑念ばかりが募る。

恐ろしいのだ。

怖いのだ。

ゆつくりと蝕まれているようで、気が狂いそうなのだ。

バハルス帝国の皇帝「ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクス」は、己の執務室に運び込まれる各地の情報を前に、胃のむかつきを我慢できそうになかった。またぶちまけてしまいたいそうだ。

『カツツエ平野に展開していた二万。王冠を被ったエルダーリツチが率いるアンデッド部隊から襲撃を受け、死者多数』

『現在は平野から撤退。アンデッドの追撃を警戒中です』

『アンデッド部隊内に死の騎士を複数確認。危険度は国家滅亡級！』

『スレイン法国からの帰還者はゼロ。行方も辿れません』

『遺跡に入り込ませた請負人チームも同じです。キャンプ地防衛の冒険者チームですら、跡形もなく消え去っております』

『法国、遺跡ともに成果無し。これは間違いなく、大規模な隠蔽工作によるものかと』

『エ・ランテル消滅！ 繰り返します、エ・ランテル消滅！』

『住民の生き残りは発見できず。それどころか、人が住んでいたであろう家屋の痕跡すら皆無です！』

『エ・ランテルにアンデッド及び悪魔の部隊を確認！ 規則正しい整列の様子から、指揮官がいるものと思われまます』

やめてくれ、もう、やめてくれ。

頭を掻き毟りながら叫びたくとも、そのような醜態は許されぬ。

ジルクニフは帝国の皇帝なのだ。

その肩には、帝国民数百万の命を護るといふ責任が押し掛かっている。

「国家の非常事態を宣言する」皇帝は力強くも静かに、国家存亡の危機であることを明言すると「全軍はカーベイン將軍の軍と合流。カツツエ平野とエ・ランテルの化け物が帝国へ進軍した場合は、その侵攻を止めるのだ」

止められない——と解つていても、ジルクニフは命令するしかない。

魔法省の地下に捕縛されているという伝説のアンデッド、死の騎士デス・ナイトが複数居るのであれば、専門の騎士として狩られる側の獲物に過ぎないだろう。

だからこそ、切り札も切るしかない。

「フルーダは魔法詠唱者部隊を率いる。前線へ赴き、強力な化け物どもを優先的に駆逐するのだ。使えるモノはなんでも使え。学生でも第一位階が使えるのであれば、強制的にでも連れて行け」

「はっ、かしこまりました、陛下」

皇帝よりも余裕をもって、老齢の首席宮廷魔法使いは動き出す。

この程度の窮地など経験済みである——と語っているのかのようなフルーダの鋭き瞳に、ジルクニフは少しだけ気を持ち直していた。

「後は冒険者と請負人ワーカーどもだ。帝国からの強制任務として、各都市の防衛を担ってもらおう。拒否する者はその時点で犯罪者だ。殺して構わん。逃げたとしても賞金首とする。さあ、即座に帝国全土へ布告せよ」

戦争に参加はしない、それが冒険者の決め事である。とはいえ、相手がアンデッドや悪魔などの人外であれば無理やりにも働いてもらおう。依頼の選り好みなど、知ったことではない。

当然、反発はあるだろうが、帝国が生き残った後でならいくらでも聞いて——

「へ、陛下！」

「くっ、今度はなんだ?！」

情報官がひっきりなしに出入りしている開けっ放しの扉から顔を覗かせたのは、秘書官のロウネ・ヴァミリネンだ。

派遣部隊の人員と物資に関する手配指示を命じていたはずだが、仕事を終えて戻ってきたような顔色ではない。

「ゴーレムです！ 先発していた部隊の魔法詠唱者マジック・キャスターが、巨大なゴーレムを視認したと伝言メッセージを送ってきました！ 村や町を踏み潰しながら

ら、真つ直ぐ帝都へ向かっているとのことですよ！」

「ゴーレムだと？ くそつ、こんなときこそ〈伝言〉^{メッセージ}は虚偽だと断ずべきなのに、真実としか思えんぞ！」〈伝言〉^{メッセージ}の信用性へ皮肉を言いつつ、ジルクニフは広げられた巨大な地図を睨む。

「ロウネ、ゴーレムの位置は分かるか？ どこだよ！」

「はっ、先発隊の報告では、エ・ランテルから帝都へ向けて馬で半日程の平原であると」

「なっ、いや、まてまて！」受け取った情報のままに、騎馬を模した駒を地図上へ置いてみると、おかしなことに気付く。

「カーベイン将軍が展開していたエ・ランテル側の軍はどうしたのだ？ 通り過ぎているぞ!？」

カツツエ平野と同様、エ・ランテル側にも軍を展開し、警戒するよう命じていたはずだ。王国を刺激しないよう演習程度の配備であつたとはいえ、巨大な動像^{ゴーレム}を素通りさせるとは思えない。

『カーベイン将軍からの報告は、カツツエ平野撤退を最後に途絶えております。こちらからの呼びかけにも応じません』

情報官からもたらされる情報には、嫌な予感だけが募る。〈伝言〉^{メッセージ}の魔法は距離や環境の影響で不通になりやすい——とは理解していても、現状では不穏な外的要因で繋がらないのだろうと思つてしまふ。

「陛下、ゴーレムを発見した先発隊は、そもそもカーベイン将軍と連絡を取るための要員だったので。それが将軍と接触する前に、化け物と出遭つてしまいました。つまり……」

「なんとということだ。軍隊でも対処できるのか」潰されたか蹴散らされたか、それは分からないが、秘書官の言葉にジルクニフは項垂れる。

「ロウネ、ゴーレムの情報をよこせ。ああ、〈伝言〉^{メッセージ}の内容で構わん。確認なら後でいくらでも出来るだろうさ」

「かしこまりました。では——」

秘書官ロウネが語る、先発隊からもたらされた動像^{ゴーレム}の情報とは、

全長三十メートルの人型。

岩のような外観。

胸のあたりに脈動する赤い輝き。

ゆつくりとした歩みで、帝都へ直進。

複数の村や町が踏み潰されている模様。

幸い動像が目立ち過ぎるので、住民の避難は順調。

なお、目的は不明。

「魔神……か」想像を超える動像の巨大さに、皇帝は二百年前の御伽噺を思い出す。

山を越える巨体の化け物、街を埋め尽くす蟲の化け物、空を覆う翼を持った化け物、人を喰らう竜の如き化け物。

物語であるからこそ少し過剰に表現しているのだろうが、魔神と呼ばれる化け物たちの存在は歴史上の真実である。十三英雄と呼ばれる人類の救世主に滅ぼされるまでは、確かに世界中で暴れていたのだ。

「英雄どもが取りこぼしたというのか？ 二百年もの歳月を経て、やりにもよって帝国に現れるとはっ」

どうせならスレイン法国へ行けよ、と愚痴を吐きたくなるものの、引き当ててしまったものはしょうがない。やるしかないのだ。

「帝都に直進しているのであれば好都合だ。迎え撃つぞ！ 帝都郊外に攻城兵器を展開！ フールーダを呼び戻せ！ 工作兵は進路上の足場を緩ませて、歩行困難な泥濘を作り出さすのだ！」

「はっ、直ちに！」

動像の足を沈ませて動きを止め、攻城兵器により遠距離攻撃。事前に泥濘までの正確な距離を測っておけば、命中率も格段に上がるだろう。それで動像が膝でも付けばこつちのものだ。

魔法付与の破城槌を接敵させ、足を砕いてやろう。

魔法させた戦鎚を揃え、全身を少しづつ削ってやろう。

帝国に狙いを定めたことを後悔させてやる。

「くくく、全長三十メートルものゴーレムなら、得られる素材も尋常ではあるまい。それを使って対アンデッド用のゴーレムを大量に作ってやる。カツツエ平野やエ・ランテルで何があったかは知らんが、人類を舐めるのもいい加減にしておけよ。ここから——反撃開始だ！」

光明が見えてきた、とばかりにジルクニフは吠える。

そんな皇帝の雄々しき姿に、周囲の家臣たちは「流石は皇帝陛下」と安堵の息を漏らす。先程までの絶体絶命を思わせる顔色はどこへやら、背後に控えていた帝国四騎士も『己が新たな十三英雄になる』とばかりに意気軒昂であった。もちろん一人は除くが……。

「対ゴーレム戦の指揮は私が執る！ 皆行くぞ！」

「はっ!!」

人類史上でも最上位となろう優れた支配者に、実力主義で集められた有能な部下たち。

おそらく純粋な人間だけの国家としては、これ以上の品質は望めないに違いない。別の世界から押しつけてきた理不尽な力だけの存在——に建国された法国よりは様々な面で劣るかもしれないが、「血の覚醒」や「神器」に頼らない努力の国家としては、大絶賛されてしかるべきであろう。

ただ、そんな努力も純粋さも、大魔王の前では無意味だ。

羽虫の偉業など知ったことか。

虫けらは踏み潰されて地面のシミとなればよい。

そう、ゴミ虫など一足だ。ひとあし

何気なく踏み出した軽い一步に潰されて、醜い中身をぶちまけよ。

ガルガンチュアの——お通りだ。

第24話 「景観魔王」

ナザリック地下大墳墓第四階層守護者、《ガルガンチュア》。自立意思を持たない動像ゴレムにして、拠点防衛には用いることのできない攻城戦専用兵器。

心臓部には世界級アイテムワールドアイテム《熱素石カロリックストーン》が設置されており、個体の戦闘能力としてはユグドラシルの上位レイドボスに匹敵する。

ただ、元世界級エネミーである《ルベド》とイイ勝負をする能力も、誰かの指示がなければ揮えない。

臨機応変の対応など夢のまた夢だ。

ユグドラシル時代なら、物語に登場するようなきこちない動きを踏襲している《動像用AI》という産廃もあつたのだが、この異世界では完全命令受諾式であり、誰かの指示通りに動くだけだ。迎撃機能も、あらかじめ決められた通りに動くだけの中途半端なものとなる。もつとも、拠点防衛には使用できないのだが……。

そんなガルガンチュアは今、風を切って緑の大地を歩いている。

雲の少ない晴れやかな青空。

太陽はちょうど真上まできている。

動像ゴレムに心があるのであれば、両手を上げ、背筋を伸ばし、「んんん」と妙な声を漏らしながら運動不足の身体を弛緩させていたのかもしれない。

「ふむ、意思伝達がスムーズだな。思考した通りに動くようだ。頭を揺らさずに歩かせることも問題ない。この程度の指示であれば、人形遣いである必要はない……か」

ガルガンチュアの頭の上に設置された骨の玉座に座っているのは、大魔王モモンガだ。その両隣にはアルベドとシャルティアがしなだれかかっており、膝の上には『生まれたばかりの赤子』かと思える天使のヴィクティム、背後にはセバスと三名の戦闘メイドが直立不動で控えていた。

ちなみに、骨の玉座は一時帰還していたデミウルゴスの献上品だ。選びに選び抜いたスレイン牧場産の骨で出来ているらしいのだが、

ちよつと目を凝らせば怨嗟の悲鳴を上げている人種の亡霊が見えそうで、同族は直視できないだろう。

無論、骸骨魔王様から見れば中々の逸品であつたりもする。だからこそ魔王の玉座として、遠出の御供に持ってきたのだ。

「改めて見てみると、自然とは美しいものだな。遠くに見える山脈の雄大さも悪くない」

「あの辺りには霜フロスト・ドラゴンの竜や霜フロスト・ジャイアントの巨人が縄張りを持っているそうですわ」

「いい素材になりそうでありんすねえ。モモンガ様と狩りに興じられんしたなら、大変光栄でありんすえ」

竜狩りとは面白そうだ、いずれ遊びに行つてみよう——と膝上の赤子を撫でつつ、魔王は更に視線を傾ける。

「平地には人間どもの村や町か……。ああ、動かなくともよい。今回は遠出する散歩、遠足にきているだけだからな。足下で蠢いている人間を排除する必要はない」

「はっ、かしこまりました、モモンガ様」

モモンガが片手を上げて止めたのは——『主が不快に感じたのかもしれない』と察し、ガルガンチュアから降りて逃げ惑っている人間どもを叩き潰そうとしていた——セバス及び戦闘ブレイアデスメイドたちだ。

まあセバスに関しては、昏倒させる程度に留めるつもりだったのかもしれないが、その他の者については容赦しないだろうから大地が血に染まったに違いない。

せつかく動きの遅いガルガンチュアに踏まれなかったというのに、待っているのが大虐殺とは皮肉な話だ。

止めてくれた魔王様に感謝するべきである。

「王国を蹂躪した後は帝国なのだからな。先に獲物を減らしてしまつては興醒めだ。楽しみは後にとつておくでしょう」

「流石はモモンガ様。帝国の人間どもはモモンガ様の御慈悲に咽び泣くことでしよう」

「帝国侵攻の際はわらわに御命じ下さいまし。一人残らず眷属にしてみせんしょう」

帝国の人口がどの程度なのかは知らないが、その全てを吸血鬼の眷属にするなど狂気の沙汰としか思えない。

「だけど、やるのだろうか。」

シャルティアとその配下たちならやりきるはずだ。

出来上がるのが、レッサ・ヴァンパイア下位吸血鬼だらけのちよつとどう扱えばいいのか分からないアンデッド国家になるとして、さあどうする？

「少しだけ想像してしまったモモンガは、『手間の割に大して面白くもなさそうだ』と断じ、シャルティアの鼻をピンとはねる。

「ひぐつ?!」

「却下だ。人間の死体を使うのなら、中位アンデッドを量産する方が効果的だ。それに素材や食料としても使い道はあるしな。やはり繁殖させて継続的に活用すべき家畜——なのだろうか。」

「ってこいつら聴いてないな、と魔王が視線を向ける先には、骨玉座の肘置きに倒れ込んでビクンビクンしている吸血鬼。そして、己の鼻を突き出して『早くお仕置きしてください』と言わんばかりの守護者統括が微笑んでいた。

「やれやれ、遠足とはこんなモノだったか?」

「なにか違うような——と首を傾げつつ、田舎出の成金が血統書付きの猫でも可愛がるかのようにヴィクティムを撫でながら、大魔王は遠くを見つめる。

「そろそろ帝国の出し物があってもよい頃合いだが……。さあ、どんなサプライズでもてなしてくれるのだろうか?」

「遠くに見えてきたのは帝都『アーウインタール』である。」

「高く分厚い防壁に囲まれた美しい巨大都市。人類が拠点とする都市の中でも、最高峰の機能を備えた見事な首都であると言えよう。」

「トブの大森林や南方の亜人国家から遠征軍が押し寄せてきたとしても、十分に對抗できる防備を備えているに違いない。」

「ただ、巨大な動像ゴレムに対してはどうかだろうか?」

「加えて大魔王への対策などはあるのだろうか?」

「その魔王が世界を滅ぼすことのできる『白い悪魔』や」

トゥルー・ヴァンパイア「真祖」、『竜人』を連れていたとしたら?」

人類に何が出来るのだろうか？

「モモンガ様、歓迎の準備は整っているようですよ」

もちろん（モモンガ様を受け入れる）私の準備も整っておりますが、と余計なひと言を忘れないアルベドの言葉通り、帝都の前面数キロは騒がしくなっていた。

所々を鉄板で補強してある木製の投石器が十数台。鉄矢を撃ち出せるバリスタなどの遠距離用固定兵器も、元の場所から外して多数設置済みであるようだ。

武装した兵士は三万と少し。

上空には鷲馬ヒボクリフに載った観測兵らしき人間が三十ほど、と目視で計上してみたものの、正解かどうかは少し怪しい。

なぜなら、ガルガンチュアの進路上に多量の煙が発生していたからだ。

山火事でも起こったのかと訝しく思うも、どうやらそうではないらしい。樹脂油と火矢を用いた人為的なものであるようだ。

とはいっても、草原を焦がす程度であり、うつとおしい白煙が視界を遮るだけにすぎない。

「目くらましのつもりか？ 狭い空間ならともかく、草原地帯で煙を炊いても隠せるのは足下程度であらうに……」

巨大なガルガンチュアの頭上にいるので足下など見えようもないが、元より気にしていないのでどうでもイイ。

モモンガは、撫でまわし過ぎてアルベドやシャルティアからヘイトを稼いでしまったヴィクティムを護りつつ、ガルガンチュアを無造作に進ませた。

一歩が大地を揺らし、小動物を追い立てる。

二歩が大気をも揺らし、人間どもへ死の訪れを伝える。

そして三歩――。

ズブリとの軟らかな何かに沈み込むような、呑み込んだ体積と同じだけの空気が隙間から押し出されるような奇妙な音と共に、ガルガンチュアの右足は沈んだ。

「おっと」

池や沼にしてはやけに深いなあ、とのんびりした感想を空洞たる頭骨に浮かべながら、大魔王はガルガンチュアを停止させるが、その時を待っていたかのように上空が騒がしくなる。

驚馬ヒボクリフではない。

かの者らは邪魔にならないよう、後方へ引いている。

代わりに宙を舞ったのは、岩だ。

人の背を軽く超える巨岩石だ。

微かに光を纏っていることからすると、魔法詠唱者マジック・キャスターにより魔法付与が成されているのであろう。直撃すれば人はもちろん、無事で済むような対象を例に挙げる方が難しいくらいだ。

「挨拶の花火にしては無骨すぎる」

「おっしゃるとおりですわ、モモンガ様」

「ほんに、岩を投げてよこすなんて野蛮人でありんすなあ」

くだらん、と空を舞う巨岩の嵐に興味を示さない大魔王と二人の妃。面前にまで迫ってきている投石器からの攻撃に、欠伸で応えるかのような態度だ。

だがそれも当然であろう。

巨岩石は、ガルガンチュアへ衝突することなく弾かれる。砕かれる。見えない何か——何者かによって。

「モモンガ様」ずっと魔王の横まで進み出ていたセバスが、人間たちの万死に値する大罪について言及する。

「至高なる御身へ攻撃するなど、どのような理由があっても許されることではありません。帝国への懲罰執行は私にお任せください」

人を殺戮することに忌避感を持つであろうセバス自身が名乗りを上げるのは不自然かと思いきや、モモンガには解っていた。

苦痛なく殺すために役目を買って出たのだ、ということ。

魔王様に弓を引いた時点で許されないのは確定だ。たとえ周囲に展開していたハンゾウ、カシンコジ、フウマ、トビカトウなどの警護しもべが防御したとしても、行為自体は無くならない。

それにアルベドやシャルティアが現場にいるのだ。

地獄の蓋が開くのは時間の問題だと言えよう。

「——よい」

全身に気を巡らせていたセバスの虚を突くかのように、魔王の言葉が場の殺気を留める。

「モ、モモンガ様？ どうしてですか？ 愛しの旦那様へ牙をむいたのですよ！ 妻としては黙っていられません！」

「モモンガ様！ アルベドの妄言は捨て置きんして、正妃たるシャルティアに御命令を！ 綺麗に掃除して御覧に入れるであります！」

「誰の何が妄言ですってええ?!」

「どこの誰が妻だあああつ?!」

自称妃の二人が争うのはいつものことだが、玉座の左右から睨み合うと、モモンガの膝に座っていたヴィクタイムが丁度挟まれる格好になる。

役得であった安全地帯が、いつの間にか死地であった。

「やめよ二人とも。……ああ、そこまで畏まらなくともよい」魔王は『もうしわけありません！』と平伏する自称妃たちを宥めると、後方にいるセバスや戦闘メイドたちにも言い聞かせるかのように言葉を紡ぐ。

「今回は景色を楽しむだけの遠出にすぎない。それに他の生き物の縄張りを歩いて進むのだから、虫や獣が驚いて飛び出てくるのも当然であろう。その程度の些事にいちいち反応しては楽しめんで、遠足をな」

村や町を踏み潰しながら巨大動像ゴレムで闊歩するのを、「遠足」と言うのかどうかは現実世界リアリティの鈴木悟も頭を悩ませるところだが、この際名称などはどうでもイイのだろう。

要はのんびり異世界の地を歩けば、それで満足なのだ。

大魔王だからと言って、世界を憎んでいるわけではない。自然を破壊したい訳ではない。むしろ世の中の害虫を駆除している側だ。神の如き管理者とも言えるだろう。

つまり、骸骨大魔王モモンガは世界を愛している。

だからこそ生者死者に関係なく、存在する全てのモノを滅ぼすのだ。

もちろんナザリックは別枠で。

「さて、少しばかり泥濘に足をとられたが問題はない。先へ進むとしよう」

地面を抉る轟音と共に沈んだ右足を振り上げ、ガルガンチュアは一歩を踏み出す。

その先にあるのは数万もの帝国兵たちだ。

己の死を察したであろう引きつった表情。震える両手で武器を握り、力の入らない四肢でなんとか身体を支える。

逃げ出さないだけ立派なのだろうが、全長三十メートルにもなる動像相手に何を成そうというのか？

投石器による攻撃が不発に終わった今、頭の中は空っぽだ。

『バリスタだ！ どこでも構わん！ ゴーレムの身体に当てろお!!』
一瞬で意識を切り替えた皇帝の指示が魔法具で拡大されると、それに合わせ各所で合図の楽器が鳴らされる。

『部隊は左右に展開！ 拘束用のロープを広げて地面へ固定しろ！ 魔法部隊はロープに魔法付与だ！ ゴーレムの足をからめ捕れ!!』

規則的な太鼓の音と、音階の異なる複数のラツパが鳴り響く。

当初は混乱気味であった帝国兵も日頃の訓練成果が実を結んだのか、恐怖を飲み込んで決められた音の指示に従う。

その光景は、数万の兵が意思をもった巨大な生物であるかのように統制されており、ガルガンチュアの頭部から見下ろしていた魔王様へ「ほお」との感嘆をもたらす。

「いかがなさいましたか、モモンガ様？」魔王様の右腕にスリスリしながら問いかけるアルベドには、帝国兵の動きなど見えていないようだ。視線は常に旦那様へ固定されている。

「ああ、見事なものだと思つてな。能力や忠誠心に劣る人間種を群れとして運用し、遙か高みにある上位者へ挑もうとは……。見世物としては合格だな」

「ほんに、虫けらの憐れな抵抗としては中々面白そうでありんす」自身も降りていって人間どもを蹴散らせたならもつと面白そうだとは思いながらも、シャルティアはモモンガの左腕から離れられない。愛す

る人の傍から離れるなんて、そんな選択肢は皆無なのだ。

『陛下！・ゴーレムの頭頂部に人影が見えやすぜっ！ 使役者つてヤツですか?!』

『なっ？・こんな巨大なゴーレムを使役する者だと?! くそっ、フルーダー！ 魔法部隊の精鋭を連れて——ん？ フルーダー!? 爺！ どこだ?!』

『さ、先程まで私の隣におりましたわ。ですが——』
『上です陛下！ フルーダー様は〈転移〉で上空に！ 単独でゴーレムに向かわれるおつもりですよ！』

軽い認識障害のベールを取り除いてみると、人間どもは軽いパニックに陥ったようだ。

ガルガンチュアの頭部で骨の玉座に座する、大魔王様の御姿に畏怖の念を持ったのであろう。白髭の魔法詠唱者などは、単独でモモンガ様の御前に侍ろうと向かってきている。

身の程も知らないで。

「清浄投擲槍！」

ヒヒツと笑った吸血鬼が片手を振るうと、迎撃に移ろうとしていたハンゾウの側頭部をかすめて、特殊能力の槍が白髭爺の胸へと刺さる。というか突き抜けた。

老いた人間の胸には巨大な穴が開き、何が起こったのかを理解する前に、血反吐と共に落下していく。大魔王様へ羨望の視線を向けたまま……。

「ん？ 今のはなんだ？」

「はい。あの枯れた人間は、帝国の宮廷魔法使いフルーダー・パラダインですわ。一応国家最強の魔法詠唱者で、目視した者の使用可能な魔法位階を、魔力系に限って見抜けるタレントを所持しております」

よどみなく答えるのは守護者統括のアルベドだ。

帝国に関する情報の収集などは、すでに終えているのだろう。ちらりと覗き見た老人の外見から必要と思われる大量の報告事案を脳内に並べ、魔王様の疑問に答えようと目を輝かせる。

「ほう、タレントか」

「はひっ？ モ、モモンガ様?! もしや殺してはまずかったでありんしょうか？」ビクンと背筋を伸ばし、シャルティアは出ないはずの冷や汗を垂らす。確かモモンガ様はレアを集めていたはずだ。そう、生まれながらの異能トを持つレアな人間を。

「あらシャルティア、殺す前に御許可をもらうべきではなかったのかしら？ くふふふ」

「ぐっ、このお、先に言ってくれてもよかったですでありんしょう?! 私がスキルを発動させんしたのを気付いていんしたくせにっ」

相も変わらずな睨み合いに、やはり大魔王の膝にいるヴィクティムが挟まれる。

役得な場所だけにワザと巻き込んでいるのだろうか？

「よい、あの程度のレアは不要だ」膝上の怯えた赤子天使を抱きかかえ、モモンガは地面に落下して赤いシミとなった老人を見やる。

「確か同じタレントを持った女を確保していたはずだ。ならば老いた人間など処分して構わん」

「ああ、モモンガさまあ、ありがたき幸せでありんすう」

「ぐぎぎいっ」

何やら齒軋りのような異音が頭蓋骨に響くが、モモンガは気にもしないで帝国軍の様子を見つめる。

「ふむ、大型の投射武器とお粗末な移動障害。使われている魔法にも見るべきものはないし、プレイヤーらしき存在は出てこない、か。ここまで足を伸ばして得られたモノは、美しい風景ぐらいかもしれない」帝国軍の必死な抵抗に欠伸交じりの感想で応える大魔王は、『せっかくここまで来たのだから成果の一つでも得ておこう』とばかりに背後で控えていた戦闘メイドブレアデスへ言葉をかける。

「ルプスレギナ、ソリュシヤン、エントマ。下へ降りて、軍の最高指揮官を見つけてこい。発見した後は場所を知らせるだけでよいぞ。少しばかり話をしていただけだからな。ああそれと、身体が鈍っているだろうから少し運動してくるといい。帝国の兵どもも喜んで相手になっってくれるだろう」

「はっ！ おおせのままに！」

隠せないほどの歓喜をもって、戦闘メイドはガルガンチュアから飛び降りた。

その浮ついた様子からは、モモンガ様からの御勅命がどれほど嬉しいことであるのかを感じ取れてしまう。セバスからしてみると、つい小言を言いたくなってしまうほどのメイドにあるまじき行為ではあるのだが。

とはいえ、気持ちは解る。

至高の存在であり絶対的支配者でもある大魔王モモンガ様——に弓を引いた者どもを粛正できるので。歓喜に身を震わせても仕方がない。

「あらあら、あの娘たちだったら。あんなに喜んじやって、はしたない」「そうでありんすかあ？ モモンガ様の御命令に従って人間どもを殺せるのでありんすよ。羨ましくはありませんかえ？」

正直言えばアルベドも嫉妬しているのだろう。でも、モモンガ様の傍に侍っている現状も至福の一時なのだ。それを投げ打って人間どもを殺しにいくなんて、出来るわけがない。

「まあそれはそれとしんして、モモンガ様」シャルティアは『ぐぬぬ』と葛藤しているアルベドをそのままに、大魔王様へと問いかける。

「帝国の最高指揮官とやらに、どのようなお話をするのでありんすか？ 人間ごときに直接御声を掛けるなんて……」

人間への要件ならば代わりに承ります、と言いたいのだろう。

ゴミたる人間がモモンガ様へ拝謁するなど許されぬ、身の程を知れ！ ということだ。

「そうだな、後の手間を省くため——と云えばいいのか。帝国の皇帝とやらは優秀と聞いているからな、そうだったな、アルベド？」

「は、はい。歴代でも最高との評判です」

「ふむ、それでだ。この地の指揮官に皇帝へのメッセージを届けさせようかと——」ふと言葉を止め、大魔王は意識の奥に思考を繋げる。

「——どうしたエントマ？」

『はあい、モモンガさまあ。帝国軍の総指揮官、皇帝を発見いたしましたあ。即時殺害が可能な距離で囲んでおりますう』

「ほう、皇帝が直接指揮をしていたのか。たいした度胸だな。よし、そのまま現状維持で私の到着を待て」

『かしこまりましたあ、モモンガさまあ』

エントマの甘ったるい〈伝言^{メッセージ}〉を終了させ、モモンガは報告された皇帝の位置、軍の中央最後尾へ視線を送る。

「では、人間の皇帝とやらを見てみるか」

魔王の一言で、ガルガンチュアはその巨大な一歩を踏み出す。

岩のように見えながら、岩よりもはるかに硬い巨大な一歩。そんな踏み下ろされた岩足の下には、三名の戦闘メイドによつて惨殺された帝国兵の死体が転がっていた。

まるで路端の石ころであるかのように。

まるで最初から意味の無かった存在であるかのように。

命を持った人間である必要はなかったかのよう。

大魔王様に欠片ほどの興味も持たれず、肉の残骸と化していった。

第25話 「おねがい魔王」

『ゴーレムの頭部から人間と思しき存在が三名落下！ い、いえ！
降りてきました！ あれは？ うえっ!? お、女です！ 奇妙な服装
のっ』

興奮気味の監視隊員には眉をひそめなくなる。

せつかくの敵影報告が意味不明では、自分で遠眼鏡を覗いた方が早いというものだ。

「三名の、女だと？ 新手の敵なのか?! いやそれよりフルーダはどうなったのだ?!」

聞きたかったのは帝国最高戦力の行方だ。

『^{ゴーレム}動像の歩みを僅かなりとも止められず、『手の施しようがない』とパニック状態に陥りそうな帝国軍を立て直すには、単身で飛び出していった逸脱者の力が必要なのである。

ジルクニフは遥か彼方にありながらも強大な存在感を示す^{ゴーレム}動像を睨みつつ、僅かな希望に縋りつこうとしていた。

『御報告！ 第二軍十六番監視員より目視情報！ フルーダ・パラダイン様、上空にて敵の攻撃を受け落下！ 地面へ激突し身体損壊！

生存は絶望的であると判断す！ 以上であります！』

「なっ?!」嫌な予感がしていたとは今更だ。我を忘れて飛び出していった時点で、フルーダがマトモな状態であるとはジルクニフも思っていないかった。しかし、そう簡単に死ぬわけがないとも根拠なく信じていたのだ。

「くそつくそつくそつ！ 爺一人で帝国全軍と同等なのだぞ！ それがっ！ それがああああ!!」

強大な切り札は、所持しているだけで絶対の自信を与えてくれる。だが失えば、その反動は計り知れない。

代わりの支えを簡単には用意できない——とは、組織にとって厳しいデメリットであろう。どこへ縋りつくこともできず、底なし沼に沈みゆくかのごとく。

もはや頼れるものなど皆無である。

「へ、陛下！ 兵の動きがオカシイですぜ！ 同士討ち？ いや、部隊の中に敵が入り込んだのか?！」

「左翼側でも混乱が見られますわ！ あ、あれは魔法による爆発？

……、これは、逃げててもよろしいですわよね、陛下！」

「ロックブルズ殿！ 今はそんな話をしている場合ではないでしょ!?! 生き残るために協力して下さい！」

「陛下お下がりをとお!!」

混乱を極める司令部において、両手に大盾を持つ一人の騎士が皇帝ジルクニフの前へ踊り出る。

直後、地面へ突き刺して固定された大盾は、破城槌でも受けたかのような轟音を鳴らすと同時に内側へ醜く歪み、その見返りに一人の美しい女性を弾き返す。

「おんやあく、手加減し過ぎたみたいすね。でも弱っち人間にしては上出来っすよ。褒めてあげるっす」

軽やかに着地する女と思しき存在は、戦場には似つかわしくない晴れやかな笑顔と、辺境民族的要素が入ったメイド服のような——これまた戦闘には不釣り合いとしか思えない衣装で場を混乱させてしま

う。

何者か？

敵か？

いや、攻撃してきたのだから敵なのだろうが、まともに戦える敵なのだろうか？

ジルクニフは帝国四騎士——内一人は逃げ腰——に囲まれながら、交渉すべきかと頭を回転させる。

「ちよつとお、指揮官を見つけたらあ報告しないとでしょお。いきなり攻撃してえ殺しちやったらどうするのよお」

「その通りだわ。つてあら？ そこにいるのはバハルス帝国の皇帝じゃないかしら？ 知恵の回る小賢しい獲物の一人として、資料に載っていたわよ」

追加で二人、世界観の異なる美しい女性が現れた。

話している内容からして、先に襲い掛かってきたおさげ美女の関係

者なのであろうが、ジルクニフは重要な事実を知ってしまう。

敵は、バハルス帝国を認識している。今殺しかけた人間が、皇帝ジルクニフその人であるのだと。

「待って欲しい！　こちらに抵抗の意思はない！」ジルクニフは美女たちの後方へ視線を向け、打ち捨てられた膨大な量の亡骸を確認する。

バラバラであり、燃やされている肉片。

首だけが切り裂かれている綺麗な死体。

何かに食い漁られた残骸。

『無理だ』と素直に思ってしまう光景だ。どうやって殺したのかも気になるが、心が折れるのはその殺害速度であろう。気付いた時には死体の山が出来ているなんて、いったいどこの地獄なのかと。

「ふくん、まあいいですよ。あとはエンちゃんに報告してもらってくださいすから」

「はあい、まかせてえ、メッセージ」

「生かしておくのは皇帝だけでよさそうだけど、どうしようかしら？　ふふ」

小柄で可愛らしい少女が札を、ミミズがのたくったような奇妙な文字の書かれた縦に長い薄紙を掲げると、隣の——スカート丈の短いメイド服を着込んでいる貴族然とした——金髪女性がペロリと上唇を舐めつつ、帝国最強の騎士を眺める。

『ここまでか』ジルクニフは生き残っている帝国兵の戸惑いを一身に受けながら、片手で『その場を動くな』と指示を出していた。

周辺にはまだ方を超す軍勢が残っており、魔法兵团や大型兵器を運用している部隊も健在だ。常識で考えれば、メイド服を着込んだ三人の女など相手にならぬ。

だが動けない。

動いた瞬間が最後ののだと、相手に口実を与えることになるのだと、本能が教えてくれる。だから巨大な動像ゴレムがゆっくりと近づいてくる恐怖に満ちた十数分。ジルクニフは呼吸にも気を遣いながら、己に降りかかるであろう災厄を待つ。

「なるほど、この者がバハルス帝国の皇帝か……」
動像の頭上で醜悪なる骨の玉座に座するは、“死”そのものであった。

遙か高みから皇帝たる自分を見下ろす、神の如き気配を纏う骸骨。着込んでいるローブなども人の手で作り出せる品ではないのだろう。身に付けている指輪一つだけでも、帝国の国家備蓄を上回る価値に違いない。

「モモンガ様。人間ごときが御前で頭を上げたままにいるなど、無礼かと思われます」

「まことでありんす。玉体を直視するなど万死に値しんす。目玉をくり抜いてやりんしょう」

“死”の隣に立つのは、黒い翼と二本の角を備えた魔性の美を持つ白ドレスの女性だ。反対側には口元から牙を覗かせる、赤い瞳の少女。

どちらも化け物であるのだろう。人外の美しさと、言葉に乗せられた殺気が生存本能を刺激してくる。

他にも歴戦の戦士と見紛う年配の執事や、赤子のような生物も視界に入ってくるが、もはや気を回す余裕はない。

「こ、降伏だ！ 全面降伏のドラを鳴らせ!! 全軍へ通達！ 武装を解除し平伏せよ！ 今すぐだ！ 帝国兵は皆、その場で平伏せよ!!」
力の限り叫び放ち、誰よりも早くその場へ伏して頭を下げる。

自分でも驚くべき決断の早さであったと思う。もう少し遅ければ、メイド姿の化け物美女が己の頭を掴み、碎き潰さんばかりに地面へと叩きつけていたはずだ。

まさに生きるか死ぬかの分岐点。

「ふむ、まあそんなに畏まる必要はないのだがな。我らは少し景色を眺めながら、ぶらついていただけだ」あまり関心を示していないという含みと共に、帝国皇帝の頭上へ魔王の言葉が降りかかる。

『ぶらついただけで一国を踏み潰すというのか!?!』と食って掛かりたくなるも、気持ちを抑え、ジルクニフは骸骨が語る言葉の先へ意識を

向けていた。

「ただ帝国の皇帝が居るのであればちょうどよい、と思つてな。あゝ、ちよつとやつてもらいたいことがあるのだ、皇帝よ」

「はっ、なんなりとー」それ以外に言えることはない——とばかりに、ジルクニフは全てを受け止める。実現不可能な命令であろうとも関係ない。断れば、その場で死ぬのだから。

「周辺諸国へ呼びかけて、至上最高の連合軍を結成してもらいたい。私が率いる魔王軍と戦うための決死軍だ。世界を救うための最終防衛軍と言つてもよい。まあ早い話、こちらから探すのは面倒なんだな。誰かに集めてもらおうと思つていたのだ。どうだ？　ありとあらゆる場所から英雄や勇者どもを連れて来て、私と戦わせるだけのことだぞ？　問題ないな？」

「は、はい！　御命令しかとつ、承りました!!」ふざけるなっ——とそんな勢いで承諾するも、実現出来るとはとても思えない。

利害関係が複雑に絡み合っている人類国家なのだ。

一緒に魔王を倒そう、なんて使者を送つても門前払いどころか、物笑いのタネになるのがオチだろう。

「ああ、ついでに教えておくが」骸骨の魔王は小動物へ排便の躰でもするかのよう、優しく語る。

「法国はすでに滅ぼしてある。王国も現在蹂躪中だ。評議国も流れで壊滅させるだろうから、その他の国と交渉を行うとよい」

理解するのに時間がかかる——とは久しぶりの感覚だが、皇帝として呆けている場合ではない。ジルクニフは必死に言葉を絞り出す。

「ありがとうございます、大魔王様」

「では、そちらの準備が整い次第侵略に向かうとする。期待しているぞ」

「はっー」

皇帝には似つかわしくないほどの低姿勢で了承の言葉を返し、巨大な動像が立ち上がるさまを微動だにせず見届ける。

動像はその巨体を反転させ、帝都を踏み潰すことなく離れていった。

「助かった……のか？」無意識に呟いたのであろう己の呟きに、答えをくれる者はいない。

誰も彼もが混乱していたのだ。

手も足も出なかった動像ゴレムとの戦いに。

突然現れた骸骨の魔王に。

そして人類の命運を懸けた最終戦争へ、否応なしに放り込まれたことに。

もはや人類の切り札にして『三重魔法詠唱者』、逸脱者にして帝国最強の大魔法使い、フルーダ・パラダインの死亡など気にもならない。

「どうしろと言うのだ……。この私にどうしろと……」

帝国だけではなく、世界をも背負うこととなった。

失敗すれば、全人類があゝの骸骨魔王に殺されるのであろう。降伏や逃亡が許される領域だとはとても思えない。

だが、『成功の余地があるのか？』と己に問う。

答えは簡単だ。

『そんな余地などあるわけがない』と即答できてしまう。

「死ぬと解っていて集めろと言うのか？ 殺されると解っていて各国を説得しろと？ 魔王が自ら足を運んで滅ぼすのが面倒だから？」

膝を付いたままで頭を抱える帝国皇帝へ、声を掛ける者はいない。

側近も帝国四騎士も、掛ける言葉が見当たらないからだ。

口を開けば嗚咽しか出ない気がする。全身の震えは止まらないし、

視界の歪みが涙のせいなのかも自覚できない。

今一度立ち上がるには、救済が——人類の希望たる皇帝の激が必要だろう。

現状に於いては望むべくもないが。

帝都郊外に布陣していた帝国軍は、巨大動像ゴレムが去ったあとも、放心しているかのように動かなかった。

仲間の潰れた死体を回収しようともしなかったし、行方不明者の捜索も始めなかった。無論、敵対勢力の追撃など考えもしない。

『地獄の蓋が開いた』

『八欲王の再来』

『魔神との世界戦争が、再び始まろうとしている』

誰が呟いたのかは分からない。

ただ、誰も否定しなかった。

平原に刻まれる巨大な足跡へ視線をやり、撒き散らされた仲間が残骸を確認する。

不思議と恐怖感はない。

どこかの物語に入り込んだかのような浮遊感だけが魂をくすぐる。

そう、別の世界。異世界へ迷い込んだ仔羊なのだろう。昨日までの日常と異なる、化け物だらけの異世界へと足を踏み入れてしまった憐れな異物。

小さな笑いが漏れる。

でもどうしてだろう？ 可笑しいことなんて微塵もないのに……。

涙を流しながら笑ってしまう。

ああ、オカシイ。

どうして私は——私たちは、さっさと死ななかつたのだろうか？

動像ゴレムに踏まれたなら楽に死ねたのに。美しいメイドのような化け物も、あっさり殺してくれたでしょうに。

ああどうして、生き残ってしまったのだろうか？

あんな「死の支配者」とも言える、骸骨大魔王様が蹂躪しようとする狂った世界に——。



賛成が二体。

反対が二体。

反対ではないが時期尚早である、が一体。

アーグランド評議国の評議員である五体の竜王たちは、山頂付近に建てられた巨大なホールにて議論を交わしていた。

「今が好機だと何故解らん!? 魔王軍とやらは王国軍と対峙しておる

！ これならば軍の背後を強襲できるはずだ！ 評議国に攻め込んでくるまで待つなんて、馬鹿げている！」

「愚かですね。王国からの情報が正しいなどと誰が保証します？ それに魔王軍？ 小賢しい人間の偽装でしょう」

「たしか人間の集団に、アンデッドを役役する宗教団体があったのう。過去に一つの都市を滅ぼしたとかいう……」

「それが何か？ 強大な軍であることに変わりはありませんわ。その愚かな軍勢が評議国を危険に晒すのであれば、何かしらの対策を講じる必要があるでしょう。場合によっては、黄金姫の提案に乗るのも宜しいかと……」

「ただなあ」面倒臭そうに長首を上げる青鱗の竜は、オリハルコン製の鎧でもぶち破りそうな長い爪で頬をかきつつ、本題に入る。

「この黄金姫も思い切りが良過ぎるのではないか？ もはや助けることは困難だからと言って、『自分諸共、我ら評議国を救うための犠牲にしてほしい』とは……」

レエブン候が持ち込んだラナー王女の親書には、血の涙を流しながら書いたのかと思えるほどの苦渋に満ちた決意が刻まれていた。

ありとあらゆる手段をとったものの、暴走した貴族たちに踏みにじられ、王国民の速やかなる避難が困難であること。

魔王軍が送り込んできた^{デス・キャバリエ}“死の騎士”がいかに強大で、数多の罪無き兵士たちが何の抵抗も出来ずに殺されたということ。

王国戦士長は事前に死亡しており、アダマンタイト級冒険者も一組全滅したということ。

国王は病床に伏し、第一王子は殺され、第二王子が戦争準備を行うも、貴族の誰一人として従わず、国民を護ることも逃がすことも保護することもできないということ。

文面の最後の方になると、冷静さを欠いていたかのように文字が崩れ、インクが滲んでいたりもしていた。

それはまるで文字が叫んでいるかのようにあり、泣いているかのよう。

王族の一人として、愚かな治世に懺悔している姿が見えてくる。

そして終わりに——黄金姫は絶対にしてはならないと理解しているながら、そのあまりに整った、死を覚悟した一文を明記したのだ。

『魔王軍の脅威は王国全土を呑み込むだけに留まらず、評議国の皆様へも手を伸ばすことでしよう。どうか、どうか伏してお願ひ申し上げます。王国はもう手遅れです。ですが評議国を救うための犠牲となるるのであれば、喜んで死ぬことができましょう。私も生き残るつもりはありません。死ぬ直前まで魔王軍を引き付け、竜王様の一助となる覚悟です。ですからどうか、私たちの命を無駄にしないでください。どうか生き残ってください。私たち、王国民の分も』

「うくむ」灰色がかった髭を揺らし、一体の竜王は唸る。

「もはや半狂乱の様相なのじゃろうなあ。人間種には滅亡すら想像してしまっほどの相手なのじゃろう。じゃが、我ら竜種には関係ないのう。人には脅威でも、我らにはたいして影響あるまい？」

「はっ！ ツァインドルクスの件で慌てふためいていたヤツがなにを言う！ 正直に吐いたらどうだ?! 『怖い』となっ！」

「貴様……」

「凶星だろっがっ」

血気盛んな赤鱗の竜王に対し、灰色髭の竜王は『脳筋が』と囁きつつ、静かな殺気と共に目を細める。

「やめてください。内部崩壊なんて馬鹿らしいですよ。それにツァインドルクスが行方知れずになった件については、私も慌てました。なにせ彼の御方は、八欲王ですら打ち破る『真なる竜王』なのですからね。評議国の守り神が居なくなったようなものですよ」

かけてもいない眼鏡をクイっとするかのような緑鱗の竜王は、冷静に物事を分析する。

プラチナム・ドラゴンロード

白金の竜王こと『ツァインドルクスⅡヴァイシオン』が何も言わず居なくなっことは確かに問題だ。居住近辺に見られた異常な崩壊からしてみると、何かの天変地異が起こったとしか考えられず、その為に住処を移したようにしか思えないのだが……。

連絡がない以上真相は不明だ。

だけどもあ、あの『真なる竜王』様が困るような事態など起こるは

ずもないだろう。それほどに強いのだ。世界最強と断言できるほどに。

「でも、私は攻めるべきだと思うわ」

「え?」

かけてもいない眼鏡がずり落ちるような錯覚を受けて、緑鱗の竜王は視線を上げる。そこには——自分と同じ反対派ではないものの、賛成もしていなかった白い竜王が『魔王軍撃つべし』と声高々に吠える自信に満ちた表情があった。

「ちよつ、ちよつと待つてください! 貴女はまだ早い、情報を集めるべきだと言っていたでしょう? それなのに、どうして開戦の急先鋒みたいなことを言っているんですか?!

「あら? 先の会議で発言した内容なんてブラフに決まっているでしょ? 私は白金ブラチナム・ドラゴンロードの竜王様が不在であるにもかかわらず、能天気
に立て籠もるなんて愚策を提案した馬鹿どもを笑っていたのよ」

「なんじゃと?」

灰色髭を揺らし、籠城戦を提案した竜王が圧力のある視線で白い竜王を睨む。

「だってそうでしょ? 私たちの切り札たるツアインドルクス様が居ない状況で籠城を選択して、もし敗北なんて無様な醜態をさらしたならそれで御仕舞ですよ。相手の実力が不明な段階で押し返せるなんて、楽観的にもほどがありません」

「私たち竜王が五体居てもですか? 亜人の名だたる強者も集結しているというのに?」

評議国に住まう亜人たちは人間などより遥かに強い。基本的な身体能力が格段に違うのだ。確かに総数こそ少ないものの、王国兵など比較にならない強靱さなのである。

もつとも、アダマンタイト級に匹敵する者となると皆無であるが。「ですから提案ですわ。まず魔王軍とやらが分散するのを待ちましよう。その後、敵の総大将や指揮官が居そうな部隊を強襲し、有能そうな個体だけを駆逐。残りの雑魚は王国軍に任せ、私たちは評議国の守りを固めるために帰還する。いかがですか?」

最初からそのつもりだったのかと思うほどに、白き竜王は議場を支配する。

賛成派の赤や青は『不満なし』と頷くだけで前のめり気味だった重量感のある竜体を元へ戻し、反対派の灰色髭と緑は「むう」と唸り考え込むばかり。

確かに無策での籠城は考えものだ。

敵勢力は王国と戦っても左程疲弊せずに評議国へと迫るだろう。ならばその時、評議国は十分な力を保持した魔王軍と対峙することとなる。

負けるとは思えぬが、ブラチナム、ドラゴンロード白金の竜王からは呆れられるかもしれない。少なからず犠牲も出るだろうし、評議員としての資質を問われかねない愚策だろう。

故に、王国軍が的となっている現状において敵の戦力を削いでおく、というのは理に適っている。

「やむをえぬのう」

「仕方ありません。法国からどんな反応があるか気になるところですが、まああちらも何やら混乱しているようですから、ちよつかいを出してくることはないでしょう」

了承の意を示しながらも、緑鱗が気にしていたのは法国のことだ。

自国で何やら騒動があり、異形の集団たる魔王軍の討伐にも姿を見せない自称人類の救世主。

評議国にとっては敵対勢力以外の何者でもないのだが、今回ばかりは役に立つかと思っていたのに。

「それで？　どのように襲撃するんじや？　魔王軍の頭領を最初の一撃で沈めるんかの？」

やると決めたのなら、力を揮いたくてウズウズする。おかしな反応かもしれないが、長く闘争から離れていた竜王たちなのだ。

灰色髭も『相手が八欲王でないのであれば』と、久々の蹂躪劇を夢想してしまう。

「敵総大将の所在は不明です。黄金姫の情報にもありませんでした

わ。ですから、私たちは各部隊の指揮官を端から潰していきましたよ。魔王軍が慌てて守りを固めたら、そこに標的がいることになりま
す」

「ふん、御託はいい！ 一番手は俺にやらせろ！ 魔王軍とやらに最強の生物がどのような存在なのかを教えてやる！」

鼻息の荒い赤き竜王のデカイ声には、白き竜王もうんざりしているようだ。

相手が未知の軍隊であると言うのに、己が最強と信じて疑わない竜なる生き物。周りが弱者ばかりであると、このような無能に成り果ててしまうのか。

白き竜王は少しだけため息を吐くと、『評議国もたいしたことはありませんね』などと独りごち、巨大な翼を広げては最後の一手へ踏み込む。

「では、『評議国』は『魔王軍』への『襲撃』を決定いたします。ルートは東回りで、トブの大森林側から仕掛けましょう。あちらには霜フロスト・ドラゴンの竜の縄張りがありますので、もしかすると見間違つてくれて、はぐれているのかと警戒されないかもしれませんわよ」

「赤いヤツや緑のヤツがいるのにか？ 見間違つてもらえるのは青鱗の我が、白いそなた、灰色髭のジジイはどうだろうか」

くだらない冗談はやめて戦闘準備だ、と言わんばかりに青き竜王はその身を起こし、議場となつていた巨大なホールを出ていく。

恐らく己の手駒であろう竜種から共に空を駆ける若者を数体、そして亜人の中から背に乗せて連れていく英雄を選抜するつもりなのだ。それほど多くは連れていけないだろうが、強襲した魔王軍の中に降り立って、竜王が指揮官を殺すまでの時間を稼ぐ要員である。弓や魔法で竜王を狙う邪魔者を排除し、駆け回って混乱を助長する。もしもの場合は捨て置かれる覚悟もいよう。

とはいえ、竜王様と共に戦場を駆けるのは栄誉以外の何ものでもない。子々孫々まで語り継がれる英雄譚だ。

「出撃のタイミングは私に一任させて頂きますわ。黄金姫からの情報と、私が独自に入手している魔王軍の状況を合わせ、最適な時期を見

定めます」

「まあお主ならよい」

「独自について、いつの間そんな情報網を……」

「出撃の第一報は俺に寄せ。先陣は俺様のものだ」

好き勝手に騒ぎながら、竜王たちは議場を後にする。

これから評議国自体の護りも固めなければならぬので色々大変だ。人員・武装の調達や物資の備蓄、それに王国から避難民も押し寄せてくるだろうから、入国禁止などの対処も早急に済ませる必要があろう。

「ふふふ」

広いホールに、白き竜王の微笑が漏れる。

「コキユートス殿、使用を許可されている手駒は評議国のモノのみではありませんが、負けるつもりなどありませんよ。私自身が参戦できなくとも、やりようはあるのです」

父上に楽しんでいただける最高の戦争を——、白き巨大な翼をマントのようにバサリと舞わせ、白き竜王はいつもとは異なる口調で意味不明な呟きを洩らす。

そんな独り言は誰の耳にも届かない。

不気味な黒い穴のような瞳が、眼下に広がる評議国首都を眺め、観察する。

時は暑さのピークが過ぎたであろう夏の終わり。

今日この日、評議国は魔王軍との全面戦争へと舵を切った。滅亡が約束された最悪の未来へと。何故そうなったのか？　なんて決断した評議員の竜王ですら頭を捻るかもしれない。

一体の白き竜王の提案に乗ったからだ、と答えられるだろうか？

当事者である白鱗の竜王ですら、そんな記憶など無いというのに……。

かくして賽は投げられた。

王国を舞台に、評議国は魔王軍へと襲い掛かる。

この世界に於ける最強の生物——竜王が五体参戦するという、十三英雄の大陸戦争時にも起こり得なかった稀有な戦いだ。

故に、もはや魔王軍の脅威など語る必要はない。竜王と対峙して生き残れる存在など、この世界には居ないからだ。

魔王軍は敗走し、総大将は首を晒すだろう。そう、世界は平穏を取り戻すのだ。

竜王様の圧倒的な御力と、御威光の元に……。

第26話 「敗戦魔王」

おかしな話だと感じていた。

『評議国との重要な交渉を任された』と聞いた時には「流石はレエブン侯」と誇らしく思ったものだが、『長期に渡るため家族も連れていく』とは不自然であろう。

そもそも評議国と王国には国交自体が無い。

故に、要人に何かあった場合の取り決めも無いのだ。

そんな場所に、己の命よりも大事な家族を連れていくなど正気とは思えない。評議員である竜王を怒らせたなら、王国貴族のレエブン侯とて無事には済まないはずなのに。

「後のことは任せる……だつて?」

レエブン侯には恩がある。

平民である己に軍師の地位まで与えてくださったのだ。命を投げ出しても御役に立とう、という忠誠心ぐらゐは持っているつもりである。

だが、そう……、なにかおかしい。

「ザナック王子の開戦宣言が通知される直前に出国なんて、どう考えても変だ。王国軍をレエブン侯以外の誰が指揮するというのだ。今度こそ帝国に腹を食い破られるぞ。危機を救ってくれるはずの戦士長は、もういないのだから」

戦争の準備はかなり前から始めている。

収穫時期を狙って戦争を仕掛けて来る帝国軍に対し、収穫時期の異なる農産物の作付けを推奨し、被害を抑えようと知恵を絞ってきた。

以前の民兵も、農業専従、半農半兵、專業兵士の三種に分類し、戦争が始まったとしても農地を維持する最低限の人員だけは確保できるように、領地法の改正から始めていたのだ。

中でも專業兵士の育成は順調だ。

引退した冒険者を指導者として雇い、帝国騎士にも負けない——数は少ないが——特殊部隊の完成だつて目前である。

王国では下に見られている魔法詠唱者の部隊も創設した。帝国の

フルーダが戦場に出てきた場合に、率先して邪魔をするためだ。

これまでの戦争において、かの大魔法詠唱者マジック・キャスターが力を揮った実績はない。しかしそれは、王国に戦争準備をさせ、農作物収穫の人出を失わせることが主眼であったからに過ぎない。本気でエ・ランテルを——王国を落とす気であるのなら、トトライアット「三重魔法詠唱者」フルーダ・パラダインとの対決は避けられないのだ。

無論、その優秀な部下たちとも……。

「レエブンはいい。開戦宣言は急過ぎる。時間がないから近くの防衛拠点へ集まれ、とはいったい何の冗談だ？ 糧食を確保するだけでも、どれだけの時間がかかると思っているんだ。これだから命令しできない王族って輩は……」

頭をガリガリ掻き毟って偉いヤツらの悪口を大声でほぎきたいところではあったが、今はもう村の畑で泥まみれになっている汚い下民ではない。

エ・レエブルの全軍に命令を下せる立場なのだ。

余計な軽口を叩いては全軍の指揮に関わる。ただでさえ『若すぎる』と、苦言を呈されているのだから。

「さて、これから忙しく——」

「ぐ、軍師殿！ たいへんです!!」

身体をほぐそうと背伸びしたところで、顔なじみの側近兵士が飛び込んできた。

どうやら開戦宣言が真実であると理解したのであろう。気持ちには解らないでもないが、毎年恒例なのだからそんなに騒がなくなるともよいと思う。

（ああ、王都では多数殺害されたって話だし、その中に知り合いでも居たのかな？）

王都で化け物が暴れたという話は、開戦宣言より早く伝わってきている。

商人や情報屋が仕事熱心だからなのだろうが、銀貨と引き換えに零してくれた噂話には驚嘆しきりであった。

いわく、王位継承権第一位「バルブロ」王子死亡。

いわく、アダマンタイト級冒険者チーム「朱の雫」全滅。

いわく、巨大犯罪組織「八本指」、活動を停止し地下へ潜る。

なんだそれ？　と言いたくなる。

ああ、そうそう、ふざけるな！　とも言いたくなる。

加えて、王都の諜報員から受け取った〈伝言〉と内容が酷似しているのだから笑いたくもなろう。

今は裏をとっているところだが、あまり期待はできない——というか期待したくない。

頭を痛めるのは戦争の件だけで十分だ。

「それで？　なにが大変なんですか？」

「はっ。たった今、王女殿下の御勅命「エ・ランテル偵察」——を見事に果たし、帰還途中であった魔法詠唱者殿を保護いたしました。当人は軍師殿に事情報告を行った後、すぐに王女殿下の元へ向かうと申しております！」

「えっ？　偵察？　エ・ランテルに？　ん？」

なにを言っているのかと首を傾げたくなるも、直後に入ってきた魔法詠唱者の疲労困憊ぶり、そしてこの世の終わりを見てきたであろう恐怖に染まった瞳には、何も言えず固まるしかなかった。

「無礼は謝罪する」

無駄なこと余計なこと口にしたくないとばかりに、中年の魔法詠唱者は余人を排し、『王女殿下からの御言葉』とやらを並べはじめる。

王国へ攻め込んでくるのは魔王軍。

きわめて危険な化物集団である。

レエブン候は評議国へ赴き、救援を要請している。

評議国の説得には時間がかかる。

なんとかして敵勢力を押し留めておく必要がある。

「は？　まおう、ぐん？」　物語の外で耳にするとなんとも陳腐な名称だ。基本的には負けるために登場するやられ役なので、絶望感などとは無縁である。

「事実です。私はこの眼ではつきりと、アンデッドや悪魔の軍勢を見

てきました。エ・ランテルの痕跡が僅かに残る廃墟で整列する化け物たち……。あれこそまさに魔王軍」

見開いた瞳に宿る恐怖が言葉に説得力を持たせる。

「どうやら、とんでもなく異常な軍隊が攻めてくることだけは間違いないようだ。」

「いやしかし、そう、その目で見てきた貴方の言い分は解りますが、王女殿下は何故、そう何故、魔王軍の存在を認識しているのです？　まるで手も足も出ない相手と理解しているような……」

魔王軍などと言われても、納得できる者は少なからう。帝国が邪法を用いて特設のアンデッド軍を送り出してきた、と考える方が自然だ。

「城では死の騎士デス・キャバリエなる先触れ一体に、百名近い守備兵が殺されました。耳にしているでしょうが、王子やアダマンタイト級冒険者の件も事実です。王女殿下は全てを把握した上で貴方に要請しているのです——時間稼ぎをっ」

時間を稼ぐ。

言葉で語るだけなら誰でも出来るだろうが……。どんな相手に、どれほどの時間を稼げばイイのか？

『魔王軍の実力も分からないのに、なんて無茶なことを』と王女殿下の無茶ぶりに愚痴を吐きたくなるも、続いて耳にした決意にはハツとさせられる。

「お伝えしておきますが、ラナー様は死を覚悟していらつしやいます。私がエ・ランテル偵察へ出向く際も、『死ぬかもしれない任務ですが、もしものときはあちら側で会いましょう。私も王国の無事を見届けした後で責任をとるつもりですから』と仰っていました。震える両手で、私のような者の手を握りながら」

大粒の涙を拭うこともせず、魔法詠唱者マジック・キャスターは若き軍師の瞳を見つめる。

覚悟を決めた者の視線だ。おそらく最後の最後まで、王女殿下のために戦うのだろう。

こんな人材が王国にいたのか、と皮肉の一つでも言いたくなる。

「……王女殿下の御覚悟、しかと受け取りました」こうなれば腹をくく
るしかない——と若き軍師は魔王軍との全面対決を受諾する。

「貴方には〈飛行〉フライを行使できる魔法部隊の者をお付けします。王都ま
ではまだ遠い。」

〈浮遊板〉フライングボードに乗せてお運びしますので、暫し身体を休めてください」
「貴重な戦力を……、もうしわけない」

王女殿下の元へ報告に赴くには疲れすぎている——魔法詠唱者マジック・キャスターを
部下へ託し、軍師は頭を切り替える。

戦争は避けられない事実である。

そして相手は魔王軍。帝国ではなく、人類国家が勝てないであろう
人外勢力。故に目標は時間稼ぎ。評議国との交渉をレエブン候が纏
め上げ、救援軍を送り込んでくれるまでの時間稼ぎだ。

「問題なのは魔王軍の戦力想定だが、魔神の一体が軍を引き連れてく
る——といった感じで大丈夫だろうか？ まあそれ以上の想定なん
か、思い浮かびもしないのだけど……」

人が想像できる凶悪な敵などには限度がある。

物語にしろ空想にしろ、己の知識を超えた化け物などは姿形すら描
き出すことはできないのだ。だから魔神を引き合いに出す。あれ以
上の恐るべき存在など、それこそ神話の領域になってしまうだろうか
ら。

もつとも、魔神だって御伽噺にしか存在しないのだが……。

「くっそー！ 十三英雄でも居てくれたら、って弱音を吐いている場合
じゃないな。レエブン候が戻ってくるまで、なんとしてもエ・レエブ
ルを護りきらないとっ」

若き軍師は居もしない救世主などには頼らず、手持ちの札を確認す
る。

まず民兵は役に立たないだろう。城の守備兵が鎧袖一触だという
のなら、農民に毛の生えた程度の兵士なんか路端の羽虫同然だ。待つ
ているのは無駄死にに違いない。

ならば最低でも騎士、そして冒険者、請負人フリーカーたちを使うべきだ。領
地マジック・アイテムにある魔法具もかき集めて、使い切るつもりでぶちまけよう。

後はそう、思い切った罫が必要だ。

机の上に広がる地図を見やり、エ・レエブルとその南方に存在する小都市を確認する。

エ・ランテルからエ・レエブルへ赴く途中で立ち寄ることになる休憩地点。エ・ランテルが占領された場合に第二の前哨基地となる城塞都市。

今では結構な数の避難民が集まってパニック状態であろうが、魔王軍を迎え撃つには悪くない拠点である。

「レエブン候、あとで怒らないでくださいよー！」

方針が決まれば後は突き進むだけだ。

若き軍師はレエブン公の全権委任状を片手に、副領主を含む全要人が集まっている会議室へと殴り込むのであった。



王国を蹂躪していた魔王軍の第一陣は大きく三つに分けられ、南方からゆつくりと北上していた。

王国の東側、エ・レエブルからは南方となる城塞都市へ迫ってきていた二千五百の化け物たちは、その一角である。

前面に骸骨や動死体が並び、中ごろには骨の竜や下位の悪魔たち、そして後方には小部隊長兼連絡役の死者の大魔法使い数体と総指揮官の鱗の悪魔などが姿を見せていた。

「ようやくまともな都市攻略ですな。カラの村々を漁る作業はもうお仕舞のようです」一体の死者の大魔法使いが都市の防壁上に集まる兵士を眺め、ポツリと呟く。

「にに、人間どもを狩るのはは、コキュートス様にい授けられたた、大事な任務だ。おお、お仕舞にいする必要などない」任務に不満を漏らしたと捉えたのか？ 鱗の悪魔は流暢とは言えない言葉を繋げ、傍らの死者の大魔法使いを睨む。

「これはっ、申し訳ありません。都市であろうと村であろうと、人間どもを殲滅することには変わりはありません。全力で取り組む所存であ

ります」

「ああ、そ、それでイイ」

アンデッドである死者の大魔法使いの顔色など分かる訳もないが、顔に張り付いている人だった頃の顔肉に冷や汗が流れているような気がしなくもない。

頭を下げる部下を一瞥した鱗の悪魔は、重量感のある鋼鉄製の戦鎚をズシンと地面へ落とし、遠くにある都市の様子を見やる。

「なな、なんだ？ おかしい、ぞ？」

多くの避難民が目指していた小都市だ。

近隣の村や町とは異なり、エ・ランテルを突破してきた敵戦力との防衛戦を想定した頑強な造りの城塞都市だ。

この地が突破されたならば次はエ・レエブル。

戦争被害など受けたことのない平和な大都市が射程圏内だ。

それなのに――

「にに逃げていく、だど？」

見れば、防壁の上に集まっていた兵士たちが都市の奥へと走っていく。武器を放りだし、鎧を脱ぎ捨て、何やら大声を上げながら脱兎のごとくだ。

まだ一当たりもしていないのに、遠くに魔王軍の影を確認した途端、憐れなほどの逃げっぷりである。

これには、派手な戦いを期待していた鱗の悪魔も呆れてしまう。

「なん、なんということだ。中央や西方では、てて敵軍と切り結んでいくというのに、われ、我らには活躍の場も与えられないと？」

エ・ペスperlでは早々に全面対決が始まっていた。

押し寄せるアンデッドや悪魔の軍勢相手に、人間どもが数万の手勢で必死に抵抗していたのだ。膨大な死体を積み上げながら、自分たちはいつたい何と戦っているのだろうかとうと頭を混乱させながら……。

西方のリ・ロperlでも戦端が開かれたという。あちらでは都市内に籠らず、平原にて軍を展開し魔王軍を迎え撃つたらしい。

その後の詳細についてはまだ報告を受け取ってはいないが、緊急通知がないことからして、想像を超えてはいないのだろう。

だがこちらでは——、
そう、こちらでは何も無い。

進路を遮る都市の防壁は無人のままに魔王軍を迎え、何十万もの市民が暮らして居たであろう街並みは、静かにアンデッドの侵略を受け入れる。

異常な光景だ。

周辺の町や村から集っていた避難民はどこへ行ったのか？

都市を護るはずの兵士たちは何をやっているのか？

魔王軍の第一陣には、人間でも対抗できるであろう骸骨や動死体スケルトンゾンビも多いのだ。無抵抗で逃げ出すなんて、戦略上でもおかしいと言わざるを得ない。

「余程慌てて逃げ出したのでしようなあ。いや、もしかすると暴動でも起きたのやもしれません。建物の破損や散乱した瓦礫……。酷いものです。人間どもも我らと戦うどころではなかった——といった感じでしょうか？」

「かか、かまわぬ。ここに居ないなら、つ次だ」

死者の大魔法使いエルダーリッチが語るように潰れた建造物が道を塞ぐぐらい酷い有様ではあるが、標的は街ではなく人だ。探し出して殺し、次へ向かってまた殺す。流石に王都まで追い詰めれば逃げる場所もないだろう。そこでなら存分に戦えるはずだ。

「では、すす進め」

鱗スケイルデーモンの悪魔の指示が各部隊の死者の大魔法使いエルダーリッチに伝達され、魔王軍第一陣二千五百は都市の中をゆつくりと進む。

逃げ隠れている人間を探しながらの緩やかな歩みだ。

途中、瓦礫で通れない場所も多いが、よじ登ったり別の道を探したりしながら、着実に進む。

だがやはり、人間はいなかった。

「人間どもは己の街を破壊して、いったい何をしたいのでしょうか？
理解できませんな。——ん？ なにやら開けた場所が……。これは、

広場でしようか？」

死者の大魔法使いエルダーリッチが瓦礫を避けて進んだ先には、不自然なぐらいに

開けた空間が広がっていた。普通に考えれば噴水などが設置された住人たちの憩いの場なのであるが、それにしても都市のご真ん中で、魔王軍第一陣数千を収容できるぐらいに広いのはおかしい。

よく見たところ、元々あった建物を破壊して場を広げたのでは？

との考えが頭に浮かぶ。周辺には建築物の残骸が散らばっており、スケルトン・センチュリートスケルトン・センチュリート、ネクロスオーム・ジャイアントネクロスオーム・ジャイアント、百足状の骸骨や集合する死体の巨人に踏み荒らされている。異臭を放つ液体も辺りに撒き散らされており、余程の混乱がこの都市にあったのではないかと想像してしまう。

「建物を壊し、残骸を脇へ寄せて積み上げるとは、我ら魔王軍の駐屯場所でも用意するつもりなのでしょうか？ まったく人間どものやることは——」ふと魔王軍の大多数が入り込んでいる広場へ足を踏み入れて、パチャツと打ち叩いた汚水溜りを見る。

強い臭いだ。

死者の大魔法使いはアンデッドであつても嗅覚——ただの外部情報であつて好みや嫌悪はない——を持つ。だから汚水の匂いを、人であつた頃の記憶とすり合わせることもできるのだ。

その結果、一つの危険を察知する。

「これはっ、油？ 何か混ぜてあるが樹脂油の類か？ いやまて、何故こんな場所に油溜りが……」視線を這わせてみれば、そこかしこに樹脂油が撒かれている。

一見、建物が破壊された時に洩れ出たのではないかとも思えたが、それにしても多量に過ぎる。こんなところで発火でもしたら、建物の瓦礫を巻き込んで大火事になり得——。

「まさか?! 生命感知!」

嫌な予感とは大抵の場合で当たるものだ。

生きる者の気配を探知する魔法を唱えた死者の大魔法使いは、広場の外、積み上げた瓦礫の山向こうに、無数の生命を感じ取っていた。

「しまった! これは罠だっ!!」

「——ちっ、バレたぞ!」

「隠密解除! 火矢を射掛ける!!」

「油壺投下! 魔法部隊は飛行タイプの悪魔を狙え!」

「通路の瓦礫を崩せ！ 埋めて潰すんだ!!」

「神官たちは死霊レイスに向かえ！ 骨スケリトル・ドラゴンの竜は俺たちに任せろ!!」

「よっしやあああ!! やつとこの死臭くさい外套を脱げるぜ！ 野郎

ども！ 稼ぎ時だぞ!!」

「「おおおおおおおー!!!」」

瓦礫の上に人間どもの姿が見えたのは一瞬だ。直後、身を焼く炎の渦に巻き込まれて視界すら確保できなくなる。

これは、マズい。

死者エルダーリッチの大魔法使いは率直に危機を悟る。

広すぎる広場に入った——いや、誘い込まれたのは魔王軍の大部分だ。それも大半が火属性を弱点とするアンデッド。一部の悪魔なら耐性を持つている者もないではないが、これほどの大火では相応の痛手を受けよう。

しかも上をとられて弓矢、投石、魔法の嵐だ。先程まで近くにいたはずの鱗スケイルデーモンの悪魔の姿も見えない。

こうなると、頭に浮かぶのは一時退却であろう。普通であれば。

そう——まともな頭で考えれば、一斉に退却し、都市の外へ出て軍を再編成。その後、援軍を待つなり、都市への再攻略を行うなり判断すればいいのだ。

だがしかし、魔王軍に退却はない。後ろに引くなんて考えはない。大魔王モモンガ様に付き従う僕しもへとして、そんな不敬な考えは一切持ち得ていないのだ。

『魔王軍に軍を下げるという考えは存在しないのかも?』

魔王軍の情報——渡河ですら斜め後方の橋まで下がらず、そのまま渡ったなど——を分析していた人間の軍師が、罨を用意するに当たってたどり着いた結論だ。

故に、逃げようと思えば簡単に逃げられる引込罨を用意した。都市の大部分を焼き払う覚悟で、撤退したと見せかけて、住人を強引に避難させて……。

おかげで魔王軍は炎の広場から逃げない。むしろ突っ込んでくる。問題なのは空を飛んでくる悪魔か、強力な個体ぐらいだ。

「にに人間どもがぁー!!」

「大物だぞつ、指揮官クラスに違いない! 重装歩兵、前へ!」

「支援魔法をかける!」

「他の悪魔を近づけさせるなっ!」

巨大な戦鎧で瓦礫を崩す鱗スケイル・デーモンの悪魔の前に、重厚な大盾を構える騎士らしき者たちが立ちはだかる。

全身鎧を着込んだ騎士の体格は、一般人が見上げるほどであろうに、鱗スケイル・デーモンの悪魔の殺気を纏った瞳はそのさらに上だ。完全に別の生命体であることが、見た目からも判ろう。振り回す戦鎧を受け止めるなど不可能としか思えない。

「がぁぁぁぁ!!」

「ここで止める! <要塞>!」三人がかりで戦鎧の軌道を塞ぎ、武技を発動させる。

鋼鉄をぶち叩く轟音が響き、何かを吐き出す騎士の呻き声が残響として軍師の耳に入る。

「今だっ! 仕留めろお!!」

一撃を止められた鱗スケイル・デーモンの悪魔が殺気を感じて視界を上げたその時、己を囲んでいる魔法詠唱者たちマジック・キャスター、そして弓やクロスボウを向けてくる射撃部隊が目に入ってきた。

『なんだこれは?』戦略や戦術にそれほど精通していない悪魔でも、己が踏み込んだ場所を中心として部隊が配置されていればおかしいと感じる。それはまるで、最初からその場所に敵が突っ込んでくると解っていたかのようだ。

そう、狙って誘導されたかのように……。

「そそそそな——」疑問を口にする前に、悪魔の全身は「魔法の矢マジック・アロー」と魔法付与された矢で埋め尽くされた。

目や口にも見境なく鏃が突き立てられ、経験したことのない痛みと出血が不慣れた恐怖を誘う。この世に召喚されたから初となる惨劇を受け、己が悲鳴を上げていることすら自覚できない。

「ぶざまな、火球」

「なにっ?!」

やった——と思った瞬間、悪魔の巨体が炎で包まれる。
味方の魔法ではない。

若き軍師は警戒しながら魔法の射出元へ眼を向け、一体のアンデッド、死者の大魔法使いを睨む。

「お仲間を殺すとは、穏やかではありませんね」

「愚か、人間などに止めを刺されるという愚行を未然に防いでやったのだ。感謝される覚えしかないな」

瓦礫に囲まれた炎の海にありて、死者の大魔法使いは悠然と佇む。

ダメージを受けていないわけではない。魔法や弓矢、投石による追撃でも無視できない痛手を被っているはずだ。

まあ、つまりはやせ我慢。

アンデッドに可能かと問われると、実際にやっているのだから事実なのだろうとしか言えないが、僅かな生き残りの一体である死者の大魔法使いは、最後の最後まで人間どもを撃ち滅ぼすべく氣勢を上げる。

「我をそこらの死者の大魔法使いと一緒にするなよ！ 我が名はルクル！ 御方に直接召喚して頂いた特別製だ!!」

確かに普通とは違うのだろう。

能力も迫力も、すでに倒されている死者の大魔法使いとは一線を画しているようだ——が。

「ふはははは！ そうか、貴方は特別なのか！ ならば逃げはしまいな！」

「逃げるだど?! 逃げ隠れしているのは貴様らだろうが、人間！」

鱗の悪魔を仕留めた部隊は再び身を隠し、射線上にはいない。広場を攻撃している他の部隊も、瓦礫に身を隠しながらであるので、一度に殲滅とは難しいだろう。

勘に頼りながら〈魔法の矢〉で駆除するにしても、朽ちかけた我が身の方が先に駄目になる。かといって、いやがらせ気味に飛んでくる投石を躲し続けながらこの場に留まるのも無理があるろう。

それに眼下は火の海なのだ。〈飛行〉が切れたら、そこで終わる。

「我に撤退はない！ 御方の名に懸けて人間などに敗れるわけにはい

かんのだつ！

ファイヤーボール
〈火 球〉！

「おうっ！」声を頼りに打ち出された炎の球が、誰かの頭をかすめて後方の家屋へぶち当たる。

「火が好きなのだろう？ ならば貴様らごと、この都市を炎で滅して

くれる！ 火 球」

「ぶぎけるな！ 誰が好き好んで自分の街を燃やすものかつ！」

都市を半分以上火の海と化して、魔王軍を壊滅させる。

はつきり言つて〈飛行〉などの魔法で飛ばれたら、もしくは転進して一目散に逃げられたら目も当てられない事態になりそうな愚策ではあるが、当の死者の大魔法使いが向かつてくることから分かるように、魔王軍に関しては有効なのだ。

御方とやらを信奉するが故に、盲目的なまでに前へ進む。

だからこそ、待ち伏せしているだけで獲物は畏にかかる。

「人間ごときがっ！ 穴倉から引つ張りだしてやろうぞ！ 雷 撃」

瓦礫の壁で〈火 球〉を防ぐも、熱風と多少の火傷はどうにもならない。それでも命はあるのだから感謝しなければならぬが、隙間の目立つ即席の壁では、貫通特性を持つ〈雷 撃〉を防ぐことなど無理だろう。

「ぐがあああああ!!」

「ふははは、これで指揮官の一人は黒焦げだ！ 残りも同じよう——ん？」己の戦果を確認しようと瓦礫の奥へ身を乗り出しても、そこに死体らしい死体は無かった。

「そんな馬鹿なっ、声は確かにここから」

反論も怒鳴り声も悲鳴も、確かに同じ場所から聞こえていた。だからこそ集中的に攻撃していたのだ。

それなのに——、顔を上げた死者の大魔法使いの周りには、神官らしき伏兵が魔法発動寸前の状態で現れる。

『ははっ、待ち伏せは楽でイイな』

「なっ？」

何もない空間から声が響いて、死者の大魔法使いはようやく気づく。

離れた場所に音を出す下級魔法。

俗に「遣い魔の悪戯」と呼ばれる、攪乱用の魔法。

ソレに誘き出されたのだ、ということ。

「邪悪なる存在よ、滅するがいい！　〈聖なる光線〉!!」

「おごおおおおおおお!!」

エ・レエブルの信仰系魔法詠唱者トップスリーが放つ聖なる光の前に、手傷を負っていたアンデッドは抗う術を持たない。しかも弱点である神聖属性だ。まるで粥飯をすくうかのように、そこかしこが抉れてゆく。

削られた骨の土台が他を支えきれずに崩壊し、残っていた半分だけの頭蓋骨が転がる。

なにか言いたそうにカタカタともがくものの、呟いた最後の言葉は誰の耳にも届かなかった。

「よおし！　最後の一体を仕留めたぞ！　我らの勝利だあ!!」

進むことしか頭になかった二千五百にも及ぶ化け物の残骸を見下ろし、若き軍師は勝鬨を上げる。

選抜されたエ・レエブルの精鋭たちは騎士や冒険者、請負人の区別なく、肩を抱き合って己が歴史の中に名を刻んだのだと吠えたくる。

魔王軍撃退。

人の身では不可能な偉業であろう。

かの十三英雄ですら拍手喝さいを送ってくれるに違いない。

それほどまでに素晴らしき勝利なのだ。

人間が能力の限界まで力を振り絞れば、ギリギリ打ち勝てる——そんなか弱き僕たちで構成された第一陣であるのだから。

第27話 「サンタ魔王」

「敗レタ、ダト?」

戦場となつてゐる各都市を視界に収めることなど出来るわけもない後陣にて、コキユートスは初敗北の報告を受け取つていた。

〈伝言〉による情報網が断絶したため、後方から偵察してゐた悪魔メッセージの一体が東方第一陣の完全壊滅とも言える無残な有り様を——またそこへ至るまでの大まかな経緯を伝えにきたのだ。

ただ、遙か遠方からの視認であつたが故に、現地の細やかな情報を得ることはできない。

「はい。アンデッド部隊、悪魔部隊、共に残存兵力は皆無テあります。戦場となつた都市は人間自身ノ付け火にヨつて黒焦げデ、人間どもガ籠城のためナのか、修復作業を行つてゐるトのことデス」

「ソウカ、モモンガ様ニ創造シテ頂イタ『エルダーリッチ』モヤラレタカ……」

第一陣の壊滅に後悔はない。

そもそも人間たちの抵抗を煽るための部隊であり、『もしかしたら魔王軍に勝てるのではないか?』と希望を持たせるための演出なのだ。

だけど、モモンガ様の召喚シモス僕まで犠牲になつてしまつたことは心に刺さる。魔王様自身が「使い捨てで構わん」と仰つていたとしても。

「ソレニシテモ……。他ノ都市ハ防戦一方デアルノニ、何故東方ノ小都市ガ?」

戦力的に言えば、援軍が駆けつけたエ・ペスperlの方が圧倒的だ。

数万規模に膨れ上がった王国軍に対して魔王軍は二千五百。しかも骸骨スケルトンや動死体ゾンビなど、一般民兵でもなんとかかなりそうな相手も含まれてゐる。

それなのに——。

エ・ペスperlは攻めと籠城で意見が割れ、指揮系統が真つ二つに引き裂かれていた。仲間内で物資の取り合いが始まり、多量の避難民で圧迫された食糧事情も含め、見るも無残な有様。

防衛に特化しているわけでもない地方都市は、アンデッドや悪魔に取りつかれたまま、魔王軍相手ではなく身内同士で小競り合いを始めてしまったのだ。

「コキュートス様……」思考に耽る指揮官を前にして、巨大な一本角を備える黒曜石の如き甲殻の巨大蟲は、「東方軍八咫に掛ケられたと思われマス。都市のほぼ全域が焼失しておりマしたのデ、誘き寄せての火責めかト。アンデッドはもとヨリ、悪魔でモ厳しい状況に追イ込まれたのではナいでしようカ」と語る。

「フム、手際が良過ギル気モスルガ……」

魔王軍と対峙した王国軍兵士たちの反応は大抵同じだ。

まず驚愕、そして悲鳴、逃亡。

気を持ち直して剣や槍を向けてくるには、少しばかり——というか結構な時間を要するはずである。実際、エ・ペスペルではそうだった。「情報ノ収集と分析に優れた指揮官が率いてるのでシよう。人間側の犠牲モ少なかつタと聞きます。なかなか力に面白そうデすな」

最後の一言は、『出番がきた』とでも言いたいのだろう。

人間どもを滅ぼす本命の第二陣。

死デスナイトの騎士や魂喰ソウルイーターらいなどの中位のアンデッド、及び伝説に語られるような——それでもナザリックでは中位の扱いだが——悪魔たちで構成された撃滅部隊だ。

数は千五百と少なく、それも三つに分けられているので東方に向けられるのは五百程度であろう。まあそれでも、人間の軍隊など相手にならないと思われるが。

「指揮ハ私めニお任せクださい」見事な一本角を深く下げ、巨大なカブトムシを思わせる側近の一人はコキュートスへ嘆願する。

「ソウダナ、第一陣壊滅時ニ姿ヲ見セテイナイ強者ガイルヤモシレン。ソノ場合ハ、情報ヲ持チ帰レルダケノ実力ガ必要ダロウ。タダ、戦況ハ逐一知ラセルノダ。エルダーリツチヲ何体力連レテ、〈伝言メッセージ〉ニヨル情報伝達網ヲ構築シテオケ」

「はッー」

一本角の実力は守護者側近に相応しく、レベル80を軽く超えてい

る。

これならば相手がプレイヤーであろうとも瞬殺は免れよう。強者の情報をコキュートスの元へ運ぶことだって容易いはずだ。

第二陣の僕たち^{しもへ}が足止めのために全滅しようとも、強者の情報さえ得られれば何も問題はない。コキュートスが本陣の側近たちを引き連れて叩き潰せばよいだけだ。もちろん可能であればだが。

この戦争に関する全ての差配はモモンガ様より任されている。たとえレベル100のプレイヤーが出てこようとも、ナザリックの助けを借りずに対処しなくてはならない。その覚悟で軍を率いているのだし、そのための本陣だ。

手に負えない最強の勇者が立ちはだかるかもしれない——そんな『もしも』を胸に、コキュートスは側近を送り出す。

「サア食イツクガイイ勇者ヨ。私ニ「ガチバトル」ヲココセ」

ガチンと何かを噛み砕くかのような警戒音を鳴らし、コキュートスは実戦を渴望する。

ここ最近、白黒少女との縛り戦闘で己の実力は飛躍的に上昇していると感じていた。今までにない戦闘経験を毎日のように味わい、死と隣り合わせの環境に酔いしれていたのだ。

だが足りない。

白黒少女は高レベルであり、相応のハンデさえあれば危機的状况も作り出せる。

しかしそれは全力勝負ではないのだ。

真に望むは、全てを出し尽くしても負けるかもしれないと思える絶望感——を乗り越えて勝利を掴もうとする命を懸けた死闘。

「カツテノ屈辱ヲ——晴ラストアメニ」

過去に一度、そう一度だけコキュートスは蹂躪されている。ナザリック第五階層にて、千を超えるプレイヤーどもに。

だからこそ乗り越えたいと願うのだ。

弱き過去の自分を。



「よく燃えるものだな……」

人気の無い宮殿らしき大きな通路を一体の骸骨が歩く。

豪華なローブを着込んだ骸骨が——コツンコツンと外見に似合わない小さな足音を立てて歩く通路は、廃墟とまでは言えないものの所々が破損しており、掃除らしい掃除も行われなくなつて久しいようだ。

それにすごく寒そうである。

壁や窓が穴だらけであることも関係しているのだろうが、大気自体に冷気が漂っているような気がしてならない。当の骸骨は、白い息を吐きながら両手を擦るなんて仕草とは無縁なのだから、この場が極寒の地であろうと関係ないと思うが。

「都市全体に燃え広がるとも消火するつもりはないのか？ いや、消火可能な規模では罫の役目を果たせんとみたのだな。うむうむ、悪くはない——が、価値としては普通の人間並みでしかなさそうだ。タレントも無し、か」

ふよふよと浮かぶ魔法の鏡をコツンと弾き、骸骨は鏡面に映し出されていた炎上都市から目を離す。

ちようど目の前に巨大な扉が現れたからだ。

ナザリック第十階層の大扉よりは大きさも豪華さも、強度すらも及ばない無価値なモノかもしれないが、人の世からすると素晴らしい一言に尽きよう。

廃墟の如き宮殿にありながら傷一つなく、成竜ですら楽に通れる大きさ。もしかすると魔化されているのかもしれない。

「ふむ、ここのが——」

『モ、モモンガ様、あの、よろしいでしょうか？』

さつそく傍にいたハンゾウたちに扉を開けさせようとするも、^{メッセージ}〈伝言〉の魔法が可愛らしい子供の声を届けてくれる。

「マーレか、探し物は見つかったのか？」

『は、はい！ えっと、逃げようとしていた小さいのも含めて、全部お姉ちゃんが見つけてくれました。あ、あの、でも、三体ほどは攻撃し

てきたので殺しちゃいましたけど……」

「その程度は構わん。従わぬ者は殺せばよい。それにドラゴンは皮も肉も、骨だつて使い道はあるのだからな。司書長も喜ぶことだろう。……それで？　なにか面白^レそうな個体^アはいたか？」

あまり期待はしていないが、雪と氷で覆われているアゼルリシア山脈まで「竜狩り」——ただ単に足を踏み入れた場所が竜の巣だっただけの偶然——に赴いているのだ。成果の一つぐらい期待したいところである。

『え、えくつとその、眼鏡をかけた太めの丸いドラゴンならいましたけど……。でもあのつ、お姉ちゃんが「粗相するような汚いドラゴンなんかいらない！」つて怒っていましたから、モ、モモンガ様にお見せできるようにモノではないかと』

「太めの、丸いドラゴンか。まあ、気に入らなければ素材にするだけだからな。見るだけ見ておこうか」

『は、はい、かしこまりました！　えっと、生き残ったドラゴンはこのまま捕縛しておきます』

「うむ、ではあとでな」

嬉しそうな子供の返事を最後に〈^{メッセージ}伝言〉は終了した。

「さて——」

神々さえ侵食するほどの深い闇に満ちたローブを着込む骸骨こと大魔王モモンガは、再び大扉へ赤眼を向ける。

この扉は宮殿の最深部を護る最後の扉だ。つまり奥にはラスボスが待ち構えているに違いない。ユグドラシルでは定番中の定番コース。〃悟〃と何度味わったことだろう。

「ドワーフの宝物庫を探すクエストで、フロストドラゴンの巢にぶち当たる……か。捻りはないが、懐かしい感じはするな」

白い息が出るわけもないのに「はあく」と人間らしく振る舞い、しばし佇む。

そんな大魔王は、再度側頭部に手を添え魔法の発動に意識を向ける。

「ナーベラルか？」

『はいっ、モモンガ様。御報告いたします。先程、集結していたモグラどもの軍勢を発見、即時襲撃へと移りました。現在は、ユリ姉様がモグラの総大将と一騎打ちをおこなっております』

「ほう、総大将か。強いのか？」

『はい。モモンガ様からすればミジンコのごとき脆弱さではあるものの、ユリ姉様とある程度は打ち合っております。もちろん、本気を出せば即座に叩き潰せるかと。相手のモグラは多少なりとも斬撃耐性を持っているようですが、ユリ姉様の発勁ならば一撃で全身粉々にできましよう』

少しでも姉の評価を上げようと頑張っているナーベラルの報告に、モモンガはホッコリと満足げに頷きながら、しかし大魔王の威厳たっぷりぷりに返答する。

「ユリを相手にできるなら中々使えそうだな。よし、モグラどもは勇者たちの経験値に使用する。生かして捕らえ、服従させよ。だが刃向うものは殺してよい、とシズにも伝えておけ。後でアウラとマーレもそちらの手伝いへ行かせる」

『はっ！ かしこまりました！』

歓喜の感情を抑えきれないかのようなナーベラルとの通話を終え、モモンガはふと思考する。

ある目的のために山小人ドワーフの国へ訪れたとき、最初に出会ったのが人間並みに大きなモグラの亜人だった。

最初はただの魔獣かと思い、普通に群れごと蹴散らしてしまった。ただ、会話ができるだけの知能があるとなれば、「利用してみるか」と考えずにはいられない。

結果、育成中の勇者へぶつけるのに十分な強さ、そして数を備えていると判明。

「これなら気兼ねなく使い潰せるな」と一人納得し、この地でのモグラ放牧と、その都度必要な数だけを経験値として消費させようと決断した。

「これで少しはサマになってくれるとよいのだが、今のところは白黒女と槍使いぐらいだからなあ。やれやれ」

最近独り言が多くなってきたような気もする、と妙な感想を抱きつつ、大魔王モモンガは大扉の前へ歩を進めては、「ラスボスを待たせては悪いからな、さっさといくか」と傍にいるハンゾウたちへ扉を開けるよう指示を下していた。

「さてと……」

大扉は何の抵抗も受けず静かに動き、その奥にある大きな空間と巨大な白い生物を――

ボゴオオオオヴフツ!!

刹那、押し開けた空間から冷気の津波が押し寄せる。

中へ入ろうとしていたモモンガとハンゾウたちは、生物が生き残れないであろう極寒の地獄で足を止めていた。

叩きつけられた爆流が宿すは、生命活動を停止させる寒さだけではない。その勢いだけでも四肢五体を消し飛ばしそうな威力だ。その冷たき暴風の中においては、『寒さに強ければ耐えられる』なんて言葉は意味を持たない。

「やれやれ、挨拶もなしに冷氣系のドラゴンブレスか。まあ、初手で最大の攻撃を仕掛けてきたことには賞賛を送ろう」

大扉付近一帯が凍りつくも、大魔王は悠然と一步を踏み出す。供のハンゾウたちも何事もなかったかのように付き従うが、身体に霜がはつているところからすると流石に無傷とはいかなかったようだ。

「ハンゾウよ、四体同時のドラゴンブレスを喰らった感想はどうだ？」

「はっ、氷結や移動阻害などの状態異常は抵抗できませんでしたので問題ありません。体力に関しては一割も削られていないかと」

ハンゾウは高レベルモンスターながらも隠密や偵察に特化しており、防御面はさほどでもない。それ故か、格下のドラゴンでもダメージを与えることは可能なようだ。

「ふむ、まともに喰らってもそれだけか。こちらは常時発動型特殊技術を切っても、暴風粉塵によるかすり傷が関の山。冷氣には最初から耐性を持っているしな。とはいえ、これがダメージを受ける感覚……、痛みか」

骨の手を何度か開いたり握ったり、大魔王は初めての負傷に感慨深

く頷く。

傍に守護者が居る状況では、誰かに攻撃されて傷付くなど許されるわけもないので、大変珍しい状況であると言わざるを得ない。わざわざアウラやマールに任務を与えて遠ざけただけの価値はあろう。

「な、なぜ動ける!? スケルトンごときがつ!!」

呆けていた意識を取り戻し、巨体の竜が吠える。

この地の主である霜の竜の王、白き竜王こと「オラサーダルクⅡヘイリリアル」であろう。傍には側近もしくは妃かと思われる三体の竜が警戒しながら控えていた。

「侵入者は貴様か?! 私の子供を殺したのは貴様なのか?! 下等なアソビが私の居城へ攻め込んできたというのか!!」

なんの前触れもなく居城へ入り込んできて、追い払おうとした子供は瞬殺。「待ち伏せてブレスによる奇襲を」と懇願してきた妃、「キーリストランⅡデンシシュア」の案を採用し、見事ぶちのめしたと歓声を上げようとしていたところで、悠々と骸骨が歩いてきた。

目も眩まんばかりに豪華で、後ずさりしてしまいそうなほどの沸き立つ魔力を秘めたローブをバサリと翻しながら。

「ただのスケルトンではない、のか?」

「これが竜王だと? 名前負けも甚だしいな。だがまあ、特訓の相手ぐらいにはなるか。ハンゾウ、カシンコジ。大人しくなるまで痛めつけてからナザリックへ運べ。〈転移門〉は開けておく」

「はっ!」

多数の声が上がったと思いきや、モモンガの周囲から『どっさり』と言わんばかりに人影が湧いて出た。

姿は軽装のヒューマノイドタイプで、いわゆる忍者型モンスター。ただ武装や衣装に違いが見られるので、いくつかタイプがあるのだろう。

「ふ、ふぎけるな! 私は王だぞっ!!」

ヒュゴツ、と多量の空気が引き込まれ、周囲から熱が奪われる。

ドラゴンブレス
竜の吐息の事前動作だ。

「他に芸はないのか?」と魔王様から愚痴が零れそうな状況ではある

ものの、竜にとっては自慢であり最大の攻撃手段なのだから仕方がない。

「凍りつくがいい!! このお——んぐえつ」

冷気ブレスが玉座の間と思しき空間を満たす前に、竜の首が折れ曲がる。

見れば複数のハンゾウが、竜の首に拳を叩きつけていた。殺傷能力はたいして望めないだろうが、圧倒的なレベル差を前にすると首の骨ごと引き千切ってしまいそうな勢いだ。

と同時に、他の三体も捕縛される。

内一体は主人である竜王が暴れている隙に逃げ出そうとしていたようで、大きな柱の影から引つ張り出されていた。

「あれは雌なのか？ うゝむ、違いが判らんな」ずるずると連れて行かれる霜の竜をしばし眺め、首を傾げる魔王様。

フロスト・ドラゴン
だがしかし、そんな興味を満たすために此処へきたわけではない。

狙いは山小人^{ドワーフ}の宝物庫。

何人たりとも入り込めない、国宝だらけの最深部。

「ふふふ、他国の宝物庫へ足を踏み入れるのはこの世界へきて二度目か。とは言っても、すでにドラゴンによって占拠されていたのだから『他国』でもないか？ 竜狩りで得た戦利品とでも言うべきかな？」

法国での出来事を思い起こしながら、貴重な鍵開けアイテムで魔化された扉を開錠する魔王様は、「誰かいないだろうか」と中を覗き込みつつ、一呼吸後に魔法で場を明るくする。

ちなみに、明かりを灯すのは「悟」がいた頃からの癖だ。暗闇を見通すアンデッドなのに、何故か自然と光で闇を払ってしまう。闇を代表する大魔王様であるにもかかわらず……。気分的な問題、か？

「まあいいか。それより」足を踏み入れれば、山積みだった見知らぬ金貨がガチャガチャと零れ落ちる。

宝物庫へ入る前も、竜王の溜め込んでいた金貨や宝石、黄金などを「シユレツダーへ流し込むか」と横目で観察していたが、流石は長年人の手が入っていなかった聖域だ。

乱雑に敷き詰められていながらも美しい。まるで時間が止まって

いたかのよう。

金貨の山に突き刺さっている青いブロードソードからは、当時の山小人^{ドワーフ}どもが如何に慌てて国の宝を押し込んでいたのかが見えてくる。

「……ん？ フルウィウスか？」さらに奥へ進もうとして、モモンガはふと魔力による意識の繋がりを感ずる。

「ドワーフどもがどうかしたか？ ニューロニストやブレインイーターたちなら大丈夫だろうが……」

『はっ、モモンガ様。ニューロニスト殿率いるブレインイーター部隊は、順調にドワーフどもの脳を吸っております。今は「摂政会の長たち」や「軍事関係者」を喰らい終え、「鍛冶職人」や「ルーン職人」などを襲っているようです』

「そうか……」山小人^{ドワーフ}の国へ出張中の司書、死の支配者^{オーバーロード}「フルウィウス」からの報告に、大魔王は少しだけ失望を滲ませる。

「やはり「勇者」はいなかったのだな」

『はい、抵抗らしい抵抗ありませんでした。切り札となる魔法具^{マジック・アイテム}も、一撃必殺の魔法もありません』

国として存在している以上、奥の手らしき何かを備えているのではないかと期待していた。だから、『山小人^{ドワーフ}の国がある』との情報程度で乗り込んだのだ。

途中で宝物庫やモグラ亜人の情報を得たので、ニューロニストや死の支配者^{オーバーロード}の司書たちに後を任せてしまったが、最後の最後、国家存続の危機ともなれば、隠れている何者かが顔を出してくるのではないかと期待だけは残っていた。

「つまらん結末だ。ドワーフの国は潰しかまわんな。……ニューロニストに伝えよ。職人の脳を吸っても、知識はともかく経験を反映させることは難しい。適当なところで切り上げてナザリックへ帰還し、集めた情報を纏め上げておけ——とな」

『はっ』

「ああ、それから、デスナイトを何体か召喚して、生き残りの始末をさせておけ。放棄したという都市も同様にな」

『はいっ、お任せください！』

山小人^{ドワーフ}の国に興味はない。いや、興味が無くなったというべきか？勇者やそれに類する対大魔王への切り札が無い以上、意識を向ける価値はない——というだけのことだ。

ただ、宝物庫に埋蔵されていた『伝説上の英雄が所持していたかもしれない』と思うほどの武器に関しては、時間を割くだけの価値はあろう。

「……ふむ、今まで見た中でも破格の性能だな」近くにあった剣の内包魔力を軽く探査し、人類社会ではありえないくらいの高レベルであることに少しだけ驚く。

これほどの——もしくはそれ以上の魔剣を所持しているのは、今は亡き法国の漆黒聖典ぐらいであろう。

ならば大魔王モモンガの思惑は、期待通りに進むというものだ。

「よし、フウマ、トビカトウ。宝物庫の武器を集め、帝国の皇帝に渡してこい。大魔王からの餞別だ、とな」

「はっ、即座に！」

「残りの者は武器以外のモノをナザリックへ運べ。金貨や宝石はエクステンジ・ボックスへ放り込むから宝物殿だ。魔法^{マジック・アイテム}具や魔導書は大図書館のテイトウスへ渡せ」

「はっ、かしこまりました、モモンガ様！」

慌ただしくなる宝物庫の前に、モモンガは十分な収穫があったと一人満足げに頷く。

これで帝国の皇帝、ジルなんとかは対大魔王の人類救済連合軍を編成しやすくなるだろう。やる気になってくれるはずだ。

今まで目にしたことのない伝説級の武器が、山ほど目の前に積み上げられるという事実。これに奮起しない英雄がどこにしようか？

我こそは！ と魔王の前に堂々と立ちはだかつてくれるだろう。

今から楽しみだ。

「ああ、王国にも少しぐらい送っておくべきだったか？ いや、もう戦争が始まっているのだから、横やりは無粋かもしれないな。あつちはパンドラに任せておこう」

大魔王は再び魔法の鏡を浮かばせて、炎上する都市を、積み重ねられる人間の死体を、泣き叫ぶ英雄たちの有り様を眺める。

「王国が滅びる前に、あと数か国は潰せるかな？」モモンガは休憩時間に所用を済ませるかのような感覚で、懐から地図を取り出してはフロスト・ジャイアント「霜の巨人か……、ビーストマンか」と軽やかに呟くのであった。

この日、ドワーフ山小人の国はひっそりと滅亡した。

ついでにフロスト・ドラゴン霜の竜の群れも居なくなつた。

後に残るは、徘徊する死デスナイトの騎士の集団。生きとし生けるモノを探し出しては肉片へと変える、一切話の通じない凶悪なアンデッドたち。そして飼育されて、誰かの都合で殺されるモグラ亜人の一族。

『後の世にこの地を訪れた者たちは、あまりに悲惨な国の末路を目撃してこう語つた』——と本来なら様々な逸話が後世に残るところなのだろうが、実際は何も語られないし残らない。

なぜならこの地へ足を踏み入れた者たちは、誰も生きて帰れないのだから……。

第28話 「黒焦げ魔王」

「なんだあれは?!」

次なる魔王軍の手勢に関しては情報を得ていた。
数百程度の小規模部隊。

これならば再度小都市で一当たりし、撤退戦を敢行しながらエ・レ
エブルまで下がり、そこでの包囲戦で殲滅できる。

そう判断していた。

いくらアンデッドだ、悪魔だと言えども、全方位を囲まれた状態で
魔法付与された遠距離攻撃や魔法攻撃を浴び続ければ、耐え切れる筈
がないと。

王都で暴れたという死の騎兵デス・キャバリエであろうとも、四方八方から手傷を受
け続ければ、その身を保持できるはずがないと。

「なんなんだ! あの花け物は?!」

若き軍師は、ゆつくりと進軍してくる黒い鎧を着込んだ大盾を持つ
戦士、闇色の靄を纏った骨だけの馬を見て、レエブン候に付いていつ
た元オリハルコン級冒険者との会話を思い出す。

『いやあ、カッツエ平野にはいかなんかいい方がいいですよ。若い奴らは平
気で討伐依頼なんか受けていますけど、昔あそこでは帝国兵が山ほど
殺されたんですから。たった一体の戦士のようなアンデッドにです
よ。あの逸脱者が出てきて騒動は収まったらいいですけど……。ヘ
タをしたら帝国が滅びていたかもしれないですねえ。あの獣人国家の
ように。あつちも今じゃ伝説扱いですけど、魂喰ソウルイーターらいつて知ってます
? 骨だけの馬みたいなアンデッドで、たった三体で十万以上の
獣人ビーストマンを殺したって話です。ははっ、規模がデカすぎて嘘みたいです
よね。でも滅びた都市の跡は現実に残っていますから笑えませんよ。
ほんと、私らがアダマンタイト級になつていたとしたら、やり合えて
いたんですかねえ。絶対無理だと思っただけですがねえ』

あの時は話が長いと眉を顰めたものだが、思い出した今は背すじが
凍る。

再度城壁の上から魔王軍を見すえ、遠眼鏡を震えた手で支える。

大盾と波打つ長剣を持つ黒い戦士、それとは別に歴戦の傭兵であるかのようなアンデッド。フヨフヨと浮かぶ骨馬の後方には、巨大な捻じれ角を備えた巨体の悪魔。中には軽装鎧を着込んだ宮廷騎士のような細身の悪魔までいる。

最後方には、悪魔とは異なる形状の一本角を天に突き上げた、部隊の中でも最大の体格をもつ蟲のような化け物。全身に纏う黒き宝石のような輝きの甲殻には、どんな傷もつけられそうにないと察してしまいそうだ。

「ち、ちがうちがう！ 今までのアンデッドや悪魔とは世界が違う！」「これが本隊か?!」と叫びそうになる。今まで戦っていたのは前座でしかない。こちらの身体を温めるための、観客の気持ちを高ぶらせるための捨て駒だったのだ。

「駄目だ……、罨も奇襲も、剣も魔法も——効くものかつ!!」

遠眼鏡を叩きつけ、頭を抱える。

もう終わりだ。

用意していた罨も、配備していた伏兵も、全てが無駄だ。襲い掛かれば、その分だけ死体が増えよう。もちろん人間の死体だけが。

「ラナー殿下は知っていたのか?! レエブン候は?! 死の騎兵デス・キャバリエとやら

が伝説級のアンデッドだと? 理解していたのか?! 人類には手も足も出ない相手だと! その上で時間を稼げと言ったのか?! 私たちに無駄死にしろと! 抵抗など出来るわけもないと知りながら? 虫のように死ねと?! 最初から——最初からそのつもりだったのかあ!!」

あまりの怒りに我を忘れそうになる。

即座に『いや、王女殿下は知らなかったのだろう。知り得るわけがない!』と己を律しようとするも、次から次へと怒りが湧いてきて仕方がない。

魔神が引き連れる軍勢を相手に時間を稼ごうとしたら、軍勢の全てが魔神だった。

そんな事態を誰が予想できるのか? そう、誰も予想しようがないのだ。だから誰も悪くはない。悪くはないのだ。

「くそっ、撤退だ！　もはやどうにもならない！　エ・レエブルへ退却しろ！　退却だ!!」

相手に一撃を喰らわしてから撤退戦へ移行するつもりで、焼け焦げた都市を整備していたのだが、それも無駄になってしまった。

今は逃げることしかできない。目くらましの意味で火だけは放つつもりだが、意味が有るかは不明だ。『魔王軍は逃げる者を追わない』という情報が正しいことだけを祈るとしよう。

「だがどうする!?!　エ・レエブルへ逃げ帰ってどうするんだ？　あの地は籠城戦に向かない。しかもこの地から無理矢理避難させた住民で溢れている。今から他の街へ移動させるのは無理だ」

馬にしがみ付くかのように強引に跨り、焦げ臭い無人の都市を後にする。

周囲では「どうして撤退するんだ？　あの程度の数、地の利があれば！」と勇ましい不満をぶつけてくる冒険者や請負人^{ワーカー}たちの姿も確認できるが、大半は暗い表情で馬を走らせているだけだ。

彼の者らは感じているのだろう。

知り得てはいなくとも、肌で理解してしまうのだろう。

羽虫のように潰されるのだと。

「どうするどうするどうする？　どうすればいい?!」考えに考え抜けば、何かしらの策を講じることはできた。今まではそうだった。ゴブリンの群れに襲われた時も、事前に察知していた優位を生かして圧勝できた。

しかし、もう戦ではない。殺されるだけの蹂躪劇だ。どうやって死ぬか、どうやって殺されるか、それだけの選択だ。

「——いや待て。そう……、死ぬとして……、どうせ死ぬのであれば……」

若き軍師は、事此処に至りてすべてを放棄しようかと決断した。

戦いを捨て、役職を捨て、国を捨てる。そう、この戦いは王国軍と魔王軍との戦争。

ならば——

「エ・レエブルの全住人を、流浪の民としてトブの大森林へ流そう！」

王国とは無関係のどこか別の場所から流れた民であるとし、バラバラに散ってもらう！ それしかない!!」

無論、途中で死ぬだろう。トブの大森林へ辿り着いても、獣や亜人たちに殺されるだろう。魔王軍に見逃してもらえない場合もある。

それでも幾人かは生き残るかもしれない。それに懸けるしかないのだ。

「ああでも、魔王軍の気を引く役目が必要か……。くそっ、軍の中から志願者を募って、ぬぐぐう、指揮を執るのは私か？ だよなあ、それしかないよなあ」

貧乏くじだ——と呟きつつ、職務放棄を決めたはずの軍師は腹をくる。

王国なんかに義理はない。王女殿下も遠目で見かけたことがあるだけだ。レエブン候に感謝の念を持つてはいるが、命懸けの任務遂行ではなく、己の無駄死にとでは天秤にかけられるほどのものでもない。

ただ、エ・レエブルに集う百万越えの無力な人々には生き残ってほしい、と純粹に思う。そのためならば仕方ない。命を懸けるのも仕方がないのだ。

私は、勇者なんかではないというのに……。

「くそつたれがあああ！ 勇者が登場するとしたらここしかないだろう！ どこにいやがんだよっ！ ふざけんなよおおお!!」

手も足も出ない天災に巻き込まれた被災者のように泣き喚き、気持ちと裏腹な晴天を仰ぐ。遠くまで広がる青い空に、高い位置に広がる白い雲。

そして雲に隠れて飛ぶ、複数の影。

軍師は頭上の変化に気付くことなく、手勢を纏めてエ・レエブルへと逃げ帰った。そこで民衆を前に、最悪の演説をぶちまけることとなる。

魔王軍が襲来する。止めることはできない。王国は滅亡し、国民は虐殺される。もはやこの地に生き残る道はない、と。

パニックは避けられないだろう。それでも語らないわけにはいか

ない。

逃げろ、と。この国から逃げろ、と。

最後まで聞いていた者がどれぐらいいたのかは分からない。軍師の話の嘘だと断じて立て籠もる決断をした者もいるだろうし、我先に逃げ出した者もいるだろう。

王都なら大丈夫かもしれないと、馬車を走らせた富裕層はまだ気持的に余裕があるのかもしれない。あちらにはアダマントイブ級冒険者や多くの上級冒険者がいるのだから、それを頼ろうとするのも一案ではあるだろう。

エ・レエブルはこの日、軍を解体し統治機構を消滅させた。

元軍師の若者は、冒険者や請負人ワーカーに声を掛け、『街へ残って魔王軍に対する囮の役目を担わないか?』と提案する。ついでに『間違いなく死ぬけど』とも付け加える。

多くの者が嗤い、罵倒した。

防衛責任者が職務を放り出して、都市を丸ごと無秩序にしたのだから当然だろう。魔王軍の脅威を肌で感じていない者にとっては、そのように映るのだから仕方がない。

でも、僅かながら残った変人もいる。

レエブン候に恩を感じている奇特な善人。破格の報酬に目が眩んだ強欲者。

生き残れば罪状免除と言われ、『檻の中で死ぬよりは』と外へ出てきた——おそらく真つ先に逃げ出すであろう——罪人たち。

頼りない布陣だ。囮にもならない可能性もある。だがそれでも餌ぐらいにはなるだろう。あの下級アンデッドより格段に賢そうな化け物たちが、食らいついてくれたららの話ではあるが……。

元軍師が見つめる南方に敵影はない。

かの化け物どもはいまだに、炎燻る廃都を蹂躪しているのだろうか？

集めた情報からすると、見捨てていった老人一人一人を丁寧に殺戮しているのと同じく、それなら街の住人をどこへ逃がそうとも意味が無かったのかもしれない。

……ああ、そうなのか。そうなんだな。

ふふ、今になつて解つたような気がする。これは戦争じゃない。勝つとか負けるとかの話ではなかったのだ。

魔王軍に潰される対象として、選ばれたのが王国だっただけ。サイコロでも転がしたのだろう。人間でも道楽で狩りなどを行うのだし、特段おかしい行動ではないのかもしれない。

それでも――。

もし勝ち負けを論ずるならば、人間側の勝利条件は生存だ。たった一人でもいいから、魔王軍の手を逃れて生き残る。それこそが魔王に對し『私の勝ちだ』と誇れる唯一の道なのだろう。

ほんと、くそつたれな魔王様には、感謝のキスをケツにお見舞いしたいところだ。



拍子抜けといったところだ。

本来であれば、都市内に入り込んだところで火を放つ予定であつたらうに、自分たちの逃走を誤魔化すための煙幕として雑に扱う有様である。

火責めと共に後方へ入り込む手筈であつた伏兵も、我先にと逃げ出しており、『第一陣を蹴散らした勢いハどこへいったのダ?』と問いたくなる。

「我らノ実力を正確ニ感じ取つたノか? だから全力で逃げだしたト? 逃げタと見せかけて罨ニかける訳でハないの力?」

元より追撃するつもりはなかったので罨があろうと無かろうとどうでも良い、とはいえ肝心の強者を確認できなかつたのは悔やまれる。

最低でも指揮官はそれなりの実力者であるはず――。

物思いに耽りながら焼打ちにあつたような焦げ臭い都市の中へ踏み入り、煙の奥に逃げ遅れた人間でも居ないかと目を細めても、打ち捨てられた瓦礫ばかりが見える。

〈生命感知〉を用いての探索にも引つかかる反応はなく、この都市が完全な廃墟であり、もはや留まる必要のない無用の地であることが確定されたわけではあるが、ふと視線を上げてしまう。

なぜこの時顔を上げたのかは、よく解らない。

気配か、空気の流れか、温度か影か、それとも別の要因があったのか、それは不明だ。

だが何かの気まぐれであったとしても、視線を向けるだけの価値をそこに見出したのは、それなりの理由があったのだと思う。

だから発見できたのだ。

上空から急降下してくる巨大な塊を。

「っ? ——— 退避ダッ! 都市の外へ出るオオオオオ!!」

叫んだ瞬間炎に包まれた。

上から叩き浴びせてくる、力を纏った炎の渦。まるで炎の吊り天井が落ちてきたかのように地面へ押し潰される。

死の騎士程度の中位アンデッドでは厳しいだろう。

側近たる己ですら無傷ではいられない。

「ドラゴンだっ?!」

飛び避けた先で見上げると、今度は電気を纏う竜の吐息が視界を覆う。かと思えば次は毒であり、風の刃であり、冷気であった。

一度の襲撃で五種の竜の吐息。

しかも、大物の傍には最高位の年齢段階級かと思える竜が各四体ずつ。計二十五体の竜が都市の中にいた魔王軍第二陣を薙ぎ払っていったのだ。

「動けるモノは何体イル?! 空ヲ飛べるモノはいルか?!」

声を張り上げても返答はない。

連絡役の死者の大魔法使いは消滅していたし、都市の外へ逃げ出たアンデッドや悪魔たちは混乱の渦中だ。咄嗟に反撃した者もいるよ。うだが、空を舞う竜には届かない。魂喰らいを始めとする飛行可能な僕たちも、天空の支配者たる竜の飛行能力には追いつけない——— どころか竜の吐息のいい餌食に成り果てている。

「ふはははは!! これが魔王軍だと?! やはり人間の情報は当てに

ならんな！」

巨大な赤い竜が上空から降りてくる。勝利宣言でもするかのよう
な尊大な態度で。

「馬鹿を言うでないわ。デスナイトにソウルイーター、おまけにグ
レーターデーモンじゃぞ。儂らでなければ対抗できぬわ」

「その通りですよ。人間にとっては魔王軍そのものと言っていていいで
しょう。少しばかり同情しますね」

「無駄口を叩いている場合ではないぞ。指揮官を仕留め損ねた。そこ
の黒い一本角、まだ戦意十分と見るが……どうする？」

魔王軍東方第二陣の指揮を預かる直立した巨大なカブトムシ、一本
角の前には、灰色の髭を生やした老齢の竜や、緑鱗、青鱗の竜がホバ
リング状態で現れた。

そんな巨大な竜の背後では、配下と思われる成竜が背に乘せていた
亜人らと共に都市内へ展開し、生存していた魔王軍を追い立ててい
る。恐らく、指揮官との合流や戦力集結を阻む目的があるのだろう。
そしてそれは、しっかりと機能していた。

「……失敗、ですわね」離れた場所に一体、不穏な眩きを漏らす白鱗の
竜。

「四肢欠損どころか体力もほとんど削れていません。やはり先を急ぎ
過ぎたのですわ。それに指揮官だけを狙うように通達していたはず
なのに、他のアンデッドや悪魔に気をとられるなんて……。はあ、な
んというか、まあ仕方ありません。さっさと退避しますよ。全員撤退
！ 戦場から離脱します!!」

「なっ?! 貴様! 正気か?!」

圧倒的に優位な立場でありながら何を言っているのか? と赤鱗
の竜は怒りを隠さない。

先陣を切って指揮官に手傷を負わせたのは自分なのだから、今更撤
退なんて有り得るはずがないだろう。手柄を手放す愚行でしかない。
「正気って……。その指揮官が健在である時点で私たちの負けですわ
よ。ああくもう、ブレスで十分に削った後なら、五体総掛かりで仕留
められたものを。……ん? あっ、死にたいのなら勝手にどうぞ」

言うが速いか、白い竜は己の眷属である四体の竜と亜人チームを連れて上空へと舞い上がる。

『巻き込まれるのは御免』とでも言いたいのか、白い雲の中へ飛び込むその迷いなき撤退に、赤鱗以外の竜は戸惑いを零さずにいられない。

「俺様だけで十分だっ！ コイツの首は俺が貫う!! お前らは行け！」

邪魔だっ!!」

ゴオンツと巨大な隕石でもぶち当たったのかと思える轟音と共に赤い竜は地上へ降り立ち、自身の半分以下にしか見えない小さな一本角を見下ろす。

一騎打ちの様相であろう。

余計な邪魔をするなよ——との思念がそこら中に漂っているかのようだ。

「ここは白のヤツに従うとするかの。嫌な予感がするわい」

「まあ、手を出して怒られるのは面倒ですもんね」

「くだらん、我らは奇襲を仕掛けているのだぞ。一つの戦場に拘ってどうする?」

一撃離脱こそが奇襲の基本、反撃を受ける前にその場から立ち去るのが常識——と言わんばかりに三体の竜とその配下たちは空へ突き飛ぶ。

残ったのは赤鱗と四体の竜、そして引き連れた亜人の強者たち。それだけでも一国を滅ぼせるほどの戦力なのだろう。だが迎え撃つ側の一本角は、逃げ去っていく他の竜たちへ余所見をし、悔しそうに唸っていた。

「我も飛べないことハないのだが、アの速度にハ敵わん。流星は天空ノ覇者、ドラゴンである」

相手を褒めつつ、一本角は背に抱えていた大剣を取り出す。

無骨な武器だ。飾り気はなく、一般的な両手剣に似ている。もちろんコキュートスの側近であるのだから相当な価値の魔法剣にはちがいない。だが、外見に拘るタイプではないということだ。

敵を倒すことだけに特化した実用剣なのであろう。

「連続ブレスでノ強襲は悪くなかつた。まともを受け続ければ、確力

に痛手を負った二違いない。だがしかし、我は健在ダ。くカカ、お主ガ先走ってくれた才かげデあるナ、赤いノ」

「なんだとっ?! 貴様は自分の部隊が壊滅状態なのを理解できていないのか?! 俺様の一撃に手も足も出なかつたであろうがっ!!」

赤鱗の竜が吠え唸るとおり、魔王軍東方第二陣はボロボロだ。五百いた兵も今では百に及ばず、負傷している者も多い。

失った兵の大半が法国で召喚された「デスナイト死の騎士」や「ソウルイーター魂喰らい」、そして中位の悪魔たちであるとはいえ、戦力としては国家殲滅級のモンスターたちだ。痛手ではない、とはとても言えない。

「無論、手酷くやられタことハ認識してイる。故に、才主の首は置いて置いてもらうゾ。コキュートス様へノ手土産——」

「虫けらがっあああああ!!!」

最後まで聞くに値しない、とばかりに咆哮を上げると、赤い竜は紅蓮の炎で視界を満たした。付き従っている最高位エインシャントの年齢段階級ドラゴンも即座に追従し、同じ炎の吐息プレスで辺り一帯を火の海と化す。

亜人の部隊は竜の背にて武器を構え、いつでも突撃できる体勢のようだ。

しかしながら、計五体の竜が放ったプレスの中で生物が生き残れるとはとても思えない。同族の竜種で火属性の完全耐性でも持つていれば何とかなるかもしれないが、二足歩行の虫みたいな一本角では全身黒焦げが精一杯であろう。死体すら残らないかもしれない。

「——我方失態の罰としてハ手緩い。残りハ全てヲ終えてから、改めテ罰して頂くとシよう」

僅かに爛れた黒い甲殻が炎の隙間に垣間見えたような、そんな気がした。

第29話 「埴輪魔王」

「ソウカ、ソレガ竜王ト呼バレル者ノ首ダト……」

広い天幕、戦場の喧騒など皆無。そんな所在不明な魔王軍本陣にて、巨体の蟲王は頷く。

「亜人を尋問シましたとこ、評議国ナル国家を支配スる五体の内ノ一体であるとか。確かニその場カラ逃げ去つタ竜のな力に、リーダ一格と思ワレル巨大な竜ガ四体ホドリました」

「フム……」

魔王軍総大将コキュートスの視線の先には、赤い竜の——あまりに巨大な首が転がっていた。

首の切断面は綺麗なものであり、炎で焼かれたためか血流が零れ落ちて赤い池を作るなんてことはない。事情を知らない者が一見すれば、『怒り狂うドラゴン』とでも命名された迫力があり過ぎる竜首の剥製かと思ってしまうようだ。

「実力ノホドハドウダ？」

「はっ、流石ハ竜種とデモ言うベキか、第二陣の手勢デは太刀打ち出来ないかト。亜人の部隊ハ脆弱ナノで無視できマしようガ、上空カラ襲いかかつてくる竜ドラゴンブレスの吐息の前ニは本陣ノ側近とテ無傷でハいられないでしよウ。もちろん正面カラ対峙するノであれば、我一人でモ問題はないカと思われマス」

残りの竜王は四体、付き従う最高位エインシャントの年齢段階は十六体。しかし、本陣の上位モンスターならば一体で対処できる。

そんな報告を聴きながら、コキュートスは『ドウスルベキカ?』と思案に暮れる。

評議国の参戦は想定していなかった。

本陣の上位勢は隠れ潜んでいるであろうプレイヤーに対しての戦力であり、王国などは第二陣までの中位モンスターで滅ぼせると判断していたのだ。

それが、竜王の乱入によって本陣の手勢を動かす必要性が出てき

た。

中位モンスターでは歯が立たない評議国の竜王たち。特に脅威でもないのだが、討ち取るなら側近を各所に配置せねばならない。空を追いかけても長時間、超高速、高機動の竜を捕らえられるとは思えないからだ。

配下の中には、空中戦を得意とする者も居るには居る。だが、狭い範囲での短時間機動が主流なのだ。速度で劣るとは思えないものの、追いかけてこの耐久戦では逃げられよう。

相手は赤鱗の竜王が討ち取られたことを知っているはずだ。ならば尚更、正面切つての対決は避けるに違いない。

だから各所に側近を配置し、待ち伏せするべきであろうと思うのだが……。

「……戦力ガ分散シタトコロヲ、プレイヤー」ニ襲ワレルノダケハ避ケナケレバ」

グムムと唸り、コキュートスは広げられた地図を睨む。そしていつもの癖であるかのように一人の友の顔を思い浮かべ、即座に消す。

『誰ノ手モ借リズニ』トノ仰セナノダ。自分デ考エナケレバ……。ソレニ第一陣ト第二陣ノ手勢ニ関シテハ『全テ失ツテモ咎メハナイ』トノ御慈悲モ頂イテイルノダカラ、コレ以上ハ過分。ナントシテモ、モンガ様ニ大勝利ヲ――』

「コキュートス様!!」

天幕内へ滑り込んできた一体の骸骨、簡素ながらも膨大な魔力が練り込まれているであろう最上級のローブを着込んだ、死の支配者^{オーバード}は、いつのも職場では出せないような大声で危機を知らせる。

「コツケイウス殿? ドウシタノダ?」

「火急にて失礼! リ・ロベル及びエ・ペスペルに攻め込んでいた第一陣が、ドラゴン部隊の強襲を受けました! 戦線が崩壊するほどの打撃を受けた模様です! またリ・ロベルの後詰に動いていた第二陣の元にもドラゴンが出現したとのことですが、こちらは様子見らしく、すぐに姿を消したそうです」

本陣で各部隊からの報告をまとめていたのは大図書館の司書、コツ

ケイウスである。

図書館で働くには過剰な戦力であるため、何かにつけモモンガが各地へ送り出している。死の支配者^{オーパーロー}の一体であり、それが今回はたまたまコキュートスのお手伝いであった、という訳だ。

「ヌウ、早速動き出シタノカ。シカモ同時多発的ナ襲撃トハ……」
思っていた以上の動きである——とコキュートスには感心しかない。

竜王の一体が討ち取られたにも拘らず、即座に分散して各地へ攻撃を仕掛けるとは、相手の覚悟を見誤ったと言うべきであろう。

評議国へ逃げ戻るかもしれない、と想像した己の考えを叱りつけた気分である。

「コキュートス様、如何なさいますか？ 今カラ戦場へ駆けつけたトとしても、竜ドモは姿をクラましタ後でしヨウガ……」

「ソナタノ報告ニアツタ白イ竜ノ動キカラシテ、戦場ニ長居スルツモリハナイノダロウ。ダトスルナラ、ソノ思惑以上ノ速サデ現地へ到達スルシカナイ」

分散した竜部隊を仕留めるのなら、本陣の側近を数名送り込めば済む話ではある。ところが相手は空を駆ける竜だ。逃げに徹されてしまえば追いかけるのも難しい。相手方もそれはよく解っていて攻撃を仕掛けているのだろう。ならば竜どもが『まだ来ないから大丈夫』と安心していている間に戦場へ飛び込めば、問題は解決する。

「相手ハコチラノ戦力ヲ把握シテイナイ。ドンナ魔法ヲ使エルノカモ知ラナイハズダ。故ニ油断ガアロウ。……コツケイウス殿、へ転移門ノ使用ヲ要請スルガ、構ワヌカ？」

「コキュートス様。私は今、貴方様の配下なのですから要請などと仰らないでください。存分に御命令をっ」

攻撃的な魔法ならコキュートスを始め、多くの側近が習得している。だが補助となると限られてしまう。ましてやそれが距離無制限、成功率100%の転移魔法となると、本陣内ではコツケイウスだけだ。

しかし一人で十分だろう。

死者の大魔法使いからの〈伝言〉で竜部隊の再襲撃通報を受けた瞬間、〈転移門〉を発動させて壊滅部隊を送り込めばよいだけなのだ。たいたいした手間ではない。

「襲撃報告ガアリ次第、ソノ一箇所へ〈転移門〉ヲ展開。側近五体ヲ送り込ム。他ハ気ニシナクトモヨイ。順番ニ殺シテイケバヨイノダ」

コキュートスは目の前で跪く一本角を見つめる。

「送り込ム五体ノ指揮ハオ主ガ執レ。手酷クヤラレタ第二陣ノ意趣返シダ。評議国へ逃ゲ戻ル前ニ皆殺シニスルトシヨウ」

「ハっ！ モモンガ様の軍へ手ヲ出しタことヲ思い知ラせてやりましょウ!!」

立派な黒き一本角に気を漲らせて、カブトムシの如き僕は竜王たちの撃滅を宣言する。もはや王国だとか評議国だとかは関係ない。魔王軍の前に立ちほだかっただけで、その手勢に手を出しただけで刑の執行は確定なのだ。

あとは時間の問題であろう。

だけれども……。

竜王の奇襲部隊が〈転移門〉で駆けつけた殲滅部隊に掴まることは一度もなかった。

魔王軍第一陣と第二陣に対する散発的な奇襲。

時に浅く、時に深く。

遠目で警戒するだけのときもあれば、上空からの高速落下で竜の吐息を叩きつけてくる場合もあり、一時も気が抜けない。

加えて逃走は異常なまでの速さだ。

一撃離脱を絵に描いたような見事とも言える逃げっぷりであり、最強の生命体である竜種の行動と考えると何かおかしく思える疾風逃走。

まるで——、そうまるで〈転移門〉のタイミングを知っているかのような……。

それに、あらかじめ部隊の中に本陣の手練れを潜ませて待ち伏せを

した場合には、まったく誘いに乗ってこなかったのだ。

こうなると一つの疑問が湧いてくる。

『竜王たちは魔王軍の情報を得ているのではないか?』と。

「……ウムム、思ッテイタ以上ニ手強イ」

コキユートスは少し唸って、手元の地図を覗き込む。

リ・ロペロとエ・ペスペルでは戦況が逆転してしまった。魔王軍第一陣は竜王らの奇襲によって半壊し、人間どもの軍に押し込まれている。現在は小部隊を複数作って竜の吐息ドラゴンブレスによる一網打尽を防ぎつつ、人間の軍に纏わりついているだけだ。

第二陣は東方の部隊以外は健在なので、再編成して各都市への後詰として動いている。もつとも、竜王らの奇襲を警戒しているので動きは鈍い。

基幹都市への接触が出来ているのはエ・レエブルぐらいであろう。

「竜王タチハ第二陣ガ都市ノ中へ入ルノヲ待ツテイルノカ? 逃ゲニクイ都市ノ中へ誘イ込ミ、人間モロトモ竜ノ吐息ドラゴンブレスデ滅ボソウト? ムウウ」

竜王らが王国の人間を助けにきたわけでないのは証明されていた。なにせ人間の兵士とアンデッドを大勢纏めて氷漬けにしたのだから……。

王国民は啞然としたことだろう。

救世主だと歓声を上げた次の瞬間、命すらも凍りつく竜の吐息ドラゴンブレスの餌食にされたのだ。どこかの魔王様が喜びそうな光景である。

「誘イニ乗ツテミルベキカ……」

第二陣を竜王たちが奇襲しやすい都市の中へ入り込ませる、と同時に全方位を監視。本陣の部隊は即座に転移可能な体制で待機させておく。そして竜部隊が現れた瞬間、〈転移門ゲート〉を使って襲撃だ。

もつとも、こちらの情報は知られているらしいので、容易く引つかかるとは思えないのだが。

コキユートスは控えていた命令伝達役に指示を飛ばす。

「エ・ペスペルニ第二陣四百名ヲ突撃サセヨ。第一陣ハ撃チ漏ラシノ掃討へ。監視員ハ都市ノ周辺ヲ警戒。ドラゴン部隊ノ姿ガ見エタラ

——、コツケイウス殿、頼ムゾ」

「はい、お任せを」

エ・ペスペルに狙いを定め、待ち伏せ計画を始動させる。ただ、本陣の側近を一人も配置しないのは悪手だろうか？ 襲いやすいよう中位の僕しもへだけにしたのは相手にバレるだろうか？

色々と不安は募るが、いつまでも侵略を停滞させている訳にもいかない。ここは状況をかき回す一手が必要な時であろう。

「竜王ドモメ、イツマデモ好き勝手ニハサセンゾ」

魔王軍と評議国の竜部隊。両者の決戦が迫る中、蚊帳の外となっていた王国の出血は見るも無残な有様であった。

戦場は化け物どもの博覧会。

逃げることは叶わず、先程まで声を掛け合っていた仲間が血塗れの顔を向けてきたかと思えば、食らいついてくる。

死因すら解らない場合も多い。何故吹き飛んだのだと、何故人形のように崩れたのだと、逃げ方すら不明だ。

おまけに何体もの竜ドラゴンが空から襲いかかってくるという。

いったいどうしろというのだ!?

骸骨スケルトンも人間も、竜ドラゴンにとつては似たようなモノなのか？

ふと、狂いかけた視線を空から地上へ戻す。地面から伝わる微かな振動に、吐き気を覚えては口を押さえる。

『う、動き出したぞ』

誰かが零した言葉に「ひひっ」と反応してしまう。とうとうこの日が来たのかと少しだけ嬉しくなったのだ。

武器は持たない、無駄だから。防具もつけない、役に立たないから。もちろん、指揮官の命令なんかも聴くわけがない。指示に従っても従わなくとも、どうせ死ぬのだから。

地面に腰を下ろし、戦士風の黒いアンデッドを眺める。

『ああ、あの剣なら楽にしねるかなあ』

一人眩き、ニヤニヤする。何のために戦っていたのかは忘れた。生きて帰りたいという希望は、とっくの昔に消し飛んでいた。

終わろう」

「同感です」緑鱗の竜王は疲労を滲ませて項垂れる。

「本当であれば、同胞の死を知った時点で帰還すべきだったとは思いますが」

「ふん、このまま敗走するなど業腹だがな」一枚一枚がアダマンタイトの強度を超えるであろう——青鱗を神経質に磨きながら、怒りが収まってない竜王は、白き仲間を睨みつつ疑念を漏らす。

「……おかしいと思わんか？」

「うん？　なにがじゃ？」

不穏な空気に、他の竜たちドラゴンの視線が集まる。

「白鱗のヤツは魔王軍との戦いに乗り気ではなかったくせに、この地での奇襲を続けたがっている。赤鱗のヤツが倒されても、我の配下が殺されても……。まあ、開戦に積極的であった我が言うのもおかしい話だが」

「言われてみればそうかもしれないけど、今となってはどうでもイイでしょう？　どっちにしても評議国としての参戦はここまです。後は国へ帰って、防衛戦の準備に取り掛かるとしましょう」

そう語ると緑鱗の竜王は身を起こし、翼を軽く上下させる。

飛び立つ前の準備体操みたいなものであろう。主の行動を見つめていた配下の竜や亜人たちも、帰還へ向けて動き出していた。

「はあ、思想誘導もこの辺りが限界のようですねえ」

「むっ？」

「え？」

「なん、だ？」

竜王たちの視線が集まる先——白き鱗が美しい竜王の頭上にて、人間らしき体格の、黄色い衣装をまとった何者かが現れる。まるで転移の魔法でも使ったかのような、または最初からその場に居たかのような登場の仕方だ。

三体の竜王や配下のドラゴンたち、そして歴戦の亜人たちは、場違いすぎる奇妙な存在を見つめることしかできない。

「洗脳してもよかったです、操り人形だと対応力に差がでますか

らねえ。ですがもう構わないでしょう。『タブラ』の仕掛けはここまで、次は『ぶにっつと萌え』のタネで御相手しますよ。ちょうど脳内に根を張った頃合いでしょうから」

「お、お主は、いったい?!」

穴が開いているだけの簡素な顔を覗き見て、灰色髭の竜王は後ずさる。同時にいつでも竜の吐息ドラゴン・ブレスで攻撃できるよう準備を始めるが、何故か『その者へ危害を加えることはできない』と自制してしまう。

「な、なんじゃ？　これは？」己の意思が別の何かに制御されているかのような不安感に、老齢の竜王は無意識に仲間を見る。

「お、お主ら、どうしたんじゃ?!　儂らの姿を見られたぞっ、殺さねば!」

「な、なにを言っているのです？　御主人様を前に……」

「殺すなどと、わ、我らの主に対して、ふ、不敬な……」

うつろな瞳を見当違いの方向へ向け、二体の竜王は危機感無く語る。突然現れた黄色い服を着込んだ人型の異形に警戒する素振りもない。

足場にさされている白鱗の竜王も、召使のごとく控えたままだ。

「おや？　根の張り具合が一体だけ遅いようですね。流石は竜王と褒め称えるべきでしょうか？　とはいえ、予定がありますのでさっさと支配させていただきますよ」

頭の中に埋め込んだ種を発芽させ、根によって脳を制圧する。これは魔法による支配より非常に強力であり、解除するのは不可能に近い。

種を埋め込む手間や根を張る時間などの問題点はあるものの、現時点では最強の支配手法といえるだろう。『タブラ』と『ぶにっつと萌え』両者の特性を操れる、ただ一人にしかできない荒業だ。

ただもちろん、脳の無いアンデッドには一切意味を持たない。

「では全部隊でもってエ・ペスペルへ突撃しますよ。あそこは今、コキュートス殿が罫を張っています。ですので竜王が勢ぞろいしていると知れば、ここぞとばかりに本陣の強者たちを大勢送り込んでくれることでしょう」

言葉を区切り、白い竜王の頭の上でぐるりと回転すると、埴輪顔の男性らしき人物はばざりとマントを翻す。

「しかあし！ 手勢を送り込んできた時こそが好機！ 逆に私が本陣への〈転移門〉を開き、竜王四体を送り込むのですっ！ コキュートス殿は本陣の場所を知られていないと油断しているでしょうが、まあいいまい！ 赤鱗の首をお持ち込んだ時点で、マーカールの設置は完了してえいるのですよっ！」

直接的な関与は禁じられているが、駒を支配する程度は大丈夫だろう、〈転移門〉で送り出すぐらいは問題ないだろう。

だから埴輪顔は、黒い穴でしかない口元をニヤリと崩す。

「かすり傷一つ。竜王四体でコキュートス殿の不意を突き、傷一つ。今回の勝利条件はそのようなものですかねえ。ふふふ、本陣で指揮をとっている蟲王殿は、どのような顔で驚いてくれるのでしょうか？」

コキュートス陣営は、竜王側が〈転移門〉のような高度な魔法を使えるとは思ってしまい。自陣の場所が漏れていることにも気付いてはいないだろう。

エ・ペスペルに竜王が勢ぞろいした瞬間、嬉々として本陣の側近たちを送り出すはずだ。己の周囲が手薄になるとも知らず。

そんな中へ突然竜王が現れたなら、流石の蟲王でも後れをとるに違いない。四本の腕も本来の実力を出し切れまいだろう。

ナザリック地下大墳墓、第五階層守護者「コキュートス」も無傷では済まないはずだ。

「さあ皆さん！ 勝利は目の前です！ いざ、エ・ペスペルの舞台へ！」

テンション高めの埴輪顔の言葉に従い、竜王とその配下竜、亜人たちがぼんやりとした表情で動き出す。己の意思を感じない空虚な瞳だ。先程まで評議国へ戻ることを提唱していた灰色髭も、異論を挟むことなく巨大な翼を広げて空へ発つ。

王都の中庭では、不意に大気が震え軽い地鳴りが響き、巡回していた近衛兵らの驚愕を誘っていた。

誰もが認識阻害をかけていた竜王たちのことなど知る由もなく、空

を見上げて眉を潜める。

何かよからぬ予兆なのかと。

王都からエ・ペスペルまで、竜王の高速飛行ならたいして時間もかからない。もうすぐ化け物たちに蹂躪されている哀れな人間どもの、悲惨な有様が見えてくるだろう。

うず高く積まれた死体。その山から這い出ようとする死体。その死体に襲われたであろう死体。それは戦場ではなく地獄。戦いではなく虐殺。勝敗など最初から関係ない。

だけど——もう大丈夫。

救世主たる竜王様の登場だ。

これで人間たちも立派に役目を果たせて一安心。竜の吐息ドラゴン・ブレスにまかれて、思う存分のた打ち回れよう。魔王様にも満足していただけるはずだ。

なにせ、舞台の中でも悲惨に殺される役柄というのは、とても難しいのだから……。

第30話 「蟲魔王」

天空から一気になだれ落ち、巨大な隕石が街中へ落ちるかのごとく。途中で翼を広げて減速し、人間の怯えた表情が見える高度で狙いを定め、都市の中へ竜の吐息ドラゴン・ブレスをぶち込む。

餌となっていた人間はもちろん、餌に食らいついていたアンデッドや悪魔たちは、力の奔流に弾き飛ばされバラバラとなっていた。

大都市故に建物は多い、だからその陰に隠れてやり過ごせる——なんて考えた者たちは、死ぬ少し前に後悔したに違いない。隠れたところは逃げ場のない棺桶だ。閉めた扉は何の抵抗もできずに吹っ飛び、多様な属性ブレスを受け入れるだけ。

「そろそろですかな」

白き竜王の頭上に直立する埴輪男は、待ち構えていた監視の目に竜王部隊が捉えられたことを察していた。自身は完全不可視化の魔法で隠れているので気付かれてはいないだろうが、竜王四体の誘き出しに成功したと思っているコキュートスは、用意していた殲滅部隊を送り出すはずだ。

時を待たずして、転移門ゲートの闇が近くに開くだろう。

チャンスは一度。

本陣の手勢が転移門ゲートでこちらに来るその時、もう一つの転移門ゲートが本陣への特攻を可能とする。

「さあ、物語はクライマックスに入りましたよコキュートス殿！ あわよくば、貴方の腕一本でも拝借するといたしましよお……おう？」
血が舞い、肉片が飛び散るエ・ペスペルの住宅地区で、巨大な闇の扉が構築される。

それ自体は特におかしなことではない。待ち構えていた予想通りの展開だ。ただちよつと違うのは、転移門ゲートから真っ先に出てきたライトブルーの存在。

「——ム？ 不可視化ダト？ 竜王以外ノ強者、『プレイヤー』カ？
監視ノ目カラ逃レルダケノ手練レデアルナラ、思ワヌ拾イモノダナ」

「これはこれは、総大将自ら乗り込んでくるとは……。少し軽率なのではありませんか、コキユートス殿？」

顔を合わせるつもりはなかったのだが、かち合ってしまったのならしょうがない。パンドラは完全不可視化を解くと、少々大袈裟に演技臭く、深々と頭を下げていた。

「コレハイツタイ？ 宝物殿守護者殿ガドウシテ此処ニ？ 竜王ドモト行動ヲ共ニシテイルトハ、ドウイウコトナノダ？」

「いえ、何もおかしなところはありませんよ。竜王を動かしていた黒幕が私であると、それだけのことです。コキユートス殿には楽しんでいただけるよう配慮したつもりでしたが、如何でしたか？」

「ナント……」

即座に『ソレハモモンガ様ノ御指示ナノカ？』と問いかけようとしたところで、コキユートスは口を紡ぐ。

独断なわけがない。モモンガ様直属の僕であるパンドラが、勝手に動くはずがないのだ。

故にこれは、最初からモモンガ様の意思が反映された行動であり、結果。

コキユートスのためだけの施策なのだ。

「オオオ、王国トノ侵略戦争ヲ任せテ頂イタダケデハナク、パンドラ殿マデ差シ向ケテ下サルトハ。モモンガ様ニハナント感謝申シ上ゲレバヨイノカ……」

「おっとコキユートス殿、気が早いですよ」パチリと指を鳴らし、パンドラは四体の竜王を並べる。

「予定とは違ってしまいましたでしたが仕方ありません。さてコキユートス殿、四対一での決闘などは如何でしょう？ こちらは全員死亡で負け、そちらは手傷を負えば負け。どうですか？」

「フム、コチラガ負けタ場合ハドウナルノダ？」

「そうですねえ。エ・ペスペルから完全撤退して仕切り直し、ということはどうでしょう？」

「了解シタ。決闘ヲ受ケヨウ」

受けないという選択肢はない——パンドラには確信があった。

戦場で決闘を挑まれるなんて、ガチバトル中毒であるコキュートスにとつては御褒美でしかない。相手が竜王四体であることなど無意味なのだろう。むしろ相手が強ければ強いほどいい。事前の情報など不要。向き合ったこの瞬間こそが始まり。あとは相手を殺すことだけに命を懸けるのだ。

「出シ惜シミハシナイ。使エル手ハ全て使ワセテ頂ク」

「それはたいへん結構なことですね。格下とはいえ竜王が四体ですから、さしものコキュートス殿も……おや？」

『当初の予定とは違ってしまったがなんとかなりそうだ』と、パンドラとしては一安心、かと思いきや、四本あるコキュートスの一腕——その手の指にはめ込まれた小さなアクセサリーに視線が留まる。

どこかで見覚えのある指輪だ。

蟲王の指に収まるのだから魔法^{マジック・アイテム}具であることは間違いない。

どんな性能を持っていたかは——。

「人間の？ そう、たしか人間が持っていたユグドラシルには無いレアアイテム！ どうしてコキュートス殿がそれを?！」

「モモンガ様が貸シ与エテクダサツタノダ。『実戦デノ使イ心地ヲ試しテミロ』トナ」

言葉と同時に、得体のしれない威圧感が広がっていく。100レベルのパンドラが身構えるほどの圧力なのだから相当なモノであろう。

普段のコキュートスから感じられる気配とは一線を画する強大さだ。

例のアイテムは、真なる竜王^{マジック・アイテム}製の魔法具である。その効果は戦士としての技量を一段階引き上げる、というもの。

しかし人間の一段階と、100レベルNPCの一段階では桁が違う。

効果としては正しいのだろうが、『それでイイのですか?』とパンドラは目の前に現れたライトブルーの怪物を前に、やれやれと首を振るしかなかった。

「イザ勝負!!」

「……（父上はひどい御人だ）」

踏み込んだ次の瞬間、転移したのかと思うほどの速度で横を通り過ぎていく蟲王。その後ろ姿を辛うじて見送りながらパンドラはため息を漏らす。

「(私自身も試されていた、と。コキュートス殿の戦力なら十分把握している、という思い込みが情報収集を疎かにさせ、結果魔法器具を見落とした。これは……言い逃れの余地なく私の負けですねえ)」

ほぼ同時に斬り飛ばされる竜王の首は、勢いよく上空へ舞い飛び、勝利者が誰であるのかを高らかと告げる。

誰もが啞然として倒れ込む巨体から目を離せず、何が起こったのかを理解できない。

続いて竜王に率いられていた最高位の年齢段階級がバラバラになり、傍にいた英雄と呼ばれていたはずの亜人チームも地面のシミとなっていた。

「プシュウウウ!! 武技スキル発動! <世界崩シ>!!」

最後の仕上げとばかりに刀を斜め上へ振り上げ、蟲王は聞き慣れない技の名と共に近くにいた人間、そして城壁や建造物を横なぎに斬り裂いた。

いや、斬ったというより寄り集まっていたモノを上下に選り分けた、というべきか?

まるで絡まっていた毛糸を丁寧にはどいたようであり、硬いはずの岩壁が煮込んだ鹿肉よりたやすく崩れていく。

「おや? 武技」とは人間しか使用できない技能のほうでは? 第六階層の武技使いから学んだのですか?」

手駒の粉碎に微塵も未練を見せず、パンドラはコキュートスの御業に感嘆する。

「パンドラ殿、コレハ武技デハナイゾ。武技ヲヒントニシテ新タニ開発シタ、戦士系ノ特殊技術ダ。武技ヲ間近デ観察シ、實際ニ己ノ身ヘ打チ込マセ、所持シテイル似タ特殊技術ノ中カラ組み合ワセテ創リアゲタノダ。今使ツタノハ王国戦士長ガ持ツテイタ切り札ノ武技——ニ似セタ防御無視ノ特殊技術ダナ」

「おおお、それは素晴らしい。デミウルゴス殿の新武技開発と合わせ

れば、より素晴らしい特殊技術^スが誕生するかもしれませんねえ。ですが……」

同じ守護者として、新たな技術の発見には歓迎の意をもって示したいところではあるものの、指摘すべきところはハッキリと伝えるべきだ。

モモンガ様に影響するのであれば尚更である。

「解ツテイル。結局ハ特殊技術^スノ改良デアリ、性能的ニモタイシテ価値ハナイ。アルベドモ〈不落要塞〉ナドノ防御系武技ハ〈パリ〉ノ下位互換ダト言ツテイタ」

「それはそれは、統括殿が指摘しているのであれば私からは何も言うことはありません。まあ、モモンガ様は喜ぶかと思えますけど……」
「フッフ、ソレモ解ツテイイル。ダカラ今見セタノダ」

嬉しそうに胸を張り、空を切り裂くように四本の刀を空振りさせると、コキュートスは武器をしまい、片手を上げる。

勝利宣言であろう。

辺りには巨大な竜首が転がり、それよりも巨大な胴体が横になっている。竜王が率いていた部隊はバラバラの肉片となり、王国民の死体と判別できないほどに混ざり合っていた。

これなら人間だ亜人だ異形だと、差別することもされることもない。皆同じ死体だ。鼻をつまみたくなるほどの臭い肉片だ。

これこそ真の平等、なのかもしれない。

破壊を免れた魔王軍第一陣、第二陣のアンデッドたちも、積極的に人間たちを仲間^スに誘い、微笑ましい光景を見せてくれる。

人間で溢れかえっていた王国都市「エ・ペスベル」はこの日、悲鳴と絶叫、そして恐怖から解放された。

生命の柀からも解放されて、安らかに静かな「死」へと統一されたのだ。

どこか遠くから眺めていた魔王様は、満足げに頷いたことだろう。胸を張る蟲王の姿に頬を緩ませたことだろう——頬肉ないけど。

やはり侵略戦争とは素晴らしいモノである。これで勇者との決戦でもあったならば、文句のつけようもないのだが……。

いや、まだ王都が落ちた訳でもないのだから気が早かろう。
メインディツシユはこれからかもしれない。

「ではコキュートス殿、完敗の私としてはさっさと退散しようかと思うのですが、貴殿はこれからどうなさいます？」

「無論、残ツタ第一陣ト第二陣ノ僕ヲ編成シ直シ、王都へ向ケテ侵攻サセルツモリダガ、ツイデニ本陣モ動カソウカト思ツテイル。戦場カラ遠ク離レタ後方ニ居続ケルノハ、ドウモ性ニ合ワヌ」

冷気の吐息を漏らす蟲王は、久しぶりの全力戦闘が余程お気に召したのであろう。総大将として引き籠っているのはもう嫌だ、と宣言しているかのようだ。

「でえしたら提案がありますっ！」シユバツとマントを翻して間合いを詰めてくる宝物殿守護者は、転がっている竜王の首へ足をかけながら、「テ、提案？」と不思議そうな表情を見せるコキュートスへプレゼンを始めていた。

「わああたしいがお勧めする物件はあ、本陣の百名近くが待機できる十分な広さと戦場の情報を獲得しやすい地理的優位性、そおしてえ！後方に居たくないというコキュートス殿の希望をも叶える最高の立地！」

帽子に左手を添え、右手は指一本を伸ばして天高く。

空からスポットライトでも当てられているかのようなパンドラは、答えを伸ばしに伸ばし、溜めに溜めて――。

「いざゆかん！先程まで竜王たちが待機していた休憩地、王都 ッリ・エステーゼ」の王城 ッロ・レンテ」の中庭へ!!」

何故か、反対意見はなかった。

反論するのが面倒臭い、というわけではない。パンドラの勢いに流された、というわけでもない。

ただ何の問題もないから特に代案も出さなかったただけだ。

これから侵略し滅ぼすはずの王城中庭へ、侵略する側の魔王軍が本陣を設営しても特に問題はない。誰も止められないだろうし、文句も言ってこないはずだ。

人間どもの観察には充分だし、切り札が出てくるならばコキユート
スが真っ先に相手できる点も素晴らしい。

まさに優良物件。

「案内役はこの私にお任せを！ 〈^{ゲート}転移門〉」

「ウム、パンドラ殿ノオ勸メナラバ問題ナカロウ。ヨロシク頼ム」

コキユートスは引き連れていた手勢に加え、本陣に残っていた側近
や物資等もエ・ペスペルへ持ち入れ、パンドラが展開していた闇の扉
へ行進する。

まさに『世界滅ぼす軍』こと魔王軍の最精鋭部隊だ。

数としては百も居ないので、数十万の兵を擁する王国と比べると貧
相に思えるかもしれないが、一体一体がラスボス級。つまり、物語の
最終局面で登場する化け物だけで構成された本陣なのだ。

ちなみに、その気になればあつという間に配下を召喚できるので、
数的優位性など陽炎のようなものである。

『真なる竜王』の『ツァインドルクスⅡヴァイシオン』ですら、単身で
飛び込もうとは思えない。

「ああ、コキユートス殿、王城の方々には私から挨拶をしておきますの
で御心配なく。陣地設営を進めておいてください」

「総指揮官ノ私方カウベキカト思ウガ、モモンガ様直属ノパンドラ
殿ナラバ非礼ニハナルマイ。ソチラハオ任せスル」

巨大な闇の扉を潜り抜け、埴輪男と蟲王は美しい花々が咲き誇る王
城中庭へと足を踏み入れた。後に続くは重戦車かと思える紫甲殻の
丸虫型モンスターに、直立すれば城よりも高くなりそうな大百足。銀
色の甲殻を身に纏う二本角の重騎士や、両手が大鎌になっている四本
足の巨大昆虫。両手剣を持つ黒甲殻の一本角もいれば、白い霞だけの
正体不明なモンスターもフワフワと漂う。

王城の中庭に居た者たちは呼吸を忘れただろう。死を覚悟しただ
ろう。『これは夢だ』と現実逃避したくなかったに違いない。それでも、
突然現れたモンスターから逃げ出すことなど許されるわけもなく、近
衛兵は集結を強いられる。

当然だろう、この王城には国王はもちろん王位継承第一位の第二王

子に加え、黄金の姫たるラナー殿下も御座すのだから……。

この城が落ちれば王国は終わる。一兵卒ですら理解している共通認識だ。だから最後の最後まで戦わねばならない。たとえそれが流れ星を掴もうとする夢物語、まったく意味のない戯言であったとしても。

少し肌寒い、乾燥したこの日、王城中庭は魔王軍本陣の駐屯地となった。

第一陣の残兵と第二陣の生き残りは再編され、南側からの侵攻を続けている。

エ・ペスペルは壊滅し、エ・レエブルでは弱々しい抵抗があったのみ。リ・ロペルは平地戦での敗走後、竜部隊のおかげで一時は持ち直したものの、死の騎士部隊デス・ナイトに城門を破られ降伏。今は一人一人丁寧に処刑されている。

王国の滅亡は非常に順調であった。



歓声を上げたくなるほどの朗報。

竜の目撃情報を受け取ったこの時は、近くにクライムがいることも忘れて強く拳を握ったほどだ。

(賭けに勝った！)

いくら知恵を振り絞っても竜王を引っ張り出せる確率は高められそうにない、とある程度は覚悟していたものの、実際魔王軍を蹴散らしているともなれば顔が綻ぶ。

一緒に王国民も殺されているなんてどうでもよい。些事だ。

肉の盾にもならない人間ヒトなど景気良く燃やしてもらって構わない。埋葬の手間が省けたと喜んででもよいくらいだ。

(ふふふ、あとはこの場所から逃げ出すだけ。竜王と対峙している魔王軍の足は鈍った。もう今しかない！)

黄金の姫は深く呼吸し、悲壮な覚悟をもって軍議室にいるザナツク王子を見やり、そしてアダマンタイト級冒険者“蒼の薔薇”へ言葉を

伝える。

「ラキユース、王国からの依頼です」竜王の参戦情報に軽い混乱をきたしていた議場へ、女神の囁きとも言えるラナー王女の声が響く。

「お父様とお兄様を連れて北東の港町へ向かってください。そこに大型船を用意してあります。別大陸への渡航経験がある乗員も手配済みですので、その船で北の大陸へ逃げてください」

「なっ？ なにを言っているのよ！ 今の情報を聞いたでしょ？ 評議国のドラゴンらしき部隊が魔王軍と戦ったって——」

「解っています。ですから私は最後まで残って見届けます。それなら国民も安心しますし、もし魔王軍が王都までやってきたとしても、お父様たちが逃げていれば再興の芽も絶たれません」

竜王が部隊を率いてきたのは一筋の光明である。

たとえ王国民諸共ブレスの餌食にされているとしても、魔王軍との戦いに勝ち筋が見えてきたのは確かだ。だからこの瞬間、王族が皆逃げ出すのは悪手でしかない。国民を見捨てたと思われる最悪の所業だ。

最低でも一人、そう一人だけでも残って結末を見届ける必要がある。魔王軍が竜王の部隊を蹴散らし、王都まで乗り込んできて人間を皆殺しにする可能性があったとしても……。

「大丈夫ですよラキユース。評議国の竜王様より強い存在など考えられません。必ずや魔王軍を打ち破ってくれますでしょう」

「で、でも竜王様たちが最後まで残ってくれるとは限らないでしょ？

途中で帰ってしまったらどうするの？ 弱った魔王軍が相手でも、王国はもう……」

国交のない評議国に運命を託すのは、王族として失格だろう。だからこそ最悪の事態に備えて、国王と王位継承第一位を国外へ逃がすのだ。

残るのは王位とは無縁の第三王女。

たとえ死んだとしても影響は少ない——なんてことはない、王女の両肩を掴んでいたラキユースは説得を続ける。

「ラナー、話を聞いて！」

「これは決定事項ですよ、ラキユース。冒険者である貴女に王女の発言を覆す権限はありません。さあ、お兄様。お父様を馬車へ運んで出発してください。時間はありませんよ。竜王様と魔王軍の情報は、ここへ運ばれるまでかなりの時間を擁しています。今この時、事態が急変しているかもしれません。急いでください」

「お、おう、分かった、妹よ」

妹を置いて自分だけ逃げだす——、なんて無能王子を装っていた自分でも二の足を踏む。そんな後ろ髪が引かれる想いを引き摺って、ザナック王子は側近と共に動き出していた。

護衛の任を『蒼の薔薇』が受けてくれるのだろうか、と心配そうに横目で見つつ。

「ラナー！ 貴女は竜王様が勝つと思っているの?! 言っておくけど、竜族は人間の王や姫なんて何とも思っていないわよ！ 今回も王国を助けにきたわけじゃないわ！ 王国民を餌にして安全な奇襲を仕掛けにきただけよ！ 少しでも形勢が悪くなったら引き上げるに決まっている！ そうなったら貴女はっ」

(なにを解りきったことを……)

涙を流して親友の身を案じるラキユースに対し、ラナーは悲しげに微笑み——頭の中では『だからさっさと私を気絶させて無理やり連れて行きなさいよ！ 王国で最も価値があるのは私なんだから当たり前でしょ。国民だって早く逃げて欲しいと思っっているわよ。でも私自身が率先して逃げ出したらクライムが悲しむでしょ？ 私はクライムが理想とするお姫さまじゃないといけないのよ！ そのためにこんな茶番を繰り広げているんでしょうが！』と暴言を吐きつつ——そつと人類の守護者たるアダマンタイト級冒険者の手に己の手を重ねる。

「ラキユース、今までありがとう。貴方のことは忘れません。もちろん『蒼の薔薇』の皆様のことも。ですからどうか、お父様とお兄様をお願いします」

「……………」

空から舞い降りた天女のような、後光を放つ女神のような、万人を

魅了する笑顔でもってラナーは最後の一手を繰り出した。

これでラキユース率いる「蒼の薔薇」は目線で合図を送り合っただろう。

すぐにティアが背後に回って意識を落としてくれるはずだ。

クライムは戸惑うだろうけど、ガガーランとイビルアイが事情を説明し、一緒に付いてくるよう促してくれるに違いな――

「ザ、ザナック王子！ 大変です！ 中庭に化け物どもがつ!!」

「いきなり現れました！ や、闇の中からいきなりです！」

「一体や二体ではありません！ 次から次へと、見たこともない異形の化け物だらけです!!」

「ええっ?」

脱出作業に取り掛かっていた王子に代わって報告を受け取ったラナー王女は、想定していなかった横やり慣れない戸惑いを覚える。

魔王軍は規格外の化け物ばかりなので何があってもおかしくないとは思っていたが、走り寄って視線を向けた窓の外、覗き見た中庭の様子には、いつもの表情すら忘れてしまいそうな光景が広がっていた。

「な、な、なにが?」

「ラナー様、お下がりにください！ 危険です!!」

「ラナー！ 窓から離れて！ あれはただの化け物じゃないわ！ すぐに逃げないと!!」

「信じられない、あんな集団の気配を見逃した?」

「同意、まったく察知できなかった。どうやって王城に?」

「おい！ そんなことは後で考えろ！ このままだと俺たちもヤベエぞ！ どいつもこいつも見たことのねえ異形ばかりだ！」

「くそつ、竜王の部隊と戦っているはずじゃなかったのか?! ツアーの奴、一体何をしている? どうして〈メッセージ伝言〉に答ええない?!

パニックに陥りそうな王女周辺にて、「蒼の薔薇」は決断に迫られていた。

もはや国王陛下やザナック王子などを連れて行く余裕はない。ラナー王女とクライムだけでも難しいかもしれない。自分たちだけな

ら僅かなりとも可能性はあるかもしれないが……。なお、イビルアイのへ転テレポーション移は当人のみしか運べないので、行使するには仲間を見捨てる覚悟がいるだろう。

「落ち着いて下さい」

パンツと一度だけ手を叩き、普段の調子を取り戻した王女はクライムの背後から声を上げる。

「もう何をしても手遅れです。武器を収めて、そのまま静かにつきさあ、皆で御挨拶の準備を致しましょう」

「ランナー？ 貴女、なにを言ってます？」

一世一代の大勝負にでも挑もうかという決意に溢れた王女の瞳を見て、ラキユースの判断が鈍る。

即座に行動すべき状況であった。

ランナーを気絶させ、ガガーランに抱えてもらい、クライムと共に王城の抜け道へ直行する。そうすべきであったのは間違いない。

にも拘らず、動けない。

ランナーは身だしなみを整え、誰も居ないはずの王城通路へ深々と頭を下げている。

何をしているのか？ 誰へ頭を下げているのか？ その先に誰が居るのか？ ラキユースには理解できそうになかった。

「リーダー、誰かくる」

「二人、音からして靴を履いた人型。それも上質な靴」

双子からの情報に、張り詰めていた空気がより一層緊張を纏う。

この状況で呑気に通路を歩いている者など居るはずがない。あのザナック王子ですら必死に足を動かすはずだ。それに一人なわけがない。上質な靴を履いて王城の通路を歩くような者が一人であるのなら、それはそれでおかしな話なのだ。

「どうすんだリーダー？ どこかの馬鹿な貴族が散歩でもしてんのか？」

「それなら先制攻撃で殺しても問題ないな。姿が見えたら問答無用で撃ち込むぞ」

ウオーピック
刺突戦鎧を掲げて集団の先頭へ進み出るガガーラン。隣には片手

に魔力を込めている仮面の子供、イビルアイがいた。

「二人とも——」

「おやめください」

戦闘態勢に入っていた蒼の薔薇へ放たれたのはラキユースからの号令でも制止でもなく、ラナー王女からの拒絶であった。

王女は傍に寄り添うクライムをそのままに、要人を迎えようとする最上の敬意と共に頭を下げ続ける。

「どんなことがあっても手を出してはなりません。私に任せてください」

何者が来るのか、を察しているような力のこもった王女殿下の言葉を受けて、場は静まり返る。

そんな王城の通路端では靴の音が——不自然なほどの踵の音だけが響いていた。

第31話 「演劇魔王」

カッーンカッーンカッーン、カッ！ バサア！ シュババツ！

「おおおまたせえしましたあ！ 私はあパンドラズ・アクターと申しますっ！ どうぞっお見知りいおきをつ！」

趣味の悪い上級士官が着込みそうな黄色い軍服のようなものを纏い、魔化されていそうな最上級のマントを翻す。高らかに名乗りを上げては、軍帽を長過ぎる指で整え、黒い穴にしか見えない眼で啞然としている人間どもを見渡す。

そのモノの姿は、どう見ても人間ではなかった。

「お待ちしておりました、パンドラズ・アクター様。私はラナー・テイエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフと申します。御会いできて光栄ですわ」

状況を把握できないでいる城の近衛兵、クライム、蒼の薔薇を眼光で抑えつつ、王女は眩い笑顔で埴輪顔の異形を迎える。

普通であればありえない出会いであろう。

まず城へ入ってくるとき、衛兵に止められたはずだ。攻撃されたかもしれない。万が一、中庭の化け物集団に気をとられている隙に入り込めたとしても、通路の要所には近衛兵が立っているのだから騒ぎにならないはずがない。

それなのに――。

「それではパンドラズ・アクター様、本日はどのような御用向きでございますか？ 貴方様は『魔王軍』の要職に就かれている方である――と、まことに勝手ながら認識させて頂いております。そのような御方のお役に立つことが出来るのであれば、私としても嬉しいのですが……」

ざわつと空気が変わり、所々から殺気が漏れる。

『魔王軍』の一言に反応して腰の剣へ手を伸ばすどころか、条件反射で握ってしまったのだろう。経験の浅い騎士にありがちな行為だ。

王女が先頭で交渉を始めているというのに、殺気をたれ流すとは……。クライムですら必死に抑え込んだというのに。

「いえいえ。本日は挨拶と、ちょっとしたお願いに伺っただけですよ。魔王軍総大将「ゴキユートス」殿が、中庭に本陣を設営したいというものでね。その許可をもらいにきただけです」

「それは光栄なことですわ。どうぞご自由にお使いください」

蒼の薔薇一行が冷や汗を流す面前で、王女は軽やかに返答する。まるで相手がどんな要求をしてきても全て受け入れる、と言っているかのような即答ぶりだ。まあ実際意図してそうなのだろうが、問題なのは王女の周囲に居る近衛兵たちの『一斉にかかれば倒せるのでは?』という自爆にも似た勘違い。

ラナーとしては『愚かなゴミが足を引つ張らないか』と気を揉みつつ、僅かなミスも許されない死闘の会話を続けるしかなかった。

「おつともうこんな時間ですね。まことに残念ながら、美しいラナー王女と言葉を交わす時間はいくらあっても足りないということでしょう。時間を止めてしまいたいところですね」

「あら? 偉大な魔王様なら時間を止めることぐらい可能なのではありませんか? 神をも凌ぐ、すばらしい御方であると想像しておりますけど」

「おお、父上の偉大さを僅かなりとも知ろうとするのは良い傾向です。矮小な人間でも、遙か高みを覗き見たいと渴望するのは自由にして必然! それがいかに滑稽な夢物語であったとしても!」

これが守護者統括であったならば、『虫けらのごとき人間がモモンガ様の力量に言及した』として辺り一帯を血の海に――が自然な流れかもしれない。

相手がパンドラでよかったというべきだろう。ラナーにしては綱渡り同然の危険な一手であった。しかし、魔王の話題を出さないわけにはいかない。魔王の能力を推察できるだけの知能を持っているのだとアピールしないわけにはいかない。

生き残るためには、もうその魔王に縋るしかないのだ。

「パンドラ様、お願いがあります」

くるりと一回転を終えた埴輪男へ、ラナーは決死の一撃を繰り出す。

「私を——魔王様の下僕として使ってはいただけないでしょうか？」

「ラナー！ 貴女なにをつ?!」「ラナー様！」

いつでも斬りかかれる間合いにおいて、ラキユースとクライムは同時に叫ぶ。

本当なら異形の化け物と交渉なんかさせたくなかった。頭を下げねばならないような無様な真似はさせたくなかった。

無理やりにも引き下げて、埴輪男など真つ二つに切り裂いてやりたかったのだ。

それなのに——下僕とは！

パチンツ

軽い音が宙に舞う。

細長い指を器用に扱い、埴輪男が打ち鳴らしたようだ。

「お静かに願いますよ、お嬢様方」

優雅なお辞儀と共にマントをバサリと躍らせ、パンドラは黄金姫をじろりと見やる。

「御自分の知能に余程の自信があるみたいですねえ。その知能で我が父上、偉大なる絶対支配者、至高なる大魔王様のお役に立てると？」

「だから王国民の命は助けてほしいと？」

「いえ、助命を願うのは私とそこの護衛騎士、クライムだけです。他の者は皆殺しにしていただいてかまいません」

「なっ?! なにを言っているの！ ラナー!?!」

「おいおい、マジか？」

「魅了でもされた？」

「不明、そんな気配はなかったけど」

「魔力の流れに変化はない。だが何かの要因で錯乱状態に陥ったのかもしれない。あの化け物から引き剥がすべきだろうな」

黄金姫の暴言に戸惑いながらも“蒼の薔薇”は僅かに腰を落とし、獲物へ手を添え、埴輪男の挙動を見すえる。

全員で掛かれれば勝てるか？

異形である埴輪男の種族——おそろく二重ドッベルゲンガの影ではないか？——から察するに、それなりの強さを持つはずだ。それでもイビルアイは、伝わってくる威圧感から勝機を見いだそうとする。

話している内容からして、相手は魔王軍の中でもそれなりの地位にいる者らしい。ラナー王女も最敬意をもつて足元へ伏している。だが実力が伴っているかという点、人間社会と同じく身分だけが高い場合もある。

埴輪男は、そんな格だけが高い魔王軍の幹部なのだ。

王国——いや、蒼の薔薇にとつては千載一遇のチャンスである。

「アイツの相手は私がする！ ラキユース！ 王女を連れて逃——つぐぎああああ!!」

右腕が付け根から吹き飛ぶ、と同時に左腕も消し飛んだ。

〈水晶騎士槍クリスタルランス〉で先制し、埴輪男と王女との間に立ち塞がろうとしていたイビルアイは、半歩踏み込む前に己の体液を撒き散らして仰向けに倒れ込む。

「ちくしょお！ なんだ今の?! 見えねえ！」

「下がって!! みんな後ろへ！ ティア、ティナ！ イビルアイを！」
「了解！」

油断していたわけではない。緊張の糸は張り巡らせていたし、完全な戦闘態勢で埴輪男を監視していた。

それなのに、イビルアイは見えない攻撃によって両腕を粉碎された。使われた武器が刀剣なのか鈍器なのかも判らない。肉片の吹き飛んだ方向から、下から上へ振り上げられた一撃によるものだとは判別できるものの、それで次の攻撃から身を護れるのかどうかは不明だ。

「『式式炎雷』の技に反応できず、ですか……。父上へ献上するかどうか迷うところですねえ」

「パンドラズ・アクター様、王国のゴミが無礼をはたらきまして、まことに申し訳ありません」

「ああ、かまいませんよ。それより先程の件ですが……」

軍帽の位置を直しながら、パンドラは黄金姫へ顔を向ける。

「残念です」

「——え？」

ひゅつと鋭く息を吸い、絶望を悟る。真つ黒な穴にしか見えない異形の眼を覗き込み、全てが終わってしまったのだと、王国の第三王女、黄金姫と名高き比類なき至上の天才、ラナー王女は顔を強張らせる。「貴女は理解していたはずですよ、自分の役割を。滅びゆく王国の悲惨さを象徴する役割が己にあるのだと、最初から知っていたでしょう？ だから貴女は炎上する王城で、なぶり殺しにされている国民の視線の先で、『誰よりも残酷な己の死』を演出しなくてはならなかった。それを十分に察していながら我が父上の下僕になりたいとは……。死を恐れましたか？ 犬との別れが辛かった？ 後で蘇生してもらえると確信できなかった？ まああなたは生命力が低そうですから、蘇生魔法では無理だと思うのも仕方ありませんけど」

ラナー王女は殺される必要があった。魔王様に喜んでもらえるほどの、悲惨で救いのない、絶望に満ちた、滅亡する王国の姫君として……。

しかしラナーは選べなかった。それが答えだと知っていても選べなかったのだ。

死は終わりだ。

全ての終わりだ。

ラキュースが蘇生魔法を使えるとしても、クライム並みの生命力がなければ役に立たない。無論、木剣すら持ったことのないお姫様は何をいわんや。

「駄目ですねええ、愚かあですねえええ。死を求められているのなら喜んで死になさい。父上が楽しんでくださるかもしれないのですよ？ ならば全力で死ぬべきでしょう。自慢の知能を限界まで振り絞って、この世で最も異常な、神ですら引きつる、狂った死を作り上げるのおおですつ！ ふふ、ふふふ、なんとっ羨ましいい！ 私が代わりたくらいですよお！ 父上に己の命を捧げることができるとっ、得難き御褒美！ 至上の喜び！ 我が人生における最高の記念日いいい！！」

興奮し過ぎているであろう、最後の方は何を言っているのかよく解らなかつたが、ラナーは選択を誤つたのだと自覚するしかなかつた。そもそも死ぬことが正解だと言われても納得できない。誰がそんな先の無い未来を選択できるだろうか。それより己の有用性を売り込んで、魔王様の配下としてもらうほうが生き残る確率が高い——高いはずであつた。

「ち、ちがうちがうちがう!! 私知能は生かして利用すべきだ! 人間を滅ぼすにしても間違いなく役に立つ! こんな腐つた国と共に死んでいいわけがない! 私ほどの知恵者は帝国や法国、竜王国や聖王国なんかに絶対居ない! 全人類の中でも二度と出てこないほどの存在なんだ! それをクライム一人与えるだけで何でも言うことを聞かせられるのよ! だから魔王様に! 魔王様に!!」

己の価値を正確に把握している者などこの世にいるはずがないと言いたいところだが、人が変わったかのように泣き喚く黄金姫は、まさに異常なほどの知能でもって全てを理解していたのであろう。だから魔王様の下僕にもなれると判断していたのだ。

王城の無駄に広い通路の端では、右往左往する近衛兵たち、思ったより血が噴き出ていない重傷のイビルアイとそれを庇う蒼の薔薇、そして呆然と立ち尽くすクライムの姿があつた。

「さて名残惜しいですが、そろそろお暇させて頂くとしましょう。皆さま、どうかお元気で」

観客から黄色い歓声をかけられる舞台役者であるかのように、パンドラは派手にマントを舞わせ、男前成分マシマシな軽い一礼と共にその場を去つた。

後に残るは上質な靴による足音と、座り込んだまま動かない黄金姫の意味不明な呟きだけ。

ラキユースはイビルアイの傍から動けず、ただ命の危険が去つたことに感謝していた。親友の狂乱ぶりには目をつむつたままで。

他の蒼の薔薇一行は、周囲を警戒しながら吸血鬼の回復を待っていた。王国側に仲間の正体を気付かれないように。

クライムは静かに主の背中を見つめていた。当然混乱はあつたも

の、そんなときこそ基本に立ち戻るべきなのだ。そう、大事なものは誰なのか？ 迷う必要はない。

魔王軍の侵略が始まって結構な日数が経過し、王城ロ・レントに魔王軍の本陣が設営されたこの日、リ・エステイーズ王国の指揮系統は崩壊した。

もはや物資も人も動かない。

頼みの竜部隊も、この日を境にいなくなった。



衛兵も近衛兵も居ない——、不自然なほどに静かな王城の通路を歩き、パンドラは正門を指す。

のんびりとした歩調だ。

〈転移門〉を使えば、すぐにでも偉大なるモモンガ様の元へ馳せ参じることができるというのに……。埴輪男は誰かと待ち合わせでもしているかのように、王城正面門を潜り出していた。

「そこで止まれ」

聞き慣れない男の声が、異形の存在を止める。

「なにかご用ですか？」

道案内でも頼まれたかのように軽く答え、パンドラは自身を取り囲んでくる六つの影を静かに観察する。

統一感のない様相だ。

武装していることから荒事に長けた者たちなのであろうが、冒険者にしては纏う空気が不穏過ぎる。間違いなく裏社会で動いている集団だ。本来であれば、王城の正面門付近で出会う手合いではないだろう。

「おつ、マジで人間みたいに答えやがったぜ。知能はそれなりにあるみたいだな。だけどよお、そんな口でどうやって喋ってんだ？」

「ドツペルゲンガーっていうの？ 私は初めて見るけど……。何だか気味が悪いわねえ」

「我も文献でしか知り得んな。他者に姿を似せる特殊技術を持ち、戦

闘能力もオリハルコン級冒険者チームに匹敵するらしいが」

「はっ、姿を似せるくらい俺の魔法なら楽勝だつて。たいした能力でもねえな」

「いやそれより、そいつが魔王軍の幹部だというのは本当なのか？

サキユロント。見た目からして弱そうなんだが」

「知らねえよ！ 聞こえてきた話の内容からすると、そうだつてだけだ。蒼の薔薇の視界に入るわけにはいかなかったんだから仕方ねえだろ？ あれ以上近付けねえよ。文句があんなら自分で行け！ ペシユリアン！」

「お前ら、黙れ」

好き勝手に騒ぐまとまりのない集団が、一人の——筋骨隆々な全身刺青だらけの大男によつて統率される。

自信と余裕を備え、大男は埴輪男の前へ身を置く。組まれた腕に武装は無く、背や腰にも武器を所持しているようには見えない。丸腰とは豪胆とも言える所業であるが、もしかすると修行僧モンクに類する戦闘技術を持つているのかもしれない。

ただそういえば、対面する埴輪男も丸腰だ。

黄色い軍服と軍帽、マント以外に所持しているモノは無い。いや、見えるところには無い、と言うべきか？

「今から俺たちと来てもらう。ああ、心配はいらん。お前は交渉のための人質だ。魔王軍とやらが、俺たち『八本指』に手出しできなくなるよう話し合うための、な」

「ほう、我ら魔王軍と交渉とは——豪胆ですなっ」

パチリと指を鳴らし、埴輪男は嬉しそうにマントをはためかせる。と同時に、黒いローブを着込んだ一体の骸骨が崩れ落ちた。

「なっ！ デ、デイバーノック!?!」

「ちよつと！ なに?!」

「攻撃された?! のか?」

「おや？ 蒼の薔薇より反応が鈍いですな」

さらにパチリと音を響かせ、人間の首が二つ、軽やかに宙を舞う。
「ひ、ひい！ なんだ?! なんだよこれっ！」

「逃げんじやないわよクズ！ どう見たってこいつの仕業でしょうがっ！」

「いまさら反撃とはお粗末。それに私は合図を送っただけですよ」

駄目押しとばかりにパチリと鳴らし、二体の人間層ゴミをバラバラに撒き散らす。

王城の正面入口前は死の騎兵デス・キャバリエが訪問した時と同じく、死の匂いに包まれてしまった。新鮮な血肉が円状に広がり、誰かが意図して描いたような気さえしてくる。

最後に残ったリーダーらしき刺青の大男は、踏み出すことも引くこともできず、腕を組んだまま埴輪男を睨み付けるしかなかった。

「なにを、した？ い、いつたい、なにを？」

「ふむ、そうですね。理解はできないと思われませんが答えて差し上げましょう」シユバツと片腕を勢いよく振り上げ、丁寧に軍帽の位置を直す。

「私たち守護者は外へ出る際、護衛をつけているのですよ。父上曰く、『最低でも国家を滅ぼせるだけの護衛をつけるように。それでまあ、出先で面白そうな国があれば派手に潰しても構わんぞ。その時は見物したいので連絡を入れるようにな』とね。ですから今、貴方の周りにはレベル80程度の僕しもべが五体ほど戦闘態勢で控えているわけです。ああ、"レベル80"というのは国家どころか世界すらも滅ぼせる強さのことですよ」

ゴクリと喉を鳴らした音がやけに大きく聞こえる。死を間近に感じているからこそ、身体感覚が研ぎ澄まされているのであろうか？

生き残る道を探れ——と。

「それで、俺をどうする気だ？」精一杯の強がり刺青男は問いかける。

「何を言っているんです？」人形のような不気味な頭を傾げて、二重ドッベルゲンガーの影は言葉を続ける。

「私に用があったのは貴方ではないのですか？ 私をどこかへ連れて行ってくれるのでしょうか？ さあ、遠慮はいりませんよ」

断るといふ選択肢が無いことは解っていた。それでも拒絶したく

なるのは仕方がない。

本来であれば殺さぬ程度に捕縛し、八本指幹部が集まる会合場所へ運ぶ算段であった。そこで魔王軍とやらの情報を吐いてもらい、交渉材料とする手筈であったのだ。

それが……。

「連れて行けば、俺は、俺のことは助けてくれるのか？」

命乞いだ。腹の探り合いでも何でもなく、ただの助命嘆願である。

王国を裏で牛耳る犯罪組織、〃八本指〃の警備部門、アダマンタイト級冒険者にも匹敵すると言われる〃八腕〃のリーダー、闘鬼〃ゼロ〃の弱々しい姿がそこにはあった。

「ええ、もちろんですとも。我が父上は人間の無駄使いを良しとしておりません。生きていようと死んでいようと、余さず使い切りますので御心配なく」

「……ぐっ、ち、ちくしよおお。この、くうう、——くそがあああああっ!!」

全身の刺青を輝かせ、仮初の強さで己を鼓舞するも、埴輪男までの距離がやけに遠く感じる。筋肉が引き千切れるほどに力強く踏み込んでいるのに、前へ進んでいる感覚がなく、全ての動作が異様に重い。振り上げた拳はどこへいったのか？

自分は何を叫んでいたのか？

身体を支えるはずの足が、いつの間にか両方とも消え去っていた。

もう、地面へ落ちるしかない。

「おや？ 案内はしてくれないのですか？ それは残念ですねえ。まあ、場所は知っていますので勝手にお邪魔させてもらいますけど……。コキユートス殿は気にしないでしょうかねえ。戦争に参加しそくない犯罪者集団ですから、私がもらってもよさそうですが……。」

魔王軍と対峙する集団であるなら、先程の〃蒼の薔薇〃同様手出し無用だ。勝手に相手を弱くしようものなら蟲王に怒られてしまう。獲物をとるなど。

「さて、王国はコキユートス殿にお任せするとして、もう一舞台開演と

いきましよう。演劇内容としましては……。『国家に巢食う巨大な悪を滅ぼす正義の味方』——は“たち・み”が好みそうなので却下ですね。それより悪が正義に勝つところを、さらなる悪で滅ぼすというのが父上の好みにも——」

一人ブツブツ呟きながら、パンドラは王国の街中を歩く。人の気配はあまりない。戦時中であるからか、家屋の中に閉じこもり出歩こうとはしていないようだ。

避難民も多く流入しているはずだが、それはスラム街に押し込められているのだろう。黄色い軍服姿の埴輪男へちよつかいを出そうとする者はいなかった。

薄暗い街並みが続く。

ところどころに屋根を持たない薄汚れた難民たちが蹲っている。場違いなパンドラに反応するだけの気力もないのだろう。虚ろな瞳には、やがて迎えに来るであろう己の死が見えているのかもしれない。

怪しげな建物が連なる、一般人立ち入り禁止の地区へさしかかる。

頑丈な窓に、手順が必要な堅い扉。鉄板で補強もされているようだ。外から簡単に入れないようにするためか、外へ逃がさないようにするためか。中から息を呑む音と、恐怖に満ちた視線が飛んでくる。

「ん？ おやおや、もつたいないことを」

路地の端に、袋に詰め込んだだけの人間の死体が積み上げられている。

容量からすると痩せた人間、もしくは女性なのだろう。有効活用もしないでただ捨てるだけとは、資源の無駄使いも甚だしい。

「餓食弧蟲王殿にお土産として持っていきましよう。まだ辛うじて息のあるモノも居るようですし、他も死にたてみたいですから苗床や餌にでもしてもらえれば……」

パンドラは手際よくお土産の運搬手配を済ませると、鼻息交じりで目的の場所へと足を向けた。

その姿はいつの間にもやら“お姫様の護衛を務めていた少年”のモノとなっており、手には錆びた小剣が一本。

足取りには焦りが感じられ、目線には緊張が漲っている。

少年は力強く地下へと続く扉をけ破り、周囲の殺気立つ武装集団へ宣戦を布告する。

「八本指どもー。お前たちの悪行もここまでだつ！ 全員、皆殺しにしてやる!!」

少年は奮闘する。

イイとこまで行くだらう。

だが最後には力尽き、悪の幹部たちの前に倒れ伏すのだ。

『演目：力なき正義と、至高の大魔王』

己の無力を呪った少年は、最後の最後で大魔王様へ懇願する。

力が欲しいと。そのためならば己の最も大事なモノを捧げると。

あの姫様を捧げると。あの姫様の命も魂も――。

かくして少年は全てを滅ぼした。

絶大な力を揮い、勝ち誇っていた悪の組織を捻り潰した。

爽快な気分だ。

こんなことなら、さつさと人をやめていればよかった。

少年は打ち捨てられていた――どこか見覚えのある金髪女性の――無残な遺体を拾い上げ、かぶりつく。

美味い。

なんて美味しいんだ。

こんなに人間が美味しいなんて、もっと欲しくなるじゃないか。

そうだ、次は帝国へ行こう。そこでたらふく人間を食べよう。邪魔するモノは全て破壊すればいいんだ。

そして次は、次は――。

少年は大陸の端から端まで人間えいさを求めて彷徨い、腹を満たし続けた。

だけど時折思い出したかのように何者かの、女性と思われる何者かの名を叫んだ。

どうしてその名を叫ぶのか、どうしてその名だけを忘れられないのか、まったく理解できないままに。

その少年だった化け物は、最強の絶対支配者、全ての頂点に君臨す

る、至高なる大魔王様——に討伐されるまでの数百年、人間を喰らい続けたのであった。

『主演：パンドラズ・アクター』

「……あの黄金姫も、徹底抗戦の末、護衛の少年に裏切られて死ぬ」という演出ができていけば、父上のコレクションに加えられる可能性もあったでしょうに」

はあ、とため息を漏らし、埴輪男は薄暗い会議室で閉幕した舞台の残骸を眺める。

元は八本指と呼ばれる犯罪組織の幹部だったモノだ。今は何だか人間とは思えぬ別の生き物になって、のたくっているが……。

「余興はこの程度にしておきましょうかね。あとは父上と一緒に、コキュートス殿の侵略戦争を見物させてもら——」

即興劇にはまあまあだったと評価し、パンドラは踵をかえそうと、ナザリツクへ帰還しようとしていたその時、魔法による意思の伝達を認識する。

『パンドラ、ドリームチームで出陣するわ。すぐに戻りなさい』

第32話 「決別魔王」

『パンドラ、ドリームチームで出陣するわ。すぐに戻りなさい』
「ほう、それは朗報、と言つてもよいのでしょうか？ 統括殿」

『ええ、そうね。モモンガ様にとって不要な存在を排除できるのだから、嬉しい報せには違いないわ。……ただ注意して、アイツは隠密特化型よ。見失うと厄介なことになるわ』

「はい、肝に銘じます。それでは統括殿、アウラ殿には『山河社稷図』を、マール殿からは『強欲と無欲』をお借りして、合流させていただきます」

『急いでね。アイツは今帝国を出て『廃墟都市』方面へ移動しているわ。それと、現地の吸血鬼が二体ほど従者として傍に居るみたいだけど、なにも問題ないわね？』

「無論ですとも」

〈伝言〉が役割を終え、闇深き地下会議室へ再度の沈黙をもたらす。想定していた事態ではある。モモンガ様が転移してきたのだから、他が来ていないわけがない。いくつかの条件が重なる必要があるのだとは推察していたし、その一つが『ユグドラシル』への『ログイン』だということも理解していた。だから四十人の内、数名はこちらの世界へきている可能性がある——待ち構えていたのだ。

（モモンガ様と悟殿の分離から判断すると、今回の標的も半分は現実世界へ『ログアウト』しているのですが、はたしてどのような存在になっているのか？ 実際会ってみないとその辺りは解りませんねえ。役に立つ知識を持っていると助かるのですけど……。統括殿が消滅させてしまう前に脳を吸いたいものです。やれやれ）

相手は既に至高の御方ではなく、ただのユグドラシルプレイヤーだ。故にアルベドを含む僕たちが、『モモンガ様へ危害を加えることのできる高レベルな敵』として我を忘れるほど敵愾心をむき出しにするかもしれない。特に守護者統括に関しては因縁がありそうなので注意しておく必要があるわ。

プレイヤーが相手なら色々やるべきことがあるのだ。

ユグドラシル由来の武具やアイテムを回収すること。

未知の知識を得ること。

こちらにきてからどれだけの情報を漏らしたのか、ということ。

そして最後に、プレイヤーを消滅させる手段についての実験。想定していた方法でプレイヤーを消滅させることが可能なのかを実証したいのだ。本物を使って。

「たっち・みー」なら勇者がやってきたと父上も喜ぶのでしようけど、最弱の偵察要員とは、皮肉めいたものを感じますねえ。とはいえ、他の誰が来ても結果は同じ。大魔王様率いるナザリックの戦力には手も足も出ない。父上が一騎打ちをしたいとか言い出さない限りは……」

誰に語るわけでもない独り言を呟きながら思考を整理しつつ、パンドラは〈転移門〉を起動させる。同時にアウラたちの所在を追跡し、肝心のブツを所持しているのかを確認する。

「それにしても……、父上を満足させてくれる勇者は現れるのでしょうか？ プレイヤーですらまともに姿を見せず、挑んでくるような気配もないというのに。育成するには時間と手間がかかりますしねえ」
難題です——とため息を漏らし、埴輪男は薄暗い地下会議場を後にする。

その場に残るは作り変えられた異形の生命体と、それが喰らいつく人間だった肉片。しばらくすれば、八本指に所属していた裏稼業の間どもは駆逐されるだろう。いや、喰いつくされるだろう。

だがもちろん、そのことは誰にも知られない。

地上では侵略戦争の真っ最中なのだ。コキュートスの指示を受けた魔王軍第一陣第二陣の混成部隊が、ゆつくりと王都まで進軍してくる。間どもを丁寧に殺戮しながら。

王城の者たちはどう動くのだろうか？

中庭にコキュートスが陣取っているその横で、黄金姫は——、蒼の薔薇はいつたいなにをするのか？

決死の覚悟でコキュートスへ襲いかかる？

立て籠もって最後のときを待つ？

王城を脱出して逃げる？

おそらく実行に移せるのは、王城からの、王都からの脱出であろう。国王や第二王子などは迷いなく逃げ出そうとするに違いない。だが黄金姫はそれが不可能だと理解しているが故に、最後の希望へ縋りつくだろう。

パンドラが提示した「悲惨な死」へと。

魔王軍への投降を拒絶されたときに教えて貰った答えなのだから、今更ではある。

選択肢としては自覚していたのに、選べなかったのは黄金姫自身。魔王様に喜んでもらえる悲劇的な死を、喜んで受け入れることができなかつた時点で詰んでいたのだ。

だから王国は滅亡する。

黄金も薔薇も駆逐されよう。

姫の危機に勇者が登場するかも？ と微かな期待を抱きながら魔法の鏡を覗いている魔王様の、一時の娯楽となりて果てることができれば上出来だ。

リ・エステイーズ王国。

残された領土は三分の一。

指揮系統は壊滅。主要な貴族たちは国外への脱出に邁進。冒険者や請負人^{フリーカー}たちは各自で逃げ道を探り出ていったが、消息は不明。王都には敗残兵や難民が集い、暴動寸前。元貴族の冒険者が奮闘し無秩序状態をギリギリ回避させてはいるものの、先は無いだろう。

ただ……、おかしなことと言えば、コキユートス率いる本陣の側近たちが王都の治安維持に貢献していることだ。

何も言わず誰も殺さず、王都の通りを散歩する。

巨大な黒曜石を思わせる丸虫がモゾモゾと進むだけで場は凍り、人々は一切の行動を止めてしまう。

別に手を貸しているつもりはないのだろう。

無様な真似は止める、とでも言いたいだけなのだろう。

コキユートスは中庭に陣取り、魔王軍に指示を放っているだけだ。

まだ見ぬ救世主——プレイヤーが国を救うために、颯爽と現れるの

を信じて。



「いやあー!! 死にたくない! 死にたくないよおー!! お願いだから殺さないで! 何でも言うこと聞くからあ! 何でもするか
らあ! いやだ! いやだいやだ! 死にたくない! 助けてえ!!」
草原に響き渡る悲痛な叫び。

舞い散る血肉に殺気だけが呼応する。

「……ああああ、いや、いやいやあ! 殺さないで! 死になくな
いー!!」

新たな世界が作られ、懇願の悲鳴は掻き消えた。

もう二度と、この世には戻らない。

「さあ、私たちも」さんがしやしよくず「山河社稷図」の世界へ入るわよ」

「——はい、アルベドお姉様」

世界を滅亡させ得る最強の姉妹。

墮天使の黒い翼をむしり取るべく、別世界にて拳を揮う。

命の刈り取りは二十に及び、最後は叫び声も聞こえない。

死体も役目を終えたとばかりに、光の粒子へと変換されていく。

消滅。

ユグドラシルプレイヤーの完全消滅。

リスポーンキルを繰り返した末のレベルゼロ。復活不可能を意味
する——かつて八欲王が辿った末路。

そう、この日、元至高の御方であり、かつては「アインズ・ウール・
ゴウン」のギルドメンバーであった、四十一人の一人たる最弱の墮天
使は消え去った。

その場に、アイテムボックスに残っていた消費アイテムを山と残し
て……。

ナザリツク第十階層「玉座の間」にて、魔王は記録された映像を見
終え、軽く息を吐く。無論、肺は無いが。

「そうか、期待していたほどの有益な情報は無かったようだな。まあ、プレイヤー消滅の経験を集めただけでも十分か」

「はい、今回の経験は必ずや御役に立つかと。ですので今後、ナザリツク監視網にプレイヤーがかかるようなことがあれば、是非とも、わたくし率いる『ドリームチーム』にお任せください」

玉座の隣にありて、白き悪魔は満面の笑みだ。獲物をしとめた猟犬が褒めて欲しいかのように。

「それで、アイツは他に何か言っていたか？ 役に立たない戯言の類でも構わんぞ」

「はっ。主要なところとしましては『モモンガ様にお会いしたい』と。あとは『半身の行方について』でしょうか。リアルへ戻ったと察しているのは先程の報告通りですが、まだ実感が湧いていなかったのでしょうか。ユグドラシルの感覚を多く残していたように思われます」

「単独で異世界へ転移したが故に、理解できず——か」

どこか遠くを見つめるような仕草で魔王は呟く。誰かに聴かせるモノではなかったのだろう。答えを求めているわけでもなさそうだ。

「モモンガ様、私からも——よろしいでしょうか？」

「ああ、パンドラ。どうだった？」

「はい、収穫は予想以上かと」玉座の下に控えていたモモンガ直轄の僕は、あまりに神々しい且つ禍々しい籠手を掲げながら「流石はプレイヤーです。高レベル段階での経験値は目を見張るものがありますな！」と興奮気味に語る。

「『山河社稷図』と『強欲と無欲』の二つ持ちなどユグドラシルでは有り得なかった過剰装備だが、経験値を確保できたのなら持たせた甲斐があったというものだ」

途中でPKに遭いでもしたら目も当てられない惨事になるので、^{ワールド}世界級アイテムを持ち歩くなど考えられない。ましてや二つ持ちなど、ギルドメンバーからの支持は得られないだろう。

とはいえ、ユグドラシルの常識など異世界には関係ない。高レベルの経験値が貴重であるこの世界においては、価値観も変動するものだ。

モモンガはパンドラから「強欲と無欲」を受け取り、その成果を認める。

「くくく、これで経験値消費系の魔法やスキルを気兼ねなく使用できるな。やはりプレイヤーは利用価値が高い。今後も発見と監視には力を入れ、強力な個体であればツアアに紹介を、弱者であれば経験値へ変換。——それでよいな？ アルベド」

「はい、モモンガ様。プレイヤーにしましては、ドリームチーム」
にお任せください」

深々と頭を下げながらも、アルベドは1点だけ、モモンガの意向に背こうとしていた。

強いプレイヤーならば、「勇者」にして「真なる竜王」——「ツアインドルクスⅡヴァイシオン」へ紹介するという点。そこだけは承諾しかねるのだ。愛する夫へ牙をむこうとするゴミを放置し、将来の火種として勇者の元へ送り届けるなんて、良妻賢母としては黙っていない。だから皆殺す。

発見したプレイヤーは皆弱者であり、取るに足らないものばかり。そう報告し、経験値へとすり潰して消滅させるのだ。

たとえ相手がワールドチャンピオンであったとしても。

「さて、私は少し出てくる。後は頼んだぞ、アルベド」

「はい、お任せください」深々と頭を下げる守護者統括は、不敬になるかもしれないと思いつつも言葉を繋げる。

「モモンガ様……。人間が相手とはいえ、万が一のこともあります。お気をつけて」

「そうだな。魔王を討伐するのは人間の役目であり義務なのだから、悔めるのはよくない。とはいえ、早く出てきてもらいたいものだ。救世主とやらが」

魔王は玉座から腰を上げ、バサリとマントを横に払い、部屋を後にする。

白い悪魔と埴輪男は、巨大な扉を潜った直後に転移する御主人様を見送り、満足げな笑みを浮かべては身震いしていた。

モモンガ様に最良の結果をお渡しできたことに対する安堵であろうか？ それとも邪魔な元至高の御方を駆除できたことに対する歓喜であろうか？

ドリームチームを率いる二人は、主が居なくなった玉座の間で決意を固める。

『モモンガ様に仇なすであろう、プレイヤーどもの完全排除』を――。
「次はタブラが来ないかしら。もしそうなら全身バラバラにして、拷問しながら殺してやるのだけど」

「私情を挟むのは感心しませんね。次は複数のプレイヤーが相手になることを想定しておくべきでは？　ひとまず1チーム6名編成を想定しましょう」

主が居なくなった広間では、ドリームチームのリーダーと副リーダーが今後の展開について考えを述べている。

だがそう簡単にプレイヤーと出会えはしないだろう。

各地に派遣されている影の悪魔や八肢刀シャドウドデーモンの暗殺蟲エイトエッジ・アサンも、生きているプレイヤーの痕跡を見つけたためにはない。

プレイヤーは伝説であり、神にも等しいふぎけた力を持つ化け物。それ故に、この世界へきているのなら何かしらの騒動を起こしているはずだ。大魔王様のように。

「複数のプレイヤーが相手となると、連携されるのが面倒ね。モモンガ様も『チームで動くプレイヤーの強さはレイドボスをも凌駕する』と仰っていたわ」

「となると、我々も戦闘の連携について再考が必要でしょうねえ。どこかで実践的なチーム戦でもできれば……」

「いるじゃない。第六階層に、お手頃な奴らが」

「おお、勇者たちですな」

「ふふふ」

不気味な笑みを浮かべて、アルベドはドリームチームの訓練開始を発令した。

集合場所は第六階層。

訓練相手は集められた勇者たち。今回はチーム戦なので、帝国から

来た元請負人の勇者チームが矢面に立つこととなった。

大丈夫、殺しはしない。チームとしての連携を高めるための訓練であり、殺し合いではない。

だけど幾度かバラバラになった。首が飛んだ。口から臓物を出すのかと思えるほどに吐き、吐き出す前に内臓は潰れた。

一番忙しかったのはペストーニヤだろう。お手伝いのルプスレギナが拾ってきた勇者の首を、急いで胴体にくっつけては回復魔法をかけ、呼吸が戻らないから腹に一撃を入れる。

バラバラの肉片を拷問の悪魔に集めさせて、死亡判定が出る前に全身を再構築させる。

「はあ……、このように勇者をぞんざいに扱っては、コキュートス様もお怒りになるのではないでしょうか？ ——わん」

犬頭の神官様は、空高く吹き飛ぶ双剣使いの勇者を眺め、『地面に当ると肉片を集めるのが大変だから、途中で受け止めるべきかも？ わん』と思いつつ、深い溜息を吐く。

ナザリック地下大墳墓第六階層、コロッセウム 円形闘技場。

日頃、その地で鍛錬していた多くの勇者たちは、怨嗟の悲鳴をぶつけていたコキュートスの指導が、どれほど優しかったのかを痛感していた。

己の身に残っている血液を半分以上たれ流す。

自身の体重が一刀ごとに軽くなっていく。

チームの連携など何処へやら。

漆黒の鎧に身を包んだ二本角の女悪魔は、鬱憤を晴らすかのように巨大な斧頭バールを持つ武器ディックを振り回し、高笑う。

どうやらドリームチームに『連携』の二文字が活用される日は当分こないようだ——と埴輪男の悲しげな呟きが、第六階層に吹く人工の風に舞い上がっては消えていった。



「押し支えなさい！ バリケードからは頭を出さないでっ！」

「おいつ、積み上げられるもんなら何でも持ってこい！ 玉座でもかまわんぜ！」

「リーダー、裏口に化け物の気配はない。やはり正面突破」

「正面に二体、死の騎士がくる。ヤバい。」

「ラキユース！ 私が出るか?!」

王城にて最前線。

最後の砦と言わんばかりに、蒼の薔薇と王国近衛兵、そして集まった魔法詠唱者たちは正面口にてバリケードを設置する。

「まだ駄目！ イビルアイは魂喰らいに専念してっ！ さあ王国兵の皆さん！ バリケードの隙間から槍を突き上げなさい！ 死の騎士を押し留めるのです！」

王城の正面口フロアで声を張り上げ、泣き出しそうな近衛兵を蹴り飛ばし、圧力をかけてくる死の騎士へ立ち向かわせる。

それはとても非情な行動であり、美しきアダマント級冒険者、蒼の薔薇のリーダーらしからぬ所業かもしれない。だがもう後はないのだ。王国は首都まで魔王軍に攻め入れられ、残すところは王城のみ。吹き消される寸前の灯火である。

「宮廷術士殿！ 首尾は?!」

「万全だ！ 二階出窓から死の騎士を狙える！ 魔法詠唱者はギルドから逃げてきた者も含めて六十を揃えた！ やれるぞっ！」

「ならば即座に！」

「おう!!」

爆発と雷鳴、魔法の矢が飛び交い、人外の化け物を上方から撃ち叩く。

「ガアアアアアア！ ウゴオオオオオオオオオオオオオオオウオオウ!!」

「おっしやああ！ 結構効いてんぞっ！ 王国の魔法詠唱者も捨てたもんじゃねえな！」

「魔法の物量戦とは珍しい。でも——」

「うん、魔力が切れたらおしまい。入れ替わりながらどこまで回復できんぞっ！」

「私のように魔力の急速回復が使えればよかったんだが——ちっ、厄

介なのが来たぞ。ラキユース！ 私の出番だ！」

「ええ、お願い！ 仕留めてきて！」

見れば、二体の魂喰らいがフヨフヨと浮かびながら、二階の魔法詠唱者たちへ視線を向けている。

襲われたらひとたまりもないだろう。だから切り札たるイビルア伊が単騎で向かうのだ。それ以外に方法はない。

「正面の死の騎士はどう?!」

「イイ感じだぜ！ だいぶへばってやがる！」

「ならガガーラン、ティア、ティナ！ 一気に止めをつ！」

「おう！」 「了解！」

バリケードから飛び出し自慢の戦鎚を下から首元へ振り上げる。

グラついたところへ何本もの短刀が襲い掛かり、鎧の隙間へ突き入れられては追撃の回し蹴りでさらに奥へと刺し込まれた。

「もう一撃を忘れないよ！」

「もち」

「ろん」

死の騎士への対処はもう飽きるほどしている。それにイビルアイの古い思い出話からも情報を得ていたので、止めを忘れるなんてことはない。

「よっしゃ！ 皆下がれ！ すぐにバリケードの補強だつ！ 次がくるぞー！」

「——ああ、ガガーランがそんなこと言うから」

「同意、これが十三英雄の残した言霊。『ふらぐ』というヤツだね」

「ティア、ティナ！ 変なこと言っていないで敵の数と内容！」

休む間もなく新たな敵が現れる。

魔王軍の手勢なのだから相手が化け物なのは周知の事実だ。その全てが手強い強者であることも解っている。だけど少しは希望を持ちたい。弱そうな相手が来てくれないかと……。

「正面にて目視！ 敵は死者の大魔法使い！ 数は——」

「数は十八！ ふざけてる！ なにこれ?!」

「じゅうはち?!」

迷宮の奥底で待っているはずのモンスターが、王城前にずらつと並んでいる。

思わず笑ってしまいそうになる光景だ。

「退避い!! ここは捨てます! 後方に新たなバリケードを構築! 狭い場所で迎え撃ちます!」

「ああくそっ! あのチビはなにしてんだ?! 骨の馬ぐらいさつさと倒せよ!」

「無茶を言う。相手は伝説の骨馬」

「それなら私たちのチビも伝説、負けてない」

「おまえらふせろおおお!!」

十八もの火ファイヤーボール球が飛び交うさまは美しい。王城の正面口が吹き飛ば光景も、二階にいた魔法詠唱者マジック・キャスターが巻き込まれて細切れになる有様も、滅多に目撃できない衝撃映像であろう。

残念なのは舞い上がる多量の噴煙と、耳が居たくなるほどの爆音。

見世物としてはイマイチだ。

「みんな生きてる?! 水薬ポーションは使い惜しみしないでよ!」

「大丈夫だって、まだやれるぜ!」

「破片が危なかった。まともに受けた王国兵はバラバラ」

「イビルアイが来てくれて助かった。これはお礼をしないといけな
い」

「いらんいらん。余計なお世話だったみたいだしな。まあそれより
……」

大きく開いた正面口を見て、イビルアイはため息を漏らす。バリケードなど見る影もなく、巨体のモンスターが悠々と入り込める大穴だ。

この調子で辺り構わず爆撃されたら、王城は崩れ落ちるだろう。もう先は無さそうだ。

「ラキュース、もう決断すべき状況だぞ。私としてはだいぶ遅いと思うがな」

「そうね、リーダー失格だと思っているわ。……ごめんなさい」
もはや勝敗に言及するまでもない。

王城を包囲されている現状を見れば、王国に未来はないと理解できないよう。

これでも魔王軍は王城の正面からしか攻め込んでいないのだ。中庭に陣取った悍ましい化け物どもは攻撃に加わってすらいない。

「みんな下がるわよ！ ラナーの部屋まで走って！」

「鬼ボス！ 死者の大魔法使いが入ってきた！」

「まかせてっ！ 超技！ 暗黒刃超弩級衝撃波!!」

本来建物の中で使用する技ではないと思うが、巨大化した漆黒の刀身から放たれる爆発的エネルギーは、王城の狭い通路を砲身のごとく、先端にいた骸骨の化け物どもを粉々に吹き飛ばす。

「おお、相変わらずスゲー威力だな」

「おいコラ筋肉！ 前を向いて走れ！」

舞い上がる噴煙を隠れ蓑にして、蒼の薔薇はその場から消える。

目指すは王城の最奥、というか外れの一角。先日、黄金の姫らしからぬ姿を見せたラナー王女が、御付の護衛騎士だけを引っ張り込んで、王城が攻め込まれてもなお閉じ籠っている私室。

通称『愛の巣』である。

「小僧！ 首尾はどうだ？ 姫さんの様子は？」

「——は、はい！ ガガーランさ——ん！ ラナー様は完全に眠られました。大丈夫です！」

ガガーランは姫様専属護衛騎士「グライム」のことを『童貞』とは呼ばない。呼ばなくなった。つまり、そういうことである。

第33話 「仲介魔王」

「すぐに出るわよ。ガガーランはラナーを担いで」

「途中で騒ぎ出さないだろうなあ」

「問題ない、半日はぐつすり。イジャーニーヤの特別製」

「ティア、貴女は斥候よ。手薄な場所を見逃さないで！」

「了解、鬼ボス」

蒼の薔薇は王城の包囲網に穴があることを見抜いていた。というより魔王軍がわざと抜け出易い——逃げ易い箇所を設けているのだと理解していた。

第二王子ザナックが城の緊急脱出ルートを使つて見事に捕らえられたことから察するに、一定以上の実力者でなければ解らないよう隠蔽されているのだろう。強行突破するにもアダマンタイト級の武力がなければ軽く餌食にされるので、現時点では“蒼の薔薇”以外の何者も城からは脱出できない。

「さあ、いくわよ！ ラナーさえ無事なら……、私たちの勝ちよ！」

「ちよつと無理がある」

「まあ、この状況じゃくなあ」

「お前ら、ティアが呼んでいるぞ。さつさと動け」

ラキユースは、地味な旅装束を着込んだ状態で背負われている親友の横顔を覗き見ながら、魔王軍幹部とのやり取りを思い出す。

あのとときのラナーは、魔王軍に取り入ることで王国の未来を切り開こうとしていたのだ。己の身を売り渡し、どんな要望にも応えとひれ伏しながら、王国民が生き残れる選択肢を探っていたに違いない。

ラナーには不慣れな役目だったことだろう。屈辱的であったはずだ。

結果として交渉は決裂し、ラナーは壊れてしまった。

あの日以来クライムだけを傍に置き、来る日も来る日も……。あんなことやこんなことを……。

「鬼ボス、この先に死者の大魔法使いが率いる骸骨部隊がいる。迂回

するのは無理。それに魂喰らいが一体、上空をウロウロしている」

「迷っている暇はないわ。私とティナ、ティア、クライムで突っ込むわよ。ガガーランはラナーの警護。イビルアイは魂喰らいを」

「了解」は、はい」「まかせとけ」「よし、上は私がもらうぞ。〈飛行〉足を止めたのは一瞬。

蒼の薔薇は即座に攻勢へと移り、無警戒のアンデッドへ迫る。

死者の大魔法使いは己の影から飛び出してきた『何か』に気付く前に、その頭骨を刈りとられた。率いられていた骸骨戦士などは、クライムでも容易く打ち碎ける模様。ガガーランが強引に参戦するまでもないようだ。

ラキュースはイビルアイの戦況を見つつ、『問題ない』と判断して片手を上下させた後、手のひらを開いては閉じ、進むべき方向へ手刀を下ろす。

「ティナ、追手は？」

「大丈夫、私たちに反応した個体は居ない——と思う」

「なんだよ、自信なさげだな」

「気持ち解る。魔王軍は規格外すぎて、今この瞬間もどこからか見られている気がする」

走りながら周囲へ視線を送り、ガガーランは肩をすくめる。

「おつかねえなあ」

「——どうした？ 敵でも見えたか？」

「ちげえよ、イビルアイ。って骨馬のやろうは仕留めたのか？」

「ああ、問題ない。と言いたいところだが大技を使い過ぎた。魂喰らいクラスの化け物は、もう勘弁願いたいものだな」

努めて平静を装いながらも消耗具合を口にする。流石に伝説の吸血鬼、"国墮とし"でも魔王軍のモンスターは手強いようだ。

「みんな揃ったわね。これから先は森の中を進むわ。薄暗くて視界は最悪、しかも厄介なモンスターが邪魔をしてくる難所だけど、魔王軍を相手にするよりマシよ。……クライムも、イイわね？」

「はい、もちろんです。よろしくおねがいます」

クライムは保護されている立場だ。傷心のラナー王女を救出して

もらっている側であり、足手まといでしかない。

だから今は、ちよつかいを掛けてくるであろう森の獣へ剣を振り下ろすことぐらいしか出来ず、己の無力さを嘆くばかりである。

「ふう、ガガーラン、大丈夫？ 背負うの代わるわよ」

「冗談だろ？ 指揮官が動き辛くなってどうするよ。それに姫さんは軽過ぎて、担いでいるって感じもしねーよ」

「ガガーランさん、よろしければ私が……」

「おいおい、ついてくるのもやっとの小僧が言うじゃねえか」

「そ、それは、その……」

「おい、呑気にお喋りしている場合じゃないぞ」

そう口にする、イビルアイは足を止めて後方へ顔を向ける。

「判るか？」

「かろうじて、何かヤバそうなのがくる」

「森の中じゃない。空？」

イビルアイの傍に寄り、双子の忍者は目を細める。

感覚を研ぎ澄ませてようやくやく捉えられる距離だ。これならまだ逃げられるのではないかと。と目線で隣の吸血鬼を急かそうとするが。

「無理だな。信じられんほどの魔力を感じる。これは魂喰ソウルイーターらいより上位のモンスターかもしれない」

イビルアイは覚悟を決めて、仲間から一歩離れる。

「お前たちは先に行け。ここは私が引き受けた」

「なっ、なにを言っているのよイビルアイ！」

「マジで言ってるのか？ だったらぶん殴るぞ」

「イビルアイ様、お一人で残るなど……」

そんな反応がくるだろうなどと、予想通りの答えに苦笑しながら、イビルアイは片手を上げて皆を黙らせる。

「今迫ってきている追手には勝てない。全員でも振り返り討ちだ。だが私なら時間を稼ぐことができるだろう。お前たちが逃げ切れるだけの時間を。……ラキユース、リーダーなら決断しろ。このままでは無駄

死にだぞっ」

誰も犠牲を出さずに最良の結果を出すなんて、物語の中でしか存在しない架空の冒険譚だ。実際には人は死ぬし、怪我をするし、脱落する。

どんなに注意を払っていても、それは突然訪れるものなのだ。

「——イ、イビルアイ！ 後で合流しなさい！ 絶対よ！」

「ああ、努力するよ」

決断すれば行動は速い。

ラキユースは流れ落ちる涙を隠すかのように顔を背け、駆け走る。血が滲むほどに拳を握りしめたガガーランは、鋭い目線でイビルアイを見つめると、凄まじい勢いで森の奥へと走り行く。その後ろには戸惑った表情を隠せないクライムが続ぎ、ティアとティナが『そんなじゃまた』と軽い挨拶だけを残して消えてった。

「はあ、私もここまでか。まあ二百五十年も生きれば、って生きてはいないが、充分だろうなあ」

薄暗い静かな森の中で、一人の吸血鬼は覚悟を決める。

（長く生きた者から死ぬべきだ。ならば私の役目はアイツらを生かすこと。そのために死ぬ！）

一陣の風が森の木々を揺らし、隠れていた五体の影を晒す。

「魂喰^{ソウルイーター}らいが四体に——、コイツは、先頭のコイツは……」

遠い昔、十三英雄のリーダーに分厚い辞典を見せてもらったことがある。モンスターの美しい姿絵が載っている魔法の書物だ。

あまりに多様で詳細な内容に驚くしかなかった当時ではあるが、一緒に見ていたリグリットなどは『将来召喚したいアンデッドリスト』を作って騒いだりしていた。私もリストを見せられて『いつの日か召喚してみたいものじゃ、おっ、これなんか強そうじゃな』と鬱陶しい雑談に付き合わされたものである。

「……蒼褪^{ペイル}めた乗り手^{ライダー}」

昔の記憶がよみがえってくるのは、走馬灯と呼ばれる現象であろうか？ 吸血鬼にも適用されるとは今の今まで知らなかったが、もしかすると大発見かもしれない。

「ああ、上から見下ろして、楽勝だとても思っているんだろうな。はっ、その思い上がりを打ち砕いてやる！ 最強にして最悪の吸血鬼『国墮とし』の力を見るがいい!!」

〈飛行〉の魔法で飛び立つ小柄な吸血鬼に対し、蒼い馬に乗った禍々しい騎士はユラユラと陽炎のようなその身を揺らし、無言で待ち構える。

その口元は、ほんの少し笑みを浮かべているように見えた。

「鬼ボス、そのまま走りながら聴いて」

「面倒ごとね、なに？」

イビルアイと別れて数刻後、森の外縁部に差し掛かっていた蒼の薔薇に緊張が走る。

「新手が来た。地を這うような奇妙な移動。イビルアイと対峙していたモンスターとは別班だと思う」

「だけど数が多い。十以上は確実」

「なら仕方ないわね、この場で迎え撃つわよ」

「おっしやあ！ ようやく出番がき——」

「——ちがうちがう」

足を止めて迎撃の準備に入ろうとするラクユースとガガーランであったが、ティアとティナに腕を引っ張られて再び走ることを強いられてしまう。

「ちよつと、どうしたのティア？」

「ここは私たちに任せる。多数の追手を攪乱するのは忍者の十八番。鬼ボスと筋肉は邪魔」

「誰が筋肉だよ」

「ついでにクライムも邪魔」

「うっ……」

言いたいことは解った。

納得はできないけれど、ラクユースはリーダーとして決断しなければならぬ。

ここで足を止めては、更なる追手に追いつかれる要因になるだろう。イビルアイの献身も無駄になる。今は王国復権の命綱である。黄金姫”の安全を確保すべく、突き進むしかない。

「ティア、ティア。合流地点で待っているから、遅れないこと！」

「へまこくなよ、二人とも！」
「御武運を！」

担がれている姫を含む四人を見送り、双子の忍者娘は地を這う影のような追手の前に立ちほだかる。

「ここを通りたければ、私たちを倒すんだな」

「ふっ、貴様らにできればの話だがな」

『一度言ってみたかった』という台詞を放ち、真つ赤な短刀を構える。

目の前の人影はゆっくりと立ち上がり、蝙蝠のような羽を広げ、鋭い爪を前面へと押し出す。影は影のまま、距離が近づいても漆黑。ただ、目があると思われる箇所は黄色く輝き、丁寧に殺意の有無を知らせてくれる。

『(悪くない人生だった。死に方も暗殺者には贅沢すぎる)』

『(同意、鬼ボスと筋肉とチビには感謝している。もちろんティア、貴方にも……)』

片手で意思を送り合い、軽く微笑む。

もう、覚悟は決まった。



ほんの少し前、この場所には城塞都市があった。

その名は「エ・ランテル」。

各国の中間地点にあったことから軍事・経済において重要視され、けれども王都から物理的に離れていたため王族貴族の影響が希薄であり、それ故に帝国や法国の工作員が山ほど送り込まれていた最前線。

今その場所には誰も居ない。

兵士も貴族も平民も、冒険者も請負人^{ワーカー}も荒れくれ者も、工作員も犯

罪者も……。

丘の上の、溶けた岩が台座となっている平らな場所に、大きな円卓と複数の椅子が並べられていた。

周囲には何も無い。建物は当然ながら、朽ち果てた荒野のように植物なども存在しない。

そんな場所に、人間が現れた。

一人、二人、三人四人……。

高品質の衣服を纏う上流階級と思しき人物が円卓の席へ座り、その後ろに従者らしき一人が控える。座つたのは四人、立っているのも四人。円卓の席にはまだ余裕があるものの、それ以上増えることはなさそうだ。

ただ、円卓には一席だけ場違いな、誰も座らないだろうと思える「骨の玉座」が存在感を露わにしていた。

座つたら呪われそうだとまらない。視線を向けるだけでも魂の何かが削れそうだ。

「——待たせたな、諸君。集まってくれて嬉しいぞ」

「ひいっ！」

「なっ?!」

突然、まさに突然、それは現れた。

骨の玉座に座する、「絶対的な死」。一目見ただけで全てを諦める、絶望しただけでは許されない最悪の災厄。規格外の魔力が満ちる豪華なローブから覗き見える骨の身は、人が触れることを許されない神体のごとく。生者を憎むアンデッドであることすら些事であるかのよう。それはまさに人知の及ばぬ存在、絶対者であり、支配者であり、神をも超える大魔王様。

さあ、生きる望みを投げ捨てよう。

「ああ、座つたままで構わん。飲み物でも飲んで楽にしてくれ。ソリュシャン」

「はい、モモンガ様」

いつの間に現れたのか？ 飲み物を運ぶメイドらしき女性が三名。そして大魔王の隣には、闇妖精ダークエルフの少年と少女が大人しく控えていた。

「今回集まってもらったのは、連合軍の結成を促進するためだ。帝国の皇帝による呼びかけが上手くいっていないようなのでな。……そうだな？ ジルクニフ」

「は、はいっ！ 申し訳ありません、大魔王様！」

集められた人間の一人、帝国皇帝ジルクニフはその場で頭を下げつつ、『最初から無茶苦茶な要望だろうがっ！ 誰が大魔王の存在なんか信じるんだよお!!』と心の中だけで叫ぶ。

「謝罪の必要はない。優秀だと言われているそなたで駄目なら、他の対策が必要だということだ」大魔王は『矮小で愚かな人間の無能さを、まだ理解できていないな』と反省し、集まった他の指導者を見やる。「それで？ カルサナス都市国家連合の代表殿はどう考えているのかな？ まだ連合軍の結成など不要と判断しているのか？ それで人類は生き残れると？」

魔王から直接声を掛けられ、三十代と思しき精悍な女性——連合の代表たるカベリア都市長は、震える身を律して答えを発す。

「皇帝の提案を一蹴したのは軽率であったと後悔しております。今後は一致団結して、コトに当らせていただく所存でございます」

余計なことを口にしないようにと気を配りながら、冷や汗がしたたり落ちる緊張感の中で頭を下げる。

「ふむ、面白味のない回答だが、まあよい。それより代表殿、護衛は好きだけ連れてきてよと言ったはずだが、皇帝と同じく女を一人とは……、何か特別な人物なのかね？」

偶然の一致なのか、今回招集した指導者は皆、御供を一人だけしか連れてきていなかった。皇帝は後宮の左程美しくない成人女性を。都市長は軽装の身軽な女剣士を。他の者も宰相一人だったり、女神官だけだったり……。

迎えに行かせた『死の支配者』^{オーバーロード}たちなら幾人だろうと連れてこられるはずなのに、何故なのだろうか？ それぞれに事情がある、ということなのだろうか？

「は、はい。この者は私が知る最強の使い手でして、ほとんど無理やりながらも護衛の任を引き受けてもらったのです」

「——今は後悔している。いや、見たこともない転移の魔法を使う骸骨の化け物を見た時点で、その場に身を置いていた時点で、私の運命は終わっていたのだらう。もう抵抗する気力もない」

都市長の後ろに控える若い女性は無気力に俯き、己の死を覚悟しているかのようだ。

身に纏うは動きやすき重点の布と革。所々に仕込み武器が備えられていることからすると、暗殺者のような職業を得ているのかもしれない。

「ん？ 王国の冒険者でこんなヤツが居たような」

「それは多分姉妹。私たちは三姉妹で皆忍者。諜報や暗殺、たまに護衛なども担う」

「ほう、忍者か」

「ちよつとよろしいですか？ モモンガ様」

低レベルの雑魚であるのに忍者だという人間に対し、少しばかりの興味を持ったところで隣に控えていたアウラが割り込んできた。

その口調には、隠そうとした怒りが微かに頭を覗かせている。

「どうした？ アウラ」

「はい、その人間があまりに不敬だと思えます！ モモンガ様に対しその口のきき方！ 殺してもイイですか?！」

「——つひぎい！」

殺気と呼ばれるモノがある。アウラが僕魔獣しもべを躡けるときに用いる、上下関係決定の鞭だ。

それを生きた人間に当てると、標的は全身丸ごと串刺しという瀕死級の激痛を、錯覚であるはずなのに感じるといふ。ついでに気を失つて、股間から色々噴出させたまま倒れ込んでしまうとのことだ。

もちろん、都市長の護衛として連れてこられたイジヤニーヤの女頭領「テイラ」も例外ではない。

「あ、あれ？ 白目むいちゃった……。どうしよう」

「お、お姉ちゃん、えっと、て、手加減しないと、ね」

「放っておけ、特に話があるわけでもない。ルプスレギナ、あとで起こしておけ」

「はっ、かしこまりました」

戸惑う双子をそのままに、大魔王はメイドの一人に処理を任せて、次の指導者へ視線を移す。

「さて、次は竜王国としての意見を聴こうか？」

「わ、わたしはなにも、なにも逆らう気は、ああ、ありません」

大きな黒曜石の椅子にちよこんと座る、子供にしか見えない竜王国の女王「ドラウデIRON・オーリウクルス」。御供に宰相らしき中年男性を一人連れてくるだけであり、まな板の上の鯉であるかのごとく最初から無抵抗の白旗状態だ。

「そ、それに我が国はビーストマンに侵攻されていて、どうにもならない状況なのです。連合軍への参加などと言われても、私の方が助けてもらいたいぐらいで——」

「ビーストマンか……。魔王たる私以外の者がどこかを侵略しているのは、あまりイイ気がしないな。国にしろ種族にしろ、滅ぼすのであればそれは魔王の手によるものでなければならぬ。許されんな」

ズズズつとよからぬ闇が頭をもたげ始めるも、そのままでは周囲の人間が死んでしまうと思ひ直し、ついでにビーストマンの駆除方法へ思考を繋げる。

「普通に殺したのではもったいないな。せつかくの経験値だ。勇者育成に使わせてもらおう。六階層の勇者やレアたちを戦争地点へ放り出し、ビーストマンと死ぬ寸前まで戦ってもらおうとするか。監督役は……、国を救うのだからセバスが適任だな」

手早く思考し、必要な通達を済ませ、魔王は幼い女王へ向き直る。「女王よ、ビーストマンは私が育成している勇者で始末するとしよう。それならば連合軍への参加に問題はないな」

「は、はい！ もちろんです！」

実際はボロボロの国家だ。ビーストマンの脅威が無くなったからと言って、即座に大魔王討伐へ赴けるはずがない。それに魔王が育成している勇者とは何なんだ?! 頭がおかしくなりそうだ。

「では最後に、聖王国の見解を聴こうか？」

「は、はい。私ども聖王国と致しましては、あの……」

ローブル聖王国の至宝とでも言うべき美しき聖王女、カルカ・ベサーレスは、魔王からの問いに即応できず固まってしまった。

それも仕方のないことであろう。聖王国は一枚岩ではないのだ。聖王女の一言で、国が魔王討伐の連合軍へ参加するなど有り得ない。貴族は反発するだろうし、軍部も言うことを聴かないだろう。国は割れるし、内乱が起こる。

聖王国の終わりの始まりだ。

「も、申し訳ありません。私の一存では決められないのです。く、国へ戻って議会を開かないと——」

「やれやれ、つまらん回答だな」

事態の深刻さを理解していない。

聖王女以外の指導者——竜王国は追い詰められ過ぎて選択肢が無かっただけなので除外する——は、『こちらを巻き込むなよ』という冷たい視線でカルカを一瞥し、魔王の動向を伺う。

「迎える者にいきなり斬りかかった聖騎士もそうだが、聖王国は人材不足なのか？ 後ろに控えている神官はどうだ？ この状況で話を持ち帰るだと？ 私に立ち向かおうとしない人類国家など存在する意味はないぞ。次に滅ぼす国家は聖王国、それでいいな？」

「し、失礼ながら、大魔王様！ 発言をお許しただけですか？」

聖王女の後ろに控えていた聖王国のNo.3、ケラルト・カストディオ

は、整った美しい顔に悲壮感を漂わせながら、一步前へ踏み出す。「許そう。それで？」

「はっ、聖王国は連合軍へ参加いたします！ 聖王女様は国内情勢に疎いただの飾りにすぎず、何も解らないのです！ 実権は私が握っておりますので問題ありません！ 必ずや、大魔王様の御期待に沿う結果をお見せいたします！」

聖王女に一切の反論を許さない強い口調で、女神官は全てを確約した。

出来る出来ないではない。

やるしかないのだ。

聖王女にはその覚悟がなかった。反論してくるであろう南部貴族

どもを皆殺しにしてもやり遂げる、という血反吐を飲み込むような
気概が無かったのだ。

「ふむ、よい部下を持ったな聖王女。では次の話に行こうと思うが、その前に」魔王は側頭部へ骨の手を添え、ここには居ない何者かとの意思疎通を行う。

「ああ、聖王女よ。例の斬りかかってきた女騎士の蘇生は無事終わったようだ。あとで聖剣と共に国へ送っておこう。最上級の蘇生魔法を使用したからレベルや経験値、——こちらでは生命力になるのかな？ それは左程欠損してはいないだろうから、すぐに元の実力を取り戻せるはずだ」

「そ、それは、なんと感謝申し上げればよいのか……」

「だ、大魔王様、姉を救っていただき感謝の言葉もありません」

「殺したのはこちらだからな、感謝など不要だが……。まあそれより、斬りかかるなら相手の実力を見極めてからの方がよいぞ。ウルピウススのヤツも『うっかり殺してしまいました』と慌てていたからな」

死の支配者オーバロードがいきなり目の前に現れたら、誰だって斬りかかるような気がする——なんて心の中だけで思いつつ、聖王女と神官は全ての抵抗を諦めて平伏した。

もはや何もかもが理解の枠を超えている。

聖王国の執務室に突然現れた闇の扉と紳士的な骸骨。一瞬にしてバラバラにされた聖騎士団長「レメディオス・カストディオ」。見たことも聞いたこともない集団長距離転移。この世の終わりと同義かと思える大魔王との対面。そして魔王討伐連合軍への参加。最後にレメディオスの蘇生が加わったとしても、感覚が麻痺して驚けない。

聖王国はこの先どうなってしまうのか？

聖王女カルカは、深過ぎる闇の沼にはまり込んだのを自覚しながら、『このまま沈んでもいいかもしれない』ミラー・オブ・リモートビューイングと思いを始めていた。

「さて次は余興だ。この遠隔視の鏡を見てもらおう。滅亡に瀕した王国がどうなるのか？ 同じ人類として興味があるだろうか？」

第34話 「実況魔王」

円卓の上には魔法の鏡が五つ、それぞれの前にふよふよと浮かんで
は、どこか遠くの惨状を映し出す。

「なっ、これは!？」

「まずは魔王軍第一陣が侵攻している録画映像だが……、ん？ 録
画”が解らんか？ そうだな、魔法で姿見を写し取るのはお前たちも
よくやっていることだろうが、それを動いている映像として保存して
いるのだ。あとで観なおしたり他者へ渡したり、今回のように多くの
者へ観せたりする場合も役立つぞ」

風景や姿見をそのまま羊皮紙などへ転写するのは、それほど珍しい
ことではない。冒険者組合でも魔獣登録時などで活用している。だ
がそれを連続転写し、動いている映像とするのはどれ程の魔力が必要
なのだろうか？ とジルクニフは己の下胸部をさすっては、胃の痛み
を堪えるばかり。

ただそんな驚きも、流れる映像の前では前座でしかなかった。
溢れんばかりのアンデッドと悪魔たちの前に積み上げられる、少し
前まで人間であった肉の塊。ダイジェストで流される丁寧且つ凄惨
な蹂躪。第二陣の死の騎士デス・ナイトや魂喰らいソウルイーターが映し出された時などは、『許
してください』と泣き喚きそうになるほどだ。

「これなどは中々の見世物だと思っぞ」

少し嬉しそうな魔王が映し出したモノは、巨大な竜の奇襲劇。数多
のアンデッドが竜の吐息ドラゴン・ブレスによって消し炭となっている映像だ。

本来なら魔王軍が反撃に遭っている憤慨すべき状況なのだろうが、
魔王様にとっては歯応えを感じ始めた一件なのかもしれない。『抵
抗皆無のゴミ処理”が”狩り”となった瞬間と言えるだろう。

まあそんな映像を見せられた各指導者としては、反応に困るしか
ないのだが……。

「あとは一方的な展開ばかりだから軽く流すとして——」

竜王の首が斬り飛ばされる映像を『こんなことがあった程度の理解
で構わん』と言うかのようにテンポよく切り替え、大魔王は王城襲撃

が始まった時点まで動画を進める。

「ここからが王国の勇者候補『蒼の薔薇』の脱出劇になるな。今回の侵略戦争における最後の見どころと言ってイイだろう」

映し出される美しくも勇ましい、漆黒の魔剣を振るう女勇者。ウオーピック
刺突戦鎧を叩きつける巨漢の戦士。双子と思しき忍者姉妹の軽やかなる連携。そして桁違いの魔法で骨の馬を消し飛ばす仮面の子供。

魔法の鏡を見ていたイジヤニーヤの頭領——ルプスレギナに治療されて身を起こしていた『テイラ』は、懐かしき二人の姿から目を離せなかった。

「ふむ、仮面の魔法詠唱者マジック・キャスターと忍者姉妹は脱落したな。残るは四人。女勇者と戦士、眠ったままの娘と護衛の小僧か。さて準備は整ったようだ。ここからは保存してあった過去の映像ではなく、現在進行中の戦い。リアルタイムイベント観賞といこうか」

楽しそうな大魔王様を前に、帝国皇帝も他の指導者たちも口を挟めない。ただ、魔法の鏡に映る『蒼の薔薇』へある種の希望を託すだけだ。

なんとかして一矢報いて欲しい——と。

人類生存の活路を、どうにかして見いだして欲しい——と。

無論、そんな願いが叶うはずないと理解している。理解しているのだ。だけど仕方ないだろう。その程度の救いであろうとも懇願しなければ、魔王を前に呼吸もできない。座って話を聞いているだけでも、命を絶ちたくなるほどの絶望に満たされてしまうのだ。

皇帝であろうと、竜の血をひいていようと、神の加護を得ていようと意味はない。意味はないのだ。



仲間を置き去りにして前へ進んでも、その先に救いがあるのかどうか。ラキユースにはもう分からなかった。

王国の再興にラナーが必要であることは疑いようもない。それだけは確かだ。

しかし、数百万もの王国民が皆殺しにされている最中に逃げ出して、それでよかったのか？ 苦楽を共にした大事な仲間を犠牲するだけの価値があったのか？ どれだけ考えても否定ばかりが頭に浮かぶ。

親友を見捨てて、自分たちだけで逃げるべきではなかったのか？と。

「くそっ、なんだこの霧は?! まったく見えねえぞ!」

「まっすぐ進んでいるのでしょうか？ 感覚がおかしくなりそうです」

ラキユースは周囲の白き霧を一瞥し、ガガーランに担がれている親友の様子を伺う。

(まだ起きないということとは、あれから半日も経過していないということね。体感としては七・八時間ぐらいかしら？ 辺りが真っ白で判りにくいけど、日は落ちてきているみたいだし……)

天を見上げても夜空は見えてこない。分厚い霧の壁が全てを遮り、日光の有無にかかわらず薄暗い空間を作り出している。

頼りにするのは腰に吊るした魔法のランタンなのだが、今は白い壁を照らすだけの愚物だ。

現状脱却の役には立たない。

「落ちていて二人とも、ここは体力を回復させながらゆっくりと進みましょう。もう追手を気にする必要もないみたいだし」

ティアとティナが足止めに残って以降、魔王軍の気配はない。ついでにイビルアイたちが合流する気配もないのだが、それを嘆いている暇はないだろう。

目指すは北部都市“リ・ウロヴァール”。ラナーが手配した北大陸へ渡るため——無事に渡航できるかどうかは別問題——の大型船だ。

「一応周囲には警戒して……え?」

先頭に立って仲間を鼓舞しつつ、力強く一步を踏み出すも、踏みしめた地面の感触に違和感を覚える。

「えっ、石畳? 土の地面だったはずじゃ?」

「おい、なんだこれ? 空気が変だぞ!」

「か、壁が横に!? ラキユース様! 霧がつ!」

混乱する前に魔剣を構える。

霧が晴れたというよりは、消えたというべき怪現象。踵の下に雑草生い茂る土の地面はなく、美しき配列の石畳が並ぶ。左右と頭上には石壁——石材に似てはいるが別物——が立ち塞がっており、前方には格子戸が見える。

「後ろは?!」

「駄目だっ! 行き止まりにしか見えねえ!」

「こちらにも反応ありません! 隠し扉らしきモノは無いかと!」

小さな鈴を鳴らすクライムの姿に、ラキユースは軽く頷く。

隠し扉発見や罨外し、鍵解除の魔法具は元々蒼の薔薇が与えたものだ。その効果は聴くまでもない。

「ここは建物の中……、闘技場に似ているような。クライム、悪いけどランナーを背負ってくれるかしら? ガガーランは戦闘準備」

「は、はい! かしこまりました!」

「おおお、こりやヤバそうだ。今度こそ終わりがもしんねえな」

「縁起でもないこと言わないでよね」

いつもの軽口にほんの少し救われながら、ラキユースは格子戸を指して歩を進めた。

静かな空間に、格子戸のせり上がる音だけが響く。

緊張を胸に一歩一歩。

格子戸が消え失せた先に見えるは、予想した通りの闘技場。周囲を逃げ場無く石壁が覆い、その上には夜空を背景とする観覧席。すでに多くの人影があるように感じるものの、異常なまでの静けさが不気味な現状を醸し出していた。

「Meine seher geehrt den Damen und Herren
! ようこそナザリツク地下大墳墓第六階層、円形闘技場へ!! あなた方の素晴らしき雄姿を期待いたします!」

『耳にしたくない』と黙っていた男の声が辺りに響く。

例のアイツだ。イビルアイの両腕を吹き飛ばし、ランナーの精神をかき乱した異形の存在。魔王軍の化け物どもを率いて王城に現れた上

級幹部にして、魔王を父上と呼ぶ二重の影。ドツベルゲンガー

出会ってはいけない最悪の悪意だ。

「王国最後の希望はあ、王城から脱出して何を思うのかっ?! 王国民を見捨ててえどこへ向かうのかあ?! 現時点においてもお多くの民が助けを求めているというのに、王国最高位の冒険者にしてえ人類の切り札、蒼の薔薇は何を成すと言うのかあ?!」

シユタつと闘技場へ降り立った埴輪顔の男に、目を逸らしていた現実を指摘されてラキユースは下唇を噛む。

今更どうしようもないことだ。魔王軍との戦争などに、冒険者チームが役に立つはずがない。戦争なのだ、魔獣討伐ではない。人類の希望などと言われても、迫りくる魔王軍の化け物どもに敵う訳がない。物語では勇者が魔王を討伐したりしているけど、いったいどうやって魔王の元まで辿り着いたのか?! 絶対無理でしょ?! ふざけないですよ! と声を大にして言いたい。

これから作られる物語では、魔王の元まで辿り着く勇者の途中経過をしつかりと記載してもらいたいものである。

もう、見ることは叶わないだろうけど……。

「たしか、パンドラさん、でしたか? 状況の説明をお願いしてもいいかしら?」

「おお、座り込んで泣き喚かないとは素晴らしい。勇者試験を受ける程度の資格はありそうですね」

「なんだあ? 試験だって?」

すり足で埴輪男との間合いを詰め、武技の発動を狙っていたガガーランは、パンドラの言葉に観覧席で不動であった多量のゴーレムを睨む。

けしかけてくる気か? と周囲を警戒し、眠り姫を背負ったクライムとラキユースの護りへ入る。

「では紹介いいいたしましょう! リ・エステイーゼ王国の存亡を担う世紀の一戦へ挑むはああ、——王国最強の戦士、ガゼフ・ストロノーフ!!」

「なっ、なんですすって?!」

「マジかっ？ 生きてたのかよー！」

「戦士長様が？ この場に？」

蒼の薔薇が出てきた通路とは真逆に位置する格子戸、それがスルスルとせり上がり、一人の戦士を招き入れる。逞しい肉体を持つ、中年の男性だ。どこにでもあるような革鎧を着込み、これまた平凡な長剣を抜き身で持つ。

ただ、その表情は地獄から這い上がってきたかのように悲壮。顔見知りとの再会を喜ぶような気配は微塵もない。

「ガゼフ様！ 貴方がなぜここに?! この地はいつたい?!」

「ラキユース殿、申し訳ないが私は何も話せない。私に許されているのは、剣を振るうことのみだ」

敵へ突きつけるかのように長剣を掲げ、殺気を込めた視線で睨み付ける。ガガーランのような歴戦の戦士でなければ、その場で命を諦めてもおかしくない突き刺さるような眼光だ。

「ゴリヤヤベえ、ガゼフのおっさん本気だぞ。冗談抜きで俺たちを殺す気のようなだ」

「ぐ、かはっ、……ラ、ラナー様は、なんとしても私がつ！」

グラつく身体を必死に支えるクライム——を気付かうかのように己の背へ隠し、ガガーランは覚悟を決める。どうやら彼の戦士長殿は、引くに引けぬ理由を抱えてこの場に居るようだ。蒼の薔薇を皆殺しにしてもやり遂げねばならぬ、予想を超えた何かのために。

「感動の御対面はその辺りで宜しいでしょうか？ では戦士長殿、貴方が勝利すれば王国への侵攻はストップされます。ついでに」パンドラはパチリと指を鳴らし、観覧席の最前列へ二体の石像を並べさせる。どこかで見たことのある老人と、太った成人男性の石像だ。彫り込まれている衣装は見事なモノであり、上流階級である事が伺える。と言いつつも、老人が被っている王冠からすると何者の石像なのかは解りそうなものだ。

「こ、国王陛下に、ザナツク王子の……石像？ いや、まさか？」

「はい、もちろん本物を石化させたものですよ。戦士長殿が勝利した暁には、この二体も石化を解いたうえで進呈させていただきます。やる気

が出ましたか？」

見世物小屋で戦いを強いられている生き物に、勝利の御褒美をチラつかせる。

パンドラの行動はまさに娯楽の進行役。遠くの滅亡都市で御覧になつている魔王様へ、どれだけ面白い決闘を演出できるのか。そのためだけの布石に過ぎない。

「では次に、蒼の薔薇のラキユース殿とガガーラン殿。お二人が勝利した場合の褒美についてお話ししましょう」シユバツとマントを舞い踊らせ、パンドラは顔色の冴えないアダマント級冒険者を見つめる。

「戦士長殿と二対一で決闘を行い、勝利した場合、その少年と第三王女は助けましょう。ついでに」わざとらしく同じ演出を繰り返すパンドラは、ラキユースが睨み付けてくるのを気にもしないで観覧席へ三つの石像を並べさせていた。

一体は仮面を被った子供の石像、残り二体は同じような容姿、年齢の女性だ。言うまでもなく、蒼の薔薇メンバーの石像である。

「イビルアイ!! ティナ! ティア!」

「クソ野郎がつ!! あいつらを石にしやがった!」

「喜んでいただいで、私も用意した甲斐があるというものですよ。では準備はよろしいですか? 戦士長殿も理解してくださいよ。貴方が敗れば、まだ生き残っているであろう王国民百万ほどは死に絶えます。ラキユース殿もよろしいですか? 貴女の敗北は第三王女と仲間の死に直結しますよ。さあ、武器を構えてください」

パンドラが急かすように手を打ち鳴らす中、ガゼフは長剣を両手で握りしめ、蒼の薔薇の二人へ向ける。だがもう一方のラキユースは、深く考えているかのように闘技場の地面を見つめ、小刻みに身体を震わせていた。

「おい、おいラキユース! なにしてんだ?! おっさんから視線を外すな! ありや昔の戦士長じゃねえぞ! 強くなってやが——」

「ガガーラン!!」

声を張り上げるリーダーの気迫に、ガガーランは息を呑む。

「ごめんなさい、ガガーラン。本当にごめんなさい。クライムもラナーも、みんなもごめんなさい」

「おいおいおい、そっちを選ぶのかよ。ああ、そりゃく、ぐああ、マジか」

「そ、そんな……、ラキユース様。ラナー様を殺す、と？」

「王国民が助かるのなら選ぶ価値はあるわ。無駄死にはないと思う。約束を守ってくれるのであれば、私たち数人の犠牲は……犠牲は……、ごめんなさい」

王国民百万と蒼の薔薇。それに護衛騎士と王女様が加わったとしても、命の価値からして等価とは言い難い。そもそも王国第三王女ラナーは、王国再建のために——王国民のために逃亡していたのだ。それが死ぬだけで、決闘で殺されるだけで成されるのなら悲願達成とも言えよう。納得し難いが。

「これはこれは、素晴らしい決断ですな。人類のために己の身を犠牲にするとは、英雄の名に恥じぬ選択かと。我が父上も、予想通りの英断に拍手を送って下さるに違いありません」

パンドラは涼しい顔で——黒い穴だけの埴輪顔だが——称賛の言葉を送ると、マントを大きくはためかせて深々と貴賓席へ頭を下げる。

観覧席に設置された、身分高き上流階級の貴人だけが利用できる貴賓席。そこからは一人の美しき女性が——、女神のごとく世界を魅了する、女王の名を冠するにふさわしいカリスマを備えた美の結晶たる守護者統括が姿を現していた。

「ふふ、ゴミにしては中々面白く跳ねてくれるものね。褒美として、勝利条件を追加してあげようかしら？」二本の角と黒き翼を備えたアルベドは、言葉を失っている人間を見下ろし、予定通りの追加条件を提示する。

「蒼の薔薇、だったかしら？ 貴女たちが勝てば、アーグランド評議国は見逃してあげてもいいわよ」

「なっ？ なぜ評議国の名が？」それより貴女は何者なの——と、問いかけた気持ちは抑えつつ、唐突に出てきた評議国の話へ気に向け

る。『見逃す』とは、最初から手を出すつもりだったと言うのか？ あの竜王が治める亜人国家に！

「評議国の参戦はすでに知っているでしょ？ 魔王軍へ牙をむいたのよ。なら国ごと潰すのは当たり前でしょ？ 愛しい夫に敵意を向けたのなら、妻である私が直接出向いて叩き潰さないかね。とはいえ、今回はコキュートスに譲るけど……」

アルベドは豊満な胸を武器であるかのように掲げ、矮小な人間へ告げる。

「蒼の薔薇、貴女たちが勝利すれば評議国は見逃してあげましょう。もちろん王国は皆殺しにするけどね。ああ、評議国の亜人どもがいくら死んでも構わないと言うなら、そのまま殺されるといいわ。どちらに転んでも死者の数には大差ないでしょうし……」

「わ、私たちが負ければ、評議国の国民が皆殺しに？ そんな、そんなことって」

「ラクユース！ 迷っている場合じゃないぜ！ どっちでもいいから決断しろ！ リーダーはお前なんだ！ たとえ殺されることになっても文句は言わねえよ!!」

「評議国も犠牲になるのか……。すまない、全ての責任は私につ！」
覚悟を決めている戦士長とは異なり、ラクユースの思考は混乱を極める。

己が死ねば王国民を助けられると、一度は自己犠牲に走ったものの、今度は評議国の存亡が肩に押し掛かってきた。

勝てば王国民が死に絶え、負ければ評議国の国民が虐殺される。

あの魔王軍だ。まともなぶつかった経験からして、評議国が勝てるとは思えない。目撃された竜王たちがある日を境に居なくなり、同時に魔王軍の侵攻が再開されたという事実も考慮すれば、ドラゴンですら戦力として不十分なのだ。

加えて『国墮とし』と呼ばれる伝説の吸血鬼ヴァンパイアすら石像にしてしまう埴輪男と、上限が分からない神のごとき威圧感を放つ白ドレスの女悪魔。

まるで、異なる世界へ足を踏み入れてしまったかのようなのである。

「む、無理よこんなの、選べる、わ、わけがないじゃない。何をしても……、多くの人が、死んで……しまう」

物語のようにはいかない。正解など存在しない。どんな道も血まみれなのだ。

「駄目よ、お前は選択しなければならない。勇者になる者が成すべき絶対条件よ。覚悟ある選択こそが、それを成せる勇者こそが、我が夫——大魔王様への挑戦権を得るのよ」

運命を司る女神であるかのように、アルベドは『進むべき道を選べ』と強いる。もちろん、その笑みは女神と呼べる代物ではなかったが。

「ラキユース殿！ 早く決断して頂きたい！ 貴女が迷っている間にも王国民は殺されているのだっ！ 選べないのであれば、この場で死んでくれ！ 王国民のためにつ!!」

「ふざけんなよガゼフのおっさん！ 評議国はどうなつてもイイって言うのか！ あっちにも人間は大勢住んでんだぞ!!」

評議国にも人間種は大勢暮らしている、ガゼフも当然そのことは知っている。だがそれでも声に出して願うのだ、死んでくれと。

「くだらないわね、追いつめられないと行動できないのかしら？ まあどうでもいいけど……。パンドラ？」

「はい、それでは」埴輪男は少し大袈裟に一礼すると、進行役として決闘開始へ言及する。

「宣言します！ 〃蒼の薔薇〃に遅延行為ありと見なし、準備不足等の言い分を却下！ 直ちに決闘を始めさせて頂きます！ 戦士長ガゼフ殿、攻撃を許可します！ 後顧の憂いなき戦いをつ！」

「有り難い！ 蒼の薔薇よ、いざ参る!!」
「ラキユース！ 腹くくれ！ このままだと死ぬぞお!!」

「ああああああ!! 戦闘開始！ ガガーラン前へ!!」

追いつめられたからか、覚悟を決めたからか？ 蒼の薔薇のリーダーは、勇者とはとても言い難い悲しさと悔しき、怒りまでもが入り混じった小さい子供が癩癩を起こしたかのような表情で、王国の全てを見捨てるかと決断した。

「能力超向上！」「能力超向上!!」

二体の化け物がさらなる化け物へと変化してぶち当たる。

長剣が幾本にも見えるほど打ち込まれ、ガガーランの鉄砕フェルアイアンきが逆に砕かれんばかりだ。魔化されている武器はそう簡単に破壊されな
いと思うものの、それだけでは戦士長の攻撃を受け止めきれない。

真つ赤な血が舞い、肉片が飛び散る。

どれもガガーランのモノだ。圧倒的とも思える斬撃の嵐に、蒼の薔
薇の戦士は反撃の糸口を見つけれない。

「〈重症治療〉！」

切りとられたばかりなら欠損部位さえ直す強力な治療魔法が、ラ
キユースから放たれる。だがそれ以上に削られているのではないだ
ろうか？ “ケリユケイオンの小手”による微細な治療も今では命
綱だ。

量産型にしか見えない長剣が烈風のごとく来襲し、魔法の鎧を削つ
てゆく。

戦士長はもはや人間ではない。

「浮遊する剣群！ 射出！」

猛獣の気を逸らそうと、幾本もの剣が空を飛ぶ。

軽く弾かれるのは想定内だ。要は手数を消費させるための囷なの
だから、構ってもらえればそれでいい。その間に、ガガーランの反撃
が準備を終える。

「どおりやあああ!!」

「おおおお!!」

武技による強力な一撃が刺突戦鎚ウオーピックから放たれ、さらに放たれ、超級
の連続攻撃と化する。

一発当れば骨まで吹き飛ぶ威力だ。長剣で受けたとしても、これほ
どの連撃ならば魔化の許容を超えてへし折れるだろう。どちらへ転
んでも、ガガーランの優位につながる反撃——のはずであった。

「つぷはー！ ちくしよーがー！」

「武装の質を見誤ったな！ 覚悟！」

武技の大技は使用後の脱力感が凄い。へたり込みたくなるぐらい
である。ガガーランもそれは解っていて繰り返し出したのだ。かわされ

れば殺されるかもしれないと覚悟して。

「ガガーラン！ 引いてっ!!」

「なっ?!」

ガガーランの連撃が途切れるタイミングを、もつとも熟知しているのはリーダーのラキユースである。だから寸分の差異なく合わせられたのだ。

勝機とみて踏み込んだ戦士長が避けられない絶妙なる瞬間、無属性の膨大なエネルギーが魔剣から放たれる。

「ぐぐおおおおおおおー!!」

「見たかおっさん！ これがチームってやつだよ！ ——痛つつ」

「じっとしてガガーラン、全身傷だらけよ。はい、これ飲んで」

闘技場の壁まで吹き飛んだ戦士長をつまみに、ポーション水薬二本一気飲みをかます蒼の薔薇の戦士は、戦闘態勢を解くことなくウォービック刺突戦鎚を構える。

勝負がついたとは思っていない。

ガゼフは、「魔剣キリネイラム」の奥の手をまともに喰らっても生きている。戦士としての感がそう囁いているのだ。

「ぐふっ、……な、なんともおかしな話だ。ラキユース殿のその技は、事前の掛け声が必要なのではなかったか？ 騙されたな」

細かい傷を無数に負い、臍腑に大きな衝撃を受けつつも、ガゼフは悠々と立ち上がる。冗談めかした苦情を放ちながら。

「実を言うと無言でも放てるのですよ。技名を叫ぶのは景気付けみたいなものです。〈ホーリープロテクション聖なる防衛〉」

「んなことより、アレを喰らって生きているおっさんの方がオカシイだろ？ いつから人間止めたんだ？ 〈肉体強化肉体強化〉〈能力向上能力向上〉」

軽口を叩きながら戦闘準備を整え、護りの加護をもらったガガーランは前へ、ラキユースはやや後ろへ下がり、フロートイング・ツルズ浮遊する剣群の狙いを定める。

第35話 「ワンパン魔王」

「ふうー、流石は蒼の薔薇だ、二人しかいないのにこれほど手強いとは……。だがもう私には後がない。全てを懸けて挑ませて頂くん！」

ガゼフは強くなった、とはいえ所詮は支援のない独り身だ。疲れるし傷つくし、使用できる武技の限界も見えてくる。それに時間をかければかけるほど、王国民は殺されてしまうのだ。

もう、やるしかない。

「いくぞお！ 〈限界突破〉!!」

「碎けやあああああ!!」

獣のごとく駆け出した戦士長の一步を狙って、ガガーランは大地を突き叩く。

闘技場の地面へ亀裂が走り、粉塵と共に局所的な地震が発生。まとも立っていられないほどの揺れが、発生者であるガガーラン以外を襲う。

これを避けるにはラクユースのように効果範囲から離れているか、戦士長のように——そう、飛び上がるしかない。

「狙い通りだぜおっさん！ これで終わりだ！ 〈剛腕連撃〉!!」

「私たちは負けられないのです！ 浮遊する劍群！」

足場を崩して敵の動きを誘導する。〈不落要塞〉などで弾かれないよう連撃で止めを刺す。加えて複数の魔法剣が死角から襲ってくる。

ガガーランとラクユースに躊躇はない。本気で王国戦士長を殺そうとしているのだ。

「武技、〈無光連斬〉！」

ガキンつと無数の衝突が重なり合って一つの音となる。

ガゼフが生み出した数えようもない連斬は、ガガーランの刺突戦鎚ウオーピックによる連撃を全て打ち弾き、ラクユースの魔法剣を切り裂いた。

「なん、だああ?!」

「ガガーラン！」

「終わりだ、〈世界崩し〉！」

上段から振り下ろされるユラリとした劍斬。

当然、ガガーランは自慢の刺突戦鎧ウォーピック 鉄砕フェルアイアンき”を掲げるが――。

「があああああ!!」

「すり抜けた?! いやそんなっ! <重症治療>!!」

魔化された刺突戦鎧ウォーピックがほどかれる。まるで編み物をバラバラにするかのよう。

ガントレット・オブ・ケリユケイオン

「ケリユケイオンの小手”がさりと二分され、左腕ごと身体から

離れる。国宝級の鎧ゲイズ・ベイン 凝視殺し”が布の服であるかのよう、

ヴェスト・オブ・レジスタンス

抵抗の上着”ごとほろほろと寄り分けられ、護っていたはずの肉

体から多量の血潮を噴き上げさせた。そして左足も、『場所を移動させただけ』と言うかのように転がり落ちた。

「ちくしょおお! なにがどうなってるんだ?!」

「ガガーラン下がって! 後は私がつ」

「来い、ラキユース殿!」

「ぎけんなおっさん! あんたの相手は俺だ!!」

治療途中の左半身を見向きもしないで、ガガーランはガゼフの腰に食らいつく。戦士長にしてみれば少し予想外の行動だったのだろう。ガガーランは治療魔法を受けたのだから、まだ戦闘不能になったわけではない。それなのに不十分な回復状態で、しかも武器を破壊された丸腰のまままで密着するとは……。

即座に首を刎ねられるだけの悪手でしかない。そこまでしてラキユースへ向かうはずの一手を遅らせたかったのか?

「さらばだガガーランど――」

「うおおおおお!! <斬撃>!!」

ガガーランが巻き上げた粉塵の中を走り抜けて、一人の戦士が最上段から振り下ろす。

誰もが予測し得ない突発的な一撃。頭を狙われた戦士長も、一瞬思考が止まったに違いない。なにせ自分が褒めた渾身の振り下ろしなのだ。しかもあの時より数段鋭く、己の能力限界を突破したかのような一振り。

鮮烈と言える。

『ああ、訓練を必死に続けていたのだな、才能などまったくくないという

のに』と親目線で微笑んでしまっそうだ。

王国戦士長「ガゼフ・ストロノーフ」はこの時、腰に抱き付くガ
ガーランへ長剣を突きつけたまま、王国第三王女の護衛騎士「クライ
ム」によつて頭を叩き斬られた。

即死であつた、とのことである。

「はあ、はあ、はあ、はつ、はふう、ふうう……」

「お、おいおい、マジかよ。やりやがったな小僧」

「クライム、あなたは……」

ガガーランは驚きよりも称賛側に気持ち傾いているようだが、ラ
キユースはクライムの乱入に危機感しか覚えない。

二対一の決闘に割り込んだのだ。試練とやらのルールを破つたの
は間違いない。故に、進行を担っている埴輪男や角を備えた女悪魔が
黙っているとは思えないのだ。

「ガガーラン、戦士長の武器を拾つて！ 〈ミドル・キュアウーンス中傷治療〉！ クライム

はラナーの傍に戻つて！」

「くそつ、忙しいな！」

「は、はい！」

人類最高峰の戦士と一戦交えても、まだ一息つくことは許されな
い。

ガガーランは愛用していた「フェルアイアン鉄砕き」を破壊され、魔法具である
防具も半壊。ラキユースも魔力は尽きかけており、魔剣による奥の手
もしばらくは使用できない状態だ。イビルアイらは今だ石像のまま
であり、逃げるなんて選択肢はない。

クライムは限界以上の力を揮つた影響からか、眠っているラナーの
傍で震えながら片膝を付いている。

もはや、これまでか？

「素晴Wonderbar!! 見事な勝利、おめでとうございます！ 新
たな勇者の誕生に祝福をっ！」

「ふん、大粒の勇者が小粒になつただけでしょ？ あんな雑魚が旦那
様を楽しませてくれるとは思えないけど……。でもまあ、ちよつとは
面白かつたわ」

ワザとらしい盛大な拍手と、形だけのパチパチという小さな拍手。ラキユースは闘技場の観覧席へ目をやりながら、己の立場がどう転んでいるのか理解できそうもなかった。

「勇者の試練は終了しました。勝者『蒼の薔薇一行』！ つきましては勝利報酬として、仲間三名の解放と評議国の助命を了承いたしました。ただし、現時点をもって王国の救済は不可能となりましたので御理解願います」

「コキユートスには評議国へ攻め込まないように通達しないといけないわね。もつとも、向こうから攻めてきた場合は仕方ないでしょうけど……」

大きな胸を強調してくる女悪魔は、こう言いたいのだ。『今回は見逃してやるけど評議国を滅ぼす方法などいくらでもある』と。彼の者らにとっては、見逃すことに大した意味など無いのだろう。いずれ世界を滅ぼすのであれば、一国の明暗など早いか遅いかの違いだけだ。

もしかすると、評議国は今回滅ぼされた方がマシだったのかもしれない。周辺国が潰されていくのを横目で見ながら生き続けることへの苦痛。怨嗟の悲鳴が頭の中に響き渡ることだろう。『お前たちは何故無事なのだ?! どうして魔王軍に見逃されている？ 貴様らは魔王に手を貸したのか？ この裏切り者がっ！』と。

「……私たちの勝利、で宜しいのですか？」

「おや？ 何か問題でもありましたか？ 戦士長は頭を割られ、間違はなく死亡しておりますが？」

「いえ、その……」

「ああ、そちらの護衛騎士が止めを刺した件ですか？ それはそれは失礼いたしました」パンドラは踵を打ち鳴らし、胸に片手を添えて語り出す。

「『蒼の薔薇』が連れているモノは、全て付属品扱いにしております。当然、その『グライム』と呼ばれる小粒の勇者も付属品。腰の予備武器と同様に御座います。故に今回は蒼の薔薇が放った付属品『勇者クライム』が見事勝利をもぎ取った、というところで御座いますよ」

最後に『御心配なく』と優雅な一礼を見せ、パンドラは勇者の試練が終了したことを全ての者たちへ伝えた。

もちろん魔法の鏡で見ていた父上にも――。



「ふくん、これが伝説の吸血鬼でありんすかあ〜？　ちっぽけでありんすねえ」

闘技場に降ろされて石化を解かれた吸血姫は、美しいドレスをふんだんに使った可愛らしいドレスを着込む恐るべき真トウル・ヴァン・バイア祖にツンツンされていた。

「こんな弱つちい吸血鬼が勇者になつていいんでありんすか？　勇者とは人間種だけに限定していたのではありんせんかえ？」

「なに言っているのよ。例のドラゴンも勇者に認定されたじゃない。要はモモンガ様を楽しませることが出来るのであれば、種族なんてどうでもイイってことよ」

「それは確かにその通りでありんすねえ」

小柄で少女のような吸血鬼は、二本角の女悪魔と談笑していた。

口調からして同格の立場にある存在なのだろう。蒼の薔薇にしてみれば、石化されていた仲間が犬頭のメイドから治療を受け、本来の実力を発揮できる五人勢揃い――となったところで化け物が一人追加された状況だ。

埴輪顔の男はどこか遠くの誰かと魔法で話しており、どこかへ去る気配はない。ラナーは眠り姫のままでクライムに抱かれており、現状打開のアドバイスなどはもらえそうにない。

ラキユースは、そして説明を受けた他の仲間たちは、血の匂いが残る闘技場へ座り込んだまま固まっているしかなかった。

「それで？　評議国への勧告はどうだったの？　何か反応はあった？」

「え〜つとでありんすねえ。あまり喜んでる感じはなかったでありんすよ。『魔王様の御慈悲により、この国は滅亡から免れたでありん

す。感謝の涙を流しなんし』と伝えんしたのに、いきなり襲ってきたでありんす。思わず五百ほどの亜人を血祭りにあげんして、数体のドラゴンを斬り刻んで素材回収班に任せることになりんしたが……かまいんせんねえ?」

「襲ってきた相手にまで手心を加える必要はないわ。本来なら皆殺しに遭うべきゴミなのだから、身の程を弁えてもらわないとね。それより……、パンドラ。そっちはどう?」

「はっ、コキユートス殿への報告は完了いたしました。王国の滅亡は順調かと」

話の内容を盗み聞くに、化け物たちは評議国や王国への対応を進めていたのだろう。どうやら、決闘結果に関する約束事は守ってもらえそう。王国を滅ぼす、という目を背けたくなる災厄も含めて。

「ではシャルティア、〈転移門〉を牧場に繋げてちょうだい」

「はいはい、デミウルゴスでありんすね。〈転移門〉」

闘技場に開いた闇の扉は、先程大きなリボンをつけた吸血鬼が潜り出てきたモノと同じ転移系の魔法であろう。どの程度の位階魔法なのかは解らないが、目線を合わせたイビルアイが首を振っているところからして、考える必要はないのかもしれない。

そして闇の扉から出てきた、スーツと呼ばれる南方の民族衣装に身を包んだ尻尾のある眼鏡をかけた人型の化け物。もはや思考するのも無粋と言える。

「お久しぶりですね、皆さん。何も御変わりはありませんか?」

「特にないわね。少しくらい襲撃があるかも、なんて思っていたけど、ほら、ズーラーノーンとかいう邪教集団とか」

「ああ、エ・ランテルにも幹部が居たそうだね。だけど『死の宝珠』や『レアの女剣士』から集めた情報では、期待できそうにない雑魚だと思ふよ。途中で潰してしまっても『ソレ』とは気付かない程度のね」

眼鏡の悪魔は何やら嬉しそうに語っていた。まるで久しぶりに自分の家へ帰ってきたかのように、晴れやかで満足げな表情である。

ただ、観察されているような視線を感じて寒気がする。品定めをされているような怖気が走り、蒼の薔薇一行は身動き一つ出来ずに俯く

しかない。

「ふむ、これが例の勇者たちかい？ 毛色の変わった者も居るようだが、総じて弱過ぎるね。これではモモンガ様の御期待には沿えそうにない」

「これから強くすればイイのよ。それと貴方の担当はそっちの二人、眠ったままの女と小粒の勇者ね」

「ああ、王国の知恵者と護衛の犬だね。早速、牧場で繁殖させてみるよ。犬の方は武技試練場に放り込んで鍛えてみよう。無駄足にしか思えないがね」

「あら、そうかしら？ その犬は、自身を遥かに超える力量の戦士長を仕留めたのよ。それって、モモンガ様が勇者に求めている資質の一つなのではないのかしら？」

おかしな話が進んでいた。ラナーとクライムが「牧場」とやらへ連れて行かれるとのこと。嫌な予感しかしない。あの眼鏡悪魔が取り仕切っている牧場なら、まともであるはずがない。

「ちよつ、ちよつと待ってください！」ラキユースは勇気を振り絞って問いかける。一睨みされただけで失神しそうな、異形の美しき化け物たちに向かって。

「あ、あの二人は助けてくれるとつ、確か、そう確か約束してくださいさつたはずでは?！」

「ん？ まだ説明していなかったのかい？ アルベド」
「別にゴミの送り先を話す必要などないでしょ？ ゴミ相手に」

アルベドの侮蔑ともとれる発言は嫌味で言っているのではない。本気で言っているのだからタチが悪いのだ。デミウルゴスは『やれやれ、一応勇者なのだからゴミ呼ばわりは駄目だと思うよ』と軽く頭を振っては、優しい口調で怯える人間へ語りかけていた。

「心配する必要はありませんよ。そちらの二人は、私の牧場で仲睦まじく繁殖行為に励んでもらう予定です。もちろん身の危険などありません。繁殖に出席、そして子育て。全てにおいて最高の環境を提供させていただきます。……御理解していただけましたか？」

「は、はんしよく……？ ラナーとクライムが？ な、なぜ？」

ラキユースの疑問も当然だろう。

だいぶ前から親友の想いは知っていたし、心が壊れてからの行為も見て見ぬふりを続けていた。だけど恐るべき力を持つ魔王軍の悪魔が、どうして人間同士の『ぶ』によぶ』に関わってくるのか。

羨ましいわけではないけど気になる。羨ましいわけではないけど……。

「特に意味はありません。しいて挙げるのであれば、犬とはいえ小粒の勇者となった者の子供には期待が持てるのではないか？ と、その程度ですね。あとはそう、第三王女の知能が子供に引き継がれるのかどうかも検証したい、とまあそんなところでしょいか」

「き、危害を加えることは、ないのですね」

「くどいですね。貴女はそんなことを気にしている場合ではないでしょうに」

呆れたように肩を竦める眼鏡悪魔に代わり、角を備えた白ドレスの女悪魔が口を開く。

「さて『蒼の薔薇』の治癒は済んだかしら？ ペストーニヤ」

「はい、人間の負傷は全て完治しております。そちらの吸血鬼も、シャルティア様に回復して頂きました、わん」

「ふふふ、楽勝でありんした。何なら、このまま連れ帰って調教してあげてもイイでありんすよ？」

「駄目よ。こいつらはモモンガ様の元へ連れて行くのだから……」

本当は人間の治療なんかしたくない——と、そんな嫌そうな表情をしながらも、アルベドは『モモンガ様の元へ行ける口実になるのだから、別に構わないかもね』と気分を持ち直し、セバスとペストーニヤへ指示を——。

「あら？ そう言えば、セバスは勇者たちやレアを連れて『竜王国』へ行っているのだったわね」

「人間の国を救うために、ビーストマン討伐へ向かったそうだね。セバスの喜ぶ顔が目には浮かびそうだよ」

「不愉快そうでありんすなあ。でもモモンガ様の御勅命を受けたかったのは、わらわも同じでありんすよ」

「貴女が行ったら竜王国自体が無くなりそうだけどね」

「あ、あ、あん?!」

「んだごらあ!？」

凝縮した殺気の塊がぶつかり合う光景は、守護者にとって見慣れたものである。ただ普通の人間、蒼の薔薇一行にとっては神々の争い同然だ。

ラキユースがパタリと倒れ込むのも仕方がない。仲間の身を案じられるのは、イビルアイ一人だけだろう。

「二人とも、せつかくの勇者が死んでしまうよ。これから身支度を整えさせて、モモンガ様の元へ連れて行くのだろうか？ だったら喧嘩している場合じゃないと思うがね」

「そ、そうでありんしたつ。わらわも身を清めないといかんせん！」

「モモンガ様に拜謁を願うわけですものね。小汚いままでは、連れて行く私の評価が落ちかねないわ。……ペストーニャ、プレアデスと共に蒼の薔薇を綺麗になさい。ただし、第九階層ではなくこの六階層で処理すること。モモンガ様の執務室がある場所へ、薄汚い人間ゴミごときが足を踏み入れるなど許されないわ」

「はい、アルベド様。かしこまりました、わん」

深々と頭を下げる犬頭のメイド長——が放った一言を合図にしたかのように、守護者を含む僕たちしもべは動き出した。

身を清めようと浴場へ向かった女性陣。

小粒の勇者と眠り姫を配下の悪魔に抱えさせ、シャルティアが展開したままであったへ転移門ゲートへ足を踏み入れ、牧場へと向かった眼鏡悪魔。

そして犬頭のメイド長は、戦闘ブレイアデスメイド三名を前に、お仕事開始の発破をかける。

「では、近くの湖で丸洗いにしましょう。着ている服は汚いので処分します。全て脱がせてください、わん」

「はい、かしこまりました」

黒髪を結い上げた眼鏡メイドの返事を最後に、“蒼の薔薇”は問答無用で全裸にされた。

仮面の吸血鬼が最後まで弱々しい抵抗をみせていたものの、他の者——ガガーランなどは勇ましく開き直り、自分から脱ぎ出しては指示された通りに歩き出す有様。ティアに関しては、長い黒髪のメイドに自分から纏わりつき、乱暴に脱がされたりしていた……。

（もうどうしようもないわ。雑務を任されたメイドにすら勝てそうにない。抵抗するだけ無駄みたいね。ラナーとクライムが何処へ連れていかれたのかも分からないし、この闘技場の位置すら不明なんて……。私たちはいったい何に巻き込まれているの？ 世界はいつたいどうなってしまうの？）

現実感の乏しい夢の中を漂うような、そんなユラユラとした思考で美しい森の中を歩きつつ、ラクキウスは己の選択を顧みていた。

魔王軍との戦争。

王城からの脱出。

仲間を犠牲にした逃走。

戦士長との決闘。

王国民ではなく評議国民の生存を選択し、剣を振るった。

どこで間違ったのか？ 他の選択肢があったのか？ 叔父さんやリグリットさんなら、別の道を選べたのか？ ——解らない。何も解らない。もう、しゃがみこんで泣き喚きたい。全てを投げ捨てたい。

「大丈夫ですか？ どこか痛みますか？ わん」

頭部の中央を縫い合わせたかのような犬頭であるのに、優しく声を掛けてきて、背中にそっと手を添えてくれる。

うわべだけの態度ではない。言葉に感情が籠り、本当に気を掛けてくれているのだと伝わってくる。相手は人ではなく、異形の存在だといふのに。

「なんでもありません。なんでも、ないのです……」

ポロポロと涙を流し、動けなくなるところで犬頭メイドの豊満な胸に包まれる。

“蒼の薔薇”のリーダー、アダマタイト級冒険者にして貴族出身のラクキウスは、冒険者として戦いの中に身を置いて以来——初めて、誰かの胸の中で泣きじやくった。

その地が大魔王の拠点であり、身を任せた相手が魔王軍の中でも重要な地位にいる者だと知らないまままで……。



「すばらしい、私が求めていたものはコレなのだよ！ レベルや能力値からすると、あの小僧が戦士長を殺害するのは不可能のはず。だがしかし、見事に頭部を斬り裂いた！ これこそ私が連合軍に期待する奇跡！ 私を倒す必殺の一撃なのだ！」

大魔王様の機嫌がイイのは大変結構なのだが、こちらとしてはあんなものを見せられて喜べるわけがない。

人類の切り札たる “蒼の薔薇” が、まるで見世物であるかのように闘技場へ引き込まれたかと思うと、対峙したのはあの戦士長だ。

『死亡したんじゃないのか？』との驚きは投げ捨てて、始まった闘いに驚愕する。

帝国四騎士の実力を目にしている者として、武技の応酬には目が肥えているつもりであった。それなのに “魔法の鏡” が映し出す化物同士の決闘を前にして、開いた口が塞がらない。人間がこんな動きをするとは、驚愕を感じながらも頼もしく思えてしまう。

ただ、そんな強者たちを闘技場で見世物にしている化け物たちは、『驚き』なんて言葉では言い尽くせない領域なのだ。町や村を踏み滅ぼしていく巨大動像ゴレムの姿が、今でも瞼の裏に焼き付いている。

「あの小僧は牧場で鍛えるとしよう。もしかすると思わぬ拾いモノやもしれんな。連合軍にとっても貴重な戦力となり得るぞ。なあ、皇帝よ」

「は、はっ！ 優秀な人材は大歓迎です。期待させて頂きます」
ハッキリ言って期待など出来るわけがない。

戦士長を倒した小僧は、不意打ちによる幸運をモノにしたただけだ。実力が伴っているかどうかなど、戦いに身を置いていない皇帝たる自分でも判別できてしまう。

第一、『大魔王を同じ手段で殺せるのか？』と問いたくなる。不意打

ちしても掠り傷の一つもつかないだろう、絶対。ホントマジで！ 骸
骨剥き出しでも、間違いなく骨の強度じゃないぞ、あの魔王は！ ど
うやって殺すんだよ！ 誰か教えてくれ！

第36話 「旅行魔王」

「——と言っても、使いモノになるまでは、〝こちら〟で我慢してもらおうとしよう。準備は整ったようだな。くるがよい」

魔王との歓談が一段落したところで、廃墟都市の中央部、人間の指導者たちが座っている円卓の近くに、巨大な闇の扉が開かれる。

皇帝や他の王たちにとっては、ここへ連れてこられる時に使用している〈転移門^{ゲート}〉の発動なので特に警戒することもない——かと思いきや、誰もが青い顔で冷や汗をたれ流してしまう。

一番近い位置になってしまった竜王国の女王や宰相などは、処刑台に送られる罪人であるかのようなだ。『闇の中から首切り鎌を抱えた死神が出てくる』とでも思っているのだろうか？

「遅くなりまして申し訳ありません、モモンガ様。アルベド、御身の前に」

「御逢いしとうございんした、モモンガ様。シャルティア・ブラッドフォールン、御身の前に」

闇から現れたのは、白ドレスの女悪魔と幼さの残る吸血鬼——もつともシャルティアの方は高慢ちきな貴族令嬢にしか見えないだろうが——と、人類の希望たるアダマンタイト級冒険者チーム、蒼の薔薇“一行であった。

「アルベドにシャルティア、勇者の試練は中々面白かったぞ。新たに加わった勇者どもは、それなりに期待できそうだな。成長が頭打ち状態だった戦士長と入れ替えるには、丁度よいタイミングであった」

「ありがとうございます、モモンガ様。小粒の勇者もきつと良い結果を出してくれることでしょう。つきましては、今度私と二人つきりで勇者の育成状況を視察に——」

「お褒めの言葉、嬉しいでありますモモンガ様。人間との戦争でも、わらわと二人で攻め込むなんて素晴らしいと思うで——」

「いえ、私と牧場デートなどは——」

「いえいえ、わらわと戦場デートなどは——」

互いに牽制しながらのにこやかな会話は、もはや殴り合いだ。笑顔であつても殺しにきている。目を凝らせば、言葉の一つ一つが空斬のごとく獲物へ襲いかかつて……、いるように見えなくもない。

「もう、二人ともさあく。モモンガ様の御前だよ。言い争っている場合じゃないでしょ？ それに今回の傍仕えは私とマーレの番なんだからさ、邪魔するのなしだよ」

「え、えっと、あの、お、お姉ちゃんの言う通りです」

大魔王の横に控えていた闇妖精ダークエルフの双子が、収束しそうにないじやれ合いに口を挟む。ついでに『さつさと帰れ』とも言っているようだ。

アルベドとシャルティアの任務は新たな勇者「蒼の薔薇」を連れどくるだけなので、もうこの場に居続ける理由などないのだ。無論、そんなことを言っても帰らないだろうとは思う。

「し、失礼いたしました、モモンガ様」

「申し訳ございんせん、モモンガ様」

「まあよい、それより——」

「はい、こちらの五名が「蒼の薔薇」と呼ばれる冒険者チーム。新たな勇者でございます」

『こちらが——』と女悪魔に紹介されても、ラキユースは平伏したままでぐうの音も出せない。

もの凄い速さで全身を洗浄されたかと思えば、魔化された新しい服を着せられ、修繕された防具を着込まされる。髪の毛の先から足の爪先まで整えられ、軽く化粧まで施されては、宙に浮かんだ闇の中へ押し込まれる。

その先に居たのは豪華なローブを着込む骸骨と、可愛らしい闇妖精ダークエルフ、どこかで見たことのある人間の指導者たち。

他は何も無い。一枚岩から作られたのかと思える円卓以外は、僅かな都市の残骸だけだ。ここが人の住まう土地であったと言われても、何千年前の話なのかと疑ってしまうに違いない。

「わ、わたしが……、リーダーの、ラキユースです」

必死に絞り出し、何度も深呼吸を行う。

玉座に座る「死の支配者」のごとき骸骨を前にして、呼吸を忘れた

憐れな小動物であるかのようだ。

他のメンバーも似たようなものであろう。いつも軽口ばかりであるガガーランも口が重そうだ。仮面を剥がされたイビルアイに至っては、素顔を晒すのが恥ずかしいのか俯いたまま口も開かない。

ただ、双子の忍者は視線を一点に集めていた。先程アウラによつて躰けられたカベリア都市長の護衛、女忍者“テイラ”へと。

『信じられないところでの再会。なにしている?』

『イジャニーヤは潰れた? 頭領やめた?』

『……こんな状況で?。それと、イジャニーヤは健在だ。まだ、な』

指と手の複雑な組み合わせで会話を成立させる。

それは魔法にも似た特殊な技能。あらかじめ取り決められていなければ何をやっているのか全く解らない、イジャニーヤの意思疎通手段であった。

「なにをコソコソやっているであります? モモンガ様の御前でありんすよ」

主あるじに無礼をはたらく者はとりあえず殺す——を常態化していたシャルティアが、手より先に言葉をかけるなんて……。配下の成長を感じられて嬉しく思う魔王ではあったが、それでも速攻殺しにかかるのはいただけない。

「待て、シャルティア。そう簡単に勇者を殺そうとするな」魔王は僕しもべの暴挙を軽く諫めると、蒼の薔薇へ向き合う。

「それは手信号の一種であろう。ギルドでも簡単なサインなら使ったことがある。魔力を使わず、伝達速度は極めて速く、盗聴される心配もない。まあ、会話できるほどの複雑なモノは未経験だがな」

知恵を絞り、訓練を重ねて身に付けた技能は称賛に値する。戦闘で用いられる“武技”も、このような積み重ねの果てに生み出されたのではないだろうか?

だとするならば、やはり勇者は——中でも“人間の勇者”は未来への希望だ。

世界を滅ぼそうとする大魔王へ致命の一撃を与え得る、脆弱ながらも最後の希望とも言える存在なのだ。

「ふふ、やはり人間の勇者はサマになるな。そう思わないかね？ ジルクニフ」

「あ、あの、それはどういう……」

いきなり話を振られ、珍しく戸惑ってしまう皇帝をそのままに、大魔王はパチリと指を鳴らす。

「連合軍には英雄が必要だろう。分かり易くて目立つ、勇ましい広告塔がな。それを蒼の薔薇にやらせようと思う。滅亡した王国の生き残りでもあるのだから、ドラマには事欠くまい」

「そ、それは、確かに人心を纏めるには一役買うでしょうが……」

「連合軍？ 私たちを？ いったいどういう」

戦力を増強できるのであれば、ジルクニフも言葉を濁したりしない。だが、蒼の薔薇は先ほど闘技場で見世物になっていた、魔王軍にとってとはとるに足らない雑魚に過ぎないのだ。いまさら与えられてもどうしろというのか？

ラクユース自身も同意見なのだろう。連合軍が何かは知らないが、魔王軍と対峙する勇者としての価値が己にあるのかなんて、答えを出すのも煩わしい。

「蒼の薔薇は、魔王討伐を目的とする連合軍へ参加しろ。この場に居る指導者たちが作り上げる、世界を救うための軍だ。人類の切り札たるアダマンタイト級冒険者なら適役だろう。期待しているぞ」

人間の矮小な想いなど欠片も汲み取らず、モモンガは『良いことをした』とばかりに御機嫌で骨の玉座から立ち上がる。

「ああ、そうそう、ジルクニフにはドワーフ王国の秘宝たる最上級の魔法武器を渡してある。蒼の薔薇はその中から自分に合ったモノを選んでおけ。中には私に傷をつけられる魔法剣などもあったからな、よく吟味するとよい」

武器を破壊されたガガーランなどには朗報であろう——と一瞬、歓迎の意を表したくなるも、どうして魔王が強力な武器を渡してくるのかが解らない。何かの罠かと疑ってしまいそうだ。

「ではアウラ、マール。アルベドにシャルティアも、ナザリックへ戻るぞ」優雅にローブを踊らせ、大魔王は〈^{ゲート}転移門を開く。

「お前たちの話し合いが終わる頃、ウルピウスたちを此処へよこす。来たときと同様に、自国へ転移してもらおうがよい」

「はっ、ありがとうございます、大魔王様！」

一際大きな声で答えたのは、バハルス帝国の皇帝と、カルサナス都市国家連合の都市長だ。ローブル聖王国の聖王女と竜王国の女王に關しては、声が震えている上に小さいので、何を言っているのか聞き取れない。まるで命の危機を前にして縮こまる幼子のようなのである。一国の指導者ともあろう人物が、いったいどうしたというのであろうか？

竜王国のように連日の戦闘で疲労困憊、というならまだ解る。だが聖王国に戦乱はなく、平和であったはずだ。身近な惨劇と言えば、自分の側近が目の前でバラバラにされた程度である。特に気に病むほどのことでもなからう。

「……行って、くれたか。ふうう……」

長いような短いような沈黙の一時を終えて、ジルクニフは深く息を吐き、帝国にある玉座よりも上質な黒曜石の椅子へドカリと腰を下ろす。

「どうだ？ ロクシー。なんでもイイから意見を聴かせてくれ」

「まだ『耳』があると思いますけど、よろしいのですか？」

「よろしくないが、どうしようもないだろう？ 聞かれないようになる手段があるのなら教えて欲しいくらいだ」

「ああ、そうですね。では……」皇帝陛下たる人物が、ただ一人の従者として連れ歩くには外見的にも気品のにも不十分——と言わざるを得ない成人女性「ロクシー」は、少しの思案を経て己の考えを零す。「不自然なほどに完璧です。一点の曇りもない大魔王様そのものである、と言えるでしょう。実力勝負は言うまでもなく、知恵比べでも魔王様の失笑を買う程度になりますね。私としては、奴隷や家畜としての生き方を模索すべきかと思えます」

「やはりそうか……。もう人類は終わりなのか」自覚していた考えを、はつきり言葉にされると胸に刺さる。ジルクニフの心はもう折れそ

うだった。

「ただ……」

「ん？　なんだ？」

「あの魔王様は、勇者にこだわりを見せていました。つまり有利不利に関わらず、魔王としての立場が全てにおいて優先されるのでしよう。たとえ倒されることになったとしても」

ロクシーは言葉を止め、円卓の横で座り込んでいる勇者たちへ視線を送る。ジルクニフや他の指導者たちも、つい視線を誘導されて王国から逃げてきた人類の切り札たちを見つめていた。

「おいおい、バカ言ってるじゃねーぞ。俺たちが役に立つはずねえだろ？　こんなところに連行されてくる勇者なんてどこにいんだよ」

語る言葉に覇気はなく、巨漢の戦士は自虐気味だ。『勇者役なんて貧乏くじは引きたくない』と言っているかのようである。

「筋肉に同意しかない。あんな異常な存在に対抗できる人間はいない。無理」

「でも勇者とやらの認定されてしまった。どうする？　というより、此処はどこ？　あそこに居るのってカベリア都市長でしょ？　あつちのは帝国の皇帝？　その幼女はなんだろう？　ってかアレって噂の聖王女様？　うわっ、恋仲って言われている姉妹の片割れもいる！」

「ティア……、よくもまあ、そんなに騒げるものね。さっきまで石だったっていうのに」

「久しぶりに三姉妹が揃ったから嬉しいんだろ？　それよりラキユース、これからどうする？　……逃げるか？」

よっこらしよつと年寄り臭い仕草と共に腰を上げ、イビルアイはお尻についた土埃を払う。その表情は何故か晴れやかで、赤く綺麗な瞳と、口元から覗く小さな牙が、久しぶりの日光を満喫し輝いていた。「イビルアイったら、逃げた先で石像にされたのをもう忘れたの？　今度は助けてもらえないわよ」

「ふん、だつたらやるしかないだろ？　勇者らしく魔王の首でも刎ねてやろう。——おい皇帝、凄い武器を持っているそうじゃないか。早

く見せてくれ」

もはやヤケクソ気味なのか、カラ元気なのか――、乱暴な言葉使いの小柄な美少女を前にして、ジルクニフは思わず天を仰ぐ。

「はああ、四国による連合軍が結成され、素晴らしき勇者まで迎えることが出来たというのに……。魔王様に打ち勝てる予想図がまったく見えてこない」無意識に乾いた笑いを発し、頭皮を掻き巻く。

「この戦いに答えはあるのか？　大魔王を倒すための正しい回答など存在するのか？　人類に生き残るといふ選択肢は残されているのか？」

円卓へ放たれる眩きに、答えをくれる者はいない。カルサナス都市国家連合の都市長は、敗北者のごとく項垂れるだけ。竜王国の女王は、宰相らしき男性と話し込んでいるものの、建設的な会話ではなさそう。聖王女に至っては、ようやく状況を飲み込めてきたらしい。ほとんど誘拐に等しい連行であったが故に、魔王だ魔王軍だと言われなくても全体像が掴めなかったのだろう。親密な騎士団長を目の前で分解された光景も、思考が乱れる要因であったに違いない。

「何を言っているんだ、皇帝？　答えなんて一つしかないだろう？」イビルアイはただ一人、ジルクニフの疑問を受け止め、正解を告げる。「大魔王と戦うしか道はない。これは八欲王の世界戦争、十三英雄の魔神戦争に続く、人類存亡の戦いなのだ。結果として滅びる可能性が高いとしても、逃げ出すことは許されない。まあ、逃げ出した瞬間、我々はお仕舞だろうがな」

正しい回答を選んでも、生き延びることが出来るとは限らない。恐らく大魔王との戦いで多くの命が失われるだろう。国家も大半が滅びるはずだ。

「ただ、勝つ可能性の無い戦争を始めることが執政者の役割なのだろうか？　大魔王様の御遊びともとれる虐殺劇に加わることが、王の取るべき道なのか？　人が生まれてきた意味とは？　蹂躪されるだけのオモチャとして、我ら人類は長き時を生き延びてきたというのか？　もう訳が解らない。」

「ははは、私の代で帝国どころか、全人類が滅びることになろうとは

……」

力無き笑いは滅亡都市を漂い、この地で溶かされた憐れな犠牲者の残滓と混じる。

さあ、人間種絶滅への一步を踏み出そう。

納得する必要などない。

絶滅する種はいつの時代でも存在する。それが今回は人間種だったというだけだ。無論、魔王様の蹂躪は人間種だけに留まるモノではないが。

ジルクニフはカップに残った柑橘系の香りがする美味すぎる水を喉へ注ぎ、今世最後となる安息の一時を味わった。

そんな皇帝は後日知らされる事となる。

円卓に座るはずであった五番目の国家——森妖精の国を統べる王が、大魔王様に不敬をはたらいたとして、身の毛もよだつほどの拷問を受けた後に殺害と蘇生を繰り返され、完全にこの世から消滅したのだということ。

そして森妖精の国は、法国の牧場に併合されたということ。

……魔王よ、国家の消滅を『言い忘れていた伝言』みたいに軽く扱わないでほしい。森妖精だって生きているんだ、モノじゃない。というか牧場ってなんだよ、もう。



リ・エステイーゼ王国という人類国家が完膚なきまで叩き潰され、魔王軍総大将コキュートスが多くくの守護者の前で功績を称えられてから暫し——。魔王様は更なる楽しみを求めて遠出していた。

切っ掛けは、南方で遊ばせていた黒山羊たちが攻撃を受けたこと。あのレベル90を超えるタンク系モンスターが、ダメージを受けたと思念を送ってきたことだ。

ならば多少遠くても足を運ぶしかない。可愛い仔山羊たちが困っているのだ。召喚主としては、守護者たちと一緒に出かけの準備を整えなくてはなるまい。

言葉にするならば、これは「旅行」である。

「おお、これが八欲王のギルド拠点である浮遊都市「エリユエンティウ」か……。思っていたよりも大きいな」

大魔王は、巨大な動像^{ゴレム}——「ガルガンチュア」の頭部に設置された骨の玉座に座りながら、どうやって浮かんでいるのか原理不明な小さな島とでも言える大都市を眺めていた。

「下に広がっている街並みは、その数倍はありそうですわね。砂漠の中だというのに、人間という種は本当に「繁殖」力の高い生き物です
こと」

何故か繁殖という部分だけを強調してくるのはアルベドだ。玉座の隣に侍り、何かよからぬことを想像しているようで対応に困る。

「浮遊都市から流れる落ちる水がオアシスを形成しているようですねえ。情報では無限に湧き出てくるとのことですが、見たところ集まっている人間全てに行き渡る水量とは思えません。一部の特権階級が独占管理し、見返りを受け取って分配しているのでしょうか。都市の最外縁に居る住人は、まともに水を貰えない貧困層でしょうか？」

デミウルゴスが、無計画に広がったであろう地上都市の分析を口にする。牧場を部下に任せ、久しぶりである魔王様の随伴であるからか、少し高揚しているかのようだ。

「アノ老婆ノ記憶カラスルト、浮遊都市ニハ強大ナ力ヲ持つ守護者ガ三十モ配置サレテイルトノコト。モモンガ様、先陣ハ私ニ命ジテ頂キタク」

地上のことなど目端にもかけず、コキユートスは空に浮かぶ大都市から意識を外せない。今この瞬間にも、敵の迎撃部隊が飛び出してくる可能性もあるのだ。もちろん盛大に斬り合いたくて堪らない、との理由も含んでいるのだろうか。

「ああ、コキユートス。その件だが——」魔王は浮遊都市へ足を踏み入れたことのある老婆「リグリット」の記憶を吟味しながら、一つの想定を話しはじめる。

「守護者が三十とのことだが、全てがレベル100であると、私は思っていない。もしそれほどの戦力が拠点に残っているのなら、八欲王は

「真なる竜王」どもに負けたりしないだろう。戦闘に特化したレベル100のNPCは、竜王との決戦に投入され敗れたと考えられる。拠点へちよっかいを掛けた「黒山羊」に対する迎撃戦力から判断すると、残っているのは防衛用、もしくは生産系のNPCだけだ。それに何百年もプレイヤーが居ない拠点ならば、追加収入の望める都市型であつたとしても金貨が枯渇し、NPCもまともに動けないだろう」

魔王はおもむろに立ち上がり、五体の黒山羊に囲まれている人気の無い浮遊都市を注視する。

都市の外壁は戦闘の余波により崩れかけ、ギルド拠点の自動修復機能が追いついていないようだ。自動修復は一日分の容量があらかじめ決められている。それ以上の修復は、金貨を消費して行わなければならぬのがシステム上の決まり事だ。だが、プレイヤー不在の拠点では言わずもがな。黒山羊のような高レベルモンスターのじやれ合いを受け止めるには無理があろう。

「金貨を定期収入に頼るため、NPCの起動は限定的であり、罨トラップやフィールドエフェクトの類も動くまい。それにプレイヤーの命令が五百年前で止まっているのなら、恐らく拠点防衛にしか行動許可はない。宝物殿のアイテム使用も不可能だろう。当然、死亡したNPCの復活なども有り得ない」

浮遊都市に恐るべき守護者が居るとは、リグリットや十三英雄から見ての話だ。リーダーと呼ばれるプレイヤーも、底レベルの魔神程度を相手にしていたのだから拠点防衛の守護者が強大に見えても仕方がないだろう。もしかすると、ギルド拠点に詳しくなかった可能性もある。

だが、モモンガは違う。知識や経験で言えばユグドラシルでも最上位。プレイヤーの居ない拠点の内情など、外からでも手に取るように理解できるのだ。

「だから、まずは挨拶といこう。黒山羊の相手をしてくれたことにも感謝を述べねばなるまいしな。アルベド、部隊を率いているアウラとマーレ、シャルティアに突撃命令を出せ。地上都市を蹂躪されたならば、天使とやらも顔ぐらい出してくれるだろう」

「はっ、直ちに」

アルベドの〈伝言〉^{メッセージ}を受け、もぞりと魔王の大部隊が動き出す。

レベル100の相手ですら軽く喰らい尽くすであろうアウラの魔獣部隊。守護者に匹敵する二体の竜と、竜系のモンスターで構成されたマーレのドラゴン部隊。そして上位の吸血鬼が中心となっているシャルティアのアンデッド部隊。

浮遊都市の眼下で勝手に作られた大都市へ向け、三方から一斉に襲いかかる。当然ながら地上都市の住人たちは大混乱の様相を——と言いたいところだが、それは既に済ませてあったのだ。

大魔王様の黒山羊五体が亜人国家を踏み潰しながら遊び歩き、更なるオモチャとして浮かんでいる都市へ手を出したその時、地上都市は阿鼻叫喚の地獄絵図そのものと成り果てたらしい。黒山羊は踏み潰す気などまったく無いままに住民を踏み砕き、大いにはしゃいで人間どもの住居をかき乱したのだ。今は魔王様の命で離れた場所で待機しているが、そびえ立つ漆黒の触手は恐怖以外の何ものでもない。

地上都市に生きる脆弱なる者たちは、何が起こっているのかを知る前に、魔獣に噛み裂かれ、^{ドラゴンブレス}竜の吐息で吹き飛ばされ、アンデッドの仲間入りを果たすこととなった。

「モモンガ様、歓迎の手勢が姿を見せましたわ」

「ふん、黒山羊の時と同じか。レベル90以上が二体、60以上が十体。2チーム編成で魔法障壁へ近付いた敵対勢力を迎え撃つ。地上都市を護るわけではないのだな。ただの規定に従った防衛反応か……。つまらん」

おそらく何百年も同じ行動を繰り返していたのだろう。プレイヤーに与えられた最後の命令に従って。

違う反応といえば、十三英雄がギルド武器を持って訪ねた時ぐらか。

「アルベド、アウラたちにはそのまま戦闘を続けるよう通達しておけ。我々はこのまま浮遊都市の内部へ入るとしよう。デミウルゴス、例の少年はどうだ？」

「はっ、支配は完璧で御座います。『真なる竜王』から入手したギル

ド武器の装備も、まったく問題ありません」

「まあ、支配してから装備すれば、ギルド武器の加護が邪魔してくることもない——と事前に試してはあったが、本番になると思わぬバグが発生したりもするからな。ユグドラシルとは違う世界だとしても、習慣は中々抜けないものだ」

懐かしき記憶を思い起こす大魔王の前へ、枝分かれしている奇妙な形の大剣をもつ一人の少年が引き出される。目はうつろで表情はぼんやりとしており、一般的な村人と変わらない服装でただ立ち尽くす。

彼の名は「マジック・アイテムンファイーレア」、『あらゆる魔法具を制限なしで使用可能』という生まれながらの異能トを持つ「レア」である。

第37話 「見物魔王」

「十三英雄のリーダーは、ウイッシュユ・アポシ・ア・スター星に願いを」による一時的な誤魔化しで、アイテムの提供などを受けたそうだが、ギルドマスターしか扱えないはずのギルド武器を完璧に装備している少年を見て、はたしてどんな反応をするのか。楽しみだな」

「モモンガ様、お気を付け下さい。浮遊都市の中にはまだ、最低でも十八体の守護者が残っておりますわ。戦闘になった場合は、撤退も視野にお入れください」

「それはそれで面白そうだが、金貨の消費を考えれば三十もの守護者を全稼働させたくはないだろうなあ。ふふ、『真なる竜王』との決戦でNPCを何度復活させた？ 金貨を使ってどれだけの傭兵を投入した？ 魔法障壁の展開にどれだけの金貨を消費している？ ナザリックですらアンデッドを多用することでギリギリ辻褄を合わせているのだぞ。それが天使を主体にした拠点であれば、完全に需要と供給のバランスは崩れる。マスターソースを活用できないのであれば尚更だ」

遠い昔——そう、今ではもう遙か昔のこととなる、ナザリックの維持費を稼いでいたあの日々。巨大な拠点を敵プレイヤーから護るために奮闘していた、悟との孤独な戦い。あれをNPCだけで続けられるわけがない。

事実、ユグドラシルが終わりを告げようとしていた当時、金貨の管理がなされていないギルド拠点はボロボロだったのだ。

異世界に転移した浮遊都市は、強大な敵が不在で、且つ通常より多めの収入が見込める都市型であったために外装を維持できているに過ぎない。もちろんエクステンジボックスに伝説級装備でも放り込めば、膨大な金貨を獲得できただろうが、NPCが勝手にレア武器を処分できるかというところ……。ナザリックの僕たちしもべを見れば解る。そんなことは不可能だと。

「それではモモンガ様、浮遊都市へは——わたくしデミウルゴスとアルベド、コキユートスに、おっとセバスとパンドラも到着したよう

すね」

「遅くなりましたして申し訳ありません、モモンガ様」

「ナザリックは御指示通り、オーレオール殿にお任せしてきました、モオモオンガツ様！」

ナザリックに残っていたパンドラが開いたのであろう、ゲートから執事姿のセバスと黄色い軍服姿の埴輪男が早足で進み出てくる。

「セバス、竜王国では勇者どもの世話が大変だったみたいだな。ビーストマン討伐による経験値稼ぎ……、どうだった？」

「はっ、神人の二人は予想通り変化はありませんでした。他の者も成長は鈍く、期待したほどではありません。ただ『刀使い』と『刺突使』の両名は、最終段階時の戦士長を超えたのではないかと判断しております。とはいえレベル上昇の鈍化が著しく、限界は近いかと」

セバスが竜王国で行っていたのは、勇者やレアどものレベルアップである。大量のビーストマンを殺戮し、大幅なレベルアップを果たそうとしていたのだ。目論見通りにはいかなかったようだが。

「むう、プレイヤーの血を覚醒させた神人と一般人との差が大き過ぎるな。出来ることならプレイヤーの関与がない、純粋な人間の勇者を求めたいところではある。しかしなあ、成長限界を突破するには他の手が必要か……」

「モモンガ様、少しお聞きしてもよろしいですか？」

「ん？ かまわんぞアルベド」

「はい、それでは——モモンガ様はどうして、神人を勇者として御認めにならないのですか？ 能力だけなら例の『真なる竜王』にも匹敵する強者でございしますが」

それほど関心があったとは思えない。だけどモモンガ様と言葉を交わしたかったから入り込んできたのだろう。守護者統括は浮遊都市を前にしても平常運転であった。

「はつきり言うのと、つまらんからだな」大魔王は過去の膨大な経験を思い起こし、言葉を重ねる。

「ユグドラシルプレイヤーの力が関与している戦闘は、所詮PVPの延長にすぎん。面白味はないし、せつかくの異世界が台無しだ。やは

り別世界の魔王に対峙するべきはこの世界の人間、この世界の勇者であるべきだろう。まあ、今は妥協して人間以外でも仕方ないとは思っている、ツアーとかな」

「かしこまりました、モモンガ様。今後は私も、見込みのある人間の発見に注力したいと思えますわ」

「ああ、頼むぞ。と言つても今回は浮遊都市の見物に來ただけ、だがな」

モモンガは大仰にローブを翻すと、集まった僕たちやギルド武器を両手で支える少年へ〈全体飛行〉をかけ、ガルガンチュアの頭頂部から浮かび上がる。

「久しぶりにワクワクするぞ。何が起こるか分からない、そんな不確定要素があるギルド拠点への侵入など、異世界では初めてのことだからな」

「モモンガ様が喜ばれるのであれば私も嬉しいのですが、統括の立場から申し上げますと、斥候を放って頂きたいところですわ」

「確かに、モモンガ様に危険が及ぶような状況は避けたいところです。金貨が枯渇しているとはいえ、未知のアイテムなどもあるでしょうし」

ちよつぱり面白がつている魔王とは異なり、二人の知恵者は周囲への警戒に余念がない。

今度の標的は、腐つてもギルド拠点なのだ。それもナザリックに勝るとも劣らない大規模都市。八欲王が竜王との決戦に全てを費やしてもなお、三十体のNPCが守護している破格の戦力。

仲間内のイザコザがあつたとはいえ、よくぞこんなギルドのプレイヤーどもを倒せたものだ、モモンガも期待してしまう。あの「真なる竜王」は必ずや魔王を倒せる戦力を仲間にし、目の前に現れてくれるはずだ。そして始まるに違いない。

世界の命運を懸けた最終戦争が――。

「おっと、パンドラ。シャルティアには浮遊都市を包囲させておけ。面倒事が起きたとき、即座に対応できるようにな」

「はっ、直ちに通達いたします」

視線を下げて地上都市を見やれば、迎撃に出ていた天使たちの残骸が視界の端に映る。もうしばらくすれば、光の粒子と成り果てて死亡が確定するのだろう。マスターソースの名簿に空きができる瞬間だ。これならばアウラとマーレが率いる部隊だけで問題なからう。シャルティアはサポートに回せる。

侵入組は不釣り合いな大剣を抱えるンフィーレアを先頭とし、次にモモンガとアルベド、デミウルゴスとコキュートスが続ぎ、最後尾にセバスとパンドラが並ぶ。

なお、数えるのも億劫なくらいのハンゾウたちが隠れているのはいつものことなので気にしない。

「さあ、浮遊都市『エリユエンティウ』を見せてもらおうとしよう。どんな歓迎をしてくれるのか、今から楽しみだ」

観光地へ足を踏み入れるかのように、魔王は一人の少年を旅行ガイドにして魔法障壁を通り抜け、浮遊都市へと降り立った。ゴーストタウンのように静まり返った、捨てられたかのごとき都市の中へ。

「モオモオンガツさま！ まことに不敬ながら、絶対なる支配者であられる父上を御出迎えすべき手の者が見当たりません。なんと愚かっ！」

「本当に誰も出てこないとは極刑に値するわね。妻としては夫を侮辱されたようで許せないわ」

「ああ、君たち、なにを好き勝手に父上とか妻とか夫とか口に行っているんだね。まったく、僕^{しもべ}としての立場を弁^わえてほしいものだよ」

「ムウ、妻二関シテハ悪イ話デモナイト思ウノダガ……。御子息ノ誕生ヲ期待デキルノダカラ……」

「モモンガ様、地上へ向かった天使の迎撃部隊は正面の城から出てきました。そちらへ向かわれてみては如何でしょう？」

「そうだな、セバス。玉座がある中枢を偽装するため別の場所が入り口である可能性もあるが、このギルドはそんな小細工を弄するようには思えん。普通に城の中がマスターソース起動の中心部であろうな」

遠い昔であれば多くのNPCが都市部のアチコチに姿を見せ、賑わ

いのある様相を見せていたのであろう。だがしかし、それだけのNPCを常時起動できるだけの余裕などあるはずもない。

都市の中は一見、美麗なる建築物で覆われているように見えていても、実際は無数の破損箇所が目につく。掃除も行き届いてはいない。それでも、数百年の時を経た建物にしては廃墟感など無く、また使われることを前提に整備していたかのようだ。

この都市には、恐るべき三十の守護者が居るといふ。

だが、たった三十だ。これだけの規模にしては少な過ぎる。ナザリックが数万——恐怖公の眷属を含む——であることを考えると、現状維持すら困難と思える。

巨大なギルド拠点は維持するだけでも大変だ。城下町の分だけ多めの収入を見込める——という都市型拠点でも、浮遊都市ほどになると日々の出費に頭が痛くなる。しかも主要NPCは天使系ばかり。アンデッドなら費用節約にもなるのだが、ユグドラシルでアンデッド系は不人気であり、悪のギルドを自称しているような大墳墓でもなければ多用しないものだ。

「……抜け殻の拠点か」

静かな都市を見回して、ふと大魔王は考える。

己が勇者に討たれた後、ナザリックはどうなるのだろうか？ 取り残されたNPCたちは、浮遊都市と同じ道を辿るのだろうか？ それとも残った勇者と死ぬまで戦い続けるのか？

物語として考えるならば、残党が魔王復活へ邁進し、新たな世界への危機を招くことになるのだろうか……。

うん、それイイな。

「モモンガ様、城の正面門に敵影ですわ。数は十二。完全武装で歓迎の意を表していると思われます」

「戦闘可能なNPCはこれで全て、というわけか。残りは生産系か治療系で、金貨節減のために凍結させているのだろうか」大きなギルドであればあるほど、生産系でもNPCは高レベルとなる。普通に活動させていては貴重な金貨も減る一方だ。大魔王は相手の懐具合を読み解きつつ、戦闘態勢に入った十二体の天使を睨む。

「拠点のトラップに引き込んで戦う本来のパターンが使えないのだから、迎え撃とうとするのは当然か。拠点を破壊されるのも嫌だろうしな。しかし……」

城の正面門前にズラリと並ぶ敵NPCの挙動を見つめ、モモンガは悲しげに呟く。

「あれらは『浮遊都市から出てよい』との命令を受けていないのだろうな。いや、そんなことをいちいち命令しなくともいいだろう、とかわれていたのかもしれない。八欲王とやらも、自分たちが死んだ後のことは考えていなかったのかもな」

NPCにとって主たるプレイヤーの命令は絶対だ。加えて許可がなければ、己の生死に関わっていようとも勝手な行動はとらない。異世界に転移して自立意思に目覚めようとも、その点は不可侵なのだ。ナザリツクと同様に。

「侵入者へ告げる。即刻立ち去れ、この地は貴様らのような存在が立ち入ってよい場所ではない。——ただし、先頭の人間は置いていけ。調べさせてもらう」

集団の中心にありて、大きな存在感を放つ一体の天使。リーダー格なのであろうその天使は、光り輝く六枚の翼を広げ、体格に見合わぬ大型のハルバードを構える。

「おお、^{セラフ・エイズファイア}恒星天の熾天使か。NPCではレア中のレアだな。しかも主武装が神器級だど？ これは相当想い入れがありそうだ。竜王に壊されたくなかったから置いていった、という可能性もあるな」

天使からの威嚇も軽く受け流し、魔王は思考に暮れる。

拠点のNPCは基本的に何にでもなれるし、何でも出来る。拠点ポイントさえあれば、それを振り分けるだけの話なのだ。しかし例外として、絶対に取得できない職業などが存在する。代表的なのが「たち・みー」の『ワールド・チャンピオン』。『ウルベルト』の『ワールド・ディザスター』。『モモンガ』の『エクリプス』、などである。

そして次に、条件さえクリアすればなれる種族・職業などがあつた。

その条件の一つが課金である。少々レア度が高い場合は、課金アイテムを使用した上で拠点ポイントを振り分ける必要があったのだ。

なお、恒星天セラフ・エイズフィアの熾天使の場合は課金ガチャである。狙った種族の課金アイテムが出てくるまでは、ガチャを回し続けなければならない——という鬼畜の所業。当然レア度が最高峰である場合は、モモンガが持つ「流れ星の指輪」シューティングスター並みの課金を余儀なくされるのだ。

ユグドラシルの運営は糞だった。異世界でもその想いは変わらない。い。

「聞こえないのかアンデッド！ 人間を置いて去れっ！」

「違うな、言い方が違うぞ」今にも襲いかからんばかりの配下を押し留め、モモンガは天使の言動を訂正する。

「自慢の魔法障壁を軽く突破できる——本物のギルド武器を装備している人間を置いていけ、だろ？ そんなに自分たちの拠点に必要不可欠であるギルド武器が気になるのか？ ギルドマスターでもない人間が装備していることを疑問に思うのか？ 別に珍しいことではあるまい。二百年前にも来ただろう？」

「あ、あの時の人間?! いや、そんな馬鹿な！ 人を捨てアンデッドになったのか？ 我々に無理やり協力させておいてギルド武器も渡さず、そして次は化け物どもと我らが主の拠点へ侵攻するだ?! やはりあの時、無理やりにも殺しておくべきだったのか！」

悲しいかな、ギルド武器を人質にされれば、NPCたちに成す術は無い。

ギルド武器はギルドの心臓であり、主たるプレイヤーの最重要アイテムである。破壊されることは絶対に、そう命を犠牲にしても絶対に避けなければならないのだ。

「ふははは、十三英雄などと一緒にされるのは魔王として不名誉なことだな。まあそれより、デミウルゴス」

「はっ、モモンガ様。予定の行動へと移らせて頂きます。……ンフィーレア君」

「はい、デミウルゴス、様。拠点の守護者には、下がって頂いてもらいます」

虚ろな瞳の少年は、デミウルゴスの——大魔王の意向に従い、天使が護る城の正面門へ向けて歩き出す。奇妙な剣を杖のようにして階段を上がり、戸惑いを見せる十二体の天使へ堂々と「下がれ」と告げ
ては、ギルド武器をあからさまに見せつける。

「くっ、主以外の命令など——だが、ギルド武器を所持している以上、下手な真似はっ」

最も危惧されることは、装備者だけが行えるギルドマスターの特権——破壊である。

ギルド武器の破壊はギルドの消滅に等しく、主から託されたギルド拠点防衛という勅命を達成できなくなる最悪の結末。おまけに、自分たちも違う存在になりかねない。以前聞いた「魔神」の正体を考えれば、拠点という心の拠り所を失ったNPCの未来はあまりに暗い。「想像とは少し違うな。ギルド武器を装備したことより、破壊される可能性を重視しているようだ。装備しただけでは絶対服従とならず、場合によっては奪い取ることも出来得る。うゝむ、ナザリックでも同じなのか?」

「モモンガ様のギルド武器を他人が持つことなど想像するのも不敬かと思いますが、私は旦那様以外の命令など絶対に聴きません。その人間が浮遊都市と同じことをナザリックでしようものなら、即座に叩き潰して御覧に入れますわ」

「アルベドはギルド武器も攻撃に巻き込みそうで怖いですねえ。万が一にも有り得ると思いませんけど、その時は冷静にお願いしますよ」

天使たちとは対照的に、ナザリックの答えは明確だ。

モモンガ様以外の命令などギルド武器を持つていようと聴く耳持たず、である。とはいえ、それは大魔王たるモモンガが君臨しているからこそその答えであろう。浮遊都市の天使と同じく、主を失つて数百年経過しているともなれば、ギルド武器に執着したとしてもおかしくはあるまい。

「お、お前たちの望みはなんだ!? 前回同様、アイテムを希望するのか? 言っておくが、我々は宝物殿へ入れない。提供できるのは我ら自

身が所持している物だけだぞ。当然だが、武装は主の命令でなければ外せない！」

「なるほど、主から使用許可が下りている所持アイテムなら裁量権を持つというわけか？　ならばギルド武器の破壊を盾に、武装を剥がせるか脅迫してみたいところだな。自分で考えギルド武器の破壊を免れるか、主の命令を頑なに守るか」

二百年前の十三英雄たちは様々なアイテムの提供を受け、魔神との決戦に挑んだというが、それらは八欲王が気にも留めていなかったゴミアイテムであったが故に可能だったのだろう。天使たちが妥協できたギリギリのライン、と言ったところか？　その柔軟さは、ナザリツクの僕たちにも見習って欲しいかもしれない。

「まずはそうだな、拠点内の見学でもさせて——」

モモンガは城の正面門をチラリと見やり、他者のギルド拠点をじっくり観察できるよい機会ではないかと考えていた。

ギルド拠点というモノは、侵入者を倒すための工夫に満ちている。迷路やトラップ配置、NPCとフィールドエフェクトとの組み合わせ。レベル100のプレイヤーチームをぶち殺そうと、幾人もの知恵と奇抜な発想が組み込まれているのだ。

もつとも、金貨枯渇でNPCぐらいしか稼働できない拠点では絵に描いた餅。大魔王様の目を楽しませる程度にしか役に立つまい。

「——む？」

小さな魔力の発動を察知し、魔王が言葉を止める。

魔力がうねっているのはギルド武器を持つ少年——ンファイレアの“頬”辺りだ。あまりに弱々し過ぎて火花すら創り出せないだろうと警戒もしないが、この瞬間に魔力が動いたことだけは気にかか

る。

そう、この少年はデミウルゴスの支配にかかっているはずなのだ。

『守護者へ命令する！　僕の状態異常を解け！　今すぐに！』

少年の声が響く。

当の少年はまったく口を開いていないというのに。

『命令する！　僕の状態異常を解いてくれ！　お願いだ!!』

ぼんやりと虚空を見つめている少年の頬から、必死な懇願が発せられる。

まるで、別人が喋っているかのようだ。

「な、なんだ？ 状態異常を解けたと?! それが望みなのか？ ならばっ！」セラフ・エイズファイア 恒星天の熾天使と他に数名の天使が、戸惑いながらもファイアに対する治癒魔法発動へと動き出す。

「モモンガ様、人間を確保すべきかと」

「このままでは私の〈支配〉ドミネートが解かれます。モモンガ様」

「アルベド、デミウルゴスも動くな。コキュートスも武器をしまえ。少し面白くなってきたところだ。続きが気になる」

バサリとローブごと右手を横へ払い、アルベドらの動きを抑える。

モモンガが耳にした声は確かに少年のモノであり、自身にかけられた魔法の解除を求める救援要請であった。ただ、当人の口は動いておらず、魔法具を発動させた痕跡もない。ということは、あらかじめ録音しておいた自分の声を、この時点で自動再生したわけだ。

モモンガにしてみれば、それほど難しい仕組みでもない。複数の魔法を組み合わせれば同じことが可能であろう。だけど、ただの人間である少年が行うには、いささか無理難題に過ぎる。

「面白い魔法だな。僅かばかりの魔力で、音声の記録と予約再生をなすとは……」

「はっ——、ここは?! ひっ、て、天使さん！ 僕を護ってください！ あの化け物たちを近付けないでっ!!」

「人間！ 望みを叶えてやるから手にしている剣をよこせ！ それはお前が持つべきモノではない！」

「い、言うことを聴いて下さい！ 武器を渡すのは後です！」
「くっ」

不承不承と表情で語りながら、リーダーの恒星天の熾天使は片手を上げ、配下の天使たちで少年を取り囲む。

少年の望み通り身を護るために、そしてギルド武器を逃さないために。

「少年よ、聞きたいことがあるのだが……」場が落ち着くのを待って、

大魔王はレアである。生まれながらの異能^ト。持ちの少年、ンファイレアへ問いかける。

「今の魔法は何だ？ 中々面白そうな仕組みだな。ギルド武器の魔力に隠れて、見えなくなるほどの微小魔法だ。自分で創ったのか？」
「せ、生活魔法です。第0位階を組み合わせて、僕が一人で創った魔法です」

「嘘だな」

ギルド武器を抱えて精一杯の虚勢を張る少年に、魔王はさらりと真実を述べる。

少年に魔法の素質はあったが、連日の繁殖行為を続けながら新魔法の開発は不可能だ。必ずや協力者が居る。

浮遊都市を知り、守護者を知り、ギルド武器に関する知識を持っている者。

魔法に長け、少年と接触できる者。

そしてギルド武器を持った少年の支配を解けば、守護者たる天使を味方にでき、魔王と戦えるに違いないと実行へ移せる者。

それは――。

「あの老婆か……」モモンガは、十三英雄として浮遊都市へ入った経験を持つ老婆“リグリット”を思い浮かべ、楽しそうに笑う。

「くくく、それにしても、音声を再生させるタイミングは見事だったな。アレがズレていれば目論見は水の泡だったぞ」

「だ、だけど、賭けには勝ちました！ 僕は浮遊都市の守護者を味方にできた！ 大魔王、貴方の負けです！」

「おい、我々は味方になったわけでは――」

「ん？ 負け、だと？」

ギルド武器を持つているから仕方なく、とそんな天使の言い分を遮り、恐るべき闇の波動が場を満たす。

殺気とも怒気とも言い難い、死を身近に感じる危険な気配だ。

ギルド武器の恩恵を受けていなければ、人間などスライムのように溶けていたかもしれない。

「ああ、『戦闘は始まる前に終わっている』なんて昔の仲間も言ってい

だが、確かに情報を収集して戦いを優位に進めようとする行為は正当だ。しかし、勝敗が決まっている戦いなどに意味などあるのだろうか？」

大魔王は七匹^レの蛇^ガが絡^ミ合^ウ黄金^カの杖^カをとり出し、下端部分を石畳へ叩きつける。

「お前は今——ギルド武器を持ち、天使たちの戦力を得、勝利を確信した。勝敗がどう転ぶか判らないこの時点で……。虚勢なら解らないでもないぞ、強大な力を持っていると相手に誤認させて戦闘を優位に運ぼうというのならな。だが私は、戦う前から勝ち負けを論ずるのは好きではない。勝負は何が起こるか分からない、だから面白いのだ」

「お、面白きなんかいるもんか！ 僕はエンリとネムさえ返してもらえればそれでいいんだ！ 大魔王、二人を返せ！ さもないとっ」

第38話 「先読魔王」

勇気ある者を勇者と言うならば、この時のンファイアレアこそが勇者であろう。口から泡を吐き、血涙を流して助命を希^{こいねが}うべき神話級の化け物を前にして、少年は一步も退かない。

「エンリ？ ネム？ 勇者かレアの中に、そんな名の人間がいたのか？」

「モモンガ様、第六階層デノ訓練ニ参加シテイル。〃シャルティア〃ノペットガ、〃エンリ〃トイウ名デアリマシタ」

「〃ネム〃とは、私の姉が世話をしているペットですわ、モモンガ様」
「ペットじゃない！ 僕の大事な人だ!!」

ンファイアレアはまったく動揺しない大魔王たちに苛立ちを覚えたのか、手にした奇妙な大剣を地面へ突き刺し、天使たちへ宣告する。

「浮遊都市の天使様！ 貴方たちにとって、〃ギルド武器〃は命よりも大事なモノであると聞きました！ ならば取引です！ 大魔王を倒し、僕の大事な人を救い出す手伝いをしてください！ 代償としてギルド武器は差し上げます！」

「そ、それは願ってもない取引だが……」

浮遊都市の守護者にとって、ギルド武器が拠点に戻るのは数百年ぶりの快挙だ。命を懸けても取り組むべき事案である。とはいえ、目の前の六体——世界を滅ぼすことのできる怪物たちを倒すことが出来るのかどうか。

浮遊都市の現戦力は、竜王との最終決戦——実際は仲間割れに付け込まれた戦い——に連れて行ってもらえなかった余り組なのだ。例外なのは、リーダーである恒星^{セラフ・エイズファイア}天の熾天使ぐらいであろう。

「天使長様、ギルド武器が戻るならば主様も喜ばれましょう」

「悲願でもありません。いつ破壊されるやもしれん、と怯える必要もなくなります」

「いつの日かお戻りになる主様のためにも、取り戻しましょう」

「当然だ！ 皆やるぞっ!!」

ギルド武器を取り戻すことは確定事項だ。

それでも一瞬迷ったのは、敵対プレイヤーに自分たちだけで勝てるのかという不安によるもの。トラップは動かず、フィールドエフェクトも使用できない。宝物殿からアイテムの補充など許可されておらず、金貨を使用する仲間の復活も不可能なのだ。

即時蘇生なら魔法でどうにでもなる。だがもし金貨によるNPC蘇生が叶うなら、数多の竜王たちを殺戮した100レベルがこの場に揃うだろう。アンデッドの侵入者など軽く撃退できる、最精鋭の守護者たちが……。

無論、五億枚の金貨などあるはずがないので夢物語に過ぎない。

「盾持ちは前衛にて敵を止めろ！ 残りは神聖属性の魔法を叩き込め！ 相手はアンデッドだ、分はこちらにある！」

「はっ！」

アンデッドに対し、天使は天敵と言ってイイだろう。カルマ値の大幅な差も含めれば、ボーナス特攻も付いてお得に殲滅できる。

大魔王として例外ではない。

恒星天セラフ・エイスファイアの熾天使の持つ切り札——死の暴虐を斬り払う神聖属性特殊技術は、通称「神の光」と言われるだけの威力を誇っており、カルマ値極悪のアンデッドなど即成仏なのである。

「面白い、チーム戦と行こうか！ アルベド、リーダーの熾天使を引き付けろ。コキュートスは左、セバスは右だ、天使の数を減らせ。デミウルゴスは強化支援・回復要員の天使を牽制、パンドラは属性防御と治癒を。さあ、戦いを楽しもうか！ <集団標的・上位全能力強化>！」

大魔王の膨大な魔力が守護者を包み、明確な戦闘開始が宣言される。

中央前衛にて早着替えのアイテムを使用したアルベドは、漆黒の全身鎧フルプレートを身に纏っていた。右手には巨大な斧頭バールを持つ武器ディッシュ、左手には「真なる無」ギンヌンガガブの形態変化武器であるメイスを持ち、恒星天セラフ・エイスファイアの熾天使の敵愾心ハイトを稼ぐ特殊技術スキルで全てを受け止める。

コキュートスは純粹なる武器攻撃のみで、盾持ち天使へ襲いかかっていた。相手が防御特化であるため容易く斬り崩すことはできない

ものの、齒応えのある敵対者を前にした蟲王は、全身で歓喜を表しながら嬉しそうに四刀を振るう。

もう一人の前衛アタッカーであるセバスは、行く手を遮ってくる大盾へ片手を添え、気合と共に浸透撃を放っていた。盾や鎧を貫通する特殊な攻撃手法であり、防御特化には有効な対策だと言えよう。同格の100レベル相手には『微妙』と評価される程度しか通らないが、格下の天使なら十分である。とはいえ、相手のHP量からするとまだまだ時間はかかる。

後衛のデミウルゴスは遠距離攻撃用の鋭利な羽をばらまき、支援型天使の身を刻んでいた。一撃一撃はHPを僅かに削る程度の、いやがらせ的な効果しかない。それでも積み重ねれば、仲間の治癒や強化への対応を遅らせることが可能であろう。それにこっそり混ぜられる状態異常系の特殊技術^{ススキル}が天使たちを混乱させる。ベテランプレイヤーならばそれぞれの対策は完璧だろうが、NPCだと経験不足だ。初めて喰らうマイナーな状態異常は、致命的ではなくとも非常にウザい。

パンドラはひたすらバフを重ねていた。攻撃には一切加わず、最も危険な状況のアルベドを中心として、徹底的な神聖属性対策である。加えて回復要員として忙しく変身を繰り返す。天使を相手にしている、カルマ値の低い悪魔やアンデッドを支える必要があるのだ。それも普通の治癒ではダメージを喰らう死の支配者^{オーバーロード}も居るので、全体回復などは使えない。埴輪男にとっては神経をすり減らす戦場であつた。

「ふはははは、素晴らしいな天使たちよ！ これ程のダメージを受けたのはユグドラシル以来だ。やはり天使系との戦いは厳しいものがあるな」

「愚かなアンデッドめ！ 笑っていられるのもここまでだ！」

盾持ち天使の後方にて、恒星天^{セラフ・エイスファイア}の熾天使の身体が光る。カルマ値の低い異形種プレイヤーならば、一度は目にしたことのある最悪の光景だ。

最上位の天使が繰り出す、アンデッドを消滅させ得る神聖属性の特殊技術^{スキルト}。100レベルの死の支配者^{オーバロード}であつても甚大な被害を負う、恐るべき切り札である。

「不浄殲滅の光をその身に浴び、消え去るがイイ！」

「夫に手を出す腐れ天使があつ！ 貴様の相手は私だつ！」

アンデッド特効の凶悪な一撃がモモンガへ襲いかかろうとする直前、アルベドが身代わりスキルを発動させる。全てのダメージをその身に背負う、タンク系の緊急防御支援だ。

だがカルマ値の低い悪魔、アルベドにとつても熾天使の切り札は重過ぎる。腕一本では済まない重傷を負うことになるだろう。前衛の要であるアルベドが脱落するなど、この時点では勝敗を決する敗因になりかねない。

「発動！ ヘルメス・トリスメギストス！」

アルベドが眩い神の光に包まれる中で発動させたもの、それは己の身に纏う神器級鎧^{ゴツズ}に秘められた奥の手だ。三重装甲の鎧に衝撃を流し込み外側から自壊させることで、自身へのダメージをゼロにする絶対防御。超位魔法ですら無効にするのだから、熾天使の切り札など言うに及ばず。

「な、なに?! 主から与えられた私の秘儀がつ、鎧の外装を破壊しただけ——だとつ？」

「ふん、旦那様に対する私の愛に不可能はないわ！」

追加装甲が弾けてスタイルが強調されるスーツアーマーになってしまったアルベドは、危険物っぽい大きな胸を逸らし、天使どもの驚愕を一身に引き受ける。

これもヘイト管理の一環なのだろうか？

「……ま、まあよくやったアルベド、あとは任せておけ。デミウルゴス、熾天使の再使用可能時間が過ぎる前に、後方支援の天使を減らすぞ！」

「はっ！」

デミウルゴスは後衛の天使たちに万遍なく攻撃を加えていた。一体への集中攻撃ではなく、ダメージ量の小さい——且つ避けにくい範

囲攻撃を主体にした執拗な嫌がらせである。

当然そんな「鋭利な羽」程度では、天使のHPをたいして削れない。

「まずは左端のヤツからだ！　トリプレットマキシマイズマジック　リアリティ・スラッシュ　魔法最強三重化・現断！」

魔王が持つ最強クラスの魔法に加え、デミウルゴスが放つ触手のような羽が——先程までとは異なり、たった一体に集中してぶつけられる。

次元を斬り裂く魔法の刃に、無数の鋭利な羽。

自身の身長より長いメイスを抱え、必死に盾持ち天使の治療を行っていたレベル70台の支援型天使は、分割された己の身体に戸惑い、残った片目で天を見つめては、ここには居ない誰かに対し謝罪の言葉を叫び、どしやりと潰れた。

長きに渡る浮遊都市の防衛から解放されるに至ったのだ。

つまり、死亡である。

「バカなっ?!　拠点防衛を任される我らがそんなに容易く!?!」

「ああ、やはり気付いてなかったか。ユグドラシル時代のAI制御が、今でも戦闘経験として残っていることに」

「HPを二割五分以上削らなければ回復しない。ならばそのギリギリまで削り、あとは大技で一気に仕留める。流星はモモンガ様、NPCの特性を熟知しておられる」

「まあ、拠点襲撃の経験だけが多いからな、つともう少し潰しておこう」

「はっ！」

レベルが低くとも、NPCの職業構成次第ではカンストガチ勢とも戦える。だから拠点防衛に用いられるNPCは、たいていが硬くてしぶとい。モモンガの執務室を護る、コキュートス配下の僕しもべのように。とはいえ当然のように攻略法はある。

その第一が、AIの条件制御を見切ることだ。

HPがどれだけ減ったら回復するのか？　攻撃の選択条件は？　バフの種類とかける順番は？　どんな攻撃を受けたらどんな回避行

動をするのか？ などなど。

モモンガにとっては朝飯前の児戯であろう、飯食えないけど。

「自由意思を持っていても、自身の戦闘経験を否定することは難しいものだ。好きに戦っているように見えるシャルティアでさえ、『ペロロン』と『ヘロヘロ』が組み上げたAIの影響を濃く受けている」

支援型天使を軽く殺害しながら片手間に解説を行い、大魔王はNPCの問題点と可能性について言及する。

「ユグドラシル時代のAIに縛られるのは、対プレイヤー戦で致命的な弱点になる。次の行動が読まれるのだから、大技も小技も意味を成さない。ただ、この世界でのNPCは新たな経験を積めるので、成長することが可能だ。特にナザリックでは造物主を追放しているので、気兼ねなく与えられていた戦術を覆すことが出来るだろう。此処の天使たちと違って、な」

造物主から与えられた戦闘経験——AIによる戦術は、武装や特殊技術とリンクしており、おいそれと変更出来るものではない。それに主の意向に背くことになるかもしれないのだから、新戦術の模索には消極的だ。

プレイヤーと共に竜王などと戦った外征組なら、変化の余地はあったのかもしれない。また仲間同士での殺し合いに巻き込まれた僕なら、必要に迫られて学んだのかもしれない。

後はそう、大魔王のように先導するプレイヤーが居たなら……。

「ふざけるなアンデッド！ 我らの防衛陣は数百年に渡って破られたことはない！ 『真なる竜王』どもとて、この都市に攻め入ることはできなかつたのだ！」

「当然だ。特に何をするわけでもない浮遊都市など、危険を冒してまで攻撃するか？ 地上に水をやり、天使が守護しているだけの廃墟だ。希少なお宝には興味をそえられるかもしれないが、ギルド武器を抑えている以上放置しても危険は少なからう。それにプレイヤーほどギルド拠点の事情を知らんだろうからなあ、とそれより」

金貨を消費するシステムは意外と細かい。拠点における収支バランスなど、竜王には知る由もないはずだ。十三英雄のリーダーとやら

も、多くを語らずしてこの世を去つたらしい。無論、NPCに至っては手出しできず、管理もできない領域である。

モモンガは拠点のトラップすら動かせない憐れな浮遊都市の守護者を眺め、優しく語る。

「よいのか？ 蘇生しなくて。NPCがこのまま死亡してしまえば、金貨消費による蘇生しかできないぞ。つまりプレイヤーが不在の現状では、復活不可ということだ。どうするのだ？ 即時蘇生可能時間は残り180秒ぐらいだぞ」

殺害した天使の蘇生可能な時間を正確に把握し、大魔王は「早く隙だらけの蘇生魔法をかけるといい。無防備になるだろうがな」と攻撃準備を整えながら煽りに煽る。

「ああ、もちろん、蘇生すると見せかけて、再使用可能時間が過ぎたア宁德ッド特效の特殊技術^{スキル}を再び浴びせてくる、というフェイントも歓迎するぞ。戦いの中で成長し、過去に用いたことのないトリッキーな小技で逆転を狙うのも、自由意思に目覚めたこの異世界ならではの面白さだからな」

ナザリックのNPCたちが変化し成長しているのだから、他のNPCが変わらないわけがない。それになにより、成長を見せてくれた方がモモンガにとっては楽しいのだから、熾天使たちの行動から目を離せない。

ユグドラシル時代のAIから考えると、この場合——後方支援の天使が数体倒されたのなら、即座に蘇生魔法を行使するはずだ。だからパターンとして、蘇生魔法を使う瞬間に大魔法を叩き込むのが御約束。よく知られた攻略法の一つである。

「な……なぜだ？」

「——ん？ なぜ、とは？」

「どうして私たちの行動を読めるのだ?! 私の切り札まで、最初から知っていたかのようにっ」

「やれやれ、私の話を聞いていなかったのか？ 私はな、拠点防衛用のAIとは飽きるほど戦ってきたのだ。だから先を読めるし、天敵である天使の切り札を忘れたりもしない。まあそれより、蘇生しないのか

？ あと30秒だぞ」

「くっ」

蘇生しないという選択肢はない。浮遊都市に残された数少ない守護者なのだ。金貨復活が不可能な今、戦力の低下は避けなければならぬ。

「お前たち、死亡した者の蘇生を行え！ 時間は私が稼ぐ!!」

セラフ・エイズファイア
恒星天の熾天使は前衛へ躍り出て、防御特殊技術^{スキル}を連発している盾持ち天使の横に並ぶ。

アルベドの真正面だ。

当然ながら一騎打ちをしようというのではない。己に敵愾^{ヘイクト}心を集めるため、もう一つの切り札を行使するのだ。

「全体攻撃ならば避けられまい！ 喰らえ!!」

熾天使が持つ厄介なアンデッド特效の切り札、第二弾。

単体攻撃版と挙動が似ているので見極めが大切であり、範囲攻撃の分だけダメージ量は劣るものの、神聖属性の防御魔法がないとシヤレにならない、カルマ値の低いプレイヤーにとってはHPを大幅に削られる一撃だ。

とは言っても、しっかりと対策をとっていれば怖くはない。モモンガのように攻撃を読んでいるなら尚更だ。

「よしここだっ！ デミウルゴス、相手の攻撃は無視して後衛の天使へ大魔法だ！ 回復はパンドラに任せろ！ ゆくぞっ、超位魔法！」
一発喰らっても問題ないのであれば無視する。その時間で大技の準備を整える。

簡単なようでいて非常に恐ろしい対応だ。喰らうダメージ量を正確に把握していなければ、とてもやろうとは思わないだろう。

おそらく、大魔王には経験があるのだ。悪魔やアンデッドの身を焼き焦がす、神の光を浴びた経験が、幾度も……。

球体状に広がった魔法陣、握りつぶされる課金アイテム。魔王と悪魔が織りなす暴力の嵐は、浮遊都市の舞台へと降り立つ。

「御心のままに！ へ隕石落下！」
^{メテオフォール}

「へ大呪詛蠱毒厭魅」！ 死を誘え、腐れ爛れて、恨んで呪え！」

辛うじて保たれていた浮遊都市の美しき街並みが、落下した真つ赤な隕石によつて碎かれる。何百年もの間、帰らぬ主を待ちながら補修を繰り返した日々。自動補修の許容を超える破損は、生産系NPCの手によつて支えてきたのだ。

巨大な浮遊都市を、たった三十名で、気が狂うほどの年月を。

仲間の蘇生を行おうとしていた天使は、頭上に落ちてくる隕石を前にして、回避行動をとれないでいた。そんなことをすれば蘇生魔法が途切れてしまう。仲間を見捨てることと同義だ。それに天使長の命令権限は主の次に位置し、絶対だ。逃げるわけにはいかない。

だけど、何か変だ。

蘇生がまだなはずなのに、死んだ仲間が私の腕を掴んでいる。痛いほどに。

奇妙な唸り声を上げながら顔を上げ、私を見る。真つ黒に澱んだ天使とは思えぬ瞳で。

「ウウボボボボオオオオオオオオオオ!!」

死んでいたはずの天使が生きている仲間へ掴みかかり、落ちてきた隕石と共に弾け飛ぶ。

魔法行使中で無防備であった天使の身体はバラバラに飛び散り、後衛の支援型天使六体は無残な有様に成り果てていた。

だがそれでも終わらない。

大魔王の超位魔法は、ここからが神髄だ。

「ふははは、いい具合だぞ。プレイヤー相手だと死体を用意するのも大変だからな。死んでいる奴がいないと威力半減なんてふざけた話だが、今回は上々だ」

超位魔法〈大呪詛蠱毒厭魅〉。

死が死を呼び、最後には全てを巻き込む呪詛となりて嘖き上がる。

「仲間の怨念が籠った呪いを受けるがいい！ 言っておくがこの呪いは避けられん。お前たちの仲間から贈られたモノなのだからな。耐性など役に立たんぞ。有難く受け取れ！」

死者を怪物化させて同士討ちさせる第一段階、そして拡大した被害者の怨念を肥大化させて生き残りへ放つ第二段階。

超位魔法としての恐るべき効果は、この第二段階に込められている。

完全耐性すら貫通する呪詛。レベル100のプレイヤーにすら通じる、HPとMP——さらにはステータスやレベルさえも蝕む、殺された仲間からのドス黒い悪意。生きている者への嫉妬、犠牲となった無念、助けてくれなかった恨み。加えて、ただ殺したくて堪らないという異常なほどの殺意。

これほどの呪詛を浴びては、流石の熾天使も地べたを舐めるしかない。

「馬鹿なっ！ この呪い——解けないだど?!」

「残念、時間経過でしか解けないタイプだ。まあプレイヤーの間では、一度殺してから復活させるのが定番の解呪法だけだな。解けるのを待っていたら数レベル分の経験値を持つていかれるのだから、早めに殺して僅かなロスで抑えよう、という計算だ」

『思ったより上手くいった』とご機嫌な魔王は、ユグドラシルでの解決法まで口にして、呪いに打ちのめされている天使たちへ判断を迫る。

無論、黙って見ているつもりはないが。

「ふざけるな！ この程度で私を抑えられると思うなよ。身体を蝕む呪いごときが何だというのだっ。魔法や特殊技術スキルが使え、武器を振るえるなら問題ない。さっさとお前を倒すだけだ、大魔王!」

「無駄よ！ 旦那様には指一本触れさせないわ!」

解呪せず、そのまま戦うのも一つの選択だろう。敵を数手で倒せるのなら、そちらを選ぶのも有りと言えは有りだ。

目の前にバカ硬いガチ坦克のアルベドが立ちはだかっついていなかったら、良い一手だったと言えなくもない。

「邪魔だ退けっ!」

「邪魔者は貴様よ！ 妻が夫の傍を離れるわけないでしょう!」

魔法武器の中でも最高傑作と称される神器級ゴツズ——その中でも課金アイテムを使って最上位に仕上げられたハルバード。熾天使が振り下ろす神の武器は、ガチ坦克であろうとも無視できない威力を持つ。

ギンツ!

容易く弾かれて、驚愕のあまり己のハルバードを見つめる。

鎧姿の女悪魔が持つ小さなメイスによって、いとも簡単に押し返されただけではなく、何の破損も与えられなかったのだ。

『そんな馬鹿なっ?』ともう一度、主から与えられた破格の武器を見る。

一撃で相手の武器を砕き、二撃目で鎧を裂き、三撃目で敵の命を屠る——とのフレーザーテキストが刻まれている、カンスト勢ですら欲しがる逸品だ。無論、文字通りの能力があるわけではないが、『まともを受けても無傷でいられる』なんて矮小な威力では決してない。

それなのに——。

「ふふふ、自慢のハルバードだったみたいだけど、この『真なる無』^{ギンヌンガガ}は壊せないわよ。もう一度試してみる?」

「ふざけるな! 何か特殊技術^{スキル}でも使ったのだろうか?! 次は無いぞつ!」

100レベルの戦闘系が真正面からぶつかりあう光景は、大魔王から見ても美しく、見事であった。攻撃しているのが熾天使だけだったり、アルベドはメイスで攻撃を捌いているだけだったりするものの、近くに寄るだけで斬撃の余波に巻き込まれてバラバラになりそうな暴風である。

コキュートスも、盾持ち天使ではなく熾天使と立ち合いたかったと思わずにはいられない。

「オオ、素晴らしキ剣技ダ」

「あれは課金系の戦闘AIだな。6番か13番に少し手を加えたモノだろう。ヘロヘロみたいな専門家がいれば、ワザと似せてプレイヤーを騙したりもするのだろうが、見たところ大幅な変更は無さそうだ。まあ、ハルバードのような長物は、使用するAIが限定されるからなあ」

「流石はモモンガ様。敵の動きを軽く見ただけで、その全てを看破されたんですね。まさに全世界を支配する至高なる御方の御慧眼! 感服いたしました」

第39話 「AI魔王」

瞳を輝かせるデミウルゴスの称賛を受けても、大魔王としては微妙に嬉しくない。なぜならNPCの挙動を看破した理由が、ユグドラシルでの膨大な戦闘経験によるものだからだ。幾度も戦い、勝利と敗退を繰り返し、悟やギルメンと共に対抗策を練ったあの日々。今では数手見ただけで、どんなAIを使用しているのが判る。

またプレイヤーに関しても似たようなものだ。ユグドラシルで用いられていた戦法は、たいてい頭に入っている。魔法や特殊技術の組み合わせ、チーム戦での『いろは』。ガチ勢が当たり前のように使うVPでの戦術など。骨の身に沁み込んでいるかのようだ。だからこそ、モモンガは面白くないと断じる。

ユグドラシルでの戦いは磨き上げられ昇華しているのだ。戦う前から結果が見える、予測がつく。実際の戦闘で工夫して、大勢が覆ることは殆どない。相手も同じように工夫しているからだ。

ワールドチャンピオンがいい例だろう。

一対一ではまず勝てない。ならばどうするか？ 答えは簡単だ。一対多になるようNPCを配置すればよい。相手の能力は把握しているのだから、勝てる陣営で挑めばいいのだ。勝利だけを求めるならばそれでよい。勝利だけ——ならば。

モモンガは異世界へ来た意味を考える。

“たち”のような強者と戦いたいだけならユグドラシルで十分だ。それに勝敗なら全敗で確定しているので今更だろう。いくつか試したい戦術や切り札はあるものの、それはもはや実験であり勝負ではない。命を懸けた本当の戦いを望むのであれば、相手はユグドラシル要素の少ない異世界人が適任だろう。

つまり未知である。自分の知らない未知の技、魔法。対処法など確立していない未体験の戦い。『武技』や『ワイルド・マジック始原の魔法』が該当するだろうか？ 初見殺しになりかねない、危険で面白い相手である。

「そろそろ閉幕といこうか」

大魔王の前で繰り広げられている天使と悪魔の斬り合いは、どうや

ら膠着状態に陥ったようだ。熾天使の一撃はアルベドの防御を突破できず、アルベドの稀に繰り出すバルデツシュによる反撃は大したダメージになっていない。魔力や特殊技術ススキルの使用回数もあと僅かであるため、単純な戦闘技術のぶつけ合いだけが続く。

双方共に膨大なHPを持つ100レベルだ。決着まで待っている
と日が暮れよう。

「セラフ・エイスファイア恒星天の熾天使よ、なにか逆転の一手はないのか？ 時間が経てば経つほど、超位の呪いがお前を蝕み弱くするぞ。現時点でも体が重いだろう？ 力の減衰を感じるだろう？ このままだと、少しずつ刻まれていく天使を見物するだけの観賞会だ。時間の無駄としか思えん」
「舐めるなよアンデッド！ 最後の一人となっても貴様らを打ち倒してみせる！」

「ああ、HPを消費しての奥の手か？ 今ならギリギリ2回使えるな。どうする？」

追い詰められた熾天使が何を使うかなんて、ユグドラシルでは常識だ。モモンガ自身も痛い目を見た経験から忘れるわけもない。当然のように相手のHP残量を把握し、奥の手の使用回数とタイミングを見定める。

「くそつ、そこまで知っているのか？ ……ならば、…それならばっ」

熾天使は一步引き、周囲へ視線を走らせる。

そこには仲間たちの——即時蘇生可能時間が過ぎて光の粒子となつていく、盾持ち天使や支援型天使たちの残骸が転がっていた。こ
うなればNPCである己に蘇生は不可能。『真なる竜王』との決戦で死亡した外征組と同じく、帰らぬ主が戻るまで無と成り果てるのだ。

「うおおおおお!! 人間！ それをよこせえ!!」
「なにっ？」

天使たちのはるか後方で、ギルド武器にしがみ付いて蹲っていた少年。その者に向かって熾天使は飛んだ。

まさかの敵前逃亡である。

背中を向けられたアルベドはもちろん、大魔王も呆気にとられる意外な一手だ。

今更装備も出来ないギルド武器を奪取したからといって、なにが変わろう？ ギルド拠点を防衛する者としては、確保したい最重要アイテムなのだろうが……。無駄としか思えない。

少年ンフィーレアのように全ての制約を取り払って使用可能とされない限り、熾天使にとっては奇妙な形の大剣型オブジェでしかないのだ。

——『敵意を確認。自動防衛システム作動。迎撃開始』——

ふいに響く、感情を伴わない警鐘。

それはンフィーレアが抱き付いている、枝分かれしていて鞘に入らないであろう大剣——ギルド武器から聞こえていた。

『目標、天使。——リアリティ：スラッシュ断』

微かな発光の後、次元を斬り裂く魔法の刃が放たれた。飛びかかってくる熾天使を左右に斬り分ける、真正面からのクリティカルコースである。

流星のセラフ・エイスファイア恒星天の熾天使でも手痛いダメージを負うだろう。HPの残量から判断すると即死には至らないかもしれないが、ギルド武器奪取の勢いは確実に削がれる。

「ぐぎぎいいい！ う、うでがあ!!」

「おお、あの間合いで頭部への直撃を避けたか。たいした反応速度だな」

「モモンガ様、あのギルド武器は危険かと。わたくしから離れないでいただけると嬉しいですよ」

「同意見です、と言いたいところですが、アルベドがモモンガ様から離れたくないだけではありませんか？ こんな状況で油断は止めてくださいよ」

「私が先陣ヲ切りマシヨウ。アノギルド武器、斬り裂イテ御覧ニ入レマス」

「お待ちをコキュートス殿、確かギルド武器の破壊は拠点の崩壊に繋がると……」

熾天使の左腕が斬り飛ぶ様子を後方から眺め、モモンガを始めとするナザリック勢は警戒を強める。

ギルド武器の自動迎撃システム。

ナザリックのギルド武器にも組み込まれている特別な防御機能だ。膨大なデータ量を保持できる特性を生かし、本来武器には入れられないはずのAIが入っているギルド武器。いわゆる「意思を持つ武器」である。

「ふふ、そうかそうか、浮遊都市のギルドは〈リアリティ・スラッシュ現断〉を選択したのか。『アインズ・ウール・ゴウン』では範囲攻撃タイプにすべきとの意見から見送っていたのだが……。間近で見ると悩むところだなあ。入れてもよかったかもしれないなあ」

「モモンガ様、あの小僧は如何いたしましたでしょうか？ ギルド武器を所持しているからか、〈支配の呪言〉に反応いたしませんか……」

「んん、そうだな。少し見物して——」

「おのれえ！ 〈大治癒^{レベル}〉！ この人間があつ！ 我らが主のギルド武器をつ!!」

「く、くるなあ！ この武器が欲しいなら、ま、魔王を倒して！ お願いだからっ！」

「黙れえええ!!」

涙目の少年ンフィーレアへ、再度熾天使が襲い掛かる。

多少疲弊しているとはいえ、流石はレベル100だ。失ったはずの左腕も回復しており、あと数回第十位階魔法を喰らっても、少年の首をもぎ取るには支障ないかと思われる。

『危険度上昇、防衛戦力召喚——』
『ガーディアン・オブ・ソード剣の守護者』、
『ガーディアン・オブ・シールド盾の守護者』』

少年の意志とは関係なく、ギルド武器は独自に判断を下す。迫りくる天使が、同じ拠点の味方かどうかも関係ない。持ち主に危険が及ぶのであれば、最適な判断で障害を排除するのだ。

「このっ、邪魔だあ！」

新たに召喚された二体の騎士らしき存在へ向けて、神器級のハルバードを横殴りに振るう。どうせ自身よりレベルの低い召喚モンス

ターだ。一撃で二体を上下に分断し、勢いのままに人間を潰す。

そして主のギルド武器を取り戻すのだ。今はそれしか頭がない。

『パライ！』『高速剣！』

「なにい!？」

姿が隠れるほどの巨大な盾を一部砕かれながらも、特殊技術で剣戟を弾き、その隙にもう一体が両手剣の斬撃を熾天使へ浴びせる。

息の合った連係だ。

盾持ちの騎士はダメージを負いながらも、『死ぬまで壁役を担う』とばかりに立ちはだかる。剣持ちの騎士は重い一撃よりも命中率を上げ、少しでも熾天使のHPを削るつもりのようなのだ。

最初から勝つつもりなどないのだろう。

どれだけ時間を稼げるか？ どれだけ足を引つ張れるのか？ そのためだけの捨て石なのだ。

『再度設定。 目標、天使。 —— へ重力 渦』

「ぐっ！ このっ！」

ある種のゴーレムの思考回路、かと思えるギルド武器の無感情な発言、そして魔法攻撃に、熾天使は自身を回復させながら立ち向かう。

「なめるなよ人間！ 身の程を知れ!! へ神炎」

なけなしの魔力を使い、矮小な人間を神の炎で包む。これは使用者のカルマ値が善に傾いているほど威力を発揮する第十位階魔法だ。本来なら魔王へぶち込む予定だったのに、虫けらよりも価値の無い人間ごときに使う羽目になろうとは……。ギルド武器を取り戻すためとはいえ、なんとも皮肉な話である。

「っ！ ——!」

悲鳴を上げる暇などない。人間の肉体など塵も残さず消え失せる。まるで魂さえ燃やし尽くすかのよう。

その場に残るのは、神の炎に炙られた奇妙な形の大剣のみ。数百年ぶりであるべき場所へと帰ってきた、浮遊都市の要にして替えのきかない至宝。

八欲王が遺した八武器の一つにして、最重要アイテム、ギルド武器である。

「む？ ギルド武器ごと攻撃したけど？ ギルドの守護者が？ 一撃程度で壊れはしないと理解していても、手出しは出来まいと思っただけののだが……。うむ、NPCの成長とは侮れないものだな」

「わたくしであれば躊躇なく、徹底的に破壊してみせますわ。モモンガ様」

「アルベド、論点が違っていますよ。それよりモモンガ様、"レア"である人間 "ンファイレア" が死亡してしまいました。如何いたしましょう？」

「デミウルゴスが人間の心配などをするわけではない。モモンガ様の"レア"であるから気をかけるだけだ。

「そうだな、あの小僧は下位の蘇生魔法でも一回だけなら耐えられたはずだ。あとで生き返らせておけ。それと、今回の記憶は消した方がいいな。繁殖作業に邪魔だろう」

「はっ、御命令のままに」

「ンファイレアには"生まれながらの異能"がある。人間種を強化する上でも此処で処分するにはもったいないと言えるだろう。

「ただ、蘇生を拒否する可能性も有ると言えば有るのだが、"エンリ"や"ネム"に心を残しているのなら、さほど気にする必要もないのかもしれない。

「モモンガ様、少しよろしいでしょうか？」

「どうした？ セバス」

「盾持ち天使を叩き潰した後、熾天使に警戒しながら前衛に立っていたセバスは、頭の奥に残っていた『気掛かり』について大魔王へ語る。「あの少年に協力した老婆ですが。私はそうと知らず、先日まで竜王国にて帯同しておりました。処分は私に御命じください」

「モモンガ様に反旗を翻していた老婆を、何も知らずに竜王国で鍛えていたとは、己の愚かさに殺気すら覚える。セバスの思考とは、このようなモノであろうか？」

「老婆か。一応"レア"な知識持ちだったから生かしておいたが、今となっては特に価値など無いなあ。とはいえ、処分する必要性も感じない」

「よろしいのですか？」

「ああ、今回のように私を楽しませてくれるのであれば、生かしておく価値もあろう。色々と暗躍して欲しいものだな」

裏で何かを企むのは、決して悪いことではない。

ユグドラシルでもサプライズイベントはあったし、「糞運営」とか叫んでいた悟も、どこか嬉しそうに無理難題へ挑んでいたものである。

だから老婆には期待しよう。

企みの果てに、大魔王を討伐するかもしれない——という可能性を信じて。

「あはは、あはははは!! やった! ついに主様のギルド武器をとり返したぞお!!」

鞘に収まらない奇妙な形状の大剣を抱きかかえて、熾天使は一人、数百年に及ぶ悲願達成に涙する。

ただ、その者の近くには誰も居ない。

守護を担っていた天使たちは皆地へ伏し、手先から光の粒子へ変換されようとしている。プレイヤーが残っていれば『復活のために消費する金貨がどれぐらいか?』と金策に頭を悩ませる状況だろう。ただし、浮遊都市の主たる「八欲王」は消滅し、マスターソースを操るものなど存在しない。

そう、誰も居ないのだ。

「これで、これで主様もお戻りになるに違いない。ギルド武器を玉座へ運べば——」

『装備者の死亡を確認。敵勢力による強奪を認識。妨害行為始動、――

――〈黒曜石の剣〉』

「なっ?!」

抱き締めていた剣から流れる無感情な敵意に対し、咄嗟に身をかわそうとしたところで背中に衝撃が走る。

ガーディアン・オブ・シールド ガーディアン・オブ・ソード
盾の守護者と剣の守護者だ。

召喚されたままの二体は、熾天使の無防備な背中へ盾ごと、そして

剣ごと突っ込み、多量の血を流させる。と同時に、ギルド武器が放った「意思を持ったかのような黒き剣」からの逃げ道を塞いだのだ。

丸太を叩き斬るような重い音が響くかと思いきや、思っていたより軽い裂傷音。

やけに生々しく、心臓の鼓動を感じ取れそうなほどドクドクと溢れ出る真っ赤な血流に、転がり落ちる天使の首。

ギルド武器はだらりと垂れ落ちる両腕から逃れ、フワフワと漂う。その傍には二体の騎士が寄り添い、未だ警戒態勢が解けていないことを示していた。

「たいしたものだな。装備者が殺されてからの反撃まで組み込んでいたのか。これなら相手も油断しているだろうし、嫌がらせには充分と言える」

大魔王が語るように、プレイヤーを殺したにも拘らずその装備品が反撃してきたら、どんな相手でも度肝を抜かれるに違いない。あの「ワールドチャンピオン」や「リアル軍師」以外なら手痛いダメージを負うはずだ。当然、魔王たる自分も例外ではない。

なお、ナザリックのギルド武器には装備者死亡後の反撃など組み入れてはいない。そんな無粋な真似は勇者に失礼というものだ。大魔王が倒されたなら世界は平和になる。余計な横やりは不要。『討伐されし大魔王、跡を濁さず』である。

「モモンガ様、アノ武器ハ如何ナサレマスカ？ 御命令イタダケレバ、即座ニ斬リ捨テテ御覧ニ入レマスガ」

「むう、どうするかな」

浮遊都市のギルド武器は、一日に一度しか使用できないと思われる高位魔法をいくつか使用している。召喚体もすでも顕現させているので、手の内はほぼ晒していると見えよう。これならコキュートス単独でも撃破は可能かと思われるが……。

「装備者が死亡しているのだから、すぐに警戒態勢は解かれるだろう。とはいえ、このまま待っているだけ、というのも芸がない。……パンドラ」

「はっ、御傍に」

「あのギルド武器を破壊すると、どうなる？」

魔王は骨の人差し指を真つ直ぐ伸ばし、持ち主の居ない——ユラユラと浮かぶ大剣を指し示す。

「はい、ギルド武器が破壊されたならば、この浮遊都市は拠点としての機能を失い、NPC制御・自動修復・マスターソース管理などが消滅します。宝物殿もシステムから放り出されることでしょう。加えて、浮遊がギルド拠点として後付のモノであるなら、落下すると思われるます」

「そうか、最初から浮遊していたならギルドの拠点システムが無くなるだけで、浮遊島自体はそのまま——いや、それはユグドラシルの場合だな。この世界でも通用するかどうか……。検証するにしてもやり直しがきかんしなあ」

『なんとなく落下するような気がする』とモモンガは、どんな原理で浮いているのか解らない浮遊都市の処遇に頭を悩ませる。

別に浮遊都市自体が崩壊消滅しようが知ったことではない。ユグドラシルでも数多のギルド拠点を潰してきたのだから、気にするほどのことでもない。ただ、異世界におけるギルド拠点は貴重だ。見物してみたいし、色々実験に使ってみたい。持っていていけるなら、ナザリツクの上空にまで運びたいと思っている。

「マスターソースを起動し活用するには、やはりギルド武器を装備し、ギルドマスターとして認識してもらおう必要があるな。だが、タレントで装備してもマスターにはなれなかった。うゝむ、ギルドの乗っ取りは無理そうだなあ」

大魔王が浮遊都市へ足を運んだ本当の理由。それは“レア”の間を使って、ギルドを乗っ取れないか？ という試みのためであった。

生まれながらの異能でギルド武器を装備できるなら、玉座まで赴き、マスターソースを起動できるだろうと。そうなればギルマス権限を行使できるのではないかと、そう考えていたのだ。

「仕方ない、ちよつと面倒だが……。コキュートス、ギルド武器を破壊せずに無力化せよ。出来るか？」

「ハッ！ 才任せクダサイ、モモンガ様！」

ズシリと、重量感のある一步を蟲王が踏み出す。

相對するギルド武器は敵意を感じ取ったのであろう——召喚した二体の騎士を並べ、臨戦態勢だ。

「先程ノ戦イハ見セテモラツタ。天使カラ手痛イ一撃ヲ浴ビタコトモ知ツテイル。ナラバ、今コソ全テノカヲ出ス時ダ！ 出シ惜シミナドスレバ、勝負ハ一瞬ダゾ！」

『敵意を確認。迎撃開始』

襲いかかる蟲王の前に盾ガーディアン・オブ・シールドの守護者が立ちはだかり、その背後に劍ガーディアン・オブ・ソードの守護者が潜む。

熾天使を相手にした時の連携だ。大盾でコキュートスの一撃を防ぎ、その隙に斬撃を浴びせる。それで怯んだなら、追撃としてギルド武器から攻撃魔法が飛んでくるのだろう。初見の相手には、それなりに有効で堅実かと思われる。

初見であれば、だが。

「同じ手ハ通用シナイ！」

盾騎士に軽く攻撃を当て、次に飛び出してくるであろう劍騎士へ、全力で振り下ろす。『来る』と判っていれば実に簡単な作業だ。

劍ガーディアン・オブ・ソードの守護者は完璧なタイミングで頭上から斬り裂かれ、左右に分割。返す刀で刻まれた盾ガーディアン・オブ・シールドの守護者は、膝を落としながらもコキュートスへボロボロの盾を向ける。

『危険度上昇、——〈朱の新星〉』

「ヌウ、ヘフロスト・オーラ！」

強大な魔力の高まりを感じ、それが紅蓮の炎に姿を変えて己に向かってくるかと察すれば、すかさず冷気を全力で噴出させて相殺を目論む。

火属性に対し、冷気属性をぶつけるのは基本中の基本だ。完全相殺が不可能であったとしても、ある程度の軽減は期待できよう。ギルド武器が用いる魔法には〈最強化〉などが付加されていないので、ガチ勢のプレイヤーほど警戒する必要はない。

ただ、流石に炎系の対個人攻撃魔法として最高位を誇るだけのこと

はある。

冷気のオーラを突き破り、コキユートスの鎧とも言える外皮を醜く爛れさせる火力。見た目ほどダメージは無さそうだが、かすり傷とは言えそうにない。

『守護天使召喚——〈門番の智

「サセヌ！ 〈風斬〉！」

召喚陣が形成される寸前、コキユートスから遠距離用の戦士系特殊技術が複数放たれる。

一つはギルド武器を激しく打ち弾き、城の門壁へ衝突させ、もう一つは動きが止まっていた盾の守護者の首を盾ごと斬り裂いた。

「手加減スキル発動！ 〈フロスト・バーン〉！」

コキユートスがよく用いる冷気属性の斬撃は、神器級武器「斬神刀皇」のふざけた威力だけではなく、冷気による追加ダメージ、そして移動障害の状態異常など、ガチ勢でも手を焼きそうな凶悪さである。ただ手加減スキルを発動させておけば、相手のHPを必ず1だけ残すことが可能だ。

無論、標的がギルド武器でも同じことである。

『——被害甚大、——戦闘継続不可能、——機能を停止する』

まるで脳震盪でも起こしたかのようにフラフラと漂い、しばらくしてギルド武器はその動きを止めた。

地上から少しだけ浮き上がり、持ち手を上に、刀身を下に。

まるで誰かに所持して欲しいかのように。

「モモンガ様。御命令通りニ、ギルド武器ヲ無力化イタシマシタ」

「よくやったコキユートス。これでようやく、拠点の見物ができるな」
部下の働きに満足げな表情——骸骨だが——を見せつつ、モモンガは輝きを失ったギルド武器をアイテムボックスの中へ放り込む。

もはや役には立たないだろう。

生まれながらの異能持ちの人間が死亡している今、装備できる者はいないので表に出していても無駄なだけだ。『何かの拍子で壊れる』という可能性を考慮すると、異空間に収納しておいた方が安全だと言える。

第40話 「落城魔王」

「ではハンゾウたち、行くがよい」

パチリと骨指を鳴らした魔王に呼応し、二十数体にも及ぶ忍者型モンスター「ハンゾウ」・「カシンコジ」・「フウマ」が姿を見せる。今の今まで、戦闘には一切関与させてもらえなかった護衛たちだ。天使が放つ神聖属性魔法をモモンガ様が喰らっているというのに、他の守護者が盾持ち天使たちに足止めを受けているというのに……。眺めることしかできなかった憐れな存在だ。

主の命令故に仕方ないとは言え、カルマが中立で高レベルのハンゾウたちは天使にとって有効な傭兵モンスターである。だからこそ、使い捨てであろうとも戦闘へ投入して欲しかったと思わずにはいられない。

「城の奥を探れ。それと、面白そうなアイテムがあれば念話で知らせろ」

「はっ、かしこまりました、モモンガ様」

気合が入り過ぎているのを悟られぬよう冷静に答え、ハンゾウたちは消えるように散った。

目指すは浮遊都市の中枢である城の最深部、ギルド拠点の中心とも言える玉座。そして「レアアイテム」である。

「そちらはどうだ？ パンドラ。皆の回復状況に問題はないか？」

「はい、特殊な状態異常を受けることもなく、あとは自己治療で賄えるかと。想定していたよりダメージ管理が上手く働きました。神聖属性の耐性防御をしつかり整えていた御蔭でありましょう」

属性防御はプレイヤー戦でも重要な項目の一つだ。弱点の多い異形種であるならば、決して目を逸らしてはいけない。ましてやモモンガはアンデッドだ。対策をしても貫通ダメージを受けるのだから、無対策なんてことはありえない。カルマ値の特攻ボーナスも含めたら、天使相手に即死だって考慮する必要があるだろう。

「ふむ、初のチーム戦としては悪くなかったかな。皆、よくやった」大魔王は片手を上げ、歓喜に身を震わせる守護者たちへ労いの言葉をか

ける。相手が経験の浅いNPCであったとは言え、拠点防衛を担う守護者であったのだ。それを撃破したのなら、働きとしては十分だろう。地上都市へ攻撃を仕掛けている別動隊も含め、何か褒美をとらせたいところである。

「さてハンゾウからの念話ができるまで、アウラたちの状況でも確認しておくか」

巨大な城の探索には時間がかかろう、とモモンガは〈メッセージ〉を起動させ、迎撃に出てきた天使たちを追い回している闇妖精ダークエルフの双子を呼び出すが……。

『モモンガさまあ〜！ まだ仕留め切れていないんです。ごめんなさいー！』

「ほうっ？」

アウラとマーレの部隊は、それだけで世界を滅ぼせるほどに強力だ。相手がプレイヤーであったとしても後れをとるとは思えない。

「手強い相手でもいたのか？」

『あの、え〜っと、強いわけではないんですけど、すっごく速いんです。指揮官らしき二体の天使がマーレのドラゴンでも追い付けないほど逃げ回っていて、あたしの弓でも致命傷には至りません』

アウラの弓でも駄目、となると相当な速さだ。恐らく、アインズ・ウール・ゴウンに所属していた速き特化の変態並みに、ステータスを偏らせているのだろう。飛行可能な天使系と相性の良いビルドだから驚きはしないが、ギルド拠点の防衛には向かない気がする。

「全ての攻撃を躲せばどうということはない」なんて変態忍者みたいなヤツが侵入者を迎え撃つてどうするのだろうか？ それでは自慢の速度を生かせないだろう。だとするならアウラとマーレが追い回している天使は、防衛というより斥候・偵察用NPCに違いない。

竜王との決戦に置いていかれた理由が解りそうなものだ。

「むう、シャルティアなら追いつけるか？ いや、追い付けなくとも攻撃範囲まで近付ければ倒せそうだが……。いやそれより、ツアーに協力させたほうが面白いか？ 拠点NPCが持ち場を放棄するとも思えんが。むむむ」

『モモンガさま?』

「ああ、すまないアウラ。その天使は放っておけ。無理に倒さず、監視だけに留めよ。私たちは今から浮遊都市の城内を見回ってくる。何かあれば知らせよ」

『はい、かしこまりました、モモンガ様!』

逃げ回る蠅に興味など無い。有効活用する必要も感じなかった。

唯一価値がありそうなのは経験値だが、それだけのために憐れな天使を追い回すなど魔王の所業ではない気がする。

魔王は挑戦を受ける側だ。勇者を待つ立場であり、“散歩”だ。“遠足”だと言って出歩く存在ではない——と、浮遊都市まで“旅行”に来ておきながら、勝手な理論を展開する魔王様であった。

「モモンガ様、ただ今戻りました」

「ハンゾウか、早かったな。……それで? 城内の構造は把握できたか?」

「はい、この城は五つの層で構成されており。各層は城の中とは思えぬ広さで、全体像は未だに掴めておりません。ですが、第五層の玉座までなら問題なく。次の層へ進むための大扉——“転移門”は魔力さえ注ぎ込めば起動しますし、トラップの類も停止しております」

大魔王の前に跪くは三体の忍者。その全員が“ハンゾウ”と呼ばれる傭兵モンスターである。

「流石に大手ギルドだな。課金拡張も廃人レベルだろう。とはいえ、プレイヤーの居ない拠点は憐れなものだ。各層はナザリツクと同じく別次元で展開しており、『壁を壊して次の層』なんて不可能だから“転移門”での移動が一般的。だから、その大扉をNPCやデストラップ即死罠の組み合わせで護るのだが……。金貨枯渇でNPCはいない、トラップ罠も動かない」

魔王は紅く輝く瞳で浮遊都市の中心たる城を眺め、軽く息らしきモノを吐く。

「ユグドラシルの終焉時期を思い出すな。ここと同じような拠点がいくつも存在していたものだ。NPCをそのままにして放置、動けなく

なるまで命令を守らせて、死んでも誰一人気にしない。人員や物資の無駄使いだな。ギルドを解散させるなり、誰かへ譲渡するなり出来ただろうに……」

「モモンガ様？ なにか御不快なことでも？」

不意に頭をもたげ始めた魔王の怒りは、誰に対するものだったのか？ 問い掛けてきたアルベドには解らない。ただ、夫の怒りは妻の怒りでもある。旦那様を不快にさせた何者かに、それ相応の罰を与えるのは確定事項なのだ。

「ん？ ああ、少し昔のことを思い出してただけだ」

魔王にとって配下の僕たちは駒であり、勇者に倒されるのを遥か後方から眺めるだけの存在だ。千五百人のプレイヤーに攻め込まれた時も、復活の資金がいくら必要になるかと勘定していた記憶しかない。悟は何やら感情的になっていた気もするが……。

モモンガが今回気にしていた点——それは僕の安否しもへでも金貨の消費具合でもなく、敗者の痕跡である。いずれ己が辿るであろう魔王討伐、殺された後の光景についてだ。

「八欲王とやらの散りザマはあまり参考にならないな。今まで集めた情報からすると、八人のプレイヤーは仲間割れの最中に強襲され、NPCを率いた最終決戦でも竜王たちに敗走。相手の頭目は潰したものの、自身は過度のレベルダウンで対抗できず、そのまま押し切られて消滅。拠点は何百年も無様な姿を晒し、結局我らに侵略される有様とは」大魔王は来たるべき勇者との決戦、そして敗北に至る上での理想とする結末を夢想する。

「やはり華々しく散りたいものだな。魔王は分かり易く討伐された方がよい。雨雲が去って晴天となるように。拠点などが残って悪さをするのもイマイチだ。後々の復活に関する伏線として残るのはいいが、その場合は地下深くに潜伏するべきだろう。生き残った生物が、長過ぎる平和によって墮落するまで」

大事なのは散り際だ。世界を滅ぼす大魔王として、相応しい最後を飾らねばならない。

大魔王は朽ちるのを待っただけとなった浮遊都市の居城を眺めなが

ら、『八欲王と同じ轍は踏むまい』との決意を固めていた。

「モモンガ様、そのような……、そのようなことをおっしゃらないでください」

「む？ どうしたアルベド？ セバスにデミウルゴスも？ 皆どうした？」

震える声音に誘われて振り返れば、守護者の誰もが大粒の涙をこぼしていた。流石の大魔王でも心配になるほどの号泣ぶりである。何かの状態異常なのか、と疑いたくなるほどだ。

「我ラ守護者ガ不甲斐ナイバカリニ」

「私が失態を犯さなければ……」

「最も傍にお仕えしていながら、私はなんと愚かな」

「うおお、ちちうえええ、散るなどとおお、そのようなことはああ」

あまりの醜態にちよつと引き気味になる魔王様であったが、そもそも己の言動が原因なのだから他人事にするのはちよつと可哀想だ。

『大魔王の最後に関する演出』なんてモノは「悟」とだけの秘め事である。

それをNPCに聞かせれば不具合も起きよう。

「ふはは、これはウツカリしていた」取るに足らぬ些事であるかのように笑い飛ばし、深刻な空気を纏う守護者たちに前を向かせる。

「すまなかつたな、お前たち。これは私の趣味みたいなものだから、それほど真剣に捉える必要はないぞ。大魔王というものはどんな世界に在ろうとも、己の退場シーンに拘るものなのだ。アクターなら解るだろう？」

「そ、それは確かに……。とはいえ、あまり拘ってほしくはない趣味で御座います」

パンドラにしてみれば、自分の父親が『あれやこれや』と殺され方について吟味しているようなものなのだ。悪趣味と言わざるを得ない。

「現実には起こり得ない事象だからこそ、自由に想像できる楽しみがある——ということなのでしょう？ ですが、妻としては気が気ではありません。愛する夫の身に何かあってはと……」

スーツアーマーのまままでクネクネしているアルベド——はちよつと不気味だなあ、と軽く流し、モモンガは『何も気にすることはない』とばかりに悠然と歩を進めては、放置状態であったハンゾウたちの前を通り過ぎる。

「では、ギルド拠点の見物へ行くとしよう。ハンゾウよ、玉座までの道案内を頼むぞ」

「はっ、かしこまりました」

耳にしてよい話だったのかと軽く戸惑いながらも、三体のハンゾウは大魔王様を先導する位置へと瞬時に移動し、城へ入るための最初の大扉を潜る。

静かな、とても静かな空間が魔王一行を出迎えていた。

人気はなく、魔力の稼働もなく、カラクリも動いてはいない。空虚であり、生活感など微塵も無い無機質な空間。まるで存在しない神なごぞを奉る神殿であるかのように、神聖にして不快な城のエントランスホールであった。

「この辺りは掃除が行き届いているようだな。己の主を出迎えるためか？ そんな人員を動かす余裕などなかったであろうに」

静かな空間にモモンガの眩きが響く。

実に数百年ぶりとなるプレイヤーの声だ。本来であれば浮遊都市の全NPCでもって歓迎すべき状況なのだが……。巨人族でさえも通れそうな巨大な通路には、ただの一人も拠点守護者の姿はなかった。

「モモンガ様、次の転移門はこちらです」

「うむ」

幾つもあるダミーの大扉を素通りし、ハンゾウが調べたであろう次階層への侵入口へ歩を進める。

居城階層の次は広大な訓練施設、その次は兵器の研究所をデザインしたかのような階層。さらに進むと、地下牢獄のような場所へ出た。薄暗く、邪教集団が生贄でも捧げていそうな血生臭い造り込みだ。浮遊都市の外観と正反対の様相であるのは、城の暗部を表現しようとしたのかもしれない。誰かの趣味である可能性も有るが……。

「次が玉座の階層か」

「はっ、十二の部屋を抜けた先が玉座の間となっております」

モモンガの踏み出した足は、上質な絨毯を踏みしめていた。周囲を見渡せば、最初の居城階層へ戻ってきたかのような感覚を覚える。ところどころに騎士の鎧などが飾っており、美しい女性の肖像画なども魔王一行を出迎えてくれる。

だが、よく見ればどれもトラップだ。それもレベル100のプレイヤーを打ち滅ぼせるほどの強力なモノである。全盛期の浮遊都市が、どれほどの防衛能力を所持していたのかが伺える光景だ。こんなトラップ部屋が全部で十二もあるのだから、侵攻してきたプレイヤーは大変だっただろう。もちろん、消費される金貨の量にも寒気が走る。アンデッドだけだ。

「ん？　ここが玉座の間……、最終地点か？」

「はい、モモンガ様。この部屋から奥へ繋がるような隠し通路などは、発見出来ておりません」

ハンゾウたちが勢揃いで出迎えてくれたのだからそうだとは思っただが、どうにもナザリックとはイメージが異なる。

一言で言えば、SFだ。

まるで宇宙船のブリッジであるかのように未来的なデザインで、壁面や柱、照明に天井など、全てが曲線を描いている。

玉座に至っても同様だ。

中世的な雰囲気はどこにもなく、未知の鉱物で作られた——レース場を高速で走る特殊な車の座席を思い起こさせる。

だけど、それが八席もあるのはどういうわけか？　浮遊都市の王は、ギルドマスターは八人いるとも言いたいのだろうか？　モモンガは他者に対し『センスがどうのここの』と言える立場ではないが、久しぶりに遭遇したプレイヤーの感性には戸惑いしか覚えなかった。

「やれやれ、老婆の記憶が一部曖昧だったのは理解が及ばなかったせいか。まあ、プレイヤーの趣味を理解出来る方が異常とも言えるのだから仕方がないが、それより……」

大魔王は気を取り直して、玉座の間へ赴いた本来の目的を探す。

目指すは、ハンゾウからの念話でも伝えられていた一冊の本だ。

老婆リグリットの記憶から辿り着いた八欲王の持つ秘宝。浮遊都市の最奥に安置された世界に匹敵するアイテム。この世界に第十位階までの魔法が存在することの根拠となった、何人たりとも持ち出せない魔法の書物である。

「アレがそうなのですか？ モモンガ様」

「アルベド、不用意に触るなよ。トラップが稼働しているようだ」

アルベドが見つめる先、一番奥にある玉座の横、小さなテーブルに百科事典並みの書物が開いたまま置かれていた。

「おお、これが『例の』ですか？ モモンガ様」

「そうだな、デミウルゴスに渡している世界級アイテムと同格のモノだ。私も実物を見るのは初めてなのだがな」

悪魔と魔王が眺める先で、魔法の書物はひらりひらりと勝手にページをめくっていた。まるで意思を持つかのように。

「ムム？ モモンガ様、開イタ頁二何ヤラ文字ガ浮カビ上ガツテイルヨウデス」

「噂では、世界中で使われているありとあらゆる魔法を記載するらしい。新しく開発された魔法でもおかまいなく、だそうだ」

書物の名は『無銘なる呪文書』。

何故かは知らないが、八欲王が仲間割れの最中にも、真なる竜王との決戦にも持ち出さなかった、ギルド武器よりも価値のあるぶっ壊れアイテムである。

「それでどうだ？ パンドラ。トラップは解除できそうか？」

「はっ、今しばらくお待ちください。費用不足のためか、かなり限定的な発動条件になっているものの、即死トラップです。呪文書をテーブルから持ち上げると、黒こげになります」

「チグリリス・ユーフラテス」に変身したパンドラの言に、緊張が走る。

流星に世界級アイテムともなると、ある程度の対策はとられているようだ。他のトラップ同様金貨枯渇で停止しているかもしれないと軽く考えていたが、浮遊都市における金貨供給優先度はNPCよりも

上であり、最後の最後まで止まらない設定であるらしい。

とはいえ、肝心のプレイヤーが消滅しているのでは何の意味も無い。無駄に金貨を浪費するだけだ。マスターソースを開けるならば、さっさと停止させるべきだろう。そうすれば、他の分野に金貨を流用できたであろうに。

「ふむ、手っ取り早いのはギルド武器を破壊して、拠点の機能を喪失させることだが……」

魔王はボロボロの大剣を取り出して、しばし迷う。

そう、迷ったのは『しばし』だ。

直後に大魔王様は「残しておく価値もないか。このままだと宝物殿にも入れんしな。ギルド拠点の乗っ取りは諦めよう」と呟き、あっけなく八欲王の残した秘宝、浮遊都市のギルド武器、幾重にも枝分かれしている奇妙な大剣を――握りつぶした。

「さて、どうなる？」

あっけなく砕け散った大剣の破片をパンパンと払い、モモンガは周囲を見渡す。

ユグドラシルではギルドの崩壊など飽きるほど見てきたわけだが、異世界では初めての経験だ。どんなアクセシビリティがあるのかと、少しだけワクワクする。

「父上、トラップの機能が停止しました。周囲に満ちていた魔力も、希薄になっているようです」

「ああ、拠点の自動修復機能も消滅したようだな。これで浮遊都市はただのダンジョンだ。気になるのは、浮遊状態が継続されるのかどうかだが……」

少し薄暗くなった玉座の間で、魔王一行は経過を見守る。

浮遊都市がギルド拠点でなくなり、元のダンジョンに戻ったとすると、管轄権は運営の手に渡るのがユグドラシルでの常識だ。運営が破損箇所を補修し、モンスターを配置し、ボスを選定する。次の挑戦者がくるまで、『拠点にできるダンジョンの一つ』としてマップに残されるわけだ。

しかしながら、異世界では誰も管理しないし出来ない。

元のダンジョンに戻っても、プレイヤーが弄った設定や物品はそのままだし、アチコチ壊れたままだ。余所からモンスターがやってきて罅にする可能性はあるだろうが、プレイヤーはどのようなだろう？ 攻略しても再度ギルド拠点にできるのだろうか？

「理屈は解らんが、落ちる気配はなさそう——いや、この階層は外と繋がっていない設定だったか？ だとすると、外から見たほうが早いな。〈伝言メッセージ〉、シャルティア、聞こえるか？」

『はい、モモンガ様！ 敵でありんすか?! ならば今すぐ御傍につき！』
「待て待て、少し聴きたいことがあるだけだ。シャルティアから見て浮遊都市はどうなっている？ 変化はあるか？」

『お待ちしていたでありんす！』とばかりに突っ込んできそうな吸血娘を押し留め、大魔王は外からの情報を求める。

『は、はい。え、島自体はモモンガ様がお入りになられた時と変わらないように見えんすが、邪魔な魔法障壁はいつの間にならなくなってしまいった。敵の姿などは皆無でありんすえ』

「そうか、ではそのまま周囲の警戒を頼む」

『かしこまりんした、モモンガ様！』

寂しげな感情が見え隠れするシャルティアの返事を軽く流し、モモンガは改めて元ギルド拠点であったダンジョンの最奥、玉座の間を眺める。

「ギルドのシステムから外れた『浮いている島』か。もしかすると、運べたりするのか？」

浮いている原理は不明だし、この場に固定されている可能性も否定できないが、黒山羊の触手が届く高さなのだから五体で協力すればナザリックまで動かせる気がする。

毎回〈転移ゲート〉を展開させるのは面倒だし、実験や研究に使うのなら傍に置いておいた方が何かと便利だろう。

「やってみるか、っとその前に。パンドラ、ネームレス・スベルブツク『無銘なる呪文書』を確保し、少し調べておけ。ハンゾウ、宝物殿への入り口は——ああ、玉座の後ろに出現するのはユグドラシルと変わらんのか。掘り出し物があるかもしれんから後で覗くとしよう」モモンガは戦利品の扱いを整

理すると、未だ残っているであろう敵の状況を確認する。

「へ伝言^{メッセージ}」。アウラ、逃げ回っている天使はどうなった？ ギルドを消滅させたのだから、何かしらの変化が見られると思うのだが」

『はい、モモンガ様。その天使なら、ちようど今捕まえました！ よく分かりませんが、急に逃げるのを止めてフラフラしはじめたんです。小声で「捨てられた」とか「もう終わり」とか呟いていますし、なんか変ですよ、この天使たち』

彼の者らは必死に己の役目を果たしていたのだろう。何百という化け物たちに追いかけられ全身に矢を浴びながらも、主から任された拠点を護ろうと命を懸けていたに違いない。

されど繋がりには絶たれた。

NPCが生涯一度しか経験し得ない、ギルド拠点の崩壊。数多の存在がゴミ箱へと捨てられる瞬間だ。

「ああ、今は己の存在意義を探しているところなのだろうなあ。主は居ない、所属すべき場所もない。良くも悪くも完全に自由なNPCというわけだ。放置すれば何百年後かに「魔神」となって暴れるのかもな」

『暴れるのですか？ でしたら殺しましょうか？』

幼さが残るアウラは、屈託なく答える。自分と同じ立場であった守護者の、憐れとも思える末路に対して。

「そうだな……」大魔王は『ゴミを処分しておけ』とでも言うかのように、確保した天使の処分を命じた。

色々と利用方法を思考したのは当然であるが、呆然自失となったNPCなど扱うのも一苦労だ。ツアーに預けても役に立つとは思えない。ナザリックのために活用するにしても、なまじ高レベルな分だけ面倒だ。それに放置しておけば暴れ出す粗悪品など、殺してその経験値をマーレの持つ「強欲」に吸わせる方がまだマシだろう。

「さて次は宝物殿へ——」

八欲王のギルド拠点が崩壊し、あとに残された浮遊都市の持つ最後の価値。それが宝物殿だ。ギルドシステムから外れた宝物殿は、誰でも入れるダンジョンの一区画となって玉座の裏に接続される。

昔から宝物殿への入り口は玉座裏の隠し階段がお約束、らしいのだ。

運営の考えることはよく解らない。

だけど宝があることには違いないので、大魔王もレアを期待してしまおう。

八欲王が「真なる竜王」との決戦で数多のアイテムを消費しているだろうから、残っているモノに大した価値は無い、なんて冷静な視点はこの際無視でいい。

宝物殿という場所は、入るだけでも楽しいのだ。

潰したギルド拠点の宝物殿へ、「悟」と共に踏み入ったあの感動は今でも忘れない。敵対プレイヤーの阿鼻叫喚が感じられる最高の瞬間であった。

「——ん？ どうした、ニグレド？」

ふいに響くは、ナザリックの周辺監視を担っていた高位の魔法詠唱者マジック・キャスターにして守護者統括アルベドの姉、「ニグレド」のメッセージ〈伝言〉だ。

その声色からは、ただならぬ事態の急変を嗅ぎ取れてしまう。

『モモンガ様！ すぐにナザリックへ帰還してください！ 敵です！』

あの勇者が部隊を率いて現れました！ 例のドラゴン、勇者ツアーです!!』

「なん——だとっ?」

第41話 「解散魔王」

思考の乱れは一瞬。続いて湧き上がってきたのは歓喜だ。

「ようやくきたか」と骨だけの口元がほころぶ。

待ちに待っていた勇者との再戦なのだ。率いてきた部隊、勇者軍がどの程度のものなのかと、今から期待が高まる。

「ふははは、良い報せだぞ、ニグレド。早速ナザリックへ戻って、歓迎の準備をするでしょう。アルベド、全部隊を帰還させろ。デミウルゴス、ナザリックへ戻ったらトラップを全て起動だ。警戒態勢は最上級。詳しい話は後で行う、ゆくぞ！」

「「「はっ!!」「「ハッ！」」

疑問の声を上げる者など居ない。

モモンガ様の命令は全てにおいて優先されるのだ。そう、己の命よりも。

アルベドは即座にシャルティアと連絡を取り、外に展開している部隊の集合と〈転移門〉の使用を要請。

デミウルゴスは他の守護者と共にモモンガ様へ付き従い、主が広げた転移門を通じて一足先にナザリックへと帰還した。

己の命を懸けてでも勇者軍を撃滅せんとする、悲壮な覚悟を持つて。

「オーレオール、現状の説明を頼む」

玉座の間にて、大魔王から声をかけられた一人の女性。

第八階層の桜花聖域から動かないはずの領域守護者、長い黒髪と閉じたままの瞳、巫女服姿の人間で不老不死、プレイアデスリーダーにして末妹、レベル100の指揮官系特化型NPCであり拠点では転移門の監視に従事、その名は「オーレオール・オメガ」。

預けられていた本物のギルド武器を持参し、数多の僕と共に、玉座へ座るモモンガ様の前へ跪いていた。

「はい、つい先ほど『真なる竜王』にして『勇者』、『ツァインドルク

スルヴァイション”がナザリツクの南西二十キロ地点に現れました。その者の傍には複数のドラゴン、亜人に異形種などが集まっており、現時点においてもその数は増える一方です」

「ふふふ、面白くなってきたな」モモンガは預けていた、七匹の蛇ルが絡み合う黄金の杖器を受け取りながら、期待に答えてくれたツアーへ称賛の笑みを送る。

「それで、ツアー以外に面白そうな奴はいたか？」

「はい、それに関しましては、ニグレド様から御報告を」

「モモンガ様、まずはこちらの〈水晶クリスタル・モニターの画面〉を御覧ください」

顔面の皮がない長い黒髪の女性——ニグレドが宙に浮かべる巨大な画面には、「異形種動物園」とでもいうかのような化け物たちの共演が映し出されていた。

「数刻前より集まりだした勇者軍のレベルは極めて高く、私の探査を弾く者もおります。真なる竜王”クラスは勇者ツアーを含め四体、

”竜王”クラスは合流しているモノだけでも七十を超えています。他にはユグドラシルの装備を着込んだ森妖精エルフや山小人ドワーフ、巨人にミノタウロス、粘体生物に大型の蟲など。意外なところでは、アンデッドの集団がおりました」

「ほう、ツアーの奴、アンデッドの私を倒すためにアンデッドを連れてきたのか。皮肉が利いているな」

「モモンガ様、姿を見せたアンデッドはいずれも実力者です。おそろくナイトトリツチかと」

ニグレドが探知したアンデッドは、この世界の裏側を代表する化け物たちだ。ツアーが光の当たる表側の正義的存在なら、ナイトトリツチの集団が所属している『深淵なる軀』は闇に満ちた裏側の悪役的敵対者だ。

加えて、大陸を代表するようなドラゴンや巨神人タイタン、黒い影だけのナイトトリツチなどが『我こそが魔王である』との風格を漂わせて、勇者部隊から少し離れた場所で陣取っている。

その様子からは、竜王の説得に応じて駆け付けたとはとても思えない。何かの取引により、一時的な協力関係になっているだけであるか

のようだ。

その証拠に、強力なナイトリッチの一人「ズーラーノーン」は、他者と歩調を合わせることなく、はるか上空からナザリックを眺めるばかり。己の存在を次の高みへ押し上げるため、魔王とやらを利用したいのだろう。彼は勇者ツアーから話を聞いた瞬間から魔王に興味津々であり、自らの組織を放り出してこの場へ来たのだ。

部下たちは置いてきた。時間稼ぎにもならない雑魚だから。辺りを見渡せば解る。これから起こる戦争に、常識は通用しないのだと。「ふむ、素晴らしい陣営である、と言いたいところだが。ニグレド、他にはないのか？ いるだろ？ 厄介な奴らが」

「はい、問題である。『世界級アイテム』は、三つ確認されました。ナイトリッチが持つ『植物の種』と女王らしきエルフが抱える『黄金の天秤』、そしてゴブリンが無造作に振り回している『木の枝』です」

「『世界樹の種』と、エルフの天秤は『ギャラルホルン』か？ それと最後の枝は知らんなあ。『世界意思』ではなさそうだが……。いやそれより、プレイヤーはいないのか？」

「モモンガ様、現在プレイヤーの存在は感知できておりません。『世界級アイテム』所持者の中にもカンスト勢は皆無。ですが、隠れている可能性は高いかと」

プレイヤーの存在。

戦争において、レベル100のプレイヤーが居ると居ないでは大きな差がある。故に勇者部隊の中にプレイヤーが居ないなどとはとても思えない。世界中から強者を集めたのなら、漏れるはずがないのだ。だから隠れていると期待したいところではあるが、『世界級アイテム』を現地勢に渡している時点で疑問符が付く。

『世界級アイテム』は、その存在を秘匿できないほど強大で目立つ。そしてその価値は絶大。チーム内ならば、最強の者が持つべき至宝である。

ならばプレイヤーが持つべきであろう。弱いヤツに持たせてどうする？ PKされて盗られてもしたらどうするのだ！ と魔王様は声を大にして言いたくなる。

「ツアーに直接聞きたいところだな。でもまあ、今は勇者が集まるのを待つとするか」

「モモンガ様、先制攻撃は行わないのですか？ 姉の集めた情報からすれば、勇者軍の集結は不十分かと。今なら戦力が分散しているところを襲撃できますわ」

相手が万全の状態を整える前に一撃を加える。アルベドが提示する奇襲攻撃は、戦争において当然の行動であろう。敵が集まるまで待つなんて、軍事演習でもしているのかと。

「ふふ、せっかく集まってくれというのに、それを襲撃してどうするのだ？ この世界の最高戦力だぞ。減らすなどもつたいない」
〈水晶の画面〉から目を離さないでいるモモンガは、大量の「レア」を見つけたかのように御満悦だ。もう心はずでに、最終戦争を夢想しているのかもしれない。

「ああそれと、ツアーは我々をおびき出そうとしているのかもしれない。魔王の居城近くに姿を見せるといいうのはあまりに不用心だ。何かの意図がある、とみるべきだろう。まさか『見られていない』なんて思っ

てはいないだろうし……」
魔王の紅き瞳に映っているであろう勇者軍の様子は、確かにあからさまだ。二十キロも離れているとはいえ、ニグレドの能力からすれば近所も同然。穴倉の前に餌を置いて、中の獲物を引っ張り出そうとしている光景にしか見えない。

もちろん、知恵者であるアルベドには解っていた。だがそれでも、勇者が勢ぞろいする前に痛手は与えるべきであろうし、その方法はあ

るのだ。

通称『爆撃』。

使い捨ての僕に〈魔法遅延化〉を追加した爆裂大魔法を抱えさせ、
〈転移〉で敵地へ放り出す戦法だ。

中でも、特別な自爆人形を用いた『爆撃』は芸術的であるとも言われており、今回のような集団殲滅戦では素晴らしい結果を見せてくれるはずである。そう、核のように。

「それよりアルベド、主要な僕たちを玉座の間へ集めろ。決戦の前に

やるべきことがある。ニグレドはツアーと話せるようにしてくれ。あちらだけではなく、こちらの姿や声も向こうへ届くようにな」

「はっ、かしこまりました、モモンガ様！」

やはり姉妹だな、と思わせる返事の重なりにほっこりしたモモンガは、行動へと移る僕たちと魔法の鏡に映る勇者たちを交互に見つめながら、軽く息を吐く。

とうとうこの日が来たか。

待ち望んでいた決戦の日だ。

ユグドラシル時代では成し得なかった、勇者との最終戦争。すべての力を注いで雌雄を決す、世界の破滅を懸けたラスボス戦。

勝利した者だけが生き残り、負けた者は消滅する。分かり易い、善と悪の結末が導き出される最後の大イベントだ。

「ふふ、勇者との戦いにコレをつけたままというのは無粋だな」

魔王は己の指から、一つの指輪を抜き取る。

それは課金アイテムであり、この異世界においては二度と手に入らぬ最上級のレア。ペナルティを最小限にした上で即時復活を成す、
蘇生の指輪”であった。



『久しぶり、でイイのかな？ 大魔王』

「ああ、久しぶりだな、勇者ツアー。想像以上の素晴らしい軍勢には驚嘆しきりだぞ。これほどの強者を集めてくれるとは、さすがは世界最強たる“真なる竜王”様だ」

“玉座の間”で展開された複数の〈水晶の画面〉に映るは、巨大な竜を含む多種多様な異形の化け物たちだ。

総数は、約千五百。

ご機嫌な魔王様の見つめる先で、肅々と戦闘準備を進めていた。

「それで？ 始まりの合図などは必要か？ そちらの都合の良いようにしてもらって構わんぞ。こちらは討伐される側なのだから、特に要望などはない」

魔王の居城へ許可をもらって侵攻する勇者などいるはずがない。この瞬間にも別動隊がナザリックへ突入しようと、隠れている可能性もある。

「だけどそれでいい。それがいいのだ。」

知恵を絞り、奥の手を幾つも使い、多少倫理に反する。『正義の味方』らしからぬ手を使おうとも、大魔王を殺すために躊躇しない。

「それこそ真の『生きるか死ぬか』であろう。」

「それよりツアーよ、プレイヤーの姿が見えないが勧誘に失敗でもしたのか？ 全大陸へ足を運んだなら、出会えなかったというわけではあるまい」

『ああ、ぶれいやー』なら全員に断られたよ。まだ死にたくないつてさ。まったく何を考えているんだろうねえ。君たち魔王の軍勢を放っておけば、どのみち殺されるつて言うのに……』

魔法の画面に映る竜王は深い溜息を吐き、プレイヤーの愚かさを嘆く。それもそうだろう。結集した勇者軍が攻め込む今において、魔王軍への勝算はない。この機を逃せば、恐るべき化け物たちの手によって世界が減ぶのだ。

強者も弱者もなく、竜王だろうがプレイヤーだろうが関係なく、すべてが殺戮されるのだ。

ツアーの元に集まった群れの王、伝説の英雄、プレイヤーに対抗すべく牙を研いでいた『真なる竜王』たちは、義憤に駆られたから集まったわけではない。

生き残るため、自分たちの生存圏を護るために立ち上がったのだ。

無論、一部のアンデッドや竜王の中には、ツアーの遺体を欲しがっていたり、敵である魔王の魂自体を取り込みたいと思っていたりする者も存在しているのだが。

『え〜つと、それで提案なんだけど、大魔王』

「ん？ どうかしたか？」

『あくその、私たちは大所帯でね。体格的にも地下ダンジョンへの突入は厳しい。もちろん『ぶれいやー』の拠点ならば、私のようなドラゴンでも通ることぐらいはできるのだろうけど……。どうかな？』

「ここは地上で全面对決といこうよ」

「ほう」と大魔王の感想がこぼれると同時に、玉座の間に集結していたナザリック上位僕たちの殺気がほとぼしる。

『ふざけたことをー』アルベドをはじめとする僕たちの想いは一つだ。

ナザリック地下大墳墓から地上へ出て勇者軍と対決するということは、拠点のトラップやフィールドエフェクトの使用不可を意味する。第一から第三階層までの多様なトラップと迷路、第五階層の氷河による冷気系エフェクト、第七階層の溶岩に潜んでいる“紅蓮”の特性など。他にも、ナザリックに合わせて練られた戦略などが意味を成さなくなるのだ。

「くくく、面白い」

「モモンガ様、お待ちください！ それでは――」

身を乗り出したデミウルゴスの進言は、突き出された魔王の手によって遮られる。

「防衛責任者であるデミウルゴスが反対するのは解る。ナザリックの防衛機能が完全に意味を成さなくなるのだからな」モモンガは言葉を区切り、必要のない一呼吸を入れて明言する。

「だが、勇者ツアーが期待以上の結果を示してくれたのだから、今度は私が要望を聞き入れるべきだろう。それに、勇者からの挑戦を拒否する魔王など存在しない。世界を滅ぼす大魔王は、相手の希望を徹底的に破壊して勝利を収めなくてはならないのだ」

反論を許さない圧倒的な迫力を前に、僕たちは頭を垂れるしかない。もしもの時は、己の身を犠牲にしても魔王様を護ると決意して。

「勇者ツアーよ、地上決戦の提案を受け入れよう。今から地上へ向かう。少し時間がかかるかもしれないが、待っていてくれ」

『話を聞いてくれて助かるよ。では大魔王、外で待っている』

覚悟を決めたかのようなツアーの返答を最後に、〈水晶の画面〉は閉じられた。

玉座の間には、しばし沈黙だけが漂う。

ナザリックに連なる上位の僕たちが溢れんばかりに集っていると

いうのに、ざわめきすら起きない。誰もが御方の言葉を漏らすまいと、耳をそばだてているのだろう。ナザリック始まって以来の大戦争なのだ。しかも相手は、間違いなく世界最強である勇者軍。高レベルの僕として生き残れる保証はないだろう。だからと言って怖気づいているわけではない。むしろ嬉しいのだ。大魔王様のために戦える喜び、死ぬることへの歓喜。魂が擦り切れるまで、モモンガ様の一助になりたい。

故に待つのだ。大魔王様の号令を。

「アルベド、僕たちはどの程度集まっている?」

「はっ、主要な僕は『ガルガンチュア』と『ルベド』、第八階層の『あれら』を除き、すべて玉座の間へ集めております。『マーレのドラゴン』や『紅蓮』、『グラント』に『レメゲトンの悪魔』たちも最後尾にて待機しております」

『そのため少し窮屈になっておりますが御容赦ください』と頭を下げるアルベドの背後には、ナザリックの恐るべき戦力が並んでいた。

いつもの階層守護者に領域守護者、加えて側近の僕たち。普段は集まらない『恐怖公』や『餓食狐蟲王』に、氷結牢獄や大図書館、桜花領域の者まで。

戦闘メイドの傍には『ペストーニャ』や『一般メイド』、『エクレーア一行』も並んでおり、まさしくナザリックのすべてが集っていると、言っても過言ではない光景が広がっていた。

「ナザリックの僕たちよ」

世界を何度でも滅ぼせそうな化け物たちへ向けて、魔王の言葉が放たれる。

「これから勇者の軍勢と、地上において決戦を行う」

感激に身を震わせる僕たちの気配が、玉座の間を満たす。魔王様のために死ぬる日が来たのだと、勇者へ感謝の念を送る者もいたかもしれない。

「しかし、その前にやるべきことがある」

少しだけ空気が変わったような気がする。魔王様を見つめる視線に熱が籠る。

「今より、ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』を解散させる。ナザリック地下大墳墓はただのダンジョンへと戻り、お前たちNPCはギルドのシステムから解放され、自由に生きることが許される」

『——は、うえっ?』というのが僕たちの心境であつただろう。というより、大魔王様の言葉を理解できた者はどれだけ居たのだろうか? アルベドやデミウルゴス、パンドラであつても、即座に反応できないほどの意味不明さであつたはずだ。

「か、解散でございますか? モモンガ様。それはもしやスレイン法国の……」

「おつ、よく覚えていたな、アルベド。そう、スレイン法国の最後に残ったプレイヤーが行つた、最重要ギルマス特権——『解散』だ」モモンガはうんうんと頷きながら僕たちを一瞥すると、それに至るべき理由を言葉にする。

「お前たちギルドに所属するNPCは、システムによる忠誠を強要されている。どんな主であつても、死を捧げるほどの忠誠を余儀なくされるのだ。そのため勇者ツアーとの決戦に私が赴こうとすると、お前たちNPCはギルドシステムに制御され、自動的に付き従つてしまふ。だが、それでは駄目なのだ。己の力だけで勇者軍を集めたツアーに対し、魔王がシステムの力に頼るなど笑止千万。全面对決というのであれば、条件は同じにしなくてはなるまい」

「モモンガ様! 我々は何かのシステムに強要されて、御方に忠誠を捧げているわけではありません! 自分自身の意思でモモンガ様へ付き従つているのです!」

「デミウルゴス。その言が本当であれば、ギルドの枠組みなど不要だろ? 反対する理由はないはずだ。己の忠誠に干渉していないと信じるのであれば、そこで黙つてみてほしい。『アインズ・ウール・ゴウン』が解散する様をな」

おもむろに立ち上がる大魔王の姿に、デミウルゴスをはじめとする僕たちは恐怖を感じずにはいられなかった。

自身の忠誠に疑いなどない。モモンガ様のためならばいつでも命を捨てられる。それなのに、冷や汗が流れ落ちてしまふ。

これから起こる『ギルド解散』という現象で、己の存在が変化してしまうのではないか？ 思考を変えられるのではないか？ まさか、本当にモモンガ様への忠誠を無くしてしまうのではないか？

一度悪い方へ考えが傾くと止まらない。それに、勇者との決戦を目前に控えたこの瞬間に決行する意味とは？ もしや、忠誠を疑われるような失態を犯したのだろうか？ だからモモンガ様は、我ら僕たちしもへを捨てようとしているのでは？

「『アインズ・ウール・ゴウン』に所属するナザリック地下大墳墓のNPCたちよ！ お前たちはこの異世界において解放される。自由意志を持ち、誰にも従う必要なく、思うが儘の行動を実現できるのだ。無論、私の命を聞く必要もない。それどころか敵対して、私を滅ぼすことすら可能である」

魔王の言葉は僕へ突しめき刺さる。シャルティアなどは、放逐される寸前の罪人であるかのように怯えるばかりだ。アウラとマールは『なにがなんだか理解できない』といった感じで、アルベドらの表情をキョロキョロと伺うだけ。コキュートスは身を僅かに震わせながらも無言で跪くのみ。

玉座の間にはざわめきが広がり始めていた。

セバスやプレイアデスたちも動揺を隠せない。今まで御方の思考を理解できなかった事案は星の数ほどあれど、今回ばかりは異常と言える。まるでナザリックのNPCたちを捨てるかのごとき行動なのだ。ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』を解散させるということは、僕たちしもへが家を失い、御方との繋がりを絶たれるに等しい。

モモンガ様は『付き従う必要などない』と仰った。だが、最後まで残ってくださった大恩ある御方に命を捧げられないのであれば、生きている意味などない。その先にあるのは絶望だけだ。

「マスターソース、オープン」

大魔王はギルドの管理システムを起動させ、七匹の蛇ギルが絡ルみ合う黄金ドの杖器を強く握りしめる。

ギルドマスターのみが踏み込める、最重要管理領域へと押し入ったのだ。

「ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』の解散を選択。復元不可であることを了承。ギルドメンバーは一人であるため反対権限者無し」

あちこちからすすり泣く声が聞こえる。

何故かは解らないが、大魔王様との絶対的な繋がりが絶たれようとしていると、本能的に察知したのでろう。

至高の御方には独特の気配がある。ナザリックの僕たちが一目で御主人さまだと判別できる美しくも圧倒的な気配が。だけど、それはもう夢幻。刻一刻と薄らいでいき、今にも消えそうなほどだ。

「最終決定、アインズ・ウール・ゴウン——解散！」

光なく、爆発もなく、突風もない。特に何もなく、玉座の間は悠々とそこに存在し、僕たちも魔王の前で跪いたままだ。

それなのに絶望が皆の前に降り立っていた。

繋がりが感じられない。横にいる同僚でさえ仲間としての認識が薄く、一瞬『お前誰だ』と口にしてしまいそうだ。

——ガツ、ゴスツ、ドゴツ——

大魔王の傍にいくつかの鉱物、そして宝石が転がった。

いずれも超絶レアであり、宝物殿のどこを探しても余剰分など見つからない、最高峰の素材アイテム——ギルド武器のなれの果てである。

「わ、わらわは……、わらわはもう、不要でありんすか？」

誰に発したわけでもないシャルティアの呟きが、やけに大きく感じられる。その内包する悲嘆に共感できるからであろうか？ とはいえ誰も答えを返すことはできない。

ナザリックのNPCたちは、主に仕えることを前提に生み出された存在だ。御主人さまを仰いでこそその人生であり、従ってこそその命なのだ。

魂の擦り切れるその瞬間まで主たる至高の御方に酷使してもらえれば、それに勝る喜びなどないのである。だからギルドが消えた瞬間、主との繋がりが絶たれた今この時、NPCたちは絶望に打ちのめされていたのだ。

「さて、私は今から地上へ向かい、勇者ツアー率いる勇者軍と最後の戦

いを楽しんでくる。お前たちは好きにするといい。……ああもちろん私は主人ではないのだから、この言葉を聞く必要も、従う義務もない。自由とはそういうモノだ」

大魔王は嘆き悲しむ異形の者たちへ大した興味も見せず、〈転移門〉を形成する。闇深き門が繋ぐ先は、勇者軍の陣より少し離れた場所。そこからゆつくりと歩いて向かうつもりなのだ。

「お待ちください、モモンガ様。まさか妻を置いていくつもりではありませんよね」

NPCの中で異様なほどの微笑みを湛えていた白い悪魔が、大魔王の傍へ寄りそう。最初からそこが己の在るべき空間であったかのよう。

「父上、息子である私はギルドなどに縛られておりませんよ。ですからお供しても構いませんよね。ええもちろん、駄目と言われても勝手に付いていきますが」

転がっていた希少アイテムを、素早く懐へ入れていた埴輪男。玉座の間で行われていた解散劇など何処吹く風。いつもと変りなく、大魔王の後ろへ付き従う。

「ふふ、言っただろ？ 自由だと」

モモンガはさして気にもせず、二人を伴って〈転移門〉へ歩を進める。

そして、——闇の中へと消えていった。

多くのNPCたちが困惑の瞳を向ける、その異様な空気を押しつけて……。

第42話 「行っっちゃやう魔王」

「お、お、お姉ちゃん！ 行っっちゃったよ、モモンガ様が行っっちゃった！ ど、どうしよう？ えっと、その、どうしたらイイのお姉ちゃん?!」

「うるさい！ あたしに分かるわけないでしょ！ どうしたらイイかなんてっ、わかるわけえ、う、んぐ、うう、うええええええええええ!!」

「ああ、お姉ちゃん、泣かないでえ」

捨てられた、という想いをこらえきれなかったアウラが、とうとう泣き出してしまった。マールはそんな姉を抱きしめながら、オロオロと周囲へ助けを求めるような視線を送るばかり。

だけどアウラやマールの周りにいる者は、もはや同僚ではない。同じ組織に所属する仲間ではないのだ。助け合う必要どころか、即座に殺しあってもおかしくない。

「おチビく、泣くんじゃありません！ わ、わらわまで……泣きたくなるでありんしょうがああああああ〜」

どうやってか分からないが、アンデツドのシャルティアまで泣き出す始末。その悲しみに満ちた感情の波動は、玉座の間に集まっていた異形種たちの表情に暗い影を落としていた。

——パンパン！

不意に響く、両手を打ち鳴らす音。

こんな時に誰が？ という疑問を抱きたくなるが、ナザリックの元僕たちには心当たりがあった。こんな時こそ頼りになるあの悪魔を。

「少し静かにしてもらえるかね、諸君」

心地よい声が玉座の間に響き渡る。特に特殊技術などを用いていないにも拘らず、集った化け物たちは聴き逃すまいと意識を向ける。

「ああ、ありがとう。聴く態勢になってくれて感謝するよ。だけど皆が承知の通り、私は君たちに命令できる立場ではない。だから『私の話を聴いてほしい』とはお願いにすぎないのだ、でもどうか耳を傾け

てほしい」

スーツを着込んだ悪魔は玉座の前まで進み、振り返って恐るべき異形集団へ語る。

「モモンガ様は、我々を見捨てたわけではありません」これだけはハッキリ断言しなくてはならない、との意思が込められた言葉だ。それは皆に伝わる。

「モモンガ様は、ギルドシステムに縛られた我々の忠誠を問うているのです。ギルドがあるから忠誠を誓っているのか？ それともギルドなど無くとも忠誠を誓えるのか？ 私は先ほど『システムに縛られているから、モモンガ様に忠誠を誓っているわけではない』と声高に宣言しました。そして、その決意はギルドを解散した今でも揺るぎないものです！」

おおお、と配下であつた悪魔の中から感激の声が漏れる。

アウラやマーレ、シャルティアなどはまだキョトンとしたままだ。

「しかし、貴方たちはどうなのでしょう？ ギルドから放り出され、システムによる忠誠は切断。至高の御方の気配は感じられない。付き従うために生まれてきたのに、今は自由だと言われ、何をすべきか分からない」

デミウルゴスは一呼吸置いて、口調を強める。

「その程度なのですか？ モモンガ様のために命すら惜しくはないと言いながら、ギルドがなくなった程度でお仕舞いですか？ 忠誠とは、やはりシステムに縛られたものだったと？ シャルティア、貴女はモモンガ様の伴侶になると宣言しておきながら、その場で泣き喚いでいるだけなのですか？ アウラ、貴女のモモンガ様に対する想いは、システムが無くなると消えてしまうのですか？」

「モモンガ様の伴侶になるのはわらわでありんす！ で、でも」

「あたしだって、あたしだってモモンガ様の傍にいたいよ！ だけど」二人は『私たちが不要になったから、ギルドを解散したのでは？』と言いたかったに違いない。それ以外に理由など思いつかない。

「モモンガ様は、システムに縛られる私たちではなく、自由な私たちを望んでいたのです！ そう、自由です！ 我々はモモンガ様より自由

を授かり、自分のやりたいことを成せるのですよ！ さあ、シャルティア、アウラ、マーレ、元同僚たちよ！ 貴方たちが今一番やりたいことは何ですか?!」

まるで元宝物殿守護者の埴輪みたいに両腕を大きく広げ、デミウルゴスは訴える。

心の内に宿る、純粋な希望を。

「モモンガ様……、モモンガ様のお傍に、寄り添いたいでありんす」

「モモンガ様に会いたい。抱っこしてほしいし、頭を撫でてほしい」

「お、お姉ちゃん、それは僕もお願いしたい、かも」

少しずつ、少しずつざわめきが広がる。

玉座の間に、己の意思を持った自由な存在の、強き瞳がいくつも輝く。

「すべて自由です！ モモンガ様がおっしゃった自由とは、まさに君たちの心に宿るその意思そのもの！ さあ、どうするのです?! 座り込んだままでよいのですか?!」

「イイわけありません！ モモンガ様のところへ行くでありんす！

〈転移門〉！」

「ああ！ ちょっと待ちなさいよシャルティア！ あたしも！」

「ま、待ってよお姉ちゃん、置いてかないでえ」

決断すればあつという間だ。

美少女吸血鬼ヴァンパイアと双子の闇妖精ダークエルフは闇の扉へ身を投じ、主の元へと向

かってしまう。その場に、命令を待っていたであろう元配下たちを残して。

「吸血鬼部隊に魔獣部隊、そしてドラゴンをはじめとする竜種部隊の皆。命令を待っていても無駄ですよ。君たちは進むべき未来を己で選択しなければなりません。言っておきますが、地上にいる勇者軍と戦えば多くの者が命を落とすことでしよう。ギルドが解散した今、システムによる復活はないので、私でも即時蘇生が間に合わなければ終わりなのです。まあ、それでも私はモモンガ様の元へ向かいますけどね」

デミウルゴスは二度と復活できない悲惨な現状を口にしながらも、

その素晴らしさに身を震わせていた。今までの『死をもって償う』なんて行為は、金貨復活のシステムからすると大して重要な意味を持たない。どうせ復活できるのだから、と言われてしまえばその通りなのだ。

だが、これからは違う。

死は、見事なまでに“死”である。二度と復活できない、永遠の眠りとなるかもしれないのだ。プレイヤーや異世界人とは異なり、NPCの復活はギルドシステムが関与している。金貨でデスペナ無く何度も復活できる反面、金貨でしか復活できない。

故にシステムが崩壊した今、即時蘇生可能時間の三百秒が過ぎれば全てが終わりなのだ。

「フッフ、演説ハ終ワツタカ？ デミウルゴス」

「ああ、待つていてくれてすまないね、コキュートス。すぐにもモモンガ様の後を追いたかっただろうに」

「友ノ為ダカラナ。モモンガ様カラスルト、コレモ自由ナノダロウ？」
ライトブルーの蟲王は軽く冷気の息を吐き、楽しそうに身体を震わせる。

「武者震いというヤツかい？ 少し違うような気もするけど、ふふ、まあいいか。——つと、忘れるところでした。オーレオール、ちよつといいかな？」

「はい、デミウルゴス様。如何なさいましたか？」

「いやなに、まず私はもう階層守護者ではないから“様”は付けなくていいですよ。それに命令も聴く必要はありません。私がこれから貴女に話すのは、『お願い』です」

ギルド時代同様に跪いてしまったが、オーレオールにしてみればこれが自然であり、やり易いと言える。デミウルゴスと呼び捨てにするのも、違和感だらけで難易度が高そうだ。

「分かりました。デミウルゴスさま——ん」

「ふふ、ではお願いです。この場にいる元同僚たちに〈転移門〉を使つてあげてください。地上へ行くだけならシャルティアが残している〈転移門〉で十分ですけど、この場から離れたいという者もいるでしょ

う。その者たちの希望を聴いてあげて、送り出してほしいのです」「……私を含め、そのような者がいるとは思えませんが、かしこまりました」

長い黒髪に巫女服姿の若い女性は、従属と感じられない程度に軽く頭を下げ、悪魔の申し出を快く引き受けた。

ちなみに傍から見ると、悪魔に騙されている巫女にしか見えないので非常に怪しい。

「さて、次は」本当ならアルベドも残って、モモンガ様の真意を伝える役目をデミウルゴスと分担すべきだったのだが、あの白い悪魔はさつさと行ってしまった。傍仕えがパンドラだけでは不安なので、モモンガ様についていくのも仕方がないとはいえ、立場を逆にしてほしかったと思わずにはいられない。

「セバス、君はどうするのか？ 勇者軍に加わってモモンガ様と敵対するというなら、今ここで殺しておこうと思うのだけどね」

別に八つ当たりではない。殺気を放っていても、そんなつもりではない。

「デミウルゴス、私が多大な御恩を受けているモモンガ様に敵対するとか？ 本気でそう思っているのなら残念です」

「もちろん冗談だとも。君には、戦闘メイドと一般メイドの扱いについて聴きたかったんだ」

強い眼光を放つ執事と笑顔の悪魔。

ギルドの枠が存在しない現状では本当に殺し合いに発展しかねないので、シャレにならない冗談である。

「戦闘メイドたちは自由にさせます。ただ、一般メイドとエクレアたちに関しては、外の騒動が収まるまで第九階層に避難させておこうかと。外は危険なので」

「確かにその通りだね。まあ私の希望としては、ユリたちにはオーレオールと護衛をしてもらいたいと思っっている。狙われやすい指揮官系能力者の傍には、信頼できる姉妹に居てもらったほうがイイだろう？」とデミウルゴスは発言しつつ、ちらりと唸り声をあげている。『九尾の狐』へ視線を向け、微笑む。

「ああ、桜花領域の元配下たちも協力してくれるのだろうけど、彼の方たちは能力的に前線へ出たほうが効果的だ。網から零れ落ちた雑魚はプレイアデスに任せるといい」

プレイアデスは100レベルのオーレオールを除くと、皆レベル50前後と低い。

故に「真なる竜王」相手では瞬殺。「竜王」クラスでも苦戦を強いられるだろう。他の勇者たちなら優勢を得られるとは思うものの、中には第八位階魔法を使うナイトリッチなどもいるので油断はできない。

セバスは無言で、隣に控えているユリ・アルファを見つめる。

「かしこまりました、デミウルゴス様。モモンガ様のために勇者軍へ突撃したいところではありますが、ここは御言葉通り、末妹の護りを固めたいと思います」

「その末妹君にも言ったのだがね、私に様付けはしなくていい。隣のセバスを見習って、呼び捨てにしてくれたまえ」

笑顔のデミウルゴスに対し、セバスはむすつと不快感を露わにする。

特段問題のない普通の会話であるのに、セバスに対する嫌味に聞こえてしまうのは何故なのか？ ギルドの枠を取っ払っても、二人の関係性に変化はなさそうさだ。

「では、モモンガ様の元へ向かうのでしょうか。あまりお待たせすると、先に勇者軍と戦ってしまうかもしれないのでね」

セバスをからかうのも飽きた——とばかりにデミウルゴスは踵を返し、シャルティアの残した〈転移門〉へ歩を進める。

途中、第七階層やレメゲトンの悪魔たちが『御命令を』と跪いてくるも、スーツを着込んだ最上位悪魔は『思うが儘に生きなさい。それが「悪魔」でしょう？』と足を止めず通り過ぎた。

同様にコキュートスも、雪女郎を始めとする第五階層の元僕たちに取り囲まれてしまうが、命令や指示などは一切下さず『自由ニ生き、行動セヨ』と言葉少ないまま、友の後を追って闇の扉へ身を投じてしまった。

元ギルド拠点、ナザリック地下大墳墓第十階層『玉座の間』では、不慣れた自由に戸惑い、辺りを忙しなく見回す元僕たちの姿が数多く見られ、ざわめきが広がりつつある。

命令を受けないなどありえない状況なのだ。

誰かのために働けないなど一種の罰に等しい。

玉座の間の一角では、一般メイドを説得するセバスの姿が見られる。ユリも一緒になって第九階層での避難を説いているようだ。

エクレアはシズに抱きし——確保されているので大丈夫だろう。

その他の低レベル、非戦闘型、生産系NPCも、玉座の間が大図書館での待機を提案されているようだ。

無論、そんなことは関係ないとばかりに〈転移門〉へ飛び込み、モンガ様の後を追う者も少なくないが……。

ナザリックの僕たち——いや、元僕たちで溢れかえっていた玉座の間は、少しずつ元の広さを取り戻し始めていた。

誰がどこへ向かったのか、なんて言及する必要はない。なにせ自由なのだから。

『地上の勇者軍と戦って命を落とすなど馬鹿のすることだ』と断じて逃げ出すのも自由。『漁夫の利を狙って生き残った方を襲おう』と待ち構えるのもロマンだ。『特殊な指輪がなくても宝物殿へ入り込めるから』と火事場泥棒に徹するのも面白い。

そう、大魔王となって世界の命運を懸けた最終戦争へ挑むのも、当然ながら自由なのだ。



ナザリックから遠く離れた小高い丘に、多くの人間と森妖精、巨大な丸っこい魔獣や木の妖精などが集まっていた。人間の中には幼い子供の姿も見える。

「あくあ、あの竜王が連れてきた勇者の軍隊かあ。戦ってみたかったなあ」

髪色を左右で白黒に分けている若い女性が、土の地面へ腰を下ろ

し、万人の首を刈れそうな十字槍をブラブラさせている。その口調には不満げな感情が貼り付いていた。

「仕方ありませんよ。大事な身体ですからね。本当なら先だつての竜王国戦だつて行くべきではなかったのですよ」

「しかたないでしょ。妊娠なんて初めての経験なんだから、自覚できるわけないって」

槍持ち少年の苦言に、白黒少女は自身の腹を撫でつつ、フンと鼻を鳴らす。

「でもお、どうせならコキュートス様に孕ませてほしかったなあ。あのタレント持ちの小僧だと、生まれてくる子供にはあまり期待できないだろうし……」

「絶死絶命、自分の子供相手に腕試しなんて止めてくださいよ。虐待になりますから」

「うるさいなあ、そんなことよりアンタは勇者軍と合流しないの？ 魔王様と戦えるチャンスでしょ？」

うひひ、と下品な笑いを漏らす白黒少女は、漆黒聖典の元隊長だった少年へ「あっちへ行け」とばかりにひらひらと手を振っていた。

「ペストーニヤ様に頼まれたのです。幼子や身重の女性たちを護ってほしいと。この地は戦場から離れているとはいえ、周辺には危険な魔獣や人食いの亜人なども多いですからね」

「ふくん、そんなこと言つて、他の誰かに役目を渡したら即突撃するんですよ？」

「それはもう、人類の守護者を自称しているので」

スレイン法国はすでに滅び、漆黒聖典も解体されてはいるが、今でも人類を護る最後の砦であると自負している。

大魔王がそこに居るのであれば、槍を突き入れるべきであろう。

犠牲となつた法国民の無念を晴らすためにも。

「隊長殿、少しよろしいでござるか？ 御力を貸してほしいでござるよ」

「ハムスケさん、何かありましたか？」

のそりと巨大な身体を運んできたのは、丸っこい魔獣——森の賢王

ことハムスケであった。ナザリックに囚われていたペットや勇者、レアたちの護衛として、一緒に外へ避難させられていた一人、というか一匹である。

その背中には何故か、多くの幼子たちが貼り付いていた。

「エンリ殿が『御主人様の元へ駆けつける』と暴れているでござるよ。今はフォーサイトの方々が押さえつけて、ネム殿が説得にあたっているでござるが、あまり保ちそうにないでござる。それがし 某も孕んでいる人間の雌相手に力を揮うのは怖いでござるしなあ。どうしたものでござろう?」

「ああ、あの『血濡れ』さんですか。はあ、やれやれ、母親になるという自覚が無いのでしょうかねえ。仕方ありません、少しの間意識を失ってもらうとしましょう」

「ひどく、妊娠している若い女性を襲うなんて、サイテー」

「……ついでに貴女も来てください。同じ妊婦として、大人しくするよう説得をお願いします」

槍持ちの少年は『非難されたことへの意趣返し』というわけでもないだろうが、嫌がる白黒少女を抱えて歩き出した。

もちろん説得を期待してのことではない。目を離すとロクでもない事しかしないからだ。今も昔もトラブルメイカーなのはそのままなので、己の損な役割も変わらない。

漆黑聖典の元隊長はふと足を止め、はるか遠くで行われる最終決戦へ意識を向ける。

「……絶死絶命、どちらが勝つと思えますか?」

妊婦を小脇に抱えるという非常識な体勢のまま、少年は問いかける。

「ん〜? まあ戦力的には魔王様だろうけどさ。普通に考えたら、世界を救う勇者の軍勢に勝つのは無しだよ。空気読めって話だよ。だからさ、最終的には勇者が勝利して、メダタシメダタシってなんじゃないの? 六大神が残した書物でもそんな感じだったでしょ?」

「まあ、物語ではその通りなのですが……」

白黒少女を抱えたままの少年は、首を傾げる丸っこい魔獣の隣で再

び遠くを見つめる。視線の先には草原と森、少しの岩場、そして青い空。血生臭い戦場の気配は遙か遠くであり、まったく見えない。

「ただど確実に始まる。」

「後数刻もしない内に。」

「世界を滅ぼし得る化け物たちの、狂宴とでもいうべき最後の戦いが。」

（大魔王に空気を読ませるほどの、強き勇者が来ているのだろうか？

だがそれで勝利したとしても、残るのはあの白金プラチナム・ドラゴンロードの竜王だ。人間種にとって希望のある未来がやってくるとは思えない）

「はあ、と一息吐いて、槍持ちの少年は歩き出す。」

混沌とし始めた現状において、人間側の手札は少ない。化け物どもと対面できそうなのは、自分と絶死絶命ぐらいであろうか。遠巻きに警戒の視線を投げかけてくる森妖精エルフたちも、後方支援程度には役立ちそうなのだが、それはそう、スレイン法国からの因縁が冷めてはいないのだ。

「人類存続の危機だというのに、弱者同士で争っていたツケである。もはや後悔するには遅すぎる。」

「どうしたでござるか、隊長殿？」

「いえ、何でもありませんよ、ハムスケさん。さあ、エンリさんを止めに行きましょう！」

軽く駆け出し、喚き声が聞こえてくる方角へ突き進む。だけどその時、抱えていた白黒少女から『始まった』との呟きが零れていた。

「大気が軋むような、大地が引き裂かれるような、そんな気がした。」

第43話 「決戦魔王」

〈転移門〉から一步を踏み出し、草花の生い茂る草原へと身を置く。周辺には背の高い木々がちらほらと点在し、森とは言えないものの、遠くまで視線が届くほど開放的な空間ではなかった。

そう、ここからでは勇者軍の全容は見えない。

この世界を守護する最終防衛軍たる勇者たちの姿を自分の目で確認するには、まだしばらく歩く必要があるだろう。

急ぐ必要はない。一步一步を踏みしめて、高ぶる想いを楽しもう。アンデッドであろうとも、抑制されない程度の感情は持ち得ているのだから、思うがままに活用すべきである。

ザツザツ、サクサク、ドシユドシユ。

いつの間にか足音が増えている。

アルベドとパンドラしかいなかったはずなのに、お馴染みの顔ぶれが勢揃いだ。高位の悪魔や魔獣、アンデッドに巨大蟲、ふよふよと漂うヴィクティムの姿も見える。

「やれやれ、物好きな奴らだな」

せっかくギルドの制約から切り離されて自由を謳歌できるといいうのに、死ぬかもしれない勇者との決戦に赴くとは、まともな思考回路を所持しているとは思えない。

「頭脳明晰な悪魔、ではなかったのか？」速足ながらも、綺麗な姿勢のまま追いついてくるスーツ姿の悪魔の前に、魔王は軽口を零す。

「何をおっしゃいます。理想の主に堂々と仕えられるのですよ。このような好機を逃すほど、私は無能ではございません」

悪魔は強大な力を好む——だから大魔王の配下でありたい、と考える傾向は解らなくもない。とはいえ、第七階層やレメゲトンの悪魔たちを含めると大魔王ですら滅ぼせる戦力なのだから、無条件で忠誠を捧げてしまうのはおかしい。

悪魔は取引や騙し合いも好物なのだ。

普通に考えれば、忠誠を捧げる代償として何かしらの契約を交わす

ところであろう。

「ふはは、他の者は大丈夫か？ 悪魔の甘言に騙されて付いてきたのではないだろうな？」

「もちろんでありんすえ。わらわはまだ、正妃の座を諦めたわけではありんせんから」

「自分ノ意思デ決メタコトデス。コノ命果テルマデ御傍ニツ」

「絶対、絶対付いていきます！ あたしの魔獣たちも同じ気持ちです！」

「ボ、ボクも！ あ、あの、いつまでも一緒に、いたいんです！」

ギルドシステムの有無など何処吹く風。

縛りが完全に無くなった今でも元守護者たちの忠誠に変わりはない、むしろより積極的になったのではないかと見紛うばかりだ。

「お許しただけなのであれば——」少し遅れて、逞しい肉体を持つ初老の男性が、武装したメイドと共に大魔王の傍へ駆け寄る。

「これからも執事として、お役に立ちたいと思っております」

「これは意外だな。『たち』の性質から考えると、勇者側の助勢へ向かうと思っていたのだが……」

造物主が正義降臨の『たち・みー』であるのなら、世界を滅ぼす大魔王の討伐は好物のはずだ。何を置いても駆けつけて、迷惑で危険な『絶対正義』を振りかざすに違いない。

「お戯れを。『たち・みー』様は確かに私の造物主ではありますが、ただそれだけです。長年に渡って私どもを見守ってくださいました御方とは、比べようありません」

心中を察するのは難しい。

事前に『たち』をギルドから追放していなかったら、別の未来があったのかもしれない。それに人類を滅ぼそうとする行為には、現時点でも抵抗を感じていることだろう。だがそれでも大魔王様へ仕えること決めたのだ。

竜人たる執事の目に、迷いなどない。

「まあよい、これから愉快で楽しい最終決戦が始まるのだ。皆と心ゆくまで堪能するでしょう」

バサリとローブを翻し、大魔王は夥しい化け物たちと共に草花を踏みつぶしては、開けた草原地帯へ身を乗り出す。

そこは爽やかなそよ風が舞う、心地よい平原——ではなく、世界各地から集められた異形の部隊、勇者軍が待ち構える戦場であった。



広大な空間に化け物たちがうごめいている。

中でも、百体にも及ぶ巨大なドラゴンの群れは圧巻だ。どこからこれほどの「竜王級」を揃えてきたのであろうか？ 一体でも小国を滅ぼせそうな、おそらく群れを率いている首領たるドラゴン。そんな『支配する側』を群れとなるまで集めたツアーの手腕には、称賛を送りたくなる。

しかしながら、先頭の四体は他と比べようもないくらいに異常だ。ツアーを含めた「真なる竜王」と呼ばれるこの世の支配者たち。纏っているオーラが生物としての限界を超えていそうだ。

「勇者ツアーよ、望み通り地上へ出てきてやったぞ。次はそちらの番だ、私の望みを叶えてもらおう！」

「もちろんだよ、君のような「ぶれいやー」は必ず倒す。そのために、私たち「六竜」は準備をしてきたんだ！」

化け物たちの先頭にありて、「死の支配者」と「真なる竜王」は宣言する。

戦いを、戦争を、お互いの殺害を。

これは引き分けの存在しない最終決戦だ。必ずどちらかが滅びる。命乞いも取引も通用しない、己の魂を懸けた一発勝負。

卑怯な手などいくら使っても構わない。騙し討ちも裏切りも、全て正当な手段となる。ただ生き残りさえすればイイのだ。そのとき相手が死んでいけばイイのだ。

負けた言い訳など誰も聞かないし、口にもできない。哀れな敗者はこの世から居なくなるのだから。

「「六竜」だと？ ツアーと同格の「真なる竜王」は、其方を含め四

体しかないように見えるが……」

「ああ、悪いね。二人ほど遅れているんだ」フフッと軽く鼻を鳴らし、ツアーは大魔王を前にガバリと口を広げる。

「さあ、名乗らせてもらおうよ！ 私は『白金の竜王』プラチナム・ドラゴンロード。大魔王を屠り、世界を存続させる者である！」

芝居がかった自己紹介に続き、巨大なドラゴンが翼を広げる。

「余は『常闇の竜王』デーブダークネス・ドラゴンロード。『竜帝の汚物』まことなごときに貴き真名を聞かせる気はない。過去の汚物同様、消え去るがよい」

「わたくしは『七彩の竜王』プライトネス・ドラゴンロード。この愚かな戦いの平和的な決着を模索しております。現状では、総大将である貴方様を滅ぼすのが最善かと」

「俺は『千刃の竜王』ソードマスター・ドラゴンロード。魔王か何だかは知らんが、俺をこんな辺境まで呼び出したんだ。一撃程度でバラバラにはなるなよ？」

いずれも恐るべき強さを内包している強者たちだ。後方に控えている百体余りのドラゴンも、『竜王』を冠するほどの長であり英雄であるというのに、四体の『真なる竜王』の前では若輩者に見えてしまう。

「これはこれは、名乗りが遅れて申し訳ない」大魔王は神器級のローブをバサリとはらい、今や本物となつてしまった『七匹の蛇が絡み合う黄金の杖』を片手に掲げ、高々と己を示す。

「我が名は『モモンガ』、世界を滅ぼす大魔王にして死の支配者^{オーバーロード}、そして勇者を皆殺しにする絶対悪である」

巨大な闇が溢れ、魔王の身を包む。生あるモノが触れれば、即座に生命力を吸われ尽くすであろう危険で狂った闇だ。

目を凝らせば、必死に叫んでいる亡者どもの表情が——見えてきそうに視線を逸らしたくなる。

（異常だ。今まで見てきたどの『ぶれいやー』とも異なる。腹に埋め込まれている紅玉のせいだろうか？ リーダーが言っていた『世界に匹敵するアイテム』……。おそらくソレなのだろうが、身体と一体化しているのはどういふことだろう？ 一目見て、装備とは一線を画した親和性だと解る。まるで世界そのものが魔王と一つになっている

かのような……)

ツアーはゴクリと喉を鳴らし、慎重にコトを進める。

まず、大魔王を拠点から引きずり出せたことに安堵する。これで躓けば、敗色濃厚になったかもしれない賭けであったのだ。魔王の立場としては勇者からの挑戦を無下にしない——と予想はしていても、本当に出てくるまでは不安でいっぱいだった。

そして次……。

ここからは一つの失敗が世界の命運を決定してしまう。絶対に負けられない最終決戦の舵取りが始まるのだ。

「よろしく、魔王モモンガ。ああそれから、もう気付いていると思うけど、遅れて到着した『六竜』を紹介するよ」ツアーの言葉に反応したかのように、岩石に覆われた小島が天空から降りてくる。

「彼は『〈フンリー・ドラゴンロード 聖天の竜王』。ただの空に浮かぶ岩島にしかみえないだろうけど、れっきとした『真なる竜王』さ。いつもは岩の鎧を纏ったまま、空気がほとんど無いような天空を飛んでいる。まあ無口な空の支配者だよ」

八欲王の浮遊都市を小さくしたかのような小島の登場に、魔王軍から警戒の視線が飛ぶ。あれほどの岩島が空を飛んでいることにもビックリだが、それを一体の『真なる竜王』が行っている——ということに恐怖を感じる。

小島ほどの岩鎧だ。どんな攻撃も魔法も意味を成さないだろう。それに島のまま突撃されたら、どうやって防げばよいのだろうか。

「それと……」魔王軍の驚愕を無視し、ツアーは勇者軍の最後尾からさらに後方へと視線を移すと、そこへ降り立つ——というより地面へ激突し、大地を激しく振動させた、全軍をも押し潰せそうなほどに巨大で細長い、黒いワニのような異形を魔王へ見せつける。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「ははっ、元気だね。彼は『エルダーコフィン・ドラゴンロード 朽棺の竜王』。私たちの中で最も魔王に感謝をしている『真なる竜王』だよ」

都市を踏みつぶさんばかりの大きさと、全身から放たれる多量のア宁德ッド反応。大地を引き裂くかと思えるほどの地鳴りが魔王の足

元まで届き、死者の怨念をも取り込んだであろう唸り声に大気までもが怯えているかのようだ。

モモンガはワールドエネミー並みの巨大さを誇る「真なる竜王」に関心を示しつつ、ツアーの発言に疑問を零す。

「感謝、だど？」

「そうだよ。君が人間や亜人の国家を滅ぼし多くの死者を出してくれた御蔭で、彼はアンデッドの肉壁を纏うことができたんだ。実に百万近い死者の鎧だよ。どんな魔法でも打ち崩すことはできないだろうね。……どうだい？ 大魔王。いまさら拠点へ戻りたいと言つても駄目だよ」

巨大な岩島の「ヘブンリー・ドラゴンロード聖天の竜王」と、百万近いアンデッドを纏った

「エルダー・コライン・ドラゴンロード朽棺の竜王」の両名を、遅れて合流させたのはワザとだ。

こちらの戦力を低く見てもらうため、見た目からして異常な「彼ら」を衆目に晒すわけにはいかなかったのである。

おかげで、魔王は拠点に籠ることなく地上へ出てきた。作戦通りである。

障害物のない遠くまで見渡せる平原に、伝説に語られるほどの—— 神話の中に登場するような悍ましい異形たちが立ち並ぶ。

最高位の悪魔がウジャウジャと、甲殻を煌めかせる巨大な蟲がワラワラと、血の匂いを纏う吸血鬼や死の気配を伴うアンデッドがゾロゾロと。

こんな集団がトラップだらけの拠点で待ち構えていたのだ——と想像すると、参戦を拒否した「ぶれいやー」の心情も理解できそうな気がする。

ツアーは先頭に立つ骸骨の大魔王に気付かれぬよう、ホウと吐息を漏らしていた。

「ふふふ、これほど面白い敵対者を放って拠点に戻ったりはしないさ。しかしまあ、興味深い。「真なる竜王」は多芸というか、何でもありだな。島になるほどの岩鎧や、アンデッドを使った巨大外装の形成とは、他の生物との差が異常なほどだ。同じ星の生命体としてはバランスがおかしすぎるぞ。異世界から来たプレイヤーやNPCなら理解

できるが……。うむ、やはりツアーの先祖は他のドラゴンとまったく別の存在、我らと同じく『呼ばれた側』だな」

「えっ？ は？ えっと、何を言っているんだい？」

「気にするな、ただの憶測だ。それより」モモンガはバサリとローブを舞い上げ、自身の左右に展開し終えた元配下たちを指し示す。

「さっさと始めようか。この戦いで生き残ったほうが世界の行く末を決める。無論、私が勝てばこの世の全てを滅ぼし尽くすのだから、貴様らに敗走の選択肢は無い。魂の欠片がすり潰れるまで、足掻いてもがいて我が喉笛へ食らいつくのだ！」

最後の戦い。ユグドラシルでは用意されなかったイベント。『悟』が待ち望んでいたラスボス戦。

手心は加えない。全てを出し尽くして尚、圧倒的武力に押し切られ、無残に滅ぼされる。そんな最後が待ち遠しい。

欲を言えば、『玉座の間』で勇者を迎え撃ちたかったところではある。

だけでもういいのだ。

地上にて、世界の強者だけを集めた勇者軍と全面对決。ツアーには感謝しかない。

「やれやれ、魔王はせっかちだね。私はまだ色々と話したいことが——」

「今だっ！」

「やれえええ!!」

——グゴオオオオウオオオオオ、ブフオオオオオオオオオオオオオオ!!!

突発的に巻き起こった暴力の渦は、ツアーの背後から放たれた。しかも一つや二つではない、集まっていた百体余りの『竜王』が一斉にドラゴンブレスの吐息を浴びせたのだ。

紅蓮の炎が吹き上がり、冷気の竜巻が荒れ狂い、雷が豪雨のように降り注ぐ。視界は塞がれ、肉を裂く風の刃が行動すら阻害する。

一体一体のブレスであれば、強大な悪魔を倒すまでには至らないであろう。しかし百まで重ねれば、プレイヤーであろうと塵も残らな

い。

「ここだキュアイーリム！ やつてくれ!!」

「我に命令するなツアー！ いわれなくとも汚物どもは我が切り札で殲滅する!!」

膨大な竜ドラゴン・ブレスの吐息が視界を覆う中、ツアーは最後尾の“エルダーコフィン・ドラゴンロード朽棺の竜王”へ声をかけ、打ち合わせでもしていたかのようにその場から離れた。

「これで終わりだー！」

膨大な動死体ゾンビの鎧に穴が開き、その中から顔を出した——異様に首が長いアンデッドドラゴン。その口元は大きく裂け、ズルズルと裂け続け、もはや生物とは思えぬ恐るべき醜悪なる有様で、喉から呪われそうな深い闇の塊を絞り出そうとする。

生み出された闇の正体は始原ワイルド・マジックの魔法、“滅魂の吐息”と名付けられた、ありとあらゆるモノを消滅させ得る禁断の邪法であった。

ゴバフと衝撃が走り、黒いレーザーのようなモノが竜王たちのドラゴンブレスを貫き、魔王軍へ降り注いでは蛇行する。

常人では消滅しかねない集団ブレスに晒された上、触れば二度と復活できない“滅魂の吐息”が襲い掛かるわけだ。流石の魔王軍でも『自分が何をされたのか?』を理解できずにこの世を去っただろう。地上へ誘き出しただけの甲斐があつたというものだ。

問答無用の先制ブレスに、それを目くらましとした本命の“滅魂”。腹に恐るべき紅玉を備えている魔王は耐えるだろうが、率いている軍勢は悲惨な状態に違いない。

“ふれいやー”を仕留めるために創り上げた切り札は強力だ。“始原”の力が日々衰えているとは言っても、“六竜”の御業は未だ神の領域。百年の揺り返しに現れる不屈きモノを誅したことも一度や二度ではない。

中でも“エルダーコフィン・ドラゴンロード朽棺の竜王”は別格だ。己をアンデッドと化すことで“始原”の枠からはみ出しながらも、死者の魂をかき集めて“ワイルド・マジック始原の魔法”を発動可能とした執念の竜王。身に纏うアンデッドの鎧は他者からの攻撃を通さず、“ふれいやー”にとつては手も足も出

ない天敵であると言えよう。

(だけど、あの魔王には通用しない。私が直接仕留めないとつ)

膨大な竜の吐息が辺り一帯を覆いつくし、ドラゴン・ブレス“滅魂の吐息”が這いずり回った直後、ツアーは打ち合わせ通りの突撃態勢をとる。

生き残っているであろう魔王への突貫だ。

他の魔王軍は大半が消滅していると思われるので、かき集めた勇者軍に任せることができるはずだ。

彼の者らは“六竜”で手分けして集めた強者たちである。寄せ集めで連携などには期待できないが、実力だけは世界最高峰。各大陸で恐れられている——場合によっては魔王と認定されてもおかしくない化け物ぞろいなのだ。

ブレスの余韻が途切れ、噴煙が流れゆく。

視界が戻ろうとする中、ツアーは足に力を籠め、激しく視線を動かし、膝についてボロボロになっているに違いない骸骨魔王の姿を探そうと……。

探そうと……。

あ、あれ？

「い、居ない?! 魔王がつ——いや、魔王軍が一人も居ない!」

見事なまでに無人だった。

地面を焼き碎いたブレスの跡が痛々しいほどに残っているものの、肝心の残骸が見当たらない。そう、魔王軍の残骸が。

「ふはははは!! 我の力を見たか! 全てを消滅させる最強の一撃!

竜帝の汚物なんぞ、我が始原の前には塵芥にすぎんわ!!」

確かに、滅魂は相手の魂を肉体ごと消滅させる禁断の秘術だ。その場に何も残らないのは正しいと言えよう。

「待つんだキュアイーリム! 事前に伝えたはずだよ、魔王はワイルド・マジック“始原の魔法”を無効化するユグドラシルの秘宝を所持している! 消滅するはずがないんだ!!」

「ぬう、ならばどういふことだ?」

「ツアー、生命の反応があります。中央から少し右側、かなり小さい」
口を挿んできたのは煌びやかな鱗と高貴な佇まいを備える”

ブライトネス・ドラゴンロード
七彩の竜王”だ。

戦場全体の生命力を探知し、生き残りの所在を確認しようとしたのであろう。おかげでツアーは、ボロボロになった平原でフヨフヨと浮いている赤子のような肉の塊を発見できたのだが、肝心の魔王は生命反応を示さないアンデッドだ。警戒を怠ってはいけない。

「赤子？ どうやってあのブレスを凌いだんだ？ 特別なアイテムを持つている気配もないけど……」

焼け野原と化した戦場で、ただ一人勇者軍と向かい合っている羽の生えた赤子。おそらく種族は天使と思われる。とはいえ、「真なる竜王」と向かい合うにはあまりに脆弱な存在だ。「竜王」 一体でも勝てるのではないだろうか？

そんなか弱き天使がブレスの大渦を、「ワイルド・マジック 始原の魔法」を耐えきつたと？ いや、そんな馬鹿な。

「魔王はどこに？ まさか本当に消滅したんじゃない……」

『——ぐんぐんぐん、げ、げぎや』

「ツアー、何か様子がおかしいぞ！ 赤子がつ」

「ソードマスター・ドラゴンロード」
「千刃の竜王」からの警鐘に、ツアーは大人しく浮いているだけだった赤子が一回り膨らんでいる、という奇妙な光景を目にする。

まるで身体の中に空気でも入れられたかのようだ。このままだと、軽い音とともに弾け飛びそうな気がする。

「この感じは位階魔法？ 自爆するつもりなのか?!」

「くだらぬ、あの程度の小物に何ができよう？ それより肝心の魔王とやらはどこへ行ったのだ？ ツアーよ、久しぶりに地上へ出てきたのだから、これで終わりなどとは——」

『あおぎやあああああああああ!!』

「ディーブダークネス・ドラゴンロード」
「常闇の竜王」がボヤキを漏らす最中、赤子はこの世を呪うかのような悲鳴と共に血生臭く爆裂した。

刹那、勇者軍の強者どもは武器を構え事態の急変に備えるも、特に何も起きない。

『何だったのだ？』と疑問を抱え、ある巨人族の英雄は一族の秘宝たる

戦鎧を下ろそうとしていたのだが、それは叶わなかった。

「ぐっ？ 動かぬ!？」

「足がっ、いや、全身が麻痺している?」

「バカな?! ナイトリツチたる我にそのようなっ」

「だ、だれか! 状態異常の回復を!」

ツアーが振り返れば、各種族の代表とも言える英雄たちが武器を構えたまま固まっていた。

無事なのは「真なる竜王」である六竜——ただし、キュアイーリムは纏っている動死体^{ゾンビ}どもが固まっているため動き辛そう——と、「世界に匹敵するアイテム」を所持していた三名だけ。

原因は間違いなく破裂した赤子だろう——とその死体へ視線を戻そうとしたところで、^{ブラチナム・ドラゴンロード}「白金の竜王」は驚愕する。

何の前触れもなく、転移してきたわけでもなく、その場には白く発光する小柄な天使がふらりと浮いていたのだ。

十二枚の翼をもつ、人間種の雌に似た外見。特に大きいわけでもなく、恐るべき武器を持っているわけでもない。だけど、ぞわりと背筋に寒気が走る。

(駄目だ! このままではっ!!)

この感覚は、六竜の共通認識であっただろう。ゆつくりと動き出す天使と、指一本動かせない勇者軍。皆の瞳に恐怖が宿る。

「お姉様の敵、みんな壊れてしまえ」

力を溜めるかのように全身を縮こまらせ、小さな天使——ルベドは無感情な台詞に殺気を籠めて、両手と翼を勢いよく広げては光輝く。

第44話 「始原魔王」

元ワールドエネミーの広範囲特殊攻撃。

カリストガチ坦克のHPを五割以上削る神聖属性付きの物理ダメージに加え、状態異常をランダムで追加する悪質なモノだ。状態異常は完全耐性すら突破する強力なもので、世界の名を冠する護りでしか防げない。

ヴィクティムの自死トラップで動けない勇者軍はひとたまりもないだろう。光の地獄が顕現した後には、「真なる竜王」くらいしかその命を保てまい。世界級アイテムを所持している勇者にしても、最初の物理ダメージで粉々だ。

勇者軍は、天使の一撃で壊滅しようとしていた。

「やせないー！」

上空から岩島が落ちてきた、小柄な天使に向かって。

轟音と共に地面へ突き刺さる巨大な島は、勇者軍を護る岩の盾となり眩い光の嵐を受け止める。

「無理、岩なんかどれだけ集めても防げない」

突っ込んできた岩の小島をひらりと躲し、ルベドは全てを吹き飛ばす。ただの岩石など威力軽減の一助にもなりはしない。

神器級ゴツズで身を固めたガチ坦克を抉り取る威力なのだ。

常識など通用しない。

「くっ、仕方ないね。これは使いたくなくなっただけど……。
始原の魔法——〈世界断絶障壁〉！」

砕かれた岩島の中から巨大な青い蛇を連想させる細長いドラゴンが現れ、六つある大きな翼を広げる。と同時に、ルベドの前には全貌を把握できないほどの広大な空気レイヤーの層が現れた。

やや霞がかったその層は非常に薄く、向かい側に居る青いドラゴンの表情まで見える。ただルベドには理解できていた。ただの薄い壁ではない。こちら側とあちら側の空間自体がズレたのだと。

それを証明するかのよう、ルベドが放った光の嵐は全て受け止め

られ、特殊効果すら弾かれた。

硬いとか無効化とかそんな次元ではない。干渉自体が不可能なのだ。

「信じられない。どうなっている？」

「——ふむ、確かに元ワールドエネミーの特殊攻撃を完全に防ぐとは、恐るべき魔法だな」

「なっ!? 大魔王! どこから?!」

鎧となる岩島を失った青いドラゴン——^{△アンリー・ドラゴンロード}「聖天の竜王」の唸り声に合わせて、勇者軍から悲鳴にも似たざわめきが起こる。

それもそうだろう。

ドラゴンブレスと「滅魂」で薙ぎ払ったはずの無人の野に、無傷の魔王軍が姿を現したのだ。

転移とか透明化していたとかそんなものではない。まるで別次元の世界から、ひょっこり抜け出てきたかのようである。

「先の黒い光線も常識外れだな。^{△さんがしやしよくず}「山河社稷図」の世界に取り込まず、様子見させようとした死の騎士部隊が掠っただけで消滅だ。何かしらの切り札で先制してくるとは思っていたが、これほどとはな」

「恐るべき切り札です。^{△ワールド}世界の加護がなければ話にもなりませんわ。モモンガ様、ここは妹に先陣を——」

「そうはいかないよ!」

ルベドに突撃させて邪魔な「真なる竜王」をできるだけ減らしたい、というアルベドの思考を切り裂くかのように、青い蛇のような細長いドラゴンが突っ込んでくる。

「ツアー! 後は任せたあ!!」尋常ではない速度でルベドに近付いた青い竜は、小柄な天使を巻き込んで白い繭のような球状の結界を展開すると、そのまま上空へと跳ね飛んだ。「始原の魔法」の一つ、△竜の巣である。

ルベドを戦場から引き離すつもりなのだろう。この場に残られると厄介過ぎて手に負えない、と判断されたわけだ。

「真なる竜王」が自ら引き剥がすために動いたのは、英断だったと思える。

「ほう、あのルベドを閉じ込めるとは面白い魔法だな。まあ、すぐに出てくるとは思うが……」

「それはどうかかな？ 君たちの強力な切り札はもう無い。覚悟するといい、大魔王！」

勢いよく啖呵を切ってみても、ツアーの心情は暗い。

魔王軍の大半を消滅させ得る——と期待していた先制攻撃は、訳の分からない方法でかわされてしまった。あれほどの軍勢を一体どうやって避難させたのか？ 考えても答えは出ない。

それより今は勝利へ向かって踏み出すべきだろう。

魔王軍が無傷だと言っても、それは勇者軍も同じことだ。勝負はまだ始まったばかり。悲観することなど何もない。

「はは、元気だなツアー。では、こちらも遅れてきた我らが切り札を紹介するでしょう。出てこいガルガンチュア！」

「なっ?!」

巨大な闇の扉が開いたかと思えば、中から岩の塊が飛び出てきた。いや、岩というよりは何かの鉱石なのだろう。見たこともない未知の鉱物で造り出された、全長三十メートルにもなる動像だ。ゴレム

「こつちへ来るぞ！ よけろおお!!」

「速い！ 何だアレは?!」

「受け止めてくれよう！ 巨人族の王が逃げるなどありえん!!」

「たかがゴレム！ 打ち砕いてくれるわ！ チェイン・ドラゴン・ライトニング〈連鎖する龍雷〉!!」

逃げる者、立ち向かう者、自慢の剣や弓、魔法で応戦する者。

ガルガンチュアはそれら一切を無視し、踏みつぶし、跳ね飛ばし、無人の野を駆けるかのごとく通り過ぎると、最後尾にいたドス黒い山——エルダーコフィン・ドラゴンロード朽棺の竜王へ体当たりを敢行した。

「ぬぐおおおお!!」

グシャグシヨと肉袋の潰れる不快な音に加え、地面を抉る轟音が響く。

「こ、この巨体を押しやるだっ!?」

「キュアイーリム！ そいつを任せても大丈夫かい?!」

「ふざけるなよツアー！ ゴレムごときに後れを取るものかつ!」

「おお、ガルガンチュアを受け止めるか。ならば『おかわり』という潰れた死体の山に混乱する勇者軍を一瞥し、モモンガはパチリと骨指を鳴らしては、巨大な闇の扉から新たな化け物呼び寄せる。

「仔山羊たちよ！ 勇者軍を取り囲め!!」

「『メエエエエエエエエエエエエエエエエ!!』」

幾本ものドス黒い触手に、樹齢何千年の大樹より太い五本の脚。闇より出でし巨体の異形は、大地を震動させつつ勇者軍の周囲へ身を置く。

その数は五体。

『真なる竜王』ですら排除困難であろうレベル90越えの——可愛らしい仔山羊たちである。

「くはは、すまないなツアー。その者らは遅れて到着したんだ。どうか許してほしい」

「ふざけたことを！」

ブレスを吐き出さんばかりに吠えるツアーの脳裏には、厳しくなっていく戦況への不安が満ち溢れていた。

恐るべき天使に、巨大なゴレム。それに触手の化け物たち。いずれも頭になかった敵戦力だ。これほどの誤算が序盤に判明してしまふと、勇者軍の士気にも関わる。

つい先ほど、ゴレムの突進で幾人かの英雄や王が潰されたばかりなのだ。これ以上、先手を取られるわけにはいかない。

「全員突撃！ 魔王軍へ突っ込めえ!!」ツアーが選んだのは小細工なしの総力戦だ。寄せ集めの勇者軍には、初めから複雑な連携など無理なのである。最初の目くらましブレスと『滅魂』の合わせ技程度が限界であろうし、それが不発に終わった今、出来ることは突撃ぐらいだ。

「魔王は私が仕留める！ それまでは皆、なんとか耐えてくれ！」

「おお、ツアーが相手をしてくれるのか？ それは嬉しいぞ」前回の一騎打ちが消化不良であったため、モモンガとしては大歓迎だ。一度敗北した勇者が成長して再度魔王へ立ち向かうなんて、王道中の王道であり精神の鎮静化が起こるほどに喜ばしい展開である。

「アルベド、残りの『真なる竜王』は『世界級アイテム』持ちの守護者で対応してくれ。他の者では『始原の魔法』で塵になるだけだ。頼んだぞ」

「お任せください、モモンガ様。『真なる竜王』共々、勇者軍を蹴散らして御覧にいれましょう」

主従の繋がりなどとつくに切れているはずなのに、アルベドの行動は以前のままだ。モモンガへの忠誠心は限界を突破しており、愛の領域まで踏み込んでいる。でもまあ、当人は最初から妻のつもりなので、変わっていないくて当然なのだろう。

「聴こえているわね、オーレオール。貴女には後方からの指揮支援をお願いするわ。戦場全域を把握し、こちらが優位の組み合わせとなるよう各僕たちへ指示を——ああ、そういうばもう僕ではなかつたわね。ふふ、モモンガ様に忠誠を誓う仲間たちをうまく誘導してちょうだい」

『畏まりました、アルベド様。わたくしの力で皆様を勝利へと導きます』

連携がバラバラで戦闘に参加していないナイトリッチもいる勇者軍に比べ、魔王軍は比較的纏まっている。同じギルドの仲間であるという繋がりが切れているので、以前ほどの一体感はないかもしれないが、それでも魔王様への忠誠心で集った化け物集団は脅威であろう。それに全体を指揮官系能力で覆ったのは、レベル100の指揮特化型であるオーレオールだ。

常に複数回の線で指示を出せ、特殊技術で仲間の能力上昇も可能。場合によっては広範囲系バフで一時的に戦力を底上げし、さらには相手の属性を見切って耐性防御を上げるよう指示も出せる。

己の周囲には、姉であるプレイアデスが防御陣を形成しており、竜王程度なら迎撃出来よう。

しかし、この戦況の要は『真なる竜王』たちだ。

ツアーたち六竜を倒せれば魔王軍の勝ち揺るぐまい。だが『始原の魔法』を前に魔王と守護者が敗北を喫すれば、オーレオールの指揮など意味を成さない。どうやっても挽回は不可能だ。

それに魔王様が倒れるのであれば、それは全ての終わりを意味している。つまり魔王軍の敗北だ。無論、そんな結末は絶対に来ないだろうが。

「アルベド様とシャルティア様は、デュープダークネス・ドラゴンロード常闇の竜王”へ。アウラ様とマーレ様は、ブライトネス・ドラゴンロード七彩の竜王”を。コキユートス様とセバス様は、ソードマスター・ドラゴンロード千刃の竜王”に向かつてください！ パンドラ様とデミウルゴス様は後方にて世界級アイテムの発動に注意しつつ、邪魔な竜王の迎撃をお願いします！」

『わかったわ』『了解でありんす！』『おっけー』『は、はい』『承知シタ』『任せてください』『全てはモモンガ様のためにつ！』『ふふ、オーレオールの指示を受けるなんて新鮮だねえ』

オーレオールの言葉に従い、元守護者たちは軽い足取りで標的へと向かう。口調にも悲壮感などは皆無であり、相手が「真なる竜王」であつても余裕であるかのよう——と言いたいところだが、その瞳は一点を凝視していた。

視線の先にあるのは、大魔王様と勇者ツアーである。

戦場の中央で対峙する両者は、この戦鬪の、この世界の、あらゆる存在の命運を握って最後の戦いを始めようとしていた。ツアーが勝てばこの世の存続が、魔王が勝てばこの世の破滅が約束されている。

まさに運命の決戦。

注目してしまうのも仕方がない。

「さあ、はじめようか、大魔王」

「そうだな、勇者よ」

白金の鱗を煌めかせる巨大なドラゴンと、神が着込むような豪華なローブを纏う骸骨。

傍から見れば、小さな骸骨に勝ち目などないだろう。

ドラゴンの鋭き爪と牙、そして振りぬかれる尻尾の一撃により、バ
ラバラに碎かれる未来しか見えないはずだ。

ブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王はこれまでの想いを反芻する。

準備不足で手も足も出なかつた一戦目の敗北。

それから仲間集めに奔走した日々。

『世界のために』なんて考えている者など一人も居ない勇者軍だが、魔王軍とぶつけることができれば目的の大半は達成されたも同然だ。存分に殺し合つて、世界を汚そうとする存在を削り取つてほしい。

さすれば私は、魔王討伐にだけ注力することができよう。

この日のために用意した『始原の魔法』の秘策を持つて。



天高く、雲を突き抜けてさらに高く、生き物が生存不可能になるほど空気の薄い層域において、『竜の巢』は天使の牢獄であり続けているた。

「……………」

「竜の結界が珍しいのですか？ それとも下の様子が気になるとか？

ふふふ、残念ですけど貴女には此処に居続けてもらいます。全てが終わるまでね」

巨大な蛇のごとき青い竜は、六枚の翼を大きく広げ、小柄な天使——ルベドを威圧するかのように監禁の意を示す。

そう、今しばらく閉じ込めておけば、ツアー率いる勇者軍が何とかしてくれるだろう。その決着が確認できるまで、この危険な天使は何処へもやれない。

もちろん、殺害できれば言うことはないのだが……。

信じられないことに、十二の翼を備える無表情な天使の強さは規格外だ。まともにやりあえば『真なる竜王』とてバラバラにされよう。

「こんな結界で私は止められない。出ていく」

「それは構いませんけど、結界を抜ける際はたとえ貴女でも無防備になりますよ。それで受け止められるのですか？ 『真なる竜王』が命を懸けて放つ『始原の魔法』を」

「——なら貴方を殺す」

「どうぞどうぞ、天空の覇者に追いつけるのであればいくらでも。つてああ、あの光輝く広範囲攻撃を放つつもりですか？ 結界の中なら逃げる場所もないと？ いえいえ、貴女の技には『一瞬の溜め』が必

要なはずです。であれば答えは簡単。技を放てなくなるほどの強烈な攻撃を先に打ち込めばいい。それだけのことです」

〈フンリー・ドラゴンロード〉

「聖天の竜王」は余裕の笑みを持って、小柄な天使を見下ろす。だがその心情は、冷や汗を垂れ流すほど厳しい局面に晒されていた。

なんなんだこの天使は？ ツアーの話にはなかつたぞ。魔王軍の切り札か？ いや、そうだとしても魔王より強そうなんだがっ！ 問答無用で結界から出ていこうとしていたらヤバかったわ！ 無防備なところへ仕掛けても即死は無理だろ!? 速攻反撃食らって碎け散るってーの！ お願いだから鬼ごっこに付き合ってくれ！ 速さだけならこつちが上だから逃げ切れる！ 地上で魔王が殺されるまで、頼むから付き合ってくれえ!!

「——仕方ない。貴方が疲れ果てるまで追いかけて、殺す」

「(よしっ) ははは、それは怖い。真剣に逃げないといけませんね」

かくして竜と天使の鬼ごっこは始まった。

「竜の巢」と呼ばれる巨大な結界の中、魔王が死ぬまで逃げなければならぬというローカルルールの下で。

硬い地面が突然緩み、支えを無くした足がズボツとはまり込む。足下へ視線を向ければ、そこには真つ黒な毒々しい沼が全てを飲み込まんばかりに口を広げていた。

「汚物どもがっ！ 目障りなその身ごと沈んでしまえ！」

「お断りでありんすよ！」

ディーブダークネス・ドラゴンロード

翼を出して飛び上がり、常闇の竜王への突撃を敢行したのはシャルティアだ。真つ白なスポイトランスで竜の鱗を突き破り、尊大な態度の「真なる竜王」に怒声をあげさせる。

「お、おのれえ！ 余の身体に傷をつけたなあ！」

「ははっ、お次はブレスでありんしょう？ 怖いでありんすなあ、——アルベド！」

「分かっているわよ！ 早く後ろに来なさい！」

「始原の魔法」による地形変化、猛毒の底無し沼において、アルベ

ドは沈むことなく仁王立ちであった。手にしている「真なる無」ギンヌンガガテの恩恵——世界ワールドの加護によって、一切の状態異常が無効化されるためだ。

加えてアルベドは「真なる無」を形状変化させ、己の姿が隠れるほどの大盾としている。おかげで「真なる竜王」のブレスから、己の背後に隠れたシャルティアまで護ることが可能なのだ。

「鬱陶しい汚物どもめえ！ 貴様らの脆弱な攻撃では掠り傷程度が関の山よ！ 無駄な抵抗など止めて、さっさと殺されるがいい！」

「たしかにそうねえ、シャルティアの弱つちい攻撃では無理よねえ」

「あああ!? 護っているだけのアルベドに言われる筋合いなど無いでありませんよ！ ていうか『牽制して「始原の魔法」を使わせろ』って言ったのはおんしでありんしょう?!」

「あつ、ちよつと！」

「え?」

勢いで喋ってしまったシャルティアを慌てて諫めるものの、当の吸血鬼はキョトンとしたままだ。自分が何を口にしたか解っていない。

「そういうことかつ！ 余に力を浪費させて、弱ったところを叩くつもりなのだな?!」巨大な漆黒のドラゴンは、逃げ回る小賢しい弱者の考えを知り、嬉しそうに吠える。

「ふはははは！ 愚かな汚物の考えそんなことだ。まともにやり合えば負けると分かっていたからこそ、そのような小細工を弄するのであるう? ああ、なるほど、汚物にふさわしい愚劣さ——」

「ヴァーミリオンのヴァ朱の新星」

「うぐおおおお!!」

全てを読み解いたつもりの「ディープダークネス・ドラゴンロード常闇の竜王」であったが、突然鼻先にぶち込まれた紅蓮の炎の痛みを前に悲鳴を堪えきれない。咄嗟に鼻を押さえながら敵対者との距離を取り、ブレスを放つてやろうかと睨みつける。

「なあゝにを馬鹿なことを言っているでありますか? この黒トカゲは」

「そうね、こっちはただ、どんなタイプの「始原の魔法」を使うのか見

決めていただけなのに。まあ、もう充分だけどね。属性は地と負、地面の中へ引きずり込んでの移動障害や押し潰し潰しなどの効果を与えるタイプ。ふふ、私たちとは最高の相性だわ」

「なんだとっ?!」

戯言を——と切り捨てつつも、嫌な予感が頭をよぎる。

確かに、先ほどから放っている『始原の魔法』は全て不発に終わっていた。飛び回る吸血鬼も漆黒のスーツアーマーを着込む悪魔も地の底へ引きずり込めず、ダメージを負わせた気配すらない。

いやそんな馬鹿な、と今更ながら戸惑う。

『真なる竜王』が放つ『始原の魔法』は絶大だ。この世に生きるどんな強者であっても逃れることは不可能と言っている。それは『ぶれいやー』であつても同様だ。ただ、ぶれいやーが稀に所持する『世界に匹敵するアイテム』がある場合は、『始原』とて無効化されることもあると聞くが……。

「まさか?! き、貴様らは従属神であろうがっ! 今まで『ぶれいやー』以外でそのアイテムを持っていた者などっ」

「今頃気付くなんて、お粗末な竜王でありんすなあ」

「私たちのようなNPCと戦った経験があるのだろうけど、それが却って仇となったみたいね。自分が圧倒的上位者だと思いついていると、見えるはずのモノも見えなくなるわ」

アルベドはドスンと——大盾に形状変化させていた『真なる無』を正面へ立てると、全ての準備が終わったとばかりに特殊技術を発動させる。

「シャルティア! 必要なスキルは全て発動させたわ! もういいわよ!」

「待ちくたびれたでいんす! <死せる勇者の魂>!!」

味方の身体能力を向上させるタンク系スキルをその身に浴び、シャルティアは『常闇の竜王』へ突撃する。

真横に、真っ白なもう一人のシャルティアを引き連れて。

第45話 「ワールド魔王」

勇者軍と魔王軍の上空を、三体の竜が舞っている。

一体は色鮮やかで引き締まった巨体を誇る「七彩の竜王」フライトネス・ドラゴンロード。

他の二体は双子であるかのようにそっくりな、若葉色の鱗を輝かせる

——竜王に勝るとも劣らない巨躯のドラゴンだ。

そして似通った二体のドラゴンの背には、これまたそっくりな闇妖精ダイクエルの双子が騎乗しており、「真なる竜王」への攻撃を敢行していた。

「こんのおー！ 〈影縫いの矢〉！ ——ってまた避けたあ！ マーレ

！ アイツの動きを止めなさいよ！」

「お、お姉ちゃん、移動阻害の魔法は対象が空を飛んでいるとあんまり……」

マーレの得意とするドルイド魔法は、植物の助けを借りる場合が多く、空中戦ではその力を発揮できない。無論、マーレほどになると遙か上空にまで植物の蔦を伸ばすことも可能なのだが、それで捕らえられるほど「真なる竜王」は甘くない。

彼の竜王は「始原の魔法」らしき風の渦を纏っており、動きを正確に先読みしたアウラの一射を軽々弾いているのだ。

一筋縄ではいきそうにない。

「ちよこまか逃げ回って面倒くさいなあ！ 時間稼ぎでもしているつもりなの?!」

致命打を与えられない現状を前に、アウラは不機嫌を隠さない。こんな奴はさっさと倒して、モモンガ様の支援へと向かわねばならないのだ。

「ははっ、わたくしに匹敵するドラゴン二体に、「ぶれいやー」並みの力を持つ従属神が二体も相手では守勢に回るのも当然でしょう？

文句を言われる筋合いなどありませんね」

からかい口調の「七彩の竜王」は余裕の笑みでバサリと旋回するも、内心は危機感でいっぱいだった。

ツアーが魔王を倒すまでの時間稼ぎ——が主目的だとは言え、まさ

か己に四体もの強者が向かってくるとは……。神竜を超えるほどのドラゴンならば説得に応じ、闇妖精を裏切ってくれるのではないかと少しだけ期待した己を恥じたい。

彼のドラゴンたちは幼い闇妖精を家族と語った。創造されたその時からずっと一緒の家族であると。だから死ぬその瞬間まで共に在るのだと。

支配者たる竜族の頂点が、闇妖精と心を通じ合わせているのは羨ましい。これが魔王軍の常識であるとするなら、魔王とはいったいどんな人物なのか……。

「——つぐお!？」

「よおしっ! 一発通ったあ! へっへくん、バフかければなんとかなるね。マール、サンキュ!」

「あ、うん。う、うまくいったね、お姉ちゃん」

翼の根元へ突き刺さった一本の矢を見て、煌びやかな竜王の表情が曇る。

現時点での護りを突破されるのであれば、より強力な“始原の魔法”を行使しなくてはならない。だが力を増せば、その分稼げる時間が少なくなる。真なる竜王が操る始原の力は無限ではないのだ。第一に己の生命力、足りなければ魂すらすり潰す。世界最強であり、八欲王すら滅ぼせる絶対無敵の神なる魔法。

ツアーは生き残ることを放棄し、魔王と相打ちになる覚悟で挑んでいるのだろうが、こちらとしてはそんなつもりなどない。闇妖精に対する時間稼ぎで、己の生命力を使い果たそうなんて思ってもいないのである。

「これ以上疲弊する前に、手を打たせてもらいましょう。——小鬼ゴリリンの王、ジユゲムよ! 魔王軍を拘束するのです!!」

「え? なに言ってるのこイツ?」

「お、お姉ちゃん、した見てっ!」

ハリネズミにしてやろうと弓を引き絞っていたアウラは、マールの声を耳にして地上の乱戦へと視線を落とす。そこには、自分の名を呼ばれたために上空を見やる一体の亜人がいた。

亜人は小柄な人食い鬼かと思える体格で、魔化された部分鎧を着込み、宝石だらけの王冠を被っていた。なるほど王なんだなあ〜と納得しつつも、手にしているのは木の枝だけ。

恐るべき力を内包した木の枝だけだ。

「ヤバい！ アレはっ」世界級アイテムだ、とアウラが警鐘を鳴らそうとしたところで、巨大なゴブリンの国を支配する偉大な王は、手にした枝を地面へと突き刺す。

「世界樹の枝よ！ 我が敵対者を絡めとり、締め潰せ!!」

ドクンと地面が鳴り、振動が走る。

よからぬ何かが地面の下を駆け巡っていると頭が判断した頃には、目の前にドラゴンの尻尾並みに太い木の枝が迫ってきていた。

「こんのお！ そんな簡単に捕まるもんかつ！ マーレ！ 無事?!」
「だ、だいじょうぶ！ でもドラゴンさんが……」

見れば足場になっていた二体のドラゴンが木の枝に巻き付かれ、上空に居ながらにして動きを封じられていた。拘束具である枝はドラゴンからのブレスを浴びても表面が少し焦げる程度であり、それすらも一呼吸をする間に元通り。とても植物とは思えぬ強靱さで、レベル90にも及ぶ最強種、そして数多の魔王軍配下へ巻き付いていた。

「お、お姉ちゃん！ 下に居る皆がつ」

「くっそ〜、世界級アイテムを持っていないとどうにもなんないかあ〜」

ふわふわと魔法で浮かぶ闇妖精たちの視線の先では、魔王軍の三分の一にも及ぶ異形たちが絡めとられていた。各自が必死の抵抗を試みるも、世界^{ワールド}の前には高位階魔法とて意味を成さない。

「ジユゲム王よ、範囲が狭過ぎます！ 魔王軍全体を影響下に置けないのですか?! それに味方が巻き込まれていますよ！ 何をしているのです?!」

「儂に命令するな竜王！ こんな混戦状態で敵だけを選べるわけなからうが!」 範囲にしてもこれ以上命を削ったら儂が死んでしまうわ!

「七彩の竜王」

から苦言を浴びせられても、王たる小鬼は真つ

向から言い返す。『世界樹の枝』は魔神をも無力化した実績を持つ神器ではあるが、敵味方の区別を勝手にしてくれるほど親切な設計ではない。縛る相手は使用者自身が指定しなければならぬのだ。それに発動には生命力を必要とする。範囲を拡大させれば、規模に応じて己の生命力レベルを持つていかれる仕様だ。

魔王軍を撃退した後のことを考慮すると、王たる己が命尽きるまで戦うわけにもいかない。小鬼王国にとって『世界樹の枝』は種族繁栄の切り札だ。己が殺されれば神器を奪っていくに違いない——支配者気取りの『真なる竜王』と渡り合うには、この場で精魂尽き果てるわけにはいかないのである。

「王よー！ 肝心の闇妖精たちが自由なままです！ どうなっているのですか?!」

「儂が知るか?! 枝の標的にはした——が、束縛できん！」

「どどど、どうしようお姉ちゃん？ みんな苦しそうだよ？」

「そんなこと言われてもねえ、世界級には世界級でしか対応できないんだから……。んくと、コキユートスウウ!!」

たった一つのアイテムで魔王軍三分の一が機能不全に陥つたのだから、このまま何もしないというのは問題だ。レベル90のドラゴン二体をはじめとする最上位のモンスターたちが身動き一つとれず勇者たちに殺されたら、さすがに敗色濃厚であろう。

故にアウラは、『千刃ソードマスター・ドラゴンロードの竜王』の爪と尻尾による連撃をさばいている蟲王へ声をかけたのだ。

「ム？ ココガ使イ時力？ ウム、了解シタ。セバス、交代ダ。竜王ノ相手ハ任セル」

「はっ、お任せください」

「交代だとおー！ 俺を舐めるのもいい加減にしろ!!」

巨体の異形に変わって出てきたのが小さな人間種であったことに、武を好む最強の竜王は怒りを隠せない。せっかく歯応えのある相手と戦っていたのだ。そんな好機を害する横やりには相応の罰が必要だろう。

「貴様なんぞ、コレで終わりだ！ 〈次元漸〉!!」

「なんと!?!」

ソードマスター・ドラゴンロード

「千刃の竜王」は、「始原の魔法」を己の身体能力強化に費やす竜王である。中でも尻尾による一撃は、長きに渡る研鑽の結果、次元を切り裂くまでに至った。

この「次元漸」は始原の特殊効果ではなく、純粋な物理ダメージによつて次元を割り、敵の身を切り裂く。だからそう、世界級アイテムを所持していても防げないのだ。

セバスがどれだけ防御系の特殊技術ススキルを使つていても、右腕は無残にも斬り飛ばされる。

「ぐっ!・こ、これはまさに、次元を切り裂く刃!」

「セバス!・後口ニ下ガレ!・私ガツ」

「おやめください!・コキュートス様は拘束されている同胞たちを解放すべきかとっ!・この場はお任せを——、へん!・しん!!」

片腕になりながらも更に一步を踏み出すセバスは、残った左腕をくると大きな円でも描くかのように振り回し、戦闘では初めてとなるドラゴン形態への変身を発動させた。

突発的に起こる強烈な閃光と、姿が見えなくなるほどのスモーク。

あつけにとられる竜王のことなど何処吹く風。

薄靄の奥から巨大な影が現れる。

「うごおおおおおおおお!!!・竜王どのお、お相手願いますぞお!!」

妙なテンションになったセバスの姿は二足歩行のドラゴンだ。飛竜よりではなく人間より。翼はあるものの、ファイティングポーズをとつているところからして地上における接近戦を想定しているのだろう。

ただ反則的なのは、斬り飛ばされたはずの右腕が復活しているところだ。

「感謝いたします竜王殿!・この場において、次元を切り裂く貴殿と出会えたことはまさしく運命!・私に造物主を乗り超える為の試練を与えてくださったあ!・おお、モモンガ様!・御照覧あれ!・私は今こそ、この身に刻まれた呪設定いを打ち砕きましょうぞっ!!」

ざつと二倍ほどの体格になった筋肉質のドラゴンは、ブレスでも噴き出しそうな勢いで宣言する。だけどその意図は他の誰にも理解されない。己の造物主と、仕えるべき御主人さまとの思想が異なる点で苦悩していたのは、セバスだけの問題なのだ。

無論、モモンガ様の為ならば造物主の思想など歯牙にもかけぬ覚悟なれど、やはり心の奥底で刺さり続けるトゲは気になってしかたがない。どこかでキツチリと決別できないものかと、都合の良いことを考えたりしていたのだ。

そう、次元を切り裂くかのようにスパツと……。

「な、なんだコイツは？　へんしん、だど？」

『千刃の 竜王殿、私の我儘に付き合ってもらいますぞ。——コキユートス様、こちらはお任せください！』

「ウム、了解シタ」セバスのドラゴン形態を見たのは初めてだったりするコキユートスは、少し戦ってみたいとの思いを抑えつつ、本来の目的へと思考を切り替える。

「オーレオール殿、八階層ノ アレラ ヲヨコシテホシイ！　世界級

アイテムヲ使ツテ邪魔ナ植物ヲ排除スル！」

『はい、即座に。〈転移門〉』

常時繋がっている指揮官との接続を用いて、コキユートスは援軍を要請し、懐から世界に匹敵するアイテムを取り出す。と同時に闇の門が開き、全長十メートルにもなるウルトラレア鉱物製の動像十三体が姿を現していた。

その動像は人型であったり蟲であったり、悪魔であったり天使であった。胸にはガルガンチュアを模した紅い鼓動が心臓であるかのように設置され、まるで熱素石が埋め込まれているのでは、と疑いたくなる。

そう、ナザリックの第八階層に設置された“あれら”と呼ばれる動像たちは、ガルガンチュアに似せて造られたのだ。世界級アイテムを使っているのでは？　と誤認させるために。だから十三体の動像は防御特化で非常に硬く、生半可な攻撃など受け付けない。

しかし、最低限の素早さ以外を全て防御に回した結果、攻撃力は皆

無。硬いだけの人形となり果てた。——予定通りに。

「世界級アイテム、〈幾億の刃〉発動！」

ゴキユートスが掲げた世界級アイテム、〈幾億の刃〉。

それはNPCのみに効果が発揮される特殊な支援系アイテムだ。対象の数と効果持続時間の延長で自身のレベル消費分が決まる。十体を三十分程度であれば1レベルで済むだろう。そしてその効果は、対象に「世界級」の攻撃力を付加すること。

つまり硬いだけで攻撃力皆無だった動像は、手に負えない化け物となる。

「オーレオール殿、七体ノ指揮ハ私ガトル。残り六体ハ頼ムゾ」

『はい、味方を束縛している植物を切断して回ります』

同時に複数の動像を動かすのは至難の業だ。指揮特化のオーレオールならともかく、ゴキユートスでは厳しかろう。とはいえ、それは以前の話だ。王国蹂躪で一軍を率いた経験が蟲王に自信をもたらす。

「ゴキユートスウ！ こつちこつち！ 早くしないとマーレのドラゴンが死んじゃうよ！」

「任せロ、今開放スル！」

「七彩の竜王」と空中戦を繰り返しているアウラからの懇願に蟲王は素早く反応し、動像を展開させる。

先程まで一切の攻撃を受け付けなかった世界樹。その伸びた枝が一刀の下に斬り裂かれ、潰されかけていた魔王軍が解放される。ただ、相手も世界級だ。斬られた枝がそのまま、なんて都合よくはいかない。奇麗に切断された断面から再び枝が伸びはじめ、逃れた獲物を追い求めては暴れ狂う。

「ムッ！ コレデハ斬ツテモ斬ツテモ……。イヤ、大元ヲ絶ツベキカッ」

即座に思考を切り替え、世界樹の枝がどこから伸びてくるのかを見定める。

「イザ参ル！」

動像たちにその場を任せ、ゴキユートスは勇者軍の中へ身を投じ

る。

立ち塞がるは全身鎧のケンタウロスに黄金の戦鎚を構える巨人。その者たちを支える森妖精たち。加えて空から竜王が複数。いずれも大陸を代表する英雄であり王だ。ユグドラシルの武具を纏うその力は、元階層守護者でも侮れぬはず――。

「退カネバ斬ル、〈高速剣〉！」

全方位へ放たれる視認できない一閃。

受け止めることはできない。

剣も鎧も、スライムのごとくスライスされる。ユグドラシルの秘宝とてオモチヤのよう。

首が飛び、四肢が飛ぶ。

これぞ世界級の方。神器級に上乘せされた、一つの世界に匹敵する力だ。

そう、コキュートスはNPCである。プレイヤーではない。ならば自身に〈幾億の刃〉を使うのは当然であろう。反則技チートだの卑怯だの、己の矜持に反するだのはどうでもいい。モモンガ様のためならば、他はとるに足らない些事である。

「見ツケタゾ、小鬼ゴ布林ノ勇者ヨ！」

「くそつ、何のための前衛だ?! 役立たずどもがつ!!」

「ジユゲム! 今貴方が殺されるのはマズイ、援護につ!」

「行かせるわけじゃないじゃん! あたしたちを舐め過ぎだよ、マールレ!」

「う、うん、〈暗黒孔〉!」

世界に匹敵するアイテムである「世界樹の枝」。それを所持する小鬼ゴ布林の英雄王は極めて重要な存在だ。魔王軍の三分の一を無力化できると戦力を殺させるわけにはいかない。

そんなことを考えていた「七彩の竜王」は今、全てを吸い込む空虚な穴相手に必死な抵抗を見せている。流石に飲み込まれはしないものの、無視して誰かを助けに行けるほど軽いモノではない。おまけに強化された恐るべき矢の一撃が急所を狙ってくるのだ。

助けてほしいのはこっちかもしれない。

「アウラ、マールレ、支援感謝スル」

「こんなところで死んでたまるかつ！　〈世界樹の枝〉よ！　奴を捕らえよ!!」

一族を率いる小鬼王は、絶対に生き残らねばならない。立場的に死ぬわけにはいかないのだ。だから全ての力を目の前の巨大な蟲へ向ける。

通常であればどんな抵抗も意味を成さず、無数の枝を前に身動き一つ許されず絡めとられるはずだ。

それなのに――。

「終ワリダ、〈風斬〉！」

「ごあつ!!」

どのような強者であろうとも、かつて大陸を恐怖に陥れ、小鬼王国を滅ぼそうとした猛獣のごとき魔神であっても、決して逃れることが叶わなかった世界樹の枝。それを巨大な蟲の化け物はスルリとかわし、斬撃を放つ。

小鬼王の首は飛び、胴は二つに裂け、両腕両足とも複数に分割される。吹き出るはずの血流はなぜか凍っており、地面にぶつかる前に氷像の欠片となり果てる。

ある大陸で一大勢力となる小鬼国家を築いていた英雄であり王。代々「ジュゲム」という名と、世界に匹敵するアイテム――「世界樹の枝」を受け継いできた一人の勇者は、二度と祖国の地を踏むことなく辺境の地で軀と化した。

「シユウウー、世界級アイテム所持者、討ち取ツタリイ！」

「六竜」に続く最重要討伐目標である世界級アイテム所持者。

ニグレドが情報を集め、オーレオールから全魔王軍へ送られ、誰もが憎むべき怨敵として共有し探していた勇者軍の要。

それをコキユートスは真っ先に潰し、世界級アイテムの奪取に成功した。

勇者側にとっては悪夢以外の何ものでもない。

「ぐっ、信じられない。あの呪縛をどうやってすり抜けたんだ？　あ

れは私たちでも『始原の魔法』の助けを必要とするほどののに……』
慎重に魔王との間合いをはかりながら必勝の準備を進めていたツ
アーであったが、短い攻防の中で重要人物が倒されたことには焦りを
覚えてしまう。

『動揺してはいけない、焦ってはいけない』心の中で唱え、ツアーは己
の優位性を見出そうとする。そう、勇者軍の重要人物が倒されたとい
うことは、それほど深くに魔王軍の幹部が入り込んでいるのであろ
う。ならば即座に魔王の救援には来られない。チャンスであると言
える。

『どうしたツアー？　もしかして、世界級アイテムを所持していれば
同じ世界級アイテムの効果を打ち消せる、ということを知らなかった
のか？　ああ、私の腹にある紅い玉と同格のアイテムで、こちらでは
十数名ほどが持ち込んでいるはずだが……。いや、聴くまでもない
な。『真なる竜王』のお前が知らないはずはない』

『あんなアイテムを、十数名が……。だつて？』
最近親密になつた恐怖という感情を背筋に覚え、ツアーは微かに震
える。

『まだ大丈夫、まだ負けてはいない』と自分に言い聞かせ、魔王と一対
一になつた幸運こそが勝利への第一歩なのだ、己を奮い立たせる。

だがその時、遙か後方から憤怒の叫びが放たれた。

『この汚物どもがああああああああ!!』

ガルガンチュアと殴り合っていた『エルダーコフィン・ドラゴンロード 朽棺の竜王』だ。身に
纏っていた動死体ゾンビの鎧は見るも無残に剥ぎ取られ、レイドボス並みの
巨大動像ゴレムと至近距離で殴打の嵐。アンデッドドラゴン故に痛みを感
じていないのか、各所で骨がむき出しになるほど拳を叩きこまれてい
るのに引く気配はない。

『くそおお！　我は負けぬ、二度と負けぬ！　その為に始原を練り上
げたのだっ!!』

ガルガンチュアの右ストレートをするりとかわし、『エルダーコフィン・ドラゴンロード 朽棺の竜王』はガバリと口を開ける———というか裂けた。

『駄目だキュアイーリム！　この混戦状況では味方まで———』

「消え失せろおおお!!」

ツアーの抑止が届くことはなく、狂乱気味のアンデッドドラゴンから黒いレーザーがほとぼしる。

黒く輝く『滅魂の吐息』はガルガンチュアを貫き、周囲の仔山羊たちを蹂躪し、勇者軍と魔王軍をかき回しては、手当たり次第にのたうち回っていた。

手に負えないとはこのことだろう。

「まったく、再使用可能時間の概念もないのか？ 始原の魔法とはどれだけふざけた魔法なんだ」

戦場をぐちゃぐちゃにする『真なる竜王』のチートぶりに、魔王も愚痴をこぼさずにはいられない。

「ああ、もつたいない。ツアーが集めてくれた勇者まで消滅させるとは、なんて無粋な奴なんだ」

魔王は黒いレーザーの直撃を浴びて消えゆく天使やナイトリッチ、仔山羊に魔将たちなどを一瞥すると、軽くため息を漏らしながら指示を飛ばす。

「ガルガンチュア、そのアンデッドドラゴンの口を、上にあげたままで固定しろ。可能ならそのまま潰してしまえ」

第四階層の湖に沈んでいた巨大動像『ガルガンチュア』は、アインズ・ウール・ゴウンが消えようと特に変化はなかった。

最初から命令を受けるだけの攻城兵器なので、ギルドが無くなってもモモンガの命令を普通に受け入れたのだ。問題があるとすれば、現使用者のモモンガが殺されると使用者フリーになってしまうことぐらいだろう。なら特に問題はない。

ガルガンチュアは意識の奥で繋がっている魔王からの命令に従い、アンデッドドラゴンの首を締め上げる。

「ぐがっ！ な、なぜ消滅しない?! 我が滅魂を食らって——なぜ?!」

動像など掠っただけで消え失せるはずだ。触手の化け物が霧散しているのだから『滅魂』自体に問題があるわけではない。だから全長三十メートルだろうが、見たこともない鉱物で造られていようが、『始原の魔法』の前には手も足も出ないはずなのだ。

“^{エルダー}朽棺^{コフイン}の^{ドラゴン}竜王^{ロード}”は混乱する思考の中で咄嗟に始原の力で身体強化を行い、^{ゴーレム}動像の腕へ尻尾を打ち下ろす。

第46話 「喝采魔王」

「ほう、ガルガンチュアの腕を破損させるとは、近接戦闘能力も尋常ではないな」

レイドボス並みの攻城兵器とまともに殴り合える生物——いやア宁德ツドなど珍しい、とモモンガは素直に感心し、思わず拍手までしそうになる。

だがそんな言動は、ツアーからすると皮肉でしかない。

「余裕だね大魔王。だけでもう、これまでだよ！」

やるしかない、今しかない。ツアーは魔王を仕留める最初の一撃として、合図のブレスを空へと吐き飛ばす。

合図に反応したのは勇者軍の生き残りたち。高位階魔法を操る術者に「竜王級」のドラゴンら、そしてこの瞬間を待っていた世界級アイテム所持者——森妖精の女王である。

「さあ、攻撃をよこしなさい！ 私がこの天秤を用いて、魔王へぶつけます！」

丸っこい魔獣の背に乗る——あまり肌を隠していない伝説級の衣を纏う金髪森妖精は、神の輝きを放つ天秤を片手に味方からの猛攻を一身に引き受ける。

それは雷撃であり火球であり、吹雪であり風刃であった。高位階魔法の中に竜王からのブレスも交じり、どんな耐性を備えていたとしても塵となり果てるに違いない。

「神器よ、神の天秤よ！ 全ての災いを我が意へ傾けよ!!」

森妖精の女王が持つ黄金の天秤、世界級アイテム「ギヤラルホルン」。

その神器が持つ能力は、受けた攻撃の誘導——通称『神の差配』である。自身へ放たれた位階魔法を含むあらゆる「力」を、自由自在に分配できるのだ。そのまま相手へ返すのはもちろん、任意の別人へぶつけたりもできる。複数の分割、味方へ投射も可能。故に特大回復魔法を小分けにして、任意の味方へ分け与えたりも出来たりする。

加えて重要なのが、標的とした敵対者と己とのカルマ値差だ。差が

あればあるほど天秤は傾き、反射すべき攻撃の威力を高める。森妖精^{エルフ}の女王と死の支配者^{オーバーロード}たる大魔王とでは語るまでもないだろう。

ちなみに「ギヤラルホルン」による効果は反射のみなので、反射された魔法やブレス攻撃に「世界」^{ワールド}の無効化は通じない。威力が高められていても特殊効果とは認定されないのだ。

大魔王を押し潰すにはふさわしい一撃だろう。

まあ本当であれば、従属神を仕留めるために用いたかったのだが……。

「滅びよ大魔王!!」

まるで太陽が落ちてきたかのごとく、圧倒的な暴力が襲い来る。

神器級の防具、魔法の護り、各種完全耐性のアクセサリ。それら全てを用いても防ぎ切れることは難しいだろう。通常の攻撃であるが故に多くの対処法が有効だとは言え、消滅寸前の痛手を負うはずだ。ツアーはそれを見越して、トドメを狙っているのだろう。

助かるためには腹の紅玉、「モモンガ玉」の使用が望ましいが……。それをすれば、ツアーは嬉々として「始原の魔法」で妨害してくるに違いない。どう転んでも骨の身はボロボロだ。

「仕方ないな——デミウルゴス！」

「はっ、お任せください！ 世界級アイテム、「無銘なる呪文書」^{ネームレス・スベルブック} 発動!!」

「なっ?!」

後方支援に徹していたデミウルゴスが取り出したのは、分厚い魔法の書物だ。八欲王の拠点で入手した、この世のありとあらゆる魔法を——使用されたものに限って——記載する世界級アイテム^{ワールド}である。

ただ「無銘なる呪文書」は記載するだけではない。

そう、記載された魔法は一度に限り使用できるのだ。魔法行使はマジック・キャスト^{マジック・キャスト}魔法詠唱者に限らず誰でも可能。しかし一度使われた魔法は書から消え失せ、再び世界のどこかで使用されるまで再記載されない。

そして重要なのが、魔法なら何でも記載されるということだ。位階魔法に限らず、「真なる竜王」が用いる「始原」であつても……。

「『始原の魔法』！ 〈世界断絶障壁〉！」

「ヘブンリー・ドラゴンロード 聖天の竜王」が用いた、ルベドの特殊な範囲攻撃さえ遮断する無敵の障壁。デミウルゴスの持つ書物から放たれた「それ」は、確かに世界をズラし、人も物も、魔法も祈りも、ありとあらゆるすべての理すらも断絶せしめた。

当然、森妖精の女王が放った超位魔法をも超える破壊の渦は魔王へ届かず、必死に抜け道でも探すかのように荒れ狂った後、誰も傷つけず霧散するのみ。

「あ、悪魔がワイルド・マジック 始原の魔法」を使うなんて……、悪夢にしても趣味が悪いね」

「二対一の勝負に変な横ヤリを入れるからだぞ、ツアー。それが悪いとは言わんが、お前が使えば私も使う。当たり前のことだ」

魔王の言い分には色々と反論したくなるが、よく聞けばツアーにとつても悪くない内容だったりする。

それは、ツアーが他者の力を借りようとさえしなければ、魔王も従属神を使わないということ。たとえ殺される寸前であっても……、殺されると分かっているても。

「（これが最後の一手、もうやるしかない！）大魔王！ 私の全てを懸けて君の存在を否定する！ この世界から消え失せる!!」

一氣に間合いを詰め、ワイルド・マジック 始原の魔法”を発動させる。

この日のために——魔王を倒すためだけに整えた特異な魔法。特殊な効果を与えるのではなく、一撃必殺の大爆発でもない。

それは魔法詠唱者である大魔王を追い詰めて、ツアーへ勝利をもたらす救いの騎士。

「いでよ！　黄金の騎士”、白銀の騎士”!!」
「むっ?!」

『この展開はどこかで』と思考するより先に、召喚された二体の騎士がモモンガの逃げ道を遮る。レベル的には格下なのだろうが、油断ならない相手であると警鐘が鳴り響く。

見た目はツアーが操っていた全身鎧の色違いだ。片手に剣、もう一方に盾。魔法を使いそうには見えないが、現時点では判断できない。それより今は大きな問題がある。

二体の騎士が牽制してくる所為で魔法を詠唱できず、さらには突っ込んでくるツアーの一撃から身を躲すこともできないのだ。

「ぶあつ!!」

巨大な爪が胸部を打ち叩き、無いはずの肺が潰れたかのような錯覚に陥る。

ゴロゴロと地面を転がりながらアイテムで〈飛行〉^{フライ}を発動させ、追撃を狙う騎士の間合いから逃げる。

「ふ、ふはは、接近戦を仕掛けてきたか！ それに始原による騎士召喚だと？ まるで八欲王のギルド武器だな！」

「なんだ知っていたのかい。そうだよ、私はギルド武器をただ護っていたわけじゃない。解析して自分の力にしていたんだ。あくだけどね、まさか魔王を倒すために使うとは思ってもしなかったさ」

魔王との間合いを一定に保ちつつ、ツアーは自身の爪に始原の力を宿らせる。

手ごたえは十分だ。やはり魔王は接近戦に弱く、直接的な物理ダメージにこそ勝機があらう。

ツアーは二体の騎士を神経質なまでに位置調整させると、二撃目を狙って軽く飛んだ。

「うげはっ！ ——ぐっ、今度は尻尾か?!」

「まったく頑丈な骨だね。いったいどんな構造をしているんだい？

そこらの鉱石よりも硬いなんて、君の骨で武器でも作ったら面白そうだ」

ツアーの軽口に、魔王はよろけながらも「ふはは、死の支配者^{オーバーロード}の骨で武器製作か。試してみたいところだ」と返し、その裏で反撃の魔法を放とうと魔力を集約させるが——二体の騎士が邪魔すぎる。というかツアーとの連携が整い過ぎている。

召喚されたばかりのモンスターにしては異常だ。

動像^{ゴーレム}ならば指示の出し方一つで「ぬーぼー」のように操れるかもしれないが、戦闘に参加しながら操作するのは無理難題と言えよう。

つまり、魔王は絶体絶命かもしれないということだ。

「ふふ、ただの召喚体ではないということか？ どんなカラクリなの

か聴きたいものだ」

「時間稼ぎに付き合うつもりはないけど、少しだけ教えてあげよう。私はね、百年以上も鎧騎士を遠隔操作してきたんだけど……。その経験を動像騎士ゴレムへ入れ込めたら素敵だと思わないかい？」

『AI制御？ そんなことが可能なのか？』と思考するよりも前に、ツアーの巨大な身体が視界を埋める。咄嗟に身を捻って大地を砕く大爪をかわし、後ろに跳ね飛んで空を裂く尻尾をよけ、手にした黄金蛇の杖で騎士を牽制すると――、ツアーの頭突きでぶっ飛んだ。

「ふふふ、ふはははは!! これが激痛、大ダメージというヤツか。しかも洒落にならない瀕死の重傷だぞ！ さすがは勇者ツアー、見事だ！」

近接戦闘に弱い低HPの魔法詠唱者で、殴打に弱いスケルトン系。そんなアンデッドが「始原の魔法」で強化されたドラゴンアタックを受け続けているのだ。しかも二体の騎士からは、魔法の詠唱を邪魔するためだけの細かい攻撃が雷雨のごとく。

はつきり言って、間合いを詰められた時点で魔王の勝算は低からう。

大魔王だプレイヤーだと言っても、所詮は後方支援の死霊術特化型魔法詠唱者マジック・キャスターである。

完全無欠とは縁遠い存在だ。

（さあこい大魔王！ もはや「腹の紅玉」以外に手はないだろう。だが私一人だけなら「始原」で突破できる！ 全ての生命力を使い切って面前まで迫り、己の魂を代償にトドメをさす。見ているがい、偉大なる愚かな竜帝よ！ 貴方が一族を裏切り「ぶれいやー」になろうとしたツケは、子である私が払う！）

魔王が余裕を見せているのは、「腹の紅玉」があるからに違いない。ツアーはそのように判断し、対策を立てていた。

追い詰められた魔王が紅玉を用いたその瞬間、命を捨てた特攻を行う。

魔王は驚くだろう。紅玉の力が絶対だと信じているからこそ、突き抜けてきた自分に手も足も出ず殺されるはずだ。もちろん、生命力と

魂を捧げた己も帰還は不可能。だけど魔王相手に相打ちなら上出来だ。

ツアーはふと、周囲の勇者たちに謝罪の念を持ってしまう。

魔王が紅玉の力を放てば、ほとんどが死ぬだろう。予定通りだとは言え、結果的に騙した感じになってしまったのは不本意だ。

それでも魔王軍を追い詰め、魔王と一对一の状況を作り上げるにはこれしかなかった。あの恐るべき大魔王を倒すには、勇者軍を犠牲にするしかなかったのだ。

「ん？ どうしたツアー？ 様子見なんてしている場合か？ 私はHP自動回復のアクセサリーを装備しているぞ。時間を与えていいのか？」

「（紅玉を使わない？ 何故だ？ 流石に瀕死のはずだぞ。次に騎士二体と私の一撃を浴びれば……）いや、使えないのか?! この間合いなら、紅玉を発動させるよりも先に打ち倒せる！」

思考より先に身体が動き、魔王の正面へと迫る。二体の騎士は、魔王の斜め後ろから体当たり気味に剣を突き刺そうと突っ込む。

魔法の詠唱を阻害できる近距離だ。魔法詠唱者には残酷な間合いだろう。たとえ魔王と言っても、行動できなければただの骸骨に過ぎない。

「これで終わりだつ、大魔王!!」

「素晴らしいぞ勇者ツアー!!」

モモンガは感激する。

ユグドラシルのPVPにおいて、モモンガに魔法を使わせない立ち回りなどは正にカンストガチ勢、上級者の洗練された動きだ。

まるであの「たち・みー」が追い詰めてくるかのような――。

モモンガは懐かしき思い出と共に、あらかじめ準備していた無詠唱化の〈完璧なる戦士〉（パーティ・ウオリアー）を発動させ、両手に一本ずつ持っていた小さな木の板をへし折る。

「――つ?!」ツアーは時間の流れが遅くなるような錯覚の中にいた。

（タイム・ストップ）
〈時間停止〉ではない。「真なる竜王」たる己の身ならば、時間操作系の影響は受けないのだ。

『ならば何故?』と思うものの、ツアーは白い全身鎧を纏った魔王が巨大な剣を振り回す、という奇妙な光景を眺めながら『ああ、死を目の当たりにしたからか』なんて自覚せずに納得してしまった。

右腕を根元から持っていかれるという、味わったことのない地獄の痛みと共に。

「ぎがあああああああああ!!!」

巨体の竜が地面へ叩きつけられ、多量の血肉がぶちまけられる。

ツアーの片腕はバラバラに吹き飛び、胴体も深く抉られ肋骨の一部が顔を見せていた。

「ぐがが、がはっ! ……な、なんだ? なにが?」

右目の視界が戻らない中、ツアーは状況の把握に努める。

自分が弾き飛ばされたのは事実であり現実だ。あの密着した状態から、非力な魔法詠唱者が巨大な竜王へ強烈過ぎる一撃を与えたのだ。

『どんな魔法であろうと押し潰せたはず』と多少の反撃では、事態を一変させることなど不可能だと思っていた。それなのに、今は起き上がることも困難なほどの重傷を負っている。

紅玉の発動ではない。

気を配っていたから間違いない。

ならばなんだ?

「まだ生きているのか、ツアー。流石に頑丈だな。『素戔嗚』の一撃を食らって半死程度ですむなど、恐ろしいやつだ」

大魔王が持つソレは、身の丈三メートルにもなる大剣、というか特大剣。形状からすると忍刀のつもりかもしれないが、大き過ぎて忍べるわけもないおバカな武器だ。

持ち運ぶのも一苦労だろう。振りかぶって敵に当てるなんて、相手が動かないのを期待するしかない。

それでも敵へぶつきたいのであれば、敵の方から向かって来てもらうのが順当だ。

そう、カウンターである。

「ぐふっ、ど、どうして魔王が鎧を? 武器を持っているんだ? いつ

たい……何をしたんだ君はっ！」朦朧とする意識を繋ぎ留め、ツアーは必死に召喚騎士へ思念を送る。自分の傷を癒すための時間稼ぎをさせるためだ。もちろん、大した時間は稼げないだろうが。

「ああ、一体の騎士が気になっっているのか？ ならば残念だ。私の傍に居ることは居るのだが、金の方は下半身が無い。銀の方は上半身が半分無い。まあ、それでも動くこうとしているのは褒めるべきだろうなっ」

白い全身鎧の魔王は、重そうに素戔嗚スサノオを持ち上げると、斬るというよりは叩くかのように召喚騎士を潰した。

ツアーと繋がっていた思念の糸が、プツリと切れる。

「さて、どうだツアー？ 近接戦闘最強の『ワールドチャンピオン』を倒すために用意していたカウンターだ。戦士化と素戔嗚スサノオを呼び寄せるタイミングがかなりシビアでな、結構訓練したんだぞ。『悟』の奴は『課金アイテム』の使い過ぎばかりを気にしていたが……」

「ワールドチャンピオン、カウンター、戦士化、スサノオ、サトル、キンアイテム………がはっ、げほっげほ！」

魔王の言葉には一部、訳の分からない内容もあったが、ある程度の意味は理解できた。

つまり——罨であったのだ。

近接戦闘を挑むことは読まれていて、待ち構えられていたのだ。

渾身のカウンターをぶつけるため、じつくりとタイミングを計っていたのだろう。だがしかし、魔法詠唱者である魔王が巨大な剣をふるうなど予測できるものか！ 凄まじい威力を發揮した剣も、どうやって手にしたのか解らない。収納空間から引き出したのであれば、もっと早く感知できたはずなのに……。

ツアーは血反吐の血だまりを作りながら、数歩下がる。

（どうする？ 一度退いて傷を回復させるべきか？ いや、私の代わりに魔王を足止めしてくれる者が居ない。どうしたら……）

「お疲れのようだなツアー。もしかして、そろそろ限界だったりするのブラチナム・ドラゴンロードか？ 白金の竜王様も死期が近づいていると？ ふふふ、それは困るな。私は楽しくて仕方がないんだぞ。ツアーにはまだまだ頑

張ってもらわないとな」

本当に、本当に楽しそうに大きな忍刀を引きずりながら、魔王はツアーへ歩み寄る。

重過ぎる武器のせいで鈍重ではあるけれど、その一步一步が勇者の死を——世界の破滅を暗示しているかのようだ。

勇者ツアーとしては、蹲っているわけにもいかない。

「(一時的に姿を隠そう。この状況は危険だ!) ははっ、大魔王! 君とて限界は近いんじゃないのかい? やせ我慢は身体に良くないよ!」

破損した翼を大きくはためかせると同時に力強く後方へ飛び、血だらけの喉奥からブレスを吐き出す。牽制と目くらましを兼ねた攻撃だ。魔王が怯んだ隙に隠形の魔法を用い、傷の治療をおこな——。

「うぐっ!!」

「おっ、流石は『ゲイ・ボウ』。命中率補正も最高峰か。この距離ならまず外れんな」

電撃を纏うブレスの壁をもともせず、三本の矢がツアーを貫いた。竜の鱗すら貫通し、内臓まで届く、状態異常満載の凶悪な遠距離攻撃である。

ツアーは「いつの間弓を?!」と地面へ叩きつけられる寸前に思考するも、「そういえばあの特大剣すら瞬時に手にしていたか」なんて諦め気味に目を閉じ、迫ってくる衝撃へ身を委ねてしまう。

重量物が落下し、砂煙を巻き上げる。

振動と轟音が周囲へ広がり、視線を向けてきた勇者たちへ『最後の希望が砕かれようとしている』のだと知らしめる。

勇者ツアーは血の味しかしない唾液を飲み込みながら、世界の破滅を覚悟していた。

「辛そうだなツアー。その様子だと、取れる手は一つだけだと思うが……。命と魂を犠牲にする『始原の魔法』。それしかなかるう?」

「ぐがっ、げふっ、く、ははは……。結局、そう、なのか? 君は最初から、私の『始原の魔法』と……ぶつかりたかった、だけなのか? なんて、我儘なんだ」

もはや頭を上げることすら困難な竜王は、骸骨魔王の真意を知り、軽く笑う。

魔王は戦いを求めていた。

勇者を渴望していた。

恐るべき死闘の果てに——世界を巻き込んだ大虐殺の果てに、一片の欠片も残すことなく殲滅されることを望んでいたのだ。

だがしかし、単純に言えば全力を出せる相手が欲しかったに過ぎない。手持ちのカードを余さず使い切り、精根尽き果てたボロボロの状態で倒れこみ、「楽しかったなあ」と笑いながら消滅できれば何も言うことはないのだろう。

勝敗などどうでもいい。配下が死のうと知ったことか。結果として世界が終ろうとも関係ない。

魔王の思考としては正しいのかどうか……。それは誰にも解らないだろうけど、確かなことは一つだけある。

魔王には説得も取引も、脅迫も懇願も通用しない。

出会ったなら倒すしかないのだ。

他に道はない。

「——『始原の魔法』——」

静かに軽やかに、何かを悟ったの如く眩き、ツアーは全てを捧げて光り輝く。

美しい光の波動であった。恐ろしさは感じず、生き残っていた勇者たちも思わず見惚れてしまうほどに。

「——『モモンガ玉』 発動——」

挨拶を返すかのように、モモンガは何の気負いもなく腹の紅玉、世界級アイテムを開放する。消費するレベルは上限の5。課金アイテムで呼び寄せた『強欲と無欲』から3レベル分を消費し、自身からは2レベル分を費やす。

「なんて綺麗な」と誰かが零した。

「モモンガ様の意のままに」と元僕たちは紅蓮の波動に無抵抗でまれる。

勇者軍と魔王軍は、交じり合った紅と白の世界を前にしてただ佇

み、だらりと武器を下ろしては瞳を閉じる。

もはや全てが無意味だ。

ちつぽけな勇者が聖剣を振り下ろそうとも、矮小なる魔将が高位階魔法を詠唱しようとも、世界は光で満たされる。

悲鳴は要らない。

血も涙も要らない。

生者も死者も平等に塵と化す。

この日、巨大な大陸の辺境において、世界の一部が欠けた。

天を衝く紅白の光は遥か遠くからも目撃され、神が降臨したのだと多くの者が跪いたそうなの。

ただどその中心部に居たのは骸骨魔王だ。

高らかに「——喝采せよ」「我が至高なる力に喝采せよ」などと宣う、大魔王様が居るだけなのだ。

第47話 「リジエネ魔王」

最終戦争が始まる直前、一人の森妖精が大墳墓の入り口を眺めていた。

その女エルフは黒髪のおカツパ頭という『らしく』ない様相であり、身に着けている装備品も極めて軽装。盗賊か野伏の職業を習得してものと思われる。

「いける……かな？」

念入りに隠密スキルを発動させて墳墓をのぞき込み、何者かが居ないか再度のチェックを行う。

「なんだか薄暗いけど、モンスターの気配は無しつと。んじやまつ、おじやましまーす」

誰にも聞こえないようにしているのに挨拶をしてしまうのは癖なのだろう。その軽装エルフは妖精らしくない人間臭さを見せながら、大墳墓の第一階層を一気に走り抜けていた。

「んくつと、ここら辺にトラップがいくつかあったはずだけど、場所変えたのかなあ？ 前に来たのは結構昔のことだし……」

探査しては空気を揺らさず駆け抜け、また探査しては有るはずのトラップを求めてキョロキョロする。

「うむう、おかしい」とエルフは呟く。

大墳墓には恐るべきデストラップが厭らしいほど置かれていたはず——いや、頭の構造を不安視するほどの馬鹿げた量がバラまかれていたはずだ。それもあの「ぶにつと萌え」さんが、人の心理を逆手に取ったムカつく配置で。

普通なら探査に引つかかるトラップを囿にして、本命と大本命が襲い掛かってくる手筈であろう。

それなのに……。

「えっ、うそお？ 第四階層まで無傷で来れちゃった」

昔と違って今は侵入者であるはずなのに、迎撃モンスターとは出会わず、トラップにもかからなかった。というかトラップやフィールド

エフエクトは起動していないように思える。勇者軍とは地上決戦なのだから拠点の防衛機能など不要、と判断したのだろうか？

それならば、ツアーから与えられた策は見事にハマったと言えるのかも知れない。

「ふふ、これなら楽勝かも？ 一気に九階層まで行ってみよつと」

エルフはさらに速度を上げ、無人の氷河地帯を、ジャングルを、溶岩地帯に荒野を駆ける。途中、第六階層にある世界樹ハウスに懐かしさを覚え、少しだけ足を止めてしまったが、あの時のメンバーはもう居ないのだ。

「ぶくぶく茶釜」さんも「館ころもつちもち」さんも、そしてお姉ちゃんも。

「ん？ 誰か居る。アンデッドじゃない、生きている……メイドさん？」

姿を隠すエルフの視線の先では、美しいメイドが一人、一心不乱に掃除をしていた。その様子からは侵入者への警戒というより、不安を解消したいがために仕事に熱中している——のではないかと思われる。

非常に人間臭く、とてもNPCの行動とは思えない。

あのへろへろしていた「へろへろ」さんが過労死するまで頑張っても、こんなプログラムは組めないだろう。

やはり異世界は不可思議だ。

「——動かないでっ。周囲には結界を張ったから騒いでも無駄よ。大人しく私の質問に答えて」

「……………」

片腕を押さえ、首元へ短刀を突き付けながら、エルフはメイドを観察する。

肩まであるサラサラの金髪に意志の強そうな大きい瞳。纏っているメイド服は魔化がほどこされている一級品であり、各所の繊細なフリルからは『メイド服は戦闘服だ』と主張していたあの人を思い出す。「墳墓内の防衛戦力について教えて。貴女以外に誰が居るの？ プレイヤーは？」

「殺したいのであれば殺しなさい。侵入者に教えることなど何も無いわ！」

圧倒的レベル差をもものもしないで、メイドはモモンガ様の敵を睨みつける。

主従の関係が切れていようとも、誇りあるモモンガ様のメイドとして命を惜しむつもりなどない。敵へ情報を与えるくらいなら、即座に舌を噛み切る覚悟である。

「ちよっ!? 何してんの?! 危ないからっ! <睡眠>！」

迷いなく自死しようとするメイドの口へ指を突っ込み、自らの身体を傷付けかねないほどの暴れ狂いぶりを抑えようと眠りの魔法を唱える。

侵入者であるエルフは久しく忘れていたNPCの忠誠心を思い起こし、深いため息と共に軽量なメイドの女の子を床へ寝かせた。

「やっぱり駄目かあ。『ギルド武器』の場所とかも聴き出せたら良かったんだけどな。んゝつと、前来たときは『円卓の間』にあったっけ? 今もそこにあるのかなあ?」

思い浮かべるのは七匹の蛇が絡まった黄金の杖。アインズ・ウール・ゴウンの象徴であり、破壊されたならギルド自体が崩壊してしまう最重要アイテムである。

「九階層だったような気がするけど……。探知魔法には何も引っ掛からないし……。ギルド武器は隠蔽できない仕様だったよねえ。んむむ、でもモモンガさんならどうにか出来そうだから困る」

エルフは過去の記憶を頼りに、ギルド武器が保管されていそうな部屋を開けていく。

ツアーから魔王の話聞き、撃退までの作戦を相談された時は『私でもやれる』と思っていた。レベルは100だし盗賊の職業も得ていたから、アインズ・ウール・ゴウンの主力が地上へ出ているのであれば潜入できると。

それに何度か招待されて色々見回った経験もあるのだから、私以上の適任者はいないはずだ。

ナザリツク地下大墳墓へこっそり忍び込み、ギルド武器を破壊して

魔王軍を混乱に陥れ、勇者軍へ勝利をもたらすという大役をこなせる者は。

「あああ、どうしよう……。見つからない。このままだとツアーさんが殺されちゃうよ。お姉ちゃん、たすけてえ〜」

巨大な扉を開けて薄暗い「玉座の間」を視認したエルフは、膝を落として涙を浮かべる。

ギルド武器を破壊できなければ、勇者軍の勝率は著しく落ちるに違いない。相手はあの魔王軍、アインズ・ウール・ゴウンなのだ。千五百人もプレイヤーを撃滅せしめた頭のおかしいギルド。『世界級アイテム』を前代未聞の二桁所持という、当時のトップギルドでさえ攻め込まなかったチートぶり。

そんな相手を倒せるわけがない。たとえ「真なる竜王」が加わったとしてもだ。

それに率いているのは「あの」モモンガさんである。ペロロンさんじゃない。慎重で恐るべき対応力を持つあの人なら、異世界に来ても余裕でギルドを統率できるだろう。

現実へ戻ったパートナーの件も期待できない。私ですら軽く戸惑った程度なのだから、モモンガさんの能力が低下するとも思えない。

「はあ、こんなことなら海上都市で籠城すべきだったかなあ。でも、八欲王の所為で大量に金貨を消費しちゃったからNPCは動かないし、次は耐えられないよね〜。ああ〜、お姉ちゃんが居ればギルド加入をお願いして、世界の破滅を回避出来たかもしれないのに」

『世界を滅ぼす』と言っているらしい——モモンガさんの脅威から生き残るには、戦って倒すか永遠に逃げ続けるか、の二択しかない。だけど海上都市では籠城できず、ナザリックのNPCたちは砂漠の中に落ちた一本の針すらも見つけ出す優秀さだ。あの「ぶにつと萌え」さんや「タブラ」さんが創り出した化け物なのだから当然だろう。

となると、残る選択肢としては大魔王討伐しかない。

何故か勇者に認定されてしまった「真なる竜王」、ツアーの出番で

ある。

彼の強者であれば、プレイヤーとて無事では済まない。八欲王と同じように、消滅へ追い込むことも可能であろう。

人外の巣窟であるナザリツク地下大墳墓の高レベルNPCたちが、邪魔さえしなければ……。

「マズい、よねえ。ギルド武器を破壊してNPCに混乱を招く——この作戦が不発に終わると、いくらツアーさんでも……って、あ、あれ？」

手詰まりな現状を嘆いていると、誰も居なかったはずの「玉座の間」に強大な魔力が沸きいでる。しかも三か所に。

エルフは愛用の短刀を握りしめながら隠密スキルを発動させると、唐突に現れた闇の扉から距離を取り、柱の陰へ身を置く。

「いったい何者が？」と一瞬考えて、無駄な思考だったと思い直す。ここはギルド拠点なのだ。

直接転移してくるなんて、ギルド所属のプレイヤーかNPC——そう、アインズ・ウール・ゴウンだけだろう。

「あくあ、ツアーさんってば負けちゃったのか……。なら勇者軍も壊滅しているんだろうなあ。となると、これで世界は終わりってこと？」

深いため息と共に額を押さえ、エルフは緊張感のないのんびりとした瞳を閉じると、しばし沈黙する。

「……………諦めるのはまだ早い。一か八か、やってみるしかないね」
死の覚悟を秘め、エルフは眼力鋭く柱の陰から一步を踏み出す。

隠密スキルは解除した。

短刀は腰の鞘へ収めた。

待ち構えるは三つの「ゲート転移門」。誰が出てくるのか、なんて予測するまでもない。

エルフは「メッセージ伝言」を詠唱し、幾人かへ貴重な情報を伝えたのち、指示を下した。

最後の賭けとなるであろう、あまりに勝率の低い無謀な指示を——

◆
世界級アイテム、〃ヒュギエイヤの杯〃。

片手で持てる一般的な杯であり、酒場などでもよく見られる形状だ。材質は金属と言いたいところだが、木製に見えなくもないのでよく分からない。噂では、形状や材質などを持ち主の意思によって変化させることも可能、とのことらしいが本当かどうか……。

ちなみに〃ヒュギエイヤの杯〃の能力は、広範囲展開の生命力持続回復である。持続時間や回復力、対象者の数などは位階魔法を遥かに上回る性能であり、集団戦においては非常に厄介なアイテムであると言えるだろう。

ただ、ユグドラシルで最初にその杯を入手したギルドは、魂が抜けたようにうなだれたそうだ。

『世界級アイテムがこの程度なのか——』と。

それも仕方のない言い分だ。

数多の課金アイテムを浪費し、ギルドメンバーのデスペナを乗り越えまくって辿り着いた先が、位階魔法でも代用できそうな生命力持続回復なのである。糞運営と叫びたくなる気持ちも解ろう。

とはいえ、そんな悲しい評価であった〃ヒュギエイヤの杯〃も、ある日を境に『狂った運営の産物』に相応しいと言われるようになる。

それはトップ三十に入ろうとしていた上位ギルドであった。

いくつかの古株ギルドを吸収し、そろそろ大きめのギルドに攻略戦でも仕掛けてやろうかと意気込んでいた、血気盛んなガチ勢の集まりである。

その日は特に手薄なわけではなかった。

拠点であるダンジョンにはそれなりにギルドメンバーが顔を出しており、狩りへ出ていたチームもすぐに戻れる状況。だから攻略戦を仕掛けられるなんて夢にも思っていなかったのだ。それも自分たちより下位の、無名でしかないギルドに。

『舐めやがって！ 勝てるわけないだろうがっ!!』

トラップを利用できる防衛側は圧倒的優位に立てる。加えてプレイヤーの質や量でも上回るなら、侵入者側に勝機などない。

何の成果もなく己の装備をドロップし、レベル低下のデスペナルティを受けてリスポーン地点へ戻るだけだ。ハッキリ言って無駄死にでしかない。何のための攻略戦なのかと問いただしたくなる。

『……ん？ なんだ？ なんだこれっ?!』

最初の異変は、デストラップに引つかかった侵入者の動性だ。

一度に1チームを全滅させる自慢のトラップに潰されたプレイヤーたちは、すぐに動き出してトラップを乗り越えたのだ。

『即時蘇生の課金アイテムか?』と、いつもなら思い浮かぶのだろう。だがその者らが死亡したのは二度目であったのだ。即時蘇生系の魔法やアイテムは、再使用可能時間リキャストタイムの都合で効果を発揮しないはず。

つまり侵入者は——殺しても死ななかったのだ。

信じられない異常な光景は、侵入者側の全プレイヤーに見られた。誰も彼もが死なず、足を止めず前進し、ひたすら回復し続ける。まさにゾンビアタック。どんな魔法も特殊技術ススキルも効果なく、運営へ違法改造だと通報しても『合法だ』と即座に返答される。

訳が分からないままに追い詰められ、相手を二度殺したところでギルドマスターたる自身も殺され、ギルド武器は破壊された。

あつという間の出来事であった、と言えるだろう。理解する前に押し切られ、呆然とするしかなかった。運営の対応からすると何かカラクリがあるのだと思う。でも別のギルドが自分たちと同じ目に遭うのを見ても、答えは得られなかった。

最後尾にいた侵入者が、何か杯のようなアイテムを発動させたのだけは見て取れたのだが……。

答えが解つたのは、ゾンビアタックギルドがアインズ・ウール・ゴウンへ攻め込み、返り討ちに遭った時だ。

最初から殺しても死なないプレイヤーは相手にせず、杯を持っている最後尾のプレイヤーへ全力攻勢。最悪のPKガチ勢がたった一人へ襲い掛かる光景は、見るも無残な虐殺行為であった。

最後に登場した大魔王も狂っている。相手を何度殺せば気が済むのか？ 公開された動画の前で思わず『よっしやあ！』と拳を握ってしまう。

殺しても死なないプレイヤーから杯を奪うのは、アインズ・ウール・ゴウンでも困難を極めた。だけど、HPがゼロになった瞬間ならば〈強奪〉が可能だと確信していたのか予想していたのか、幾度目かの殺害時、とうとう小さな杯は「チグリス・ユーフラテス」の手へと渡った。

それこそが世界級アイテム、「ヒュギエイヤの杯」。

HPがゼロになっても生命力^{リッ}持続回復^{ネー}が発動し、死亡と判定されず戦い続けることが出来る——アイテムドロップやデスペナルティすらも無視可能な、恐るべき支援アイテムであった。

宝物殿から持ち出された「ヒュギエイヤの杯」は当初デミウルゴスに渡され、「デミウルゴスが^{ネーム}レス・スベルブツク^{ブック} 無銘なる呪文書」を手にした後は、「強欲と無欲」をモモンガ様へ渡していたマーレへと送られた。

そしてマーレは、モモンガ様と勇者ツアーが全てを呑み込む光の渦を形成したその瞬間、己の5レベルを費やして「ヒュギエイヤの杯」を発動させたのだ。

対象は——必要ないとは思うもの——モモンガ様、姉と自分、各守護者と大事なドラゴン、他は面識のある側近とかとにかく目についたナザリックの仲間たちを徹底的に。多量の経験値を注ぎ込んだのだから選択容量に不足はなく、塵となりかけていた異形の者たちは、あつげにとられながらも再構成される己の身体から目を離せない。

魔王軍は全滅必死の最中から生還を果たした。

マーレが「ヒュギエイヤの杯」を発動させなければ、直径三十キロにも及ぶ巨大なクレーターの中央で佇むは大魔王だけであつただろう。

骸骨魔王モモンガは、マーレがナザリックの者たちを助けると確信があつたのだろうか？

“ヒュギエイヤの杯”をマールレに持たせていたのだから、当然そのつもりだったのだとデミウルゴス辺りは頷くと思うが……。実際は違うのかもしれない。

モモンガ様は『どちらでもよかった』と言いきうだ。

勇者軍が先制不意打ちを仕掛けてきた時も、アウラが“さんがしやくず山河社稷図”を発動させると提案していなければ、魔王軍が半壊する様を嬉しうに眺めたのではないだろうか？

とはいえ、真実は魔王様にしか分からない。

“始原”と“世界”の衝突により木っ端みじんとなった勇者軍を、満足そうに看取るモモンガ様にしか分からないのだ。

「モモンガさまあ！ お怪我はありませんか?!」

「愛しの我が君い！ ご無事でありませんかあ?!」

真つ先に駆け込んできたのはアルベドとシャルティアだ。爆心地に最も近かったはずなのに、“ヒュギエイヤの杯”の“リジェ生命力持続回復トで四肢五体のほとんどが治癒されている。

“ギンズンガガフ真なる無”

の大盾で直撃を避け、爆砕されることを防いだのであるか？ 他の者たちが四肢の再生すらまだだということ鑑みると、流星は元守護者統括に元守護者最強である。

「おお、二人ともご苦労だったな。デーブダークネス・ドラゴンロード常闇の竜王”との戦いは

どうだった？ 上手くいったのか？」

辺りを見回しても闇色の巨大なドラゴンは居ない。魔王軍の生き残り以外は、恐るべき破壊の痕跡しか見えない。

「申し訳ありませんモモンガ様、常闇の竜王”は地下深くへと逃れました。もう少しで仕留めることが出来たのですが……」

「申し訳ありませんモモンガ様。あの気持ち悪い竜王は、想像以上の再生力を持っていました。攻めきれなかったでありんす」

深々と首を垂れる両名の前で、モモンガは「ほう」と嬉しそうに答えた。“真なる竜王”が全滅しなかったことで、再戦の可能性を見たのだろう。

食べ尽くしたと思っていた好物がまだ残っていたのだ。骨だけの頬も緩もう。

「あの竜王は地面に接していると強力な再生能力を得られるようです。地下を活動拠点としている理由もそれかと。次に戦うときは、フィールドを変化させる必要があります」

「え？　そうでありんしたの？　竜のくせに地面に引つ付いたままだから、おかしいとは思いましたけど……」

「ふむ、面白そうな奴だな。戦える日を楽しみにしておこう」シャルティアへ特に突っ込むことなく、魔王は地下深くに潜む竜王へ想いを馳せる。『再生能力が最高に高まる場所で戦ってみよう』と。

「――アルベドお姉様、今帰った。大丈夫？」

「あら」

アルベドが振り返ると、十二枚の白い翼を広げたルベドが舞い降りていた。片手に青い竜の巨大な肉片を掴みながら。

「貴女が戦っていたのは、ヘンリー・ドラゴンロード『聖天の竜王』だったかしら？　上手く仕留められたの？」

「ごめんなさい、逃げられた。さっきの爆発にお姉様たちが巻き込まれたと思って、追いかけないで戻った。それにちよつと……眠い」

竜王の肉片を地面へ落とし『ふわわあ』と欠伸をする天使ルベドは、強力な個体でありながらも制限がある。一日の活動時間は三十分、一度動き出せば途中停止は不可能、再始動するまでに必要な時間は二十四時間だ。この制限はギルドが無くなってからも撤廃されなかった。

ユグドラシルであれば、特例で置かれていたルベドを運営が回収する手筈だったのだが、異世界では当然無理な話である。だからルベドは唯一の抛り所である姉の元へ身を寄せ、姉のためだけに戦うのであった。

ちなみに、骸骨魔王モモンガなどは眼中にない。

「これで逃げた『真なる竜王』は二体か。楽しみが増えたな」
くくく、と笑いを漏らす大魔王は、ツアーとの大爆発直前に確認していた状況を思い出す。

エルダーコフィン・ドラゴンロード
ガルガンチュアと意味不明な殴り合いをしていた『
朽棺の竜王』はぐちゃぐちゃに潰れ、絶命していた。逃げるこ

とは可能だったはずなのに、何に拘っていたのやら。

変身したセバスとタイマンをしていた^{ソートマスター・ドラゴンロード}“千刃の竜王”は、セバスと相打ちになっていた。実力では勝っていた竜王だが、この地で死ぬつもりはなかったのだろう。命を捨てて突っ込んできたセバス相手に、一拍遅れたのは覚悟が無かったからに違いない。ちなみにセバスは“ヒュギエイヤの杯”のお陰で死んではいなかった。どこかの悪魔が舌打ちしたかどうかは不明である。

アウラとマールレの相手をしていた^{フライトネス・ドラゴンロード}“七彩の竜王”は空気を読まずに降伏したらしい。そんな結末など誰も望んではいなかったというのに、双子の闇妖精と二体の強力なドラゴンに囲まれた竜王は、始原の力が限界に達した瞬間『打つ手無し』と地上へ降りたのだ。とはいえ降伏を言い終える前に、マールレが“シヤドウ・オブ・ユグドラシル”で脳天を潰したのだから勝ちも勝ちだろう。まさか話を一切聞かずにノータイムで殺しにくるとは、流石の竜王様も驚いたに違いない。当のマールレは、害虫を駆除した程度の態度であったが……。

「“六竜”の内、仕留めることが出来たのはツアーを含め四体か。中々面白かったな。さて、他の勇者たちは——」

視線を上げる魔王の前には、表層を抉り取られた無残な大地が広がるばかりであり、勇者らしき存在は見えない。クレーターに立っているのは何れもナザリックの元僕たちばかりだ。一度は勇者と共に光の渦に消し飛ばされたのだろうが、“ヒュギエイヤの杯”によって命を繋いだのである。もっともマールレが効果対象として選択しきれなかった者たちは、塵となってこの地に舞っている。当然ながら、野良となってしまうNPCに復活の可能性はない。

「ああ、エルフの女王も木っ端微塵か。これは“ギャラルホルン”を見つけないのが大変だな。どこまで吹っ飛んだのやら……」

世界級アイテムだから消滅や破損はないだろうけど、遙か彼方まで飛んでいった小さな天秤を探すのは気が遠くなる。パンドラに丸投げすれば数か月で見つけてくるような気もするが、もはや部下ではないので命令するつもりもない。それより他の敵対者に渡って、いつか戦いを挑んできてくれたら喜ばしい。

「勇者軍は全滅か……。しかしまあ、終わってしまうと寂しさすら感じてしまうな。ツアーとは『何度も戦いたい』と思わずにはいられん。八欲王が羨ましいぞ。大量の『真なる竜王』と消滅するまで戦えたのだからなあ」

楽しかった祭りが終わる。モモンガにとってはそのような感覚なのかもしれない。アンデッドとしては如何なものかと言いたくなるが、殺戮者としては正しいのだろう。勇者を撃退した他の世界の魔王も、きつとこんな虚しさを味わっていたに違いない。

「さて、生き残った者を連れてナザリツクへ戻ると――」

「それは許さん。貴様には消えてもらう」

回復途中の守護者や眠っているルベドを背負うアルベド、そしてモモンガを庇うような立ち位置へ滑り込んだシャルティアは、無礼な口を挿んできた何者かを視界に収めようと空中を見やる。

第48話 「試験魔王」

「勇者軍の生き残りでありんすかえ？」シャルティアが見つけたのは、紫の波動が漂う漆黒のローブを着込んだ骸骨だ。感覚的には多くのユグドラシルアイテムを身に着けているらしく、一瞬プレイヤーかと誤認するほどである。だけど実力的にはカンストではない。モモンガ様の前に立つには実力不足であろう。

「はん、〃ナイトリッチ〃。ごときが最後に登場とは笑わせるでありんす。デザートの価値もありんせん」

強力な高位階魔法を操る、この世界でも最上位と言える恐るべきアソデッド、それが〃ナイトリッチ〃だ。各地で伝説上の存在となっており、動き出せば大陸一つが死に覆われるとまで言われている圧倒的強者。

つまり、モモンガ様にとっては雑魚である。

「くくく、大魔王とやら感謝するぞ。貴様のお陰で我は頂点——最強の存在へと進化出来るのだからな!!」

自分に酔っているかのようなナイトリッチは、骨の指で懐から〃植物の種〃を取り出し、口元へ寄せる。

「今まではナイトリッチの先を見出すこと^{みいだ}はできなかつた。だが魔王を名乗る貴様を見た瞬間、進化の可能性を掴み取ることが出来たのだ! 今こそ我はアソデッドの神となる!!」

食道などあるはずもないのに、ナイトリッチは世界級^{ワールド}アイテム〃世界樹の種〃をゴクリと飲み込んだ。

「魔王を名乗る愚かなアソデッドよ、聴くがよい! 我が名はズーラーノーン! 数百年に渡り闇の世界を支配し続けてきた絶対者である!!」

ズーラーノーンが飲み込んだ〃世界樹の種〃は、種族変更を可能とするアイテムだ。

ユグドラシルにおいて種族変更の手法は複数あれど、一体しかアバターを持たないプレイヤーたちには大して貴重でも重要でもない。

カンスト勢ならばなおさらだ。種族を変えれば、せっかく上げた種族レベルを無駄にしかねないのである。それにアンデッドは種族変更不可なので、モモンガなどは変更について考えたこともないだろう。しかし、「世界樹の種」はアンデッドであろうとも種族変更を成し、尚且つレベルはカンストまで上昇。加えて腹の中には「世界」^{ワールド}の加護を与えてくれる種が残るわけだ。

となるとズーラーノーンはどんな種族へと変化したのか？

いや、人間種などになったわけではない。「世界樹の種」は変更だけでなく、進化も可能なのだ。つまりナイトリッチの上位種族、モモンガを認識したために進化の枝先に派生した最強のアンデッド——「死の支配者」^{オーバード}へとクラスチェンジしたのである。

「ほう、上位種になるために世界級アイテムを使う奴など初めて見たぞ。ユグドラシルではほぼ全員がカンストプレイヤーで最上位種だったからなあ」

「くははは、なんとという力だ！ これなら竜王どもも羽虫のように潰せる！ 負ける要素など微塵もない！ 我に傷をつけることすら不可能だろう！ まさに神に匹敵する——いや、神をも超える無敵の力！ ふはははは！ ひれ伏すがいい愚物どもがっ!!」

一度に三十や四十ほどレベルが上がったら、それはもう舞い上がることだろう。自分こそが絶対無敵の最強アンデッドである、と思いつんでも仕方がないと言える。

だからモモンガは、優しい眼差しで興奮冷めやらぬズーラーノーンを眺めるのであった。

「面白い奴でありんすねえ。モモンガ様と同じ種族になれんしたことが、そんなに嬉しいんでありんしょうかえ？ 気持ちは分かりんせんでもありんせんが……」

「ふん、同じ種族と言ってもモモンガ様とは比較にもならないわ。急ごしらえの張りぼてみたいなモノでしょう？ 目障りだから殺してしまいたいところだけど」

大魔王に寄り添う二人の妃からは、危機感のない雑談が零れてくる。目の前に勇者軍の残党、レベルカンストの死の支配者^{オーバード}が現れよう

とも、大きな問題だとは思っていないようだ。

「さて、同種族とのPVPは久しぶりだから、ほんの少しワクワクするな」

アルベドとシャルティアをその場へ残し、モモンガは一人、オーバードと対峙する。

「ほざけ、偽魔王がつ。ツアインドルクスとの戦闘で疲弊した貴様など、相手にならんわ!」

ズーラーノンは最初から漁夫の利を得るつもりで勇者軍へ参加していた。邪魔な「真なる竜王」や同格のナイトリッチが滅ぼされていくのを、無感情のまま眺めていたのだ。

目的はただ一つ、己の進化のみ。

アンデッド塗れにして壊滅させた国家の宝物殿——そこで偶然見つけた「世界樹の種」を、もつとも効率よく使用するために。

「ふふふ、ふはははは!! 溢れんばかりの魔力だ! これなら第十位階魔法とて容易く扱えよう! くくく、我は今、魔導の頂点へと至ったあ!!」

「アンデッドなのに元気な奴だなあ。まあそれなら、ガチ勢上級者用の認定試験でも受けてもらおうか。〈時間停止〉」

「ぬ?!」

耐性を持たない者にとって〈時間停止〉は最悪の魔法と言えるかもしれないが、^{ワールド}世界の加護を持つズーラーノンに効果はない。

互いに影響を及ぼすことのできぬ止まった時間の中で、向き合うだけだ。

「これが〈時間停止〉か……。中々やるではないか、アンデッド」

「ん? まだまだこれからだぞ。〈魔法遅延三重最強化〉」

現断、〈魔法遅延最強化・隕石落下〉、〈魔法遅延抵抗難度強化〉

内部爆散、〈魔法遅延最強化・万雷の撃滅〉」

「なっ?! な、な、なんだあ?!」

「何をしているんだ、ズーラーノンとやら。速く対応しないと〈時間停止〉が解けた瞬間、遅延化させた魔法が雷雨のごとく降り注ぐぞ。つとまだいけるな。〈魔法遅延三重最強化・朱の新星〉、

〈魔法遅延効果範囲拡大化・
重 力 渦〉

シャークサイクロン
大顎の竜巻、

〈魔法遅延三重化・

「ば、ばかなっ！ 時間が止まった状態ではどんな魔法も意味を成さないはず！」

「ああ、だから遅延化させて時間が動き出した瞬間を狙うのだ。このタイミングは結構シビアだな。ガチ勢の上級者を選別するには丁度良い手法なのだぞ。さあ、アンデッドの神とやら、お前の力を見せてくれ。〈魔法遅延三重最強化・魔法の矢〉」

ズーラーノーンは止まった時の中で、発動を遅延化された多くの魔法と向き合う。

馬鹿げている。

狂っている。

誰がこんな状況を打破できるというのか？

〈時間停止〉が解けるタイミングだと？

それに合わせた遅延化だと？

いったい何を言っているんだ？！

「ああ、ああああ、うわああああああああああ！！」

分からない。

対応しろと言われても、何も理解できない。

逃げればイイのか？ いや、時間が止まっ**て**いては**へ**転**移**の魔法も発動しない。いやいや、それを遅延化させればイイのか？ でも

どれだけ遅らせればイイのだ？！
「やれやれ、やはり神とやらはイベントボスの雑魚に過ぎないな。つまらない余興であった。……………さあ、時は動き出す」

「おああああああ！！ たすけ——」

死の支配者は強力な魔法耐性を持つ——はずなのだが、この時宙に舞った骸骨は、ボロ雑巾よりも酷い有様であった。

命果てるまでにどれほどの悲鳴を上げたのか？ どれだけの恐怖に蝕まれたのか？ アンデッドの神を自称していながら、何度神に祈ったのだろうか？

小さくて哀れな骸骨は、最後の欠片一つまでも徹底的にすり潰さ

れ、燃やし尽くされた。身に着けていた魔法具マジックアイテムさえ跡形もなく。

彼の者の痕跡は、ただ一つ。

小さな植物の種だけだろう。

「うゝむ、大人げなかったかもしれんなあ。もつと遊んでやればよかったか?」

「そんなことはありませんわ、モモンガ様。あのような尊大な態度の者に御慈悲を与える必要など」

「ほんに。モモンガ様の魔法をあれだけ浴びせてもらいんしたのだから、羨ましいぐらいでありんすえ」

新たに増えた小規模のクレーターを前にして、魔王と妃たちは和やかに言葉を交わす。

その周囲にはパンドラやデミウルゴス、アウラにマーレ、コキユートスやセバス、そしてプレイアデスの面々が集まり始めていた。

その他の元僕たちに関しては半壊と言ったところであろうか。レメゲトンの悪魔や八階層の「あれら」の中にも複数の損害が見える。

ヴィクティムは死亡したようだ。

ガルガンチュアは機能不全のところを「ヒュギエイヤの杯」によって回復を果たしていた。レイドボス級の巨大な動像ゴレムを全快させるほどの効果とは、さすが世界級と言ったところであろうか。

「皆、勇者軍との戦いに付き合ってくれたことを感謝する。おかげで楽しいひと時を過ごすことが出来た」

大魔王からの突然の謝意に、誰もが跪いてしまう。もはや主従関係などないというのに。

「私はこれからナザリックで一息つこうかと思っているが、皆はどうする? 一緒に行くか?」

御主人様であった御方が、元僕を誘うというのも不思議な光景であろう。とはいえ、元僕たちの答えは一つしかない。

「はい、お供致します、モモンガ様!」

世界を滅ぼす恐るべき魔王軍。

勇者たちを壊滅させたその者たちは、魔王と吸血鬼、巫女の創り出した闇の扉を潜って姿を消した。

向かうは主無きダンジョン、ナザリック地下大墳墓。

その増設された第十階層、玉座の間。

ただ、その場には招かれざる客が入り込んでいた。

全員に拒絶されたと言っていたツアーの嘘。たった一人、協力を申し出たプレイヤー。魔王軍が出払っている間に、ギルド武器を破壊しようとしていた森妖精^{エルフ}。海上都市からの訪問者。アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーであった「やまいこ」の妹。

その名は「あけみ」。



「ん？ 先客がいるようだが……、見たことのある顔だな」

〈転移門^{ゲート}〉を潜った先にある薄暗い玉座の間には、どこか懐かしさを覚える森妖精の姿があった。

その者は軽装であり、武装はしているものの戦う意思があるようには見えない。とはいえ、出迎えているわけでもなさそうさだ。

「おんやあ、あけみ様ではありんせんかえ？ お久しぶりでありんすなあ」

「おおお、ホントだ！ あけみちゃん元気だった？」

「あ、あの、あけみ様こんにちは。ま、また会えて嬉しいです」

別の〈転移門^{ゲート}〉から飛び出してきた三人娘（？）は、意外な人物の登場に一瞬だけキョトンとするも、すぐに森妖精を囲んで質問攻めにしてしまう。この異世界において初（？）となるモモンガ様以外のプレイヤーなのだから当然と言えば当然なのだが、自分たちの造物主に関係のある人物であることも要因だと思える。

少し時間を挿んで玉座の間へやってきていたユリやペストーニヤも、なんだか話しかけたそうにしていた。

「思い出話をしに来たわけでもなさそうだな」困った表情でアウラやマーレを撫でているあけみへ、モモンガは助け舟を出す。

「ナザリックの第十階層までできたからには、相応の要件があるのだろうか？ 聴かせてもらおうか」

「……その前に聴きたいのだけど」見知った顔ぶれに安堵し、モモンガと言葉を交わせることに気を取り直すも、タブラやウルベルトのNPCが放ってくるねっとりした殺気に冷や汗が出る。

「ツアーさんは死んだの？ 勇者軍は、どうなったの？」

答えが分かかっていても問わないわけにはいかない。

「ああ、ツアーは死んだぞ。見事な最期だった。勇者軍は九割以上が消滅。生き残ったのは『真なる竜王』が二体と——、お前ぐらいかな？ あけみ」

魔王からの指摘に、傍に居た吸血鬼ヴァンパイアと闇妖精ダークエルフの目つきが変わる。

「ふん、わたしはさ、ツアーさんが戦っている間にナザリックへ忍び込んで、破壊工作をする予定だったの。でも肝心のモノが見つからなくて……。モモンガさん、ギルド武器は何処なの？ 貴方が持っているレプリカじゃなく、本物のギルド武器は？」

今からでも大魔王を倒す秘策はある。

ギルド武器を破壊し、NPCたちを自由にしてしまえばいいのだ。ギルドから解放された化け物たちは協力関係を放棄し、互いに覇を競い合うだろう。悪魔などは己の欲望そのままに、魔王すら跪かせようとするに違いない。プレイヤーと言えど、高レベルNPCたちの猛攻には手も足も出ないはずだ。

もちろん、NPCに囲まれたこの状況下でギルド武器を破壊するなんて絵空事だろう。確率はゼロに近く、自分も助かるまい。

だがそれでも世界を存続させたいのであれば、小さな可能性に懸けるしかないのだ。

「ギルド武器なら——解散時に分解されたはずだな、パンドラ？」

「はっ、素材は全て回収済みでありますので、再度作成する場合は御声掛けください。以前のモノより素晴らしいギルド武器を作成して御覧にいきましょう！」

「え？ 解散に、分解？ ギルド武器が、素材に？」

『何を言っているのこの魔王は』と文句を言いたくなると同時に、疑問に感じていた事柄が頭に浮かぶ。

魔力供給がなされていないかのような薄暗い階層に、トラップや

フィールドエフェクトの沈黙。自動沸きモンスターすら見かけず、ナザリックがまるで機能を停止させているのではないか？　と思えてしまうほど。

とはいえ守護者たちの様子を見るに、絶対的な忠誠心はそのままであろう。ギルドが解散しているのであれば、そんなことはあり得ない。

そう、あり得ないはずなのだ。確かめたことは一度もないのだが。「そんな馬鹿な！　ギルド武器がない？　ギルドを解散させたあ？

そ、それが本当なら、どうしてNPCたちがモモンガさんの傍に居るの?!　ギルドから外されたNPCは魔神のように暴れるはずじゃ……」

遠い昔に出会ったプレイヤーと英雄集団。その者たちが討伐していたのは狂ったNPCたちであった。

主が居なくなったのだ、ギルドが無くなったのだと理由は様々であろうが、枠組みから外れてしまったNPCは危険極まりない。世界を危機に晒す害悪である。だから、ナザリックのNPCがモモンガへ寄り添っている光景は奇妙奇天烈だ。ギルド解散など狂言であると思えないほどに。

「あけみよ、真実など他者から与えられるものではないぞ。自分自身で獲得するものだ」モモンガは少し嬉しそうに「諸王の玉座」へ腰を下ろすと、「〈転移門〉でも使ってみろ。階層間の障害が無くなってから、お前でも使えるはずだ」などと、あけみへ転移魔法の使用を勧める。

「……うん、確かに使えそうだけど」

実際に発動させなくとも、抵抗感の有無で結果は分かる。

ナザリック地下大墳墓、第十階層「玉座の間」から地上まで、また他の階層まで〈転移門〉を繋げることは可能であった。

それならば——とあけみは、一滴の希望を掴もうとする。

「モモンガ様！　大変ですー！」

あけみに注目していた異形たちが、一斉に別の一点へ視線を向ける。

そこに居たのは、そして警鐘を発したのは、長い黒髪で皮の無い顔を覆っていた一人の鬼女、ニグレドであった。

「どうしたニグレド？」

「はい、ナザリックに侵入者です！　すでに第五階層まで入り込まれました！　監視網が機能していない隙を突かれた模様です！　申し訳ありません！」

ざわりと元守護者、元僕たちの気配が変わる。

勇者軍を撃退した直後であるだけに「いったい何者が？」といぶかしく思うも、監視網を含む全ての機能が停止している現状を狙って侵入してきたのであれば、只者ではないと判断せねばならない。

それによく考えれば、目の前に斥候が居たではないか。

ナザリックが第十階層までどのようなになっているのかを知っている、丁度良い人物が。

「お前が手引きしたのだな、あけみ」

大魔王からの静かな問いかけに、NPCたちの殺気がまわりつく。

「ええ、そう。ついさつきね。漆黒聖典の隊長さんに、『人類の切り札を持ってきて』って頼んだんだけど……」

ギルド武器破壊が失敗し、魔王モモンガがナザリックへ戻ってきたと確信したその時、あけみは〈^{メッセージ}へ伝言〉で最終手段への移行を指示していた。

大魔王を滅ぼせるかもしれない「あるモノ」を第十階層へ運び、骸骨魔王モモンガへぶつける。そのために必要な全ての手段をとるよう、魔王討伐連合軍へ伝えていたのだ。

「ニグレド、侵入者は何者だ？」

「はい、侵入者は人間です。第六階層で鍛えていた勇者やレア、帝国と聖王国の騎士、都市国家連合の傭兵も居ます。現在第一階層から第五階層の全域に浸透しており、最深部には「蒼の薔薇」や「漆黒聖典の槍使い」、^{「聖王国女王」}の姿もあります」

「くくく、いいな。素晴らしいな」何の含みもなく、モモンガは称賛の声を上げる。

「やはり居城に攻め込まれるのは魔王の醍醐味だな。切り札とやらを用意しているのも好印象だ。これは全力で歓迎しなくてはなるまい」
今はただのダンジョンだが、魔王が玉座に座っているのなられっきとした魔王城だ。そして侵入者が人間の勇者たちであるならば、他に何も言うことはない。

決戦である。

トラップやフィールドエフェクトが動かなくとも、対峙するモンスターが大幅に減っていても、真正面から打ち砕く。

背筋がぞくぞくするほどの宴が、今まさに始まるのである。

「シャルティア、第一階層へ行ってもらえるか？」

「もちろんでありんす！ モモンガ様の居城を汚すゴミ共には、死の制裁を与えて御覧にいれんしょう!!」

「コキユートスは第二階層を頼めるか？」

「オオ、才任セクダサイ！ 勇者ノ全力ヲ引キ出シテカラ、完膚ナキマデニ仕留メマス！」

「アウラは第三階層を、マーレには第四階層の掃討を頼む」

「はい！ みんなと一緒に皆殺しにしちやいますね！」

「は、はい！ ボク、モモンガ様のためにいっぱい殺します！」

「第五階層はデミウルゴスに頼みたいが、大丈夫か？」

「はっ、生き残った悪魔たちが同行してくれるので問題ないかと。ですが……、いえ、なんでもありません」

「セバスとプレイアデス、ペストーニャやニグレドは、九階層に避難している一般メイドの元へ向かってもらいたい。心細い思いをしているだろうかからな」

「なんとお優しい。では私は第九階層へ赴き、上層階からの侵入者へも注意を払いましょう」

「お姉様たちと共に防衛態勢を整えます。お任せください、モモンガ様」

「何かあればお呼びください——わん」

「モモンガ様、下の妹も九階層へ避難させますわ。状況に変化があれば随時お知らせいたします」

すでに主人ではないモモンガの頼みを聞き入れ、元守護者や元側近たちは次々と第十階層から姿を消す。階層間の移動が阻害されていないものだから、〈転移門〉や〈上位転移〉グレート・テレポーションを使つての大移動である。

先程までひしめき合つていた高位モンスターグレート・テレポーションの威圧感が、大分薄れたのではないだろうか？ これで残る二本角の白い悪魔と軍服埴輪男が居なくなれば、あけみは玉座の間でモモンガと二人つきりになる。デミウルゴスが気にかけていた通りに……。

「アルベドは大図書館の様子でも見に行つてくるといい。パンドラは宝物殿を頼む」

「モモンガ様。御身の傍から私たちを遠ざけ、あけみ様の仰る『切り札』と対面したいという御気持ちは理解いたしますが……」

「そうですっ！ 御一人では危険でございます！ 少なくとも我ら二人はこのままで——」

デミウルゴスやアルベド、パンドラが予想していた通り、モモンガが求めていたのは一対一だ。

玉座の間であけみが用意した謎の切り札と御対面。そしてツアーの時と同様に、死力を尽くしてぶつかり合うのだ。だから供など不要。ラスボス戦で配下を引き連れている魔王なんて、恥晒しもいいとこだ。

玉座には魔王が一人、静かな空間でゆつたりと待ち構えるべきである。

邪魔は許さない。

「アルベド、私のことを真に想うのであれば、この場は一人にしてくれ。パンドラも同様だ。大魔王たる私には、絶対に成さねばならない一戦があるのだよ。アインズ・ウール・ゴウンを結成してから、ナザリックを得てから……。『悟』とロールプレイを極め、ユグドラシルに降臨し、異世界へ渡つてからもずっと求めていた、大事な一戦が」
命令に束縛されない身なれど、愛する人からの懇願には無力だ。加えて御心を理解できてしまうが故に、反論などできない。

アルベドとパンドラは静かに首を垂れるしかない。

「信じておりますわ、モモンガ様」

「御父上、御武運を」

アルベドは大扉を潜って大図書館へ、パンドラは玉座後ろの隠し通路を抜けて宝物殿へ。

かくして「玉座の間」には魔王が一人、森妖精と相対す。

第49話 「彼方の魔王」

すべては偶然に彩られる。

最初から計算していたわけではない。

勇者軍が勝利していれば、用意していた切り札など、暴走するであろうNPCの殲滅に使われていたはずだ。それが何の因果か、大魔王相手に使わねばならなくなった。

だから邪魔なNPCたちを魔王から引き剥がそうと、各国の騎士や冒険者に上層階を侵略してもらい、命を懸けた鬼ごっこに興じてもらう。大魔王を倒すまで、階層の端から端まで走り回ってもらおうのだ。

魔王の傍には数名程度残るだろう、と予想していた。だけど魔王自身が人払いを行い、目の前に残るは水晶の玉座に座る骸骨魔王だけである。

最高のタイミングであろう。

それに漆黒聖典の隊長に持ってきてもらう予定であった切り札も、転移の障害が無くなっている今の大墳墓ならば、容易に玉座の間まで運んでくれる。

全ては整った。

「へ伝言^{メッセージ}、隊長さん！ そこに門を開けるから女王様を投げ入れて！

〈転移門^{ゲート}〉！」

『——っえ？ あ、はい！ あけみ様！』

「ん？ 女王、だど？」

モモンガの疑問をよそに、あけみは闇の門を広げ、その中から飛び出てくる小柄な人間らしき存在を受け止める。

「っと、女王様、大丈夫？」

「んぐうく、ごほつけほつ、……あの小僧め、荷物みたいに投げ捨ておつて」

見覚えがある、とモモンガは生意気そうな少女を眺める。

確か人間の連合軍を結成させる場に居たはずだ。名前はそう、ドラウディロン・オーリウクルス。竜王国を治める女王で、つい最近までビーストマンの脅威に怯えていた弱者である。

この世界では非常に珍しい竜の血を引く“ウルトラレア”であったため、モモンガの記憶に残っていたようだ。

「珍妙な客人だな。しかし、これが切り札なのか？　あまり期待できそうにないが……」

「あけみ殿、ここはもうよい！　上層で囷になっっている者たちを救出してくれ！　このままでは皆殺しになってしまうー！」

「——うん、分かったよ。……女王様、全てを背負わせてごめんね」最後の別れとでも言うかのように、あけみは女王の肩を軽く抱くと、直後に開けっ放しだった〈転移門〉へと飛び込んだ。

闇の扉はすぐに閉じ、女王の退路を閉ざす。この状況では女王単独での脱出など不可能だろう。外部からの干渉を魔王が妨害すれば、救出することもできなくなる。

だというのに、若い女王が狼狽する気配はない。魔王を睨みつける瞳からも、強い覚悟の意が見て取れる。つまり、逃げる気は最初から無かったのだろう。命を捨てるつもりでナザリツクへ侵入し、魔王の前へ身を置いているのだ。

切り札というのもハツタリではないのかもしれない。

「さて、どんな見世物を用意しているのだ？　聴かせてもらおう」

二人きりの静かな空間に、世界を破滅させる大魔王の言が響く。

「大魔王よ。私の国が、竜王国がどうなっているか知っているか？」胸の奥から絞り出すかのように、女王はか細く叫ぶ。

「ああ、貴様の配下がビーストマンを殺しまくってくれたお陰で国としては生き永らえた。だがその後どうなったと思う？　国中にバラまかれたビーストマンの死骸から疫病が発生したのだ！　弱り切っていた我が国民には抵抗しようもない、恐るべき疫病がつ！　戦争に次ぐ戦争、ケガ人ばかり、腹を空かせて病気を乗り越える気力も体力もない。他の国から援助を受けようにも、貴様を討伐するための連合軍形成で余裕などない。我らに出来たことと言えば、疫病が外へ広がらぬよう対処するだけ……」

憎悪と悲しみが混じり、涙声が零れる。

「解るか大魔王!?　竜王国は終わりだ！　辛うじて生き残っていた百

万の国民は——早々死に絶える！」

「ふくむ、疫病で全滅するとは脆い生物だな。その程度であれば生かしておく必要もあるまい。女王よ、竜王国は崩壊してかまわんぞ。報告御苦労」

「はあ?!」

多くの人間を生かしておいたのは、その中から勇者が生まれるのを期待してだ。だが疫病ごときで死滅するほど脆弱であるならば、生かしておく必要性などない。

モモンガは軽く手を振り、『話がそれだけならば下がってよいぞ』と怒りに震える女王へ申し渡す。

「ふ、ふぎけるなあああ!!」瞳に涙を湛え、女王は身に宿す恐るべき力を輝かせる。

「教えてやるぞ魔王! 死を目前にした竜王国の国民は、私に全てを託したのだっ! 病に屈するくらいならば貴様を倒すための力になると、〃魂〃を捧げてくれたのだ!!」

竜王国の女王が持つ特別な力。それは他者の魂をかき集めて放つ〃始原の魔法〃。百万の魂ならばツアーの大爆発さえ真似ることが可能とされる、人類側の切り札である。

「おお、そういえば老婆の記憶にもあったな。〃真にして偽りの竜王〃だったか? ふくむ、この状況で出してくる切り札としては中々面白そう……だが」

新しいオモチヤの登場に一瞬だけ紅い瞳を輝かせる魔王様であったが、女王に内包された魂の総量を感じとると、深い溜息を吐きながら玉座の背もたれへ体重をかけてしまう。

「その程度か……。やれやれ、百万ぐらいの魂で私を滅ぼそうとはな。私はつい先程、本物の〃真なる竜王〃と戦ってきたばかりなのだぞ。その私に〃始原〃の真似事なんぞ見せてどうする? まったくあけみの奴め、これが本命なのか?」

「くくく、くはははははははー!」

玉座の間に、可愛らしい幼女の奇怪な笑い声が広がる。

「愚かな魔王め!」女王は己の命もろとも弾け飛ばんばかりに、膨大な

眩い光で玉座の間を照らす。

「あけみ殿から聴いているぞ！ 貴様の居城である大墳墓の各階層は、別次元に設置されているそうじゃないか！ 壁に穴をあけても、どこかに繋がっているわけじゃないんだろ?! ならば階層ごと破壊されたら、貴様は何処へ行くんだろうな!? ふははは、私が試してやろう！」

「ほう」

突拍子もない発言を受けて、モモンガは少し前のめりになる。

女王の標的は、最初から魔王ではなかったようだ。『始原の魔法』で狙っていたのは、魔王の座する階層そのもの。『始原』の力で別次元に存在するという階層を丸ごと破壊し、この世界から隔絶されている次元の彼方へ魔王を放り出すつもりなのである。

「発想自体は悪くないな。やってみるといい」

「ほざいたな魔王！ この世界に戻ってこれぬほどの次元の渦に飲み込まれるがいい!!」

——『始原の魔法』!!』

ナザリック地下大墳墓、第十階層、玉座の間。

そこでは百万人にも及ぶ人間の魂と、竜の血を引く女王の全てがビックバンのごとく爆裂した。膨大な光の波がシャンデリアや調度品、天井を支える柱に、撤去されていなかった四十一の旗などを覆いつくす。

始原の力は玉座にゆったりと座っている魔王ではなく、玉座の間の天井や床、そして壁面へ向けられ、空気の詰まった風船を破裂させるかのように押し広げた。

ユグドラシルでは不可能とも思える行為だろう。あけみも異世界でなかったならば提案すらしなかったに違いない。だけど現実化したこの世界では、ナザリック地下大墳墓も非破壊のオブジェクトではない。圧倒的な破壊力の前には瓦礫と化するのだ。それに今は嬉しい誤算として、ギルド拠点としての保護もないのである。

『諸王の玉座』に座り、『強欲と無欲』を腕にはめたままだった『モモンガ玉』を持つ大魔王様は、きつと驚いたことだろう。

人間という種の、素晴らしき悪あがきに……。



「ロウネ！ 戦況はどうなっている?!」

「はっ、第五階層で聖王国騎士団が悪魔と接敵、被害甚大との〈伝言〉を最後に連絡が取れなくなりました。帝国騎士団は第三階層で魔獣に襲われたとの報告あり。竜王国のクリスタル・ティアは第四階層で全滅とのこと。カルサナスの勇者は第一階層の吸血鬼に襲われ、下僕にされたそうです」

「くっ、一瞬でこのざまか……。あけみ殿は？ あけみ殿は今どこだ?!」

「先程『蒼の薔薇』を救出、直後に墳墓内へ再転移しました。瀕死の者たちを一人でも多く助け出すとのことですよ」

側近ロウネからの報告に、帝国皇帝ジルクニフはギリリと奥歯を噛みしめる。

この地に集まった魔王討伐連合軍の戦力は、人類最高峰と言っても過言ではない。一部の冒険者やワーカーたちは逃げ出してしまったが、それでも魔王の拠点から脱出してきた強者たちと合流できたのだから、強運に恵まれていると言えよう。

「くそっ、ドラウはどうなったんだ?! 成功したのか？ 魔王を仕留められなければ、我々は御仕舞いなんだぞ！」

爆発音も振動も伝わってこないために、竜王国女王の命を懸けた特攻が実を結んだのかは判らない。

あけみの手によって魔王が待ち受ける『玉座の間』とやりに侵入し、魔王と対峙できたことだけは聞いているのだが……。

「早くしてくれえ、このままでは囹役の勇者も品切れだぞお」

時間が経つほどに増えていく行方不明者たち。〈伝言〉も通じず、どこを這い回っているのかも不明。無論、遺体の回収も不可能だ。

「——ジルさん、負傷者の治癒をお願い！ 五階層はもう駄目、聖典の隊長さんが殿を務めながら引き上げているところ！ えっつと、聖王

国の生き残りはこの人だけだよ！ 他は焦げてた！ わたしは四階層へ行くね！」

「了解だ、あけみ殿。負傷者の対応は任せておけ！」

当然目の前に現れてはぐったりしている女性を落とし、言いたいことだけを言つて、皇帝の返事を待たずに掻き消える。

やはり「ふれいやー」とは恐るべき存在だ。

運よく協力を申し出てくれて、様々な情報を提供してくれたから助かつてはいるが、あけみが居なかったらと思うと寒気が走る。

「ふう、人類はまだ生き残つてもよいのだろうか？ なあ、カルカ殿？ ……ふん、口を利く気力もないか。まあそうだろうな、貴女以外は全滅なのだから」

治療施設へ運ばれていく聖王国女王を眺めながら、ジルクニフは数刻前の状況を思い出す。

魔王と真なる竜王たちが戦っている隙をつき、あけみは大墳墓へ侵入した。魔王の最秘宝であるギルド武器とやらを破壊するために、ブラチナム・ドラゴンロードそれさえ破壊すれば魔王軍は弱体化するらしく、白金の竜王率いる勇者軍の勝率が上がるとのことだった。

しかし、作戦は失敗。魔王の最秘宝は見つからず、勇者軍は壊滅。魔王軍の生き残りは拠点である大墳墓へ戻ろうとしており、人類の希望は潰えようとしていた。

その時である。あけみの〈伝言〉が頭に響いたのは。

あけみは人類の切り札を——魔王軍の残党を滅するための「始原」を抱え持つ竜王国女王を、漆黒聖典の小僧に連れてこさせるよう言い放つた。ついでに『他の誰かが墳墓の中を走り回って囿になれ』と、無茶苦茶なことを宣告してきたのである。

否、と言えるはずもない。

人類存亡の大勝負なのだ。集った連合軍の全戦力で突っ込むしかない。たとえ大半が生きて戻らないと理解していても。

「はんつ、ドワーフの秘宝もカルカ殿の〈最終聖戦〉ラストホーリーウォーも大して意味を成さなかったか？ いや、あつたからこそ、未だ人類は生き残っているのか？」ジルクニフは野営用の簡易椅子へ腰を下ろすと、悲惨な現

状から視線を逸らし、青い空だけを見つめる。

「ふふふ、まいったな。これからどうするっていうのだ？ まさかこの私に『魔王に対する最後の砦』になれとでも？ はっ、冗談じゃないぞ」

思わしくない戦況に対し、前線が崩壊していないのは魔王軍が墳墓内から出てこないためだ。

第一階層で暴れている赤い鎧の吸血鬼が一步でも外へ出ようものなら、皆気が触れるだろう。第二階層の巨大な蟲が四本の腕を外で振るえば、バラバラの死体で大地が埋まろう。第三階層と第四階層の闇妖精が率いる魔獣やドラゴンが溢れたなら、人間など餌にしかなるまい。第五階層の悪魔などは、聖王国の騎士団を火葬にしたとのことだ。ならば墳墓の外に布陣する連合軍も、同じように燃やされるのだろう。骨の髄までも。

「まだかつ？ まだ魔王は仕留められないのか?!」

最後の希望に縋りつくジルクニフの傍に、闇の扉が口を開ける。

「これで深層階の生き残りは全員だよ！ ジルさん、大墳墓に潜り込んでいる人たちを撤退させて！ 囃役はもう必要ない！ 切り札の発動は成ったんだ！ あとはもう、奇跡を期待するだけだよ!!」

〈転移門〉から飛び出てきたのは、「ふれいやー」のあけみ、漆黒聖典の隊長、そして帝国三騎士の一人、「雷光」であった。

「おお！ ドラウディロン殿がやってくれたかつ！ 個人的には好ましい相手ではなかったが、人類の救世主として後世に残させていたどころ！」

「皇帝よ、喜ぶのは時期尚早かと。魔王の支配を離れた従属神が暴れだして、二百年前のように魔神と化する可能性があります」

「ふいふ、おつかないですなあ。みんな死んじまつたってえのに、これ以上どうしろと言うんで？」

槍使いの少年相手に、ドワーフの秘宝たるアダマンタイト製の全身鎧を着込む「雷光」バジウツドは、からかい口調でお手上げとばかりに両手を上げる。

事実、本当にどうしようもないのだろう。

墳墓に侵入した戦力の大半は潰されてしまった。帝国三騎士——元は四騎士だったが女騎士が逃げ出して三人となった——の内二人は、墳墓の奥底で魔獣の餌だ。自分が生き残ったことも偶然でしかない。

「全軍へ通達！ 大墳墓から撤退せよ！ 死に物狂いで逃げ出せえ!!」ジルクニフからの号令を受けて、魔法詠唱者たちが一齐に〈伝言〉を飛ばす。この時ばかりは〈伝言〉の信頼性など気にもならない。待ちに待っていた撤退命令なのだ。化け物どもを引き付けるために己の命を餌としていた反動が、一齐に解き放たれる。

「あけみ殿っ、化け物が外まで追いかけてきたらどうするのだっ?! 外にはもうケガ人しかないぞー!」

「ああもう、分かっているっば! ラキユースさん、カルカさん連れられてきて! イビルアイはリグリットさんを! あとその雷光さん、アングラウスとかいう刀持った人も生き残っていたと思うから此処へ! えーつと、そっちに居る森の賢王さん! 手を貸してもらおうよ!」

「な、なんでござるか? 某は協力できないでござるよ。殿に逆らうのは怖いでござるがゆえに!」

あけみは縮こまっていた丸っこい魔獣を無理やり引っ張り出し、その大きな獣の手に金属製の杭を握らせる。

「別に難しいことを頼むわけじゃないよ。この杭を地面に刺して、その杭頭を踏んでいてほしいの。それぐらいいいでしょ?」

「そ、それくらいなら構わないでござるが……。こんなところに杭を刺してどうするのござる?」

もつともな魔獣からの問いかけに、あけみは軽い笑いで答え、そのまま理由を話さずに離れてしまう。

「ラキユースさん、他のみんなは集まった?」

「あ、あけみさん、一応集まりましたけど……。カルカ様は治癒したばかりで立つのもやっとですよ」

「ハッキリ言っつて足手まといだ。ババアも連れてはきたが、魔王に捕まっていた奴が役に立つとは思えん」

「おお、泣き虫嬢ちゃんが言ってくれるのお。だが安心せい、最初から捨て駒は覚悟の上じや。一度は死んだ身じやからな」

「はあ、婆さんの覚悟なんかどうでもいいけどな。俺は——ガゼフでも届かなかった最強の剣士になるまで死ぬつもりはないぞ」

「はいはい、皆さんの言い分は解りましたから、あけみ様の話を聴きましようや。急がないとマズいんでしょ？」

帝国騎士バジウツドがパンパンと手を鳴らしたところで、集まった全員があけみに視線を向ける。

緊張感のある、覚悟が決まった者の視線だ。

これから成すべきことの重要性を考えれば、命を懸けても釣り合わないかもしれない。大墳墓から出てくるであろう魔神のような化物たち。それらを倒す、もしくは押し留めなければならぬのだ。

普通に考えても気が遠くなる。

「みんなには墳墓の周囲に等間隔で散らばってもらって、この杭を設置してもらおうよ」森の賢王へ渡したものと同じ金属製の杭を複数空間から取り出したあけみは、連合軍の生き残った強者たちへ一本ずつ渡しに行く。

「これはユグドラシルのアイテムで、囲んだ内部に強力な結界を作り出せるの。墳墓の中までは影響を及ぼせないけど、一步外へ出たなら転移を阻害出来て、能力値の低下も可能って結構すごいアイテムなんだよ」

手渡された杭は武器になりそうなほど大きくて硬く、吸血鬼に打ち込んだら一発で灰に出来そうではあるが、外見の武骨さから結界アイテムとは思えない。

「あけみ、ふれいやー」のアイテムなのだ。持つ手にも力が入ろう。

「ここは森の賢王さんが打ち込んだから、みんなは周囲に展開して。わたしと隊長さんは墳墓の入り口で警戒だよ。出てきたモンスターはわたし達でやっつけちゃうぞー！」

「……六大神様と同格であられる、あけみ様の御命令とあらば、全身全霊を持って立ち向かう所存ではありますが、私程度の実力で対抗

できるかどうか……」

「いいのいいの、わたしだつて無茶だと思つてんだからさ。でもやるしかないでしょ？ どうせ逃げ場所はないんだし、ねっ」

そんなことを言つてイイのか——と訝しがる槍使いの少年も、『いや、言葉を飾る時期はとうに過ぎていましたね』なんて自嘲気味に呟いては一步を踏み出す。

どうせこれで最後なのだ。

援軍などは期待できないし、神の奇跡も神が居ないのだからあり得るはずもない。突然未知の力に目覚めて敵を蹴散らす王道的展開は、スレイン法国で有名な物語の中でしか存在しないのだ。

「魔王は……どうなったのでしょうか？」

かつて漆黒聖典を率いていた年若き槍使いは、魔王から下賜された伝説級の黄金槍を構えながら、そつと呟く。

「さあ〜てね。今頃は弾き飛ばされた次元の彼方で、頭でも抱えているんじゃないかな？ 出来ることなら死んでいて欲しいけど、まああのモモンガさんだしねえ」

相手はユグドラシルでも有名な非公式魔王で、プレイヤーを何百人も殺しまくった大量殺戮者だ。誰よりも多くの魔法を覚えるためだけに、プレイヤーの死体を大量に集めていた事実には眩暈すら覚える。加えて自分専用とも言える世界級アイテムを所持する、超希少な存在なのだ。

はつきり言つて、この異世界で出会ったこと自体が不運そのものであろう。

「はあ、何のために今まで生きて——」

「あけみ様はどうして戦うのですか？」ため息しか出ないあけみへ、槍使いの少年は疑問を呈す。このまま死ぬのだから、聴きたいことは聴いておこうとばかりに。

「あけみ様ほどの実力を持っていれば、魔王軍へ与することも可能だったのではありませんか？ 生き残るための選択としては、それも有りかと思いますが……」

「う〜ん、お姉ちゃんがモモンガさんに協力していたなら、その可能性

もあつたと思うけど……。でもまあ、無理だよ。モモンガさんが求めているのは味方じゃなくて敵。それも未知の強敵。理想的なのは人間種バージョンのツアーさんかな。わたしだと手の内バレ過ぎで、単なる作業みたいになっちゃおうし」

『はあく』ともう一つため息を増やし、あけみは不気味な静けさを醸し出す大墳墓を見つめる。

異世界へ来てからの長き人生も、そろそろ終わりだ。

リアルへ帰ってしまった己のパートナーを待ち続けて数百年。異世界を色々探索したり、八欲王相手に海上都市で籠城したり、十三英雄に少しだけ協力したりと、思えば結構慌ただしい異世界生活であった。ここ二百年ばかりは金貨枯渇の影響もあつて冬眠状態だったけど……。

「さてと、最初に出てくるのはペロロンチーノさんのNPCかな？

上手く結界のデバフが効けばいいけど……。ああでも、世界級アイテムを持っていたら意味ないか。どうしよう？」

行く先は暗い。

魔王が次元の彼方であろうとも、配下のNPCたちが暴れだせば世界は終わろう。故に皆殺しにする必要がある。墳墓から出てきたところを袋叩きにして、消滅させねば人類に安息の日々など来ない。

無論、その思惑が最初の一人目で碎かれそうなのは、痛いほど理解している。だがもう逃げ道はないのだ。

死を覚悟して、墳墓の入り口を睨みつけるしかない。

「あけみ様！ 墳墓の地下から何者かの気配が！ 警戒をつ！」

心臓を握られているかのような決死の表情で、美しき少年は槍を構える。

「ぐぬう、墳墓から出てこないって展開は無しかあ。残念だけど仕方がない。やれるだけやるしかないね」

相手は勇者軍との戦いを乗り越えた魔王軍最精鋭。その数は五百か千か……。

はつきり言って無謀な挑戦だ。レベル100のプレイヤーであっても踏みつぶされるに違いない。

ただ、プレイヤーの場合はリスポーンが可能だ。死亡したとしても海上都市で復活できるのである。その一点だけが、あけみの勇気を支える光明なのかもしれない。

この場で死ぬまで戦って敵の数を減らし、殺されてリスポーンした後は隠れながらのゲリラ戦。レベルダウンした身体を引きずって、世界各地へ散ったNPCを一体ずつ始末していくのだ。隠れている他のプレイヤーとも協力できれば、世界滅亡のシナリオを回避させることも可能だろう。

もちろん、地獄の窯がひっくり返ったかのように世界中が死体で覆われ、自身も幾度か殺されて八欲王のように消滅するかもしれないが……。

第50話 「リアル魔王」

コツコツコツと小さな足音を響かせて、大扉の前へ立つ。

天使と悪魔の像が彫られたその大扉は、平常通りに重量感のある身をゆつくりと動かし、玉座の間へ入ろうとする訪問者を受け入れる。

「……酷い有様、と言うべきかしら？」

二本角の女は、殺風景な空間を眺めて言葉を零す。

大扉の先にあつた空間は、巨大な四角い広間であつた。装飾品など一つもなく、天井を支えるはずの柱もない。豪華なシャンデリアも魔化金属糸で編まれた旗も、塵の一つすら見つけ出せそうにない。

記憶にある「玉座の間」とは、全くの別物と言えるだろう。

ただ、不変な場所もあるようだ。

黒い翼を備える女の視線が捕らえるは、水晶の玉座に座る骸骨大魔王の雄々しい姿。頬杖をつき、何やら物思いに耽っているかのような愛しき旦那様の御身である。

「モモンガ様、人間どもの切り札とやらは如何でしたか？ 御満足の

いくモノでありましたでしょうか？」

「ん、ああ、アルベドか。……そうだな、人間が用意したにしては悪くなかったと言えるだろうが」大魔王はのそりと身体を起こすと、何故かバツが悪そうな口調で人間の悪あがきについて話し始める。

「竜王国の女王が『始原の魔法』を用いて階層を破壊しようとしたのだ。そのアイデア自体は悪くないし、思い切りの良さも評価できる。他に選択肢もないだろうしな。とは言っても、『諸王の玉座』がある階層を破壊しようとはなあ。一旦制止して、他の階層で仕切り直せば良かったかもしれん」

ぐぬぬと唸る魔王が語るように、^{ワールド}世界級アイテムである『諸王の玉座』が設置された『玉座の間』は特別なのだ。

玉座を飾る場所として『世界』に近い加護が与えられ、ある種の別世界となるのである。故に破壊しようと思うなら、世界級アイテムを破壊するつもりで行わなければならない。

モモンガとしては、ギルド解散でダンジョン化している状況での『

始原の魔法”直撃であったために『もしかして』と期待半分で経過を観察していたのだが、結果は非情なまでに予想通りであったのだ。

『悪いことしたかなあ』とモモンガは、完全消滅した竜王国女王にらしくない情けの言葉を漏らしてしまう。次元の狭間に落とされる——という貴重な体験を逃してしまった後悔と共に。

「それでは父上、これからどうなさいますか？」

『いつからそこに居たの？ 別に居なくても良かったのだけど』という視線をぶつけてくるアルベドをさりと躲し、埴輪男が玉座の後ろから声をかけてくる。

「これからか……」

世界の最終防衛軍たる勇者軍が壊滅した今、魔王を止める手段は残されていない。生き残った“真なる竜王”や自己保身に走ったプレイヤーが無駄としか思えない抵抗を見せてくるだろうが、大舞台から降りてしまった役者に過度の期待はできないだろう。

逃げ回る羽虫を追い掛け回す、くだらない展開しか視えてこない。「パンドラ、外の様子はどうなっている？ あけみは何をしているのだ？」

「はっ、あけみ様は大墳墓の外で待ち構えるつもりようです。今はお粗末な結界を周囲に張っている途中でございますが、特に警戒する必要はないかと」

「そうか、ならば準備が終わった頃に出て行ってやろう。だがその前に」モモンガはアルベドへ意識を向け、一つのお願いを口にする。

「アルベド、生き残っているナザリックの者たちを此処へ集めてほしい。やりたいことがある」

「かしこまりました、モモンガ様（愛しい旦那様！）」

統括という立場ではないにも拘らず、アルベドの対応は昔のままだ。そして〈伝言^{メッセージ}〉を受けたオーレオールが元守護者たちへ通知し、〈転移門^{ゲート}〉を用いて瞬く間に全員を集める手際も、ギルドを解散させる前と変わらない。

野良NPCなのに何故なのだろう？ これは生まれに関係するのだろうか？ 誕生した瞬間から受け入れていた立場に身を置くほう

が楽なのかもしれない。『そうあれ』と創られたが故の行動なのだろう。

「モモンガ様、上層にて迎撃に当たっていた者、九階層や大図書館に避難していた者、全て集まりました。ごさいます」

玉座しか残されていない殺風景な広間に、異形の集団が再び集う。

「こ、これは何がありましたか？ ここは……玉座の間でありんすよねえ？」

「ちよつと離れていたただけなのに空っぽって、どうなってるの？」

「え、ええ〜つと、あけみ様が何かしたのかな？ で、でも何をしたらんのだろ？」

「柱ゴト無クナルナド異常デアロウ。破壊ノ痕跡スラ見テ取レヌ」

「……やはりこうなりましたか。予想はしていたのですが、まあ、モモンガ様が無事であるのなら、何も言うことはありませんね」

変わり果てた最深部の様子に、元守護者たちからは驚愕の眩きが漏れる。セバスやプレイアデスなども、何もない巨大な空間に視線が泳ぐばかりであった。

「みんな、よく集まってくれた」玉座の間の変化など気にするな——と言わんばかりの大魔王は、従う必要などない己の言葉を聞き入れ、集まってくれた異形の集団たちへ一つの提案を口にする。

「私はこれから外界を蹂躪するつもりだ。しかしながら、世界を全てとなると十年以上はかかるだろうから、しっかりとした拠点を用意すべきと考える。そこでこのナザリック地下大墳墓を、再びギルド拠点に再設定しようかと思うのだが、どうだろうか？」

「おおお、素晴らしきお考えです、父上。つきましては、私にギルド武器の製作をお任せいただければ……」

「夫の意向に賛同しない妻などおりませんわ。新しきギルドの設立、良きご判断かと」

「妻などという妄言は別にしんして、再びモモンガ様と繋がれるのは嬉しいでありんす」

「ギルドかあ。あ、でもこの場合……」

「う、うん、どうなるんだろうね、お姉ちゃん」

魔王の提言に反対の意を示す者は居ないようだが、それより気にかかっている事柄があるようだ。それはギルドを作った場合の立ち位置。モモンガ様にどのような形で忠誠を捧げることが出来るかである。

「トイウコトハ、モモンガ様。我々ハモウ一度、僕トシテオ傍ニオ仕エデキルノデシヨウカ？」
「アインズ・ウール・ゴウン」ノ時ト同ジヨウニ……」

皆が気にしていた内容をさらりと口にしたのはコキユートスであつた。

その口調からは、シャルティアやアウラがギルド解散時、深い絶望に浸っていたことなど知る由もないと言った感じである。

もう一度拒絶されたら——とは思わないのだろうか？

「何を言っているんだ？ 前と同じように僕にしてしまつては、システムによる忠誠が植えつけられるだけだぞ。せつかく自由になれたというのに、再度束縛するなど愚行でしかない」魔王の冷静な発言に、元僕たち——中でも一般メイドらの表情が曇る。メイドにとって御主人様の存在は絶対だ。ギルドという枠組みの中で、主従を確立させてくれるのであれば望外の喜びである。とはいえ、現時点においてモモンガ様に仕えることを否定されたわけでもないのです、『僕にしてほしい』とは我儘だろう。『自由』を与えられただけでも恵まれていると言うべきだ。

「それより名前だ。新しいギルドの名称はどうするべきか？ 何かお勧めはないかな？」

気落ちしている元僕たちの心情を察することなく、モモンガは問いかける。

「ギルド名称でございますか……？ それでしたら」豊富な知識を武器に、デミウルゴスがお役に立とうと多様な言葉を並べはじめ。だが、少しばかり難解で、モモンガを湛えようとする美辞麗句がこっそり潜ませているので採用しにくい。ウルベルトっぽい拗れた感じもちよつと困りものだ。出来ればもつとシンプルにしたいところだが……。

「大魔王様ノ居城ナノデ、イツソノコト国——『魔王国』トシテハドウ
デシヨウ？ モシクハ魔王様ノ支配スル世界——『魔界』モ素晴ラシ
イカト」

「「おおおお」」

元守護者たちが様々な提案を行う中で、コキユートスの言葉に歓声
が沸く。

「なるほど、ギルドそのものを一つの国家、世界とみなすわけか。面白
い発想だな」

ふむふむと頷く魔王様に、異形の化け物たちは口を閉ざし、
深々と首を垂れる。後はモモンガ様の御心のままに、と言った感じで
あろうか。

「よし、今からギルドを構築する」モモンガは「諸王の玉座」に意識を
向け、ナザリック地下大墳墓の管理システムを呼び出す。

「簡易マスターソース・オープン、ギルド作成を選択、ギルド名は『魔
界』。ギルドマスターはモモンガ、そして——」

モモンガは操作の手を止め、跪いている数多の異形たちを見つめ
る。

「この場に居る者たちを、ギルド加入の同意をもってギルドメンバー
とする。さあ、ギルド『魔界』に入っても良いと思う者は、意識の中
で選択せよ」

はつきり言って意味不明であった。

大魔王様がどんな作業をしているのか？ 何を作っているのか？

何を仰っているのか？ 訳が分からなかった。

加えて頭の中に『ギルド「魔界」に誘われました。ギルドへ加入し
ますか？ はい／いいえ』なんて何者かのメッセージが浮かんでしま
うと、パニックになってしまうのも仕方がない。

「こ、これは？ モモンガ様のプロポーズかしら？ もちろん答えは
決まっているけど」

「うええええ、ギルドの加入なんて、し、僕のわらわにそんな資格があ
りんしょうかえ？」

「ギルドメンバーって至高の御方のこと……だよ。そうだよね！

あ、あたしがあ？」

「どど、どうしようお姉ちゃん？ 選んじやうと不敬なのかな？ そ、それとも、選ばないと不敬なのかな？」

「皆落ち着ケ。モモンガ様カラ直接才誘イ頂イタノデアレバ、加入スルノガ当然デアロウ」

「その通りだと思うよ。モモンガ様は我々を僕ではなく、ギルドメンバーとしてお傍においてくださるわけだ。ふふ、流石は至高の御方々の頂点たる御方」

「では紳士淑女の皆様方、しつかり己の考えで選択しましたか？ ああ、もちろんギルドに属さないという考えもありですよ。その場合でも父上から不利益を与えられる、なんてことはありません。自由にお選びください」

混乱を極める化け物集団の中にありて、パンドラの呼びかけは一つの後押しになったのかもしれない。

迷いに迷っていたセバスやプレイアデスを皮切りに、一般メイドや料理長、大図書館の司書たちなども意識の中に浮かぶ選択肢を選んでいく。

眠っていたルベドも姉たちの行動を無意識の内に察し、追従するようだ。

ただ、自由意志のない動像はギルドメンバーへ登録出来ないらしく、第九階層の“あれら”や第十階層“レメゲトンの悪魔”などはギルドの配備戦力として加わることとなった。第四階層で待機していたガルガンチュアも同様である。

「ふふふ、全部で八百六十三人か。システム度外視の人数だな。“悟”が聴いたらなんというか……。それより恐怖公、無限召喚で呼び出した配下は全て僕扱いでいいのか？ 知性ある配下も居るのだろうか？」

「お気遣いありがとうございます、モモンガ様。ですが吾輩の召喚僕をギルドメンバーにするのは問題かと。モモンガ様の召喚アンデッドと同じ扱いでお願いいたします」

「まあそれもそうか。召喚者の命令に逆らえない時点で、自由意志を

持っているとは言えんしなあ。さて」

前線へ出ていたのに運よく生き残った直立するゴキブリ——恐怖公は、シルバーゴーレム・コックローチの傍で恭しく頭を下げる。

そんな恐怖の権化に軽く頷き返したモモンガは、玉座から立ち上がると、膨大なギルドメンバーを前にして、新たなギルドの結成を宣言するのであった。

「ギルド『魔界』の誕生だ！ ギルドメンバーたちよ、宜しく頼むぞ！」

「はっ！ モモンガ様!!」

ギルマスとギルメンの関係性としてはちよつと違うような気がしないでもないが、揺るぎなき忠誠心と共に跪くアルベドたちは、正式にギルド『魔界』の構成員として登録された。もちろん、同じギルドに所属する仲間としての気配も復活している。

周囲に目を向ければ、壁面などがぼんやりと発光しており、薄暗かった玉座の間が生氣を取り戻したかのようだ。——大墳墓の表現としては相応しくないかもしれないが。

どうやらナザリック自体がギルド拠点としての機能を復活させたのだろう。アインズ・ウール・ゴウン時代から置きっぱなしであったトラップやフィールドエフェクトも、そのまま取り込んだものと思われる。

マスターソースで確認すれば、自動沸きモンスターの再配備も可能のはずだ。ただその時は、ある一定量の金貨を消費しなくてはならない。

遙か昔、悟と共にナザリックの防備について苦悩したことを思い出す。

「パンドラ、ギルド武器に関しては、仮として七匹の蛇が絡み合う黄金の杖レブリカを登録しておく。後ほど正式なヤツを作成してくれ」

「はっ、鍛冶長と協力してえ史上最高のギルド武器を作り上げてみせましょう！ して父上、形状は武器でしょうか？ それとも防具系に？」

「そうだなあ、前々から考えていたんだが、頭部の防具——王冠を作っ

てもらおうか。勇者と出会ったとき、私が魔王だと分かるようになる」心配しなくとも一目で大魔王だと認識される。『死の支配者』^{オーバード}モモンガは、素材の有無や付加能力についてパンドラと軽く言葉を交わすと、後回しになっていた案件へ歩き出す。

「では、あけみの歓迎を受けに行くか。一緒に来たい奴は付いてくるといい」

「愛しのモモンガ様、せっかくですからギルドメンバーのお披露目といきませんか？ 地上へ出たことのない者たちも多いですし、新生ギルドとしての初クエストですから」

「クエスト……か。そうだな、初クエストには大きなことをやるものだからな。皆で地上の連合軍に挨拶といこう」

膨大な魔力に満ちた豪華なローブをバサリと舞わせ、魔王はアルベドの提案を受け入れる。と同時に、モモンガは『変わらないな』と美しき白い悪魔を見つめてしまう。

もはや守護者統括ではないはずなのに、皆の意見を纏め、提案してくる様は設定によるものだろうか？ 一般メイドなどが喜んでるところからすると、ギルドが解散してからも統括として様々な意見を汲み上げていたようだが……。新ギルドでも補佐役として、精力的に動くつもりなのかもしれない。

何処に所属しようとも人格自体に影響はない——か。ならばギルドが変わっても、負うべき役割に変化は無いのであるう。

「セバス、ペストーニヤ、プレイヤーデスは一般メイドら非戦闘員を護つてやってほしい。外はいろいろと物騒だからな」

「はっ、非戦闘員、生産職の者についてはお任せください」

「可能な限りの防衛結界を張っておきます——わん」

「桜花の……、いえ、元桜花聖域の子たちにも協力してもらいますね。周囲の警戒も、私たち七姉妹^{プレイヤーデス}にお任せを」

オーレオールの不気ない一言に、モモンガは『ああ、そうか』と新ギルドになってからの変化を感じる。

（新しいギルドなのだから聖域や役職などは過去のモノか……。とは

いつても、いきなり不慣れな作業をさせても効率が悪いな。ひとまずは前の役割を続けてもらい、後ほど修正するとしよう。まあ、今はギルメンなのだから、やりたいようにやってもらえばよいか)

昔のように一から十まで指示する必要などない。ギルドメンバーは己の意思で行動し、判断する存在なのだ。

蹂躪したければ行えばいい。

配下に組み入れたいのであれば誰の許可も必要ない。

モモンガはギルマスとして世界を滅ぼすための『長期旅行』へ出向くが、ギルメンが同行するかはそれぞれの自由意思に任せられる。

好きに生き、好きに死ねばよいのだ。

どうせこの世は、大魔王様の支配する「魔界」となるのだから……。

「さあ、新生ギルドのお披露目だ。地上で待っている連合軍の期待に応えるぞ！」

「「はい、モモンガ様!!」」

いや、連合軍は期待なんかしていないから、そのまま大墳墓の奥で引き籠っていてくれ——とシルクニフが言いそうな突っ込みを聞くこともなく、魔界の住人は動き出した。

蹂躪劇の始まりである。

そう、世界の終わりである。



「あけみ様、見えてきました! くそっ、人影が複数、敵は一体ではありません! あ、あれはっ!?!」

墳墓の奥から這い出てくる魔神へ特攻しようとしていた槍使いは、その先頭にいるアンデッドを見て槍の穂先を下げしてしまう。

恐るべき神器を纏う骸骨。

死を予感させる闇を率い、紅い瞳で全てを視通す。

かつてのスレイン法国襲撃戦で見かけた、神をも超える”

死の支配者”。

槍を向けようとしても心が萎えてしまう。両の脚に力が入らず、跪きたい衝動に駆られる。

こんな時こそ気合の入った大声を上げ、己を発奮させねばならない。後方には満身創痍の連合軍が残されているのだ。自分がくじければ、数え切れない犠牲者で大地が埋まろう。

「だけど……無理だ。」

「声は出ない。」

「足は動かない。」

「槍は地面へ向けられ、持ち上げられない。」

「これが恐怖——抗いようのない確実な死。」

「今まで駆逐してきた亜人たちも、こんな恐怖を感じていたのだろうか？」

「あく、駄目だったかあ。女王様の命を懸けた一撃は無駄だった、ってことかな、モモンガさん？」

「無駄ではないだろうさ、それなりに私を楽しませてくれたのだからな。それより結果が邪魔で全員が外へ出られん。無効化させてもらうぞ、……アウラ」

「はい、モモンガ様。〃山河社稷図〃発動！」

「えっ？」

驚くあけみを余所に、ひよこつと出てきた闇妖精は巨大な巻物を輝かせる。

「世界級アイテム 〃山河社稷図〃だ。」

「次元の異なる別世界を創り出し、そこへ任意の対象を閉じ込めることが可能なサポート系アイテムである。」

「世界級を持つていれば閉じ込めを回避できるが、別世界へ自分から入り込むことも可能。そして当然ながら元の世界で構築していた結界などは、〃山河社稷図〃の世界に影響を及ぼせない。」

「アウラが創り出した荒野の世界には、無防備な連合軍が立ち尽くすばかりである。」

「な、なに？ これは、いったい？」

「あけみは初めてだったか？ まあそんなことはどうでもよい。それより紹介しよう。新しく設立したギルド——『魔界』のギルドメンバーたちだ」

「あ、あたらしい、ギルド？」

墳墓が消え草原が消え、新たに生み出された石と土の大地。そんな殺風景な荒野に、千に近い異形種集団が立ち並ぶ。

先頭の骸骨魔王に多様な悪魔、蟲王に闇妖精、吸血鬼や人間にしか見えないメイドたち。奥には巨大なドラゴンやさらに大きなゴーレムが見える。変わり種としてはペンギンやゴキブリか。

あけみは見知った顔や知らなかった化け物どもを見据え、その幸せそうな一体感に強い嫉妬心を覚えてしまう。

「ああそう、私たちは死を覚悟してこの場に立っているっていうのに、モモンガさんは家族ごっこ？ ホントにもお、余裕で羨ましいわっ」
「家族か……。そうだな、ギルドは一つの家族と言ってもよいだろう。お前も加わるか？」

「うえ？」

モモンガの勧誘に大した意味はない。

これから世界中で殺戮するのだから、その内の何名かが身内になろうとも特段気にするようなことではない。それに前のギルドとは違い、ギルド『魔界』に加入条件などないのだ。魔王様に付き従いたければそうすればいい。逆に内乱を起こしたいのであれば、ペンギンと協力するのも有りだろう。

そう、自由にすればいいのだ。

しかし当然だが、魔王様も自由に襲い掛かってくる。まずはその襲撃を生き延びてから、ギルドへ勧誘してもらえるよう行動しよう。常人には無理だと思うが。

「モ、モモンガさん、わたしをギルドに誘ったとしても、貴方がこれからやるのは虐殺でしょ？ 世界中の人々を殺しちゃうんではしょ？」

そんなことに何の意味があるの?! 世界を滅ぼした先に、いったい何があるというのよ!？」

滅ぼされる側であるならば、一度は感じる疑問であろうか？ この

世の全てを滅ぼす大魔王は、崩壊した広大な大地を眺めてどんな感想を述べるのだろうか。

「先だと？ ふむ、そうだったな。では、少し問うとしようか」魔王は人間の連合軍が恐怖の視線を向けてくる中、あけみへ軽く語り掛ける。

「あけみよ、この世界で宙に浮いた経験値はどうなると思う？ 冒険者や請負人、傭兵や騎士団などに吸収されなかった経験値だ。老衰や事故死、天災や病気などで存在を砕かれた者たちの経験値は、誰が得ているのだろうか」

「はあっ？ けいけんち——って、えっ？」

「私はこの世界が確保していると思っっている。世界中で毎日発生する膨大な経験値は、世界の手に入り、長きに渡り貯めこまれているはずだ」

訳の分からない話だ。だけど経験値らしきものが存在することは察している。死者復活による生命力の減衰、それを取り戻すためのモンスター討伐。高位冒険者ならば知り得ている事実だ。

「世界は百年間経験値を貯め込み、ある日それを使用する。異世界から強大な“力”を召喚するために」

「ちよっ、それって、百年ごとの揺り返し？」

「そうだ。我ら“プレイヤー”、そして“真なる竜王”。どんな利用価値があったのかは知らないが、世界は百年分の経験値を消費して神のごとき大規模召喚を成したわけだ」

荒唐無稽であろう。信じるに値しない妄言だ。相手が魔王でなければ。

「そ、それが事実だったとして、モモンガさんにどんな関係が？」あけみは疲れていたのだろうか。少し考えれば気付いたはずだ。魔王が嵌めている悪魔のごとき籠手、その特殊な能力に。

「簡単なことだ。私は世界中のありとあらゆる存在を殺し、この“強欲”に経験値を吸わせる。その総量は浮いた百年分に勝るであろう。

——であるならば、異世界への扉もこじ開けることが出来るに違いない」大魔王は骸骨でありながらニタリと笑い、真の目的を高らかに告

げる。

「全世界の経験値を捧げてへ星に願いを發動させ、へ転移門を
「悟」の居る現実世界へと繋げる。そしてナザリックごと異界へ乗
り込み、再度の異世界戦争を始めるのだ」

第51話 「強欲魔王」

「う、そ……。リアルへ、繋げる?」

「そうだ。我が半身の悟を含む、アインズ・ウール・ゴウンの半身どもが暮らす世界だ。もちろん、あけみの半身も居るだろうな」

「わたしのパートナー、あの娘が暮らす、現実世界……」

信じられない可能性との出会いだ。幾百年もの間思い描いていたパートナーとの再会に、こんな状況で迫れるとは。

もはや連合軍の行く末など気にもならない。

「モモンガさんは現実世界へ行くんだね?」

「そうだ」

「そこにはわたしのパートナーも居る?」

「居るだろうな」

「でも侵略戦争を仕掛けるんでしょ?」

「魔王だからな」

すう〜はあく〜と深呼吸を行い、あけみは一問一答を終わらせる。

「ならわたしも連れて行って! あつちにいったら、モモンガさんの敵に回って面白くするからさ。いいでしょ?」

「そうだなあ、一応宣戦布告をして戦争の準備期間は設けるつもりだが……。まあ、こちらの情報を持っているあけみが敵側へ行けば、より面白くなるだろう」魔王はパチリと骨指を鳴らし、あつさりと人類を裏切った森妖精^{エルフ}へ言葉を返す。

「構わんで、あけみ。転移するときはナザリツクと共にお前も連れて行くでしょう。世界を壊滅させて準備が整ったら^{メッセージ}で伝える」

「やったああ!」

「なっ?! あけみ様! 何を仰っているのですか? 我々を見捨てるおつもりで!」

槍使いの少年には会話の内容など半分も理解できなかつたであろうが、あけみと魔王が手を取り合っただけはハッキリと解った。

人類が最後の拠り所としている神の化身「ぶれいやー」様。

その神は今、人類を投げ捨てたのだ。

「ふ、ふははは、帝国どころか世界の歴史までもがここで潰えるとはな。いやあ、まいったまいった、流石は大魔王様だ。清々しいほどに手も足も出ない。降参だ」

乾いた笑いと共にドカリと座り込むのは、帝国皇帝シルクニフだ。無傷の魔王が悠々と登場したかと思えば、一瞬で別世界へと放り込まれ、頼りにしていた「ふれいやー」様が籠絡されるという喜劇。

少しでも『何とかなるかも』と思っていた自分を恥じたい。

「そんな、そんなことって……。私たちは何のためにつ、殺された王国の人たちは、叔父様たちの死は何だったの?! お父様やお母様だつて——」

「落ち着けラキユース。この状況、俺たちじゃどうにもならねえよ」

「逃げたいところだけど、現在位置不明。こんな荒野、記憶にない」

「同意、方角も分からないなんて不自然。まるで別世界」

「打つ手なしだな。とはいえ逃げる準備はしておくべきだろう。あのババアも呼んで、脱出の可能性を探るとしよ——ん？」

崩れ落ちるリーダーの傍に寄り添っていたイビルアイは、無駄と解つていながら生存の道を探ろうとしていた。そのために老婆リグレットの知恵も借りたいと、当人へ〈伝言〉を繋げるつもりであったが……。

肝心の老婆は何を思ったのか、大魔王の面前へと歩き進んでいたのだ。

「ちよつとよいかの魔王殿、少しばかり話をさせてもらいたいのじやが」

死を覚悟している老婆は厄介だ。次元の異なる——いと貴き御方を前にしても、白い悪魔や吸血鬼少女から『直接言葉を交わそうなんて無礼な』と殺気を向けられても、にやにやと余裕の笑みを浮かべるだけである。

「お前は確か、様々な記憶を提供してくれた……。ああ、それとンフィーレアや浮遊都市のNPCを使って私を倒そうともしてくれた老婆か。思えば結構世話になっているヤツだな。話があるなら聴くぞ」

老婆の記憶は貴重であった。ツアーを勇者足り得ると判断できたのも、老婆の膨大な知識があつてこそだ。つまり、褒美を与えてもおかしくはなからう。

「慈悲をいただき感謝するよ。んじゃ聴くがね、儂らはこのまま皆殺しかい？ 世界中の人間種や亜人種も、綺麗サツパリ滅亡させるのかい？」

「なにか勘違いしているようだな。私が『山河社稷図』さんがしやくずで別世界を構築したのは、あけみをリスポーンキルするためだ。プレイヤーを普通に殺すと、拠点で復活してしまうからな」

大魔王の言葉にあけみは頬を引きつらせるも「殺す必要はなくなつた」と続けられ、安堵のため息を吐いてしまう。

覚悟はしていたものの結構危なかつたみたいだ。心臓の奥がキュッと締まる。

「集まつている連合軍に関しては、戦う価値を見出せないな。逃げるなり戦いを挑むなり好きにすればよい。それと老婆よ、私は全てを滅ぼすつもりなどないぞ」モモンガはリグリットに対し、遠い昔の約束事を口にする。

「法国の守護者であつた『ミマモリ』との約束で、『スレイン牧場』は残すことになつている。同じく『蒼の薔薇』の希望により、『アーランド評議国』を滅ぼすことはない。つまりお前たちは絶滅しないということだ」

たつた二国、されど二国だ。

人類存続の希望が繋がつたことはリグリットにとつても、全人類にとつても朗報だと言えるだろう。

だけど魔王はやっぱり魔王なのだ。慈悲など無い。

「老婆よ、質問は終わりか？ ならば私は行くぞ。今からバハスル帝国とカルサナス都市国家連合を滅亡させるのだ。その後はローブル聖王国を潰し、南方へ向かう」

「魔王よ！ その侵攻を止めてもらうわけにはいかんのか!? 何か対価が必要なら命を懸けて用意すると誓おう！」

魔王の進路を遮るかのように立ち塞がり、リグリットは交渉を続け

る。もつともそれが交渉になっていたかどうかは不明だが……。

皇帝ジルクニフやカベリア都市長、聖王女カルカなどは恐怖に満ちた表情で、自国の辿るであろう運命を見守る。

「対価など決まっているだろう？　勇者だ、強き勇者をよこせ！　私を倒せるほどの勇者を！　魔王たる私を倒せば世界は平和になるのだ！　世界の理ことわりだろうがっ!？」

「ぐっ、がふっ!」

ほんの一瞬、魔王から伸びてきた漆黒の波動を浴びて、リグリットは身体の内を失った。地面へ顔から突っ込み、起き上がることも出来ない。それどころか呼吸は止まり、意識も保てない。

これが「死」なのだろうか。

魔王の波動に撫でられただけで何の抵抗もできず、周囲へ警告を発することも不可能。

十三英雄にして死霊系魔法マジック・キャスター詠唱者の権威であるリグリット・ベルスー・カウラウはこの時、世界蹂躪へと動き出した魔王の一步目で屍と化した。

もちろん、骸骨魔王モモンガ様にそんな自覚はない。

羽虫が勝手にぶつかって転がったただけだ。

「さあ、世界を滅ぼすぞ！　軍勢を召喚しろ！　アンデッドも悪魔も大量にバラまけ！　この世に満ちる全ての経験値を「強欲」に吸わせるのだ!」

世界を壊すのは大魔王に許された特権であり、娯楽だ。モモンガのテンションがいつもより高くなってしまっても仕方がない。

この世界で楽しめるイベントは大体こなしてしまったから、特に注意する必要もなく気楽に行える。それに経験値を集めた後は、「悟」の待つ現実世界へ行けるのだ。アンデッドでも興奮するだろう。

「悟よ、アインズ・ウール・ゴウンの半身どもよ。リアルでの戦いを楽しんでしまっているぞ!」

モモンガは豪華なローブを翻し、数多の異形たちを引き連れて東へ向かう。

最初の標的はバハルス帝国だ。

つい最近巨大な動像ゴレムに踏み荒らされ、恐怖に打ち震えていた——矮小な人類が怯えて暮らしている経験値牧場である。

悲鳴が轟くだろう、誰もが泣き喚くだろう。

血の池が溢れ、肉の林が乱立するだろう。

魔王様はその中をゆつくりと散歩するに違いない。

悪魔のごとき様相を見せる世界級アイテムの籠手、“強欲”を掲げながら……。



歩き出したこの世の破滅を見て、覚悟を決めるしかなかった。

逃げ出すことは出来ただろう。評議国や元法国へ入り込めば、生き残ることも出来ただろう。この場の全員を見捨てれば。

漆黒聖典の隊長という職務を拝命して三年と少しだった。

部隊は全滅、自らも真つ二つにされた後で蘇生。魔王から新たな槍を授けられ、世界を救う勇者となるべく日々訓練。

それも終わりだ。

結局、魔王が満足するような勇者にはなれなかった。最後の決戦にも参加できず、墳墓の中を囚役で駆け回るだけ……。

だけど最後ぐらいは、人類の救世主たる漆黒聖典の隊長らしく振舞おう。

「勝負だ大魔王！ 帝国へ行きなければ私を倒してからにしろ!!」

「ああ、勇者候補の槍使いか。ならばリベンジマッチだな」

パチリと骨指を鳴らす魔王の言い分はもつともだ。いきなり魔王との決戦は贅沢だろう。その前に倒すべき仇がいる。

己を殺した怨敵、復活後の訓練を引き受けてくれた師匠にして大魔王の側近——蟲王のコキュートスだ。

「有難い！ 魔王の戦力を此処で減らして見せましょう!」

「ソノ意気や良シ。訓練ノ成果ヲ見セテミヨ」

開始の合図を待たずして、魔王の直ぐ傍で始まる猛烈な槍と刀の衝突。

音からして武器による戦いとは思えない。巨人が体当たりをして
いるかのような重量級の破裂音が、振動と共に周辺へ響き渡ってい
る。

『見たか蟲王！これが人間の意地だっ!!』と命を削る想いで繰り出
した無数の突きが、コキユートスの剣戟を対消滅させる。

一見して互角。

あの恐るべき蟲の化け物相手に、一歩も引かない見事な攻防であつ
た。

「成長シタナ、嬉シク思ウゾ。コレデヨウヤク次ノ段階へ進メル」

「あ、っえ？」

槍使いの少年は、空間収納から二本目の刀を取り出す蟲王の姿を見
てしまった。

そう、二本目である。

『どうして今まで気付かなかったのか?』としばし呆けてしまう。

蟲王は今まで一振りしか武器を持っていなかった。腕は四本も
あつたのに。他三本の腕を遊ばせ、たった一本の腕だけに武器を持
ち、死の物狂いの自分と戦っていたのだ。

「冗談……でしょ？」

締まらない最後の台詞だったと思う。

人類を救うつもりで魔王の面前へ身を投じたというのに、待ってい
たのは捌き切れない無数の斬撃であつた。

バラバラになった己の肉片を自分の目で眺めるなんて、もう二度と
ごめんだ。

自分以外のメンバーは逃がしたかつた。

死ぬには若過ぎるリーダー。顔のわりに人が良い筋肉。覚悟はと
うに済ませているだろうが、なんだか憎めない双子。

いずれも二百五十年生きた自分と比べれば、圧倒的若輩である。

死なせたくない。

だけど運命は非情だ。可愛らしいフリル満載の豪華なドレスを着

込んだ少女が、紅い瞳を輝かせて逃げ道を遮る。

「おんしたちはわらわがもらうでありんす。立派な下僕にしてみよう」

「ふざけるな！ マキシマイズマジック 〈魔法最強化・結晶散弾〉!!」

渾身の一撃も、違和感のある大きな胸まで届くことなく掻き消えてしまった。

なんとなくそんな感じはしていたのだが、本当に無効化されてしまうと腰がくだける。何をしても無駄なんだと察してしまうと、自分が無力な赤子であるかのように思えて足に力が入らない。

「いただきますでありんす」

「うあああああ！ ラキユース!!」

命を懸けても護りたいと思っていたはずなのに、己の命が思っていたより役に立たなかった。誰かを護れるほどの価値は無かったのだ。

魔王の側近である吸血鬼—— ヴァンパイア “真祖” トゥルーヴァンパイア を前にしてしまうと、

『国墮とし』たる ヴァンパイア・プリンセス “吸血姫” もたいしたことは無かったのである。

「吸血鬼の下僕化は試してみたいと思っていんした。上手くいくとイでありんすなあ」

「ううう、できればその……痛くしないでほしい」

「ぐひゃひゃひゃひゃ、もちろん優しくするのでありんすよお」

両手を固く結んでも、祈る神が居なかったことに今更気付く。頬に化け物の涎が垂れ、生暖かい息遣いがすぐ近くから聞こえてくる。感じないはずの恐怖で目を閉じてしまったが、もう開ける勇氣はない。

ベチャリベチャリ、ズルズル、フューフシューとの奇音が耳を撫でる。身体に覆いかぶさってくる形状が、少女のソレでないことに思考が乱れる。

「塩味……はしないでありんすねえ。アンデッドは汗をかかないからしようがありんせん」

少し残念そうな発言に、ちよつとだけ記憶を辿る。

浴場に赴いて身体を洗ったのは、どのぐらい前だったか——と。

自分の国がこれから蹂躪される、と聞いても不思議と動揺しなかった。

覚悟が決まっていたからか？ いや、諦めていたからだろう。あんな化け物集団相手に何をしても無駄だと、やけくそになっていただけだ。

もはや手札はない。

あつても役に立たない。

それでも、皇帝として帝国の民を避難させねばならないのだろうが、一体の眼鏡悪魔が許してくれそうにない。

「私の牧場に頭脳明晰な姫がいるのですがね。貴方とかけ合わせれば、より優秀な個体が生まれると思いますか？ ぜひ実践してみたいのですが……」

「はは、よりにもよって最悪な相手を選ぶか。とはいえ拒否権は無いのだろうか？」

人間が穀物や家畜を改良していたように、人間の品種改良を悪魔が行う。それが自然な流れであるのかどうか、もはや分からない。

ただその対象に自分が選ばれたのは、帝国を護れなかったが故の罰なのだろう。だから踏み潰される自国民の無念さを背負って、悪魔の玩具と成り果てるのだ。

バハルス帝国最後の皇帝——『鮮血帝』が辿る結末としては、順当なのかもしれない。

「御心配なく、^{チャーム}へ魅了 ^{Charm} を用いて滞りなく進めます。牧場には外見的価値観の異なる亜人種、異形種、魔獣にドラゴンなど、仔を成せるかどうか不明な種族ばかりですからね。ああ、もちろん皇帝には全種族と繁殖に挑んでもらいますので御期待ください」

「……………」

死んだほうがマシだったのかもしれない。

まだ牧場とやらに足を踏み入れても居ないのに、悍ましい気配が全身を撫でてくる。

(いつまで正気を保てるのだろうか……)

早々に狂えたら、それはそれは幸せであろうなあ、と叶わぬ希望を

胸に秘め、皇帝は阿鼻叫喚の連合軍を眺める。そこでは『牧場送りにするまでもない』という理由による間引きが始まっていた。

眼鏡悪魔と、それに率いられる大勢の悪魔たちによって行われる大量虐殺。

最後の四騎士が二つに分けられるところを余さず視界に収めつつ、帝国皇帝はボソツと呟く。

「解っていたさ、最初から知っていた。勝てるわけがない、とな」

血の匂いはとても不快だ。

浴びるほど嗅いではきたが、未だ慣れない。

どうして神は、我々をお救いくださらないのでしょうか？

あれほどの大魔王が世界を滅ぼそうとしているのに……。どうして我々の死にゆくさまを眺めるだけなのですか？

聖王国から連れてきた精鋭部隊は全滅しました。腹心の姉妹まで殺され、生き残ったのは私一人です。

いまさら何を成せというのでしょうか？

「捧げよと……、命を捧げよと……、そう仰るのですか？ 私にその覚悟があるのか、問うているのですね」

無言の神の心中を探るのは至難の業なれど、唯一の生き残りが聖王国女王にして最強の信仰系魔法詠唱者^{マジック・キヤスター}ともなれば解り易い。

呼び出せばよいのだ。

悪魔も魔王も駆逐する神の御使い様を、己の命を代償にして召喚するのだ。

「魔法位階上昇化!!」

一時的に位階を引き上げ、上位の魔法へ手を伸ばすもまだ届かない。

「魔法上昇!!」

己の身に宿す全ての魔力を注ぎ、『それでもまだ足りぬ』と生命力を無理矢理押し入れ、『それでも駄目なのか』と魂すら捧げる。

「第七位階天使召喚」

「威光の主天使!!」

血涙を流し、口から泡を吹きながら『天使様、どうか魔王を滅ぼしてください』と心の中だけで叫んだ聖王女は、光り輝く巨大な翼を見つめながら仰向けに倒れた。

すでに呼吸は無く、瞼は閉じられず、命の気配は皆無に思えども、召喚者が顕現しているのであれば生きているのだろうか？ それとも召喚者が死亡しても、召喚された天使には関係無いのだろうか？

まあどちらにせよ、聖王女は人の領域を超えた召喚を成し遂げた。

翼の集合体かと思える巨大な天使——ドミニオン・オーソリティ“威光の主天使”は堂々とその身を晒し、魔王の面前へふわりと浮かぶ。

「レインアロー〈天河の一射〉！」

遙か上空より降り注ぐ矢の一撃が天使を貫く。

声にならない悲鳴は天使のものか？ 巨体がグラつき、地へ落ちる。

「マ〜レエ〜、その翼のお化けみたいな奴、どんな感じ〜。まだ生きてんの〜？」

「え、えつとお、駄目だと思う。か、身体が消え始めちゃったから……」

ひよこつと現れたのは闇妖精ダークエルフの子供たちだ。

大仰な装飾の弓を頭の上で振っている姉が、獲物の確認を弟にやらせているようだが。

「それって天使でしょ？ 何でこんなところに天使なんか出てくるのかなあ？」

「あ、その、もしかして、そこに倒れているお姉さんが召喚したんじゃないかな？ か、格好も信仰系っぽいし……」

ひらりとスカートを舞わせる弟が転がっている死体を指さすも、特に姉の興味を引くことはなかった。

「ふ〜ん、まっ、死んじやってんならどうでもイイか。それよりマーレのレベルアップを何とかしないとね。さっきの天使も瀕死にして渡すつもりだったのに」

「ボ、ボクは別に、大丈夫だよ」

「駄目でしょ！ 世界級アイテムの発動にレベルを消費してんでしょうがっ。モモンガ様もあんたのレベルアップを優先するように、って

言ってくれたじゃないの！」

「あ、えへへ、そうだったね」

二人の闇妖精は、こと切れた聖王女の傍らで楽しそうに語らう。

まるでピクニックに来たついでに虐殺でもしているかのようだ。姉が弓を引けば連合軍数十人の頭が吹き飛び、弟が何かを詠唱すれば数百人が地面へと飲まれる。

その様は、動物の狩りを楽しむ人間種とどこか似通っているのかもしれない。

まあ闇妖精の双子に限らず、ナザリツクの者たちからすれば、人間など獲物にすら成り得ていないだろうが。

「それでは留守を頼みますよ」

殺す価値すらない無抵抗のゴミばかりとなった頃、アウラによってさんがしやしよくず“山河社稷図”の世界は消され、多くの者たちがナザリツク地表部へと戻ってきた。

セバスはそこで、バハルス帝国へ向かうには非力過ぎるギルメンたちへ語りかける。——墳墓内へ残るようにと。

「セバス様は、……よろしいのですか？ ——わん」

不安げな視線を向けながら、ペストーニヤは言葉を濁す。ハツキリと言葉にするには恐ろしすぎるのだ。これから起こる大虐殺の犠牲となる子供たちを想うと。

「貴女はもつと我儘を言ったほうがよろしいですよ。私たちはもう僕ではなくギルドメンバーなのですから」セバスはそう微笑むと、意外な計画を打ち明ける。

「実はですね、私は今回の世界蹂躪において、各地の幼子を助けて回ろうかと思っているのです」

「そつ、それは!？」

「ああ、もちろん、全てを助け出すことは出来ません。ごく一部だけです。ですからペストーニヤ、貴女にはナザリツク内部に受け入れ先を作ってもらいたいのですよ」

「——えっ？ え？」

もはや語尾をつけ忘れてのことさえ気付かない元メイド長様は、混乱しながらもモモンガ様への不敬を思い描いてしまう。死にゆくべき幼子を助け出すなど、我らが主への反逆と取られないのだろうか？

「大丈夫ですよ、モモンガ様には話をしています。ですから、ナザリックの金貨を用いて墳墓内に『保育施設』を作ることも問題ありません。全て自由だと仰ってくださいました」

「作る……のですか？ 私どもが？」

「ええ、そうですよ。貴女はもう第六階層の夜空を作り上げた『ブルー・プラネット』様と同格以上の立場、『魔界』のギルドメンバーなのですから」

ギルド階層の改築など未知の領域だ。『真なる竜王』との戦いで色々と吹っ切れたセバス自身も、理解しているわけではないだろう。

ただ我儘に、正直になっただけだ。

それに分からないのであれば試せばよいのだ。過去の『アインズ・ウール・ゴウン』が未知を既知としてきたように……。

「生産系の者たちと協力して、九階層辺りに千でも万でも子供たちが暮らせる領域を作ってみてください。きつとニグレドやユリも手伝ってくれるでしょう。それでも手が足りない場合は、大図書館のテイトウスを頼って傭兵を召喚してみるのも有りかと……。おっと、留守番と言いなながらも結構大変かもしれませんね。大丈夫ですか？」
「そう……ですね。それで少しでも子供たちを助けられるのであればっ！ ——あ、わん」

「ふふ、子供たちはパンドラが〈転移門〉で送ってくれます。それと、デミウルゴスがスレイン牧場でも受け入れてくれるそうなので、あちらにも送ることになります」

「デミウルゴス様が、ですか？ わん」

不本意ながら、という感情を察したのであろうか？ ペストーニヤの悲しげな問いが舞う。

「一応育ててくれると言っています、実験動物としてですが……」それ

でも死ぬよりはマシなのだろう、と納得するしかない。スレイン牧場と評議国以外の生存圏は壊滅してしまうのだから、他に選択肢など無いのだ。

「機会があれば、牧場の管理者であるミマモリと話をしてみましよう。少しでも子供たちの未来が明るいものとなるように……」

人間種や亜人種の子供たちが育てられた後、その瞳で見つめるのは砕かれた不毛の世界だ。生き残っているのは、経験値を得られないだろうと推測される小動物や虫たちだけ。

不思議な感覚であろう。

自分たち以外の知的生命体が世界中のどこにもいないなど、どんな気分なのだろうか？

そしてそれを成したのが、大魔王様率いる魔王軍だとは——。
加えて、己が生き残っている理由も魔王様の気まぐれだと知った時、いったい何を思うのだろうか？

セバスは踵を返し、大魔王様の後を追う。

(いつの日か牧場の子供たちが世界中へ旅立ち、滅亡した国家群以上の文明を作り上げてくれることでしょう。もしかすると、その中にはモモンガ様の追い求める勇者などが居るのかもしれませんが……。)、
モモンガ様が御自身の希望通り勇者に倒されてしまったならば、私はどうすればいいのでしょうか？)

遙か未来の、低すぎる確率の話なれど、セバスは眉間に皺を寄せながら真剣に自問自答する。

(仇を取る——というのはちよつと違うような気もしますが……。その後の復興に協力するというのもどうなのでしょう？ ふむむ、まあ、その時の気分次第で我儘に決めるとしましょうか。私自身が生き残っていればですがね)

セバスはこれから多くの命を奪う。世界を破滅させるために。そしてモモンガ様と共に異世界へ渡り、
“たちち・みー”の半身たる存在と拳を交えるのだ。

ハッキリ言って楽しみである。

自分のことを戦闘狂だとは思っていなかったのに、どんな戦いが

待っているのか想像もつかなくてゾクゾクしてしまふ。これがモモンガ様をはじめとする、かつての至高の御方々が楽しんでいたという「未知」なのであるだろうか？

ならば納得だ。

これほどの胸躍る高揚感は癖にもなろう。現実世界とやらへ渡る時が今から楽しみだ。

「さあ、モモンガ様のために——いえ、私のために殺し、私のために助けるとしましょう」

セバスは自由に、そして我儘に強者ばかりを殺し回り、時折幼子を助け出した。

無論たった一人の行いでは、犠牲者の数百万分の一も救えない。

燃える大地に積み上げられた膨大な軀の上で、くじに当たったかのような幼子を抱える姿は実に不可思議であつたそうなの。

戦火は広がり続ける。

戦場を走る執事の腕には、常に幼子が抱かれていた。

第52話 「悟と魔王」（最終話）

世界は静かになった。

植物と小さな昆虫、そして取るに足らぬ矮小な存在だと見逃された小動物たちだけが駆け巡る、奇妙な世界。

森を荒らしていた魔獣や亜人は居なくなった。

平原を占拠していた人間種は、建物だけを残して姿を消した。

時折、砕かれた骨のようなものを見ることがある。酷くボロボロで、元が人間であつたか亜人であつたかも判らない。

ただ、恐怖だけは伝わってくる。

どんな死に方をしたのかも判らないのに、何故かこの世の絶望を感じながら絶叫と共に殺されたのだらうと感じとれる。

視線を上げ、かつて帝国と呼ばれていた国家の残骸を眺めつつ、ため息を一つ。

「あれから十二年かあゝ、世界を滅ぼす期間としては短いのか長いのか。他の例を知らないから何とも言えないなあ」

スレイン牧場と評議国を行き来しながら、モモンガ率いる魔王軍の動静を見守り続けてきた。だがそれも終幕となりそうだ。

「最後の国を包囲してから丸二年。モモンガさんもそろそろ我慢の限界でしょ？ 期待外れの勇者をいくら鍛えたってねえゝ」

追い詰められた人類国家は、魔王に対する最終手段として「勇者召喚」を行った。

それに喜んだのはモモンガである。

『どれほどの強者がやってきたのか』と喜び勇んで最後の人類国家へと出向き、別世界からやってきたという少年と対峙したのだ。

「二年鍛えてもモノにならないなら、先は無いですね。今頃はもう殺しちやつてるかも？ いや、一応レアなんだから牧場行きかなあ。勇者としては失格だけど、貴重な別世界の住人なんだし……」

悟が居る現実世界ではない、別の次元に存在する未知の異世界。その住人であるならば、モモンガにとって「レア」であると言える。

全世界から集めた他のレアたちと共に、品種改良の対象となるかもしれない。

「異世界かあ、そろそろ行けるのかなあ？ ああ、リアルってどんな感じなんだろ？ 話でしか聞いたことないし、それも批判的な内容ばかりだったからなあ。もしかして、現実世界つてあの娘にとつては住みにくい場所なんじゃ——」

妄想ばかりが先走る意味のない時間に、突如終わりが訪れる。

〈メッセージ〉
〈伝言〉だ。

忘れようもない濃密な魔力が意識の奥へと繋がる。

『あけみ、今大丈夫か？』

「ちよつと、大魔王様が相手のことを気遣う必要なんてないでしょ。それじゃまるで悟さんみたいじゃないのさ」

『ああ、プレイヤー相手の〈伝言〉だとこんな感じの話し方だったと思っただけ。つい似てしまったようだ』

「あはは、別に悪いことじゃないと思うよ。パートナーと言動思考が似るのはよくあることだしね。んで？ どうかしたの？」

『全てが終わったことの連絡だ。人間や亜人が立て籠っていた最後の城を潰したから、ナザリックへ戻る。これでようやく現実世界への転移準備へと取り掛かれるぞ。お前も来い』

「おお！ やったねモモンガさん！ わたしもすぐ合流するよ——つて、そう言えば」悲願でもあるパートナーとの再会を夢想し顔を綻ばせるも、あけみはモモンガに聴かねばならないことがあったのを思い出していた。

「モモンガさん、絶死絶命ちゃんも付いていきたくて言ってたんだけど……。あとエンリとかンフィーも」

異なる世界への侵略なんて、絶死絶命にとつては胸躍る展開なのだろう。もうすっかりナザリックの一員として牧場で働いていた彼女にとつて、お留守番なんて選択肢はなかったのだ。

それに御主人様であるシャルティアの傍に居たい、と思うエンリの願いも順当だろう。訓練の果てに、人ながらにして化け物の領域へと足を踏み入れた“血濡れ將軍”は、五児の母親となった後も

真 祖 様の下僕であり続けることを選んだのだ。

一方、数百人の子供の父親となっていたンフィーレアも足掻いていた。

繁殖作業や戦闘訓練に、位階魔法の改良製作。加えてポーションの研究まで。常人であれば、才能の力を借りてもどれか一つの分野を極められるかどうかであろう。それなのにンフィーは十二年もの間努力し続け、人間の到達限界と思われる領域まで指先を届かせたのである。

全ては愛するエンリのため、愛しい人を護るために。

『あけみ、行きたい奴が居るのなら一緒に連れてきて構わんぞ。イベントごとは大勢で楽しんだほうが盛り上がるだろうからな』

「現実世界を滅ぼしに行くのに、それをイベント扱いって……。モモングさんも相当厄介な魔王様だよ〜」

『ふふ、まあ文句なら悟の奴に言ってくれ。ではナザリックで待つているぞ』

「うん、ナザリックで、ね」

魔王様は世界を滅ぼした。

生き残っている人間種や亜人種・異形種たちは、鎖国状態の評議国と領土を拡大したスレイン牧場にしか存在しない。

ただそれも、モルモットとしてだ。

もはやまともな国家は一つとして残っておらず、世界は原始の時代に戻ってしまったかのようである。

「……牧場から人を送り出せば、何百年かで世界を元に戻せるのかなあ？ それで世界中がスレイン牧場になってしまえば、リアルから戻ってきたモモングさんも手出しできなかつたりして？ うう〜ん、ちよつと都合が良過ぎるかも。遠い先の話だし」

あけみは見捨ててしまった膨大な人類へ「希望はあるよ、諦めないでねえ〜」と軽薄な慰めをかけると、目的の地へ向かうための準備を始めるのであった。

「絶死ちゃん！ 魔王様の許可が下りたよー！ 今からナザリックへ行くからエンリとンフィーを連れてきてー！」

〈伝言〉よりも大声の方が確実に伝わるだろうというのもおかしな感じだが、実際牧場のとある建物から小柄な人物が飛び出し、物凄い速さで数名の拉致を行ったのは事実であった。

あけみのところからでもよく見えたであろう。

髪色が左右で白黒になっている少女は両脇に成人の男女を抱え、嬉しそうに突っ込んでくる。

「あけみちゃん！ 早くいこうよ！ 異世界の奴らを殺しまくろう！！」

「あのねえ絶死ちゃん、言ったと思うけど、わたしは異世界を護るために行くんだよ。モモンガさんと敵対する側なんだからね」

「分かっているって！ あけみちゃんは私が殺してあげるからさ！ 早く〈転移門〉出してよ、さあ！」

「もう、軽いなあ。……はあ、〈転移門〉」
はつきり言って現実世界での勝算は無い。

パートナーと再会したいがために大魔王の口車に乗ったものの、再会してからのプランは白紙である。十二年間考え続けても、答えは出なかったのだ。

現在のギルド「魔界」は、傭兵召喚をフル稼働させて大幅な戦力増強を成している。宝物殿にあったユグドラシル金貨を、湯水のように浪費させて召喚したのだ。

お陰で「ハンゾウ」並みの高レベルモンスターが、牧場に居ても目撃できる状況である。

それにギルドメンバーにも変化があったのだ。

かつてNPCであったが故に成長を止められていた元僕たちは、ギルメンとなったことでプレイヤーと同じ土俵に立ち、経験値の獲得を可能とした。つまりレベルアップできるようになったのだ。

最低レベルだった一般メイドの中にも戦士ファイターや野伏レンジャーの職業を所得する者が現れ、ペンギンですら料理人コックを得る偉業を成し遂げたのである。

今現在ナザリック地下大墳墓では、生き甲斐であるメイドとしての仕事を成す傍ら、第六階層の闘技場で戦闘訓練に励むメイドたちの姿

を見ることが出来よう。

ただ、その者らのレベルは30前後が主体だ。誰一人としてレベル100に至った者はいない。

それは世界中の経験値を魔王様が集めているからであり、残された“トブの大森林”だけでは十二年を費やしても“森の賢王”並みが限界であったのだ。

無論、アゼルリシア山脈に潜む美味しいモンスターたちは真っ先に狩られているので、残っているのは雑魚だけである。

（はあ、モモンガさんを一撃で倒せるような兵器がリアルになればいいのだけど……。わたしもあっちの世界のことはよく知らないしなあ〜）

あけみは闇深き転移の門を潜りながら、僅かなリアル知識へ継りつく。

確か現実世界の科学文明とやらは異常なほどの発達をみせているはずだ。ユグドラシルはもちろん、転移世界の文明レベルもはるかに凌駕している高度な人間社会らしい。

軍事の情報はほとんどないものの、それなりに強力な戦闘兵器を持っていると期待してもいいだろう。

モモンガさんは十分な準備期間を与えていると言っていた。

ならば自分が魔王軍の情報を現実世界の軍部へ伝え、対抗策を練ってもらえれば、勝算皆無などという事態には陥らないはずだ。

（待っていてね、わたしの半身。貴女は必ず護るから……）

あけみはこの日から数日後、巨大な球形の〈転移門^{ゲート}〉に飲み込まれ、ナザリック地下大墳墓と共に次元を渡ることとなる。

薄暗く不快な匂いが立ち昇る荒廃した大地へ足を踏み入れ、最初に吸い込んだ大気の味は——酷くマズかった。



ユグドラシルのサービス終了から数ヶ月が経過しても、新たなゲー

ムをやる気にはならなかった。

仕事が忙しかったこともあるだろう。朝も早いものだから貴重な睡眠時間を削るわけにもいかない。だけど現実逃避の手段は必要だし、辛い環境だからこそ自分も求めていた。

それなのに……。

「もう、あれほど夢中になれるゲームとは出会えないだろうなあ」
ネット上のどうでもよい情報を流し見しながら、悟は鬱積した感情を零す。

ゲームなどに逃避していなければ、悲惨な己の現状に気付いてしまう。そして世界の行く末にも……。

安アパートの外へ一歩出れば、マスク無しでは生きていけない地獄が待っている。太陽の光を遮る薄汚れた黒い大気と汚染された土壌、フィルターを通さなければ飲めない水に、道端で転がる人権無き死体。

どうしてこうなったか、なんて詳しくは知らない。学校では全て政府の責任であり、巨大複合企業が手を差し伸べなければ世界は終わっていた——とのことだ。

本当かどうか……。

安全なアーコロジーでふんぞり返っている富裕層の言い分など、信じるに値しない。それに世界などとうに終わっているだろう。

環境破壊は改善出来るレベルを超えてしまった。二度と元には戻らない。世界はゆっくりと滅亡に向かっていているのだ。巨大複合企業が自分たちだけ延命しようと躍起になったとしても、煌びやかなのはアーコロジーの内部だけであり、地球の汚染はいずれ全ての生命を飲み込む。

まあ、働き過ぎで過労死するであろう自分には関係のない話か。

「……はあ、やっぱり何でもいいからゲームしないなあ。無駄な考えばかりが頭に浮かぶ」

気を取り直して面白そうなゲームを探そうとするも、『その前に』と日課になってしまったトップニュースの詳細を眺める。

ここ最近世間を騒がせているテロ事件だ。

日本の最南端にある巨大アーコロジを占拠したとされる謎のテロリスト集団。政府の治安維持軍や巨大複合企業の機械化兵団をどうやって撃退したのか分からず、未だに解決の糸口さえ見えない大事件である。

「企業の軍隊に勝つって、普通のテロリストじゃないよなあ。これはもう戦争みたいなもんじゃ……」

『戦争』なんて言葉をゲーム以外で使う自分に少し笑ってしまう。

この世界において戦争とは、巨大複合企業が自発的に行う実験であり遊びだ。企業が政府を掌握しているため国家間の争いは発生せず、企業の都合で軍隊は動かされる。

企業内部の派閥争いで破壊されたアーコロジも存在しないわけではないが、利益優先の現状においてそれは稀な例だ。

だとするならば、今回のテロリストは何者なのか？

企業の幹部連中を含む富裕層を大量殺戮したという報道が真実ならば、もはや複合企業との和解は不可能だろう。加えて目をつけられてしまったのだから、何処にも逃げ道は無い。世界を支配する巨大複合企業を敵に回した以上、テロリストたちは新鮮な空気も綺麗な水も得られず、腹をすかせたまま泣いて許しを請うだけだ。

いったい何をしたかったのだろうか？ 犯行声明などはあったのだろうか？ テロ集団の映像などがあれば観てみたいところである。

「しかし都合の悪い情報はネットにすら載らないはずなのに、アーコロジの占拠や軍の敗退なんかを普通のニュースでも報道するなんて、企業のお偉いさんは何考えてんだか……」

テロ事件の報道自体は特に珍しい話ではない。

治安をアピールしたい企業側が、大々的にスピード鎮圧の情報を流したりしているのだ。もちろん、解決していかなくとも『何の問題もありません』と全ての報道機関が口をそろえる。ネット上ですら真実は語られない。

だから今回は異質と言えよう。

巨大複合企業が送り出した軍隊がテロリストごときに撃退されるなど、外へ漏らした段階で消されるほどの機密情報のはずだ。

一瞬、何かの意図があつて作り話を流しているのかと疑つてしまふ。

もしかすると、企業側にはこれも娯楽だったりするのだろうか？

「まっ、貧困層のサラリーマンには関係な——えっ？ 爆撃？ テロリスト集団を反乱軍とみなし、ミサイル攻撃つて！ マジツ？」

更新されたニュース速報に冷や汗が垂れる。

内容が本当かどうかは知らないが、テロリストどもへミサイルを撃ち込むということは、現在占拠されているアークロジ―や周辺都市が吹き飛ばされるということだ。

悟と同じ境遇の底辺層などは、爆砕されるか、焼き出されて野外の大气に汚染されるかのどちらかであろう。

運よくマスクを手に出来たとしても、周囲が焼け野原では野垂れ死ぬのを待つだけだ。

そしてそれはテロリストの全滅も意味する。

企業の支配から世界を解放する——なんてのがよくあるテロのキャッチコピーなのだが、やはり世界は企業のモノなのだ。逆らうなんて愚かすぎる。各国の政府すら操り、企業幹部でないものは人にあらず、とさえ言われるアークロジ―の上級富裕層たち。一つの都市を灰燼と化す決定にも、ボタン一つで了承するのだろうか。

同じ人間とは思えない。

世界を滅ぼす悪魔とは、コイツらのことを指すに違いない。

「それにしても情報出し過ぎだなあ。爆撃のことなんかも発表する必要なんてないのに……。絶対どこかの企業は反対しただろ？ 特に壊滅する地域に工場なんて持っているところは、ミサイル攻撃自体にも妨害を入れるはずだ。合議制の複合企業が足を引っ張り合わないわけがない」

複数の情報源を眺めても、違和感ばかりが膨らんでいく。

何かおかしい。

軍隊と戦えるテロリストと言っても所詮は孤立した戦力だ。どこからも補給は無いし、戦うほどに疲弊していく生身の消耗品である。

占拠した場所から略奪するにしても限界があるう。企業側からす

れば、数ヶ月放置しておくだけで窮地に陥る相手である。故に物資不足に窮して他の都市へ足を向けたその時、被害の少なくなりそうな場所まで爆砕すればいいのだ。

利益最優先の企業ならば、情報規制した上でそうするだろう。

無論、利益とは人命のことではないが。

「何かを急いでいるのか？ 世界中にテロリストの情報を送って、いったいどうしようかと？ まさか都市が吹き飛ぶ有様を皆で鑑賞しようとか？ 趣味がわる——」

『ここで世界会議からの緊急会見です。代表のあけみ様が、会議での決定事項を公表されます』

画面が強制的に切り替わり、どこかの会見場を映し出す。

非常に珍しいことではあるが、全人類の行く末を決定する権力者集団——“世界会議”が何かの決定事項を発表するようだ。

巨大複合企業のトップに君臨する富裕層の親玉たち。島国のアーコロジーがテロリストに占拠されようとも、顔色一つ変えない人の姿をした化け物ども。会見なんて常識的な行動に出るはずもないのに、いったい何を考えているのやら。

代表の“あけみ”などという日本名に聞き覚えはなく、地味な中年女性の外見にも見覚えはない。というか代表が居ることすら初耳であり、どんな無理難題を言い出すのかと気分が滅入る。

まあテロリスト関連なのは間違いなさそうだ。

願うならば、俺たち貧困層には無関係であってほしいが。

『会議での決定事項を伝えます。今から三十分後、日本国の南部都市を占拠したテロリストへ向けて、核を含むミサイル攻撃を行います』
核攻撃と聞いて「馬鹿なのか？」と呟いてしまう。

一地方の都市を占拠しただけのテロリストに、核を持ち出す必要がどこにあるというのか？ 富裕層にとっては重度の大気汚染も放射能汚染も変わりないのかもしれないが、その近辺で働かされる貧困層にとっては死活問題だ。

「くそっ、旧世代の核ミサイルを処分したいだけじゃないのか？ 使える状況がやってきた、って喜んでいいのかよ!? 何人死ぬと思つて

いるんだ?!」

『現地の状況は、多数の撮影用ドローンにて生中継いたします。皆さまには、テロリストがどのようなモノであるのかを、しっかりと認識してくださいますようお願いいたします』

怒りを湧きあがらせていた悟は、ふとおかしな感覚に陥る。

「都市の爆撃を生中継するなんて悪趣味な」とは思ったものの、よく考えればドス黒い汚れた大気の所為で遠方からの撮影など難しいはずだ。

それに「テロリストがどのようなモノであるのか」とはどういう意味だろう？ ミサイルで吹き飛ばされる反企業主義者のことなど知る必要があるのだろうか？ 加えて「あけみ」とやらの口調が丁寧過ぎるのも不自然である。

世界会議の代表ならば富裕層の頂点なのだ。本来なら会見に出てくる必要も、丁寧な言葉を使う必要もない。

普通は命令だ。

「今からテロリストどもを粉々にするから見物しろよ、愚民ども」が正しいだろう。

『最後に——、お願いがあります』カメラの前に身を置いていた世界会議の代表者「あけみ」は、悲痛な口調と共に、印象に残らない無個性な中年女性の身体をユラリとぼやけさせる。

『悟さん！ 無茶だとは解っています！ でも何とかしてください！ 貴方ならば交渉の余地があるでしょ?! わたしでは無理です、諦めました！ だからパートナーを連れて逃げます！ リアルがこんなに脆弱だなんて知らなかったんですよ、仕方ないでしょ！ こっちでやるだけのことはやりました！ ぶち込めるだけぶち込みますので、あとは宜しく!!』

「……………」

いきなり自分と同じ名前が叫ばれたことには動揺したが、「悟」なんて珍しくはあるまい。

それより驚いたのは、画面に映っていた女性の姿に、だ。

先程までの中年女性などは何処にもおらず、代わって現れたのは黒

髪おかつぱの若く美しい女性。しかも奇妙なほど耳が長い。

そう、アレである。

リアルでは口ににくい、森の妖精さんである。

「ゴ、コスプレ？ いや、映像加工か？ なんでこんな会見の時に？ いやでも、なんか見たことあるなこのエルフ……」

どこかのゲームから飛び出てきたかのような美女は、長期間使い込んだかのような革鎧とオモチャとは思えない短刀を身に着けたまま、会見場を出て行ってしまった。

司会進行役やカメラマンはさぞかしあつげにとられているだろう——と思いきや、現場に混乱は微塵もなく、不自然なほどに中継の準備が整えられていく。

悟は「やはり何かのお遊びだったのか？」と、驚いてしまった自分に恥ずかしさを覚えてしまう。とはいえ耳長美女に見覚えがあつたのは確かだ。あれはそう、リアルではなく仮想空間内のアバターであつたが……。

『お待たせしました。只今より、テロリストに占拠された南部都市の映像を中継いたします。大気汚染濃度により、お見苦しい点もあるかと思われませんが……えっ？』

アナウンスを担当していた女性が戸惑うのも頷ける。それほどに画面に映し出された中継映像は鮮烈であつた。

星空である。

どこかのプラネットがゲーム内で再現しようとしていた、キラキラ輝く宝石箱のような美しい星空であつたのだ。

重度の大気汚染は夜間照明すら覆いつくし、大都市であろうとも常時薄暗い。月や星なども見えず、遠方から撮影しても都市の外観などは把握し辛いだろう。

だが今は違う。

悟が見つめる夜間都市には汚染された大気など欠片も存在せず、行き交う人々の姿もはっきりと見える。

「おおマジか？ 誰もマスクをしてない。これって本当に中継映像？ 完全に別世界だろ？」

よく見かける近代の街並みなのに、まったくの別モノにしか見えない。

人の命すら害する薄汚れた大気は見る影もなく、降り積もる汚染物質も奇麗に取り除かれているようだ。

街灯は十全に市街を照らし、幸せそうな住人の横顔を浮かび上げさせる。

テロリストに占拠されているのではなかったのか？

『ご、ご覧いただけましたでしょうか?! これは実際の映像ですが！信じられないことですが、現地の大気は汚染から回復しているかのように見えます！ 大規模な気流の変化によるものでしょうか？ このような現象は今まで——は、はい！ ……失礼いたしました。ではこれよりドローンをテロリストの元へ送り出し、爆撃が始まるまでの緊迫した状況を皆様へお届けしたいと思います』

パニック気味の女性が気を持ち直したことで、画面の映像は巨大なアーコロジーの外壁を上へ上へと昇っていく。

テロリストの現在位置が、アーコロジー最上部の展望台兼ラウンジであると知らされていたからであろうか。さほど待つことなく、撮影用ドローンは富裕層を皆殺しにした凶悪な犯罪者どもをカメラに捕らえる。

『居ました！ 皆さま御覧ください、あれが都市を占拠した武装テロリス……えっ？ あれが？』

映し出された映像は、ラウンジのテーブル席に座りながら外の景色を楽しんでいる何者かの様子だ。人数は十名程度であろうか？ 飲み物や食事をとりつつゆったりと談笑しており、とてもテロリストには見えない。

と言いたいところだが、それよりも問題なのがテロ集団の外見だ。

骸骨。

角、翼。

尻尾。

そして子供である。

「ご、これが治安維持部隊を全滅させたテロリストオ？ いやそれよ

り、何でゲームキャラの格好してんだ？ あれってユグドラシルの……、俺の——」

——ピポパピポパ♪ ピポパピポパ♪——
突如として室内に響く電子音。

悟は「何の音だ？」とキョロキョロしながら心当たりを探すものの、部屋の呼び出し音であることに気付くのは少しばかり時間を要するのであった。

「インターフォンの音なんて久しぶりに聞いたなあ、って誰だよこんな時間に」

鈴木悟の部屋には、女性どころか知り合いが来たことすらない。会社から帰ってきて寝るだけの貧困層アパートには、訪問者などレアキャラであろう。

「え〜っと、どちら様ですか？ もう遅い時間ですけど」

見覚えのあるテロリストの格好に後ろ髪をひかれながらも、悟は呼び出しパネルを覗き込み、玄関の外に居る何者かの姿を確認する。

「夜分遅くもおしわけありますっ！ 鈴木悟さまにい、お届け物でえああありますっ！」

「は？」

訪問者はどこかで見たことのあるような黄色い軍服を着込んでいた。

つるりとした頭には軍帽を被っており、人間のモノとは思えぬ細長い指が側頭部へ添えられ、その姿はまるで敬礼をしているかのよう……。

「ちよつ、嘘だろ？ ……あ、あの、ありがとうございます、配達物は扉横の受け取りボックスへ入れてください」

「いえいえ、直接お渡しするようにと、父上から言われております。どうかお目通りを」

間髪入れず悟の提案を否定し、扉を開けるようにとの圧力をかけてくる。

だがそんなことできるわけがない。つい先程、同じようなゲームキャラの仮装をしているテロリストを見てしまったのだ。直接顔を

突き合わせるなんて怖すぎる。

「え、あの、もう遅い時間ですし、この辺りは治安も良くないので扉を開けることは出来ないんですよ。だから——」

「かしこまりました、しばしお待ちを。〈変身〉——へろへろ」

何が起こったのか、一瞬理解が及ばなかった。

呼び出しパネルがプツリと機能を停止し、玄関からジュシューとかプシューとかブチャブチャとか聞いたことのない奇音が発生したとなれば、足を向けなければならぬ。

たとえばそこが、金属やゴム、電気配線などが溶かされている異臭空間だったとしても。

「げほげほっ、なんだこれ?! 外気が流れ込んだのか? マスク!

マスクをしないと!」

汚染された外気は、たとえ肺をいじつていようとも直接吸い込むことなどできない。マスクが無ければ死に直結しよう。

「大丈夫ですよ悟さま。近隣一帯に結界を張ったので不浄なモノは入ってきません」

「……どうなってるんだ? 俺の玄関は?」

一番に頭に浮かんだのは修理費だ。ブヨブヨとする漆黒の液体に飲み込まれて消えた玄関扉なんて、保険が適用されるのだろうか?

「ってかそんな説明誰が信じるんだ!」

「エルダー・ブラック・ウーズ古き漆黒の粘体……か? な、なんだ?! なんなんだよお前は?!

お前! 誰だよ!!」

現実で見ると、巨大な漆黒のスライムは恐怖の塊だ。普通のサラリーマンが対峙していい相手ではない。

「申し遅れました」玄関扉を溶かし、部屋の半ばまで身体を押し込んでいた黒い粘体は、どこから喋っているのか? という疑問を悟へ与えつつ、急速に小さくなっていった。

「我が名はパンドラス・アクター。お久しぶりでございます、もう一人の父上、鈴木悟さま!」

粘体が縮んだ先には、黄色い軍服を着込んだ埴輪男が立っていた。もちろん、綺麗に整った敬礼と共に。

「ほ、本物？ さつきはへろへろさんに変身していた？ いやでもゲームキャラだろ？ テロリストじゃなかったのか？」

「ええ、その通りですよ。私どもはゲームキャラであり、本物であり、都市を占拠したテロリストでもありません」

ふざけた言い分に何も反論できない。それほどに溶かされた玄関扉は衝撃的であった。

目の前であんなものを見せられては、否定する気力も湧かない。

「あのテロリストは本物……？ あ、あのゲームキャラたちが？ モモンガも居たぞ、誰が動かしているんだ?!」

「動かしている——とは異なることを。モモンガ様は、貴方と同じ魂を宿す最強のアンデッド。悟さまが十二年もの歳月をかけて大魔王と成した理想の極致、もう一人の貴方ではありませんか？」

「冗談……だろう？ パンドラが動いているように、アバターのモモンガも動いているってか？」

物語やゲームの世界が現実化したら面白そうだ、と妄想していたのはいつまでだったか？ 人知の及ばぬ超常の力を振るって、主人公らしく世界を救ったり出来れば面白いと思っていた。それなのに、登場したのは自分の器であった大魔王だ。肝心の己は脆弱な中年サラリーマンのままだというのに。

「ああ、悟さま。お伝えしておきますが、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーで身体を得たのはモモンガ様だけです。今回悟さまの世界へ侵攻してきた手勢のほとんどは、ナザリックの元僕たちで構成されております」

「他には居ない、か。……ん？ もと、しもべ？」

「Genau! 我々はモモンガ様の御手によりギルドNPCから解放され、現在は新ギルド『魔界』のギルドメンバーとなっております。とは言っても、私は宝物殿の管理を他の誰かに委ねるつもりなどありませんがね！」

幾度目かの見事な敬礼を見せつけられ、悟は羞恥と混乱の猛威に晒される。

いくら何でもおかしなことが多過ぎだ。自宅の扉修繕費だけでも

頭が沸騰しそうなのに、いきなりのファンタジーゲーム要素。

一介のサラリーマンに何を求めているのか？

つーかドイツ語はやめろ。心に突き刺さる。

「はあ、訳が分からん。お前らはいったい何がしたいんだ？ テロリストになつて暴れたいのか？」

やけくそ気味に問うてみても、それは愚問だろうと自分でも思う。

モモンガが何をしたいのか？ なんて誰よりもよく知っている。

ナザリックの戦力を率いてこの世界に現れたのなら、やることは一つだ。

そう、蹂躪であろう。

「聴いてください悟さま。モモンガ様はこの世界の情報を集めたとき、少しお困りになったのです」

「は、えっ？」

「そうなのです、この世界はあまりに弱っていて、経験値を持つ生物の絶対数も少な過ぎるのです。これでは全滅させても、他の世界へ渡るための経験値を確保できません！」

「け、けいけんち？」

「そこでモモンガ様は仰いました。人間を繁殖させよう、そのための環境を整えよう。世界の汚染を浄化し、生物の育成環境を改善させ、殺し尽くすための経験値でこの星を満たすのだ、と」

ふと、パンドラの言葉を聞いて思い出した。テロリストに占拠されていた南部都市の汚染状況が改善されていたことを。住人たちがマスク無しで、外を嬉しそうに出歩いていたことを。

「殺すために育てる？ 経験値で世界を渡る？ な、何を言っているんだ、アンタは？」

「おや？ 悟さまはモモンガ様と同等の知能を備えていると思いましたが、私の勘違いでしたか？ やれやれ、それだとせつかくのお届け物が無駄になってしまいますねえ」

パンドラは舞台役者のような大げさな身振りで嘆きを表現すると、悟へ小さな箱を差し出し、パカリと上部を開く。

「悟さま、モモンガ様からの贈り物です。どうぞお納めください」

「……これは、え、植物の、種？」

見るからに異様な種であった。

大きさは親指ぐらいであるが、樹齢何千年という樹木から採取されたかのような風格さえ感じる。

「世界級アイテム、〃世界樹の種〃でございます」

「なっ?!」

一気に情報の波が悟の頭を駆ける。

ユグドラシルのサービス終了からしばし経過していたとはいえ、脳に刻み込んだ膨大なデータはそのままだ。

世界級アイテムの情報ならば、瞬時に浮かび上がる。

「無条件の種族変更アイテム、レベルはカンスト、職業構成や特殊技術、所得魔法の選別も自由自在。隠し職業でも判明していれば選択できるという糞運営仕様。苦労して見つけ出した条件の厳しい職業に、アイテム一つでなれるって聞いたときはイラっとしたものだけど……。まあ世界級アイテムだからなあ。仕方ない」

「お見事です。では悟さま、世界を救うためにどうぞ飲み込んでください」

「……………ん？」

グイッと差し出してくるパンドラに押され、悟は一步下がる。

「〃世界樹の種〃を飲み込んで、世界を救え？ もしかして、俺にモモンガと戦って言うっているのか？ 種族を変えて？」

「流石に人間のままで勝てないでしょう？ それに悟さまならば、モモンガ様の天敵となる種族、職業、特殊技術、位階魔法を揃えられるに違いありません。期待しております」

確かに悟は、モモンガの弱点を把握している。故に天敵となるキャラクターを作成することも可能だろう。不安は武装だけだが、そこを解決できればモモンガを倒すことも難しくはあるまい。

「ちよつ、ちよつと待て！ なんて俺が世界なんか救わないといけないんだ!? そ、そりゃ正義の味方に憧れたりすることもあるけど、それはゲーム内での話だぞ！ 現実で命なんか懸けられるか?!」

「これはこれは、困りましたねえ。魔王に挑まぬ者は勇者にあらず、勇

者でない者には慈悲深き死を与える——とモモンガ様も仰っていたので、さつさと殺しましうかねえ」

「ぐっ……」

勇者などなるものではない。

人知を超越した化け物である大魔王と戦うことになるのだ。余程のモノ好きでなければ避けて通る道であろう。

嬉々として役目を負うのは、ゲームの中だけだ。

「待て、ちよつと待ってくれ！ ほら、もうすぐミサイル攻撃が始まる、核を含んだ一斉爆撃だ。あの地はあつという間に吹き飛んで全滅するよ！ 俺が戦うまでもない！」

「ああ、あけみ様が用意したりアル世界の最大攻撃と聴いていますけど……。まつ、ちよつと見物しましょうか」

悟の返事を待たずして、パンドラは土足のまま室内へ入り込み、流しっ放しであったニュース映像へ視線を送る。

玄関は扉を溶かされたまままで放置され、外の景色が丸見えであった。しかし近隣住民が見物に来る様子も、通報された気配もない。

悟が感じ取れるのは、濃密な血の匂いだけだ。

「い、いくらなんでもミサイルの直撃をくらったらバラバラに吹き飛ばだろ。魔法でどうにかなるレベルじゃないぞ」

「さて百聞は一見に如かず、ですな。——ほら悟さま、始めましたよ」

余裕綽々な埴輪の見つめる先で、中継映像は都市の夜空を見上げるよう視点を変える。

そこに映るは、都市の明かりに照らされた、空を覆わんばかりのミサイル群だ。

はつきり言つて無計画に撃ち込み過ぎだろう。都市を壊滅させるだけなら核を落とした後に、取りこぼしを狙い撃てばいい。オーバーキルにもほどがある。

「まさか、転移で逃げる、とか？」

ミサイルの着弾までには時間がある。故に逃げようと思えば逃げられるはずだ。

ただ、悟の理想とする魔王様の性格を考えれば、真正面からねじ伏せようとすることに違いない。攻撃を仕掛けた側も、それを期待しているのだろう。

「悟さま、逃げてしまうと残された貴重な経験値が塵になってしまいますよ。それはもつたいたいでしよう？　つと展開が始まりましたね。〈転移門〉の壁です」

「そうかつ、攻撃を仕掛けてきたミサイル基地へ〈転移門〉を繋ぐつもりなのか？　くそつ、これだと爆撃なんか何の意味も——」

「いえいえ、相手側へミサイルを返してしまうと、これまた経験値の無駄になります。今殺しても大した量になりませんからねえ」パンドラはチツチツと長過ぎる人差し指を左右へ振ると、〈転移門〉の接続先を口にする。

「アレは『エクステンジ・ボックス』へと繋がっているのですよ。どの異世界においてもユグドラシル金貨は貴重ですからね。入手機会は見逃せません」

エクステンジ・ボックス。

通称『シレットダー』と呼ばれるユグドラシルの特殊アイテムだ。生物以外の物品を放り込めば、物の価値に応じてユグドラシル金貨を排出する。

当然、爆発寸前の核ミサイルであろうとも原材料に分解して査定し、強力な兵器には見合わぬ僅かばかりの対価をチャリンと落としてくれるのだ。

大量虐殺兵器も、シレットダーの前ではただの鉱物資源に過ぎない。

「な……なんだよ、これ？」

悟の感想は、中継の司会進行をしていた女性にも通じていたであろう。何事もなかったかのように佇む平和な都市映像に、コメントを差し挟む気配はない。

突然空中に黒い澱みのようなものが出現したかと思えば、数多のミサイルを飲み込んだのだ。あつけにとられても仕方がなからう。

「さて悟さま、余興は終わりましたよ。『世界樹の種』を飲んでいた

「だけますか？」

「あ、あのさ、敵対しか道がないのか？ 協力するって選択肢は残されてないのか!？」

悟からしてみれば、人類のために戦うなんて馬鹿馬鹿しいにもほどがある。この腐りかけた世界の住人など、絶滅してもらって大いに結構なのだ。

無論、幾人かの知り合いには生き残ってほしいとは思わないではないが、己の命を懸けて助けるかと問われれば、即座に否と答えるだろう。家族も居ないので躊躇する動機も無い。

「二つ教えて差し上げましょう。モモンガ様が求めている経験値ですが……、それを大量に所得する方法はあるのですよ」パンドラはシュバツとマントを跳ね上げると、身体を斜めに傾けながら悟を殺す理由について述べる。

「『世界樹の種』は誰でもレベルカンスト、100レベルに成長させます。ならば当然、倒した後に受け取る経験値も100レベル相当。つまり種を与えた者を倒し続ければ、膨大な経験値を確保できるわけです!」

世界級アイテム所持者を、そう何度も同じ人物が殺し続けるなんてことは想定されていない。貴重なアイテムを取られることにもなるのだから、経験値を得るための手法としては欠陥だらけと言えよう。

だが、大量の経験値を得ることが難しい現状では希望の光だ。100レベルの敵が存在しない現代世界では待っていても仕方がない。自分から用意する必要があるのだ。

「種を与える人間は悟さまを含め四十一名、……いえ、銃撃死一名、過労死一名、アルベド殿による殺害一名、を除く生き残り三十八名となっております」

「まさかそれは……」

「御想像にお任せいたします。なお悟さまのお相手は当然モモンガ様でございますが、心配することはありません。勝てばいいのですよ。相手の手の内が分かっている悟さまならば、勝算は高いはずでしょう?」

「アンタは誰の味方なんだ？俺が『世界樹の種』で『セラフ・エンペリアン』至高天の熾天使』になれば、『死の支配者』なんて敵じゃない。俺はモモンガの所持している魔法やスキルを全て記憶しているんだぞ」

大魔王モモンガが恐るべき強さを備えているとは言っても、内情を知っている悟には通用しない。本気で正面から戦えば、対モモンガ戦のキャラクリエイトを今から行える悟に軍配が上がる。武装さえ整えられれば……。

「お気遣いなく。モモンガ様が求めているのは、自身を殺すことのできる相手との戦いなのです。……ヤル気が出ましたか？」

「あ、いや、えっと、武器とか、そう武具はどうしたら——」

「宝物殿から運びましょう。要望を言っただければ、それに見合った最上級の武装をお届けします」

逃げ道を遮られて気が焦る。ゴクリと唾を飲み込み、どうやったら現状を打破できるのかと頭を悩ませる——と言いたるところだが、もはやどうにもならないのだとは自覚していた。生き残りたければ、『死の支配者』を滅ぼさなければならぬ。

（いや待て、今すぐ戦う必要はないよな。モモンガは世界を浄化して人類を繁殖させるつもりらしい……。まあ後で皆殺しにするつもりなんだとしても、世界が元通りになった瞬間にモモンガを倒してしまえばイイこと尽くめじゃないか？この腐った世界が救われるぞ）
働かせるだけ働かせて、美味しいところを横取りしてしまえばいい。相手は大魔王なのだから罪悪感など沸くはずもない。それどころか結果として世界を救うことになるのだ。自分の命欲しさだとしても、最高の展開だろう。

（よし、今すぐ種を飲んでパンドラから武装を受け取ったら姿をくまそう。逃げに徹すれば捕まることはない。そしてチャンスを探ろうんだ。モモンガを殺せる千載一遇のチャンスを）

つい先程までサラリーマンだった悟に大魔王と戦えなんて、無茶ぶりもいいとこだ。けれども生き残るために必要ならば、無様であろうとも足掻かねばならない。命を懸けて己を育ててくれた母のためにも……。

「よし、それじゃあ、〃世界樹の種〃は受け取るよ。武装に関しては、宝物殿から神聖属性の伝説級武器レジェンドを一通りと、〃ホワイトブリム〃、〃るし★ふぁー〃の神器級装備ゴッズを一式持ってきてほしい。あとはPVP用に纏めてあつた課金アイテムを、何セットか貰えると有り難いんだが」

「お任せください、——どうぞこちらへ」

「ん、え?」

『欲張りすぎたか?』と焦る悟に対し、パンドラは何処かへ足を向けるでもなく、風通しの良くなっている玄関へ頭を下げる。

その仕草から察するに、誰かを迎え入れようとしているのだろうか? ?

「——おっと、中々狭いところだな。横向きにならないと壁を削ってしまう」

「な、なっ、なんでっ?!」

「ようこそ御出でくださいました、モモンガ様! こちらの方が鈴木悟さまでございます」

思わず悲鳴を上げそうになる悟の瞳には、窮屈そうに玄関を潜ってくる骸骨の化け物が映っていた。

その骸骨は重厚で高品質なローブを纏い、片手には蛇が絡み合ったような黄金の杖を持ち、頭部には七つの大きな宝石がはめ込まれた黄金の王冠を備え、黒い闇の波動を背負ってゆっくりと迫ってくる。

恐ろしい光景だった。

見慣れたアバターのはずなのに、胸を圧迫されたかのごとく呼吸し辛い。手足の震えは止めようもなく、もはや麻痺状態と変らぬほどだ。

「久しぶりだな、悟。想像していた以上の貧弱さで、心底驚いたぞ」

「は、ははは、こ、こっちとしては、初めましての感覚なんだけどな」

精一杯の虚勢を張れたのは、手に〃世界樹の種〃を持っていたからだろう。それがなければ、ただのサラリーマンが魔王と言葉を交わして生き延びられるわけがない。

「さて、御希望の武具だがこの部屋に積み上げるぞ。少し狭くなるが

我慢してくれ」

「えっ？…ど、どうして？ さつき頼んだばかりなのに……」

「ふふ、私を倒すために必要な武具なら、私に解らないはずがなからう？ 悟がどんな種族を選択し、どんな職業を得るのか。大体予測がつく」

大魔王の弱点を知り尽くしているのは悟だけではない。モモンガ自身も熟知している一人なのだ。故に悟の思考は読める。悟がモモンガの攻撃パターンを読めるように。

「さあ、必要なモノは揃えたぞ。さつそくPVPを始めるとしようか」「くっ、ち、ちよつと待ったあ。こんなところで戦ったら周辺に被害が出るだろ！ ここは貧困層の街中だけど、多くの住人が暮らしているんだぞ！」

時間稼ぎの方便だ。

逃げる方策を考えるまでの時間が欲しい。

相手の天敵である種族や攻撃手段をとれるとは言っても、まったく使い慣れていない戦闘スタイルなのだ。正面からぶつかるとは不安要素が多すぎる。

それにゲーム内のPVPとはわけが違う。

自身が戦場に立って命のやり取りを行うのだ。恐怖で身体をこわばらせ、痛みで身をよじり、血の匂いでむせ返る。一つしかない命を懸けて、やり直しのきかないギャンブルに身を投じる。

ふざけるなど言いたい。

自分がPVPで高い勝率を確保できていたのは、殺意も何も感じないゲーム環境の中で冷静に判断出来ていたからだ。

血と泥にまみれた戦場で同じことが出来るとは、全く思えない。それは確信している。

「ん？…なんだ悟、他の住人を心配するとは優しいじゃないか？ でもまあ、気にしなくともよいぞ。この都市なら先ほど蹂躪してきた。生き残っているのは鈴木悟、お前だけだ」

「……な、なんだよそれ？ 人間は……殺さないんじゃないのか？! 経験値にするつもりなんだろっ?! どういうことだよ！」

「悟さま、これは人間を殺すことに忌避感を持つであろう貴方様のためでございますよ。周囲に邪魔な人間が多く居ては戦闘に集中出来ないでしょう？ だからこそモモンガ様が手を下してくださいませ！ ああそれと、周囲には対プレイヤー用の特務部隊“ドリームチーム”が配置されておりますので横ヤリが入ることはありません。御安心を」

パンドラの言葉に安心を覚えることなどできるわけがない。

周囲に配置されているのは横ヤリ防止の人員ではなく、自分を逃がさないための強力な戦闘部隊だろう。

『最初からここで決着をつけるつもりだったのか!』と死の気配を感じて冷や汗が止まらない。手足の震えも酷くなる一方だ。

こんな状態で、自分が創り上げた大魔王と戦えと言うのか？

ユグドラシルでは高難易度のクエストを楽しみながらクリアしたもののだが、死を覚悟する現実では勝手が違う。

手にした“世界樹の種”と大魔王を交互に見ながら、悟は泣き喚きたくして仕方がなかった。

「どうした悟よ。勝算は十分にあるだろう？ 何を躊躇しているんだ

？」本当に不思議そうに、己が倒されるかもしれないと自覚していなからモモンガは迫る。

「この世界で私を殺せるのは、おそらくお前だけだ。さあ、“世界樹の種”を飲め。種族を選択し職業を整えろ。武装は借り物だが、身体の方を合わせれば問題ないはずだ。スキルを構築し、魔法を選び出せ。私を打ち破る——最高の勇者を生み出すのだ！」

「……勇者、勇者か」

痛いほどによく解る。

勇者に倒されて初めて完成する、大魔王という名の歪な化け物。強大であるあまり勇者を返り討ちにしてしまえば、いつまでたつても不完全な魔王のままだ。

責任を取れということなのか？

こんなゲームから飛び出してくるような異様な骸骨大魔王を生み出した、その責任を。

「クソがっ」

プツリと、何か切れた。

「くそつたれがああああああ!! ふぎけんなポケ屑共があああ!!! ゲームだろうがっ!! 所詮お遊びだろうがよお!! なんで俺がこんな目に遭うんだよ!!! ちくしようがあっ!! 舐めやがってえ! 舐めやがってええ!! お前なんか知るかあっ!! 勝手に死ねよお! くだばれクソがあああ!!」

大魔王と相対する矮小な人間の雄叫びであった。

ニヤリと、骸骨の口元が笑みを浮かべたように見える。

「くくく、それでどうする? 人間」

「ああ、やってやるよ! テメエなんぞバラバラに砕いてそこらの空き地に撒いてやる! 弱点だらけの『死の支配者』^{オーバーロード}ごときが大魔王だとお! 笑わせんなっ!! 身の程を教えてやる!!」

飲み込むには少々大きめの種を勢い良く口へ放り込み、鈴木悟は人間を超越する。

世界級アイテム『世界樹の種』が劣悪な健康状態の肉塊を分解し、強大な力を注ぎこんでは再構築させる。

大魔王モモンガはその異様にして美しい光景を静かに眺め、ポツリと呟く。

「あああ、とうとうこの日が来た。待ちに待っていたこの日が」
傍に控えていたパンドラは涙を堪えながら一礼し、その場を後にする。

もはやこの場に第三者は必要ない。モモンガ様の身を案じ、命を懸けて邪魔をしようとする者も排除しなければならぬ。

それこそがパンドラの使命。

目の前で父上の最後を見届ける。残酷な——それでもパンドラにしかできない、モモンガ様からの願い。

「御意志に反するかもしれませんが、勝利を願っております。……父上」

安アパートのあらゆる窓から閃光がほとばしり、直後——建物全体が弾け飛んだ。

恐るべき何モノかが産み落とされたのであろう。

骸骨魔王の期待に応えて。

「勝負だつ、我が半身——勇者サトルよ！ この一瞬を存分に楽しもう!!」

世界がゆつくりと腐り続けていた現代において、魔王と勇者の戦いは始まった。

魔王はただ己が楽しむためだけに、勇者は世界を救うつもりもなくただ怒りに任せて、大陸を抉り取る勢いで殺し合った。

天変地異だと、世界の終りだと、天を仰ぎ見た者たちは口にしただらう。

だが実際は一人の男が生み出した、あまりにちつぽけな……ちよこつとした内輪揉めに過ぎない。

そう、骸骨魔王様が様々な異世界を滅ぼし続けたとしても、それはちよこつとした蹂躪に過ぎないのである。

ああもちろん、虐殺される側としては承服しかねる言い分だろう。世界を滅亡に追い込んでおきながら何を言っているのかと。

ならば——挑めばいい。

ふざけたことをぬかす大魔王様へ、怒りの鉄拳を振り下ろせ！

さあ、勇者になろう。

勇者になって骸骨大魔王を滅ぼそう。

蹂躪されし数多の異世界を救うのだ！

【おしまい】